頭註

國譯本草綱目

第九冊

春陽堂藏版

原著　明　李時珍
監修・校註　理學博士　白井光太郎
顧問　木村博昭
考定　理學博士　牧野富太郎
考定　理學博士　脇水鐵五郎
考定　岡田信利
考定　矢野宗幹
考定　木村康一
譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目　第九册

目　次

本草綱目果部第三十三卷

本草綱目木部第三十四卷

本草綱目木部第三十五卷

本草綱目木部第三十五卷 下

喬木類

本草綱目木部第三十六卷

本草綱目果部　第三十三卷

本草綱目果部目錄第三十三卷

果の五　瓜類九種

甜瓜 嘉祐 瓜蒂。　西瓜 日用　葡萄 本經　蘡薁 綱目 卽ち野葡萄。

獼猴桃 開寶 卽ち藤梨。　甘蔗 別錄　沙餹 唐本

石蜜 唐本　刺蜜 拾遺 翻齊を附す。

右附方　舊十二　新四十

果の六　水果類六種　附錄二十三種

蓮藕 本經　紅白蓮花 拾遺　芰實 別錄 卽ち菱。　芡實 本經 卽ち雞頭。

烏芋 別錄 卽ち葧臍。　慈姑 日華

附錄諸果　綱目二十一種　拾遺一種

津符子　必思荅　甘劍子　楊搖子

互考

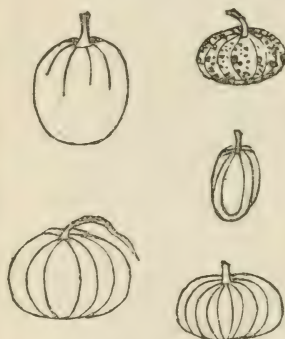
果の五　蓏類九種

甜瓜（宋嘉祐）

和名　まくはうり
學名　Cucumis Melo, L.
科名　うり科（葫蘆科）

〔校正〕　菜部より此に移し入れ、本經の瓜蔕を併せ入る。

〔釋名〕　**甘瓜**（唐本）　**果瓜**　時珍曰く、瓜の字の篆文は瓜が鬚蔓の間に在る形を形容したものだ。甜瓜の味は諸瓜よりも甜いから獨り甘、甜の稱を得たのである。按ずるに、舊本に菜部に列したのは誤であつた。按ずるに、王禎は『瓜は類が同くなく、その用に二あり、果に供するものは果瓜であつて、甜瓜、西瓜がそれである。菜に供するものは菜瓜であつて、胡瓜、越瓜がそれである』

〔甜瓜・瓜蔕〕

といつた。木に在るをば果といひ、地に在るをば蓏といひ、大なるを瓜といひ、小なるを瓞といひ、その子を𤬪といひ、その肉を瓤といひ、その跗を環といふ、それは花の脱ちた部分をいふのである。その蔕を疐といふ、これは蔓に繋がる部分をいふのである。禮記には、天子の爲めに瓜を削くといひ、また瓜祭といつてあるが、いづれも果瓜を指したものだ。本草の瓜蔕もやはりこの瓜の蔕である。

【集解】　○○別錄に曰く、瓜蔕は嵩高の平澤に生ずる。七月七日に採つて陰乾する。

○頌曰く、瓜蔕、卽ち甜瓜の蔕であつて、處處にある。園圃に蒔くものには青、白の二種あつて、子の色はみな黃である。藥に入れるには早青の瓜蔕を用ゐるを良しと爲すべきものである。

○○時珍曰く、甜瓜は北土、中州に種蒔するものが甚だ多い。二三月に種を下し、蔓を延いて生え、葉は大いさ數寸あり、五六月に黃色の花を開き、六七月に瓜が熟する。その類は最も繁多なもので、團なるがあり、長さがあり、尖れるがあり、扁きがあり、大なるは或は徑一尺、小なるは或は一捻ほどで、その稜はあるもあり無きもあり、その色は青きがあり、綠なるがあり、黃斑なるがあり、糝斑なるがあり、

白路、黄路のあるがあり、その瓤は白きがあり、紅きがあり、その子は黄なるがあり、赤きがあり、白きがあり、黒きがある。按ずるに、王禎の農書に『瓜の品は甚だ多く、枚擧し難い。形狀に因つた名では、龍肝、虎掌、兎頭、狸首、羊髓、蜜筒などの稱があり、色に因つた名では、烏瓜、白團、黄甂、白甂、小青、大斑の別がある。しかしその味は甘、香以外には出でない』とある。廣志では、ただ遼東、燉煌、廬江の瓜だけを勝れてゐるとしてあるが、しかし瓜州の大瓜、陽城の御瓜、西蜀の溫瓜、永嘉の寒瓜などはまだ優劣を以て論ぜられない。甘肅の甜瓜は、皮瓤みな甘くして飴、蜜に勝り、その皮を曝せば甘くして猶ほ美味である。浙中の一種の陰瓜は陰處に種ゑるもので、熟すれば色が金のやうに黄になり、膚皮はやや厚い。これを貯藏して置いて春になつて食ふと新しいもののやうだ。これはいづれも種藝の功であつて、必しも土地の如何に拘はるわけでない。甜瓜子は曝烈して仁を取り、果に充てて食へる。凡そ瓜は最も麝の氣を畏れるもので、これに觸れると甚しきは一蔕全部めちやめちやになることがある。

瓜瓤 【氣味】 【甘し、寒、滑にして小毒あり】大明曰く、毒なし。思邈曰く、

多食すれば黄疸を發し、人をして虛羸して多く忘れしめ、藥力を解す。病後に多く食ふと或は反胃する。脚氣の人がこれを食へばその患が永く除けない。

詵曰く、多食すれば人をして陰下濕痒して瘡を生ぜしめ、宿冷、癥癖の病を動じ、腹を破り、虛熱を發し、人をして惙惙として氣弱し、脚、手を無力ならしめる。少し食へばよし。龍魚河圖に『凡そ瓜にある兩鼻、兩蔕のものは人を殺す。五月に瓜の水に沈むものを食へば冷病を得て終身瘥えない。九月に霜のかかつたものを食へば冬に寒熱を病む。油餅と共に食へば病を發する』とある。○多く瓜を食つて脹となつたときは、鹽花を食へば消化する。

弘景曰く、瓜を食つて多かつたときは、水に入つて自ら漬かれば消する。

時珍曰く、張華の博物志に『人は冷水に膝まで漬かれば、瓜を數十箇まで頓に喫へる。項まで漬かれば更により多く喫へるもので、水がみな瓜の氣がするやうになる』とある。これで見ると、水に浸れば瓜を消するはやはり物の性の然らしむるところである。瓜は最も麝と酒とを忌むもので、凡て瓜を食つて過多なときは、但だ酒、及び水を飲み、麝香を服する。これが食鹽水に漬かるよりも更に勝るものだ。

【主治】【渇を止め、煩熱を除き、小便を利し、三焦の間の壅塞の氣を通じ、口鼻瘡を治す】（嘉祐）【暑期にこれを食へば永く暑に中らない】（宗奭）

【發明】宗奭曰く、甜瓜は暑氣を解するけれども、性は冷であつて陽氣を消損する。多食すれば下利せぬものはない。夏期に多食すれば深秋に痢を作して最も難治である。ただ皮を蜜に浸して收貯するが良く。皮はまた羹にしても食へる。熟瓜を瓤を除いて食へば人を害はない。

弘景曰く、凡そ瓜はみな冷利であつて、早青のものが尤も甚しい。

時珍曰く、瓜は性最も寒であつて、曝して食ふと尤も冷である。故に稽聖の賦に『瓜は曝すに寒にして油は煎するに冷なり』とある。これは物の性の特異な點である。王羲の洛都賦に『瓜は則ち暑を消し、悁を蕩し、渇を解し、飢を療ずる』とあり、又、奇效良方に『昔、ある男子が膿血惡痢を病み、忍び難く痛んだとき、水で甜瓜を浸して數箇を食ふと癒えた』とある。これも暑を消するの驗である。

瓜子仁【修治】斅曰く、凡そ收得したならば曝乾して細に杵き、馬尾篩で篩つて粉にし、紙で三重に裹んで油を壓し去つて用ゐる。油を去らねばその力が短い。

西瓜子仁も同じ。

［氣味］【甘し、寒にして毒なし】［主治］【腹内の納聚、膿血を破潰する。】（別錄）【月經太過を止める。研末して油を去り、水で調へて服す】（藏器）○炮炙論の序に曰く、血泛れて經の過ぐるには、瓜子を飲で調へる。【炒つて食へば中を補し、人に宜し】（孟詵）【肺を淸し、腸を潤ほし、中を和し、渴を止める】（時珍）

［附方］舊一、新二。【口臭】甜瓜子を杵いて末にし、蜜で和して丸にし、毎早朝嗽口後に一丸を含む。また齒に貼るもよし。（千金）【腰腿の疼痛】甜瓜子三兩を酒に十日間浸して末にし、毎服三錢を空心に酒で服す。一日三回。（壽域神方）【腸癰の已に成りたるもの】小腹が腫痛し、小便が淋のやうになり、或は大便が難澀し、膿を下す。甜瓜子一合、當歸を炒つて一兩、蛇退皮一條を㕮咀し、毎服四錢を水一盞半で一盞に煎じ、食後に服す。惡物を利下して妙である。（寧惠）

瓜蔕（本經上品）［釋名］**瓜丁**（千金）**苦丁香**（象形）［修治］斅曰く、凡そこれを使ふには、白瓜蔕を用ゐてはならぬ、青綠色のものの瓜の氣が十分になつ

た時、その蔕が自然に落ちて蔓上に在るものを取らねばならぬ。採取したならば、屋根の東側の風のある場所に繋けて吹乾して用ゐる。

宗奭曰く、これは甜瓜蔕であつて、瓜皮を去つて蔕を用ゐ、約半寸ばかりを曝して極めて乾し、使用するときに研つて用ゐる。

時珍曰く、按ずるに、唐瑤は『甜瓜蔕は、團いものの短瓜、團瓜のものを良しとする。香甜瓜の長ずると瓠子のやうになるものならば、それはいづれも菜に供する瓜であつて、その蔕は用ゐられない』といつた。

【氣味】【苦し、寒にして毒あり】大明曰く、毒なし。【主治】【大水で身面、四肢の浮腫するに水を下す。蠱毒を殺す。欬逆上氣、及び諸果を食つて病の胸腹中に在るもの。いづれも吐、下する】(本經)【鼻中の瘜肉を去り、黄疸を療ず】(別錄)【腦寒、熱齆、眼昏を治し、痰を吐す】(大明)【風熱痰涎を吐し、風眩、頭痛、癲癇、喉痺、頭目に濕氣あるものを治す】(時珍)【麝香、細辛を配合すれば、鼻に香臭を聞かぬを治す】(好古)

【發明】張機曰く、病が桂枝の證の如くにして頭が痛まず、項が強せず、寸脈

が微浮し、胸中が痞哽し、氣が咽喉に上衝して息することを得ぬものは、これは胸中に寒があるためであつて、吐せねばならぬものである。太陽の中暍で身熱し、頭痛して脈が微弱なるは、これは夏期に冷水に傷められて、水が皮中に行るのであつて、吐するが宜し。少陽の病で頭痛し、寒熱を發し、脈が緊にして大ならぬは、これは膈上に痰があるものであつて、吐するが宜し。病が胸上の諸實で、鬱鬱として痛み、食事不能にして人に按せられることを欲し、反つて涎唾があり、一日に十餘回下利し、寸口の脈の微弦するものは吐すべきものである。宿食の上脘に在るものは吐すべきものである。いづれも瓜蔕散を以て主とするが宜し。しかしただ諸亡血、虚せる患者には瓜蔕散を與へてはならぬ。

成無已曰く、高きをば之を越し、上に在るをば之を涌す。故に越するには瓜蔕、香豉の苦を以てし、涌するには赤小豆の酸を以てする。酸苦、涌泄は陰である。

杲曰く、難經に『上部に脈あり、下部に脈なきは、その人當に吐すべし。吐せざれば死す』とあつて、これは飲食の內傷で胸中に塡塞し、食が太陰を傷めて風木生發の氣が下に伏するのであつて、宜く瓜蔕散で吐すべきものである。素問に所謂『木

の鬱するときは之を達する』であつて、上焦の有形の物を吐し去れば、木が舒暢することを得て、天地交つて萬物通ずるのである。若し尺脈の絶せるものの場合にはこれは用うべきでない。恐らく眞元を損じ、人をして胃氣を復せざらしめる。

宗奭曰く、この物は涎を吐し、甚だ人を損ぜぬ。全く石綠、硇砂などに勝るものだ。

震亨曰く、瓜蔕は性急にして能く胃の氣を損ずる。胃弱の者は他藥を以てこれに代へるが宜し。病後、産後には就中深く警戒せねばならぬ。

時珍曰く、瓜蔕なるものは陽明の經に於て濕熱を除くの藥である。故に能く胸脘の痰涎、頭目の濕氣、皮膚の水氣、黃疸、濕熱の諸證を引去する。凡そ胃弱の人、及び病後、産後に吐藥を用ゐることは、いづれも愼重を加ふべきものである。何ぞ獨り瓜蔕だけがさうだといふわけがあらうぞ。

附方　舊七、新十四。

『瓜蔕散』治證は前項を見よ。その方は、瓜蔕二錢半を黃に熬り、赤小豆二錢半を末にし、一錢づつを用ゐ、香豉一合、熱湯七合を糜に煮て滓を去つたもので和して服し、少量づつを加へ、快吐したならば止める（仲景傷寒

論）【太陽の中暍】身熱し、頭痛して脈の微弱なるもの。これは夏期に冷水で傷め、水が皮中に行つて起るものである。瓜蔕十四箇を水一升で五合に煮て頓服し、吐を取る。（金匱要略）【風涎の暴に作りたるもの】氣塞して倒仆するには、瓜蔕を末にして一二錢づつと膩粉一錢匕を水半合で調へて灌ぐ。良久して涎が自ら出る。出ぬときは沙餹一塊を含む。下咽すれば直ちに涎が出る。（寇氏衍義）【諸風、諸癇】諸風の膈痰、諸癇の涎涌には、瓜蔕を黄に炒つて末にし、その人の體力その他を量つて酸虀水一盞で調へて服し、吐を取る。風癇には蠍梢半錢を加へ、濕氣腫滿には赤小豆末一錢を加へ、蟲あるには狗油五七點、雄黃一錢を加へ、甚しきときは芫花半錢を加へる。立ろに吐いて蟲が出る。（東垣活法機要）【風癇、喉風】欬嗽し、及び遍身風疹で急中し、涎潮する等の證には、大人、小兒に拘らず、この藥は大いに吐逆せずしてただ涎水を出す。瓜蔕を末にし、壯年者は一字を服し、老、少者は半字を早朝に井華水で服し、一食頃して沙餹一塊を含む。良久して涎が水のやうに出る。病の年深きものは墨涎を出し、塊があつて、水上に布く。涎が盡きたならば一兩日間粥を食ふ。もし吐多くして人の困すること甚しきときは、麝香を湯に泡けて一盞を飲め

ば止まる。(經驗後方)【急黄喘息】心上が堅硬し、水を飲みたがるには、瓜蔕二小合、赤小豆一合を研末し、暖漿水五合で方寸匕を服す。一炊時にして吐くものである。吐かぬときは再服する。鼻に吹いて水を取るもよし。(傷寒類要)【遍身金の如くなりたるもの】瓜蔕四十九箇、丁香四十九箇を甘鍋中で燒いて性を存して末にし、一字づつを鼻に吹いて黄水を取出す。また牙に揩つて涎を追ふもよし。(經驗方)【熱病發黄】瓜蔕を末にし、大豆ほどを鼻中に吹く。輕きは半日、重きは一日にして黄水を流し取つて愈える。(千金翼)【黄疸癊黄】いづれも瓜蔕、丁香、赤小豆各七箇を取つて末にし、豆ほどを鼻に吹き入れる。少時して黄水が流出する。隔日に一回用ゐ、瘥えれば止める。(孟詵食療)【身體、面部の浮腫】方は上に同じ。【十種の蠱氣】苦丁香を末にし、棗肉で和して梧子大の丸にし、三十丸づつを棗湯で服す。甚だ效がある。(瑞竹堂方)【濕家頭痛】瓜蔕末一字を鼻中に嗅入し、口に冷水を含む。黄水を取出して癒える。(活人書)【瘧疾寒熱】瓜蔕二箇を水半盞に一夜浸して頓服し、吐を取れば癒える。(千金)【發狂して走らんと欲するもの】瓜蔕末一錢を井水で服して吐を取れば癒える。(聖惠方)【大便不通】瓜蔕七箇を研末し、綿で裹んで下部に塞入すれ

ば通ずる（必效方）【鼻中の瘜肉】聖惠では、陳瓜蒂末を一日三回吹く。差えて已める。○又ある方では、瓜蒂末、白礬末各半錢を綿で裹んで塞ぐ。或は猪脂で和して挺子にし、それで塞いで一日に一回換へる。○又ある方では、青甜瓜蒂二箇、雄黄、麝香半分を末にし、先づ抓き破つて後に貼る。一日三回。○湯液では、瓜蒂十四箇、丁香一箇、黍米四十九粒を研末し、口中に水を含んで鼻に嗃ぐ。取下したならば止める。【風熱牙痛】瓜蒂七箇を炒つて研り、麝香少量を和し、綿で裹んで咬みしめ、涎を流す。（聖濟總錄）【雞屎白禿】甜瓜を蔓に蒂を連ね、多少に拘らず水に一夜浸し、砂鍋で熬つて苦汁を取り、滓を去つて再び餳のやうに熬り、物に盛つて取收め、痂疕を剃り去つて洗淨し、膏一盞に半夏末二錢、薑汁一匙、狗膽汁一箇を加へて和匀して塗る。三回に過ぎず。風を動ずる物を食ふことを忌む（儒門事親）【齁喘痰氣】苦丁香三箇を末にし、水で調へて服す。痰を吐して止む。（朱氏集驗方）

蔓　陰乾する。〔主　治〕【婦人の月經斷絕】使君子と共に各半兩、甘草六錢を末にし、酒で二錢づつを服す】

花　〔主　治〕【心痛欬逆】（別錄）

葉【主治】「人の髮なきもの。擣汁を塗れば生える」(嘉祐)「中を補し、小兒の癖、及び打傷損折を治す。末にして酒で服すれば瘀血を去る」(吳瑞)

【附方】 新一。「面上の黶子」七月七日の午時に瓜葉七枚を取り、直ちに北堂中に入つて南を向ひて立ち、一枚毎に黶を拭へば滅し去る。(淮南萬畢術)

西瓜（日用）

和名 すゐくわ
學名 Citrullus vulgaris, Schrad.
科名 うり科（葫蘆科）

【釋名】 寒瓜 下の記事を見よ。

【集解】 瑞曰く、契丹が回紇を破つたとき、始めてこの種を得たものだ。牛糞で覆ふて種ゑる。結實は斗ほどの大いさで匏のやうに圓く、色は青玉のやう、子は金のやうな色、或は黑麻色である。北地に多くある。

時珍曰く、按ずるに、胡嶠の陷虜記に「嶠が回紇を征したときにこの種を得て歸つた。名けて西瓜といふ」とあるを見ると、西瓜は五代の時から始めて中國に入つたのである。今では南北いづれにもあるが、南方のものは味がやや及ばない。やは

り甜瓜の類である。二月に種を下し、蔓生で、花、葉はいづれも甜瓜のやうだ。七八月に實が熟し、圓、及び徑は一尺、長さは二尺に達するものがあり、その稜は或はあるものもないものもあり、その色は或は靑く、或は綠であり、その瓤は或は白く、或は紅く、紅いものの味が尤も勝れてゐる。その子は或は黃に、或は紅く、或は黑く、或は白く、白いものは味が更に劣る。その味は甘があり、淡があり、酸があり、酸きものが下である。陶弘景が瓜蒂に註して『永嘉に寒瓜といふ甚だ大なるものがあり、春まで貯藏される』といつたのは卽ちこの物である。蓋し五代よりも先に瓜の種は已に浙東に入つてゐたのだが、但し西瓜なる名稱がなく、まだ中國に普及されてなかつたものである。その瓜子を曝し、裂いて仁を取り、生で食ひ、炒熟し、いづれも佳味である。皮は喫へない。また蜜煎にし、醬藏するもよし。

〔西瓜〕

頴曰く、楊溪瓜なる一種は、秋生じて冬熟し、形は略ぼ長く、扁くして大きく、瓤の色は臙脂のやうで、味が勝れてゐる。翌年まで保存し得るものだ。これは異人が遺した種類だといふことである。

瓜瓤 ［氣味］『甘く淡し、寒にして毒なし』瑞曰く、小毒あり。多食すれば吐利を作す。胃弱の者は食つてはならぬ。油餅と共に食へば脾を損ずる。

時珍曰く、按ずるに、延壽書に『北方人は稟性が厚く、これを食ひ慣れてゐるのであるが、南方人は稟性が薄く、多食すれば霍亂となり、終身冷病となるに至り易い』とある。又按ずるに、相感志に『西瓜を食つて後にその子を食へば瓜氣を噫しない。瓜を劃破して日中に曝し、少頃して食へば水のやうに冷い。酒氣を得、糯米に近づければ爛れ易い。猫がこれを踏めば沙し易い』とある。

［主治］『煩を消し、渇を止め、暑熱を解す』(吳瑞)『喉痺を療ず』(汪穎)『中を寛にし、氣を下し、小水を利し、血痢を治し、酒毒を解す』(寗原)『汁を含めば口瘡を治す』(震亨)

［發明］頴曰く、西瓜は性寒にして熱を解し、天生白虎湯の號がある。しかし

やはり多食するは宜くない。

時珍曰く、西瓜、甜瓜はいづれも生冷に屬する。世俗には『醍醐を頂に灌ぎ、甘露を心に洒ぐ』などといつて、その一時の快を取つてゐるが、實はその脾を傷め、濕を助けるの害には氣付かずにゐるのだ。眞西山の衛生歌に『瓜、桃は生冷なり、少く飡ふが宜し。秋來瘧痢と成るを致すことを免る』とはそれをいつたのである。

又、李廷飛の延壽書に『防州の太守陳逢原は、避暑に瓜を過多に食ひ、秋になつて忽ち腰腿が痛み、擧動が不能となつた。商助教に遇つて、その治療を受けて癒えたが、これはいづれも食瓜の患である。故に此に集書して鑑戒とするわけだ』といつた。又、洪忠宣の松漠紀聞に『ある人は目病を苦んだが、ある人が西瓜を切片して暴乾し、それを日日に服させると遂に癒えた。その性が冷にして火を降すものだからだ』とある。

皮

【氣　味】『甘し、涼にして毒なし』【主　治】『口舌、脣内に生じた瘡には、燒き研つて噙む』(震亨)

【附　方】　新二。

『閃挫腰痛』西瓜の青皮を陰乾して末にし、鹽酒で調へて三錢

を服す。(攝生衆妙方)【瓜を過食して傷めたるもの】瓜皮の煎湯で解す。諸瓜いづれも同じ。(事林廣記)

瓜子仁 [氣味]【甘し、寒にして毒なし】[主治]【甜瓜仁と同じ】(時珍)

葡萄 (本經上品)

和名 ぶだう
學名 Vitis vinifera, L.
科名 ぶだう科（葡萄科）

[釋名] **蒲桃** 古字である。**草龍珠** 時珍曰く、葡萄を漢書には蒲桃と書いてある。酒に釀造し得るもので、人がそれを酺飲すれば醄然として醉ふものだからこの名稱が生じたのだ。その圓きものを草龍珠と名け、長きものを馬乳葡萄と名け、白きものを水晶葡萄と名け、黑きものを紫葡萄と名ける。漢書に、張騫が西域に使して還つたとき、始めてこの種を得たとあるが、神農本草に已に葡萄のあるを見ると、漢以前にも隴西には舊とから有つたのだ。但だそれがまだ關內に入らなかつただけである。

[集解] 別錄に曰く、葡萄は隴西、五原、燉煌の山谷に生ずる。

○○弘景曰く、魏國の使人が多く南方へ賷(もたら)して來る。狀態は五味子のやうで甘美なものだ。酒に作れる。藤汁を用ゐると殊に美味だといふことである。北方人の多く肥健にして寒に耐へるのは、蓋しこれを食ふからかも知れぬ。淮南(わいなん)に植ゑられぬのは、やはり橘が河北では變つて了ふやうなものである。世間には、これは當方の蘡薁(あういく)だといふ說もある。恐らくこれも枳(き)と橘とのやうな關係にあるものかも知れぬ。

○恭曰く、蘡薁、卽ち山葡萄であつて、苗、葉は相似たものだ。やはり酒に作れる。葡萄は子の汁を取つて酒に釀すのである。陶氏は『藤汁を用ゐる』といつたが、謬(あやまり)である。

○頌曰く、今は河東、及び近汴(きんべん)の州郡にいづれもある。苗は藤蔓を作(な)して極めて長く、太(はなは)だ盛なるものは一二本で山谷の間を一面に被ふ。花は極めて細にして黃白色であり、その實には紫、白の二色があつて、圓くして珠のやうなものがあり、長くして馬乳に似たものがあり、核のないものがあり、いづれも七月、八月に熟する。汁を取つて酒に釀せるものだ。按ずるに、史記に『大宛(だいわん)では葡萄で酒を釀し、富人はその酒を萬餘石貯藏する。久しきは十數年にして腐敗しない。張騫(ちやうけん)が西域に使し

てその種を得て還つたのが、中國に有る始めだ』とある。蓋し北方の果として最も珍品であつて、現に太原では、やはりこの酒を作つて遠方へ贈る。その根、莖は中が空で相通じ、暮にその根に水を漑ぐと、翌朝には水が子中に浸潤してゐる。故に俗にその苗を木通と呼び、使用して小腸を利す。江東に產する一種で、實の細にして酸きものをば蘡薁子と名ける。

宗奭曰く、段成式は、葡萄に黃、白、黑の三種あるといつた。唐書には、波斯に產するものは大いさ雞卵ほどあるといつてある。この物は最も乾し難いもので、乾かねば貯藏されぬ。土地の如何を問はない。但し貯藏していづれも酒に釀し得る。

〔葡　萄〕

時珍曰く、葡萄は、藤を折り曲げて壓して置けば最も生じ易い。春期に萠芭が生え、葉は頗る栝樓葉に似て五尖があり、鬚が生え、延蔓して數十丈に引き、三月に

小花を開き、穗になつて黃白色である。それに實が連り著いて星のやうに編み珠のやうに聚り、七八月に熟して紫、白の二色がある。西方地方、及び太原、平陽では、いづれも葡萄乾を作つて四方に賣出す。蜀中には綠葡萄といふがあつて、熟したときの色が綠である。雲南に產するものは大いさ棗ほどで、味が尤も長い。西方邊境には瑣瑣葡萄といふがあつて、大いさは五味子ほどで核がない。按ずるに、物類相感志に『甘草を釘にして葡萄に鍼せば立ろに死ぬ。麝香を葡萄の皮内に入れると葡萄が盡く香氣を作す。かやうにその愛憎が他の草と異るものだ』とあり、又『その藤に棗樹を穿つて置けば實の味が更に美になる』とある。三元延壽書には、葡萄の架下で酒を飲んではならぬ。恐らく蟲の屎で人を傷めるものだといつてある。

實【氣味】【甘し、平、濇にして毒なし】詵曰く、甘く酸し、溫なり。多食すれば人をして卒に煩悶せしめ、眼を暗からしめる。

【主治】【筋骨濕痺。氣を益し、力を倍し、志を強くし、人をして肥健ならしめ、饑に耐へ、風寒を忍ばしめる。久しく食すれば身を輕くし、老いず、天年を延べる。酒に作れる】(本經)【水を逐ひ、小便を利す】(別錄)【腸間の水を除き、中を調

へ、淋を治す』(甄權)『時氣、痘瘡の出ぬには、これを食ひ、或は酒に研つて飲む。甚だ效がある』(蘇頌)

［發　明］　頌曰く、按ずるに、魏の文帝が羣臣に賜つた詔に『蒲桃は、夏末より秋に渉つて尙餘暑あるに當り、醉酒、宿酲に掩露して食ふ。甘くして飴ならず、酸にして酢ならず、冷にして寒ならず、味長くして汁多く、煩を除き渴を解す。又、釀して酒となせば、麴蘗よりも甘く、善く醉ふて醒め易し。他方の果、寧ろ之に匹ぶ者あらんや』とある。

震亨曰く、葡萄は土に屬して水と木、火とを有する。東南の人がこれを食へば多く熱を病むが、西北の人はこれを食つて恙ない。蓋し能く滲道に下走するものだが、西北の人は稟氣が厚いからである。

［附　方］　新三。『煩を除き、渴を止める』　生葡萄を搗いて汁を濾し取り、瓦器で熬稠し、熟蜜少量を入れて共に貯へ、湯に點てて飲む。甚だ良し(居家必用)『熱淋澀痛』葡萄を擣いて自然汁を取り、生藕を擣いて自然汁を取り、生地黃を搗いて自然汁を取り、白沙蜜と各五合を用ゐ、每服一盞を石器で溫めて服す。(聖惠方)『胎

が心に上衝するもの】葡萄の煎湯を飲めば下る。（聖惠方）

根及び藤葉　［氣味］實に同じ。［主治］【濃汁に煮て少しづつ飲めば、嘔噦、及び霍亂後の惡心を止める。孕婦の子が心に上衝するは、これを飲めば直ちに下つて胎が安全である】（孟詵）【腰脚、肢腿の痛を治するに、湯に煎じて淋洗するが良し。又、その汁を飲めば小便を利し、小腸を通じ、腫滿を消す】（時珍）

［附方］新一。【水腫】葡萄の嫩心十四箇、螻蛄七箇を頭、尾を去つて共に研り、七日露し、曝乾して末にし、毎服半錢を淡酒で調へて服す。暑期に尤も佳し。（潔古保命集）

蘡薁

音は嬰郁（アウイク）である。（綱目）

和名　えびづる
學名　Vitis Thunbergii, Sieb. et Zucc.
科名　ぶだう科（葡萄科）

［校正］原は葡萄の條下に附してあつたが、本書には分出した。

釋名　**燕薁**（毛詩）　**蘡舌**（廣雅）　**山葡萄**（唐註）　**野葡萄**（俗名）　藤を　**木龍**と名ける。時珍曰く、名稱の意義は詳でない。

集解　恭曰く、蘡薁は蔓生で、苗、葉は葡萄と相似て小さい。やはり莖の太さ椀ほどのものもある。冬期にはただ葉が凋むだけで藤は枯死せぬ。藤の汁は味甘く、子の味は甘く酸し。卽ち千歲虆である。

頌曰く、蘡薁子は江東に生ずる。實は葡萄に似て、細くして味が酸し。やはり酒に作れる。

〔蘡　薁〕

時珍曰く、蘡薁は林野の間に野生し、やはり挿植し得る。蔓、葉、花、實は葡萄と相異がない。その實は小さくして圓く、色は甚しく紫でない。詩に『六月薁を食ふ』とは卽ち此の物である。その莖を吹くと氣が出て、通草のやうな汁がある。

〔正誤〕　藏器曰く、蘇恭が千歲蘽に註して、卽ちこれは蘡薁だといつたのは妄言である。千歲蘽は、藤は葛のやうで葉は背が白く、子は赤くして食へるものだ。蘡薁は、藤を斫り斷つと氣が通じ、更に甘汁がない。草部千歲蘽の條下に詳に掲げてある。

時珍曰く、蘇恭の蘡薁の形狀に就ての說明は甚だよいが、但だそれを千歲蘽だといつたのは正しくない。

實　〔氣味〕「甘く酸し、平にして毒なし」〔主治〕「渴を止め、色を悅くし、氣を益す」(蘇恭)

藤　〔氣味〕「甘し、平にして毒なし」〔主治〕「噦逆、傷寒後の嘔噦には、搗汁を飲むが良し」(蘇恭)「渴を止め、小便を利す」(時珍)

〔附方〕　新三。「嘔啘厥逆」蘡薁藤の煎汁を呷ふ。(肘後方)「目中の障翳」蘡薁藤を水で浸し、氣を吹いて汁を取り、目中に滴入する。熱翳、赤、白障を去る。(拾遺本草)「五淋、血淋」木龍湯——木龍を用ゐる。卽ち野葡萄藤である。竹園荽、淡竹葉、麥門冬を根、苗を連ね、紅棗肉、燈心草、烏梅、當歸と各等分を湯に煎

じ、茶に代へて飲む。（百一選）

根 〔氣味〕 藤に同じ。 〔主治〕 【下焦の熱痛、淋閟。腫毒を消す】（時珍）

〔附方〕 新四。【男女の熱淋】野薔薇根七錢、葛根三錢、水一鍾を七分に煎じ、童尿三分を入れて空心に溫服する。（乾坤祕韞）【婦人の腹痛】方は上に同じ。【一切の腫毒】赤龍散——野薔薇根を晒し研つて末にし、水で調へて塗れば消する。（儒門事親方）【赤遊風腫】忽然として腫痒するは、治療せねば人を殺す。野薔薇根を擣いて泥のやうにして塗れば消する。（通變要法）

獼猴桃（宋開寶）

和名 たうさるなし
學名 Actinidia chinensis, Pl.
科名 またたび科（獼猴桃科）

〔釋名〕 **獼猴梨**（開寶） **藤梨**（同上） **陽桃**（日用） **木子** 時珍曰く、その形は梨のやう、その色は桃のやうで、獼猴が喜んで食ふところからかかる諸名があるのだ。閩地方では陽桃と呼ぶ。

〔集解〕 志曰く、山谷中に生じ、藤が樹に著いて生え、葉は圓くして毛がある。

その實は形が雞卵に似て大きく、その皮は褐色であつて、霜を經ると始めて甘美になつて食へる。皮は紙を作る材料になる。

宗奭曰く、今は陝西永興軍の南山に甚だ多い。枝條は柔弱で高さ二三丈あり、多く木に附いて生える。その子は十月に爛熟し、色は淡綠で、生では極めて酸い。子は繁細なもので、その色は芥子のやうだ。淺い山や道の傍には子のあるものがあるが、深山では多く猴に食はれて了ふ。

〔獼猴桃〕

實【氣味】【酸く甘し、寒にして毒なし】藏器曰く、鹹く酸し、毒なし。多食すれば脾、胃を冷し、洩澼を動ずる。

宗奭曰く、實熱あるものはこれを食ふが宜し。甚だ過食しては人をして臟寒して洩を作さしめる。

【主治】「暴渇を止め、煩熱を解し、丹石を壓し、淋石熱壅を下す」（開寶）○詵曰く、いづれも瓤を取つて蜜を和し、煎にして食ふが宜し。「中を調へ、氣を下し、骨節風、癱緩不隨の長年にして白髮のもの、野雞内痔病に主效がある」（藏器）

藤中汁　【氣味】「甘し、滑、寒にして毒なし」【主治】「反胃には生薑汁に和して服す。又、石淋を下す」（藏器）

枝葉　【主治】「蟲を殺す。汁に煮て狗に飼へば瘑疥を療ずる」（開寶）

甘蔗

音は柘（シャ）である。（別錄中品）

和名　さたうきび
學名　Saccharum officinarum, L.
科名　禾本科

【釋名】**竿蔗**（草木狀）**諸**　音は遮（シャ）である。時珍曰く、按ずるに、野史に『呂惠卿は、凡そ草はみな正生嫡出だが、ただ蔗だけは側種根上に庶出する。故に文字は庶に從ふのだといつた』とある。嵇含は竿蔗と書いた。その莖が竹竿のやうだといふわけである。離騷、漢書いづれも柘と書いてあるは字の通用である。諸

の字は許愼の說文に出てゐる。蓋し蔗の音の轉じたものだ。

［集解］弘景曰く、蔗は江東に產するものが勝れてゐる。廬陵にも好きものがある。廣の一種は數年生えて、いづれも太さ竹ほど、長さ一丈餘ある。汁を取つて作つた沙餹は甚だ人を益する。又、荻蔗といふがあり、節が疎で細く、やはり噉へるものだ。

頌曰く、今は江浙、閩廣、湖南、蜀川に生ずる。大なるものはやはり一丈ばかりになり、その葉は荻に似てゐる。二種あつて、荻蔗といふは莖が細く短くして節が疎であり、ただ生で噉ふに堪へ、また稀餹にも煎じられる。竹蔗といふは莖が粗くして長く、汁を笮つて沙餹にするもので、泉、福、吉、廣の諸州で多くこれを作る。沙餹を錬り牛乳を和して乳餹としたものはただ蜀州だけで作る。南方の地から北地へ販賣するものは荻蔗が多くして竹蔗は少い。

詵曰く、蔗にある赤色のものをば崑崙蔗と名け、白色のものをば荻蔗と名ける。竹蔗は蜀、及び嶺南のものを勝れたものとする。江東にもあるけれども蜀の產に劣る。會稽で作つてゐる乳餹は殆ど蜀のものに勝る。

時珍曰く、蔗はいづれも畦に種ゑるもので、叢生し、最も地力を困らしめる。莖は竹に似て內が實し、大なるものは圍り數寸、長さ六七尺あり、根下は節が蜜だが、上に行くほど疎になつて葉が抽き出で、その葉は蘆葉のやうで大きく、長さ三四尺あり、扶疎として四方に垂れてゐる。八九月に莖を取收めて置くと、春を過ぎるまで保存し得て果食に充てられる。按ずるに、王灼の餹霜譜に『蔗に四色あり。曰く杜蔗、卽ち竹蔗なり。綠嫩薄皮、味極て醇厚なり。專ら用ゐて霜を作る。曰く西蔗、霜と作して色淺し。曰く艻蔗、亦た蠟蔗と名く。卽ち荻蔗なり。亦た沙糖と作すべし。曰く紅蔗、亦た紫蔗と名く、卽ち崑崙蔗なり。止だ生にて啖ふ可し。餹と作すに堪へず。凡そ蔗は漿を搾つて飲めば固に佳なれども、又、これを咀嚼するの味雋永なるに若かず』とある。

〔甘蔗〕

蔗　［氣味］「甘し、平にして毒なし」大明曰く、冷なり。詵曰く、酒と共に食へば痰を發する。瑞曰く、多食すれば虚熱を發し、衄血を動ずる。○相感志には、榧子と共に食へば滓が軟だとある。

［主治］「氣を下し、中を和し、脾氣を助け、大腸を利す」(別錄)「大小腸を利し、痰を消し、渇を止め、心胸の煩熱を除き、酒毒を解す」(大明)「嘔噦、反胃を止め、胸膈を寛にする」(時珍)

［發明］時珍曰く、蔗は脾の果であつて、その漿は甘く、寒にして能く火熱を瀉す。素問に所謂、甘、温は大熱を除くの意味である。煎錬して餹に作り上げたものは甘、温にして濕熱を助ける。所謂、積温は熱と成るのである。蔗漿が渇を消し酒を解することは古から稱せられたところであつて、故に漢書の郊祀の歌に『百味旨酒、蘭を布き泰を生ず。柘漿を尊して朝酲を析く』とあり、唐の王維の櫻桃の詩に『飽食して內熱を愁ふることを須ゐざれ、大官還て蔗漿の寒あり』とあるがそれである。而るに孟詵の說では、酒と共に食すれば痰を發するといつてあるが、これはその物に解酒、除熱の功を知らなかつたわけであらうか。日華子大明は又、沙餹は

能く酒毒を解すといつてある。これで見ると、實は一旦煎錬を經たものは能く酒を助けて熱となすので、生漿の性と異るものなのである。按ずるに、晁氏客話に『甘草は火に遇へば熱となり、麻油は火に遇へば冷となり、甘蔗は飴に煎ずれば熱となり、水で湯にすれば冷となる。この物の性の特異な點である。醫を行ふ者の心得ねばならぬことだ』とある。又、野史には『盧絳中が痁疾疲瘵を病んだとき、ふと夢に白衣の婦人が現れて「蔗を食へば癒える」といつた。夜が明けてから蔗數挺を買つて食ふと、その翌日に疾が癒えた』とある。これもまた脾を助け、中を和するの驗證とすべきであらう。

附方　舊三、新五。【發熱口乾】小便の赤澀するには、甘蔗を取つて皮を去り、嚼んで汁を嚥む。漿を飲むもよし。（外臺祕要）【痰喘氣急】方は山藥の條に掲げてある。【反胃吐食】朝食つて暮に吐き、暮に食つて朝に吐き、旋旋に吐するものには、甘蔗汁七升、生薑汁一升を和勻し、日日に少しづつ呷ふ。（梅師方）【乾嘔の息まぬもの】蔗汁を半升づつ一日三回溫服する。薑汁を入れるが更に佳し（肘後方）【痁瘧疲瘵】前項を見よ。【眼の暴に赤腫せるもの】磣澀し、疼痛するには、甘蔗汁二合、

黄連半兩を銅器中に入れて慢火で養ひ、濃くして滓を去つて點ける（普濟）【虚熱欬嗽】口乾し、涕唾するには、甘蔗汁一升半、青粱米四合を粥に煮て、一日二回づつ日日に食ふ。極めて心、肺を潤ほす。（董氏方）【小兒の口瘡】蔗皮を燒き研つて摻る。（簡便方）

滓【主治】【燒いて性を存して研末し、烏桕油で調へて小兒の頭瘡、白禿に塗り、頻に塗つて瘥を取る。燒いた烟を人の目に入れてはならぬ。能く明を暗からしめる】（時珍）

沙餹（唐本草）

和名　くろざたう
學名　Cane sugar.
科名　未詳

【集解】恭曰く、沙餹は蜀地に産し、西戎、江東にいづれもある。笮つた甘蔗の汁を煎じて紫色にしたものである。

瑞曰く、稀きものを蔗餹といひ、乾いたものを沙餹といひ、毬なるものを毬餹といひ、餅なるものを餹餅といひ、沙餹の中に凝結して石のやうになり、破ると沙の

やうになり、白く透明なるものを餹霜といふ。

時珍曰く、此にいふは紫沙餹のことである。製法は西域から出たもので、唐の太宗が始めて人を遣してその法を中國に傳へ入れたものだ。蔗汁を樟木槽で過し取つて煎じ造るので、淸めるものをば蔗餳といひ、凝結して沙あるものをば沙餹といひ、漆甕で製造した石の如く、霜の如く、氷の如きものをば石蜜といひ、餹霜といひ、氷餹といふ。紫餹を亦た煎じ化して鳥獸、果物の狀を印成し、それを席獻に充てる。現に商品になつてゐるものは、また多く米餳などの諸物を雜へてあるから注意を要する。

【氣味】〔甘し、寒にして毒なし〕恭曰く、冷、利なることは石蜜に過ぎたるものだ。詵曰く、性は溫であつて冷ではない。多食すれば人をして心痛せしめ、長蟲を生じ、肌肉を消し、齒を損じ、疳䘌を發する。鯽魚と共に食へば疳蟲と成る。葵と共に食へば流澼を生ずる。筍と共に食へば消化せずして癥と成り、身重くして步行不能となる。

【主治】〔心腹熱脹、口乾渴〕（唐本）〔心、肺を潤ほす。大、小腸熱。酒毒を解

す。臘月に瓶に封じて糞坑中に窖ひ、天行熱狂の患者に汁を絞つて服ますが甚だ良し」(大明)「中を和し、脾を助け、肝氣を緩にする」(時珍)

［發明］宗奭曰く、蔗汁は淸めるものだ。故に煎錬を加へて紫黑にするのである。今醫家では、暴熱を治するに多くこれを用ゐて先導とし、兼て駝馬を啖つて熱を解す。小兒が多食すれば齒を損じ蟲を生ずるは、土が水を制するので、倮蟲は土に屬し、甘を得ると生ずるのである。

震亨曰く、餹は胃火を生ずる。そこで濕土が熱を生ずるから、能く齒を損じ蟲を生ずるのであつて、棗を食へば齲を病むと同一關係である。土が水を制するのではない。

時珍曰く、沙餹は性溫であつて蔗漿と殊ふ。故に多食すれば宜くない。魚、筍の類と共に食へばいづれも人を益せぬ。現に一般に調味料として使用するが、徒に口に適する點を取るだけで、陰にその害を受けることをば言ふものがない。但しその性が能く脾を和し、肝を緩にするものだ。故に脾、胃を治し、及び肝を瀉する藥に用ゐて先導とする。本草にその性寒なりといひ、蘇恭がこれを冷利だといつたのは、

いづれも此間の關係に明瞭な認識を缺いてゐる。

[附方] 舊一、新五。【下痢禁口】沙餹半斤、烏梅一箇、水二椀を一椀に煎じて時時に飲む。(摘玄方)【腹中の緊脹】白餹を酒三升で煮て服す。再服に過ぎず(子母祕錄)【痘の痂の落ちぬもの】沙餹を新汲水一盃で調へす服す。白湯で調へるもよし。一日二服。(劉提點方)【虎に傷けられた瘡】水に沙餹を化して一椀を服す。幷に塗る。(摘玄方)【上氣喘嗽】煩熱し、食すれば直ちに吐逆するには、沙餹、薑汁等分を相和し、慢煎して二十沸し、半匙づつを嚥んで效を取る。【韭を食つて口の臭きとき】沙餹で解す。(摘要方)

石蜜(唐本草)

和名 しろざたう
學名 Refined sugar.
科名 未詳

[釋名] **白沙餹** 恭曰く、石蜜、即ち乳餹であつて、蟲部の石蜜と同名である。時珍曰く、按ずるに、萬震の涼州異物志に『石蜜は石類ではない。石なる名稱を假りて呼んだのだ。實は甘蔗汁を煎じて曝すと、凝つて石のやうで體が甚だ輕くな

る。故にこれを石蜜といふのだ』とある。

集解　志約曰く、石蜜は益州、及び西戎に產する。沙餹を煎錬して製するもので、餅塊に作れる。黄白色である。

恭曰く、石蜜は水牛乳、米粉を和して煎じ、塊とし餅に作つたもので、堅く重い。西戎から來るものが佳し。江左にもあつて、殆ど蜀のものに勝る。

詵曰く、蜀中、波斯から來るものが良し。東吳にもあるが、兩處のものに及ばない。いづれも蔗汁、牛乳を煎じたもので、それで細白になり易いのだ。

宗奭曰く、石蜜は川、浙のものが最も佳く、その味が厚い。他の地のものはいづれもそれに次ぐ。煎錬して銅で物の形に作つて京師へ移入する。夏期、及び久しき陰雨の時期になると多く自ら消け化けるが、土人は先づ竹葉、及び紙で裹包し、外を石で夾み、それを埋めて風に當らぬやうにし、それで化消することを免れる。今一般にはこれを乳餹といひ、その餅に作つた黄白色のものをば捻餹と謂ふ。消し化し易いもので、藥に入れることは至つて少い。

時珍曰く、石蜜、卽ち白沙餹であつて、凝結して餅塊に作つた石のやうなものを

石蜜といひ、輕く白くして霜のやうなものを餹霜といひ、堅く白くして氷のやうなものを氷餹といふ。いづれも一物にして精粗の差異がある。白餹を煎じ化し、摸印して人物、獅、象などの形に作つたものを饗餹といふ。後漢書註に所謂、猊餹とあるそのものだ。石蜜で諸果仁、及び橙、橘皮、縮砂、薄荷の類を和して餅塊に作つたものを餹纒といふ。石蜜で牛乳、酥酪を和して餅塊に作成したものを乳餹といふ。いづれも一物を數種に變じたものである。唐本草に明に『石蜜は沙餹を煎じて作る』としてあるが、諸註はいづれも乳餹そのものを卽ち石蜜としてあつて、甚だ明晰を缺いてゐる。按ずるに、王灼の餹霜譜に『古はただ蔗漿を飲むだけであつたが、その後に煎じて蔗餳とし、又、曝して石蜜とし、唐の初には蔗で酒を作つた。しかし餹霜なるものは、大曆年間に鄒和尙といふものが蜀へ來て、遂寧の繖山に住した時から始めてその製造法を傳へたのだ。故に甘蔗は所在に植ゑてあるが、獨り福建、四明、番禺、廣漢、遂寧に氷餹があつて、他の地のものはいづれも顆に碎けて色が淺く、味が薄い。ただ竹蔗は綠嫩で味が厚く、霜に作つて最も佳く、西蔗がそれに次ぐ。凡そ一甕中の霜でもその品色はやはり自ら不同であつて、ただ疊んで

假山のやうなものを上とし、團枝がそれに次ぎ、甕鑑がそれに次ぎ、小顆塊がまたそれに次ぎ、沙脚を下とする。紫色、及び水晶のやうな色のものを上とし、深琥珀色がそれに次ぎ、淺黄がまたそれに次ぎ、淺白を下とする」とある。

【氣味】「甘し、寒、冷、利にして毒なし」【主治】「心腹の熱脹、口乾渇」(唐本)「目中の熱膜を治し、目を明にする。棗肉、巨勝末を和して丸にして噙めば、肺氣を潤ほし、五臟を助け、津を生ずる」(孟詵)「心、肺の燥熱を潤ほし、嗽を治し、痰を消し、酒を解し、中を和し、脾氣を助け、肝氣を緩にする」(時珍)

【發明】震亨曰く、石蜜は甘くして喜んで脾に入る。食すること多ければ害が必ず脾に生ずる。西北の地は高くして多く燥なるところからこの物を得て益があるが、東北の地は下くして多く濕なるところからこの物を得て病まぬものがない。やはり氣の厚薄の不同を兼ねるのだ。

時珍曰く、石蜜、餹霜、氷餹は、紫沙餹に比較してやや平であり、功用は相同じく、藥に入れては勝れてゐるが、然し冷利でない。もし久しく食するならば、熱を助け、齒を損じ、蟲を生ずるの害は同じである。

刺蜜（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【校正】草部より此に移し入る。

【釋名】**草蜜**（拾遺）　**給敦羅**

【集解】藏器曰く、交河の沙中に、頭上に毛があつて毛の中に蜜を生ずる草がある。胡人はその名を給敦羅と呼んでゐる。

時珍曰く、按ずるに、李延壽の北史に『高昌に羊刺と名ける草がある。その上に蜜を生じて味が甚だ甘美だ』とあり、又、梁の四公子記に『高昌から刺蜜を貢した』とあり、杰公は『南平城の羊刺は葉がなく、その蜜は色白くして味が甘い。鹽城の羊刺は葉が大きく、その蜜は色青くして味が薄い』といつた。高昌、卽ち交河の地で、西番に在る。今は火州となつてゐる。又、段成式の酉陽雜俎に『北天竺國に蜜草といふがある。蔓生で葉が大きく、秋、冬も枯死せず、霜露を受けるに因つて遂に蜜と成る』とあり、又、大明一統志に『西番の撒馬兒罕の地に小草があり、叢生

し、葉は細くして藍の如く、秋露がその上に凝ると蜜のやうに甘くなり、熬つて餳に作れる。土人は達卽古賓と呼ぶ。蓋し甘露である』とある。按ずるに、この二說はいづれも草蜜であるが、但だその草が卽ち羊刺なるや否やが判然せぬ。又、𩡧齊樹といふがあり、やはり蜜を出すもので、藥に入れられるといふことだがその詳細を知り得ない。今左に附錄して置く。

附錄　**𩡧齊**　上の字の音は別（ベツ）である。○按ずるに、段成式は『𩡧齊は波斯國に產し、拂林國にもあり、頊教梨佗と名ける。頊の音は奪（ダツ）である。樹の長さは一丈餘で、皮は色が靑く薄くして光淨であり、葉は阿魏に似て枝端に生じ、一枝に三葉がある。八月に伐ると臘月に更に新條が抽き出る。七月にその枝を斷つと蜜のやうで微に香しい黃汁があり、藥に入れて療病に用ゐられる』といつてある。

氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【骨蒸發熱、痰嗽、暴痢、下血。胃を開き、渴を止め、煩を除く】（藏器）

果の六　水果類六種

蓮藕（本經上品）

和名　はす
學名　Nelumbo nucifera, Gaertn.
科名　ひつじぐさ科（睡蓮科）

〔荷　藕　蓮〕

釋名　その根は**藕**（爾雅）その實は**蓮**（同上）その莖、葉は**荷**　韓保昇曰く、藕は水中に生じ、その葉を荷と名ける。按ずるに、爾雅に「荷は芙蕖なり。その莖は茄、その葉は蕸、その本は蔤、その華は菡萏、その實は蓮、その根は藕、その中は菂、菂の中は薏なり』とあり、邢昺の註に『芙蕖は總名であつて、別名を芙蓉といひ、江東地方では荷と呼ぶ。菡萏は蓮花である。菂は蓮實である。薏は菂中の青心

である』といひ、郭璞の註には『蔤とは莖下の白蒻で、泥中に在るもの、蓮とは房のこと、菂とは子のこと、薏とは中心の苦薏のことである。江東地方では荷花を芙蓉と呼び、北方の地では藕を荷といひ、また蓮を荷といふ。蜀地方では藕を茄といふ。これはいづれも習俗の傳訛だ』といひ、陸機の詩の疏には『その莖を荷といひ、その花の未だ發かぬを菡萏といひ、已に發きたるを芙蕖といふ。その實は蓮であり、蓮の皮は青くして裏が白く、その子は菂であり、菂の殼は青くして肉は白い。菂の內部の青心二三分を苦薏といふ』とある。

○時珍曰く、爾雅には荷を以て根の名とし、韓氏は荷を以て葉の名とし、陸機は荷を以て莖の名としたが、按ずるに、莖は葉を負ふもので負荷の意味があるから陸氏の說に從ふべきであらう。蔤とは嫩蒻で、竹の行鞭の如きものである。節に二莖を生じて一は葉となり一は花となり、盡る處に乃ち藕が生じ、花、葉、根、實の本となるもので、仁を顯し用を藏し、功成つて居らず、退いて密に藏するともいふべきものだ。故に蔤といふのである。花、葉は常に偶生し、偶ならざれば生ぜぬ。故に根を藕といふ。或は、藕は善く泥を耕すものだから文字は耦に從ふので、耦は耕の意

味だともいふ。茄は音は加(カ)であつて、蕸の上に加はるの意味だ。蕸は音は遐(カ)であつて密に遠ざかるの意味だ。菡萏とは函合して未だ發かざるの意味である。芙蓉は敷布容艶の意味である。蓮は連であつて、花、實相連つて出るからだ。菂は的である。子が房中に在つて點點として的のやうなものであつて、的とは凡そ物の點注されてあるを指す名である。薏は意といふやうな意味で、内に苦を含んでゐるので、古詩に『子を食つて心を棄ることとなかれ、苦心に生意存す』とあるその意味だ。

【集解】別錄に曰く、藕實莖は汝南の池澤に生ずる。八月に采る。

當之曰く、所在の池澤にいづれもあるが、豫章、汝南のものが良し。苗は高さ五六尺、葉は團くして青く、大いさ扇ほどある。その花は赤く、子は黑くして羊矢のやうだ。

時珍曰く、蓮藕は荆、揚、豫、益の諸處の湖澤、陂池にいづれもある。蓮子を以て種ゑたものは生ずること遲く、藕芽を種ゑたものは最も發し易い。その芽は泥を穿つて白蒻、卽ち蔤となり、長さは一丈餘にもなり、嫩いときは水に沒してゐる。取つて蔬茹として食へるもので、俗に藕絲菜と呼ぶ。節に二莖を生じ、一は藕荷と

いひ、その葉は水面に貼著し、その下に旁行して藕を生ずる。一は芰荷といひ、その葉は水を出て、その旁莖に花を生ずる。その葉は淸明後に生じ、六七月に花を開く。花には紅、白、粉紅の三色があつて、花心に黄鬚蕊があり、長さ一寸餘で、鬚の内が卽ち蓮であつて、花が褪て蓮房に菂が成り、菂の房に在る有樣は蜂子が窠に在る狀態のやうである。六七月に嫩きものを采つて生で食ふと脆かくして美味である。秋になると房が枯れ、子は黑くして石のやうに堅くなる。それを石蓮子といふ。八九月にそれを取收め、黑殼を斫り去つて各地へ賣り出す。それを蓮肉といふ。冬期から春までに藕を掘つて食ふ。藕は白くして孔があり、絲があり、大なるは肱臂ほど、長さ六七尺あつて、凡て五六節である。概して野生のもの、及び紅花のものは蓮が多くして藕が劣る。栽培したもの、及び白花のものは蓮が少くして藕が佳し。その花は白きものは香しく、紅きものは艷であり、千葉のものは實を結ばない。別に合歡竝頭のものがあり、夜舒荷といふ夜布いて晝卷くもの、睡蓮といふ花が夜水に入るもの、金蓮といふ花の黄なるもの、碧蓮といふ花の碧なるもの、繡蓮といふ花の繡つたやうなものがあるが、いづれも異種のものだから此に說述しない。相感志

に『荷梗で穴を塞げば鼠が自ら去る。煎湯で鑞垢を洗へば自ら新になる』とある、物の性に因る現象だ。

蓮實　[釋名]　**藕實**(本經)　**菂**(爾雅)　**薂**　音は吸(キフ)である(同上)　**石蓮子**(別錄)　**水芝**(本經)　**澤芝**(古今注)

[修治]　弘景曰く、藕實、卽ち蓮子は、八九月に黑く堅くして石の如くなるものを采り、乾して擣ち破る。

頌曰く、その菂は、秋になつて黑くして水に沈むを石蓮子といふ。磨つて飯食となるものだ。

時珍曰く、石蓮は、黑殼を剝去つたものを蓮肉といふ。水に浸して赤皮、青心を去つて生で食ふと甚だ佳味である。藥に入れるには、必ず蒸熟して心を去つてから、或は晒し、或は焙乾して用ゐる。また毎一斤を豶豬肚一箇に盛貯へて煮熟し、搗き、焙じて用ゐることもある。當今藥肆にある一種の石蓮子は、土石のやうな狀態で味が苦い。何物か判らない。

[氣味]　『甘し、平、濇にして毒なし』別錄に曰く、寒なり。大明曰く、蓮子、

石蓮の性は倶に温である　時珍曰く、嫩菂は性平である。石蓮は性温である。茯苓、山藥、白朮、枸杞子と配合するが良し。詵曰く、生で過多に食へば冷氣を微動して人を脹らす。蒸して食ふが甚だ良し。大便の燥澁するものは食つてはならぬ。

【主治】【中を補し、神を養ひ、氣力を益し、百疾を除く。久しく服すれば身を輕くし、老に耐へ、饑ゑず、天年を延べる】（本經）【五臟の不足、傷中に主效があり、十二經脈の血氣を益す】（孟詵）【渇を止め、熱を去り、心を安じ、痢を止め、腰痛、及び泄精を治す。多食すれば人をし歡喜せしめる】（大明）【心、腎を交へ、腸、胃を厚くし、精氣を固くし、筋骨を強くし、虚損を補し、耳目を利し、寒濕を除き、脾泄久痢、赤白濁、婦人の帶下、崩中、諸血病を止める】（時珍）【擣き碎いて米に和して粥飯にして食へば、身を輕くし、氣を益し、人をして強健ならしめる】（蘇頌）記載は詩疏にある。【上下、君相の火邪を安靖する】（嘉謨）

【發明】時珍曰く、蓮は淤泥に產するが泥のために染まらない。水中に居るが水のために沒せられない。根、莖、花、實は凡百の諸品と同じくし難く清淨なるもので、濟用群美兼得てゐる。蒻蔤からは節節に莖を生じ、葉を生じ、花を生じ、藕を

生じ、菡萏からは蕊を生じ、蓮を生じ、菂を生じ、薏を生ずるものであつて、蓮菂そのものは始には黄になり、黄から青になり、青から綠になり、綠から黑くなつて中に白肉を含み、内に青心を隱してゐる。石蓮は堅剛なもので永久に保存され、薏は生意を藏し、藕は復た萠芽し、展轉生生して造化息まぬものだ。故に釋氏はこれを用ゐて妙理具存の譬喩に引き、醫家は取つて服食として百病を却ける。蓋し蓮は、味は甘く、氣は溫にして性が嗇し、淸芳の氣を稟け、稼穡の味を得てゐるので、乃ち脾の果である。脾は黃宮であり、水、火を交媾して木、金を會合する機能のものであつて、土を元氣の母とする。母氣が既に和し、津液が相成り、神がそこで自ら生ずる。長命にして老に耐へるといふはその權輿である。昔は心、腎不交の勞傷、白濁を治するに淸心蓮子飲があり、心、腎を補し、精血を益するに瑞蓮丸があつた。いづれもこの理を得たものである。

藏器曰く、秋を經て正黑なる石蓮子は水に入れて必ず沈むが、ただ鹽鹵で煎ずれば能く浮ぶ。この物の山海の間に居つて百年を經て壞れぬものを人が得て食へば、髮を黑くして老いざらしめる。

詵曰く、諸鳥、猿猴は、これを取つても食はずして石室の内に藏して置く、人が三百年を經たものを得て食へば永く老いない。又、雁はこれを食つて田野、山巖の中に糞する。それが陰雨に逢はず、久しきを經て壞れずにあるものを得て、毎早朝空腹に十箇を食へば、身輕くして能く高きに登り、遠き歩行に堪へる。

附方　舊四、新十。［服食して饑ゑぬ法］詵曰く、石蓮肉を蒸熟し、心を去つて末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、日日に三十丸を服す。これは仙家の方である。【心を淸し、神を寧くする】宗奭曰く、蓮蓬中の乾石蓮子肉を用ゐ、砂盆中で擦つて赤皮を去つて心を留め、共に末にし、龍腦を入れて湯に點てて服す。［中を補し、志を強くする］耳、目を聰明にする。蓮實半兩を皮、心を去つて研末し、水で煮熟し、粳米三合で粥を作り、末を入れて攪き勻ぜて食ふ。（聖惠方）［虚を補し、損を益する］水芝丹――蓮實半升を酒に二晝夜浸し、豬肚一箇を洗淨してその中に蓮を入れ、縫定して煮熟し、取出して晒乾して末にし、酒で煮た米糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを食前に溫酒で送下する（醫學發明）［小便頻數］下焦の眞氣虛弱のものには、上記の方を用ゐ、醋糊で丸にして服す。［白濁遺精］石蓮肉、龍骨、益智仁

等分を末にし、二錢づつを空心に米飮で服す。○普濟では、蓮肉、白茯苓等分を末にし、白湯で調へて服す。【心虚赤濁】蓮子六一湯――石蓮肉六兩、炙甘草一兩を末にし、毎服一錢を燈心湯で服す。（直指方）【久痢禁口】石蓮肉を炒つて末にし、毎服二錢を陳倉米で調へて服す。それで食思を覺えて甚だ妙である。香連丸を加入するが尤も妙である。（丹溪心法）【脾泄、腸滑】方は上に同じ。【噦逆の止まぬもの】石蓮肉六箇を赤黃色に炒つて研末し、冷熟水半盞で和して服すれば止まる。（蘇頌圖經）【產後の欬逆】嘔吐し、心忡し、目運するには、石蓮子一兩半、白茯苓一兩、丁香五錢を末にし、二錢づつを米飮で服す。（良方補遺）【眼赤くして痛むもの】蓮實を皮を去つて研末し、一盞を粳米半升と水で粥に煮て常食する。（普濟方）【小兒の熱渴】蓮實二十箇を炒り、浮萍二錢半、生薑少量を水で煎じ、三回に分服する。（聖濟總錄）【反胃吐食】石蓮肉を末にし、少肉豆蔻末を入れ、米湯で調へて服す。（直指方）

藕　氣味　【甘し、平にして毒なし】大明曰く、溫なり。時珍曰く、相感志に『藕は鹽水を以て食に供すれば口を損ぜぬ。油燥麪米果と共に食へば滓がない。煮るには鐵器を忌む』とある。

主治　【熱渴。留血を散じ、肌を生ずる。久しく服すれば人の心をして懽ばしめる】(別錄)【怒を止め、洩を止め、食を消し、酒毒、及び病後の乾渴を解す】(藏器)【擣汁を服すれば悶を止め、煩を除き、胃を開き、霍亂を治し、産後の心悶を破る。膏に擣いて金瘡、幷に傷折を罯へば暴痛を止める。蒸煮して食へば大いに能く胃を開く】(大明)【生で食へば霍亂後の虛渴を治す。蒸して食へば甚だ五臟を補し、下焦を實する。蜜と共に食へば人の腹臟を肥えしめ、諸蟲を生ぜず、また糧食を休め得る】(孟詵)【汁は射罔の毒、蟹の毒を解す】(徐之才)【擣き浸し澄して粉にして服食すれば身を輕くし、天年を益す】(臞仙)

發明　弘景曰く、根は神仙家の材料になる。宋の時、太官が血䘓——䘓は音勘(カン)である——の料理を作るとき、料理人が藕皮を削つて誤つて血中に落したので、遂に散渙して凝らなかつた。故に醫家では血を破るにこれを用ゐて多く效を奏する。䘓とは血羹のことである。

詵曰く、産後には生、冷の物を忌むが、獨り藕は同じくない。生、冷のものは能く血を破るがためである。

○時珍曰く、白花の藕の太くして孔の扁なるものは、生で食へば味甘く、煮て食へば美味でない。紅花のもの、及び野藕は、生で食へば味が澀く、煮蒸すれば佳味である。そもそも藕は、卑汚に生じて潔白なること自若たるもので、質は柔にして堅を穿ち、下に居て節があり、孔竅は玲瓏として絲綸が内に隱れ、嫩蒻を生じて發して莖、葉、花、實となり、又、芽を復生して以て生生の脈を續ぎ、四時食へるもので、人をして心を懽ばしめる。靈なる根と謂ふべきである。故にその主治するところの病はいづれも心、脾、血分の疾であつて、蓮の功とは稍や不同なわけだ。

附方　舊四、新六。【時氣の煩渴】生藕汁一盞、生蜜一合を和勻して細服する。(聖惠)【傷寒口乾】生藕汁、生地黃汁、童尿各半盞を煎じて溫服する。(龐安時傷寒論)【霍亂煩渴】藕汁一鍾、薑汁半鍾を和勻して飲む。(聖濟總錄)【霍亂吐利】生藕の擣汁を服す。(聖惠)【上焦の痰熱】藕汁、梨汁各半盞を和して服す(簡便)【產後の悶亂】血氣が上衝して口乾き、腹痛するには、梅師方では、生藕汁三升を飮む。○龐安時は、藕汁、生地黃汁、童尿等分を煎じて服す。【小便熱淋】生藕汁、生地黃汁、葡萄汁各等分を用ゐ、每服半盞を蜜を入れて溫服する。【落馬の血瘀】胸腹に積在

して唾血無數のものには、乾藕根を末にして、酒で方寸匕を服す。一日二回。(千金方)
【蟹を食つた中毒】生藕汁を飲む(聖惠)【凍脚裂坼】藕を蒸熟し擣き爛らして塗る。
【塵芒の目に入りたるとき】大藕を洗つて擣き、綿に裹んで汁を目中に滴入すれば出る。(普濟方)

藕蔤　釋名　**藕絲菜**　五六月に嫩いとき采つて蔬茹にする。老いると藕になりやや味が不適當になる。

氣味【甘し、平にして毒なし】主治【生で食へば霍亂後の虚渴、煩悶して食事不能なるに主效があり、酒食の毒を解す】(蘇頌)【功は藕と同じ】(時珍)【煩毒を解し、瘀血を下す】(汪頴)

藕節　氣味【澀、平にして毒なし】大明曰く、冷なり。硫黄を伏す。

主治【擣汁を飲めば、吐血の止まぬもの、及び口、鼻の出血に主效がある】(甄權)【瘀血を消し、熱毒を解す。産後の血悶には、地黄を和して汁に研り、熱酒、小便を入れて飲む】(大明)【能く欬血、唾血、血淋、溺血、下血、血痢、血崩を止める】(時珍)

［發明］　時珍曰く、一男子は血淋を病み、痛脹して死を祈ふのであつたが、予が藕汁で髪灰を調へて毎服二錢を服ませると、三日にして血が止み、痛が除けた。按ずるに、趙溍の養痾謾筆に『宋の孝宗が痢を患つて衆くの醫療の效がなかつたとき、高宗が偶〻一小藥肆を見て、召出して問はれると。その商人が發病の動機を問ふて、湖蟹を食つてから發つたといふことを聞き、そこで脈を診て「これは冷痢だ」といひ、新に採つた藕節を擣き爛らし、熱酒で調へて進める、數服にして癒えた。高宗は大いに喜んで、藥を搗くに用ゐた金の杵臼を賜つた。それで世間ではその人を金杵臼と呼ぶやうになつた。その品物は嚴重にその家に保存されてある。世にも稀れな優遇と謂べきだ』とある。概して藕は能く瘀血を消し、熱を解し、胃を開くもので、また蟹の毒を解するものだからである。

［附方］　新五。　【鼻衄の止まぬもの】藕節の擣汁を飲み、幷に鼻中に滴す。【卒かの暴吐血】雙荷散　——藕節、荷蔕各七箇を用ゐ、蜜少量で擂り爛らし、水二鍾で八分に煎じ、滓を去つて溫服する。或は末にし、丸にして服するもよし。（聖惠）【大便下血】藕節を晒乾して研末し。人參、白蜜の煎湯で二錢を調へて服す。一日二服。

（全幼心鑑）【遺精白濁】心虛不寧なるには、金鎖玉關丸——藕節、蓮花鬚、蓮子肉、芡實肉、山藥、白茯苓、白伏神各二兩を末にし、金櫻子二斤を搥き碎き、水一斗で八分に熬めて滓を去り、再び熬つて膏にし、少量の麪を入れたもので藥を和して梧子大の丸にし、毎服七十丸を米飲で服す。【鼻淵、腦瀉】藕節、芎藭を焙じ研つて末にし、毎服二錢を米飲で服す。（普濟）

蓮薏　卽ち蓮子中の青心である。［釋名］**苦薏**［氣味］【苦し、寒にして毒なし】藏器曰く、蓮子を食ふには、心を去らねば人をして吐を作さしめる。

［主治］【血渇。産後の渇には、生で研末し、米飲で二錢を服す。立ろに癒える】（士良）【霍亂を止める】（大明）【心を淸し、熱を去る】（時珍）○記載は統旨にある。

［附方］新二。【勞心吐血】蓮子心七箇、糯米二十一粒を末にし、酒で服す。これは臨安の張上舍の方である。（是齋百一方）【小便遺精】蓮子心一撮を末にし、辰砂一分を入れ、一日二回、一錢づつを白湯で服す。（醫林集要）

蓮蕊鬚［釋名］**佛座鬚**　花の開いたとき採取して陰乾する。やはり果に充てて食へる。［氣味］【甘く濇し、溫にして毒なし】大明曰く、地黄、葱、蒜を忌

む。［主治］「心を清し、腎を通じ、精氣を固くし、鬚髮を烏くし、顔色を悦くし、血を益し、血崩、吐血を止める」（時珍）

［發明］時珍曰く、蓮鬚は本草には收錄してないが、三因、諸方の固眞丸、巨勝子丸、各補益の方中に往往用ゐてある。その功は大抵蓮子と同じである

［附方］新一。「久、近の痔漏」三十年のものも三服にして根を除く。蓮花蕊、黑牽牛の頭末各一兩半、當歸五錢を末にし、毎空心に酒で二錢を服す。熱物を忌む。五日にして效が現はれる（孫氏集效方）

蓮花［釋名］**芙蓉**（古今注）**芙蕖**（同上）**水華**［氣味］「苦く甘し、溫にして毒なし」地黃、葱、蒜を忌む。

［主治］「心を鎭め、色を益し、顔を駐め、身が輕くなる」（大明）○弘景曰く、花は神仙家の材料となる。香に入れて尤も妙である。

［附方］舊二、新二。「服食して顔を駐める」七月七日に蓮花を採つて七分、八月八日に根を採つて八分、九月九日に實を採つて九分を陰乾して搗き篩ひ、毎服方寸匕を溫酒で調へて服す（太清草木方）「天泡濕瘡」荷花を貼る（簡便方）「難產の催生」

蓮花一葉に人の字を書いて呑めば產し易い。(肘後方)【墜損嘔血】墜跌して心、胃に積血し、嘔血して止まぬには、乾荷花を末にし、方寸匕づつを酒で服す。その效神の如くである。(楊拱醫方摘要)

蓮房　釋名　**蓮蓬殼**　陳久なるものが良し。　氣味　【苦く澁し、溫にして毒なし】　主治　【血を破る】(孟詵)【血脹腹痛、及び產後胎衣の下らぬには、酒で煮て服す。水で煮て服すれば野菌の毒を解す】(藏器)【血崩、下血、溺血を止める】(時珍)

發明　時珍曰く、蓮房は厥陰の血分に入り、瘀を消し、血を散じ、荷葉と同功である。やはり『急なるときは標を治す』の意味である。

附方　新六。【經血の止まぬもの】瑞蓮散——陳蓮蓬殼を燒いて性を存して研末し、二錢づつを熱酒で服す。(婦人經驗方)【血崩の止まぬもの】冷、熱に拘らず、蓮蓬殼、荊芥穗を各〻燒いて性を存して等分を末にし、毎服二錢を米飲で服す。(聖惠方)【產後の血崩】蓮蓬殼五箇、香附二兩を各〻燒いて性を存して末にし、毎服二錢を米飲で服す。一日二回。(婦人良方)【漏胎下血】蓮房を燒いて研り、麪糊で梧

子大の丸にし、毎服百丸を湯、酒の任意のもので服す。一日二回。(朱氏集驗方)【小便血淋】蓮房を焼いて性を存して末にし、麝香少量を入れ、毎服二錢半を米飲で調へて服す。一日二回。(經驗方)【天泡濕瘡】蓮蓬殼を焼いて性を存して研末し、井泥で調へて塗る。神效がある(海上方)

荷葉 [釋名] 嫩きものは**荷錢** 象形である。水に貼するものは**藕荷** 藕を生ずるものである。水から出るものは**芰荷** 花を生ずるものである。**蔕**を**荷鼻**と名ける。[修治] 大明曰く、藥に入れるにはいづれも炙いて用ゐる。

[氣味]【苦し、平にして毒なし】時珍曰く、桐油を畏れ、白銀を伏し、硫黄を伏す。

[主治]【渇を止め、胞を落し、血を破り、産後の口乾、心、肺の躁煩を治す】(大明)【血脹腹痛、産後胎衣の下らぬには、酒で煮て服す。荷鼻は胎を安じ、惡血を去り、好血を留め、血痢を止め、菌、蕈の毒を殺す。いづれも水で煮て服す】(藏器)【元氣を生發し、脾、胃を裨助し、精滑を澀し、瘀血を散じ、水腫、癰腫を消

し、痘瘡を發し、吐血、咯血、衄血、下血、溺血、血淋、崩中、産後の惡血、損傷敗血を治す』（時珍）

【發明】　杲曰く、潔古張先生から、枳朮丸の方は荷葉燒飯を用ゐて丸にすることを口授されて、當時は未だその理を悟らなかつたが、老年にして味つて見て始めて了得した。夫れ震は動であつて、人はこれを感ずれば足の少陽、甲膽を生ずる。これは風木に屬し、萬物を生化するの根蔕たるものである。人の飲食が胃に入ると營氣が上行するは、卽ち少陽、甲膽の氣であつて、手の少陽、三焦の元氣と共に同じく生發の氣がある。素問に『端を始序に履むときは則ち愆らず』とあつて、荷葉は水、土の下、汚穢の中に生じて挺然として獨立し、その色は靑く、その形は仰ぎ、その中は空にして震の卦の體に象るものだ。この藥を食すればこの氣の化を感ずる。胃の氣が升らぬわけには行かない。この物を用ゐて引としたことは遠識道に合ふと謂ふべきである。更に燒飯を以て藥を和し、白朮と共に協力して滋す養補し、胃を厚からしめて內傷を致さざらしめる。その利廣くして大なるものだ。世の巴豆、牽牛を用ゐる者などは、いかでこの物を語るに足らうぞ。

○○時珍曰く、燒飯は穀部飯の條下に掲載してある。按ずるに、東垣の試效方に『雷頭風の證で、頭面に疙瘩があつて腫痛し、憎寒發熱し、傷寒のやうな狀態で病の三陽に在るは、寒藥の重劑を過用して過無きを誅伐してはならない。ある人がこの病で諸藥の奏效しなかつたとき、余が淸震湯を處して治療すると癒えた。荷葉一枚、升麻五錢、蒼朮五錢を用ゐ、水で煎じて溫服するのである。蓋し震は雷となる。而して荷葉の形は震の體を象り、その色はまた靑い。乃ち涉類象形の意味だ』とある。又按ずるに、聞人規の痘疹八十一論に『痘瘡が已に出て、復た風寒のために外襲されると、竅が閉ぢ血が凝り、その點が長ぜず、或は黑色に變ずる。これを倒靨といふ。必ず身痛し、四肢の微厥するものだが、但だ肌を溫め邪を散すれば、熱氣が復た行つて斑が自ら出る。紫背荷葉散でこれを治するが宜し。蓋し荷葉は能く陽氣を升發し、瘀血を散じ、好血を留め、殭蠶は能く結滯の氣を解するものだからである。この藥は得易くして人を活すこと甚だ多く、人牙、龍腦に勝るものだ』とある。又、戴原禮の證治要訣には『荷葉を服すれば人をして瘦劣ならしめる。故に單服して陽水浮腫の氣を消し得るものだ』とある。

附方　舊四、新二十二。【陽水浮腫】敗荷葉を燒いて性を存して研末し、每服一錢を米飲で調へて服す。一日三服。(證治要訣)【脚膝の浮腫】荷葉心、藁本等分を湯に煎じて淋洗する。(永類方)【痘瘡倒靨】紫背荷葉散——又、南金散と名ける。風寒の外襲で倒靨し、勢危きものを治するに、萬に一の失なし。霜後の荷葉の水に貼した紫背のものを炙き乾し、白殭蠶の直きものを炒つて絲を去り、等分を末にし、每服半錢を胡荽湯を用ゐ、或は酒で調へて服す。(聞人規痘疹論)【諸般の癰腫】毒を拔き、痛を止める。荷葉中心蒂の錢ほどのものを多少に拘らず湯に煎じて淋洗し、拭ひ乾してから、飛過した寒水石を臘猪脂と共に塗る。又、癰腫を治する柞木飮の方の中にもまたこれを用ゐてある。(本事方)【打撲損傷】惡血が攻心して悶亂し、疼痛するものには、乾荷葉五片を燒いて性を存して末にし、每服一錢を童子の熱尿一盞で食前に調へて服す。一日三服。惡物を利下するを度とする。(聖惠方)【產後の心痛】惡血が盡きぬものである。荷葉を香く炒つて末にし、每服方寸匕を沸湯、或は童尿で調へて服す。或は灰に燒き、或は汁に煎じ、いづれもよし。(救急方)【胎衣不下】方は上に同じ。【傷寒產後】血運して死せんとするには、荷葉、紅花、薑黃等分を炒

つて研末し、童尿で二錢を調へて服す。（罷安常傷寒論）【妊婦の傷寒】大熱、煩渇で胎氣を傷める恐がある。嫩く卷いた荷葉を焙じて半兩、蚌粉二錢半を末にし、毎服三錢を新汲水に蜜を入れて調へて服す。幷に腹上に塗る。これを罩胎散と名ける。（鄭氏方）【妊娠胎動】已に黄水の出るには、乾荷蔕一枚を炙き研つて末にし、糯米の淘汁一鍾で調へて服すれば平安を得る。（唐氏經驗方）【吐血の止まぬもの】嫩荷葉七箇を水に擂つて服す。甚だ佳し。〇又ある方では、乾荷葉、生蒲黄等分を末にし、毎服三錢を桑白皮煎湯で調へて服す。〇肘後方では、霜を經た敗荷を燒いて性を存して研末し、二錢を新水で服す。【吐血、咯血】荷葉を焙乾して末にし、二錢を米湯で調へて服す。一日二服。知あるを以て度とする。〇聖濟總錄では、敗荷葉、蒲黄各一兩を末にし、毎服二錢を麥門冬湯で服す。【吐血、衄血】陽が陰に乘じて血熱の妄行するには、四生丸を服するが宜し。陳日華は、屢〻用ゐて效を得たといつた。生荷葉、生艾葉、生柏葉、生地黄等分を擣爛らして雞子大の丸にし、毎服一丸を水三盞で一盞に煎じ、滓を去つて服す。（濟生方）【崩中下血】荷葉を燒き研つて半兩、蒲黄、黄芩各一兩を末にし、空心に三錢づつを酒で服す。【血痢の止まぬもの】

荷葉蒂を水で煮て汁を服す。(普濟方)【下痢赤白】荷葉を燒いて研り、毎服二錢を、紅痢には蜜、白痢には沙糖湯で服す。【脱肛の收まらぬもの】水に貼した荷葉を焙じて研り、酒で二錢を服し、同時に荷葉に末を盛つてそれに坐る。(經驗良方)【牙齒の疼痛】靑荷葉を剪つて錢蒂七箇を取り、濃米醋一盞で半盞に煎じ、滓を去つて熬つて膏にし、時時に抹るが妙である。(唐氏經驗方)【赤遊火丹】新生の荷葉を擣爛らし、鹽を入れて塗る。(摘玄方)【漆瘡の痒きもの】乾荷葉を湯に煎じて洗ふが良し。(集驗方)【全身の風癘】荷葉三十枚を石灰一斗の淋汁で合煮して漬ける。半日にして出る。數日に一回試みるが良し(聖惠方)【偏頭風痛】升麻、蒼朮各一兩、荷葉一箇を水二鍾で一鍾に煎じ、食後に溫服する。或は燒荷葉一箇を末にし、煎汁で調へて服す。(簡便方)【刀斧の傷瘡】荷葉を燒き研つて搽る。(集簡方)【陰腫痛痒】荷葉、浮萍、蛇牀等分を水で煎じ、日日に洗ふ。(醫壘元戎)

紅白蓮花（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【校正】草部より此に移し入る。

【集解】藏器曰く、紅蓮花、白蓮花は西國に生ずる。胡人が齎して來る。時珍曰く、これは蓮花のことをいつたものか否か判らないが、功は蓮と同じく類を以て相從ふ。姑く此に移し入れて記載する。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【久しく服すれば人をして顏色を好くし、白髮を黑く變じ、老衰を却けしめる】（藏器）

芰實 音は妓（ギ）である。（別錄上品）

和名 ひし
學名 Trapa natans, L.
科名 ひし科（芰科）

【釋名】**蔆**（別錄） **水栗**（風俗通） **沙角** 時珍曰く、その葉が支散してゐるものだから文字は支に從ふのだ。その角が稜峭たるものだから蔆と謂ふのだが、俗には蔆角と呼んでゐる。昔は一般に多くは區別しなかつたが、ただ王安貧の武陵記に、三角四角のものを以て芰とし、兩角のものを蔆としてある。左傳に、屈到は芰を嗜むとあるは卽ちこの物である。爾雅には、これを厥𣛙——𣛙の音は眉（ビ）である——と謂つてある。又、許愼の說文に『蔆は、楚ではこれを芰といひ、秦ではこれを

薢茩(かいこう)といふ」とあり、楊氏の丹鉛錄に、芰を雞頭として、離騷の『芰荷を緝(ね)つて以て衣となす』とあるを引いて、『菱葉は衣には緝へない』といつたが、いづれも誤である。按ずるに、薢茩とは決明の名であつて厥攈ではない。又、埤雅に、芰荷とは藕の上に水を出て花を生ずるの莖なりとある。雞頭ではないのであつて、菱と同名の異物だ。許、楊二氏は詳細な考證を失してゐるから此に正して置く。

【集解】弘景曰く、芰實は廬江(ろかう)の地方に最も多い。いづれも火を取つて燔(や)き、米にして糧に充(あ)てる。今は多く蒸し暴して食ふ。

頌曰く、菱は處處にある。葉は水上に浮び、花は黄白色で、花が落ちて實が生じ、漸次に水中に向つて行つて熟する。實に二種あつて、一種は四角、一種は兩角である。兩角のものの中にまた嫩皮にして紫色なるものがあり、これを浮菱といひ、食つて尤も美味である。江淮(かうわい)、及び山東地方では、その實を暴して米として糧に代へる。

時珍曰く、芰、菱は湖濼(こはく)のある處にはあるもので、菱は泥中に落て最も生發し易いものである。野菱と家菱とあつて、いづれも三月に生えて蔓が延引し、葉は水上に浮んで扁(ひらた)くして尖があり、表面は鏡のやうに光り、葉下の莖には蝦股のやうな股

（一）炕ハ張ナリ。

があり、一莖に一葉で、兩兩相差へて蝶の翅の狀態のやうだ。五六月に小さい白花を開いて日に背いて生じ、晝は合して宵に（一）炕り、月に隨つて轉移する。その實には數種あつて、或は三角、四角、或は兩角である。野菱は湖中に自生し、葉、實倶に小さく、その角は硬直で人を刺す。その色は嫩いときは青く、老いると黑くなり、嫩いとき剝いて食ふと甘美である。老いれば蒸煮して食ふ。野人は暴乾して剉つた米を餅にし、粥にし、餻にし、果にするが、いづれも糧に代へられる。その莖もやはり暴して取收め、米に和して餅にすると兇作の時のしのぎになる。蓋し澤農に有利なる物だ。家菱は陂塘に種ゑるもので、葉、實倶に大きく、角は耎にして脆く、やはり兩角があつて弓の形のやうに彎卷するものだ。その色には青があり、紅があり、紫があり、嫩い時に剝いて食ふと、皮が脆く肉が美味だ。蓋し佳果である。老

〔芰〕
—菱—

いると殼が黑くして硬くなる。江中に墜入したものを烏菱といふ。冬期に取つて風乾して果とする。生、熟いづれも佳し。夏期にその葉に糞水を澆ぐと、實が更に肥美になる。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『蘇州の折腰菱は多く兩角である。荊州の郢城菱は三角で刺がなく、(二)按莎される。漢の武帝の昆明池にあつた浮根菱はまた青水菱ともいひ、葉が水中に沒して菱が水上に出る。或は、玄都には雞翔菱といふ碧色で形が雞の飛ぶ狀態のやうなものがあつて、仙人鳧伯子が嘗て食つたともいふ』とある。

〔氣味〕『甘し、平にして毒なし』詵曰く、生で食へば性冷利である。多食すれば人の臟腑を傷め、陽氣を損じ、莖を痿し、蟯蟲を生ずる。水族中でこの物が最も病を治せぬものだ。若し過食して腹脹する場合には、暖薑酒を服するがよし。直ちに消する。また吳茱萸を含んで津を咽むもよし。

時珍曰く、仇池筆記に『菱花は開いて日に背き、芡花は開いて日に向ふ。故に菱は寒にして芡は暖である』とある。別錄に『芰實は性平なり』とあるが、これは生では性冷だが乾けば性が平だといふのだらうか。

(二)按莎ハ摩莎ニ同ジ、摩リ撫デテモ刺シ痛ムコトナシトイフ意ナリ。

【主治】「中を安し、五臟を補し、饑えず、身を輕くする」(別錄)「蒸し暴して蜜を和して餌へば、穀食を斷ち、長生する」(弘景)「丹石の毒を解す」(蘇頌)「署を解し、傷寒積熱を解し、消渴を止め、酒毒、射罔の毒を解す」(時珍)「擣き爛らし、澄して粉にして食へば、中を補し、天年を延べる」(臞仙)

芰花 【氣味】「濇し」【主治】「鬚髮を染める方に入れる」(時珍)

烏菱殼 【主治】「鬚髮を染める方に入れ、また泄痢を止める」(時珍)

芡實

音は儉(ケン)である。(本經上品)

學名 おにばす
和名 Euryale ferox, Salisb.
科名 ひつじぐさ科(睡蓮科)

【釋名】**雞頭**(本經) **鴈喙**(同) **鴈頭**(古今注) **鴻頭**(韓退之) **雞雍**(莊子) **卯菱**(管子) **蔿子** 音は唯(キ)である。**水流黃** 弘景曰く、これは今の蔿子のことである。莖上の花が雞冠に似てゐるから雞頭と名けたのだ。頌曰く、その苞の形が雞、鴈の頭に類してゐる。故にかかる諸名があるのだ。

時珍曰く、芡は儉歉を濟へるものだ。故にこれを芡といふ。雞雍なる名稱は莊子

の无鬼篇にある。卯蔆なる名稱は管子の五行篇にある。揚雄の方言には『南楚ではこれを雞頭といひ、幽、燕ではこれを鴈頭といひ、徐、靑、淮、泗ではこれを芡子といふ。その莖はこれを蔿といひ、また蔆といふ』とある。鄭樵の通志に、鉤芺を芡としたのは誤だ。鉤芺は陸生の草であつて、その莖は食へるものだ。水流黃については下文を見よ。

【集解】別錄に曰く、雞頭實は雷池の池澤に生ずる。八月に採る。

保昇曰く、苗は水中に生じ、葉は大いさ荷ほどあり、皺んで刺がある。花、子は拳ほどの大いさで、形は雞頭の形をなし、實は石榴のやう、その皮は靑黑で、肉は白く、蔆米のやうである。

頌曰く、處處にあつて、水澤中に生ずる。その葉は俗に雞頭盤と名ける。花下に實を結ぶ。その莖の嫩いものを蔿菽と名け、また蔆菜と名ける。一般に采つて蔬茹にする。

宗奭曰く、全國いづれにもある。水鄉の住民は、子を采り皮を去り、仁を擣いて粉にし、蒸㸂して餅にする。それで糧に代へられるものだ。

時珍曰く、芡は、莖が三月に生え、葉は水に貼し、荷葉よりも大きく、縠のやうな皺文があり、蹙衄として沸くやうである。面が青く背が紫だ。莖、葉いづれも刺がある。その莖は長さ一丈餘になり、中にはやはり孔があり絲があり、嫩いものは皮を剝して食へる。五六月に紫花を生じ、花は開いて日に向ふ。その結ぶ苞は外に青刺があつて、蝟刺、及び栗毬の形のやうだ。花は苞頂にあつて、やはり雞喙、及び蝟喙のやうだ。剝開すると內に斑駁の軟肉があつて子を裹み、子は纍纍として珠璣のやうだ。殼內の白米は魚目のやうな狀態である。秋深くして老いたとき、澤農は廣く取り集めて爛らして芡子を取り、囷石ほど多量に貯藏して凶作の際の備とする。その根は形狀が三稜のやうで、煮て食ふと芋のやうである。

〔芡〕

——雞頭——

修治 詵曰く、凡そこれを用ゐるには、蒸熟し、烈日に曬し、裂いて仁を取

る、また舂いて粉を取つて用ゐるもよし。

時珍曰く、新しきものを煮て食ふがよし。精を澀する藥に入れるには、殼のまま用ゐるもよし。按ずるに、陳彥和の可日記に『芡實一斗を防風四兩の煎湯で浸して用ゐる。かくすれば久しきを經ても壞れない』とある。

［氣　味］【甘し、平、濇にして毒なし】弘景曰く、小兒が多食すると成長しなくなる。詵曰く、生で食へば多く風冷の氣を動ずる。宗奭曰く、食することが多ければ脾、胃を益せず、兼て消化し難い。

［主　治］【濕痺の腰、脊、膝痛。中を補し、暴疾を除き、精氣を益し、志を强くし、耳目を聰明ならしめる。久しく服すれば身を輕くし、饑えず、老に耐へ、神仙となる】（本經）【胃を開き、氣を助ける】（日華）【渇を止め、腎を益し、小便不禁、遺精白濁、帶下を治す】（時珍）

［發　明］弘景曰く、仙方では、これを取つて蓮實と合せて餌ふ。甚だ人を益する。

恭曰く、粉にして食へば人を益すること蔆に勝る。

頌曰く、その實、及び中の子を取つて擣き爛らし、暴乾して再び擣き篩つて末にし、金櫻子煎を熬つて和して丸にして服す。下を補し、人を益するといふ。これを水陸丹といふ。

時珍曰く、按ずるに、孫升の談圃に『芡はもと人に益がない。而るに俗にこれを水流黃といふは何故かといへば、蓋し一般に芡を食ふには、必ず咀嚼して終日囁囁としてゐるので、芡は味甘く、平腴であつて膩せず、食ふ人は能く華液をして流通して轉じて相灌漑せしめる。その功が乳石に勝るのだ』とある。淮南子には『貍頭は癙を癒し、雞頭は瘻を已す』とあり、註者は『卽ち芡實なり』といつてある。

【附方】 舊一、新三。『雞頭粥』精氣を益し、志意を強くし、耳目を利す。雞頭實三合を煮熟して殼を去り、粳米一合で粥に煮て日日に空心に食ふ(經驗)『玉鎖丹』精氣虛滑を治す。芡實、蓮蘂を用ゐる。方は藕節の條下に記載してある。『四精丸』思慮、色慾の過度で心氣を損傷した小便數、遺精を治す。秋石、白茯苓、芡實、蓮肉各二兩を末にし、蒸棗で和して梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に鹽湯で送下する。(永類方)『分清丸』濁病を治す。芡實粉、白茯苓粉を黃蠟を蜜に化したもので

和して梧子大の丸にし、百丸づつを鹽湯で服す。(摘玄方)

雞頭菜　即ち　**蔆菜**　芡の莖である。［氣味］【鹹く甘し、平にして毒なし】

［主治］【煩渇を止め、虚熱を除く。生、熟いづれも宜し】(時珍)

根　［氣味］莖に同じ。［主治］【小腹結氣痛にはこれを煮て食ふ】(士良)

［附方］新一。【偏墜氣塊】雞頭根を切片し、煮熟して鹽醋で食ふ。(法天生意)

烏芋（別錄中品）

和名　おほくろぐわゐ
學名　Eleocharis plantaginea, R. Br. var. tuberosa, Makino.
科名　かやつりぐさ科（莎草科）

［釋名］**鳧茈**　音は疵(シ)である。**鳧茨**　音は瓷(ジ)である。**葧臍**(衍義)　**黑三稜**(博濟方)　**芍**　音は曉(キヨウ)である。**地栗**(鄭樵通志)　時珍曰く、烏芋は、その根が芋のやうで色が烏く、鳧が喜んで食ふ。故に爾雅に鳧茈と名けたのだ。後にそれが訛つて鳧茨となり、また訛つて葧臍となつたのである。蓋し切韻では鳧、葧は同一字母で音が相近い。三稜、地栗はいづれも形が似てゐるからだ。

瑞曰く、小なるを鳧茈と名け、大なるを地栗と名ける。

【集解】頌曰く、烏芋は今の鳧茈である。苗は龍鬚に似て細く、色は正青である。根は指頭ほどの太さで、黒色で皮が厚く、毛がある。又、皮が薄く毛のない一種があるが、やはり同じもので、田舍では一般にいづれも食ふ。

宗奭曰く、皮が厚くして色黒く、肉は硬くして白きものを豬葧臍といひ、皮が薄く澤かにして色が淡紫であり、肉は軟かで脆いものを羊葧臍といふ。この二種類のものは藥の中には用ゐることが罕だが、凶作の歳には一般に多く採つて糧に充てる。

〔烏芋——葧薺〕

時珍曰く、鳧茈は淺水、田中に生じ、その苗は三四月に土を出て一莖直上し、枝、葉がなく、狀態が龍鬚のやうだ。肥田に栽培したものは粗ぼ葱、蒲に似て、高さ二三尺、その根に白蒻があり、秋後に顆を結び、大いさ山査、栗子ほどで、臍に聚毛があり、累累として下に生じて泥底に入る。野生のものは黒くして小さく、食ふと滓が多い。

種出のものは紫で大きく、食ふと毛が多い。呉地方ではこれを沃田に種ゑ、三月に種を下し、霜後に苗が枯れ、冬、春に掘り取る。果にし、生で食ひ、煮て食ふ、いづれも良し。

【正誤】別錄に曰く、烏芋、一名藉姑。二月に芋のやうな葉が生える。三月三日に根を採つて暴乾する。

弘景曰く、藉姑は水田中に生じ、葉に椏があり、狀態は澤瀉のやうで、正に芋には似てゐない。その根は黄で、芋に似て小さい。これは疑はしいものだ。烏いものに、根が極めて相似て、細かくして美であり、葉の形狀が莧草のやうなものがあつて、鳧茨と呼ぶ。恐らくこの物だらう。

恭曰く、烏芋、一名槎丫。一名茨菰。

時珍曰く、烏芋と慈姑とは元來二種のものであつて、慈姑は葉があり、その根は散生する。烏芋は莖があつて葉がなく、その根は下生する。氣味は同じくなく、主治もやはり異ふ。而るに別錄には、誤つて藉姑を烏芋とし、その葉は芋のやうだといつた。陶、蘇二氏は、鳧茨、慈姑の字の音が相近いために遂に混同して註記す

るに至つたのであるが、諸家の説明したところもこれに因つて明瞭でなくなつてゐる。此にその誤を正しく置く。

根 ［氣　味］「甘し、微寒、滑にして毒なし」詵曰く、性は冷である。豫め冷氣ある人は食つてはならぬ。人をして腹脹し氣滿せしめる。小兒が秋期にこれを多く食へば臍下が結痛する。

［主　治］「消渴、痺熱、中を溫め、氣を益す」（別錄）「丹石を下し、風毒を消し、胸中實熱の氣を除く。粉にして食ふがよし、耳目を明にし、黃疸を消す」（孟詵）「胃を開き、食を下す」（大明）「粉にして食へば、人の腸、胃を厚くし、饑えず。能く毒を解し、金石を服する人にこれが適する」（蘇頌）「五種の膈氣を療じ、宿食を消す。飯後にこれを食ふが宜し。誤つて銅物を呑みたるを治す」（汪機）「血痢、下血、血崩に主效があり、蠱毒を辟ける」（時珍）

［發　明］機曰く、烏芋は善く銅を毀つもので、銅錢と合せて嚼めば錢が化けるのでもその事實が判る。この物は堅を消し積を削るものだから、能く五種の膈疾を化して宿食を消し、誤つて銅を呑みたるを治するのである。

時珍曰く、按ずるに、王氏の博濟方の、五積の冷氣が攻心して變じて五膈諸病となりたるを治する金鎖丸中に、黑三棱を用うとして、註に『卽ち鳧茈の乾いたものだ』とある。これで見ると汪機が所謂、堅を消するの說は蓋し此に本づいたものだ。又、董炳の集驗方に『地栗を晒乾して末にし、白湯で二錢づつを服すれば、能く蠱毒を辟ける』とある。傳へ言ふところでは、下蠱の家にこの物のあることを知ると蠱を下されないともいふ。これはやはり前人未知の事柄だ。

附方　新五。『大便下血』葧臍の搗汁を大半鍾、好酒半鍾を空心に溫服する。三日で效が現れる。(神祕方)『下痢赤白』午の日の午の刻に完全な好き葧臍を取り、洗淨して拭ひ乾して損破せぬやうにし、瓶中に入れ好燒酒を入れて浸し、黃泥で密封して收貯し、患者のあつたとき、二箇を取つて細嚼し、空心にもと浸した酒で送下する。(唐瑤經驗方)『婦人の血崩』鳧茈を一歲に一箇を燒いて性を存して研末し、酒で服す。(李氏方)『小兒の口瘡』葧臍を燒いて性を存し、研末して摻る(楊起簡便方)『誤つて銅錢を呑みたるとき』生鳧茈の研汁を細細に呷ふ。自然に消化して水となる。(王璆百一選方)

慈姑（日華）

和名　くわゐ
學名　Sagittaria sagittifolia, L. var. sinensis, Makino.
科名　おもだか科（澤瀉科）

【校正】もとは烏芋の條下に混入してあつたが、本書には分離して記載し、同時に圖經外類の剪刀草を併せ入れた。

【釋名】**藉姑**（別錄）**水萍**（別錄）**河鳧茈**（圖經）**白地栗**（同上）苗を**剪刀草**と名ける。（圖經）**箭搭草**（救荒）**槎丫草**（蘇恭）**燕尾草**（大明）時珍曰く、慈姑は一根に毎歳十二子を生じ、慈姑の諸子を乳する如きものだからそれを名としたので、茨菰と書くは正しくない。河鳧茈、白地栗といふは、烏芋を鳧茈、地栗といふと區別するためである。剪刀、箭搭、槎丫、燕尾はいづれも葉の形の形容である。

【集解】別錄に曰く、藉姑は三月三日に根を採つて暴乾する。
弘景曰く、藉姑は水田中に生じ、葉に椏があり、形狀は澤瀉のやうで、その根は

黄で芋子に似て小さい。煮て喫へる。

○恭曰く、慈姑は水中に生じ、葉は鉀箭の鏃に似てゐる。澤瀉の類である。

○頌曰く、剪刀草は、江湖、及び汴洛の水に近き處、河溝、砂磧の中に生ずる。葉は剪刀のやうな形で、莖、幹は嫩い蒲に似てゐる。また三稜の苗のやうで、甚だ軟い。

〔慈　姑〕

その色は深青綠で、毎叢に十餘莖あり、内から一二莖が抽き出て上に枝が分れ、小さい白花を開き、四瓣で蕊は深黃色である。根は大なるは杏ほど、小なるは栗ほどで、色は白くして瑩滑である。五六七月に葉を採り、正二月に根を採る。卽ち慈姑である。煮熟すると味が甘甜なもので、世間ではこれを果子に作る。福州にある別の一種は少し異ひ、三月に花を開き、四季共に根を採る。功はやはり相似たものだ。

○○時珍曰く、慈姑は淺水中に生じ、一般にもやはり栽培する。三月に苗が生え、莖

は青く、中が空で、その外面には稜がある。葉は燕尾のやうで、前が尖つて後が岐(わか)れ、霜後に葉が枯れる。根は練結したもので、冬、及び春初に掘り、それを果にする。灰湯で煮熟して皮を去つて食へば麻澀せず、人の咽を刺戟しない。嫩莖(どんけい)もやはり煠(に)て食へるものだ。又、これから取つた汁は粉霜、雌黄を制し得る。又、山慈姑といふがあるが、名は同じだが實は異ふ。草部に記載してある。

根 〔氣味〕【苦く甘し、微寒にして毒なし】大明曰く、冷にして毒あり。多食すれば虚熱、及び腸風、痔漏、崩中、帶下、瘡癤(さうせつ)を發する。生姜(しやうきやう)と共に煮るが佳し。妊婦は食つてはならない。

詵曰く、吳地方では常にこれを食ふ。人をして脚氣、癱緩風(なんくわんふう)を發し、齒を損じ、顔色を失ひ、皮肉乾燥せしめる。卒(にはか)に食へば人をして乾嘔せしめる。

〔主治〕【百毒、産後の血悶で攻心して死せんとするもの、難産、胞衣不出には、擣汁一升を服す。又、石淋を下す】（大明）

葉 〔主治〕【諸惡瘡腫、小兒の遊瘤、丹毒には、擣爛らして塗る　直ちに消退して甚だ佳し】（蘇頌）【蛇蟲を治するには、擣爛らして封ずる】（大明）【蚌粉(はうふん)を調へて

瘙疿に塗る】(時珍)

附錄諸果　綱目二十一種　拾遺一種

時珍曰く、方冊記載の諸果は名品が甚だ多く、その性味、形狀を詳にし難いが、旣に果に列せられてある以上、養生に注意する人は心得ねばならぬことである。そこで略ぼ採錄附記して參考に俟つ。

津符子　時珍曰く、孫眞人千金方に『味苦し、平、滑なり。多食すれば人をして(一)口爽せしめ、五味が判らなくなる』とある。

必思荅　又曰く、忽必烈の飮膳正要に『味甘し、毒なし。中を調へ、氣を順にする。回回の田地に出る』とある。

甘劍子　又曰く、范成大桂海志に『形狀は巴欖子に似て、仁は肉に附き、白鹽がある。食つてはならぬ。人の病を發する。北方の地で海胡桃と呼ぶがこの物だ』とある。

楊搖子　又曰く、沈瑩臨海異物志に『閩越に生ずる。その子は樹皮中に生じ、そ

諸果多クハ未詳、就中黃皮果ハわんぴ學名ハ Clausena punctata, Rehd. et Wils(= C. Wampi, Oliv.)科名ハへんるうだ科(芸香科)デアル、靈牀上果子ハ先亡座上ノ祭果デアルト謂ハレル。

(一)爽ハタガフト訓ズ。口爽ハ味覺ノ錯亂スルノ意ナラン。

の體に脊があり、形の甚だ奇怪なものだが、味は甘くして奇なところがない。色は青黄、長さ四五寸のものだ』とある。

海梧子　又曰く、稽含南方草木狀に『林邑に出る。樹は梧桐に似て色白く、葉は青桐に似て、その子は大栗のやう、肥甘にして食へる』とある。

木竹子　又曰く、桂海志に『皮色、形狀は全く大枇杷に似て、肉の味は甘美である。秋、冬に實が熟する。廣西に出る』とある。

櫓罟子　又曰く、桂海志に『大いさは半升の盌ほどで、數十房が攢聚して毬を成し、毎房に縫があり、冬生じて青く、夏になると紅くなつて破れる。その瓣を食ふと微し甘い。廣西に出る』とある。

羅晃子　又曰く、桂海志に『形狀は橄欖のやうで、その皮が七層ある。廣西に出る』とあり、顧玠海槎錄に『橫州に產する九層皮果は、九層まで取つて見ると中に肉が見える。夏熟し、味は栗のやうだ』とある。

槎子　又曰く、徐表の南州記に『九眞、交趾に出る。樹に子が生り、桃實のやうで長さ一寸餘、二月花を開いて子を連著し、五月に熟して色が黃になる。鹽藏して

食へば味が酸くして梅に似てゐる』とある。

夫編子　又曰く、南州記に『樹は交趾の山谷に生じ、三月に花を開いて子を連著し、五六月に熟する。雞、魚、猪、鴨の羹中に入れると味が美である。やはり鹽藏し得る』とある。

白緣子　又曰く、劉欣期交州記に『交趾に出る。樹は高さ一丈餘、實は味甘美で胡桃のやうだ』とある。

繫彌子　又曰く、郭義恭廣志に『形狀は圓くして細く、赤くして軟棗のやうだ。その味は初は苦く後に甘く、食へるものだ』とある。

人面子　又曰く、草木狀に『南海に出る。樹は含桃に似て、子は桃實のやうで味がない。蜜で漬けて食へる。その核は正に人の顏のやうで面白いものだ』とあり、祝穆方輿勝覽に『廣中に出る。大いさは梅、李ほど、春花さき、夏實り、秋熟する。蜜煎にすれば甘酸にして食へる。その核は兩邊が人の顏に似て、口、目、鼻みな具つてゐる』とある。

黃皮果　又曰く、海槎錄に『廣西の横州に出る。形狀は楝子、及び小棗のやうで

味が酸い』とある。

四味果　又曰く、段成式酉陽雜俎に『祁連山に出る。木に生り、棗のやうで、剖くに竹刀を用ゐれば甘く、鐵刀では苦く、木刀では酸く、蘆刀では辛い。行旅中にこれを得れば能く饑渴を止める』とある。

千歲子　又曰く、草木狀に『交趾に出る。蔓生で、子は根下に在り、鬚が綠色で織つたやうに交加し、一苞に恒に二百餘顆あつて、皮殼は靑黃色だ。殼中に栗のやうな肉があつて、味も同じやうだ。乾すと殼と肉が相離れ、撼ると聲がある』とあり、桂海志に『形狀は靑黃の李に似て、味が甘い』とある。

侯騷子　又曰く、酉陽雜俎に『蔓生で、子は大いさ雞卵ほどある。既に甘く且つ冷なるもので、酒を消し、身を輕くする。王太僕が嘗て帝に獻じたことがある』とある。

酒杯藤子　又曰く、崔豹古今注に『西域に出る。藤は太さ臂ほど、花は堅硬で、それで酒を酌める。夾章映澈なもので、實の大いさは指ほど、味は豆蔻のやうだ。これを食へば酒を消する。張騫がその種を大宛から得て來たものだ』とある。

蕑――音は閒（カン）である――**子**　又曰く、賈思勰齊民要術に『藤生で、交趾、合浦に生ずる。樹木に緣つて正二月に花さき、四五月に熟し、梨ほどで雞冠のやうに赤く、核は魚鱗のやうだ。生で食ふ。味淡し』とある。

山棗　又曰く、寰宇志に『廣西の肇慶府に出る。葉は梅に、果は荔枝に似て、九月に熟し、食へる』とある。

隈支　又曰く、宋祁益州方物圖に『邛州の山谷中に生ずる。樹は高さ一丈餘、枝は長くして弱く、白花を開き、實は大いさ雀卵ほど、狀態は荔枝肉に似て、黃膚で甘い』とある。

靈牀上果子（拾遺）　藏器曰く、人の夜中に讝語するは、これを食へば止む。

果の毒あるもの（拾遺）

『凡そ果の未だ核を成さぬもの、これを食へば人をして癰癤、及び寒熱を發せしめる』

『凡そ果の地に落ちてその上を惡蟲の通り過ぎたもの、これを食へば人をして九

漏を患はしめる】
【凡そ果の雙仁のものは、毒があつて人を殺す】
【凡そ瓜の雙蔕のものは、毒があつて人を殺す。水に沈むものは人を殺す】
【凡そ果の突然異常のあるものは、根下に必ず毒蛇がゐるものだ。これを食へば人を殺す】

本草綱目果部第三十三卷　終

本草綱目木部

第三十四卷

本草綱目木部目錄第三十四卷

李時珍曰く、木なるものは植物五行の一であつて、性に山、谷、原、隰それぞれの適不適があり、肇は氣化に由つて爰に喬、條、苞、灌の形質を受け、根、葉、華、實に堅脆、美惡あつて各〻太極を具へ、色香、氣味に區があつて品類が辨別され、食物としては果、蔬に備へ、材料としては藥、器に充てられる。寒溫、毒良には直ちに考覈があるので、その物の名狀を多く識つて、ただ詩を讀むためにするといふに止らず、本草の知識を以て更に研究を擴大するならば、層一層人文の啓發ともなるであらう。そこで能ふ限り蒐獵し、綜合してこれを木部として取纏め、凡そ一百八十種を香、喬、灌、寓、苞、雜の六種に部類した。——舊來の本草では、木部の三品共に二百六十三種となつてゐるが、本書には二十五種を併入し、十四種を草部に入れ、二十九種を蔓草に入れ、三十一種を果部に入れ、三種を菜部に入れ、十六種を器用部に入れ、二種を蟲部に入れて、草部から二種を移し入れ、外類、有名未用から十一種を移し入れた。——

神農本草經四十四種　梁の陶弘景註。　名醫別錄二十三種　梁の陶弘景註。

唐本草二十二種　唐の蘇恭。　本草拾遺三十九種　唐の陳藏器。

海藥本草五種　唐の李珣。
蜀本草一種　蜀の韓保昇。
開寶本草十五種　宋の馬志。
嘉祐本草六種　宋の掌禹錫。
圖經本草一種　宋の蘇頌。
日華本草一種　宋人大明。
證類本草一種　宋の唐愼微。
本草補遺一種　元の朱震亨。
本草綱目二十一種　明の李時珍。

附註

魏李當之藥錄　吳普本草　宋雷斅炮炙　齊徐之才藥對　唐甄權藥性
孫思邈千金　唐孟詵食療　楊損之删繁　蕭炳四聲　南唐陳之良食性
宋陳承別說　寇宗奭衍義　金張元素珍珠囊　元李杲法象　王好古湯液
元吳瑞日用　明汪穎食物　汪機會編　周憲王救荒　王綸集要
寗原食鑑　陳嘉謨蒙筌

木の一　香木類三十五種

柏　本經　　松　別錄　　杉　別錄　丹桎木を附す。
桂　本經　　箘桂　本經　　天竺桂　海藥　　月桂　拾遺

木蘭 本經　辛夷 本經　沈香 別錄　蜜香 拾遺

丁香 開寶 即ち雞舌香。　檀香 別錄　降眞香 證類

楠 別錄　樟 拾遺　釣樟 別錄　烏藥 開寶 研藥を附す。

櫰香 綱目 即ち兜婁香。　必栗香 拾遺　楓香脂 唐本 即ち白膠香。

薰陸香 乳香 別錄　沒藥 開寶　騏驎竭 唐本 即ち血竭。

質汗 開寶　安息香 唐本　蘇合香 別錄　詹糖香 別錄 結殺を附す。

篤耨香 綱目 膽八香を附す。　龍腦香 唐本 元慈勒を附す。

樟腦 綱目　阿魏 唐本　蘆薈 開寶　胡桐淚 唐本

返魂香 海藥 兜木香を附す。

右附方　舊五十七　新一百九十八

木の一　香木類三十五種

柏（本經上品）

和名　このてがしは
學名　Thuja orientalis, L
科名　ひのき科（扁柏科）

釋名　**椈**　音は菊（キク）である。**側柏**　李時珍曰く、按ずるに、魏子才の六書精蘊に『萬木はみな陽に向ふが、柏は獨り西に指す。蓋し陰木にして貞德あるものだ。故に字は白に從ふので、白は西方である』とあり、陸佃の埤雅には『柏の西を指すは、猶ほ鍼の南を指すやうなものだ』とある。柏には數種あるが、藥に入れるにはただ葉が扁にして側生するもののみを取る。故に側柏といふ。

〔柏〕

寇宗奭曰く、予が陝西に在官中、高きに登つて柏の千萬株あるを望見したが、みな一一西に指してゐた。蓋しこの木は至つて堅く、霜雪を畏れず、木の正氣を得てゐることは他の木の及ばぬところだ。それ故に金の正氣の所制を受けて一一西を指すのである

【集解】別錄に曰く、柏實は太山の山谷に生ずる。柏葉が尤も良し。四時各〻その方面に依つて採つて陰乾する。

陶弘景曰く、處處にあるが、柏は太山のものを佳しとしたわけであらう。いづれも塚墓上のものを取るを忌む。その葉は秋、夏に採つたものを良しとする。

蘇恭曰く、今は太山では一向に子を采らない。ただ陝州、宜州に產するものを勝れたものとする。八月に採る。

蘇頌曰く、柏實は乾州のものを最とする。三月に花を開き、九月に子を結ぶ。成熟したものを採取して蒸し曝し、舂礧して仁を取つて用ゐる。その葉は側柏と名け、密州に產するものが尤も佳し。他の柏と相類するものではあるが、その葉はみな側向して生えるもので、功效には殊に別がある。古柏葉が尤も奇なるもので、益州の

諸葛孔明の廟中にある大柏木は、傳說に蜀の時代に植ゑたものだといふが、それで地方人は多く採つて藥としてゐる。その味は甘香で普通の柏と異ふ。

雷斅曰く、柏葉には、花柏葉、叢柏葉、及び有子圓葉があつて、その有子圓葉は、大片の雲母のやうに片を成し、葉がみな側ち、葉上に微に赤毛がある。これを藥に入れて用うべきものである。花柏葉は、その樹が濃葉で朶を成し、子がない。叢柏葉は、その樹が綠色である。いづれも藥に入れない。

陳承曰く、陶隱居の說に、柏は塚墓上のものを忌むといつたが、現に乾州のものはみな乾陵に產するもので、他の地にはいづれも大なるものがない。但だその州土の適する地方のものを取るのであつて、子實の氣味が豐美であればよいのである。右の柏は他の地のものと異り、木の文理が大なるもの多く、菩薩、雲氣、人物、鳥獸などの狀態になつてゐて、はつきり觀えるやうなものだ。賊が徑一尺の一株を盜んで萬錢を得たといふことである。その子の實せるものを貴しとすべきものである。

時珍曰く、史記に『松柏は百木の長たり』といつてある。その樹は直く聳え、その皮は薄く、その肌は膩、その花は細瑣で、その實は小鈴のやうな形狀の毬を成し、

霜後に四裂して中に大いさ麥粒ほどの數子があつて、芬香愛すべきものだ。葉が柏で身の松なるものは檜である。その葉が尖つて硬いものをばまた栝ともいひ、今は一般に圓柏と名けて側柏と區別してある。葉が松で身の柏なるものは樅である。松檜相半するものは檜柏である。峨眉山中にある葉が竹で身の柏なる一種のものをば竹柏といふ。

柏實【修治】斅曰く、凡そ使用するには、先づ酒で一夜浸し、明方に漉し出して曬乾し、黃精の自然汁を用ゐて日中に煎じ、緩火で膏に成るを度として煮る一回煎ずる每に柏子仁三兩について酒五兩を用ゐて浸す。

時珍曰く、この法は服食家で用ゐる方法であつて、普通使用するには、ただ蒸熟して曝烈し、舂き簸つて仁を取り、炒り研つて藥に入れる。

【氣味】〔甘し、平にして毒なし〕甄權曰く、甘く辛し。菊花、羊蹄草を畏れる。徐之才曰く、薯の項を見よ。

【主治】〔驚悸。氣を益し、風濕を除き、五臟を安ず。久しく服すれば人をして潤澤ならしめ、色を美くし、耳目を聰明ならしめ、飢ゑず、老いず、身を輕くし、

天年を延べる』(本經)『恍惚、虚損で吸吸たるもの、歴節、腰中重痛を療じ、血を益し、汗を止める』(別錄)『頭風、腰腎中の冷、膀胱の冷、濃宿水を治し、陽道を興し、壽を益し、百邪鬼魅、小兒の驚癇を去る』(甄權)『肝を潤す』(好古)『心氣を養ひ、腎燥を潤し、魂を安じ、魄を定め、智を益し、神を寧くする。燒瀝したものは頭髮を澤にし、疥癬を治す』(時珍)

【發明】王好古曰く、柏子仁は肝の經の氣分の藥であつて、又、腎を潤す。古方の十精丸にこれを用ゐてある。

時珍曰く、柏子仁は、性平にして寒ならず燥ならず、味は甘くして補し、辛くして能く潤し、その氣は淸香にして能く心、腎に透り、脾、胃を益す。蓋し仙家の上品の藥である。滋養の劑としてこれを用ゐるはもつともなことだ。列仙傳に『赤松子は柏實を食ひ、歯が落ちて更に生え、歩行しては奔馬に及んだ』とあるが、諒に虚語でない。

【附方】舊二、新四。『柏實を服する法』八月に房を連ねて實を取り、暴して取收め、殼を去つて研末し、一日三回、二錢づつを溫酒で服す。渴すれば水を飲む。人

をして悦澤ならしめる。ある方では松子仁等分を加へ、松脂で和して丸にする。ある方では菊花等分を加へて蜜で丸にして服す。○奇效方では、柏子仁二斤を末にし、酒に浸して膏にし、棗肉三斤、白蜜、白朮末、地黄末各一斤を擣き勻ぜて彈子大の丸にし、一日三回、一丸づつを嚼んで服す。百日にして百病が癒える。久しく服すれば天年を延べ、神を壯にする。【老人の虛祕】柏子仁、松子仁、大麻仁等分を共に研り、溶した蜜蠟で梧子大の丸にし、少黄丹湯で食前に二三十丸を調へて服す。一日二服（寇宗奭）【腸風下血】柏子十四箇を搥き碎いて嚢に貯へ、好酒三盞で浸して八分に煎じて服す。立ろに止まる。（普濟方）【小兒の躽啼】驚癇、腹滿して大便の青白なるには、柏子仁末一錢を溫水で調へて服す。（聖惠方）【黃水濕瘡】眞柏油二兩、香油二兩を熬稠して搽るが神の如くである。（陸氏積德堂方）

柏葉【修治】斅曰く、凡そ用ゐるには、兩畔、幷に心枝を揀み去り了つてから、糯泔で七日浸し、酒を拌ぜて一伏時の間蒸し、毎一斤に黃精の自然汁十二兩を用ゐて浸し、焙じてまた浸しまた焙じ、汁が乾くまで繰返して用ゐる。

時珍曰く、これは服食家の修治法である。普通用ゐるには、或は生、或は炒り、

それぞれその本方に從ふ。

〔氣　味〕【苦し、微温にして毒なし】 權曰く、苦く辛し、性は濇る。酒と相宜し。頌曰く、性は寒なり。之才曰く、瓜子、牡蠣、桂が使となる。菊花、羊蹄、諸石、及び麪、麴を畏れ、砒、硝を伏す。弘景曰く、柏の葉、實は服餌に重ぜられるものだ。此に麪を惡むといつてあるが、一般にこれで酒を釀して差閊がないのだから、恐らく酒と米と相和するから單用と異ふのであらう。

〔主　治〕【吐血、衄血、痢血、崩中赤白。身を輕くし、氣を益し、人をして寒暑に耐へしめ、濕痺を去り、肌を生ずる】（別錄）【冷風の歷節疼痛を治し、尿血を止める】（甄權）【炙いて凍瘡を罨ふ。燒いて汁を取つて頭に塗れば髭髮を黑潤にする】（大明）【湯火傷に傅ければ痛を止め、瘢を滅する。これを服すれば蟲痢を療ずる。湯にして常服すれば五臟の蟲を殺し、人を益する】（蘇頌）

〔發　明〕 震亨曰く、柏は陰と金とに屬して善く守る。故にその葉を採るに月建の方に隨ふのは、その多く月令の氣を得るを取るのである。これは補陰の要藥であつて、その性は多く燥であり、久しくこれを得れば大いに脾土を益し、それでその

肺を滋くする。

時珍曰く、柏は性凋むに後れて久しきに耐へ、堅凝の質を禀けてゐる。乃ち多壽の木であつて、それゆゑに服食家の材料として用ゐられるのだ。道家ではこれを湯に點てて常に飲む。元旦にこれを酒に浸して邪を辟けるも、みなこの意味を取るところがあるのである。麝はこれを食つて體が香しく、毛女はこれを食つて體が輕くなつたといふはやはりその證驗である。毛女といふは秦王の宮人で、關東へ賊徒が襲來したとき、驚いて山に逃げ込んだが、食物がなく飢ゑてゐると、一老人があつて松、柏の葉を喫ふことを敎へてくれた。初には苦澀であつたが、久しくすると具合がよくなり、遂に一向に飢ゑぬやうになり、冬も寒くなく、夏も熱くないやうになつた。漢の成帝の時になつて、ある獵者が終南山である人間を見た。それは衣服がなく、身には黑毛が生えてゐて、坑を跳び、澗を越えて飛ぶが如くだつたので、密に包圍して捕獲した。それが毛女であつたといふ。秦の時からその時までは二百餘年を經てゐる。その事實は葛洪抱朴子の書中に記載されてある。

附方　舊十、新九。

【松、柏を服する法】孫眞人の枕中記に『常に三月、四月

に新生の松葉を長さ三四寸ばかり、幷に花蕋を採つて陰乾し。又、深山巖谷中でその年に新生した柏葉を長さ二三寸のものを採つて陰乾し、末にして白蜜で小豆大ほどの丸にし、常に日出前に香を燒いて東に向ひ、手に八十一丸を持つて酒で服す。これを服すること一年にして十年の命を延べ、二年服すれば二十年の命を延べる。肌肉を長ずるを目的とするには、大麻、巨勝を加へ、心力を壯健にする目的には、伏苓、人參を加へる。この藥は百病を除き、元氣を益し、五臟、六腑を滋し、耳、目を淸明にし、强壯にして衰老せず、天年を延べ、壽命を益し、神驗あるものだ。七月七日の露水を用ゐて丸にするが更に佳し。服する時には『神仙眞藥、體合自然、服藥入腹、天地同年』と咒文を唱へて念じ、唱へ畢つて藥を服する。諸雜肉、五辛を忌む。【神仙服餌】五月五日に五方の側柏葉を採つて三斤、遠志を心を去つて二斤、白伏苓を皮を去つて一斤を末にし、煉蜜で和して梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを仙靈脾酒で服す。いづれも忌むものなし。十分信ずるに足る人物以外に示してはならぬ。【中風不省】涎潮し、口禁し、言語が出ず、手、足が嚲曳するには、病を得た日にこの藥を進める。風退き氣和して廢人と成らざらしめる。柏葉

一握を枝を去り、葱白一握を根を連ねて研つて泥のやうにし、無灰酒一升で煎じて一二十沸して溫服する。もし酒を飮まぬものならば四五服に分けて他の藥で進める。（楊氏家藏方）【時氣瘴疫】社中の西南の柏樹の東南の枝を取り、暴乾して研末し、一日三四回、一錢づつを新水で調へて服す。（聖惠方）【霍亂轉筋】柏葉を搗き爛らして脚上を裹み、及び煎汁を淋ぐ。（聖惠方）【吐血の止まぬもの】張仲景柏葉湯――靑柏葉一把、乾薑二片、阿膠一挺を炙り、三味を水二升で一升に煮て滓を去り、別に馬通汁一升を絞つて合煎して一升を取り、綿で濾して一服に服し盡す。○聖惠方では、柏葉を用ゐ、米飮で二錢を服す。或は蜜で丸にし、或は水で煎じて服す。いづれも良し。【憂思、恚怒の嘔血】煩滿し、少氣し、胸中疼痛するには、柏葉を散にし、二方寸匕を米飮で調へて服す。（聖惠方）【衄血の止まぬもの】柏葉、榴花を研末して吹く（普濟方）【小便尿血】柏葉、黃連を焙じて研り、酒で三錢を服す。（濟急方）【大腸下血】四時の方向に隨つて側柏葉を採り、燒き研つて二錢づつを米飮で服す。王渙が舒州でこれを病んだとき、陳宜父大夫が方を傳へ、一服で癒えた。（百一選方）【酒毒下血】或は下痢。嫩柏葉を九蒸九晒して二兩、陳槐花を炒焦して一兩を末にし、

蜜で梧子大の丸にし、毎空心に溫酒で四十丸を服す。(普濟方)【蠱痢下血】男子、婦人、小兒が大腹で茶脚色の黑血、或は淀色のやうな膿血を下すには、柏葉を焙乾して末にし、黃連と共に煎じて汁にして服す。(圖經)【小兒の洞痢】柏葉の煮汁を茶に代へて飲む(經驗方)【月水不斷】側柏葉を炙き、芍藥と等分を用ゐ、三錢を水、酒各半で煎じて服す。○處女には、側柏葉、木賊を炒つて微し焦し、等分を末にし、二錢づつを米飲で服す。(聖濟總錄)【湯火燒灼】柏葉を生で擣き、塗つて縛つて置く。二三日で痛を止め、瘢を滅する。(本草圖經)【鼠瘻核痛】未だ膿を成さぬには、柏葉を擣いて塗り、熬鹽で熨す。氣が下れば消する。○(姚僧坦集驗方)【大風癘疾】眉髮の生ぜぬには、側柏葉を九蒸九晒して末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、毎服五丸乃至十丸を晝三服、夜一服する。百日にして生える(聖惠方)【頭髮の生ぜぬもの】側柏葉を陰乾して末にし、麻油で和して塗る(梅師方)【頭髮の黃赤】生柏葉末一升、猪膏一斤を和して彈子大の丸にし、布で一丸づつを裹んで泔汁中に納れ、化開して沐ふ。一个月で色が黑く潤澤になる。(聖惠方)

枝節 【主治】【煮汁で釀した酒は風痺、歷節風を去る。燒いて取つた湉油は癘

疥、及び蟲癩を療ずるに良し」(蘇恭)

【附方】 舊二、新一。「霍亂轉筋」煖物で脚を裹み、後に柏木片を湯に煮て淋ぐ。(經驗方)「齒䘌腫痛」柏枝を燒き熱して孔中を拄へる。須臾にして蟲が枝に緣つて出る。(聖惠)「惡瘡の蟲あるもの」久しく癒えぬには、柏枝節を燒いて油を瀝取して傅ける。三五回で癒えぬはない。また牛、馬の疥をも治す。(陳承本草別說)

脂 【主治】「身、面の疣目。松脂と共に研り勻ぜて塗る。數夕にして自失する」(聖惠)

根白皮 【氣味】「苦し、平にして毒なし」 【主治】「火灼爛瘡。毛髮を長ずる」(別錄)

【附方】 舊一。「熱油の灼傷」柏白皮を臘猪脂で煎じた油を瘡上に塗る。(肘後方)

松 (別錄上品)

和名 しなまつ
學名 Pinus sinensis, Benth.
科名 まつ科(松科)

【釋　名】時珍曰く、按ずるに、王安石の字說に『松、柏は百木の長たるもので、松は猶ほ公の如く、柏は猶ほ伯の如きものだ。故に松は公に從ひ、柏は白に從ふ』とある。

【集　解】別錄曰く、松脂は太山の山谷に生ずる。六月に採る。

頌曰く、松は處處にある。その葉には兩鬣、五鬣、七鬣があつて、歲久しければ實が繁くなる。中原にもあるけれども、塞上のものの佳好なるには及ばない。松脂は通明にして薰陸香の顆のやうなものを勝れたものとする。

〔松〕

宗奭曰く、松黃は全く蒲黃のやうだが、但だ味がやや淡い。松子は多く海東から來る。現に關右にもあるが、但だ細小にして味が薄い。

時珍曰く、松の樹は磥砢とし

て修く聳え、節が多く、その皮は粗厚で鱗形があり、その葉は凋むに後れる。二三月に蕤が抽き出て花を生じ、長さは四五寸になる。その花蕊を採つて松黄とする。結實の形狀は猪心のやうで鱗砌で疊成され、秋に老いると子が長じて鱗が裂ける。然して葉には二針、三針、五針の別があり、三針のものを栝子松といひ、五針のものを松子松といふ。その子は大いさ柏子ほどのものだ。ただ遼海、及び雲南ものだけは子の大いさ巴豆ほどあつて食へる。これを海松子といふ。果部に詳記してある。孫思邈は『松脂は衡山のものを良しとする。衡山の東五百里の滿谷に產するものは天下のものと同じくない』といひ、蘇軾は『鎭定の松脂も亦た良し』といつた。抱朴子には『凡そ老松皮內に自然に聚つた脂を第一とし、鑿り取つたもの、及び煮成したものに勝る。その根下の傷處にあつて日月を見ぬものをば陰脂といひ、尤も佳し。老松の餘氣は結して伏苓となる。千年の松脂は化して琥珀となる』とある。玉策記には『千年の松樹にして、四邊に枝が起ち、上杪が長からず、偃蓋の如くなるものは、その精が化して青牛、青羊、青犬、青人、伏龜となる。その壽はいづれも千歳である』とある。

松脂 ［別名］ 松膏（本經） 松肪（同） 松膠（綱目） 松香（同） 瀝靑

［修治］ 弘景曰く、松脂を采煉する法は、いづれも服食方中に在る。桑灰汁、或は酒で煮て軟に挼み、寒水中に納れること數十回にして、白く滑になれば用ゐられる。

頌曰く、凡そ松脂を用ゐるには、先づ錬治せねばならぬ。大釜を用ゐ、水を加へて甑を置き、白茅をその甑の底に藉き、又、黃砂をその茅の上に厚さ一寸ばかりに加へ、然る後に松脂をその上に布き、桑薪を用ゐて炊く、湯が減ずるときは頻りに熱水を添へ、松脂が盡く釜中に入るを候ち、取出して冷水に投ずると十分凝るものである。又、かやうに二回蒸すと、その物が玉のやうに白くなる。然る後に入れて用ゐる

［氣味］ ［苦く甘し、溫にして毒なし］ 權曰く、甘し、平なり。震亨曰く、松脂は陽、金に屬し、汞を伏す。

［主治］ ［癰疽惡瘡、頭瘍白禿、疥瘙、風氣。五臟を安じ、熱を除く。久しく服すれば身を輕くし、老いず、天年を延べる］（本經） ［胃中の伏熱、咽乾、消渴、風痺、

死肌を除く。これを錬つて白からしめる。その赤きものは惡痺に主效がある』(別錄)『煎じた膏は肌を生じ、痛を止め、膿を排し、風を抽く。諸瘡の膿血、瘻爛に貼り、牙孔を塞いで蟲を殺す』(甄權)『邪を除き、氣を下し、心、肺を潤し、耳聾を治す。古方に多くこれを辟穀に用ゐた』(大明)『筋骨を强くし、耳、目を利し、崩、帶を治す』(時珍)

【發明】弘景曰く、松、柏はいづれも脂潤があり、冬を凌いで凋まぬ。理として佳なるものであり、服食家は多く用ゐるのであるが、但だ一般には多く輕忽にされてゐる。

頌曰く、道士の服餌には、或は伏苓、松、柏實、菊花を合せて丸にする。また單服するもよし。

時珍曰く、松葉、松實は服餌の必要品となつてゐる。松節、松心は久しきに耐へて朽ちない。松(一)枝はまた樹の津液の精華であつて、土中に在つて朽ちない。流脂は日久しくして變じて琥珀となる。その物が穀を辟けて齡を延ぶるに用ゐられるはもつともなことである。葛洪抱朴子に『上黨の趙瞿は癩を病み、歷年にして死に

(一)枝ハ脂ノ誤。

垂とし、その家では棄てて山穴中に置いたので、瞿は一个月餘を怨み泣いた。ある仙人がそれを見て、哀れんで一嚢藥を與へ、百餘日に亙つて瞿に服ませると、その癘は完全に癒え、顏色は豐悦となり、肌膚は玉澤となつた。その後再びその仙人に遇つたので、瞿は活命の恩を謝し、その方を乞ひ求めたところ、仙人は「これは松脂であつて、山中にはこの物が多くある。其許もこれを錬服して長生不死を得るがよい」といつた。瞿はそこで家に歸つて長期に亘つて服用し、身體ますます輕く、氣力百倍し、危高に登り、險難を渉つて困れることなく、年百餘歳にして齒が墜ちず、髮が白くならず。夜臥して忽ち屋間に大いさ鏡ほどの光のあるが見え、久しくして一室盡く晝のやうに明になり、又、面上に一人の采女が現はれ、口、鼻の間に戲れる。後に抱犢山に入つて地仙となつた。當時世間でも瞿がこの脂を服したことを傳聞して、いづれも競つてこれを服し、車で運び驢に負はせ、これを積んで室に盈つるといふ有樣であつたが、一个月に過ぎずして未だ大益を覺えなかつたので、輙ちみな止めて了つた。志の堅からぬことかやうなものだ」とある。張杲の醫說に松丹を服するの法がある。

附方　舊七、新十七。【服食辟穀】千金方では、松脂十斤を用ゐ、桑薪灰汁一石で煮て五七沸し、冷水中に漉し出し、繰返して復た煮る。凡そ十回すると白くなる。それを細研して散にし、毎服一二錢を粥飲で調へて服す。一日三服、十兩以上まで服すれば饑ゑなくなる。饑ゑるやうになつたときは再服する。一年以後には夜中物を視て目が明になる。久しく服すれば天年を延べ、壽命を益す。○又ある方では、松脂を百錬し修治して篩ひ、蜜で和し、角中に納れて風、日に當てぬやうにし、毎日一團を一日に三服する。百日まで服すれば寒暑に耐へ、二百日にして五臟が補益し、五年にして西王母に見える。○伏虎禪師の服法。松脂十斤を用ゐ、五度錬つて苦味を盡さしめ、毎一斤に伏苓四兩を入れ、毎早朝水で一刀圭を服す。能く食物を攝らなくなり、また齢を延べ、身輕くして清爽になる。【筋を強くし、補益する】四聖不老丹——明松脂一斤を用ゐ、無灰酒で沙鍋中に入れて桑柴火で煮て、數沸して竹枝で攪せ、稠くなつたとき火を住め、水中に傾け入れて塊に結せしめ。復た酒で九遍煮て、その脂が玉のやうになり、苦くなく、澀くなくなつたとき止めて細末にし、十二兩を用ゐて、白伏苓末半斤、黄菊花末半斤、柏子仁を油を去り霜を取つて

半斤を入れ、錬蜜で梧子大の丸にし、毎空心に好酒で七十二丸を送下する。必ず吉日を擇んで修合せねばならず、婦人、雞、犬に見せてはならぬ。○松梅丸――松脂を長流水で桑柴で煮抜すること三回、再び桑灰滴汁で煮ること七回して扯抜し、更に好酒で煮ること二回、かくて長流水で煮ること二回して、色白く、苦くなくなるを度とし、毎一斤に九蒸した地黄末十兩、烏梅末六兩を入れ、錬蜜で梧子大の丸にし、毎服七十丸を空心に鹽米湯で服す。陽を健にし、中を補し、筋を強くし、肌を潤し、大いに能く人を益する（白飛霞方外奇方）【歯に揩つて牙を固くする】松脂――鎮定に産するものが佳し――を稀布に盛つて沸湯に入れ、煮て水面に浮ぶものを取つて冷水中に投じ、出ぬものは用ゐない。研末して白伏苓末を入れて和勻し、日日にそれで歯を揩つて口漱ぐ。嚥んでもよし。牙を固くし、顏を駐める（蘇東坡仇池筆記）【歴節諸風】あらゆる節の忍び難く酸痛するには、松脂三十斤を五十回錬り、錬酥三升で脂三升を和し、攪ぜて極めて稠くし、毎早朝空心に方寸匕を酒で服す。一日三服。數〻麫粥を食ふが佳し、血腥、生、冷、酢の物、果子を愼む。一百日で瘥える（外臺秘要）【肝虚で目に涙の出るもの】錬成した松脂一斤を米二斗、水七斗、麴二斗で釀

し、酒に造つて頻りに飲む。【婦人の白帶】松香五兩を酒二升で煮乾し、木臼で細に杵き、酒糊で梧子大の丸にし、毎服百丸を溫酒で服す。（摘玄方）【小兒の禿瘡】簡便方では、松香五錢、猪油一兩を熬つて搽る。一日數回。數日にして癒える。○衞生寶鑑では、瀝青二兩、黃蠟一兩半、銅綠一錢半、麻油一兩半を用ゐ、文武火で熬つて取收め、毎にこれを攤して貼る。神效がある。【小兒の緊唇】松脂を炙り化して貼る。（聖惠方）【風蟲牙痛】松上の脂を刮り、滾水で泡け化し、それで一回漱げば直ちに止む。已に試みて效驗を得てゐる（集簡方）【齲齒で孔あるもの】松脂で紝塞する。須臾にして蟲が脂に從て出る（梅師方）【久しく聾して聞えぬもの】錬松脂三兩、巴豆一兩を和し搗いて丸と成し、薄綿で裹んで塞ぐ。一日二回（梅師方）【一切の瘻瘡】錬成した松脂の末で塡滿する。一日に三四回（聖惠方）【一切の腫毒】松香八兩、銅青二錢、蓖麻仁五錢を共に搗いて膏にし、攤して貼るが甚だ妙である。（李樓奇方）【頻發する軟節】翠玉膏——通明なる瀝青八兩、銅綠二兩、麻油三錢、雄猪膽汁三箇を用ゐ、先づ瀝青を溶してから油、膽を下し、水中に傾け入れて扯拔して器に盛り、毎に緋帛に攤して貼る。再び換へる必要なし。【小金絲膏】一切の瘡瘍、

腫毒を治す。瀝靑、白膠香各二兩、乳香二錢、沒藥一兩、黃蠟三錢をまた香油三錢と共に熬り、滴下しても散らぬまでになつたとき、水中に傾け入れ千遍扯拔して取收め、毎に捻つて餠にして貼る。【疥癬濕瘡】松膠香を研細し、少量の輕粉を入れ、先づ油を瘡に塗つてからその上に末を糝る。一日にして乾く。頑固なるものも二三回で癒える。（劉涓子鬼遺方）【陰囊濕痒】潰れんとするには、板兒松香を末にし、紙で卷いて筒にし、一本の筒毎に花椒三粒を入れ、燈盞中に三晝夜浸し、取出して點火し、燒いて淋下する油を搽る。豫め米泔で囊を洗ふ。（簡便方）【金瘡出血】瀝靑末に少し生銅屑末を加へて糝る。立ろに癒える（唐瑤經驗方）【猪に嚙まれて瘡と成つたもの】松脂を錬つて餠にして貼る。（千金）【刺の肉中に入りたるもの】あらゆる手當を加へても癒えぬには、松脂の乳頭香のやうに流れ出たものを傅け、帛で裹む。三五日で根があつて出るものだ。痛まず、痒からず、覺えずして自ら平安を得る。（兵部手集）

松節 氣味 【苦し、溫にして毒なし】 主治 【百節の久風、風虛の脚痺疼痛】（別錄）【酒に釀せば脚弱、骨節風に主效がある】（弘景）【炒り焦して筋骨間の病

を治す。能く血中の濕を燥す」(震亨)【風蛀牙痛を治す。水で煎じて含漱し、或は灰に燒いて日日に揩る。效がある】(時珍)

【發　明】時珍曰く、松節は松の骨であつて、質堅く、氣勁く、久しくしてやはり朽ちない。故に筋骨間の風濕諸病にこれが適する。

【附　方】舊三、新四。【歷節風痛】四肢が解け脱けんとする如きには、松節酒——二十斤と酒五斗とを用ゐ、二十七日間浸し、毎服一合を一日五六服する(外臺)【轉筋、攣急】松節一兩を米ほどの大いさに剉み、乳香一錢と銀石器で慢火で炒り焦して一二分の性を存し、火毒を出して研末し、毎服一二錢を木瓜酒で調へて服す。一應筋病はみな治癒する。(孫用和祕寶方)【風熱牙病】聖惠方では、油松節を棗ほどの大いさの一塊を碎切し、胡椒七顆と燒酒に入れ、二三盞を用ゐて熱に乘じて飛過白礬少量を入れ、噙み漱ぐ。三五口で立ろに瘥える。○又、松節二兩、槐白皮、地骨皮各一兩を用ゐ、漿水で湯に煎じて熱漱し、冷えれば吐く。瘥えたならば止める。【反胃吐食】松節を酒で煎じて細飲する。(百一方)【陰毒腹痛】油松木七塊を炒り焦し、酒二鍾を沖して熱服する。(集簡方)【顚撲損傷】松節を酒で煎じて服す。(談埜翁方)

松脂　音は詣（ケイ）であつて、松枝を焼いて取つた液である。［主治］［瘡疥、及び馬、牛の瘡］（蘇恭）

松葉　［別名］**松毛**　［氣味］［苦し、温にして毒なし］［主治］［風濕瘡。毛髪を生じ、五臟を安じ、中を守り、饑ゑず、天年を延べる］（別錄）［細切し、水、及び麪を用ゐて飲服する。或は擣いて屑にし、丸にして服す。穀を斷ち、及び惡疾を治し得る］（弘景）［炙いて凍瘡、風瘡を罯するが佳し］（大明）［風痛、脚痺を去り、米蟲を殺す］（時珍）

［附方］　舊六、新三。

【松葉を服食する法】松葉を細切して更に研り、毎日食前に酒で二錢を調へて服す。また煮汁で粥を作つて食ふもよし。初め服するときはやや難いが、久しくすると自ら無造作になる。人をして老えざらしめ、身に綠毛を生じ、身を輕くし、氣を益す。久しく服して已まざれば穀を絶つて飢ゑず、渴せぬ（聖惠方）［天行溫疫］松葉を細切し、酒で方寸匕を服す。一日三服。能く五年の瘟を辟ける。（傷寒類要）［中風口喎］青松葉一斤を汁に搗き、淸酒一升に二晝夜浸し、一夜火に近づけ、初服半升から漸次に一升まで服す。頭面に汗が出て止む（千金方）

【三年の中風】松葉一斤を細切し、酒一斗で三升に煮取つて頓服する。汗が出て立ろに瘥える。(千金方)【歷節風痛】松葉を汁に搗いて一升を酒三升に七日浸し、一日三回、一合づつを服す。(千金方)【脚氣風痺】松葉酒——十二の風痺で步行不能なるを治し、更生散四劑を服し、及び種種の治療も奏效せぬものも、これを一劑服すれば能く步行するやうになり、遠年のものも二劑に過ぎぬ。松葉六十斤を細剉し、水四石で四斗九升に煮取り、米五斗で普通の酒のやうに釀し、別に松葉の煮汁に米、幷に饙飯を漬け、泥釀して頭を封じ、七日で封を發き、澄して飮んで醉を取る。この酒力で效を得たものが甚だ衆い。(千金方)【風牙腫痛】松葉一握、鹽一合、酒二升を煎じて漱ぐ。(聖惠方)【大風惡瘡】猪肉、松葉二斤、麻黃を節を去つて五兩を剉み、生絹袋に盛り、淸酒二斗に春、夏は五日、秋、冬は七日浸し、每日一小盞を溫服して常に醺醺たらしめ、效あるを度とする。(聖惠方)【陰囊濕痒】松毛の煎湯で頻りに洗ふ。(簡便方)

松花　別名　**松黃**　氣味　【甘し、溫にして毒なし】震亨曰く、多食すれば上焦の熱病を發する。主治　【心、肺を潤ほし、氣を益し、風を除き、血を

止める。また酒に釀すもよし」(時珍)

【發明】恭曰く、松花、卽ち松黃を拂ひ取つたもので、正に蒲黃に似てゐる。酒で服すれば身を輕からしめ、病を療すること皮、葉、及び脂よりも勝るものだ。頌曰く、花上の黃粉である。山人は時に及んで拂ひ取る。湯にし、點てるが甚だ佳し。但し久しく保存するに堪へぬものだから、遠方へ送ることは鮮い。時珍曰く、今は一般に黃を取收めて白沙糖を和し、印して餅膏にし、果餅に充てて食ふ。且つ久しく保存し難いものだ。恐らく身を輕くし病を療する功が、必ずしも脂、葉に勝るとはいへぬであらう。

【附方】舊一、新一。【頭旋腦腫】三月に松花、竝に薹五六寸で鼠尾のやうなものを取收め、蒸し切つて一升を生絹囊に入れ、三升の酒中に五日浸し、空心に五合を暖飮する(普濟方)【產後の壯熱】頭痛し、頰赤く、口乾き、脣焦れ、煩渴し、昏悶するには、松花、蒲黃、川芎、當歸、石膏等分を末にし、毎服二錢、水一合、紅花二捻を共に七分に煎じて細呷する。(本草衍義)

根白皮 【氣味】【苦し、溫にして毒なし】(別

錄）〔五勞を補し、氣を益す〕（大明）

木皮　別名　赤龍皮　主治　〔癰疽の瘡口の合はぬもの。肌を生じ、血を止め、白禿、杖瘡、湯火瘡を治す〕（時珍）

附方　新四。〔腸風下血〕松木皮を粗皮を去つて裏の白きものを取り、切り晒し、焙じ研つて末にし、毎服一錢を臘茶湯で服す。（楊氏家藏方）〔三十年の痢〕赤松上の蒼皮一斗を末にし、麪粥に和して一升を服す。一日三服。一斗に過ぎずして人を救ふ。（聖惠方）〔金瘡、杖瘡〕赤龍鱗、卽ち古松皮を煆き、性を存して研末して搽る。最も痛を止める。（永類鈐方）〔小兒の頭瘡〕浸淫するものを胎風瘡と名ける。古松上に自らある赤厚皮に豆豉少量を入れ、瓦上で炒つて皮を存して研末し、輕粉、香油を入れて調へて塗る。（經驗良方）

松實　果部に記載してある。

艾納　草部苔類の桑花の條下に記載してある。

松蕈　菜部香蕈の條下に記載してる。

杉（別錄中品）

和名 さん
學名 未詳
科名 すぎ科（杉科）

【釋名】 **煔** 音は杉（サン）である。**沙木**（綱目） **檆木** 音は敬（ケイ）である。

【集解】 頌曰く、杉材は、舊本には產出する土地を指定してないが、今は南方の地の深山に多くある。木は松に類して徑直であり、葉は枝に附いて生え、刺針のやうだ。郭璞註爾雅に『煔は松に似て、江南に生ずる。船材、及び棺材となる。柱に作つて埋めれば腐ちぬ』とある。

又、人家で常にこれを用ゐて桶板にするが、甚だ水に耐へる。

宗奭曰く、杉は幹が端直で、大體が松のやうで冬凋まぬが、但だ葉が潤くして枝を成す。今は處處にある。藥に入れるには必ず油杉、

〔杉〕

及び臭きものを用るが良し。

時珍曰く、杉木は、葉は硬くして微し扁く、刺のやうだ。結實は楓實のやうである。江南地方では驚蟄の前後に枝を取つて挿種する。倭國に產するものをば倭木といふ。いづれも蜀、黔諸峒に產したものの尤も良きに及ばない。その木には赤、白の二種あつて、赤杉は實して油が多く、白杉は虛して乾燥してゐる。雉のやうな斑紋あるものをば野雞斑といひ、これで棺に作つたものが尤も貴價である。その木は白蟻が生ぜず、燒灰は最も火を發する藥である。

杉材　【氣味】【辛し、微溫にして毒なし】【主治】【漆瘡。湯に煮て洗へば瘥えぬものなし】(別錄)【水で煮て脚氣腫滿を浸捋する。これを服すれば心腹脹痛を治し、惡氣を去る】(蘇恭)【風毒、奔豚、霍亂、上氣を治す。いづれも湯に煎じて服す】(大明)

【發明】　震亨曰く、杉屑は金に屬して火を有する。その節の煮汁で脚氣腫痛を浸捋するが尤も效がある。

頌曰く、唐の柳柳州の纂救三死方に『元和十二年二月、脚氣を起して夜半に痞絕

し、脇に塊があり、大きくして石のやうで、且つ死困して人事不省となり、搐搦し、上視すること三月に及び、家人は號哭するのであつたが、榮陽の鄭洵美から杉木湯の方を傳へて服すると、半食頃ほどにして大いに排便すること三行、氣が通じ、塊は散じて了つた。方は、杉木節一大升、橘葉を切つて一大升――葉のないときは皮を代用する――大腹檳榔七箇を子を連ねて碎き、童尿三大升を用ゐ、共に煮て一大升半を二服に分ける。若し一服して快を得れば後服を停める。これは死病であつたが、會ま敎へる人があつたために死なぬことを得たのである。恐らく世間に不幸にしてこの病に罹るものもあるだらうから傳へて置く』とある。

【附方】新四。【肺壅痰滯】上焦が利せず、卒然欬嗽するには、杉木屑一兩、皂角を皮を去り酥で炙いて三兩を末にし、蜜で梧子大の丸にし、十丸づつを米飲で服す。一日四服。(聖惠方)【小兒の陰腫】赤痛し、日夜啼叫し、數日にして皮が退いて癒えても復を發るには、老杉木を灰に燒いて膩粉を入れ、淸油で調へて傅けるが效がある。(危氏得效方)【肺壅失音】杉木を灰に燒いて盌に入れ、小盌で覆ふて湯で淋下し、盌を去つて水を飲む。癒えぬときは再び作つて飲む。音が出たならば止め

る。(集簡方)【臁瘡黑爛】多年のものには、老杉木節を灰に燒き、麻油で調へ、箬葉を隔ててこれを(一)隔て、絹帛で包定する。數貼にして癒える。(救急方)

皮　[主治]【金瘡出血、及び陽火傷灼には、老樹皮を取り、燒いて性を存して研つて傅ける。或は雞子淸を入れて調へて傅ける。一二日にして癒える】(時珍)

葉　[主治]【風蟲牙痛には、芎藭、細辛と共に酒で煎じて含漱する】(時珍)

子　[主治]【疝氣痛には、一歲に一粒を燒いて研り、酒で服す】(時珍)

杉菌　菜部に記載してある。

[附錄](二)**丹桎木皮**　桎の音は直(チ)である。藏器曰く、江南の深山に生ずる。杉木皮に似たものだ。主治は傷風。一握を取り、土を去つて打ち碎き、煎じて糖のやうにして日日に塗る。

桂(別錄上品)

(一) 原文隔之トアレドモ貼之ノ誤ナラン。

(二) 丹桎木皮
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

牡桂（本經上品）

和名　ほんにくけい（新稱）
學名　Cinnamomum Cassia, Bl.
科名　くすのき科（樟科）

釋名　**梫**　音は寢（シン）である。時珍曰く、按ずるに、范成大の桂海志に『凡そ木の葉の心はいづれも一縱理であるが、獨り桂だけは兩道があつて圭（けい）の形のやうだ。故に文字は圭に從ふ』とある。陸佃の埤雅には『桂は圭のやうなもので、百藥を宣傳してこれが先聘、通使をなすこと、圭を執（と）るの使の如くである』とある。爾雅にこれを梫といつたのは、能く他の木を梫害するからであつて、呂氏春秋に『桂枝の下に雜木なし』とある。雷公炮炙論に『桂を木の根に釘すればその木卽ち死す』とあるはそれであ

〔桂〕

る。桂とは卽ち牡桂の厚くして辛烈なるもの、牡桂とは卽ち桂の薄くして味淡きもののことである。別錄に重出してあるは當らない。本書には倂せて一條に記載し、目を下に分けた。

集解　別錄に曰く、桂は桂陽に生ずる。牡桂は南海の山谷に生ずる。二月、八月、十月に皮を採つて陰乾する。

弘景曰く、南海とは卽ち廣州を指したものだ。神農本經にはただ牡桂、菌桂だけがある。俗に用ゐる牡桂は扁廣にして殊に薄く、皮が黃で脂肉が甚だ少く、氣は木蘭のやうで味はやはり桂に類する。これは別の樹なるや桂の老宿なるものなるや判らない。菌桂は正圓にして竹の如く三重なるものが良し。俗中には見られない。ただ嫩枝を破つて圓く卷いたものを用ゐてゐるが、それは眞の菌桂ではない。いづれも仔細に硏究を要する。現に俗間にはまた半ば卷いた多脂なるものを單に名けて桂といひ、最も多く藥に入れてゐる。これが桂にある三種である。この桂は廣州に出るものが好く、交州、桂州のものも形段は小さいが脂肉が多くしてやはり好し。湘州、始興、桂陽縣のものは卽ち小桂であつて、廣州のものに及ばない。經に『桂葉

は柏葉の如く、澤黒にして皮黄に心赤し』とある。齊の武帝の時、湘州から送つて來た樹を芳林苑中に植ゑたことがあつた。現に東山に桂があり、皮氣は粗ぼ相類して、葉が異ふが、やはり能く冬を淩ぐ。恐らくこれが牡桂であらう。一般に多く丹桂と呼ぶは、正に皮の赤きを謂つたものだ。北方ではこれ重んじ、毎食に必ずこれを用ゐる。蓋し禮にいふ『薑、桂、以て芬芳を爲す』のそれである。

〇恭曰く、桂にはただ二種あるだけである。陶氏は經を引いて『柏葉に似たり』といつたが、この言は何處から出たものか判らない。又、別錄に於て桂の條を剰出したが、深い誤であつて、單に桂と名けるものは卽ち牡桂のことだ。乃ち爾雅に所謂『梫、木桂』とあるそのもので、葉は長さ一尺ばかり、花、子はいづれも菌桂と同じく、大、小枝皮倶に牡桂と名ける。但だ大枝皮にして肉理が粗く虛し、木のやうで肉少く、味薄きものを名けて木桂といひ、また大桂といふのであつて、小嫩枝皮の肉多くして半ば卷き、中が必ず皺起して、その味の辛美なるに及ばない。これは一名肉桂、また桂枝と名け、一名桂心といひ、融州、桂州、交州に產するものが甚だ良し。菌桂といふそのものは、葉は柿葉に似て、中に縱文が三道あり、表裏に

毛なく光澤で、肌理が緊薄で竹のやうだ。大枝、小枝の皮倶に筒になつてゐて、その大枝は肉なく、老皮が堅版で重ねて卷けず、味が極めて淡薄であつて、藥用には入れない。小枝は薄くして卷けば二三重に卷けるもので、これが良し。或は筒桂と名ける。陶氏がいふ小桂とはこれである。今はただ韶州だけに產する。

保昇曰く、桂には三種あつて、菌桂といふは、葉が柿葉に似て、尖つて狹く光淨である。花は白く蕋は黃で四月に開き、五月に實を結ぶ。樹皮は青黃で薄く、筒のやうに卷ける。また筒桂と名ける。その厚硬にして味薄きものをば版桂と名け、藥用には入れない。牡桂といふは、葉は枇杷葉に似て狹くして長く、菌桂の葉より一二倍あり、その嫩枝皮は半卷き、多く紫にして肉中が皺起し、肌理が虛軟である。これを桂枝といひ、また肉桂と名け、上皮を削り去つたものを名けて桂心といふ。その厚きものを名けて木桂といひ、藥中にはこれを以て善しとする。陶氏は半卷にして多脂なるを桂とするといひ、又、仙經を引いて『葉は柏葉に似たり』といつた。これを見ると桂に三種あることは明である。陶氏は梁の武帝の時の人ではあるが、實は宋の孝武帝の建元三年に生れ、齊に歷仕して諸王の侍讀となつた人で、曾て芳

林苑に植ゑた樹を見てゐるのだ。蘇恭はただ二種あることを知り、陶氏を指して誤だとしたが、如何にも甚しい臆斷である。

藏器曰く、菌桂、牡桂、桂心の三種は同じく一物である。桂林、桂嶺なる地名は桂に因で名稱が生じたもので、現在でもこの物の生ずるはこの郡の地域以外に出でず、嶺より以南、海に際まる地まで盡く桂樹があるが、ただ柳、象州が最も多く。味は既に多く烈であり、皮はまた厚く堅く、厚きものは必ず嫩く、薄いものは必ず老いてゐる。採る者は老いた薄きものを一種とし、嫩き厚きものを一種として取扱ふが、嫩いものは既に辛烈にして兼てまた筒卷し、老いたものは必ず味が淡くして自然に版薄であつて、薄きものが卽ち牡桂、卷けるものが卽ち菌桂である。桂心は卽ち皮上の甲錯を削

〔桂　　牡〕
——しな子——

除して、その理に近くして味ある部分を取つたものだ。

承曰く、諸家の所說は幾ど考ふべからざるものだが、今廣、交の商人の販賣しつつあるもの、及び醫家で用ゐられてゐるものは、ただ陳藏器の一說だけが最も事實に近い。

頌曰く、爾雅にはただ『梫、木桂』と一種をいつただけだが、本草には桂、及び牡桂、菌桂の三種を記載してある。今では嶺表から產出するところを見ると、筒桂、肉桂、桂心、官桂、板桂などの名があるが、醫家が用ゐては區別をつけることが罕である。舊說に菌桂は正圓にして竹の如く、二三重のものがあるといふは、則ち今の筒桂である。牡桂は皮薄く、色黃にして脂肉が少いといふは、則ち今の官桂である。桂は半卷で脂の多いものだといふは、則ち今の板桂である。而し現に賓、宜、韶、欽諸州から提出した圖を觀るに、種類はやはりそれぞれ不同だが、しかし總てこれを桂といつてあつて、一向に別名がない。舊註を參考するに、菌桂は葉が柿に似て中に三道の文があり、肌理堅薄にして竹の如く、大小みな筒を成すといつてあるは、今の賓州產のものと相類する。牡桂は葉が菌桂より狹くして長さ數倍し、そ

の嫩枝皮は半卷で紫が多いといふは、今の宜州、韶州產のものと相類する。彼の地の土人はその皮を木蘭皮といひ、肉を桂心といひ、これにまた黃、紫の二種あつて益〻驗とすべきである。桂は葉が柏葉のやうで澤かに、皮が黃で心が赤いといふは、今の欽州產のものと對比され、葉密にして細く、恐らくその類のものであらうと思はれるが、但し柏葉の形を形さぬ點が異ふだけだ。蘇恭は單桂、牡桂を一物としたが、やはり當てにならぬ。その木は倶に高さ三四丈、多く深山巒洞中に生じ、人家の園圃にも種ゑるものがあるが、嶺北へ移植すると氣味が殊に少く、辛辣で藥に入れるに堪へない。三月、四月に花を生じて全く茱萸に類し、九月に實を結ぶ。今一般に多く花果を裝綴して宴席の裝飾にする。その葉は甚だ香く、これを用ゐて作つた飲は尤佳味である。二月、八月に皮を採り、九月に花を採り、いづれも陰乾する。火に近けてはならぬ。

時珍曰く、桂には數種あつて、今參考し調査して見るに、牡桂は、葉は長く枇杷葉のやうで、堅硬で毛、及び鋸齒があり、その花は色白く、その皮は脂が多い。菌桂は、葉は柿葉のやうで尖つて狹く、光淨で、三縱文があつて鋸齒がなく、その花

は黄なるがあり白きがあり、その皮は薄くして卷く。現に商人の販賣するものはみなこの二桂である。但し卷くものを菌桂とし、半卷のもの、及び板なるものを牡桂とすることは即ち自ら明白であつて、蘇恭の所說が正に合致し、醫家で現に用ゐられてゐるものである。陳藏器、陳承が菌、牡を一物なりと斷じたのは非である。陶弘景がまた單字の桂を葉が柏に似たものとしたのもまた非である。柏葉の桂は乃ち服食家が取扱ふもので、此にいふ病を治する桂のことではない。蘇頌の所說はやや明だが、やはり欽州のものを以て單字の桂としたのは當らない。按ずるに、尸子に『春花さき、秋英するを桂といふ』とあり、嵇含の南方草木狀に『桂は合浦、交趾に生じ、必ず高山の顚に生え、冬、夏常に青く、その類は自ら林をなし、更に雜樹がない。三種あつて、皮の赤きものを丹桂といひ、葉の柿に似たるを菌桂といひ、葉の枇杷に似たるを牡桂といふ』とあり、その說甚だ明であつて、諸家の辯を破るに足る。又、巖桂といふがあるが、これは菌桂の類である。菌桂の條下に詳記する。韓衆の采藥詩に『闇河之桂、實大如棗、得而食之、後天而老』とあるが、これもまた一種のものである。闇河といふは所在が明でない。

【正　誤】　好古曰く、寇氏の衍義に『官桂とは何に緣つて名を立てたものか判らぬ』とあるが、予が考へるに、圖經に『今觀賓宜諸州出者佳』とある。世人が觀の字の字劃が多いところから、書寫の際に官と書いたのだ。

時珍曰く、これは誤である。圖經に『今觀』とあるは『今視る』の意味であつて、嶺南に觀州なる州名はない。官桂といつたのは、上等にして官に供する桂のことだ。

桂（別錄）　時珍曰く、これは卽ち肉桂であつて、厚くして辛烈である。粗皮を去つて用ゐる。その內外皮を去つたものが卽ち桂心である。

【氣　味】【甘く辛し、大熱にして小毒あり】權曰く、桂心は苦く辛し、毒なし。

元素曰く、肉桂は、氣は熱、味は大辛にして純陽である。

杲曰く、桂は辛し、熱にして毒あり。陽中の陽であつて浮である。氣の薄きものは桂枝である。氣の厚きものは桂肉である。氣が薄ければ發泄するもので、桂枝は上行して表を發する。氣が厚ければ熱を發するもので、桂肉は下行して腎を補する。これは天地の上に親しみ下に親しむの道である。

好古曰く、桂枝は足の太陽の經に入り、桂心は手の少陰の經の血分に入り、桂肉

は足の少陰、太陰の經の血分に入る。細く薄きものは枝であり嫩であり、厚脂のものは肉であり老であり、その皮と裏とを去つてその中に當るものは桂心である。別錄に、小毒ありといひ、又、久しく服すれば神仙となり、老いずとあるが、小毒はあるにしてもやはり類に從つて化するもので、黃芩、黃連と共に使とすれば小毒がその働をなせるものでない。烏頭、附子と共に使とするはその熱性を取るだけである。巴豆、硇砂、乾漆、穿山甲、水蛭等と共に用ゐるならば、小毒は化して大毒となる。人參、麥門冬、甘草と共に用ゐるならば、中を調へ、氣を益す。そこで久服されるのである。

之才曰く、桂は人參、甘草、麥門冬、大黃、黃芩と配合すれば中を調へ、氣を益す。柴胡、紫石英、乾地黃と配合すれば吐逆を療ずる。生葱、石脂を忌む。

【主治】〔肝、肺の氣を利す。心腹寒熱、冷痰、霍亂、轉筋、頭痛、腰痛。汗を出し、煩を止め、唾を止める。欬嗽、鼻齆。胎を墮す。中を溫め、筋骨を堅くし、血脈を通じ、不足を理疏し、百藥を宣導し、畏るところのものなし。久しく服すれば神仙となり、老いず〕（別錄）〔下焦不足を補し、沈寒痼冷の病を治し、滲泄し、渴

を止め、營衞中の風寒を去る。表虛自汗には春、夏は禁藥である。秋、冬の下部腹痛はこれ以外では能く止め得ない』（元素）『命門不足を補し、火を益し、陰を消す』（好古）『寒痺風瘖、陰盛失血、瀉痢、驚癇を治す』（時珍）

桂心（藥性論）斅曰く、紫色にして厚きものを用ゐ、上の粗皮、幷に肉の薄皮を去り、心中の味辛きものを取つて用ゐる。中國にはまた桂草といふがあり、それで丹陽木皮を煮て桂心の僞物に充てる。

時珍曰く、按ずるに、西陽雜俎に『丹陽の山中に山桂といふがある。葉は麻のやうで細黄の花を開く』とある。これが卽ち雷氏の所謂丹陽木皮である。

【氣味】『苦く辛し、毒なし』前の桂の項に詳記してある。【主治】『九種の心痛、腹內の冷氣痛で忍び難きもの、欬逆、結氣、壅痺、脚痺不仁。下痢を止め、三蟲を殺し、鼻中の息肉を治し、血を破り、月閉、胞衣不下を通利する』（甄權）『一切の風氣を治し、五勞七傷を補し、九竅を通じ、關節を利し、精を益し、目を明にし、腰膝を暖め、風痺、骨節攣縮を治し、筋骨を續ぎ、肌肉を生じ、瘀血を消し、痃癖、癥瘕を破り、草木の毒を殺す』（大明）『風僻失音、喉痺、陽虛失血、內托癰疽、

痘瘡を治し、能く血を引き、汗を化し、膿を化し、蛇蝮の毒を解す」(時珍)

牡桂(本經)　時珍曰く、これは卽ち木桂であつて、薄くして味淡い。粗皮を去つて用ゐる。その最も薄きものが桂枝であり、枝の嫩小なるものを柳桂といふ。

[氣味]　「辛し、溫にして毒なし」　權曰く、甘く辛し。元素曰く、桂枝は味辛く甘し、氣は微熱である。氣味俱に薄く、體は輕くして上行し、浮にして升る。陽である。その他は前の單桂の項を見よ。

[主治]　「上氣、欬逆、結氣、喉痺、吐吸。關節を利し、中を補し、氣を益す。久しく服すれば神を通じ、身を輕くし、老いず」(本經)「心痛、脇痛、脇風。筋を溫め、脈を通じ、煩を止め、汗を出す」(別錄)「冷風疼痛を去る」(甄權)「傷風頭痛を去り、腠理を開き、表を解し、汗を發し、皮膚の風濕を去る」(元素)「奔豚を泄し、下焦畜血を散し、肺氣を利す」(成無己)「手臂に横行して痛風を治す」(震亨)

[發明]　宗奭曰く、桂は甘く辛し、大熱である。素問に『辛甘は發散す。陽となす』とある。故に漢の張仲景の桂枝湯は傷寒の表虛を治し、いづれもこの藥を用ゐてあるは、正に辛甘、發散の意に合致してゐる。本草の三種の桂のうち、牡桂、

菌桂を用ゐぬのは、この二種は性が溫に止り、以て風寒の病を治し得ないのである。されば本經にただ桂といつたに止るのだ。仲景は又、桂枝は枝上の皮を取るといつた。

○○好古曰く、或人の問に『本草には「桂は能く煩を止め、汗を出す」とあるが、張仲景は、傷寒を治するには當然發汗すべきものがあり、凡て數種の處方にみな桂枝湯を用ゐ、又「汗なきは桂枝を服することを得ず、汗家は重て汗を發することを得ず」といつたが、若し桂枝を用ゐるならば重ねてその汁を發することになり、汗多きものに桂枝、甘草湯を用ゐて、これはまた桂枝を用ゐて汗を閉ぢる。この一藥二用は本草の旨趣と矛盾はないか』といふが、それは、本草に「桂は辛く甘し、大熱なり」「能く百藥を宣導し、血脈を通じ、煩を止め、汗を出す」といつたのは、その血を調へるので汗が自ら出るのであつて、仲景が「太陽の中風、陰弱の者の汗自ら出るは、衞實し營虛するなり。故に發熱して汗出づ」といひ、又「太陽の病の發熱して汗出る者は、此を營弱、衞強となす。陰虛すれば陽必ず之に湊す。故に皆桂枝を用ゐてその汗を發す」といつたのは、これ乃ちその營氣を調へるので衞氣が自ら和

し、風の邪が容る所なくして遂に自汗して解するのであつて、桂枝が能く腠理を開いてその汁を發出するのではない。汗多きに桂枝を用ゐるのは、これを以て營衞を調和するから、邪が汗に從て出て汗が自ら止むのであつて、桂枝が能く汗孔を閉づるのではない。この點に正しき理解を缺く者は、汗を出し汗閉づるの意味を知らずして、傷寒の汗無きものに遇つてやはり桂枝を用ゐてゐるが、誤の甚しいものだ。桂枝湯の下にある「發汗」の文字は「出」の字として認むべきもので、汗が自然に發出するのである。麻黃が能く腠理を開いてその汗を發出するやうなわけとは違ふのだ。その虛汗を治するにも、やはりその意味を逆に察すればよいのである。

成無已曰く、桂枝は本來肌を解するものであつて、太陽の中風で腠理が緻密に、營衞が邪實し、津液が禁固し、その脈が浮緊に、發熱して汗の出ぬものならばこれを與へてならぬこと必然である。皮膚が踈泄し、自汗し、脈が浮緩に、風の邪が衞氣を干すものならばこれを投ずべきである。發散は辛、甘を以て主とする。桂枝は辛、熱なるものだから、これを君として芍藥を臣とし、甘草を佐とすれば、風淫の勝つ所を平にするに辛、苦を以てし、甘を以てこれを緩にし、酸を以てこれを收め

るのである。薑、棗を使とすれば、辛、甘が能く發散するのであるが、又、その脾、胃の津液を行らして營衛を和する作用があるので、發散だけを專にするのではない。故に麻黄湯は、薑、棗を用ゐず、發汗だけに專で、その津液を行らすことを待たぬのである。

承曰く、凡そ桂の厚實して氣味重きものは、水臟、及び下焦を治する藥に入れるに宜く、輕薄で氣味淡きものは、頭目を治する發散の藥に入れるに宜し。故に本經には、菌桂は精神を養ひ、牡桂は關節を利すとしてあり、仲景は汗を發するに桂枝を用ゐてある。乃ち枝條であつて身幹でない。その經薄にして能く發散する點を取つたのである。又、柳桂なる一種があつて、これは桂の嫩く小さい枝條である。尤も上焦の藥に入れて用ゐるに宜し。

時珍曰く、麻黄は遍く皮毛に徹するものだ。故に發汗に專にして寒邪が散する。肺は皮毛を主り、辛は肺に走るのである。桂枝は營衛に透達するものだ。故に能く肌を解して風邪が去る。脾は營を主り、肺は衛を主り、甘は脾に走り、辛は肺に走るのである。肉桂は下行して火の原を導く、これは東垣の所謂、腎は燥を苦む。

急に辛を食つて以てこれを潤し、腠理を開き、津液を致し、その氣を通ずるものであつて、聖惠方に『桂心は心に入り、血を引き、汗を化し、膿を化す』とある。蓋し手の小陰の君火、厥陰の相火と命門と氣を同うするものであつて、別錄に『桂は血脈を通ず』とあるがそれである。曾世榮は『小兒の驚風、及び泄瀉には、いづれも五苓散を用ゐて丙火を瀉し、土濕を滲すべきものである。內に桂があつて能く肝風を抑へて脾土を扶ける』といつた。又、醫餘錄に『ある人は赤眼腫痛を患ひ、脾虛して飮食不能となり、肝脈が盛で脾脈が弱く、涼藥を用ゐて肝を治すれば脾がいよいよ虛し、暖藥を用ゐて脾を治すれば肝がいよいよ盛になるのであつたが、但だ溫、平の藥の中に肉桂を倍加すると、肝を殺いで脾を益するところから、一治にして兩ら奏效した』とある。傳に『木は桂を得て枯る』とはこれであつて、これはいづれも別錄の『桂は肝、肺の氣を利し、牡桂は脇痛、脇風を治す』とある意味と相符合する。一般に知られないことだから此に拈出して置く。又、桂は性辛くして散じ、能く子宮に通じて血を破る。故に別錄に墮胎をいつてあるのだ。龐安時はそこで『炒過すれば胎を損ぜぬ』といつてある。又、丁香、官桂は痘瘡の灰塌を治し、

能く温托して膿を化す。詳細は丁香の條下に記載する。

［附方］ 菖二十、新十二。【陰痺の熨法】寒痺する者は、留て去らず、時に痛んで皮不仁する。刺布衣者は火を以て之を焠し、刺大人者は藥を以て之を熨す。熨法は、醇酒二十斤、蜀椒一斤、乾薑一斤、桂心一斤、凡て四物を用ゐ、㕮咀して酒中に漬け、綿絮一斤、細白布四丈を幷に酒中に納れ、馬矢煴中に置いて塗り封じて氣の泄れぬやうにし、五日五夜にして布、絮を出し、暴乾しては復た漬け、かくてその汁を用ゐ盡す。漬ける每に必ず捽いてその日のうちに出して乾す。滓と絮とを幷用して布に複し、複巾として長さ六七尺のもの六七巾とし、一巾づつを用ゐて生桑炭火で巾を炙り、それで寒痺の刺すところの部位を熨し、熱をして病所に透入せしめ、寒するときは復た巾を炙つて熨し、三十遍にして止める。汗の出るときは巾を以て身を拭ひ、また三十遍して止める。室內に起歩し、風に當らぬやうにする。刺す每に必ずかやうにして熨すれば病が已える（靈樞經）【足躄筋急】桂末を白酒で和して塗る。一日一回（皇甫謐甲乙經）【中風口喎】面目相引き、偏僻し、頰急し、舌の轉らぬには、桂心を酒で煮て汁を取り、故布に蘸けて病上に搨する。正しくなれば止め

る。左喎には右に榻し、右喎には左に榻す。常に用ゐて大いに效があつた。(千金方)【中風逆冷】淸水を吐し、苑轉啼呼するには、桂一兩、水一升半を半升に煎じて冷服する。(肘後方)【中風失音】桂を舌下に著けて汁を嚥む。○又ある方では、桂末三錢、水二盞を一盞に煎じて服し、汗を取る。(千金方)【喉痺不語】方は上に同じ。【偏正頭風】天候惡く風雨のときになると發するには、桂心末一兩を酒で調へて塗り、額上、及び頂上に傅ける。(聖惠方)【暑期の解毒】桂苓丸——肉桂を粗皮を去り、火を見せぬやうにし、茯苓を皮を去り、等分を細末にして煉蜜で龍眼大の丸にし、一丸づつを新汲水で化して服す。(和劑方)【桂漿渴水】夏期にこれを飲めば煩渴を解し、氣を益し、痰を消す。桂末一大兩、白蜜一升、水三斗を先づ一斗に煮取つて新瓷瓶中に入れ、それに二物を下して二三百轉打ち、先づ油紙一重で上を覆ひ、七重に加へて封じ、毎日紙一重づつを去つて七日にして開く。氣香しく、味美にして風韻の絕だ高いものだ。今一般に多くこれを作る。(圖經本草)【九種の心痛】聖惠方では、桂心二錢半を末にし、酒一盞半で半盞に煎じて飲む。立ろに效がある。○外臺祕要では、桂末を酒で服す。方寸匕づつ須臾に六七回。【心腹脹痛】氣短して絕せんとするに

は、桂二兩、水一升二合を八合に煮て頓服する。(肘後方)【中惡心痛】方は上に同じ。(千金)【寒疝心痛】四肢逆冷し、全く飲食せぬには、桂心を研末し、一錢を熱酒で調へ服して效を取る。(聖惠方)【產後の心痛】惡血が心に冲し、氣悶して絕せんとするには、桂心を末にし、狗膽汁で芡子大の丸にし、一丸づつを熱酒で服す。(聖惠)【產後の瘕痛】桂末方寸匕を酒で服して效を取る。(肘後)【死胎の下らぬもの】桂末二錢を、痛緊するときを待つて童尿を溫熱にして調へて服す。これを觀音救生散と名ける。また產難、橫生を治するにも、麝香少量を加へて酒で服す。水銀等の藥に比較して人を損じない。(何氏方)【血崩の止まぬもの】桂心を多少に拘らず砂鍋中で煆いて性を存して末にし、一二錢づつを空腹に米飲で服す。これを神應散と名ける。(婦人良方)【反腰血痛】桂末を苦酒で和して塗り、乾けば再び塗る。(肘後方)【吐血、下血】肘後では、桂心を末にし、水で方寸匕を服す。○王璆曰く、これは陰が陽に乘ずるの症であつて、涼藥を服してはならぬ。南陽の趙宜德が暴に吐血したとき、服すること二囘にして止んだ。その甥もやはり二服にして平安を得た。【小兒の久痢】赤、白を痢するには、桂を皮を去り、薑汁で炙いて紫にし、黃連を茱萸で炒り、等分を末にし、

紫蘇、木瓜の煎湯で服す。これを金鎖散と名ける。(全幼心鑑)【小兒の遺尿】桂末、雄雞肝等分を擣いて小豆大の丸にし、溫水で調へて服す。一日二回。(外臺)【嬰兒の臍腫】多く傷溼に因るものである。桂心を炙熱して熨す。一日四五回。(姚和衆方)【外腎偏腫】桂末方寸匕を水で調へて塗る。(梅師方)【果を食つて腹脹せるとき】老人、小兒に拘らず、桂末を飯で和して綠豆大の丸にし、五六丸を呑んで白湯で下す。なほ消せぬときは再服する。(經驗方)【打撲傷損】淤血溷悶し、身體疼痛するには、辣桂を末にし、二錢を酒で服す。(直指方)【乳癰腫痛】桂心、甘草各二分、烏頭一分を炮いて末にし、苦酒で和して塗り、紙で覆ひ住める。膿は化して水となり、神效がある。(肘後方)【重舌、鵝口】桂末を薑汁で和して塗る。(湯氏寶書)【諸蛇の傷毒】桂心、苦蔞等分を末にして竹筒に密塞し、毒蛇傷に遇つたとき直ちに傅ける。密に塞いで置かねば役に立たなくなる。【閉口椒の毒】氣が絶せんとし、或は白沫を出し、身體冷急するには、桂の煎汁を服し、新汲水一二升を多く飲む。(梅師方)【鉤吻の中毒】【芫靑の毒を解す】いづれも桂の煮汁を服す。

葉　主治　【擣き碎いて水に浸し、髮を洗へば垢を去り、風を除く】(時珍)

箘桂

音は窘（キン）である。（本經上品）

和名　せいろんにくけい
學名　Cinnamomum zeylanicum, Breyn.
科名　くすのき科（樟科）

釋名　**筒桂**（唐本）**小桂**　恭曰く、箘とは竹の名である。此にいふ桂は嫩（やはらか）くして卷き易く、筒のやうになる。卽ち古に用ゐられた筒桂である。筒の字が箘の字に似てゐるので、後世の者が誤つて箘と書いたのが、習となり俗を成し、それが更に因襲されてゐるのである。

時珍曰く、今本草にはまた草に從ふ文字の菌に書いてあるが、いよいよ誤である。牡桂を大桂とするところから、これをば小桂と稱したのだ。

〔箘　桂〕

集解　別錄に曰く、箘桂は交趾（かうち）、桂林の山谷の巖厓の間に生ずる。骨なく、正圓にして竹のやうだ。秋にこれを

採る。

弘景曰く、交趾は交州に屬し、桂林は廣州に屬する。蜀都賦に『箘桂巖に臨む』とあるはこのことである。俗中には正圓にして竹の如きものは見ない。ただ嫩枝を破り卷いて圓くしたものをやはり桂なるがゆゑに用ゐてゐるが、眞の箘桂ではない。仙經には箘桂を用ゐて『三重のものが良し』としてある。これで見ると明に今の桂ではない。別の一物なのである。更に研究を要する。

時珍曰く、箘桂は、葉の柿葉に似たものがそれである。前の桂の條下に詳記した。別錄の所謂、正圓にして竹のやうだといふは、皮が卷いて竹筒のやうになつてゐるといふ意味である。陶氏は誤つて、これは木の形が竹のやうなものと疑ひ、反て卷いて圓くなつたものは眞物でないと思つたのだ。今一般に栽培される巖桂もやはり箘桂の類だが、やや異ふ。その葉は柿葉に似てゐない。また鋸齒があり、枇杷葉のやうで粗澀なものもあり、鋸齒がなくて巵子葉のやうで光潔なものもあつて、巖嶺の間に叢生し、これを巖桂といひ、俗に木犀と呼ぶ。その花には白きものがあつて銀桂と名け、黄なるを金桂と名け、紅きをば丹桂と名け、秋花さくもの、春花さ

くもの、四季花さくもの、逐月に花さくものがある。その皮は薄くして辣ならず、藥に入れるに堪へない。ただ花を茗の貯藏に用ゐ、酒に浸し、鹽漬にし、及び頭髮用の香料などの類にするだけである。

皮 三月、七月に採る。[氣味]「辛し、溫にして毒なし」[主治]「百病に精神を養ひ、顏色を和げ、諸藥の先聘通使となる。久しく服すれば、身を輕くし、老いず、面に光華を生じ、媚好にして常に童子の如し」(本經)

[發明] 前の桂の條下に記載した。時珍曰く、箘桂の主治は桂心、牡桂と迥然として同じくない。昔の人が服食したところのものは蓋しこの類なのだ。

[正誤] 弘景曰く、仙經の服食には、桂を葱涕で雲母に合和し、蒸し化して水にして服するのである。

愼微曰く、抱朴子に『桂は竹瀝に合せて餌ふがよし。亦た龜腦を以て和して服するがよし。七年にして能く水上を步行し、長生して死せず。趙佗子は桂を服すること二十年にして足下に毛を生じ、日に行くこと五百里。力千斤を擧げた』とあり、列仙傳には『范蠡は好んで桂を食ひ、水を飲み、藥を賣る。世人これを見る。又、

桂父は象林の人で、常に桂の皮、葉を龜腦で和して服した」とある。

時珍曰く、方士の謬言にはかやうな類のことが多い。唐氏がそれを本草に收錄したのは、恐らく後世の人を誤ることだ。故に詳記して置く。

木犀花【氣味】【辛し、温にして毒なし】【主治】【百藥煎、孩兒茶と共に膏餅にして噙めば、津を生じ、臭を辟け、痰を化し、風蟲牙痛を治す。麻油と共に蒸熱すれば、髮を潤ほす。及び面脂に作る】（時珍）

天竺桂（海藥）

和名　未詳
學名　Cinnamomum sp.?
科名　くすのき科（樟科）

【集解】珣曰く、天竺桂は南海の山谷に生ずる。功用は桂に似て、その皮は薄く、甚だしく辛烈でない。

宗奭曰く、皮は牡桂と相同じいが、ただ薄いだけである。

時珍曰く、これは卽ち今の閩粤、浙中の山桂である。而して台州の天竺に最も多いからかく名けたのだ。樹は大きく、花が繁く、結實は蓮子のやうな狀態である。

天竺の僧徒達が月桂と稱するものはそれである。月桂の條下に詳記する。

皮 氣味 【辛し、溫にして毒なし】 主治 【腹内の諸冷、血氣脹痛】（藏器）【産後の惡血を破り、血痢、腸風を治し、腰脚を補暖する。功は桂心と同じ。方家で用うることは少である】（珣）

月桂（拾遺）

和名　未詳
學名　Cinnamomum sp. ?
科名　くすのき科（樟科）

集解　藏器曰く、現に江東の諸處で、四五月後の晦になると、多く衢路の間で月桂子を得る。貍豆よりも大きく、破ると辛香なものだ。古老は、これは月の中から下つたものであつて、餘杭の靈隱寺の僧がそれを種ゑて一株の木になつたと相傳へてゐる。詩人がこれについて論述したものが多く、洞冥記には、遠飛雞といふがあつて、朝往つて夕還り、常に桂實を啣んで南土より歸るとある。南土とは月の路のことだ。故に北方にはない。山桂さへ藥とするに堪へる。況や月桂はなほ更である。

時珍曰く、呉剛が月桂を伐つたといふ説は隋、唐の小説から起つたものだ。月桂から子を落すといふ説は武后の時から起つたものだ。傳説に、梵僧が天竺の鷲嶺から飛んで來るので、それで八月に常に桂子が天竺に落ちるのだといふ。唐書にも『垂拱四年三月、月桂子あつて台州に降り、十餘日にして乃ち止む』とある。宋の仁宗の天聖丁卯の八月十五夜、月明に天淨く、杭州靈隱寺に月桂子が降つた。その繁きこと雨の如く、その大いさ豆ほど、その圓きこと珠の如く、その色には白きもの黃なるもの、黑きものがあり、殼は芡實の如く、味は辛かつた。拾つて住職に進呈し、それを種ゑて二十五株を得たといふことを、慈雲の遵式法師が序して記してゐる。張君房は、錢塘の月輪寺に宿して、やはり桂子が紛紛として烟霧の如く、回旋して穗になつて墜ちるを見た。牽牛子ほどで黃、白相間り、咀んで見ると味がなかつたといふ。これ等の說に據ると、月の中に眞に樹があるやうに見えるが、竊に謂ふに、月なるものは陰魄であつて、その中の婆娑たるものは山河の影なのである。月には旣に桂がないものとすると、空中から墜ちるその物は何物であらうか。多くの典籍を調べて見るに、塵沙、土石を雨らしたとか、金鉛、錢汞を雨らしたとか、絮帛、

穀粟を雨らしたとか、草木、花蘂を雨らしたとか、毛血、魚肉を雨らしたとかいふ類のことが甚だ衆くある。して見るとの桂子が雨るといふも、やはり妖怪の仕業であつて、月中に桂があるのではない。桂は南方に生ずる。故にただ南方にあるのだ。宋史に『元豐三年六月、饒州に木子を雨らすこと數畝。狀山芋子に類し、味辛くして香し』とあるは卽ちこの類である。道經には、月桂を不時花といひ、供獻すべからずとしてある。

子 〔氣味〕【辛し、溫にして毒なし】〔主治〕【小兒の耳後の月蝕瘡に、研り碎いて傅ける】(藏器)

木蘭（本經上品）

和名 もくれん
學名 Magnolia liliflora, Desr.
科名 もくれん科（木蘭科）

〔釋名〕 **杜蘭**（別錄）**林蘭**（本經）**木蘭**（綱目）**黃心** 時珍曰く、その香が蘭のやう、その花が蓮のやうだからかく名けたのである。その木の心が黃だから黃心といふ。

【集解】別錄に曰く、木蘭は零陵の山谷、及び太山に生ずる。皮は桂に似て香しい。十一月に皮を採つて陰乾する。

弘景曰く、零陵の諸處にみなある。狀態は楠樹のやうで、皮が甚だ薄くして味が辛香である。今は益州のものが皮が厚く、狀態は厚朴のやうで氣味が勝れてゐる。道家では現に東方の地方ではみな山桂皮をこれに當ててゐるが、やはり相類する。道家ではこれで香を合せるが、やはり好し。

保昇曰く、所在にみなある。樹は高さ數仞、葉は菌桂葉に似て三道の縱文があり、その葉は辛香にして桂に及ばない。皮は板桂のやうで縱橫文がある。三月、四月に皮を採つて陰乾する。

頌曰く、今は湖、嶺、蜀川の諸州にいづれもある。この物は桂とは全く別物である。而るに韶州から提出したものは、桂と同じ一種のもので、外皮を取つて木蘭とし、中肉を桂心とするといつてあるが、蓋しこれは桂中の一種なのだ。十一月、十二月に採つて陰乾する。任昉の述異記に「木蘭洲は潯陽江中に在り、木蘭が多い」とある。又、七里洲中に魯班が木蘭舟を刻んだといふところがあつて、今でも州中

に在る。今詩家がいふ木蘭舟は此から出たものだ。

時珍曰く、木蘭は、枝、葉倶に疎い。その花は内が白く外が紫で、また四季に開くものもある。深山に生ずるものは大きく、舟にも作れる。

按ずるに、白樂天集に『木蓮は巴峽の山谷の間に生じ、地方民は廣心樹と呼ぶ。大なるは高さ五六丈あり、冬を渉つて凋まず。身は青楊のやうで白紋があり、葉は桂のやうだが厚く大きくして脊がなく、花は蓮花のやうで、香、色の艷膩なるもみな同じだが、獨り房、蕋に異があり、四月の初に始めて開き、二十日にして謝ち、實を結ばない』とあつて、この説が乃ち眞の木蘭である。その花には紅、黃、白の數色があり、その木は肌が細くして心が黃である。梓人の重ずるものだ。蘇頌がいつた韶州のものといふは牡桂であつて木蘭ではない。或は、木蘭樹は皮を去つても死なぬといふ。羅願は、このものを『冬

〔木　　蘭〕

花さき、實は小柿のやうで甘美だ』といつたが、恐らくさうではない。

皮　〔氣　味〕【苦し、寒にして毒なし】〔主　治〕【身大熱の皮膚中に在るもの。面熱、赤皰、酒皶、惡氣、癲疾、陰下痒濕を去り、耳目を明にする】（本經）【中風、傷寒、及び癰疽、水腫を療じ、臭氣を去る】（別錄）【酒疸を治し、小便を利し、重舌を療ずる】（時珍）

〔附　方〕　舊二、新一。【小兒の重舌】木蘭皮一尺、廣さ四寸を粗皮を削り去り、酢一升を入れて漬けた汁を嗡む。（子母祕錄）【面上の皶皰】鼾䵳。木蘭皮一斤を細切し、三年の酢漿に百日間漬け、晒乾して末に搗き、一日三回、方寸匕づつを漿水で服す。肘後では、酒で漬け、巵子仁一斤を用ゐる。（古今錄驗方）『酒疸發斑』赤黑黃色で心下が燠痛し、足脛が腫滿し、小便が黃になるは、大醉して風に當り、水に入つたために發るものである。木蘭皮一兩、黃芪二兩を末にし、一日三回、方寸匕を酒で服す。（肘後方）

花　〔主　治〕【魚哽、骨哽。化鐵丹にこれを用ゐる】（時珍）

辛夷（本經上品）

和名　こぶし
學名　Magnolia Kobus, DC.
科名　もくれん科（木蘭科）

【釋名】　**辛雉**（本經）**侯桃**（同）**房木**（同）**木筆**（拾遺）**迎春**　時珍曰く、夷とは荑の意味であつて、その苞は初生が荑のやうで味が辛いものだ。揚雄の甘泉賦に『辛雉于林薄』とあり、服虔の註に『卽ち辛夷なりとある。雉、夷は聲が相近い。今本草に辛矧と書くは傳寫の誤である。

藏器曰く、辛夷は、花がまだ發かぬ時は苞が小桃子のやうで毛がある。故に侯桃と名ける。初めて發くは筆頭のやうなので、北方地方では木筆と呼ぶ。その花が最も早いので、南方地方では迎春と呼ぶ。

【集解】　別錄に曰く、辛夷は漢中、魏興、梁州の山谷に生ずる。その樹は杜仲に似て高さ一丈餘あり、子は冬桃に似て小さい。九月に實を採つて暴乾し、心、及び外毛を去る。毛は人の肺を射て人をして欬せしめる。

弘景曰く、今は丹陽、近道に產する。桃子のやうで、小さい時は氣味が辛香だ。

恭曰く、この物は樹の花がまだ開かぬ時に取收める。正月、二月が採るに適當である。九月に實を採るといふは恐らく誤であらう。

保昇曰く、その樹は大きく連つて合抱し、高さ數仞、葉は柿葉に似て狹く長い。正月、二月に毛のある山桃に似て色が白くして紫を帶びた花を開き、花が落ちて子がなく、夏、杪に復た小筆のやうな花を著ける。又、ある一種は、花、葉はみな同じだが、ただ三月に花を開いて四月に花が落ち、子が赤くして相思子に似てゐる。この二種は所在の山谷にいづれもある。

禹錫曰く、現に苑中にある樹は高さ三四丈あり、その枝は繁茂し、正、二月に紫白色の花を開き、花が落ちると葉が生え、夏の初に復た花を生じ、伏暑を經冬期を歷て葉、花が漸次に大きくなり、有毛小桃のやうで、來年の正、二月になつて始めて開く。初めこの樹は興元府から進獻したもので、樹は纔に三四尺、花があつて子がなかつたが、二十餘年を經てから實を結ぶやうになつた。蓋し年淺きものは子がないので、二種あるわけではない。その開花の早、晚はそれぞれその土地と節氣とに隨ふのである。

宗奭曰く、辛夷は處處にあるもので、人家の園亭にも多く種植する。花を先にし葉を後にするもので、即ち木筆花である。その花がまだ開かぬ時は苞上に毛があり、尖長で筆のやうだ。故にそれを形容して名としたのである。花には桃紅、紫色の二種あるが、藥に入れるには紫のものを用うべきもので、まだ開かぬ時に取收めねばならぬ。開いてからでは佳くない。

〔辛夷――木筆〕

時珍曰く、辛夷の花は、初めて枝頭に出ると苞の長さ半寸ほど尖つて鋭く、さながら筆頭のやうで、重重に長さ半分ばかりの青黄の茸毛があつて順に鋪き、開くと蓮花に似て小さく、盞ほどで、苞は紫で焔のやうに紅く、蓮、及び蘭花の香がある。又、白色のものがあつて、一般に玉蘭と呼ぶ。又、千葉のものもある。諸家の說に、苞は小桃に似てゐるといつたのは、比類が穩當でない。

苞〔修治〕斅曰く、凡そ辛夷を用ゐるには、赤肉毛を完全に拭ひ去つてから、芭蕉水で一夜浸し、漿水で午前八時から午後二時まで煮て取出し、焙乾して用ゐる。眼目中の患を治する場合には、直ちに一時に皮を去り、裏に向つて實するものを用ゐる。大明曰く、藥に入れるには微し炙く。

〔氣味〕【辛し、溫にして毒なし】時珍曰く、氣味倶に薄く、浮にして散じ、陽である。手の太陰、足の陽明の經に入る。之才曰く、芎藭が使となる。五石脂を惡み、昌蒲、蒲黃、黃連、石膏、黃環を畏る。

〔主治〕【五臟、身體の寒熱、風頭腦痛、面䵟。久しく服すれば氣を下し、身を輕くし、目を明にし、天年を増し、老に耐へる】（本經）【中を溫め、肌を解し、九竅を利し、鼻塞涕出を通じ、面腫の齒に引いて痛むもの、眩冒し、身兀兀として車船の上に在るが如くなるを治し、鬚髮を生じ、白蟲を去る】（別錄）【陽脈を通じ、頭痛憎寒、體噤瘙癢を治す。面脂に入れれば光澤を生ずる】（大明）【鼻淵、鼻鼽、鼻窒、鼻瘡、及び痘後の鼻瘡には、いづれもこれを研末し、麝香少量を入れ、葱白に蘸けて數回入れる。甚だ良し】（時珍）

【發明】時珍曰く、鼻氣は天に通ずる。天とは頭であり、肺である。肺は竅を鼻に通ずるものであつて、陽明、胃脈は鼻を環つて上行する。腦は元神の府であつて、鼻は命門の竅である。一般に中氣不足で淸陽が升らぬときは、頭がそれがために傾き、九竅がそれがために利せなくなる。辛夷の辛溫は氣を走して肺に入り、その體は輕浮にして能く胃中の淸陽を助け、上行して天に通ずる。能く中を溫め、頭面、目鼻九竅の病を治する所以である。黃帝、岐伯の後、能くこの理に達するものは東垣李杲一人のみだ。

沈香（別錄上品）

和名　ぢんかう、きやら
學名　*Aquilaria Agallocha*, Roxb.
科名　ぢんちやうげ科（瑞香科）

【釋名】**沈水香**（綱目）**蜜香**　時珍曰く、木の心節であつて、水に置けば沈むところから沈水と名け、また水沈といふ。半ば沈むものは棧香であり、沈まぬものは黃熟香である。南越志に、交州では一般に蜜香と稱してゐるといつてある。それはその氣が蜜脾のやうだからだ。梵書には阿迦嚧香と名けてある。

【集解】恭曰く、沈香、青桂、雞骨、馬蹄煎香は同一樹であつて、天竺諸國に産する。木は欅、柳に似て、樹皮は靑色であり、葉は橘葉に似て、冬を經て凋まない。夏白くして圓い花を生じ、秋實を結ぶ。實は檳榔に似て、桑椹ほどの大いさで、紫で味が辛い。

藏器曰く、沈香は、枝、葉はいづれも椿に似てゐる。橘に似たといふものは恐らくこの物ではないであらう。その枝節の朽ちずして水に沈むものを沈香とし、その肌理に黑脈があつて浮ぶものを煎香とする。雞骨、馬蹄はみな煎香なのであつて、いづれも別の功はなく、ただ衣類を熏じて臭を去るだけのものである。

頌曰く、沈香、靑桂等の香は海南諸國、及び交、廣、崖州に産する。沈懷遠の南越志に『交趾の蜜香樹は、彼の地では一般にこれを取るに、先づその積年の老木根を斷つて置く。年を經てその外皮、幹は倶に朽爛するが、木の心と枝節とは壞れずして堅く黑く、水に沈む、それが卽ち沈香である。半ば浮き半ば沈んで水面と平になるものは雞骨香となり、細枝の堅實にしてまだ爛れぬものは靑桂香となり、その幹は棧香となり、その根は黃熟香となり、その根節の輕くして大なるものは馬蹄香

となる。この六物は同じく一樹から產するので、精粗の差異があるだけのものだ。いづれも採るに一定の時期はない』とある。劉恂の嶺表錄異には『廣の管、羅州には棧香が多い。樹身は柜、柳に似て、その花は白くして繁く、その葉は橘のやうだ。

〔沈　香〕

その皮は紙に作れるもので、香皮紙と名け、灰白色でその紋が魚子のやうだ。水に沾せば爛れて楮紙に及ばず、また香氣もない。沈香、雞骨、黃熟、棧香は同一の樹ではあるが、根、幹、枝、節それぞれ區別がある』とある。又、丁謂の天香傳には『この香には奇品が最も多く、四香に凡て四十二の狀態があつて同一の樹から出る。木の體は白楊のやう、葉は冬青のやうで小さい。海北の竇、化、高、雷諸州はいづれも香の產地であるが、海南のものに比較しては優劣があつて同樣には行かない。元來その禀くるところが同じくないのである。その上に販賣量の增大のみを計つて採

取を急ぎ、十分に香と成るを待たないのである。これは甚だしい營利主義の弊である。瓊、管、黎地方のやうに、時期に達するまでは妄りに剪伐せぬのと大なる相異だ。かく時期に從つて採取を愼重にすればこそ、木に夭札の患なくして、必ず特異なる良き香を得られるのだ』とある。

宗奭曰く、嶺南の諸郡には悉くあるが、海に接近した地方に尤も多く、幹を交へ、枝を連ね、岡より嶺へと相接して千里不絶である。葉は冬青のやう、大なるは數抱あり、木の性は虛柔であつて、山地の住民はそれで茅蘆を構へ、或は機梁にし、飯甑を作り、狗槽を作るといふ有樣で、香のあるものは百に一二もない。蓋し木に水を得ると結するものなので、多くは折枝、枯幹の中に在つて或は沈となり、或は煎となり、或は黃熟となる。自ら枯死したものをば水盤香といふ。南息、高、竇等の州にはただ生結香を產する。蓋し山地の住民が山に入つて刀で曲幹、斜枝を斫つて坎にして置くと、年を經てそれに雨水が入つて浸漬し、遂に結して香となるのであつて、それを鋸つてひき取り、刮つて白木を去つたものである。その香の結して斑點をなすものをば鷓鴣斑と名け、それを燔けば極めて淸烈である。香としての良き

ものはただ瑤、崖等の州にあり、俗に角沈、黄沈といふもので、これは枯木から得るものである。これを藥に入れて用うべきものである。木の皮に依つて結したものをば青桂といひ、氣が尤も淸い。土中に歲久しく在つたもので、剔らなくとも薄片に成つてゐるものをば龍鱗といふ。削ると自から卷き、咀めば柔靭なるものをば白蠟沈といふ。これは尤も得難いものである。

○承曰く、諸品の外に又、龍鱗、麻葉、竹葉などいふ類があつて、一二十品に止らない。要するに、藥に入れるにはただ中が實して水に沈むものを取る。或は水には沈むが中心が空なるものがある。これは雞骨といふものだ。その意味は中に朽路があつて雞骨中の血眼のやうだといふのである。

○○時珍曰く、沈香の品類については、諸說に頗る詳であるが、今、楊億の談苑、蔡條の叢話、范成大の桂海志、張師正の倦遊錄、洪駒父の香譜、葉廷珪の香錄等の諸書を參考して、その未だ盡きざるところを取り集めて補記して置かう。

香には凡て沈、棧、黃熟の等がある。

沈香は、水に入れると沈むものである。その品種に凡そ四種あつて、熟結とい

ふは膏脈が凝結して自ら朽ちて出るものである。生結といふは刀斧で伐仆して置いて膏脈の結聚するものである。脱落といふは水に因つて朽ちて結するものである。蟲漏といふは蠹隙に因つて結するものである。生結を上とし、熟結がこれに次ぎ、堅く黑きを上とし、黃色なるがこれに次ぎ、角沈は黑く潤ひ、黃沈は黃に潤ひ、蠟沈は柔で韌く、革沈は紋が横であつて、いづれも上品である。海島に產出するものには、石杵のやうなもの、肘のやうなもの、拳のやうなもの、鳳、雀、龜、蛇、雲氣、人物のやうなものがあり、及び、海南の馬蹄、牛頭、燕口、繭、栗、竹葉、芝菌、梭子、附子等の香があるが、いづれも形に因つて命名したものである。

棧香といふは、水に入れて半ば浮き半ば沈むもの、卽ち沈香にして半ば結して木に連つてゐるものである。或は煎香に作り、番地では婆木香と名け、また弄水香ともいふ。その類に、蝟刺香、雞骨香、葉子香があり、いづれも形に因つて名けたものである。大いさ〔一〕笠ほどのものに蓬萊香といふがあり、山石、枯槎のやうなものに光香といふのがある。藥に入れてはいづれも沈香に次ぐものだ。

〔一〕笠ハ笠ノ字ノ誤カ。

黄熟香といふは、即ち香の輕虛なるもので、俗に訛つて速香といふがその物である。生速といふ斫伐して取つたものがあり、熟速といふ腐朽してから取つたものがある。その大なるもので雕刻し得るほどのものをば水盤頭といふ。いづれも藥に入れるに堪へない。ただ焚爇に用ゐられるだけである。

葉廷珪は『渤泥、占城、眞蠟に產するものを香沈といふ。また舶沈といひ、藥沈といひ、醫家は多くこれを用ゐる。眞臘のものを上とする』といつた。蔡絛は『占城は眞臘に及ばず、眞臘は海南の黎峒のものに及ばぬ。黎峒はまた萬安黎母山の東峒のものを以て天下に冠絶するものとし、これを海南沈といひ、一片の價格は萬錢に直る。海北の高、化の諸州のものはいづれも棧香なのだ』といつた。范成大は『黎峒に產出するものは泥土沈香であつて、或は崖香といふ。紙ほどの薄いものでも水に入れるとやはり沈む。萬安は島東に在つて、朝陽の氣を鍾めるところだ。故に香が尤も醞藉なのである。土人もやはりこれは得難いのである。舶沈香は多く腥烈で、尾烟が必ず焦げる。交趾、海北の香は欽州に聚るので、欽香といふ。氣は尤も焦烈だ。南方では一般に甚しく重じない。それを藥に入れるだけである』といつた。

【正　誤】　時珍曰く、按ずるに、李珣の海藥本草に、沈むものを沈香といひ、浮くものを檀香といふといひ、梁の元帝の金樓子に、一木に五香あつて、根を檀といひ、節を沈といひ、花を雞舌といひ、膠を薫陸といひ、葉を霍香といふといつたが、いづれも誤である。右にいふものはそれぞれ別の一種のものだ。所謂五香一本といふは、卽ち前項に蘇恭がいつた沈、棧、青桂、馬蹄、雞骨といふものがそれである。

【修　治】　斅曰く、凡て沈香を使ふには、必ず枯れずして觜角の如きものを用ゐるに限り、硬重にして水に沈み下るものを上とし、半ば沈むものがそれに次ぐ。火を見せてはならぬ。

時珍曰く、丸、散に入れんとするには、紙で裹んで懷中に置き、燥するを待つて研る。或は乳鉢に入れて水で磨り、粉にして晒し乾すもよし。煎劑に入れるには、ただ汁に磨つて時に臨んで入れる。

【氣　味】　【辛し、微溫にして毒なし】珣曰く、苦し溫なり。大明曰く、辛し、熱なり。元素曰く、陽であつて、升があり降がある。時珍曰く、咀嚼して香の甜いものは性平である。辛辣なるものは性熱である。

【主治】【風水毒腫。惡氣を去る】（別錄）【心腹痛、霍亂、中惡、邪鬼、疰氣に主效があり、人の神を淸する。竝に酒で煮て服するが宜し。諸瘡腫には膏中に入れるが宜し】（李珣）【中を調へ、五臟を補し、精を益し、陽を盛にし、腰膝を煖め、轉筋、吐瀉、冷氣を止め、癥癖を破る。冷風痲痺、骨節不任、風濕の皮膚瘙癢、氣痢】（大明）【右腎命門を補す】（元素）【脾、胃、及び痰涎に血が脾から出るを補す】（李杲）【氣を益し、神を和す】（劉完素）【上熱下寒、氣逆喘急、大腸虛閉、小便氣淋、男子の精冷を治す】（時珍）

【附方】新七。【諸虛寒熱】冷痰、虛熱には、冷香湯――沈香、附子を炮いて等分を水一盞で七分に煎じ、一夜露して空心に溫服する（王好古醫壘元戎）【胃冷久呃】沈香、紫蘇、白豆蔻仁各一錢を末にし、五七分づつを柹蔕湯で服す（吳球活人心統）【心神不足】火が降らず、水が升らずして健忘となり、驚悸するには、朱雀丸――沈香五錢、伏神二兩を末にし、煉蜜で小豆大の丸にし、每食後に人參湯で三十丸を服す。一日二服。（王璆百一選方）【腎虛目黑】水臟を煖める。沈香一兩、蜀椒を目を去り炒いて汗を出して四兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に鹽湯で服

す。（普濟方）【胞轉不通】小腸、膀胱、厥陰に病を受けたものではない。これは强ひて房事を忍び、或は小便を過忍して起るものである。その氣を治すべきもので、それで癒える。利藥では通じ得るものでない。沈香、木香各二錢を末にし、白湯で空腹に服し、通ずるを度とする。（醫壘元戎）【大腸虛閉】汗が多きに因つて津液が耗涸するものである。沈香一兩、肉蓯蓉を酒に浸して焙じて二兩を各々研末し、麻仁の研汁で作つた糊で梧子大の丸にし、一百丸づつを蜜湯で服す（嚴子禮濟生方）【痘瘡黑陷】沈香、檀香、乳香等分を盆內で爇き、兒を抱いてその上で熏ずれば黑陷が起きる。（鮮于樞鈎玄）

蜜香（拾遺）

和名　みつかう
學名　Aquilaria Agallocha, Roxb.
科名　ぢんちやうげ科（瑞香科）

【釋名】**木蜜**（內典）**沒香**（綱目）**多香木**（同）**阿䔲**　音は矬（ザ）である。

【集解】藏器曰く、蜜香は交州に生ずる。大樹の節であつて、沈香のやうなものだ。法華經註に『木蜜は香蜜であつて、樹の形は槐に似て香しい。これを伐つて

五六年にしてその香を取る』とあり、異物志に『その葉は椿のやうだ。樹が生じて千歳にして斫仆し、四五歳置いて往つて看て、已に腐敗してただ中節の堅貞なるものがこの香である』とある。

珣曰く、南海の諸山中に生ずる。種ゑて五六年すると香があるものだ。交州記に『樹は沈香に似て異るところがない』とある。

時珍曰く、按ずるに、魏王の花木志に『木蜜は千歳樹と號し、根本の甚だ大なるものを伐り、四五歳にして腐ちぬものを取つて香とする』とある。これで觀ると、陳藏器の所謂、生じて千歳にして斫るといふは蓋し誤訛である。段成式の酉陽雜俎に『沒樹は波斯國、拂林國に產し、一般に阿縒と呼ぶ。樹は長さ一丈餘、皮は青白色、葉は槐に似て長く、花は橘花に似て大きく、子は黑色で大いさ山茱萸ほど、酸く甜くして食へる』とあり、廣州志には『肇慶新興縣に多香木を產し、俗に蜜香と名け、惡氣を辟け、鬼精を殺す』とあり、晉書には『太康五年、大秦國から蜜香樹皮紙を獻じた。微褐色で魚子のやうな紋があり、極めて香しくして堅靭なものであつた』とある。この數說を觀ると、蜜香はやはり沈香の類のものだ。故に形狀、功

用、兩ながら相彷彿たるものである。南越志に、交人は沈香を稱して蜜香となすといひ、交州志に、蜜香は沈香に似てゐるといひ、嶺表錄に、棧香皮紙は魚子に似てゐるといふが尤も互證すべきである。楊愼の丹鉛錄に『蜜樹は蜜蒙花樹だ』といつたのは謬である。又、枳椇木もやはり木蜜と名けるが、やはり同類のものか否か判らない。果部に詳記してある。

氣味　【辛し、溫にして毒なし】　主治　【臭を去り、鬼氣を除く】(藏器)

【惡を辟け、邪鬼、尸注、心氣を去る】(李珣)

丁香（宋開寶）

和名　ちやうじ
學名　Eugenia caryophyllata, Willd.
科名　てんにんくは科（桃金孃科）

校正　別錄の雞舌香を併せ入る。

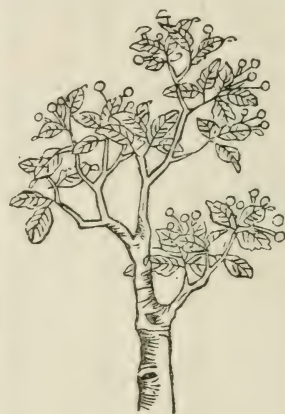
釋名　**丁子香**（嘉祐）　**雞舌香**　藏器曰く、雞舌香は丁香と同種で、花、實が叢生し、その中心の最も大なるものが雞舌であつて、擊破すると順理があつて解して兩向となり、雞の舌のやうだ。故にかく名けるのであつて、乃ちそれが母丁香で

ある。

禹錫曰く、按ずるに、齊民要術に『雞舌香は、俗間一般にその丁子に似てゐるところから丁子香と呼ぶ』とある。

時珍曰く、宋の嘉祐本草に雞舌を重出してあるが、此には一條に合併した。

集解　恭曰く、雞舌香は、樹、葉、及び皮はいづれも栗に似て、花が梅花のやう、子が棗核に似たものは雌樹であつて、香に入れては用ゐない。その雄樹は花はあるが實らぬ。花を採つて釀して香にする。崑崙、及び交州、愛州以南に產する。

〔丁香〕

珣曰く、丁香は東海、及び崑崙國に生ずる。二月、三月に紫白色の花を開き、七月に至つて始めて實になる。小なるものを丁香といひ、大なるもので巴豆ほどのものを母丁香といふ。

志曰く、丁香は交、廣、南番に生ずる。按ずるに、廣州から提出した圖の丁香樹は、高さ一丈餘、木は桂に類し、葉は櫟葉に似て、花は圓く細く、黃色である。冬を凌いで凋まぬ。その子は枝蕊の上に出て、釘のやうで長さ三四分、紫色である。その中に粗大にして山茱萸の如きものがあり、俗に母丁香と呼ぶ。二月、八月に子、及び根を採る。一には、盛冬に花を生じ、子は翌年春に至つて採るともいふ。

頌曰く、雞舌香は、唐本草には『その木は栗に似てゐる』とあり、南越志には『これは沈香の花だ』といひ、廣志には『これは草の花で、蔓生し、實が熟したとき、貫いて置いて口を香しくするに用ゐる』とあり、その說は一定せぬが、現に一般には、みな乳香中から揀出した木實の棗核に似たものを以てこれとするが、堅頑、枯燥して絕えて氣味がなく、燒いてもやはり香がない。これを用ゐて氣と口臭とを療ずるは甚だ乖疎である。何に緣つてこれを雞舌としたものか判らない。京下の老醫の話には、雞舌は丁香と同種で、その中の最も大なるものを雞舌といふ。卽ち母丁香であつて、口臭を療するに最も良く、氣を治するにも效があるといふ。葛稚川の百一方には『暴氣刺心痛を治するに、雞舌香を用ゐ、酒で服す』とあり、又、抱朴子

の書には、雞舌、黄連を乳汁で煎じて目に注げば、百疹の目に在るものを治してみな癒え、更に精明を加へるとあり、古方の、瘡癧を治する五香連翹湯には雞舌を用ゐてあるが、孫眞人千金方では雞舌がなくして丁香を用うとあり、一種の物のやうである。その花を採つて香を釀成するといふ說は絶えて知るものがない。

愼微曰く、沈存中の筆談に「子集靈苑方は、陳藏器の拾遺に據つて雞舌を丁香母としてあるが、今考ふるに、やはりさうでない。雞舌、卽ち丁香であつて、齊民要術には「雞舌、俗に丁子香と名く」とあり、日華子には「丁香は口氣を治す」とあつて、三省故事の記載に、漢の時の郎官は日日に雞舌香を含んだ。それは事を奏する場合に芬芳ならしめるためであるとある說に相合する。また千金方の五香湯に丁香を用ゐてあつて雞舌のないのが最も明驗である。開寶本草に丁香を重出したのは謬である。今世間で乳香中の山茱萸ほどの大いさのものを雞舌としてゐるが、少しも氣味がない。疾を治するに用ゐるは甚だ誤つてゐる」とある。

承曰く、嘉祐補註、及び蘇頌の圖經に、諸書を引用して雞舌を丁香とし、抱朴子には、眼に注ぐがよしとあるが、但し丁香は恐らく眼に入るべきものではない。これ

を含めば口中が熱臭して近づけぬほどである。乳香中から揀り出したものは、氣味はないけれども却つて臭氣がなく、療じて九竅を利するの理がある。諸方に用ゐて小兒の驚癇を治するは、やはりその九竅に達することを目的としたものである。

斅曰く、丁香には雌雄があつて、雄は顆が小さい。雌は大いさ山茱萸ほどあり、母丁香と名け藥に入れて最も勝れてゐる。

時珍曰く、雄を丁香とし、雌を雞舌とすることは諸說に甚だ明である。獨り陳承の所說だけが甚だ謬妄である。乳香中から揀り出したものといふは、乃ち番棗核であつて、卽ち無漏子の核なることを知らなかつたのだ。果部に記載してある。前代には一般に丁香、卽ち雞舌なることを知らずして、誤つてこの物をそれに充ててあつたのだ。乾薑、焰硝さへなほ眼に點けられる。草果、阿魏を番人は食料とするのを見れば、丁香を眼に點け、口に噙んでも何の害があらうぞ。

雞舌香（別錄）

【氣　味】【辛し、微溫にして毒なし】時珍曰く、辛し、溫なり、

【主　治】【風水毒腫、霍亂心痛。惡熱を去る】（別錄）【鼻に吹いて腦疳を殺す。諸香中に入れて人をして身を香からしめる】（甄權）【薑汁と共に塗つて白鬚を拔き去れ

ば、孔中から黑きものを生じ、異常なものである」（藏器）

丁香（開寶）【氣味】「辛し、溫にして毒なし」時珍曰く、辛し、熱なり。好古曰く、純陽なり。手の太陰、足の少陰、陽明の經に入る。斅曰く、方中に多く雌を用ゐたものは力が大である。膏煎中にもし雄を用ゐるには、丁蓋、乳子を去るべきものである。人の背癰を發する。火を見せてはならぬ。鬱金を畏れる。

【主治】「脾、胃を溫め、霍亂を止める。壅脹、風毒諸腫、齒疳䘌。能く諸香を發する」（開寶）「風䘌、骨槽勞臭、蟲を殺し、惡を辟け、邪を去り、奶頭花を治し、五色毒痢、五痔を止める」（李珣）「口氣、冷氣、冷勞、反胃、鬼疰、蠱毒を治し、酒毒を殺し、痃癖を消し、腎氣、奔豚氣、陰痛、腹痛を療じ、陽を壯にし、腰膝を暖める」（大明）「嘔逆を療ずるに甚だ效驗がある」（保昇）「胃寒を去り、元氣を理す。氣血の盛なるものは服してはならぬ」（元素）「虛噦、小兒の吐瀉、痘瘡の胃虛で灰白にして發せぬものを治す」（時珍）

【發明】好古曰く、丁香は、五味子、廣茂と共に用ゐれば奔豚の氣を治す。また能く肺を泄し、能く胃を補し、大いに能く腎を療ずる。

宗奭曰く、日華子は『丁香は口氣を治す』といつた。これは正に御史が含んだといふその香である。脾、胃の冷氣不和を治するに甚だ良し。母丁香は氣味尤も佳し。

震亨曰く、口は上に居て地氣がそれから出る。脾に鬱火があると、溢れて肺中に入り、その淸和の意を失して濁氣が上行し、發して口氣となる。若し丁香を以てこれを治するならば、それは湯を揚げて沸を止めるくらゐのものだ。ただ香薷(かうじゆ)で治するが甚だ速である。

時珍曰く、宋末の太醫陳文中は、小兒痘瘡の光澤ならず、起發せず、或は脹し、或は瀉し、或は渴し、或は氣促し、表裏俱に虛するの證を治するに、いづれも木香散、異攻散を用ゐて、丁香、官桂を倍加し、甚しきには丁香三五十箇、官桂一二錢にして、やはりそれを服して癒えたものがある。これは丹溪朱氏の所謂、立方の時、必ず運氣が寒水司天の際に在るので、又、嚴冬に値(あ)つて陽氣を鬱遏(うつあつ)するところから、大辛熱の劑を用ゐて發したものである。もし氣血、虛實、寒熱、經絡を分たずして、一槩に輕率に用ゐるならば、それは人を殺すこと必然である。葛洪の抱朴子に『凡そ百病の目に在るには、雞舌香、黃連(わうれん)、乳汁を煎じて注げばみな癒える』とある。こ

れは辛散、苦降、養陰の妙を得たものだ。陳承が、眼に點けられないといつたのは、蓋しこの理を知らなかつたのだ。

【附方】 舊八、新十八。【暴心氣痛】雞舌香末一錢を酒で服す。（肘後方）【乾霍亂痛】吐せず、下せぬには、丁香十四箇を研末し、沸湯一升で和して頓服する。瘥えぬときは再び試みる。（思邈千金方）【小兒の吐瀉】丁香、橘紅等分を煉蜜で黃豆大の丸にし、米湯に化して服す。（劉氏小兒方）【小兒の嘔吐】止まぬには、丁香、生半夏各一錢を薑汁に一夜浸し、晒乾して末にし、薑汁で作つた麪糊で黍米大の丸にし、兒の大小を量つて薑湯で服す。（全幼心鑑）【嬰兒の吐乳】小兒の生後百日から一个年以内のもので、乳を吐し、或は糞の青色なるには、年少の婦人の乳汁一盞に丁香十箇、陳皮を白を去つて一錢を入れ、石器で煎じて一二十沸し、少しづつ與へ服ます。（陳文中小兒方）【小兒の冷疳】面黃に、腹大し、食へば直ちに吐するものには、母丁香七箇を末にし、乳汁で和して三回蒸し、薑湯で服す。（衛生易簡方）【胃冷嘔逆】氣厥不通なるには、母丁香三箇、陳橘皮一塊を白を去つて焙じ、水で煎じて熱服する。（十便良方）【反胃吐食】袖珍方では、母丁香一兩を末にし、鹽梅を入れて搗き和し、芡子大の丸に

して一丸づつを噙む　○聖惠方では、母丁香、神麯を炒つて等分を末にし、米飲で一錢を服す。【朝食して暮に吐くもの】丁香十五箇を研末し、甘蔗汁、薑汁で和して蓮子大の丸にし、噙み嚥む。（摘玄方）【反胃、關格】氣噎して通ぜぬには、丁香、木香各一兩を用ゐ、毎服四錢を水一盞半で一盞に煎じ、豫め黄泥で盌を作つて置き、その中で濾して食前に服す。この方は掾史吳安之が都事蓋耘夫に傳へて有效だつたものだ、試むるに果してその通りであつた。士盌はその脾を助ける點を取つたものである（德生堂經驗方）【傷寒呃逆】及び噦逆して定まらぬには、丁香一兩、乾柹蒂を焙じて一兩を末にし、毎服一錢を人參の煎湯で服す。（簡要濟衆方）【毒腫の腹に入りたるもの】雞舌香、青木香、薰陸香、麝香各一兩を水四升で二升に煮て、二回に分服する。（肘後方）【蠏の食傷】丁香末五分を薑湯で服す。（證治要訣）【婦人の崩中】晝夜止まぬには、丁香二兩、酒二升を一升に煎じて分服する。（梅師方）【婦人の産難】母丁香三十六粒、滴乳香三錢六分を末にし、活兎膽と共に和して千杵搗き、三十六丸にし、毎服一丸を好酒に化して服す。立ろに驗がある。これを如意丹と名ける。（顧眞堂經驗方）【婦人の陰冷】母丁香末を指ほどの太さに紗嚢に盛り、陰中に納れる。病は

直ちに已える。(本草衍義)【鼻中の息肉】丁香を綿で裹んで納れる(聖惠方)【風牙宣露】口氣を發歇するには、雞舌香、射干一兩、麝香一分を末にし、日日に揩る。(聖濟總錄)【齲齒黑臭】雞舌香の煮汁を含む。(外臺祕要)【唇舌に生じた瘡】雞舌香末を綿で裹んで含む。(外臺)【乳頭裂破】丁香末を傅ける。(梅師方)【妬乳乳癰】丁香末方寸匕を水で服す。(梅師方)【癰疽惡肉】丁香末を傅け、外を膏藥で護る。(怪證奇方)【桑蝎に螫されたとき】丁香末を蜜で調へて塗る。(聖惠方)【衣を香しくし、汗を辟ける】丁香一兩を末にし、川椒六十粒を和して絹袋に盛つて佩びる。絕えて汗氣がなくなる。(多能鄙事)

丁皮 時珍曰く、即ち樹皮であつて、桂皮に似て厚い。〔氣味〕香に同じ。

〔主治〕【齒痛】(李珣)【心腹冷氣の諸病 方家では丁香の代用とする】(時珍)

枝 〔主治〕【一切の冷氣、心腹脹滿、惡心、泄瀉虛滑、水穀不消化】枝條七斤、肉豆蔻を麪で煨いて八斤、白麪を炒つて六斤、甘草を炒つて十一斤、炒鹽中三斤を用ゐて末にし、日日に點てて服す 記載は御藥院方にある。

根 〔氣味〕【辛し、熱にして毒あり】〔主治〕【風熱毒腫の心腹に入らざる

ために用ゐる』（開寶）

檀香（別錄下品）

和名　びやくだん
學名　Santalum album, L.
科名　びやくだん科（檀香科）

【釋名】**旃檀**（綱目）**眞檀**　時珍曰く、檀は善木である。故に文字は亶に從ふ。亶は善である。釋氏はこれを旃檀と呼び、湯沐に用ゐる。やはり離垢といふやうな意味である。番人は訛つて眞檀といひ、雲南地方では紫檀と呼び、沈香、卽ち赤檀に勝るとしてある。

【集解】藏器曰く、白檀は海南に產する。樹は檀のやうなものだ。恭曰く、紫眞檀は崑崙、盤盤國に產する。中華には生ぜぬけれども、世間到る處にある。

頌曰く、檀香に數種あつて、黃、白、紫の別異があり、今一般に盛に用ゐてゐる。江淮、河朔に生ずる檀木は卽ちその類だが、ただ香しくないだけである。

時珍曰く、按ずるに、大明一統志には『檀香は廣東、雲南、及び占城、眞臘、瓜

哇、渤泥、暹羅、三佛齊、回回等の國に產し、現に嶺南の諸地にもみなある。樹葉はいづれも荔枝に似て、皮は靑色で滑澤だ』とあり、葉廷珪の香譜には『皮が實して色の黃なるものを黃檀といひ、皮が潔くして色の白きものを白檀といひ、皮が腐ちて色の紫なるものを紫檀といふ。その木はいづれも堅く重く、淸香があるが、白檀が尤も良し、紙で封じて貯收するが宜く、それで氣を洩さない』とあり、王佐の格古論には『紫檀は諸溪峒に產する。性は堅い。新なるものは色が紅く、舊きものは色が紫で蟹爪文がある。新なるものを浸した水で物を染められる。眞なるものは壁上に揩ると色が紫になるものだ。故に紫檀の(一)色がある。黃檀が最も香しい。いづれも帶䏶、扇骨等の物に作り得る』とある。

〔香　檀〕

白旃檀　氣味　【辛し、溫にして毒なし】大明曰く、熱なり。元素曰く、陽中

(一)色ハ名ノ誤カ。

の微陰であつて、手の太陰、足の少陰に入り、陽明の經を通行する。

【主　治】【風熱腫毒を消す】(弘景)【中惡、鬼氣を治し、蟲を殺す】(藏器)【煎じて服すれば心腹痛、霍亂、腎氣痛を止める。水で磨つて外腎、幷に腰腎の痛處に塗る】(大明)【冷氣を散じ、胃氣を引いて上升し、飲食を進める】(元素)【噎膈吐食。又、顏面に黑子を生じたるには、毎夜漿水で洗ひ拭つて赤からしめ、磨汁を塗るが甚だ良し】(時珍)

【發　明】杲曰く、氣を調へ、芳香の物を引いて極高の分に至るものであつて、橙、橘の屬に最も宜し。佐として薑、棗を用ゐ、輔として葛根、縮砂、益智、豆蔻を用ゐれば陽明の經を通行し、胸膈の上に在り、咽嗌の間に處り、氣を理するの要藥である。

時珍曰く、楞嚴經に『白旃檀を身に塗れば能く一切の熱惱を除く』とある。現に西南の諸番酋がみな諸香を用ゐて身に塗るはこの義を取つたものである。杜寶の大業錄に『隋に壽禪師といふ醫術に妙を得た人があつて、五香飮を作つて一般人を濟つた。それは沈香飮、檀香飮、丁香飮、澤蘭飮、甘松飮で、いづれも香を以て主藥

とし、更に別藥を加へたもので、味があつて渇を止め、兼て補益する」とある。道書では、檀香を浴香といひ、焼いて上眞には供せられぬものとしてある。

紫檀【氣味】【鹹し、微寒にして毒なし】【主治】【惡毒、風毒に摩塗する】(別錄)【刮つて末にし、金瘡に傅ければ血を止め、痛を止める。淋を療ず」(弘景)【醋で磨つて一切の卒腫に傅ける」(大明)

【發明】時珍曰く、白檀は辛、温であつて、氣分の藥である。故に能く衛氣を理して脾、肺を調へ、胸膈を利す。紫檀は鹹、寒であつて、血分の藥である。故に能く營氣を和して腫毒を消し、金瘡を治す。

降眞香（證類）

和名　らかばく（新稱）
學名　Acronychia laurifolia, Bl.
科名　へんるうだ科（芸香科）

【釋名】**紫藤香**（綱目）**雞骨香**　珣曰く、仙傳に、諸香に拌和して烟に焼けば、直ちに上に感じて鶴を引いて降せる。星辰を醮るにはこの香を第一として度籙し、功力極めて驗あるものとしてある。降眞なる名稱はそれに因つたものだ。

時珍曰く、俗に船來のものを番降と呼ぶ。また雞骨と名け、沈香と同じ名稱がある。

集解　愼微曰く、降眞香は黔南に產する。

珣曰く、南海の山中、及び大秦國に生ずる。その香は蘇方木に似たもので、燒いては初は甚だ香しくないが、諸香を配して和すると特に美くなる。藥に入れるには番降の紫にして潤へるものを良しとする。

時珍曰く、今は廣東、廣西、雲南、漢中、施州、永順、保靖、及び占城、暹羅、渤泥、琉球の諸番にいづれもある。朱輔山の溪蠻叢話に『雞骨香、卽ち降香は、本來海南に產する。今の溪峒、僻地に產したものは是に似て非なるものだ、勁瘦で甚だ香しくない』とある。周達觀の眞臘記には『降香は叢林中に生ずる。番民共は頗る坎斫に手數を費してゐる。乃ち樹の心であつて、その外は白

〔降　眞　香〕

くして皮が厚さ八九寸、或は五六寸あり、焚けば氣が勁くして遠い』とある。又、嵇含の草木狀には『紫藤香は、莖長く、葉細く、根は極めて堅く實して重量に皮があり、花は白く、子は黑い。その莖を截つて烟焰中に置くと、久しきを經て紫香と成り、神を降し得る』とある。按ずるに、嵇氏の所說は前者の說とやや異ふ。これは朱氏の所謂る是に似て非なるそのものではあるまいか。抑も中國のものと番降とでは同じくないのであらうか。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【これを燒けば天行時氣、宅舍の怪異を辟ける。小兒がこれを帶びれば邪惡の氣を辟ける】(李珣)【折傷、金瘡を療じ、血を止め、痛を定め、腫を消し、肌を生ず】(時珍)

【發明】時珍曰く、降香は、唐、宋の本草に記載漏れであつたのを唐愼微が始めて增入したのであるが、その功用を記錄してなかつた。現に折傷、金瘡の患者に多くその節を用ゐ、沒藥、血竭に代用されるといふ。按ずるに、名醫錄に『周崈が海寇に刃傷されたとき、血出が止まず、筋が斷れたやう、骨が折れたやうで、花蕊石散を用ゐても效がなかつたが、軍士李高が紫金散を用ゐてこれを掩ふと、血が止

み、痛が定り、翌日は鐵のやうに結痂して遂に愈え、且つ瘢痕がなかつた。その方を訊ねると、それは紫藤香を用ゐたもので、瓷瓦で刮下して研末しただけであつた。これは卽ち降の最も佳いもので、曾て萬人を救つたといふ」とある。羅天益の衛生寶鑑にもやはりこの方を取つて、甚だ效があるといつてある。

【附方】新二　【金瘡出血】降眞香、五倍子、銅花等分を末にして傅ける（醫林集要）【癰疽惡毒】番降末、楓、乳香等分を丸にして薰ずる。惡氣を去つて甚だ妙である。（集簡方）

楠（別錄下品）

和名　なんたぶ（新稱）
學名　Machilus Nanmu, Hemsl.
科名　くすのき科（樟科）

【校正】海藥の枏木皮、拾遺の柟木枝葉を併せ入る。

【釋名】枏　楠の字と同じ。時珍曰く、南方の木である。故に文字は南に從ふ。海藥本草に柟木皮とあるは、卽ち枏の字の誤である。此に正して置く。

【集解】藏器曰く、枏木は高大にして葉は桑のやうである。南方の山中に産す

る。

宗奭曰く、楠材は、現に江南で船を造るにみなこれを用ゐる。その木は性堅くして善く水中で永く持つ。久しくすると中が空になつて、白蟻に穴せられるものだ。

時珍曰く、楠木は南方に生ずるもので、黔、蜀の諸山に尤も多い。その樹は直上し、童童として幢蓋のやうな狀態をなし、枝葉が相礙へない。葉は豫章に似て、大きさして牛耳の如く、一端が尖つてゐる。歲を經て凋まず、新陳相換る。その花は赤黃色、實は丁香に似て色青く、食はれない。

〔楠〕

幹は甚だ端偉なもので、高さは十餘丈、巨なるは數十圍あり、氣が甚だ芬芳である。梁棟、器物としていづれも佳し。蓋し良材である。色の赤きは堅く、白きは脆い。その根に近く、年深く陽に向ふ部分に草木、山水の狀を結成するを、俗に骰柏楠と

呼ぶ。器に作るに宜し。

楠材　氣味　【辛し、微溫にして毒なし】藏器曰く、苦し、溫にして毒なし。大明曰く、熱にして微毒あり。　主治　【霍亂吐下の止まぬには、煮汁を服す】(別錄)【湯に煎じて轉筋、及び足腫を洗ふ。枝、葉も同功である】(大明)

附方　新三。【水腫の足より起るもの】楠木、桐木を削り、煮た汁で足を漬ける。幷に少量を飮む。(肘後方)【心脹腹痛】未だ吐下せぬには、楠木を削つて三四兩を水三升で煮て三沸して飮む。(肘後方)【聤耳の膿を出すもの】楠木を燒き研つて綿杖で繳入する。(聖惠方)

皮　氣味　【苦し、溫にして毒なし】　主治　【霍亂吐瀉、小兒の吐乳。胃を暖め、氣を正す。いづれも煎じて服するが宜し】(李珣)

樟（拾遺）

和名　くすのき
學名　Cinnamomum Camphora, Nees et Eberm.
科名　くすのき科（樟科）

釋名　時珍曰く、その木理に文章が多い。故に樟といふ。

【集解】藏器曰く、江東で舸船に多く樟木を用ゐる。縣名の豫章はこの木に因んで名稱としたものだ。

時珍曰く、西南の處處の山谷にある。木は高さ一丈餘、葉は小さく、楠に似て尖つて長く、背に黄赤の茸毛があり、四時凋まぬ。夏細花を開いて小子を結ぶ。木の大なるものは數抱あり、肌理は細かにして錯縦した文があり、彫刻するに宜し。氣は甚だ芬烈である。豫章といふは二木の名、一類の二種であつて、豫、卽ち鉤樟である。次の條に記載する。

〔樟〕

樟材　【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【惡氣、中惡の心腹痛、鬼疰、霍亂腹脹、宿食不消化で常に酸臭の水を吐するものには、酒で煮て服す。藥のない土地でこれを用ゐる。湯に煎じて脚氣、疥癬、風瘙を浴す。履物にすれば脚氣

を除く。」(藏器)

【發明】　時珍曰く、霍亂、及び乾霍亂で吐すべきものには、樟木屑を煎じた濃汁で吐かすが甚だ良し。又、中惡、鬼氣の卒死者には、樟木を烟に燒いて熏じ、甦るを待つて藥を用ゐる。この物は辛烈にして香竄し、能く濕氣を去り、邪惡を辟けるものだからである。

【附方】　新一。【手足の痛風】冷痛して虎に咬まれるやうに覺ゆるには、樟木屑一斗を急流水一石で煎じ、極めて滾らして泡け、熱に乘じて足を桶上に置いて熏じ、草薦で圍み、湯氣を目に入らしめぬやうにする。その功甚だ捷である。これは家傳經驗の方である。(虞博醫學正傳)

癭節

【主治】　【風痓、鬼邪。】(時珍)

【附方】　新一。【三木節散】風勞で面色が靑白く、肢節が沈重し、膂閭が痛み、或は寒し、或は熱し、或は躁し、或は嗔り、食慾があつて食ふことが不能であり、蟲に侵蝕され、證狀多端なるには、天靈蓋を酥で炙いて研つて二兩、牛黃、人中白を焙じて各半兩、麝香二錢を末にし、別に樟木の瘤節、皂莢木の瘤節、槐木の瘤節を

各〻末にして五兩を用ゐ、三錢づつを水一盞で半盞に煎じて滓を去り、前記の末一錢を調へて五更に頓服する。蟲物を取下して妙である。（聖惠方）

釣樟（別錄下品）

和名　未詳
學名　未詳
科名　くすのき科（樟科）

【校正】拾遺の枕材を併せ入る。

【釋名】烏樟（弘景）　棆　音は綸（リン）である。枕　音は沈（チン）である。豫（綱目）時珍曰く、樟には大、小の二種、紫、淡の二色あつて、これは樟の小なるものである。按ずるに、鄭樵の通志に『釣樟はやはり樟の類であつて、即ち爾雅の所謂「棆は無疵なり」とあるそのものだ』とあり、又、相如の賦に『楩楠豫章』とあり、顏師古の註に『豫、即ち枕木、章、即ち樟木。二木は生じて七年に至つて區別される』とある。これで觀ると、豫は即ち別錄に所謂釣樟そのものだ。根は烏藥に似て香しい。故にまた烏樟と名ける。

【集解】弘景曰く、釣樟は睢陽、邵陵の諸處に產し、また烏樟とも呼ぶ。方家

では用ゐることが少だが、俗間で多く識つてゐる。

恭曰く、郴州の山谷に生ずる。樹は高さ一丈餘、葉は楠葉に似て尖つて長く、背に赤毛があつて枇杷葉上の毛のやうである。八月、九月に根皮を採つて日光で乾す。

炳曰く、根は烏藥に似て香しい。

藏器曰く、枕は南海の山谷に生ずる。舸船に作つては樟木に次ぐ。

根皮　【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【金瘡に血を止める。刮つて屑にして傅けるが甚だ效驗がある】（別錄）【磨つて服すれば霍亂を治す】（蕭炳）【奔豚、脚氣、水腫を治するに、湯に煎じて服す。また瘡痍、疥癬、風瘙を浴するがよし。併に研つて末にして傅ける】（大明）

莖葉　【主治】【門上に置けば天行時氣を辟ける】（蕭炳）

烏藥（宋開寶）

和名　てんだいうやく
學名　Lindera strychnifolia, Vill.
科名　くすのき科（樟科）

【釋名】　旁其（拾遺）鰟魮（綱目）矮樟　時珍曰く、烏とは色を以て名けたもの

だ。その葉の狀態が鰟魮、鯽魚に似てゐるところから、俗に鰟魮樹と呼ぶ。拾遺に旁其と書いたのは地方音の訛である。南方地方ではまた矮樟と呼ぶ。その氣が樟に似たものだ。

〔集解〕藏器曰く、烏藥は嶺南の邕州、容州、及び江南に生ずる。樹が生えてゐるときは茶に似て、高さ一丈餘、一葉三椏で、葉は青くして陰が白い。根の狀態は山芍藥、及び烏樟根に似て、色は黑褐で車轂の紋を作し、横に生える。八月に根を採る。その直根のものは用ゐるに堪へない。

〔烏　藥〕

頌曰く、今は台州、雷州、衡州にいづれもあるが、天台のものを勝れたものとする。木は茶、檟に似て、高さ五七尺、葉は微し圓くして尖り、面青く背白くして紋がある。四五月に黄白色の細花を開き、六月に實を結ぶ、根には極めて大なるものがあり、又、釣樟根に似てゐる。然して

根に二種あり、嶺南のものは黑褐色で堅硬、天台のものは白くして虛軟である。いづれも八月に根を採る。車轂のやうな紋があつて形の連珠のやうなものが佳し。或は、天台のものは香しく白くして愛すべきものだが、海南のものの力の大なるに及ばないともいふ。

承曰く、世間では天台のものを勝れてゐると稱するが、現に洪州、衡州のものに比較して見ると、天台のものは香味が劣つてゐる。藥に入れての功效もやはり及ばない。但だ肉色が頗る赤くしてやや細小なだけだ。

時珍曰く、吳、楚の山中に極めて多く、一般に薪とする。根、葉はいづれも香氣がある。但だ根は甚だ大きくなく、纔に芍藥ほどのものだ。嫩いものは肉が白く、老いたものは肉が褐色である。その子は冬青子のやうで、生では青く熟すると紫になり、核殼は極めて薄い。その仁もやはり香しくして苦い。

根　〔氣味〕【辛し、溫にして毒なし】好古曰く、氣は味より厚し。陽であつて、足の陽明、少陰の經に入る。〔主治〕【中惡、心腹痛、蠱毒、疰忤、鬼氣、宿食の不消化、天行疫瘴、膀胱、腎間の冷氣が背膂を攻衝するもの、婦人の血氣、小

兒腹中の諸蟲】(藏器)【一切の冷、霍亂、反胃吐食、瀉痢、癰癤、疥癘を除き、幷に冷熱を解す。その功は悉く載せ盡せぬ。猫、犬の百病にはいづれも磨つて服ます】(大明)【元氣を理す】(好古)【中氣、脚氣、疝氣、氣厥、頭痛、腫脹、喘急。小便頻數、及び白濁を止める】(時珍)

【發明】宗奭曰く、烏藥は性和であつて、來氣が少く、走泄が多い。但だ甚だ剛猛でない。沈香と共に磨つて湯にして點服すれば、胸腹の冷氣を治するに甚だ穩當である。

時珍曰く、烏藥は辛、溫にして香竄し、能く諸氣を散ずる。故に惠民和劑局方に、中風、中氣の諸證を治するに烏藥順氣散を用ゐた。それは先づその氣を疎したのであつて、氣が順なれば風が散ずる。嚴用和の濟生方に、七情鬱結、上氣喘急を治するに四磨湯を用ゐたのは、降の中に升を兼ね、瀉の中に補を帶びたものであつて、その方は、人參、烏藥、沈香、檳榔を各ゝ濃汁に磨り、七分に合煎して細細に嚥むのである。朱氏集驗方の虛寒、小便頻數を治する縮泉丸にこれを用ゐ、益智子と共に等分を丸にして服するは、その陽明、少陰の經に通ずるを取つたものだ 方は草部

益智子の條下に記載してある。

附方　新十一。【烏沈湯】一切の氣、一切の冷を治し、五臟を補し、中を調へ、陽を壯にし、腰膝を煖め、邪氣、冷風の痲痺、膀胱、腎間の冷氣が背脊に攻衝して俛仰不利なるもの、風水毒腫、吐瀉、轉筋、癥癖刺痛、中惡、心腹痛、鬼氣疰忤、天行瘴疫、婦人の血氣痛を去る。天台烏藥一百兩、沈香五十兩、人參三兩、甘草を爁いて四兩を末にし、毎服半錢を薑鹽湯で空心に點服する。(和劑局方)【一切の氣痛】男女に拘らず、冷氣、血氣、肥氣、息賁氣、伏梁氣、奔豚氣が搶心して切痛し、冷汗し、喘息して絕せんとするには、天台烏藥の小なるものを一夜浸して炒り、茴香を炒り、青橘皮を白を去つて炒り、良薑を炒り、等分を末にし、溫酒、童尿で調へて服す。(衞生家寶方)【男女の諸病】香烏散——香附、烏藥等分を末にし、毎服一二錢を、飲食不進には薑棗湯で服す。瘧疾には乾薑白鹽湯で服す。腹中に蟲あるには檳榔湯で服す。頭風、虛腫には茶湯で服す。婦人の冷氣には米飲で服す。產後血攻の心、脾痛には童尿で服す。婦人の血海痛、男子の疝痛には茴香湯で服す。(乾坤祕韞)【小腸疝氣】烏藥一兩、升麻八錢を水二鍾で一鍾に煎じ、一夜露して空心に熱服す

る。（孫天仁集效方）【脚氣掣痛】田舍村で藥のないときは、初發時に直ちに土烏藥を取り、鐵器を犯さずして布で土を揩り去り、甆瓦で刮つて屑にし、好酒に一夜浸して翌早朝空心に溫服する。溏泄して癒える。麝少量を入れるが尤も佳し。痛の腹に入りたるには、烏藥と雞子とを瓦罐中で水で一日煮て雞子を去り、切片して蘸けて食ひ、湯で送下する。甚だ效がある。（永類鈐方）【血痢、瀉血】烏藥を燒いて性を存して研り、陳米飯で梧子大の丸にし、三十丸づつを米飲で服す。（普濟方）【小兒の慢驚】昏沈し、或は搐するには、烏藥を水に磨つて灌ぐ。（濟急方）【氣厥頭痛】多少に拘らず、及び產後の頭痛には、天台烏藥、川芎藭等分を末にし、毎服二錢を臘茶淸で調へて服す。產後には、鐵錘を紅く燒いて淬した酒で調へて服す。（濟生方）【咽喉閉痛】生烏藥、卽ち矮樟根を酸醋二盞で一盞に煎じ、先づ噙んで後に嚥む。痰涎を吐出して癒える。（經驗方）【孕中に癰あるもの】洪州烏藥の軟白にして香辣なるもの五錢を水一盞、牛皮膠一片と共に七分に煎じて溫服する。これは龔彥德の方である。（婦人良方）【心腹氣痛】烏藥を水で磨つた濃汁一盞に橘皮一片、蘇一葉を入れて煎じて服す。（集簡方）

研藥
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

嫩葉【主治】【炙り碾つて煎じ、茗の代りに飲めば、中を補し、氣を益し、小便滑數を止める】(藏器)

【發明】時珍曰く、烏藥は、下は少陰、腎の經に通じ、上は脾、胃、元氣を理す。故に丹溪朱氏は補陰の丸藥中に往往烏藥葉を加へた。

子【主治】【陰毒傷寒で腹痛し、死せんとするには、一合を取つて炒り、黑烟を起たせて水中に投じ、煎じて三五沸して一大盞を服す。汗が出て陽が囘り、直ちに癒える】(斗門方)

【附錄】研藥　珣曰く、南海の諸州に生ずる小樹であつて、葉は椒のやう、根は烏藥のやうで圓く小さい。根は味苦し、溫にして毒なし。霍亂、下痢赤白、中惡、蠱毒、腹內不調のものに主效がある。剉んで水で煎じて服す。

櫰香

音は懷(クワイ)である。(綱目)

和名　のぐるみ
學名　Platycarya strobilacea Sieb. et Zucc.
科名　くるみ科(胡桃科)

【釋名】兜婁婆香

集解 時珍曰く、櫰香は江淮、湖、嶺の山中にある。木は大なるは一丈ばかりに近く、小なるは多く樵採されて了ふ。葉は青くして長く、鉅齒があり、小薊葉のやうな狀態で香しく、節に對して生える。その根の狀態は枸杞根のやうで大きく、煨けば甚だ香しい。楞嚴經に『壇前に一小爐を安じ、兜婁婆香を以て水に煎じて沐浴す』とあるは卽ちこの香である。

〔櫰　香〕
──兜婁香──

根 氣味 【苦く濇し、平にして毒なし】 主治 【頭癤、腫毒には、末に碾つて麻脂で調へて塗る。七日にして腐落する】(時珍)

必栗香（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】**花木香**　**詹香**

【集解】藏器曰く、必栗香は高山中に生ずる。葉は老椿のやうだ。擣いて上流に置くと、魚が悉く暴腮して死ぬ。この木で書軸を作れば白魚が書を損じない。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【鬼疰心氣、一切の惡氣を斷つには、煮汁を服す。燒いて香とすれば蟲魚を殺す】(藏器)

楓香脂（唐本草）

和名　ふう
學名　Liquidambar formosana Hance.
科・名　まんさく科（金縷梅科）

【釋名】**白膠香**　時珍曰く、楓樹は枝が弱くして善く搖く。故に文字は風に從ふ。俗に香楓と呼ぶ。金光明經にはその香を須薩折羅婆香といつてある。

頌曰く、爾雅には楓を攝といつてある。攝とは風が來ると攝攝として鳴るといふ意味だ。梵書にはこれを薩闍羅婆香といつてある。

【集解】恭曰く、楓香脂は所在の大山中にいづれもある。

頌曰く、今は南方、及び關陝に甚だ多い。樹は甚だ高大で白楊に似てゐる。葉は

圓くして岐を作し、三角があつて香しい。二月に白色の花があり、それに鴨卵ほどの大いさの實を連著する。八月、九月に熟したとき暴乾して焼ける。南方草木狀に『楓實はただ九眞だけにある。これを用うれば神異があり、得難い物である。その

〔楓香〕

脂は白膠香であつて、五月に斫つて坎を作り、十一月に採る』とあり、說文解字には『楓木は葉が厚く枝が弱く、善く搖ぐ。漢の宮殿中に多くこれを植ゑた。霜後になると葉が丹くなつて愛すべきものである。故に楓宸と稱した』とあり、任昉の述異記には『南中に楓子鬼といふがある。木の老いたるものが人の形となるのであつて、また靈楓とも呼ぶ』とある。蓋し瘤癭である。今でも越巫にこれを得るものがあり、鬼神をそれに彫刻して靈異を現すものだとしてある。

保昇曰く、王瓘の軒轅本記に『黃帝は蚩尤を黎山の丘に殺し、その械を太荒の中

に擲つた。それが化して楓木の林となつた』とある。爾雅註に『その脂が地に入り、千年にして琥珀となる』とある。

○時珍曰く、楓木は枝幹が修く聳え、大なるは數圍を連ねたものがある。その木は甚だ堅く、赤あり白あり、白きは細膩である。その實は毬を成し、柔刺がある。嵇含が『楓實はただ九眞だけに産する』といつたものはこの楓なるや否や判らない。孫炎の爾雅正義に『楓子鬼なるものは攝木上の寄生であつて、枝の高さ三四尺、天旱のときに泥をそれに塗れば雨ふる』とある。荀伯子の臨川記には『嶺南の楓木は歳久しくして人の形のやうな瘤を生じ、暴雷、驟雨に遇ふと暗に三五尺長くなる。これを楓人と謂ふ』とある。宋齊丘の化書には『老楓化して羽人となる』とある。數說不同であるが、概して瘻瘤とする說に根據があるやうだ。

香脂　修治　○時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、虀水で煮て二十沸し、冷水中に入れて數十回揉扯し、晒乾して用ゐる。

氣味　【辛く苦し、平にして毒なし】　主治　【癮疹風痒、浮腫には、水で煮て浴する。又、齒痛に主效がある】(唐本)　【一切の癰疽、瘡疥、金瘡、吐衄、咯血、

血を活し、肌を生じ、痛を止め、毒を解す。燒いて牙に揩れば永く牙疾がなくなる】(時珍)

【發明】 震亨曰く、楓香は金に屬して水と火とを有し、その性は疏通する。故にその木には蟲穴があり易い。外科の要藥である。近世ではこれに關する智識がなく、誤つて松脂の淸瑩なるものをこれとしてゐるが、甚しい謬だ。

宗奭曰く、楓香、松脂はいづれも乳香と紛へる。但し楓香は微白黃色であつて、燒けば眞僞が判る。

時珍曰く、楓香、松脂はいづれも乳香と紛へる。その功は乳香に次ぐものではあるが、やはり彷彿として遠からぬものだ。

【附方】 舊一、新十五。【吐血の止まぬもの】白膠香を散にし、毎服二錢を新汲水で調へて服す。(簡要濟衆)【吐血、衄血】白膠香、蛤粉等分を末にし、薑汁で調へて服す。(王璆百一選方)【吐血、咯血】澹寮方では、白膠香、銅青各一錢を末にし、乾柿の中に入れて紙で包み、煨熟して食ふ。○聖惠方では、白膠香を切片して黃に炙いて一兩、新綿一兩を灰に燒き、末にして毎服一錢を米飲で服す。【金瘡斷筋】楓香末を

傅ける。(危氏方)【便癰膿血】白膠香一兩を末にし、麝香、輕粉少量を入れて摻る。(袖珍方)【小兒の奶疽】面上に生ずる。楓香を膏にし、攤して貼る。(活幼全書)【瘰癧、軟癤】白膠香一兩を化開し、蓖麻子六十四粒を研り入れ、膏になるを待つて攤貼する。(儒門事親)【諸瘡の合はぬもの】白膠香、輕粉各二錢を猪脂で和して塗る。(直指方)【一切の惡瘡】水沈金絲膏——白膠香、瀝青各一兩を用ゐ、麻油、黃蠟各二錢半を共に溶したもので化し、冷水中に入れて千遍扯み、攤して貼る。(儒門事親)【惡瘡疼痛】楓香、膩粉等分を末にし、漿水で洗淨して貼る。(壽親養老書)【久、近の脛瘡】白膠香を末にし、酒瓶上の箬葉に末を夾して貼る。(袖珍方)【小兒の疥癬】白膠香、黃蘗、輕粉等分を末にし、羊骨髓で和して傅ける。(儒門事親)【大便不通】白膠香を棗半分の大いさと鼠糞二箇を研り勻ぜて水で和し、挺に作つて肛門に納入する。良久して自ら通ずる。(普濟方)【年久しき牙疼】楓香脂を末にし、香爐內の灰を和勻して每早朝揩擦する。(危氏得效方)【魚骨哽咽】白膠香を細細に呑む。(聖惠方)

木皮　[氣味]【辛し、平にして小毒あり】(蘇恭)　[主治]【水腫に水氣を下す。煮汁を用ゐる】(蘇恭)【煎じて飮むが水痢を止めるに最たるものである】(藏器)【霍亂、

刺風、冷風には湯に煎じて浴す】（大明）

［正誤］藏器曰く、楓皮は性澀であつて、能く水痢を止める。蘇氏は水腫を下すといつたが、水腫は澀藥で療じ得るものでない。又、毒ありといつたが、明にその謬なることが判る。

［附方］新一。［大風瘡］楓子木を燒いて性を存して研り、輕粉と等分を麻油で調へて搽る。極めて妙である。章貢のある鼓角匠がこれを病み、ある道人からこの方を傳へて遂に癒えた。（經驗良方）

根葉［主治］【癰疽の已に成りたるものには、酒に擂つて飲み、滓を貼る】（時珍）

菌［氣味］【毒あり。これを食へば人をして笑つて止まざらしめる。地漿がこれを解す】（弘景）

熏陸香　乳香（別錄上品）

和名　くんりくかう
學名　Pistacia Khinjuk, Stocks.
和名　にうかう
學名　Pistacia Lentiscus, L.
科名　うるし科（漆樹科）

［釋名］馬尾香（海藥）天澤香（內典）摩勒香（綱目）多伽羅香　宗奭曰く、薰陸

卽ち乳香であつて、その垂滴すること乳頭の如きものだ。鎔けて地に塌してあるものを塌香といふ。みな一物である。

時珍曰く、佛書にはこれを天澤香といつてある。その意味はその潤澤なるをいつたのである。又、これを多伽羅香といひ、又、杜嚕香いふ。李珣は、薰陸とは樹皮のこと、乳とは樹脂のことだといひ、陳藏器は、乳は薰陸の類のものだといひ、寇宗奭は、これは一物だといひ、陳承は、薰陸といふはその總名であつて、乳とは薰陸の乳頭なるものだといつたが、今、香譜を參考するに、乳に十餘品あるといつてあるを見ると、乳なるものは薰陸中に於ける乳頭をなす一品であるらしく、陳承の說が理に近い。二物はもと沈香の條下に附記してあり、宋嘉祐本草では二條に分出してあるが、此には諸說に據つて合して一條に併せた。

【集解】恭曰く、薰陸香は形が白膠香に似たもので、天竺に產するものは色が白い。單于に產するものは綠色を夾み、香もやはり甚しくない。

珣曰く、按ずるに、廣志に『薰陸香といふは樹皮の鱗甲であつて、採れば復た生ずる』とある。乳頭香は南海に生ずる。これは波斯の松樹の脂であつて、櫻桃のや

うに紫赤で透明なるものを上とする。
藏器曰く、乳香は卽ち薫陸の類である。
禹錫曰く、按ずるに、南方異物志に『薫陸は大秦國に產し、海邊の地に大樹があつて、枝、葉は正に古松の如く、沙中に生え、盛夏の時に木膠が沙上に流出し、桃膠のやうな狀態になつてゐる。夷人はそれを採取して商人の手に賣渡すのだが、商人が來ないときは自ら食つて了ふ』とある。

〔薫陸・乳香〕

宗奭曰く、薫陸の木は、葉は棠梨(たうり)に類してゐる。南印度の界の呵吒釐(かびり)國(こく)に產し、これを西香といふ。南番のものが更に佳し、卽ち乳香である。
承曰く、西は天竺に產し、南は波斯等の國に產する。西のものは色が黃白、南のものは色が紫赤で、日久しくして重疊(ちようでふ)するものは乳頭と成らずして沙石が雜(まじ)るが、

その乳と成るものは新たに出てまた沙石の雜らぬものである。薰陸といふは總名であつて、乳とは薰陸の乳頭のことである。現に松脂、楓脂中にもやはりこの狀態のものが甚だ多くある。

時珍曰く、乳香は、今は一般に多く楓香を雜へてあるが、ただ燒いて見れば判る。南番諸國にいづれもあつて、宋史には『乳香に一十三等あり』といつてある。按ずるに、葉廷珪の香錄に『乳香、一名薰陸香は大食國の南に產する。その樹は松に類し、斤で樹を斫ると脂が外に溢れ、結して香となり、聚つて塊となる。上品を揀香といひ、圓くして大いさ乳頭ほどの透明なものだ。俗に滴乳と呼び、又、明乳といふ。次は瓶香といひ、瓶に取收めてあるものだ。次を乳塌といひ、沙石の雜るものである。次を黑塌といひ、色が黑い。次を水濕塌といひ、水に漬かつて色が敗れ、氣の變じたものである。次を斫削といひ、雜碎で殆んど問題にならぬ。次を纏末といふ、塵になつてゐて吹き揚がるものだ』とある。これで觀ると、乳には自ら流出するものがあり、樹を斫つて溢れ出るものがあるのである。諸說はいづれもその樹は古松に類すといつてある。寇氏が、棠梨に類すといつたのは恐らくやはり傳聞ら

しい。前者の說に從ふべきである。道書では、乳香、檀香をば浴香といひ、燒いて上眞を祀るべからずとしてある。

【修治】頌曰く、乳は性至て粘して碾り難い。用ゐる時には繒袋に入れて窓隙の間に掛けて置き、良久して取つて研れば粘せなくなる。大明曰く、丸、散に入れるには、微し炒つて毒を殺せば粘せぬ。

時珍曰く、或は、乳香を丸藥に入れるには、少量の酒で研れば泥のやうになる。それを水飛して晒乾して用ゐるといひ、或は、燈心と共に研れば細になり易いといひ、或は、糯米數粒と共に研るといひ、或は、人指甲二三片と共に研るといひ、或は、乳鉢を熱水中に据ゑて乳すればいづれも細になり易いといふ。外丹本草には『乳香の韮實、葱、蒜で煆伏して汁にしたものは最も五金を柔にする』とあり、丹房鑑源には『乳香は銅を啞す』とある。

【氣味】【微溫にして毒なし】大明曰く、乳香は辛し、熱にして微毒あり。元素曰く、苦く辛し、純陽なり。震亨曰く、善く竄して手の少陰の經に入る。

【主治】【薰陸は、風水毒腫に主效があり、惡氣、伏尸、癮疹、癢毒を去る。乳

香と功を同じくす』(別錄)『乳香は、耳聾、中風口噤不語、婦人の血氣を治し、大腸洩澼を止め、諸瘡を療じて內消せしめ、能く酒を發し、風冷を理す』(藏器)『氣を下し、精を益し、腰膝を補し、腎氣を治し、霍亂衝惡、邪氣に中つた心腹痛、疰氣を止める』煎膏は痛を止め、肉を長ずる』(大明)『不眠を治す』(之才)『腎を補し、諸經の痛を定める』(元素)『仙方ではこれを辟穀に用ゐる』(李珣)『癰疽、諸毒の裏に托せるを消し、心を護り、血を活し、痛を定め、筋を伸べ、婦人の產難、折傷を治す』(時珍)

【發明】時珍曰く、乳香は香竄し、能く心の經に入つて血を活し、痛を定める。故に癰疽、瘡瘍、心腹痛の要藥となるのであつて、素問に『諸痛痒、瘡瘍はみな心火に屬す』とあるその意味である。產科の諸方に多くこれを用ゐるは、やはりその血を活すの功を取つたものである。陳自明の婦人良方に『蘄州の長官施少卿は蘄州の徐太丞から神寢丸の方を得た。これは婦人の產月に臨んで服すれば、胎を滑にして分娩を容易ならしめ、極めて效驗があるといふ。通明の乳香半兩、枳殼一兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、每空心に酒で三十丸を服す』とある。李嗣立の癰疽

の初起を治する內托護心散には、香が瘡孔中に徹し、能く毒氣をして外に出でしめ、內攻を致さざらしめるとあり、方は穀部綠豆の條下に記載してある。按ずるに、葛洪抱朴子に『浮炎洲は南海中に在り、薰陸香を產する。これは樹の傷穿した箇處へ木膠が流墮したもので、夷人がこれを採るのだが、恒に猾掘獸にこれを啖はれる患がある。この獸は斫刺しても死なず、杖で打つても皮が傷れぬが、骨が碎けると死ぬ』とある。これを觀ると、乳香の折傷を治するは、能く血を活し痛を止めるからではあるが、またその性の然らしむるところでもある。楊淸叟は『匠人の筋の伸びぬものの敷藥には乳香を加へるが宜し。その性は能く筋を伸べる』といつた。

附方　舊五、新二十六。【口目喎斜】乳香を烟に燒いて熏じ、それでその血脈を順にする。(證治要訣)　【風を祛り、顏を益す】眞乳香二斤、白蜜三斤を瓷器で合煎して餳のやうにし、毎早朝二匙を服す。(奇效方)　【急慢驚風】乳香半兩、甘遂半兩を共に研末し、毎服半錢を乳香湯で服す。尿でもよし。(王氏博濟方)　【小兒の內釣】腹痛する。乳香、沒藥、木香等分を水で煎じて服す。(阮氏小兒方)　【小兒の夜啼】乳香一錢、燈花七箇を末にし、毎服半字を乳汁で服す。(聖惠方)　【心氣疼痛】忍び難きには、乳

香三兩、眞茶四兩を末にし、臘月の鹿血で和して彈子大の丸にし、一丸づつを溫醋で化して服す。（瑞竹堂經驗方）〔冷心氣痛〕乳香一粒、胡椒四十九粒を研り、薑汁を入れて熱酒で調へて服す。（潘氏經驗方）〔陰證呃逆〕乳香を硫黃と共に烟に燒いて嗅ぐ。（傷寒總要）〔瘟疫の辟禳〕每臘月二十四日の五更に、第一番に汲んだ井水に乳香を浸し、元旦の五更に至つて溫熱し、小兒から大人の順序で各人が乳一塊を水で三呷に飮む。それで一年間時災がない。孔平仲は『これは宣理の方であつて、孔氏七十餘代これを用ゐた』といつた。〔夢寐遺精〕拇指大の乳香一塊を就寢時に細に嚼み、三更まで含んで嚥下す。三五服にして效がある。（醫林集要）〔淋癃溺血〕乳香中の夾石のものを取つて研細し、米飮で一錢を服す。（危氏得效方）〔難產の催生〕簡要濟衆方では、黃明なる乳香五錢を末にし、母猪血で和して梧子大の丸にし、五丸づつを酒で服す。○經驗方では、乳香を用ゐ、五月五日の午の刻に、一人を壁內に在つて乳鉢を捧げさせ、一童子を壁外にゐて筆管で壁縫中から一粒づつ乳鉢へ入れさせ、その鉢內で研細して水で莧子大の丸にし、一丸づつを無灰酒で服す。○聖惠方では、明乳香を豆一粒ほどを末にし、新汲水一盞に醋少量を入れ、產婦の兩手に石燕を握つて藥を三

逼心に念じさせてから飲ます。人が數歩を歩行したくらゐのうちに分娩する。〇海上方では、乳香、硃砂等分を末にし、麝香酒で一錢を服す。良久して自ら分娩する。

【咽喉骨哽】乳香一錢を水で研つて服す。(衞生易簡方)【口を香しくし、臭を辟ける】滴乳を嚙む。(摘玄方)【風蟲牙痛】忍び難きものには、梅師方では、薫陸香を嚼んでその汁を嚥む。立ろに瘥える。〇朱氏集驗方では、乳香を豆ほど孔中に置き、燒烟筯で烙き化す。立ろに止む。〇又ある方では、乳香、川椒末各一錢を末にし、化した蠟で和して丸にし、孔中を塞ぐ。〇直指方では、乳香、巴豆等分を研り、蠟で和して丸にして塞ぐ。〇聖惠方では、乳香、枯礬等分を蠟で丸にして塞ぐ。【大風癘疾】摩勒香一斤、卽ち乳頭內の光明なるものを細研し、牛乳五升、甘草末四兩を入れ、瓷盒に盛つて卓子上に置き、その卓子を中庭に据ゑ、劒一口を置き、夜中に北極下に祝禱し、盒子の蓋を去つて一夜露し、翌日甑中に入れて蒸し、三斗の米を炊き熟したとき止め、その夜また前夜と同樣に祝して露し、また同樣に蒸し、三回繰返して止め、每服一茶匙を空心、及び晩食前に溫酒で調へて服す。服後に惡物が出るもので、三日三夜にして瘥える。(聖惠方)【漏瘡膿血】白乳香二錢、牡蠣粉一錢を末に

し、雪糕で麻子大の丸にし、三十丸づつを薑湯で服す。（直指方）【斑豆の不快なるもの】乳香を研細し、猪心血で和して芡子大の丸にし、一丸づつを温水に化して服す。（聞人規痘疹論）【癰疽寒顫】乳香半兩を熟水に研つて服す。顫が脾から發する。乳香は能く脾に入るものだからである。（仁齋直指方）【甲疽弩肉】濃血があり、疼痛して癒えぬには、乳香を末にし、膽礬を燒いて研り、等分を傅ける。內消して癒える。（靈苑方）【玉莖の腫れたるもの】乳香、葱白等分を搗いて傅ける。（山居四要）【野火丹毒】兩足から起りたるには、乳香末を羊脂で調べて塗る。（幼幼新書）【癧瘍風駁】薰陸香、白斂を共に研つて日日に揩る。幷に末にして水で服す。（千金方）【杖瘡潰爛】乳香を油で煎じて瘡口に搽る。（永類鈐方）

沒藥（宋開寶）

和名　もつやく
學名　Commiphora Myrrha, Engl.
科名　かんらん科（橄欖科）

釋名　末藥　時珍曰く、沒といひ、末といふはいづれも梵語である。

集解　志曰く、沒藥は波斯國に生ずる。その塊は大小一定せず、黑色で安息

香に似てゐる。
頌曰く、今は南海の諸國、及び廣州に或はある。木の根株であつて、いづれも橄欖（かんらん）のやうで、葉は青くして密である。歳久しきものは脂液があつて地下に流滴し、凝結

〔沒藥〕

して塊に成る。或は大に、或は小に、やはり安息香に類してゐる。採取に一定の時期はない。
珣曰く、按ずるに、徐表の南州記に『これは波斯の松脂であつて、狀態は神香のやうで赤黒色である』とある。
時珍曰く、按ずるに、一統志に『沒藥の樹は高大にして松の如く、皮は厚さ一二寸。采る時は樹下を掘つて坎となし、斧を用ゐてその皮を伐る。脂は坎に流れ、旬餘にして方に之を取る』とある。
李珣は、乳香は波斯の松脂だといひ、此でも又、沒藥も松脂だといつてゐるが、蓋

し傳聞の誤から出たものだ。所謂神香とは何物をいふのか判らない。

［修　治］　乳香に同じ

［氣　味］　［苦し、平にして毒なし］　［主　治］　［血を破り、痛を止め、金瘡、杖瘡、諸惡瘡、痔漏、卒下血、目中の翳暈痛、膚赤を療ず］（開寶）［癥瘕、宿血を破り、瘀血を損傷し、腫痛を消す］（大明）［心、膽の虛、肝血不足］（好古）［墮胎、及び產後の心腹血氣痛、並に丸散に入れて服す］（李珣）［血を散じ、腫を消し、痛を定め、肌を生ずる］（時珍）

［發　明］　權○曰く、凡そ金刀の所傷、打損、踠跌、墜馬の筋骨疼痛、心腹血瘀のものには、いづれも研爛して熱酒で調へて服するが宜し。陳きを推し、新しきを致し、能く好血を生ずる。

宗○奭○曰く、沒藥は大體滯血を通ずるものであつて、血が滯れば氣が壅瘀し、血が壅瘀すれば經絡が滿急し、經絡が滿急するが故に痛み且つ腫れるのである。凡そ打撲、踠跌はいづれも經絡を傷め、氣血が行らず、瘀壅して腫痛を作すのである。

時○珍○曰く、乳香は血を活し、沒藥は血を散じ、いづれも能く痛を止め、腫を消し、

肌を生ずる。故に二藥は何時の場合でも相兼ねて用ゐる。

附方 舊二、新七。〔歴節諸風〕骨節疼痛して晝夜止まぬには、沒藥末半兩、虎脛骨を酥で炙いて末にして三兩を用ゐ、毎服二錢を溫酒で調へて服す。(圖經本草)〔筋骨損傷〕米粉四兩を黄に炒り、沒藥、乳香末各半兩を入れ、酒で調へて膏にし、攤して貼る。(御藥院方)〔金刃の所傷〕未だ膜に透らぬには、乳香、沒藥各一錢を童尿半盞、酒半盞で溫め化して服す。末にするもよし(奇效良方)〔小兒の盤腸〕氣痛するには、沒藥、乳香等分を末にし、木香を水に磨つて煎沸したもので一錢を調へて服す。立ろに效がある。(楊氏嬰孩寶鑑)〔婦人の腹痛〕內傷、疞刺するには、沒藥末一錢を酒で服すれば止む。(圖經本草)〔婦人の血運〕方は上に同じ。〔血氣心痛〕沒藥末二錢を水一盞、酒一盞で煎じて服す。(醫林集要)〔產後の惡血〕沒藥、血竭末各一錢を童尿、溫酒各半盞で煎沸して服し、良久して再服する。惡血は自ら下つて更に痛を生じない(婦人良方)〔婦人の異疾〕婦人の月經に退出したものがみな禽獸の形となり、來つて人を傷けんとするには、先づ綿で陰戶を塞いでから、沒藥末一兩を頓服し、白湯で調へて服すれば癒える。(危氏方)

騏驎竭（唐本草）

和名　きりんけつ
學名　Calamus Draco, Willd.
科名　しゆろ科（棕櫚科）

【釋名】**血竭**　時珍曰く、騏驎は亦た馬の名である。この物は乾血のやうなものだから血竭といふ。騏驎といつたのは隱名である。舊本には紫鉚と同條に記述してあるが、紫鉚はこの樹上の蟲が造成するものだから、本書では分けて蟲部に入れた。

【集解】恭曰く、騏驎竭の樹は渴留と名け、紫鉚の樹は渴禀と名ける。二物は大同小異のものだ。

志曰く、二物同條に記述してあるが、功效はやはり別なものだ。紫鉚は色が赤くして黑く、その葉は大きくして盤の如く、鉚は葉上から出る。騏驎竭は色が黃にして赤く、木中から松脂のやうに出るものだ。

珣曰く、按ずるに、南越志に『騏驎竭は紫鉚の樹の脂だ』とある。眞僞を試驗するには、但だ嚼んで見て、爛れずして蠟の如きものを上とする。

○頌曰く、今は南番諸國、及び廣州にいづれも出る。木の高さ數丈、婆娑として愛すべく、葉は櫻桃に似て三角あり、その脂液が木中から流出し、滴下して膠、飴のやうな狀態となり、久しくして堅く凝り、乃ち竭と成つて赤くして血色を作すのである。採るに一定の時期はない。舊說には紫鉚と大都そ相類すとしてあるが、これは別の一物であつて、功力も異ふ。

○斅曰く、凡そこれを使用するには、海母血を用ゐてはならぬ。眞に相似てゐるが、ただその物は味が鹹く、幷に腥氣がある。騏驎竭は味が微し鹹く甘く、卮子の氣に似てゐる。

〔騏驎竭〕
—血竭—

○時珍曰く、騏驎竭は樹脂である。紫鉚は蟲が造るものだ。按ずるに、一統志に「血竭樹はほぼ沒藥樹のやうだ、その肌は色が赤い。採取法は、やはり樹下に坎を掘り、斧でその樹を伐ると、脂が坎に流れるのを旬日にして取る。多く大食諸國に出る。

今一般にこれを試るに、指甲を透るものを眞物とする』とある。獨孤滔の丹房鑑源には『この物は西胡から出るもので、熒惑の氣を稟けて結したものだ。火で燒けば赤汁があつて涌出し、久しくして灰となつて本色を變ぜぬものが眞物である』とある。

【修治】斅曰く、凡そこれを使用するには、先づ研つて粉にし、篩つて丸、散中に入れ用ゐる。もし衆くの藥と共に擣くならば、化して塵となつて飛ぶものである。

【氣味】【甘く鹹し、平にして毒なし】大明曰く、蜜佗僧と配合するが良し。

【主治】【心腹卒痛、金瘡血出。積血を破り、痛を止め、肉を生じ、五臟の邪氣を去る】(唐本)【傷折打損、一切の疼痛、血氣攪刺、內傷血聚。虛を補す。いづれも酒で服するが宜し】(李珣)【心包絡、肝血の不足を補す】(好古)【陽精を益し、陰の滯氣を消す】(太淸修鍊法)【一切の惡瘡、疥癬の久しく合せぬものに傅ける。性は急であつて、多く使つてはならぬ、却つて膿を引く】(大明)【滯血諸痛を散ずる。婦人の血氣、小兒の瘈瘲】(時珍)

【發明】時珍曰く、騏驎竭は木の脂液であつて、人の膏血のやうなものだ。その味は甘く鹹くして血に走る。蓋し手、足の厥陰の藥である。肝と心包とにいづれも血を主るものだからである。河間劉氏が『血結に血痛を除き、血を和するの聖藥だ』といつたのはそれである。乳香、沒藥は血病を主とするけれども兼て氣分に入る。この物は血分だけに專らなるものだ。

【附方】舊一、新十一。「白虎風痛」走注して兩膝が熱腫するには、騏驎竭、硫黃末各一兩を用ゐ、一錢づつを溫酒で服す。（聖惠方）「新久脚氣」血竭、乳香等分を共に研り、木香一箇に乳を剜つてその中に藥を入れ、麪で厚く裹み、砂鍋で煮爛し、麪と共に搗いて梧子大の丸にし、三十丸づつを溫酒で服す。生、冷を忌む。（奇效方）「慢驚瘈瘲」魄を定め、魂を安じ、氣を益す。血竭半兩、乳香二錢半を用ゐ、共に搗いて劑にし、火で炙き溶して梧子大の丸にし、毎服一丸を薄荷の煎湯に化して服す。夏期には人參湯を用ゐる。（御藥院方）「鼻に衄血を出すもの」血竭、蒲黃等分を末にして吹く。（醫林集要）「血痔、腸風」血竭末を傅ける。（直指方）「金瘡出血」騏驎竭末を傅ける。立ろに止まる。（廣利方）「產後の血衝」心胸が滿喘し、命須臾に在るもの

には、血竭、沒藥各一錢を硏細し、童尿を和して酒で調へて服す。(醫林集要)【產後の血運】意識を失ひ、及び狂語するには、麒麟竭一兩を硏末し、二錢づつを溫酒で調へて服す。(太平聖惠方)【瘡口を收斂する】血竭末一字、麝香少量、大棗を灰に燒いて半錢を共に硏り、津で調へて塗る。(究原方)【臁瘡の合せぬもの】血竭末を傅け、乾くを以て度とする。(濟急仙方)【嵌甲疼痛】血竭末を傅ける。(醫林集要)【腹中の血塊】血竭、沒藥各一兩、滑石、牡丹皮と共に煮過して一兩を末にし、醋糊で梧子大の丸にして服す。(摘玄方)

質汗（宋開寶）

和名　みいら
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】時珍曰く、汗の音は寒(カン)であつて、番語である。

【集解】藏器曰く、質汗は西番に產する。檉乳、松淚、甘草、地黃、幷に熱血を煎じて造つたものである。番人がこの藥を試るに、小兒の一足を斷ち、この藥を口中に納れ、足を蹋ませて見る。その場で能く走るものを良しとする。

【氣味】〔甘し、温にして毒なし〕【主治】〔金瘡、傷折の瘀血、內損。筋肉を補し、悪血を消し、血氣を下す。婦人産後の諸血結、腹痛、內冷で食物の下らぬには、いづれも酒で消して服す。また病處に傅ける〕(藏器)

【附方】新一。〔處女の月經閉止〕血結して塊と成り、心腹が攻痛するには、質汗、薑黃、川大黃を炒り、各半兩を末にし、一錢づつを温水で服す。(聖濟總錄)

安息香（唐本草）

和名　あんそくかう
學名　Styrax Benzoin, Dryand.
科名　えごのき科（齊墩果科）

【釋名】時珍曰く、この香は悪を辟け、諸邪を安息する。故にかく名けたのである。或は、安息は國の名だともいふ。梵書にはこれを拙貝羅香といつてある。

【集解】恭曰く、安息香は西戎に産する。狀態は松脂のやうで、黃黑色で塊をなし、新たなるものはやはり柔靭である。

珣曰く、南海、波斯國に生ずる。樹中の脂であつて、狀態は桃膠のやうである。秋期に採る。

○禹錫曰く、按ずるに、段成式の酉陽雜爼に『安息香の樹は波斯國に產し、辟邪と呼んでゐる。樹は長さ二三丈あり、皮は色が黃黑である。葉は四角あつて、寒を經て凋まない。二月に花を開き、花は黃色で花心は微碧である。實を結ばない。その樹の皮を刻んで置くと、その膠が飴のやうに出る。それを安息香と名ける。六七月に堅く凝つてから取る。これを燒けば神に通じ、最も惡を辟ける。

○時珍曰く、今は安南、三佛齊の諸香にいづれもある。一統志に『樹は苦楝のやうで、大きくして且つ直く、葉は羊桃に似て長く、木の心に脂があつて香となる』とある。葉廷珪の香錄には『このものは樹の脂であつて、形色は胡桃の穰に類する。燒くには適しないが、しかし能く衆くの香を發するものだ。故に一般にこれを取つて香に和するのである。今世間に香を和するに餳のやうなものがあつて、それを安息油といつてゐる。

〔安息香〕

○機曰く、或は、これを燒けば能く鼠

を集めるものが眞であるといふ。

氣味 【辛く苦し、平にして毒なし】 **主治** 【心腹の惡氣、鬼疰】（唐本）【邪氣、魍魎、鬼胎、血邪、蠱毒を辟ける。霍亂、風痛、男子の遺精に腎氣を暖める。婦人の血噤、并に産後の血運】（大明）【婦人の夜中夢に鬼物と交接するものには、臭黄と共に燒いて丹穴を熏すれば永く斷つ】（李珣）【これを燒けば鬼を去り、神を來す】（蕭炳）【中惡、魘寐、勞瘵傳尸】（時珍）

附方 新四。【卒然の心痛】或は年を經て頻發するには、安息香を研末し、半錢を沸湯で服す。（危氏得效方）【小兒の肚痛】脚を曲げて啼くには、安息香丸――安息香を酒で蒸して膏にし、沈香、木香、丁香、藿香、八角茴香各三錢、香附子、縮砂仁、炙甘草各五錢を末にし、膏に煉蜜を和したもので芡子大の丸にし、毎服一錢を紫蘇湯に化して服す。（全幼心鑑）【小兒の驚邪】安息香を豆一粒ほど燒く。自ら除く。（奇效良方）【歴節風痛】精猪肉四兩を切片して安息香二兩を裹み、瓶に灰を盛つて大いに火を入れ、その火の上に一枚の銅版を載せて隔て、その版上に香を置いて燒き、瓶の口を痛處に對して熏ずる。氣を透らせてはならぬ。（聖惠方）

蘇合香（別錄上品）

和名　そがふかう
學名　Liquidambar altingiana, Bl.
科名　まんさく科（金縷梅科）

【釋名】時珍曰く、按ずるに、郭義恭の廣志に『この香は蘇合國に產する。それでかく名けたのだ』とある。梵書にはこれを咄魯瑟劍といつてある。

【集解】別錄に曰く、蘇合香は中臺の川谷に產する。

恭曰く、今は西域、及び崑崙から來る。紫赤色で紫眞檀と相似て堅く實し、極めて芳香である。性重くして石の如く、燒けば灰白となるものが好し。

頌曰く、今は廣州に蘇合香はあるけれども、ただ蘇木に類したもので香氣がない。藥中には膏油のもののやうで、極めて芬烈なるを用ゐる。陶隱居が獅子の矢としたものは、やはりこの膏油のものを指して言つたのだ。梁書に『中天竺國に蘇合香を出す』とあるが、これは諸香汁で煎じて作つたもので、自然に生ずる一種の物ではない。又『大秦國人は蘇合香を采得し、先づその汁を煎じて以て香膏と爲し、乃ちその滓を賣つて諸國の賈人に與ふ。是を以て展轉し來り、中國に達するものは大い

に香しからず』とある。然りとすれば、廣南で賣つてゐるものはその煎煮した餘滓かも知れぬ。今用ゐる膏油の如きものは合成して造つたものなのだ。

時珍曰く、按ずるに、寰宇志に『蘇合油は安南、三佛齊の諸番國に出る。樹に膏を生じ、藥になる。濃くして滓なきものを上とする』とあり、葉廷珪の香譜には『蘇合香油は大食國に產し、氣味はみな篤耨香に類する』とあり、沈括の筆談には『今の蘇合香は赤色で堅木のやうだ。又、蘇合油といふがあり、黐膠のやうなもので、一般に多くこれを用ゐる』とあるが、劉夢得の傳信方には『蘇合香は多く薄葉子で金のやうな色だ。按せば少くなり、放てば起ち、良久して定らずして蟲のやうに動き、氣の烈しきものが佳し』とある。この說の如しとすれば、全然現に用ゐてゐるものと異ふ。精細なる攷究を要することだが、竊に按ずるに、沈氏の所說も亦た油といつてある。必しも疑ふに及ぶまい。

【正誤】弘景曰く、蘇合香は、俗に獅子屎だと言ひ傳へてあるが、外國の說ではさうでない。今はみな西域から來る。やはり一向藥には入れず、ただ好き香を合せるに供するだけである。

○恭曰く、これは胡人の誑言だ。陶氏はそれが判らなかつたのだ。

○藏器曰く、蘇合香は色が黄白であり、獅子屎は色が赤黑であつて、二物相似てゐるが同じくなく、獅子屎は極めて臭い。或は、獅子屎なるものは西國で草木の皮汁で作つたもので、胡人が將つて來て、極めて貴重なものとするためにその名を飾つたのだともいふ。

［氣味］【甘し、温にして毒なし】［主治］【惡を辟け、鬼精物を殺す。溫瘧、蠱毒、癇痓。三蟲を去り、邪を除き、人をして夢魘なからしめる。久しく服すれば神明に通じ、身を輕くし、天年を長ずる】（別錄）

［發明］時珍曰く、蘇合香は氣が竄して能く諸竅、臟腑に通ずる。故にその功は能く一切の不正の氣を辟けるのである。按ずるに、沈括の筆談に『太尉王文正公は氣羸多病であつたので、宋の眞宗は面たり藥酒一缾を賜り、空腹に飲ませて、以て氣血を和し外邪を辟けしめられた。公はこれを飲んで大いに安健を覺えたので、翌日お禮を言上すると、帝は「これは蘇合香酒といふものだ。酒一斗每に蘇合香丸一兩を入れて共に煮たもので、極めて能く五臟を調和し、腹中の諸疾を却ける。朝

寒を冒して早起するときは一盃づつを飲むがよし」と仰せられた。それ以來臣庶の家でもみなそれに倣つてこの酒を作り、この方が盛にその當時一般に行はれた。その方はもと唐の玄宗の開元廣濟方から出たもので、これを白朮丸といひ、後人はまた千金、外臺に編入した。疾を治するに殊に效のあるものだ』とある。

【附方】 新二。［蘇合香丸］傳尸骨蒸、殗殜肺痿、疰忤鬼氣の卒心痛、霍亂吐利、時氣、鬼魅、瘴瘧、赤白暴痢、瘀血、月閉、痃癖、丁腫、小兒の驚癇、客忤、大人の中風、中氣狐狸等の病を治す。蘇合油一兩を用ゐ、安息香末二兩を無灰酒で熬つて膏にして蘇合油內に入れ、白朮、香附子、青木香、白檀香、沈香、丁香、麝香、蓽撥、訶梨勒を煨いて核を去り、硃砂、烏犀角を鎊つて各二兩、龍腦、薰陸香各一兩を末にし、香膏に煉蜜を加へて和して劑とし、蠟紙に包んで收貯し、毎服梧子大の丸に旋め、早朝井華水を取つて溫、冷隨意のもので四丸を化して服す。老人、小兒は一丸（惠民和劑局方）［水氣浮腫］蘇合香、白粉、水銀等分を搗き勻ぜ、蜜で小豆大の丸にし、毎服二丸を白湯で服す。水を下出するものである。（肘後方）

詹糖香（別錄上品）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】 時珍曰く、詹とはその粘るをいひ、糖とはその狀態をいつたものだ。

【集解】 弘景曰く、晉安、岑州に產する。上眞にして淳なるものは得難い。多くはその皮、及び蠹蟲屎を雜へてある。ただ軟なるものだけを佳しとする。いづれも合香家に要用のもので、正に藥には入れない。

恭曰く、詹糖の樹は橘に似たもので、枝、葉を煎じて香にする。沙糖に似て黑いものだ。交廣以南に產し晉安に生ずる。近頃の方に多く用ゐてある。

時珍曰く、その花もまた香しく、茉莉花の香氣のやうだ。

【氣味】 【苦し、微溫にして毒なし】 【主治】 【風水毒腫。惡氣、伏尸を去る】（別錄）【惡核、惡瘡を治す】（弘景）【胡桃青皮を和して搗き、髮に塗れば漆のやうに黑からしめる】（時珍）

【附錄】 **結殺** 藏器曰く、結殺は西國に生ずる樹の花であつて、極めて香しい。

結殺
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

胡桃仁と共に膏に入れ、香油に和して頭に塗れば頭風白屑を去る。

篤耨香（綱目）

和名　とくじよくかう
學名　Pistacia Terebinthus, L.
科名　うるし科（漆樹科）

釋名

集解　時珍曰く、篤耨香は眞臘國に産する樹の脂である。樹は松のやうな形で、その香は老いると溢出する。色白くして透明なるものを白篤耨と名ける。盛夏にも融けず、香氣が清遠である。土人は、取つて後に夏期に火で樹を炙いて脂液を再び溢れしめ、冬になつて凝つたところをまた取收めるが、その香は夏融けて冬結する。瓠瓢に盛つて陰涼の場所へ置けば融けずにある。樹皮を雜へてあるものは色が黒く、黒篤耨と名けて下品である。

附錄　膽八香　時珍曰く、膽八樹は交趾、南番諸國に生ずる。樹は稚木犀のやうで、葉は鮮紅色で霜楓　類する。その實から油を壓取し、諸香に和して爇けば惡氣を辟ける。

膽八香
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【氣味】（缺）【主治】【面黧、皯䵟には、白附子、冬瓜子、白芨、石榴皮と等分を末にし、酒に三日浸し、洗面後に傅ける。久しくすれば顏が玉のやうに瑩になる】（時珍）

龍腦香（唐本草）

和名　りゆうなうかう
學名　Dryobalanops aromatica, Gaertn.
科名　りゆうなうかう科（龍腦香科）

【釋名】**片腦**（綱目）**羯婆羅香**（衍義）膏を**婆律香**と名ける。時珍曰く、龍腦とはその狀態に因み、貴重の稱を加へたものである。白瑩にして氷の如きもの、及び梅花片を作すものを良しとする。故に俗に氷片腦と呼び、或は梅花腦といふ。番中にはまた米腦、速腦、金脚腦、蒼龍腦等の名稱のものがあり、いづれも形色に因つて命名したものだが、氷片、梅花のものに及ばない。淸めるものを腦油と名ける。金光明經にはこれを羯婆羅香といつてある。

恭曰く、龍腦なるものは樹根中の乾脂である。婆律香なるものは根下の淸脂で、舊婆律國に產したところから國名が名となつたのだ。

【集解】恭曰く、龍腦香、及び膏香は婆律國に產する。樹の形は杉木に似て、腦の形は白松脂に似てゐる。杉木の氣を作し、明淨なるものが善し。久しく風、日を經、或は雀屎の如くなるものは佳くない。或は、子は豆蔻に似て皮に錯甲があり、卽ち杉脂だともいふ。現に江南に杉木があるが、まだ實驗を經ない。或は甘蕉に實がないやうに、その方土地の關係から脂が無いのかも知れぬ。

頌曰く、今はただ南海の外國船の商人が賣つてゐる。南海の山中にも

〔龍腦香〕

あつて、言ひ傳へには、その木は高さ七八丈、太さ六七圍ばかり、積年の杉木のやうな狀態で、旁に枝を生じ、その葉は正圓で背が白く、結實は豆蔻のやうで皮に甲錯がある。香は卽ち木中の脂、膏は卽ち根下の淸液で、それを婆律膏ともいふ。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『龍腦香の樹の名は本來婆律といふのではない 花、

實がなく、その樹に肥えたものと瘦せたものとあつて、瘦せたものから龍腦を出し、肥えたものから婆律を出し、膏香は木心中に在る。波斯國にもこれを產し、その樹を斷つてこれを剪り取るのだが、その膏は樹端から流出するので、樹を斫り坎を作つて承ける』とあつて、この兩說は大同小異である。唐の天寶中に交趾から龍腦を貢納したことがあつて、それはいづれも蟬、蠶のやうな形であつた。彼の地の者の話に、老樹の根節にこの物があるのだが、極めて得難いものだといつた。禁中ではこれを瑞龍腦と呼び、衣衿に帶びると香が十餘步の外に聞えた。後世ではまたこの物がなくなつたといふ。今の海南の龍腦は多く火を用ゐて熘いて片にしてあるので、その中にやはり雜僞のものが容つてゐる。藥に入れるにはただ生のものを貴ぶ。狀態の梅花片のやうなものが甚だ佳し。

○珣曰く、これは西海の波律國の波律樹中の脂であつて、狀態は白膠香のやうだ。その龍腦油といふは、もと佛誓國に產し、樹から取るものである。

○○宗奭曰く、西域記に『西方の抹羅短吒國は南印度の境にあり、羯布羅香といふがある。幹は松株のやうで葉が異ひ、花、果も異ふ。濕へる時は香がなく、木が乾い

た後に理に循つて折ると中に香がある。狀態は雲母に類し、色は氷雪のやうだ』とある。卽ち龍腦香である。

時珍曰く、龍腦香は南番諸國にいづれもある。葉廷珪の香錄に『乃ち深山窮谷中の千年の老杉樹にして、その枝幹の嘗て損動せぬものには香があるのだが、損動すれば氣が洩れて腦がなくなるのだ。土人が板に挽くとき、板縫から腦の出ることがあつて、それを劈き取る。大なるものは花瓣のやうな片を成してゐる。清きものを腦油と名ける』とある。江南異聞錄には『南唐の保大年間に、龍腦漿の貢納があつた。縑囊に龍腦を貯へ、琉璃缾中に入れて懸けて置くと、少頃して滴瀝して水と成る。香氣馥烈にして大いに元氣を補益するといふ』とある。按ずるに、この漿と腦油とはやや異ふが、蓋しやはりその類のものであらう。宋史に『熙寧九年、英州に雷震があつて、一山の梓樹が盡く枯れ、中がみな化して龍腦となつた』とある。これは怪異な話のやうだが、龍腦にはやはり變成するもののあることが考へられる。

〔修治〕恭曰く、龍腦香は、糯米炭、相思子と合せて貯へれば耗らない。時珍曰く、或は、雞毛、相思子と共に小瓷罐に入れて密收するが佳しともいふ。相感志

に、杉木炭を以つて養ふが更に良く、耗らないとある。今は一般に多く樟腦を用ゐて升打して僞作するから、注意を要する。相思子についてはその本條を見よ。

［氣　味］【辛く苦し、微寒にして毒なし】珣曰く、苦く辛し、溫にして毒なし。元素曰く、熱であり、陽中の陽である。［主　治］【婦人難產には、硏末して少量を新汲水で服す。立ろに下る】(別錄)【心腹邪氣、風濕積聚、耳聾。目を明にし、目赤、膚翳を去る】(唐本)【內外障眼。心を鎭め、精を祕し、三蟲、五痔を治す】(李珣)【心盛にして熱あるを散ず】(好古)【骨に入つて骨痛を治す】(李杲)【大腸脫を治す】(元素)【喉痺、腦痛、鼻瘜、齒痛、傷寒舌出、小兒の痘陷を療じ、諸竅に通じ、鬱火を散す】(時珍)

蒼龍腦　［主　治］【風瘡、䵟黯には、膏に入れて煎じるが良し。眼に點けてはならぬ。人を傷める】(李珣)

婆律香膏　［主　治］【耳聾。一切の風を摩す】(蘇恭)

［發　明］宗奭曰く、この物は大いに膈隔の熱塞を通利する。大人、小兒の風涎閉塞、及び暴に起つた驚熱には甚だ濟用のものである。しかし常服の藥ではない。

獨行しては熱が弱く、佐使があれば功がある。茶にもまた相宜きものだが、多ければ茶氣を掩ふ。味甚だ清香で、百藥の先となる。萬物中の香でその右に出るものがない。

震亨曰く、龍腦は火に屬する。世人はその寒にして通利することを知るが、然し未だその熱にして輕浮、飛越することに達してゐない。その香を喜んで細動を貴び、輙ち麝と共に桂、附の助とするが、しかし、人の陽は動し易く、陰は虧け易いものなることを思はねばならぬ。

杲曰く、龍腦は骨に入る。風病の骨髓に在るにはこれを用ゐるが宜し。もし風が血脈、肌肉に在る場合には、輙ち腦、麝を用ゐれば反つて風を引いて骨髓に入れ、油が麪に入るやうなもので出すことが全く困難になる。

王綸曰く、龍腦は大辛にして善く走る。故に能く熱を散じ、結氣を通利する。目痛、喉痺、下疳の諸方に多くこれを用ゐるは、その辛散を取るのである。人の死せんとするもののこれを呑むは氣が散盡するためである。世人は誤つてこれを寒なるものとしてゐるが、實はその辛散の性が涼に似てゐるだけなのである。諸香はみな

陽に屬する。有香のものとして最上のものの性が反つて寒なるわけがあらうか。

時珍曰く、古方の眼科、小兒科に、いづれも龍腦は辛、涼にして心の經に入るといつてあるところから、目病、驚風を治する方に多く用ゐ、痘瘡の心熱、血瘀、倒靨のものにこれを用ゐて、猪血を引いて直ちに心竅に入り、毒氣をして外に宣散せしめるので、血が活し痘が發するとしてあるが、その說はいづれも是に似て實は當らない。目病、驚病、痘病はいづれも火病であつて、火鬱するときは發する從治の法で、辛は發散を主るが故のみである。その氣が先づ肺に入り、心、脾に傳り、能く走し、能く散じ、壅塞を通利せしめて經絡を條達せしめる。而して驚熱は自ら平ぎ、瘡毒が能く出るのである。用ゐた猪心血が能く龍腦を引いて心の經に入るのであつて、龍腦が能く心に入るのではない。沈存中の良方に『痘瘡が周密にして盛なれば黑に變ずるものである。生猪の猪血一橡斗、龍腦半分を用ゐ、溫酒で和して服す』とある。潘氏は『一女子の病は發熱、腰痛し、手足厥逆し、目が漸次に甚しく昏悶し、形證極めて惡しく、痘候ではないかと疑れた。時は暑期であつた。急に屠家の敗血を取寄せ、龍腦を借用して和して服ませると、睡を得て、須臾にして全身

に瘡が出て安かになつた。もしこの方でなかつたならば横死してゐたであらう』といつてある。又、宋の文天祥、賈似道はいづれも腦子を服して自殺を圖つたが目的を達しなかつた。ただ廖瑩中だけは熱酒で數握を服し、九竅に流血して死んだのであつた。これは腦子に毒があるのではない。乃ち熱酒がその辛香を引いて經絡に散溢し、氣血が沸亂してかかる結果に達したのだ。

【附方】 舊二、新十二。【目に膚翳を生じたるもの】龍腦末一兩を日日に三五回點ける。(聖濟總錄) 【目赤、目膜】龍腦、雄雀屎各八分を末にし、人乳汁一合で調へて膏にし、日日に點ける。奏效せぬものなし(聖惠方) 【頭目の風熱】上攻するには、龍腦末半兩、南蓬砂末一兩を頻りに兩鼻に嗃ぐ(御藥院方) 【頭腦の疼痛】片腦一錢を紙に卷いて撚にし、烟に燒いて鼻を熏ずる。痰涎を吐出して癒える。(壽域方) 【風熱喉痺】燈心一錢、黃蘗五分をいづれも燒いて性を存し、白礬七分を煅き、氷片腦三分を末にし、一二分づつを患處に吹く。これは陸一峯の家傳の絕妙方である。(瀕湖集簡方) 【鼻中の息肉】垂下するものには、片腦を點ければ自ら入る(集簡方) 【傷寒舌出】寸に過ぐるものには、梅花片腦半分を末にして摻る。手に隨つて癒える。(洪

邇夷堅志）【中風牙噤】藥を服する門なきときには、開關散を搐る。五月五日の午の刻に龍腦、天南星等分を末にし、一字づつを齒に搐る。二三十遍でその口が自ら開く。【牙齒疼痛】梅花腦、硃砂末各少量を揩れば立ろに止む。（集簡方）【痘瘡狂躁】心煩し、氣喘し、妄語し、或は鬼神を見、瘡の色の赤がまだ透らぬには、經驗方では、龍腦一錢を細研し、猪心血を旋して芡子大の丸にし、毎服一丸を紫草湯で服す。少時して心神が定り、眠を得て瘡が發する。○總微論では、豶猪の第二番血清半盞、酒半盃を和勻し、龍腦一分を入れて溫服する。良久して瘀血を利下すること一二回し、瘡が直ちに紅活する。これは痘瘡黑黶の候で、惡醫の治し得ぬものを治して百發百中である。【內外痔瘡】片腦一二分を葱汁に化して搽る。（簡便方）【酒皶鼻赤】腦子、眞酥を頻りに搽る。（普濟方）【夢漏、口瘡】經絡中の火邪で、夢漏し、恍惚し、口瘡があり、咽燥するには、龍腦三錢、黃蘖三兩を末にし、蜜で梧子大の丸にし、十丸づつを麥門冬湯で服す。（摘玄方）

子　氣味　【辛し、溫なり。氣は龍腦に似たり】　主治　【惡氣を下し、食物を消化し、脹滿を散じ、人の口を香くする】（蘇恭）

元慈勒
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【附錄】**元慈勒**　藏器曰く、波斯國に產する。狀態は龍腦香に似たものだ。これは樹中の脂である。味甘し、平にして毒なし。心病、流血に主效があり、金瘡を合し、腹內の惡血、血痢、下血、婦人の帶下を去り、目を明にし、翳障、風涙、努肉を去る。

樟腦（綱目）

和名　くすのき
學名　Cinnamomum Camphora, Nees et Eberm.
科名　くすのき科（樟科）

【釋名】**韶腦**

【集解】時珍曰く、樟腦は韶州、漳州に產し、龍腦に似て雪のやうに色が白い。胡演の升鍊方に『樟腦を煎ずる法。樟木の新なるものを切片し、井水に三晝夜浸し、鍋に入れて煎じ、柳木で頻りに攪ぜ、汁が半を減じて柳上に白霜のつくを待ち、濾して滓を去り、汁を瓦盆內に傾け入れ、一夜經ると自然に結して塊となる。他の地には樟木はあるけれども腦を取る方法を知らない』とある。又、樟腦を鍊る法。銅盆を用ゐ、陳壁土を粉にしてそれに糁り、それから樟腦を一重糁り、また壁土を糁

る。かく四五重にして薄荷を土上に置き、それに一箇の盆を覆せて黄泥で封固し、火の上で款款に炙き、注意して適度を測る。甚だ過ぎたるも不十分なるも不可である。氣を走らしめぬやうにし、冷えるを候つて取出す。それで腦はみな上の盆に上升する。かくして兩三回升したものは片腦に充てられる。

【修治】時珍曰く、凡そ用ゐるには、毎一兩を二箇の盌で合住し、濕紙で口を糊し、文武火で半時ばかり熁いて取出し、定らしめてから用ゐる　又ある法では、毎一兩に黄連、薄荷六錢、白芷、細辛四錢、荊芥、密蒙花二錢、當歸、槐花一錢を用ゐ、新土盌の底へ杉木片を鋪いてその上にその藥を置き、水半盞を入れ、腦をその上に灑ぎ、再び一箇の盌で合住して口を糊し、火を置いて煨く。水の乾くを待ち、取つて開けばその腦は自ら上に升つてゐる。それを翎で掃き下すのである　形は松脂に似たもので、風熱眼藥に入られる　一般にはやはり多くこれを片腦の僞物にするから辨別に注意を要する

【氣味】【辛し、熱にして毒なし】【主治】【開竅を通じ、滯氣を利し、中惡邪氣、霍亂心腹痛、寒濕脚氣、疥癬風瘙、齲齒を治し、蟲を殺し、蠹を辟ける　鞋

中に入れて置けば脚氣を去る】（時珍）

【發　明】　時珍曰く、樟腦は純陽であつて焔硝と性を同くし、水中で火を生じてその焔はますます熾なものだ。現に丹爐家、及び烟火製造業者が多く用ゐる。辛、熱にして香竄し、龍火の氣を禀けたもので、濕を去り、蟲を殺すがこの物の特長である。故に烟に燒いて衣筐、席簟を熏ずれば、能く壁虱、蟲、蛀を辟ける。李石の續博物志に「脚弱の病人は、杉木で作つた桶で足を濯ひ、樟腦を兩股間に排して帛で綳定する。一个月餘にして甚だ妙だ」とある。王璽の醫林集要方に、脚氣腫痛を治するに、樟腦二兩、烏頭三兩を末にし、醋糊で彈子大の丸にし、一丸づつを足心に置いて踏み、下から微火で烘り、衣被で圍覆する。汗が涎のやうに出て奏效するとある。

【附　方】　新二。【小兒の禿瘡】韶腦一錢、花椒二錢、脂麻二兩を末にし、退猪湯で洗つて後に搽る（簡便方）【牙齒蟲痛】普濟方では、韶腦、硃砂等分を擦る。神效がある。○余居士選奇方では、樟腦、黄丹、肥皂を皮、核を去り、等分を研り勻ぜ、蜜で丸にして孔中を塞ぐ。

阿魏（唐本草）

和名　あぎ
學名　Ferula foetida, Reg.
科名　繖形科

【校正】草部より此に移し入る。

【釋名】**阿虞**（綱目）**薰渠**（唐本）**哈昔泥**　時珍曰く、夷人は自を稱して阿といふ。この物は極めて臭く、阿の畏るものだといふ意味である。波斯國では阿虞と呼び、天竺國では形虞と呼ぶ。涅槃經にはこれを央匱といつてある。蒙古人はこれを哈昔泥といふ。元の時には食用に調味料とし、その根を穩展と名け、羊肉を淹けると甚だ香美で、功は阿魏と同じだといつた。飲膳正要に記載がある。

【集解】恭曰く、阿魏は西番、及び崑崙に生ずる。苗、葉、根、莖は白芷に酷似したものだ。根を擣いた汁を日日に煎じて餅にしたものを上とし、根を截つて穿して暴乾したものはそれに次ぐ。體性は極めて臭いが能く臭を止める。また奇物である。又、婆羅門の云ふ熏渠は卽ち阿魏のことで、根汁を取つて暴して膠のやうにし、或は根を截つて日光で乾すもので、いづれも極めて臭い。西方の國では持咒す

る人はこれを食ふことを禁ずる。常食にこれを用ゐて、臭氣を去るといひ、戎人はこれを重ずる。やはり俗間で胡椒を貴び、巴人が負嚢を重ずるやうなものである。

珣曰く、按ずるに、廣志に『崑崙國に生ずる』とある。これは木の津液で、桃膠

〔阿　魏〕

のやうな狀態である。その色の黒いものは役に立たぬ。その狀態の黄散したものを上とする。雲南の長河中にもあつて、舶來のもののやうに滋味は相似て異りはないが、ただ黄色がない。

頌曰く、今はただ廣州だけにあり、これは木の膏液が滴釀して結成したものだといひ、蘇恭の所說と同じくない。按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『阿魏木は波斯國、及び伽闍那國、即ち北天竺に生ずる。木は長さ八九尺、皮の色は青黄で、三月に鼠耳に似た葉を生じ、花、實がない。その枝の汁が出ると飴のやうで、

久しくすると堅く凝る。阿魏と名ける。摩伽陀國の僧の話には、『その汁を取つて米、豆の屑と和して醸して作つたものだといふ』とある。その説は廣州から提出した報告のものと相近い。

承曰く、阿魏は木部に合してあるが、現に二浙地方の人家でも種ゑてゐる。枝、葉、香氣みな同じでやや淡薄だが、但し汁膏がないだけだ。

時珍曰く、阿魏には草、木の二種あつて、草のものは西域に産し、晒すもよく煎ずるもよし。蘇恭の所説のものがそれである。木のものは南番に産し、その脂汁を取る。李珣、蘇頌、陳承の所説のものがそれである。按ずるに、一統志の所載にはこの二種があつて、『火州、及び沙鹿、海牙國に産するものは草であつて、高さ一尺ばかり、根株は獨立し、枝葉は蓋の如く、臭氣人に逼る。生でその汁を取り、熬つて膏にしたものを阿魏と名ける。三佛齊、及び暹羅國に産するものは樹であつて、甚だ高くはない。土人は竹筒を樹内に納れ、脂がその中に滿つるのを冬期に筒を破つて取る。或は、その脂は最も毒であつて、人は敢て近かない。毎に採る時には、羊を樹下に繋いで遠くから射る。脂の毒が出て羊に著き、羊が斃れるものが卽ち阿魏

であるといふ』とある。これで観ると、この物に二種あることが明だ。蓋しその樹底は小さくして枸杞、牡荊の類のやうである。西と南と風土が不同だから、或は草のやう木のやうに差異があるのだ。羊を繋いで脂を射るの說は俗間にやはり言ひ傳へられてゐるが、但し事實の根據がない。諺に『黃芩に假なく、阿魏に眞なし』といふは、その物に僞物が多いからであつて、劉純の詩に『阿魏は眞なくして却つて眞あり、臭を止む、乃ち珍となす』とある。

炳曰く、世間では、蒜白を煎じて僞物を作るといふことを多くいふ。

斅曰く、これを試驗する法に三ある。第一は、半銖を熟銅器中に一夜置く。翌朝になつて阿魏を沾した處が銀汞のやうに白くして赤色がなくなる。第二は、一銖を五㪷草の自然汁の中に一夜置く。翌朝に至つて鮮血のやうな色になる。第三は、一銖を柚樹上に置く。樹が立ろに乾く、便ちそれが眞物である。凡そ用ゐるには、乳鉢で研細し、熱酒器上で裛して藥に入れる。

氣味 【辛し、平にして毒なし】 主治 【諸小蟲を殺し、臭氣を去り、癥積を破り、惡氣を下し、邪鬼、蠱毒を除く】（唐本）【風邪、鬼疰、心腹中の冷を治す】

（李珣）【傳尸、冷氣。瘟を辟け、瘧を治し、霍亂、心腹痛、腎氣、瘟瘴に主效があり、一切の蕈菜の毒を禦ぐ】（大明）【自死した牛、羊、馬の肉の諸毒を解す】（汪機）

【肉積を消す】（震亨）

發　明　頌曰く、阿魏は細蟲を下すに極めて效がある。

時珍曰く、阿魏は肉積を消し、小蟲を殺す。故に能く毒を解し、邪を辟け、瘧痢、疳勞、尸注、冷痛の諸證を治す。按ずるに、王璆の百一選方に『夔州の譚遠が瘧を病むこと半年に及んだとき、故人竇藏叟が方を授け、眞阿魏、好丹砂各一兩を研り勻ぜ、米糊で和して皂子大の丸にし、毎空心に人參湯で一丸を化して服すると癒えた。世人は瘧を治するに、ただ常山、砒霜の毒物を用ゐ、多く損ずる場合がある。この方は平易だが一般には知られてゐないものだ』とある。草窓周密は『この方は、瘧を治するには無根水で服し、痢を治するには黄連木香湯で服す』といつた。瘧、痢もやはり積滞から多く起るものだからである。

附　方　新十三。【鬼を辟け、邪を除く】阿魏を棗ほどを末にし、牛乳、或は肉汁で煎じ、五六沸して服し、暮になつて乳で安息香を棗ほど服す。久しきものも十日

に過ぎず。一切の菜を忌む　孫侍郎はこれを用ゐて效があつた（唐の崔行功纂要）【惡疰腹痛】忍び難きには、阿魏末一二錢を熱酒で服す。立ろに止む。（永類鈐方）【尸疰中惡】死尸に近づいて惡氣が腹に入ると終身癒えない。阿魏三兩を用ゐ、二錢づつを麪を拌ぜて裹んで餛飩十餘箇を作り、煮熟して食ふ。一日三服、三七日に至つて永く除く　五辛、油物を忌む（聖惠方）【癩疝疼痛】敗精、惡血が結して陰囊の所至に在るには、阿魏二兩を醋で和し、蕎麥麪を餅に作つてそれを裹んで煨熟し、大檳榔二箇に孔を鑽つて乳香を溶して塡滿し、これも蕎麥麪を餅に作つて裹んで煨熟し、硇砂末一錢、赤芍藥末一兩を入れ、糊で梧子大の丸にし、毎食前に酒で三十丸を服す（危氏得效方）【小兒の盤腸】內弔し、腹痛して止まぬには、阿魏を末にし、大蒜半瓣を炮き熟し研り爛らし、それで和して麻子大の丸にし、五丸づつを艾湯で服す。（總微論）【脾積結塊】雞子五箇、阿魏五分、黃蠟一兩を共に煎じ化し、十服に分け、毎空心に細に嚼んで流水で送下する。諸物を忌まぬ。腹痛するが妨ない。十日後に大便に下血し、それで積が化ける（保壽堂經驗方）【痞塊の積あるもの】阿魏五錢、五靈脂を炒つて烟を盡して五錢を末にし、黃雄狗膽汁で和して黍米大の丸にし、空心

に唾津で三十丸を嚥下する。羊肉、醋、麪を忌む。(扶壽精方)【五噎膈氣】方は上に同じ【痎瘧寒熱】阿魏、臙脂各一豆大を研り匀ぜ、蒜膏で和して虎口の上を覆ふ。男は左、女は右。(聖濟總錄)【牙齒蟲痛】阿魏、臭黄等分を末にし、糊で綠豆大の丸にし、一丸づつを綿で裹み、左右に隨つて耳中に挿入する。立ろに效がある。(聖惠方)

盧會(宋開寶)

和名　ろゑ又ろくわい
學名　Aloe vulgaris, Lam.
科名　ゆり科(百合科)

【校正】草部より此に移し入る。

【釋名】**奴會**(開寶)　**訥會**(拾遺)　**象膽**　時珍曰く、名稱の意義は詳でない。藏器曰く、俗に象膽と呼ぶは、その味が苦くして膽のやうだからである。

【集解】珣曰く、盧會は波斯國に生ずる。狀態は黑錫のやうだ。これは樹の脂である。

頌曰く、今はただ廣州から來るものがある。その木は山野中に生ずる。脂涙の滴るものから成るのであつて、採取は時期に拘らぬ。

時珍曰く、盧會はもと草部に記載があつた。藥譜、及び圖經の狀態の記述には、いづれもこれは木脂だといつてあるが、一統志には『瓜哇、三佛齊諸國から產するものは草の屬であつて、狀態は鰲尾のやうだ。これを採り、玉器を以て搗いて膏にする』とあり、前說と同じくないのは如何なるわけであらう。これはやはり木質草形のものかも知れぬ。

〔蘆　薈〕

【氣味】〔苦し、寒にして毒なし〕【主治】〔熱風煩悶、胸膈間の熱氣。目を明にし、心を鎭める。小兒の癲癇、驚風。五疳を療じ、三蟲を殺す。及び痔病、瘡瘻。巴豆毒を解す〕（開寶）〔小兒の諸疳熱に主效がある〕（甄權）〔研末して䘌齒に傅けるが甚だ妙である。濕癬で黃汁を出すを治す〕（蘇頌）

【發明】時珍曰く、盧會なるものは厥陰の經の藥であつて、その功は殺蟲、淸熱に專である。已上の諸病はいづれも熱と蟲とから生ずるものだからだ

頌曰く、唐の劉禹錫の傳信方に『予は少年の頃、曾て癬を患ひ、初めは頸項の間に在つたが、後には延いて左耳に上り、遂に濕瘡と成つて浸淫し、斑蝥、狗膽、桃根の諸藥を用ゐても徒に蜇螫せしめ、その瘡はますます盛になつた。偶、楚州で賣藥人に敎へられ、盧會一兩、炙甘草半兩を研末し、先づ温漿水で癬を洗ひ、拭淨してこれを傅けると、立ろに乾いて癒えた。眞に神奇であつた』とある。

附方　新一。【小兒の脾疳】盧會、使君子等分を末にし、一二錢づつを米飲で服す。（衞生易簡方）

胡桐淚（唐本草）

和名　てりはぼく
學名　Calophyllum Inophyllum, L.
科名　おとぎりさう科（金絲桃科）

校正　草部より此に移し入る。

釋名　胡桐鹼（綱目）　胡桐律　珣曰く、胡桐淚は胡桐樹の脂である。故に淚と名けたのだ。律の字を書くは正しくない。律は淚の發音の訛つたものだ。

時珍曰く、西域傳に『車師國に胡桐多し』とあり、顏師古の註に『胡桐は桐に似

たもので桑には似ない。故に胡桃と名ける。蟲がその樹を食つて汁が出し、下流したものを俗に胡桐淚と名ける。その意味は眼淚に似てゐるからである。その土石に入つて鹵鹼のやうな塊になつたものを胡桐鹼と名ける。鹼は音減（ゲン）であるーとある。或は、律の字は瀝と書くべきもので訛ではない。やはり松脂を瀝青と名けるやうな意味だともいふがやはり通ずる。

集解　恭曰く、胡桐淚は肅州以西の平澤、及び山谷中に產する。形は黃蘗に似て堅く實し、爛木を夾むものもある。これは胡桐樹脂が土石、鹼鹵の地に淪入したものだといふ。その樹は高く太く、皮、葉は白楊、靑桐、桑などに似てゐる。故に胡桐と名けたのだ。木は器用の材料とするに堪へる。

〔淚　桐　胡〕

保昇曰く、涼州以西にある。初生には柳に似て、大きくなれば桑、桐に似る。その

津が下つて地に入り、土石と相染つて薑石のやうな狀態となる、極めて鹹く苦い。水に遇ふと消けて礬石、消石の類のやうだ。冬期に採る。

大明曰く、この物に二般あつて、木律は藥に入れられない。ただ石律だけを用ゐる。これは石上で採るもので、形が小石片子の如く、黃土色のものを上とする。

頌曰く、今は西番にやはりあつて、商人が賣つてゐる。

時珍曰く、木淚は樹脂の流出したものであつて、その狀態は膏、油のやうだ。石淚は脂が土石の間に入つたもので、その狀態は塊をなし、鹵斥の氣を得てゐるところから藥に入れて勝るのである。

【氣　味】【鹹く苦し、大寒にして毒なし】恭曰く、砒石を伏す。金、銀の銲藥に用ゐられる。

【主　治】【大毒熱で心腹煩滿するには、水で和して服し、吐を取る。牛、馬の急黃、黑汗には、水に二三兩を研つて灌ぐ　立ろに瘥える】(唐本)【風蟲牙齒痛に主效があり、火毒、麪毒を殺す】(大明)【風疳䘌齒、骨槽風勞。能く一切の物を軟にする。多服すれば人をして吐せしめる】(李珣)【瘰癧はこれ以外では除けない】(元素)【咽喉の熱痛には、水で磨つて搽き、涎を取る】(時珍)

【發明】頌曰く、古方に稀に用ゐてあるが、今は口齒の患者を治するに多く用ゐ、最要の物となつてゐる。

時珍曰く、石涙は地に入つて鹵氣を受けてゐる。故にその性は寒であつて能く熱を除き、その味は鹹であつて能く骨に入り、堅きを軟にする。

【附方】新六。【濕熱牙疼】喜んで風を吸ふには、胡桐涙に麝香を入れて摻る。【走馬牙疳】胡桐涙半兩を研末し、毎夜貼る。或は麝香少量を入れる(聖惠方)【牙疳宣露】膿血臭氣のものには、胡桐涙一兩、枸杞根一升を用ゐ、五錢づつを水で煎じて熱漱する。○又ある方では、胡桐涙、葶藶等分を研つて摻る(聖惠方)【牙齒の蠹黑】これは腎虚である。胡桐涙一兩、丹砂半兩、麝香一分を末にして摻る(聖濟總錄)

返魂香(海藥)

和名 はんごんかう
學名 Boswellia serrata, Roxb.
科名 かんらん科(橄欖科)

【集解】珣曰く、按ずるに、漢書に『武帝の時、西國より返魂香を進む』とあ

り、内傳に『西海の聚窟州に返魂樹がある　狀態は楓、柏のやうで、花、葉の香が百里に聞える。その根を採つて釜中に入れ、水で煮て汁を取り、錬つて漆のやうにして香が出來上る。その名に返魂、驚精、回生、振靈、馬精、却死の六種ある　凡そ疫死者のあつた時は、豆ばかりを燒いて熏ずれば再び活きる。故に返魂といふ』とある。

時珍曰く、張華の博物志に『武帝の時、西域の月氏國から弱水を度つてこの香三枚を貢した。大いさは燕卵ほどで、黑くして桑椹のやうであつた。長安に大疫流行のとき、西域の使者が請ふて一枚を燒いてその疫を辟けた　すると宮中の病者がそれを聞いて直ちに起ち、香は百里に聞え、數日歇まなかつた。疫死してまた三日經たぬものは、これを熏ずればみな活きた。これは生を返すの神藥である』とある。この說は詭怪に涉る話だが、しかし理外の事であつて、或は有つたことかも知れぬ。ただそれは謬だとして了ふわけには行くまい。

附錄　**兜木香**　藏器曰く、漢武故事に『西王母が降つて兜木香末を燒いた。それは兜渠國から進貢したもので、大豆ほどを宮門に塗ると香が百里に聞えた。關

兜木香
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

中に大疫が流行し、死者相枕する有様であつたとき、この香を聞いて疫がみな止み、死者がみな起つた。この物は靈香であつて、非常の物である』とある。

本草綱目木部第三十四卷　終

本草綱目木部

第三十五卷

本草綱目木部目錄第三十五卷

木の二　喬木類五十二種

檗木 本經 即ち黃檗。　檀桓 拾遺　小檗 唐本

黃櫨 嘉祐　厚朴 本經 浮胡爛羅勒を附す。　杜仲 本經

椿樗 唐本　漆 本經　梓 本經　楸 拾遺

桐 本經　梧桐 綱目　罌子桐 拾遺 鄂桐を附す。

海桐 開寶 雞桐を附す。　楝 本經　槐 本經

檀 拾遺　莢蒾 唐本　秦皮 本經　合歡 本經

皂莢 本經 鬼皂莢を附す。　肥皂莢 綱目　無患子 開寶

欒華 本經　無食子 唐本 即ち沒食子。　訶黎勒 唐本

婆羅得 開寶　櫸 別錄　柳 本經　檉柳 開寶

水楊 唐本　白楊 唐本　扶移 拾遺　松楊 拾遺

楡 本經　榔楡 拾遺　蕪荑 本經　蘇方木 唐本

右附方　舊一百三十五　新三百三十二

木の二　喬木類五十二種

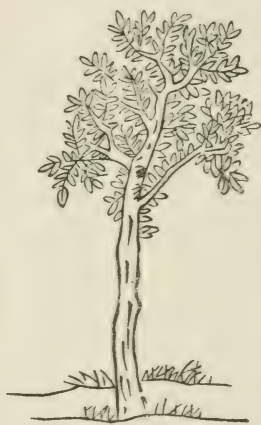
蘗木（本經上品）

和名　きはだ
學名　Phellodendron amurense, Rupr.
科名　へんるうだ科（芸香科）

〔釋名〕黄蘗（別錄）根を檀桓と名ける。時珍曰く、蘗木なる名稱の意義は詳でない。本經には、蘗木及び根を言つて、蘗皮を言つてない。これは古代には木と皮とを通用してゐたものではあるまいか。俗に黄柏と書くは省寫の謬である。

〔蘗木・黄蘗〕
—根を檀桓と名ける—小蘗は樹小さし—

〔集解〕別錄に曰く、蘗木は漢中の山谷、及び永昌に生ずる。

弘景曰く、現に邵陵に產する

ものは輕薄にして色深く、勝れてゐる。東山に產するものは厚くして色が淺く、その根は、道家で木芝の品に入れるが、今一般には取つて服することを知らない。又、一種の小樹があつて、狀態は石榴のやう、その皮は黃にして苦く、俗に子蘗と呼ぶ。やはり口瘡に主效がある。又、一種の小樹は刺皮が多く、これも黃色で、やはり口瘡に主效がある。

恭曰く、子蘗はまた山石榴とも名ける。子は女貞に似て、皮は白くして黃でない。また小蘗とも名け、所在にある。此に『皮は黃なり』といつたのは謬である。按ずるに、今俗に用ゐる子蘗はみな多くは刺小樹であつて、刺蘗と名ける。小蘗ではない。

禹錫曰く、按ずるに、蜀本圖經に『黃蘗は樹の高さ數丈、葉は吳茱萸に似て、また紫椿のやう、冬を經て凋まず。皮は外が白くして裏が深黃色である。その根は松下の茯苓のやうに結塊してゐる』とある。今は所在にあるが、もとは房、商、合等の州の山谷中に出たもので、皮は緊つて厚さ二三分、鮮黃なるものが上である。二月、五月に皮を採つて日光で乾す。

機曰く、房、商のものは裏を治し、下を治するに用ゐ、邵陵のものは表を治し、上を治するに用ゐ、それぞれ用途の適宜がある。

頌曰く、處處にあるが、蜀中に產したもの肉厚く色深きを佳しとする。

修治　斆曰く、凡そ蘗皮を使ふには、粗皮を削去り、生蜜水に半日浸し、漉し出して晒し乾し、蜜を塗つて文武火で炙き、蜜を盡さしむるを度とする。每五兩に蜜三兩を用ゐる。

元素曰く、二制のものは上焦を治し、單制のものは中焦を治し、制せぬものは下焦を治す。

時珍曰く、黃蘗は性寒にして沈む。生で用ゐれば實火を降し、熟して用ゐれば胃を傷めぬ。酒で制すれば上を治し、鹽で制すれば下を治し、蜜で制すれば中を治す。

氣味　【苦し、寒にして毒なし】元素曰く、性は寒にして味は苦し。氣味俱に厚く、沈にして降る。陰である。又云く、苦が厚くして微し辛し。陰中の陽であつて、足の少陰の經に入り、足の太陽の引經の藥である。

好古曰く、黃芩、梔子は肺に入り、黃連は心に入り、黃蘗は腎に入つて濕を燥す。

歸するところはそれぞれその類に從ふ。故に活人書の四味解毒湯は上下、內外通治の藥である。

○之才曰く、乾漆を惡み、硫黃を伏す。

【主治】【五臟、腸、胃中の結熱、黃疸、腸痔。洩痢を止める。女子の漏下赤白、陰傷蝕瘡】（本經）【驚氣が皮間に在つて肌膚熱し赤起するもの、目熱赤痛、口瘡を療ず。久しく服すれば神に通ずる】（別錄）【熱瘡皰起、蟲瘡、血痢。消渴を止め、蛀蟲を殺す】（藏器）【男子の陰痿。及び莖上の瘡に傅ける。下血の雞鴨の肝片の如きを治す】（甄權）【心を安じ、勞を除き、骨蒸を治す。肝を洗ひ目を明にする。多淚、口乾、心熱。疳蟲を殺し、蚘心痛、鼻衄、腸風の下血、後急、熱腫痛を治す】（大明）【膀胱の相火を瀉し、腎水不足を補し、腎を堅くし、骨髓を壯にし、下焦の虛、諸痿、癱瘓を療じ、下竅を利し、熱を除く】（元素）【伏火を瀉し、腎水を救ひ、衝脈氣逆で渴せずして小便不通のもの、諸瘡痛の忍び難きものを治す】（李杲）【知母と配合すれば陰を滋くし、火を降す。蒼朮と配合すれば濕を除き、熱を清し、痿を治するの要藥である。細辛と配合すれば膀胱の火を瀉し、口舌に生じたる瘡を治す】（震亨）【小兒

の頭瘡に傅ける】（時珍）

【發明】 元素曰く、黄蘗の用途に六あつて、膀胱の龍火を瀉するが一、小便結を利するが二、下焦の濕腫を除くが三、痢疾に先づ血を見るが四、臍中痛が五、腎の不足を補し、骨髓を壯にするが六である。凡そ腎水、膀胱不足の諸痿厥で腰の無力なるには、黄芪湯中に加へて用ゐれば、兩足膝中の氣力を涌出せしめて痿軟が直ちに去る。乃ち癱瘓に必用の藥である。蜜で炒つて研末すれば、口瘡を治するに神の如くである。故に雷公炮炙論にいふ口瘡、舌折、立ろに癒える黄酥とは、酥を以て根を炙いて黄にして含むことをいつたものだ。

杲曰く、黄蘗、蒼朮は痿を治する要藥である。凡そ下焦の濕熱で腫、及び痛を作し、幷に膀胱に火邪があり、幷に小便利せず、及び黄澀するを去るには、いづれも酒で黄蘗、知母を洗つて君とし、茯苓、澤瀉を佐とする。凡そ小便通ぜずして口渇するものは、邪熱が氣分に在り、肺中に伏熱して水を生ずることが不能になる。そこで小便の源が絶するのである。原則として氣味倶に薄き淡滲の藥、猪苓、澤瀉の類を用ゐ、肺火を瀉して肺金を清し、水の化源を滋すべきものである。もし邪熱が下焦の血分

に在り、渇せずして小便不通のものは、乃ち素問に所謂『陰無きときは陽以て生ずることなく、陽無きときは陰以て化することなし。膀胱は州都の官にして津液焉に藏す。氣化するときは能く出づ』るのである。原則として氣味俱に厚き陰中の陰藥を用ゐて治すべきもので、黃蘗、知母がそれである。長安の王善夫は小便不通を病み、漸次に中滿と成り、腸が石のやうに堅く、脚腿が裂破して水を出し、雙睛が凸出し、飲食が下らず、痛苦名狀すべからざる有樣で、滿を治し小便を利する滲洩の藥はあらゆるものを服し盡したのであつた。予はそれを診て、これは贅澤過ぎる生活から、膏粱の積熱で腎水を損傷し、膀胱が久しく乾涸し、小便が化せず、火また逆上して嘔噦するものだといつた。難經に所謂『關は則ち小便するを得ず、格は則ち吐逆す』といふそのもので、潔古老人は『熱の下焦に在るはただ下焦を治す。その病必ず癒ゆ』といつてある。そこで處方に、北方寒水の化するところの大苦寒の藥、黃蘗、知母各一兩を酒で洗つて焙じ碾り、桂一錢を入れて引とし、熟水で芡子ほどの大いさの丸にし、毎服二百丸を沸湯で服ませた。すると少時して刀で前陰を刺すやう、火で燒くやうに覺え、尿が瀑泉のやうに涌出して床下に流を成し、兎角する間に腫

脹が消散した。内經に『熱者は之を寒す。腎は燥を惡む。急に辛を食つて以て之を潤す。黃蘗の苦寒を以て熱を瀉し、水を補し、燥を潤すを君と爲し、知母の苦寒、腎火を瀉するを佐とし、肉桂の辛熱を使とす。寒因熱用なり』とある。

震亨曰く、黃蘗は至陰に走り、火を瀉し、陰を補するの功がある。陰中の火でなければ用ゐてはならぬ。火に二あつて、君火は人火であり、心火であつて、濕を以て伏すべく、水を以て滅すべく、直を以て折くべく、黃連の屬で以て制すべきものである。相火は天火であり、龍雷の火であり、陰火であつて、水、濕を以てこれを折くわけに行かぬ。その性に從つてこれを伏すべきものであつて、ただ黃蘗の屬で降し得る。

時珍曰く、古書に『知母を黃蘗に佐とすれば陰を滋し、火を降し、金水相生の意味がある。黃蘗に知母がなければ水母に蝦がないやうなものだ』といつてある。蓋し黃蘗は能く膀胱、命門の陰中の火を制し、知母は能く肺金を淸して腎水の化源を滋するものだ。故に潔古、東垣、丹溪はいづれも滋陰、降火の要藥としたのであつて、上古に未だ言はなかつたところである。蓋し氣は陽であり、血は陰であつて、

邪火が煎熬すれば陰血が次第に涸れる。故に陰虛、火動の病にはこれを用ふべきだが、然し必ず少壯、氣盛にして十分食事の攝れるものに用ゐて適當なのであつて、もし中氣不足にして邪火の熾甚なものが久しく服するときは寒中の變がある。近頃、虛損、及び慾を縱にして嗣を求める人が、補陰の藥として往往この二味を君藥として用ゐ、日日に服餌して、降の令が太だ過ぎ、脾、胃に傷を受け、眞陽が暗に損じ、精氣が暖ならずして他の病を惹き起してゐるものがあるが、蓋しこの物は苦寒にして滑、滲であり、且つ苦味は久しく服すれば反つて火化に從ふの害あることを知らぬのである。故に葉氏の醫學統旨に、四物に知母、黃蘗を加へて久服すれば、胃を傷め、陰を生ずる能はずとの戒があるのだ。

【附方】 舊十二、新三十一。【陰火の病となつたもの】大補丸――黃蘗を皮を去り、鹽酒で炒つて褐にして末にし、水で梧子大の丸にし、血虛には四物湯で服す。氣虛には四君子湯で服す。(丹溪方) 【男女の諸虛】孫氏集效方の坎離丸――男子、婦人の諸虛百損、小便淋瀝、遺精白濁等の證を治す。黃蘗を皮を去り、切つて二斤、熟糯米一升、童尿に浸して九回浸し九回晒して蒸し晒し、研つて末にし、酒で煮た麪糊

で梧子大の丸にし、毎服一百丸を溫酒で送下する。【上盛下虛】水火偏盛、消中等の證には、黃蘗一斤を四分して醇酒、蜜湯、鹽水、童尿で浸し洗ひ、晒し炒つて末にし、知母一斤を毛を去つて切り、搗いて熬膏し、和して梧子大の丸にし、七十丸づつを白湯で服す。(活人心統)【四治坎離諸丸】方は草部蒼朮の條下に記載してある。

【臟毒痔漏】下血して止まぬには、孫探玄集效方の蘗皮丸——川黃蘗皮を用ゐ、刮り淨めて一斤を四分にし、三分をば酒、醋、童尿で各〻七日浸し洗つて晒し焙じ。一分をば生で炒つて黑色にし、末にして煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に溫酒で服す。久しく服すれば根を除く。○楊誠經驗方の百補丸——專ら諸虛、赤白濁を治す。川蘗皮を刮淨して一斤を四分にし、酒、蜜、人乳、糯米泔で各〻浸透し、炙き乾して切つて研り、廩米飯で前記の法の如く丸にして服す。○又、陸一峯の蘗皮丸——黃蘗一斤を四分にし、三分をば醇酒、鹽湯、童尿で各〻二日浸して焙じ研り、一分をば酥で炙いて研末し、前記の法の如くにして服す。【下血の數升に達するもの】黃蘗一兩を皮を去り、雞子白を塗つて炙いて末にし、水で綠豆大の丸にし、毎服七丸を溫

水で服す。金虎丸と名ける。（普濟方）【小兒の下血】或は血痢。黃蘗半兩、赤芍藥四錢を末にし、飯で麻子大の丸にし、毎服一二十丸を食前に米飲で服す。（閻孝忠集效方）【妊娠下痢】白色のものを晝夜三五十回下すには、根の黃にして厚きものを蜜で炒り焦して末にし、大蒜を煨熟し、皮を去り搗き爛らして和して梧子大の丸にし、空心に米飲で三五十丸づつを服す。一日三服。述べ盡せぬ神妙なものである。（婦人良方）【小兒の熱瀉】黃蘗を皮を削り焙じて末にし、米湯で和して粟米大の丸にし、一二十丸づつを米湯で服す。（十全博救方）【赤白濁淫】及び夢洩、精滑、眞珠粉丸――黃蘗を炒り、眞蛤粉各一斤を末にし、一百丸づつを空心に溫酒で服す。黃蘗は苦くして火を降し、蛤粉は鹹くして腎を補す。又ある方では、知母を炒り、牡蠣粉を煅き、山藥を炒り、等分を加へて末にし、糊で梧子大の丸にし、八十丸づつを鹽湯で服す。（潔古家珍）【積熱夢遺】心忪し、恍惚し、膈中に熱あるには、清心丸を主とするが宜し。黃蘗末一兩、片腦一錢を煉蜜で梧子大の丸にし、十五丸づつを麥門冬湯で服す。これは大智禪師の方である。（許學士本事方）【消渴で尿多きもの】食事の十分なるもの、黃蘗一斤を水一升で煮て三五沸し、渴したとき飲み、飲めるだけ飲む。數日

にして止む。(韋宙獨行方)　【嘔血熱極】黄蘗を蜜を塗つて炙き乾して末にし、麥門冬湯で二錢を調へて服す。立ろに瘥える。(經驗方)【時行赤目】黄蘗を粗皮を去つて末にし、濕紙で包裹し、黄泥で固めて煨き乾し、毎一彈子ほどを紗帕に包み、水一盞に浸して飯上で蒸熟し、熱に乘じて熏じ洗ふ。極めて效がある。この方には金、木、水、火、土があるところから五行湯と名ける。一丸で二三回使用し得る。(龍木論)【嬰兒の赤目】蓐內に在るものの人乳で黄蘗を浸し、その汁を點ける。(小品方)【眼目昏暗】毎早朝黄蘗一片を含んで津を吐き、その津で洗ふ。終身これを行へば永く目疾がない。(普濟方)【卒喉痺痛】黄蘗片を含む。又、一斤を酒一斗で煮て、二沸して任意に飲めば癒える。(肘後方)【咽喉卒腫】飲食の通らぬには、苦酒で黄蘗末を和して傅け、冷えれば易へる。(肘後方)【小兒の重舌】黄蘗を苦竹瀝に浸して點ける。(千金方)【口舌に生じた瘡】外臺では黄蘗を用ゐ、含むが良し。○深師では、蜜で漬け、汁を取つて含み、涎を吐く。○寇氏衍義では、心、脾に熱あつて舌、頰に瘡を生じたるを治す。蜜で黄蘗を炙き、青黛と各一分を末にし、生龍腦一字を入れて摻り、涎を吐く。○赴筵散――黄蘗、細辛等分を末にして摻る。或は黄蘗、乾薑等分を用ゐるも

良し。【口疳臭爛】綠雲散——黄蘗五錢、銅綠二錢を末にして摻り、漱いで涎を去る。(三因方)【鼻疳で蟲あるもの】黄蘗二兩を冷水に一夜浸し、汁を絞つて溫服する(聖惠方)【鼻中に生じた瘡】黄蘗、檳榔末を猪脂で和して傅ける。(普濟方)【唇瘡痛痒】黄蘗末を薔薇根汁で調へて塗る。立ろに效がある(聖濟錄)【髪毛毒瘡】頭中に生じ、初生には蒲桃のやうで甚しく痛む。黄蘗一兩、乳香二錢半を末にし、槐花を煎じた水で調へて餅にし、瘡口に貼る。(普濟方)【小兒の顖腫】生れると直ちに腫れたるには、黄蘗末を水で調へて足心に貼る。(普濟方)【傷寒遺毒】手足が斷れるほどに腫痛するには、黄蘗五斤、水三升を煮て漬ける。(肘後方)【癰疽乳發】初起のものには、黄蘗末を雞子白で和して塗り、乾けば易へる。(梅師方)【癰疽腫毒】黄蘗皮を炒り、川烏頭を炮き、等分を末にして唾で調へて塗り、頭を留め、頻りに米泔水で潤濕する。(集簡方)【小兒の臍瘡】合はぬには、黄蘗末を塗る。(子母祕錄)【小兒の膿瘡】遍身乾かぬには黄蘗末に枯礬少量を入れて摻る。直ちに癒える。(楊起簡便方)【男子の陰瘡】二種あり、一は陰蝕が臼を作して膿が出る。一はただ熱瘡を生ずる。熱瘡には黄蘗、黄芩等分の煎湯で洗つてから、黄蘗、黄連を末にして傅ける。○又ある法

では、黄蘗の洗湯で洗つて白蜜を塗る。(肘後方)【臁瘡熱瘡】黄蘗末一兩、輕粉三錢を猪膽汁で調へて塗る。或はただ蜜で炙いた黄蘗の一味を用ゐる。【火毒で生じた瘡】凡そ人の冬期に火に向ひ、火氣が內に入つて兩股に瘡を生じ、その汁の淋漓たるには、黄蘗末を摻れば立ろに癒える。一婦人がこれを病み、人の識るものが無かつたが、これを用ゐて癒えたことがある。(張杲醫說)【凍瘡裂痛】乳汁で黄蘗末を調へて塗る。(儒門事親)【自死肉の毒】自死した六畜には毒がある。黄蘗末方寸匕を水で服す。(肘後方)【瘡を斂め、肌を生ずる】黄蘗末を麪糊で調へて塗れば效がある。(宣明方)

檀桓(拾遺)

和名　きはだ(根)
學名　Phellodendron amurense, Rupr. (root)
科名　へんろうだ科(芸香科)

【集解】藏器曰く、檀桓といふは百歳の蘗の根であつて、天門冬のやうで長さ三四尺、別に一旁にある小根を以て綴られてある。一名檀桓芝と名ける　記載は靈寶方にある。

時珍曰く、本經にはただ黃蘗の根を檀桓と名けるといつてある。陳氏の所說では蘗の旁(かたはら)に生ずるところの檀桓芝であつて、陶弘景の所說と同じである。

【氣味】〔苦し、寒にして毒なし〕【主治】〔心腹の百病。魂魄を安じ、饑渴(きかつ)せず。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べ、神に通ずる〕(本經)〔長生し、神仙となる　萬病を去るに、散として方寸匕を飮服し、一箇を服し盡せば效驗がある〕(藏器)

小蘗(唐本草)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】子蘗(弘景)　山石榴　時珍曰く、この物と金櫻子、杜鵑花(さけんくわ)といづれも山石榴と名けるが、一物ではない。

【集解】弘景曰く、子蘗は樹が小さくして狀態は石榴の如く、その皮は黃にして苦い。又、一種は刺が多く、皮はやはり黃である。いづれも口瘡に主效がある。

恭曰く、小蘗は山石の間に生じ、所在にいづれもあるが、襄陽の峴山(けんざん)の東のもの

を良しとし、一名を山石榴といふ。その樹は、枝、葉は石榴と別なく、ただ花が異ふ。子は細くして黒く圓く、牛李子、及び女貞子のやうなものだ。その樹皮は白い。陶氏か、皮は黄だといつたのは恐らく謬(あやまり)である。現に太常で貯藏されるものは小樹で、刺が多くして葉の細いものだ。刺蘗(しはく)と名ける。小蘗ではない。

藏器曰く、凡そ蘗といふ木はみな皮が黄である。此には既に黄でないといふのだから蘗ではないのだ。小蘗は石榴のやうで皮が黄であり、子は赤くして枸杞子(くこし)のやう、兩頭が尖つてゐる。一般に枝を剉んで物を黄に染めるものだ。子が黒くして圓いといふやうなものは、恐らく別物であつて小蘗ではない。

時珍曰く、小蘗は山間に時にある。小樹であつて、その皮は外が白く裏が黄で、蘗皮のやうな狀態で薄く小さい。

氣味 【苦し、大寒にして毒なし】 主治 【口瘡、疳䘌(かんちく)。諸蟲を殺し、心腹中の熱氣を去る】(唐本) 【血崩を治す】(時珍) ○婦人良方の血崩を治する阿茄陀丸(あかだぐわん)の方中にこれを用ゐてある。

黄櫨（宋嘉祐）

和名　まるばはぜ（新稱）
學名　Rhus Cotinus, L.
科名　うるし科（漆樹科）

集解　藏器曰く、黄櫨は商、洛の山谷に生じ、四川の界に甚だある。葉は圓く、木は黄で黄色の染料になる。

〔黄櫨〕

木

氣味　【苦し、寒にして毒なし】

主治　【煩熱を除き、酒疸目黄を解す。水で煮て服す】（藏器）【赤眼、及び湯火、漆瘡を洗ふ】（時珍）

附方　新一。【大風癩疾】黄櫨木五兩を剉み、新汲水一斗に二七日浸して焙じ研り、蘇枋木五兩、烏麻子一斗を九蒸九暴し、天麻二兩、丁香、乳香一兩を末にし、赤黍米一升を淘淨し、黄櫨を浸した水でその米を煮て粥にし、搗き和して梧子大の丸にし、每服二三十丸を食後に漿水で服す。日中二回、夜一回。（聖濟總錄）

厚朴（本經中品）

和名　しなほゝのき（新稱）
學名　Magnolia officinalis, Rehd. et Wils.
科名　もくれん科（木蘭科）

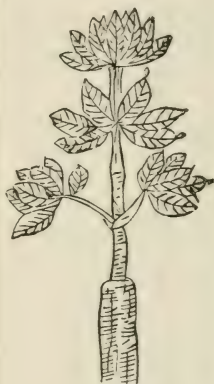
【校正】有名未用の逐折を併せ入る。

【釋名】**烈朴**（日華）**赤朴**（別錄）**厚皮**（同）**重皮**（廣雅）樹を**榛**と名ける。（別錄）子を**逐折**と名ける。（別錄）時珍曰く、その木は質朴にして皮が厚く、味が辛烈で色が紫赤である。故に厚、朴、烈、赤の諸名がある。頌曰く、廣雅にはこれを重皮といひ、方書には或は厚皮と書く。

【集解】別錄に曰く、厚朴は交趾、冤句に生ずる。三月、九月、十月に皮を採つて陰乾する。

弘景曰く、今は建平、宜都に出る。極めて厚くして肉の紫色なるを好しとする。殼薄くして白きものは佳くない。俗方に多く用ゐ、道家では須ゐない。

〔厚朴〕

い。

頌曰く、今は洛陽、陝西、江淮、湖南、蜀川の山谷中に往往あるが、梓州、龍州のものを上とする。木は高さ三四丈、徑一二尺、春、槲葉のやうな葉を生じ、四季凋まず、花は紅くして實は青く、皮は極めて鱗皺があつて厚く、紫色で潤ひ多きものが佳し。薄くして白きものは問題にならぬ。

宗奭曰く、今は伊陽縣、及び商州にもあるが、ただ薄くして色淡く、梓州のものの厚くして紫色で油あるものに及ばない。

時珍曰く、朴樹は膚白く肉紫で、葉は槲葉の如く、五六月に細花を開いて冬青子のやうな細實があり、生では青く熟すれば赤く、核がある。七八月に採ると味が甘美である。

皮【修治】斆曰く、凡そ使ふには、必ず紫色にして味辛きものを用ゐるを好しとする。粗皮を刮り去つて丸、散に入れる。每一斤に酥四兩を用ゐて炙熟して用ゐる。湯飲に入れる場合には、自然薑汁八兩を用ゐて盡くるを度として炙く。大明曰く、凡そ藥に入れるには、粗皮を去り、薑汁を用ゐて炙く。或は浸し炒つて用ゐ

る。宗奭曰く、味苦く、薑で制せねば人の喉舌を棘する。

〔氣味〕【苦し、溫にして毒なし】別錄に曰く、大溫なり。吳普曰く、神農、岐伯、雷公は苦し、毒なしといひ、李當之は小溫なりといふ。權曰く、苦く辛し、大熱なり。元素曰く、氣は溫、味は苦く辛し。氣味倶に厚く、體は重濁にして微し降る。陰中の陽である。杲曰く、升によく、降によし。之才曰く、乾薑が使となる。澤瀉、消石、寒水石を惡み、豆を忌む、これを食へば氣を動ずる。

〔主治〕【中風、傷寒の頭痛、寒熱、驚悸、氣血痺、死肌、三蟲を去る】(本經)【中を溫め、氣を益し、痰を消し、氣を下し、霍亂、及び腹痛、脹滿、胃中の冷が胸中に逆して嘔して止まぬもの、泄痢、淋露を療じ、驚を除き、留熱の心煩滿を去り、腸、胃を厚くする】(別錄)【脾を健にし、反胃、霍亂、轉筋、冷熱氣を治し、膀胱、及び五臟一切の氣を瀉す。婦人産前産後の腹臟不安。腸中の蟲を殺し、耳目を明にし、關節を調へる】(大明)【積年の冷氣で腹內の雷鳴、虛吼するもの、宿食不消を治し、結水を去り、宿血を破り、水穀を化し、酸水を吐するを止め、大いに胃氣を溫め、冷痛を治し、病人の虛して尿の白さに主效がある】(甄權)【肺氣脹滿で膨して喘

欬するに主效がある」（好古）

【發明】宗奭曰く、厚朴は、平胃散中に用ゐて最も中を調へる。今に至つてこの藥は盛に行はれてゐる。既に能く脾、胃を溫め、又、能く冷氣を走するので世間に須ゐられる。

元素曰く、厚朴の用に三ある。胃を平にするが一、腹脹を去るが二、孕婦はこれを忌むが一である。腹脹を除くけれども、虛弱の人の場合には斟酌して用ゐるが宜し。誤つて服すれば人の元氣を脫する。ただ寒脹には大熱の藥中に兼ね用ゐて乃ち結するを散するの神藥である。

震亨曰く、厚朴は土に屬して火を有し、その氣は溫にして能く胃中の實を散する。平胃散にこれを用ゐ、佐として蒼朮を用ゐるは、正に胃中の濕を瀉して胃土の太過を平にし、以て中和を致す爲めのみであつて、脾、胃を溫補するといふのではない。習が俗を成して、みなこれを補するものと思つてゐるのは困つたものだ。その腹脹を治するは、その味の辛に因つて、以てその滯氣を提げるのである。滯が行れば去るべきものだ。若し氣實の人が誤つて參、芪の藥を服し、多く氣を補して脹悶し、

或は喘を作すものの場合にはこれで瀉するが宜し。

好古曰く、本草に、厚朴は中風、傷寒の頭痛を治し、中を温め、氣を益し、痰を消し、氣を下し、腸、胃を厚くし、腹滿を去るといつてあるが、果して氣を泄するであらうか。果して氣を益するであらうか。蓋し枳實、大黃と共に用ゐれば能く實滿を泄する。所謂、痰を消し、氣を下すとはそれである。もし橘皮、蒼朮と共に用ゐるならば能く濕滿を除く。所謂、中を溫め、氣を益すとはそれである。解利の藥と共に用ゐれば傷寒頭痛を治し、瀉痢の藥と共に用ゐれば腸、胃を厚くするのである。大體に於て、その性味が苦、溫であつて、苦を用ゐれば泄し、溫を用ゐれば補するものだ。故に成無已は『厚朴の苦は以て腹滿を泄す』といつてある。

杲曰く、苦は能く氣を下す。故に實滿を泄するのである。溫は能く氣を益す。故に濕滿を散ずるのである。

附方　舊七、新七。【厚朴煎丸】孫兆甫は『腎を補するは脾を補するに如かぬ。脾、胃の氣が壯なれば能く飮食し、飮食が旣に進めば營衞を益し、精血を養ひ、骨髓を滋する。それゆゑに素問に「精不足の者は之を補するに味を以てし、形不足の

者は之を補するに氣を以てす」とある。この藥は大いに脾、胃の虚損を補し、中を温め、氣を降し、痰を化し、食を進め、冷飲、嘔吐、泄瀉等の證を去る』といつた。厚朴を皮を去つて剉片し、生薑二斤を皮を連ねて切片し、水五升で共に煮乾し、薑を去つて朴を焙じ、乾薑四兩、甘草二兩で再び厚朴と共に水五升で煮乾し、草を去つて薑、朴を焙じて末にし、棗肉と生薑とを共に煮熟し、薑を去り棗を搗いたもので和して梧子大の丸にし、毎服五十丸を米飲で服す。ある方では熟附子を加へる。(王璆百一選方)【痰壅嘔逆】心胸滿悶し、飲食の下らぬには、厚朴一兩を薑汁で黄に炙いて末にし、非時に米飲で二錢匕を調へて服す。(聖惠方)【腹脹脈數】厚朴三物湯――厚朴半斤、枳實五箇を水一斗二升で五升に煎じ取り、大黄四兩を入れて再び三升に煎じて一升を温服する。轉動すれば更に服す。動ぜぬときは服してはならぬ。(張仲景金匱要略)【腹痛脹滿】厚朴七物湯――厚朴半斤、制甘草、大黄各二兩、棗十箇大枳實五箇、桂二兩、生薑五兩を水一斗で四升に煎じ取り、一日三回、八合を温服する。嘔するものには半夏五合を加へる。(金匱要略)【男女の氣脹】心悶し、飲食下らず、冷熱相攻める久患の癒えぬには、厚朴を薑汁で炙き、黒く焦して末にし、陳

米飲で二錢匕を調へて服す。一日三服。（斗門方）【反胃止瀉】方は上に同じ。【中滿洞瀉】厚朴、乾薑等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、毎服五十丸を米飲で服す。（鮑氏方）【小兒の吐瀉】胃虛、及び痰驚あるには、梓朴散——梓州の厚朴一兩、半夏を湯に七回泡け、薑汁に半日浸し晒乾して一錢を用ゐ、米泔三升に共に一百刻浸し、水の盡るを度とし、もしなほ盡きぬときは火を加へて熬り乾し、厚朴を去つてただ半夏を研り、毎服半錢、或は一字を薄荷湯で調へて服す。（錢乙小兒直訣）【霍亂腹痛】厚朴湯——厚朴を炙いて四兩、桂心二兩、枳實五箇、生薑二兩を用ゐ、水六升で二升に煮取り、三回に分服する。これは陶隱居の方であつて、唐の石泉公王方慶の廣南方に『この方はただ霍亂を治するのみでなく、凡そ諸病みな治す』とある。○聖惠方では、厚朴を薑汁で炙いて研末し、新汲水で二錢を服す。神の如くである。【水穀を下痢するもの】久しく瘥えぬには、厚朴三兩、黃連三兩、水三升を一升に煎じ、空心に細服する。（梅師方）【大腸乾結】厚朴を生で研り、猪臟を煮て搗き和して梧子大の丸にし、三十丸づつを薑水で服す。（十便良方）【尿渾白濁】心、脾の不調で腎氣が渾濁するには、厚朴を薑汁で炙いて一兩、白茯苓一錢を水、酒各一盌で一盌に煎

じて溫服する。(經驗良方)　【月水不通】厚朴三兩を炙いて切り、水三升で一升に煎じ、二服に分けて空心に飮む。三四劑に過ぎずして神驗がある。一には桃仁、紅花を加へる。(梅師方)

逐折　氣味　【甘し、溫にして毒なし】　主治　【鼠瘻を療じ、目を明にし、氣を益す】(別錄)

正誤　別錄の有名未用に曰く、逐折は鼠を殺し、氣を益し、目を明にする。一名百合。一名厚實。木間に生じ、莖は黃である。七月實り、黑くして大豆のやうである。

弘景曰く、杜仲の子も亦た逐折と名ける。

○別錄には、厚朴の條下に已に『子を逐折と名く』と言つて、有名未用の中に復た逐折を出したが、主治は相同じく、ただ『鼠瘻』と『殺鼠』だけが字の誤で、いづれが正しいか判らない。ここにいふ厚實とは厚朴の實である。故に皮をば厚皮といつたのだ。陶氏は氣がつかずに杜仲を援用して記したが、全然誤である。此に正して置く。

浮爛羅勒
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

附錄 浮爛羅勒　藏器曰く、康國に生ずる。皮は厚朴に似て、味酸し、平にして毒なし。一切の風氣に主效があり、胃を開き、心を補し、冷痺を除き、臟腑を調へる。

杜仲（本經上品）

和名　とちゆう
學名　Eucommia ulmoides, Oliv.
科名　とちゆう科（杜仲科）

釋名 **思仲**（別錄）**思仙**（本經）**木綿**（吳普）**檰**　時珍曰く、昔、杜仲といふ人が、これを服して得道したといふに因んで名としたので、思仲、思仙はいづれもその意味に由つたものだ。その皮中に銀絲があつて綿のやうだから木綿といふ。その子は逐折と名けて厚朴の子と同名である。

〔杜　仲〕

［集解］別錄に曰く、杜仲は上虞の山谷、及び上黨、漢中に生ずる。二月、五月、六月、九月に皮を採る。
弘景曰く、上虞は豫州に在る。虞、虢の虞であつて會稽の上虞縣をいふのではない。今は建平、宜都のものを用ゐる。狀態は厚朴のやうで、折れば白絲の多いものを佳しとする。
保昇曰く、深山、大谷に生じ、所在にある。樹は高さ數丈、葉は辛夷に似てゐる。
頌曰く、今は商州、成州、峽州の近き處の大山中に產する。葉は亦た柘に類し、その皮を折けば白絲が相連つてゐる。江南ではこれを櫞といひ、初生の嫩葉は食へるもので、櫞芽といふ。花、實は苦く澀く、やはり藥に入れるに堪へる。木は履に作るがよく、脚を益す。

皮［修治］斆曰く、凡そ使ふには、粗皮を削り去り、每一斤に酥一兩、蜜三兩を用ゐ、和し塗つて火で炙り、盡るを度として細剉して用ゐる。

［氣味］【辛し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し、溫なり、權曰く、苦し、煖なり。元素曰く、性は溫、味は辛く甘し。氣味俱に薄く、沈にして降る。陰であ

る。杲曰く、陽であり降である。好古曰く、肝の經の氣分の藥である。○之才曰く、玄參、蛇蛻皮を惡む。

主治 【腰膝痛。中を補し、精氣を益し、筋骨を堅くし、志を強くし、陰下癢濕、小便餘瀝を除く。久しく服すれば身を輕くし、老に耐へる】(本經)【脚中酸疼で地を踐むを欲せぬもの】(別錄)【腎勞の腰脊攣を治す】(大明)【腎冷の𦢊腰痛。人の虛して身の强直するは風であつて、腰が利せぬ。加へてこれを用ゐる】(甄權)【能く筋骨をして相著かしめる】(李杲)【肝燥を潤し、肝の經の風虛を補す】(好古)

發明 時珍曰く、杜仲は、古方ではただ腎を滋するだけの智識であつたが、王好古だけが『これは肝の經の氣分の藥で、肝燥を潤し、肝虛を補す』といひ、昔人の未發を發いた。蓋し肝は筋を主り、腎は骨を主り、腎が充つれば骨が强く、肝が充つれば筋が健になり、屈伸利用はみな筋に屬するものである。杜仲は色は紫で潤い、味は甘くして微し辛く、その氣は溫、平であつて、甘、溫は能く補し、微辛は能く潤ほすものだから、能く肝に入つて腎を補す。子能く母をして實せしめるのである。按ずるに、龐元英の談藪に、一少年は新婚後に脚軟病に罹り、且つ疼甚し

く、醫師は脚氣として治療したが效がなかつた。路鈐孫琳がそれを診て、杜仲一味を用ゐ、寸斷の片に折き、毎一兩を半酒半水一大盞で煎じて服せると、三日にして歩行し得て、また三日にして全癒した。琳は「これは腎虛であつて脚氣ではない。杜仲は能く腰膝痛を治し、酒を以てこれを行らせば容易に奏效するものだ」といつたとある。

附方　舊三、新三。【青娥丸】方は補骨脂の條下に記載してある。【腎虛腰痛】崔元亮海上集驗方では、杜仲を皮を去り薑に炙いて一大斤を十劑に分け、毎夜一劑を取つて水一大升で五更まで浸し、煎じて三分の一を減じて汁を取り、羊腎三四箇を切下し、再び煮て三五沸し、羹を作る法の如くして椒、鹽を和し、空腹に頓服する。○聖惠方では、薤白七莖を入れる。○箧中方では、五味子半斤を加へる。【風冷で腎を傷めたるもの】腰背虛痛するには、杜仲一斤を切つて炒り、酒二升に十日間漬け、日に三合を服す。これは陶隱居の得效方である。○三因方では、末にして二錢を毎早朝溫酒で服す。【病後の虛汗】及び目中に流汗するには、杜仲、牡蠣等分を末にし、就寢時に水で五匕を服す。止まぬときは更に服す。(肘後方)【習慣性墮

胎】或は三四个月になると墮るには、二个月前に、杜仲八兩を糯米煎湯で浸透し、炒つて絲を去り、續斷二兩を酒に浸して焙じ乾して末にし、山藥五六兩を末にして作つた糊で梧子大の丸にし、毎服五十丸を空心に米飲で服す。肘後方では、杜仲を焙じ研り、棗肉で丸にし、糯米飲で服す。（楊起簡便方）【産後の諸疾】及び胎臓不安には、杜仲を皮を去つて瓦上で焙じ乾し、木臼で搗いて末にし、煮た棗肉で和して彈子大の丸にし、毎服一丸を糯米飲で服す。一日二服。（勝金方）

櫋芽【氣味】（缺）【主治】「蔬にすれば風毒脚氣、久積風冷、腸痔下血を去る。また湯に煎ずるもよし」（蘇頌）

椿　樗（唐本草）

和名　（椿）ちやんちん　（樗）にはうるし又しんじゆ
學名　Cedrela sinensis, A. Juss.　Ailanthus altissima, Swing.
科名　せんだん科（楝科）　にがき科（苦棟樹科）

【校正】嘉祐の椿莢を併せ入る。

【釋名】香しきものを**椿**と名ける。集韻には櫄と書き、夏書には杶と書き、左傳には杻と書いてある。臭きものを**樗**と名ける。音は丑居の切（チヨ）である。

また樗とも書く。山樗を栲と名ける。音は考（カウ）である。**虎目樹**（拾遺）　**大眼桐**

時珍曰く、椿樗は長じ易くして多く壽考である。故に椿樗の稱がある。莊子に『大椿は八千歳を以て春秋と爲す』とあるはそれである。椿は香しくして樗は臭い。故に椿の字はまた櫄と書く。その氣が熏しいからである。樗の字の虖に從ふは、その氣が臭く、人が呵嘑するからだ。樗といふはやはり椿の音の轉じたものだ。

藏器曰く、俗に椿を猪椿と呼び、北方地方では樗を山椿と呼び、江東では虎目樹と呼び、また虎眼と名ける。それは葉の脱ちた處に痕があつて虎の眼目のやうだといふのである。又、樗蒲子のやうだ。故にこの名が生じたのである。

【集解】　恭曰く、椿、樗の二樹は形が相似てゐるが、ただ樗木は疎であり、椿木は實してゐるので區別する。

頌曰く、二木は南、北にいづれもある。形幹は大抵相類するが、但だ椿は木が實して葉が香しく、噉へる。樗は木が疎で氣が臭い。料理人はやはり能く熬つて氣を去る。いづれも採取に一定の時期はない。樗木は何の役にも立たぬもので、莊子に所謂『吾に大木有り、人之を樗と謂ふ。その木は擁腫して繩墨に中らず、小枝は曲拳

して規矩に中らざる』ものである。

爾雅に『栲は山樗なり』とあり、郭璞の註に『栲は樗に似て色少し白し。山中に生ず。因て名く。亦た漆樹に類す』とある。俗語に『櫄、樗、栲、

〔樗　椿〕

漆は相似て一の如し』といふ。陸機の詩疏には『山栲は田樗と異らぬ。葉がやや狹いだけだ。呉地方では葉を茗にする』とある。

宗奭曰く、椿、樗はいづれも臭い。ただ一種は花あつて子を結び、一種は花なくして實らぬ。世間では、花なくして木身が大きく、その幹の端直なるものを椿とし、椿木は葉を用ゐる。その花莢があつて木身が小さく、幹の多く迂矮なるものは樗とし、根、及び莢、葉を用ゐる。又、蟲部に樗雞があるが、椿雞とはいつてない。雞あるものを樗とし、雞なきものを椿とすることは顯で。古人の命名はその意味が甚だ明だ。

禹錫曰く、樗にして花あるものは莢がなく、莢あるものには花がない。その莢は

夏期に常に臭樗上に生ずる。椿上に莢のあるものは見たことがない、然るに、世俗では椿、樗の相違點の辨別がないので、樗莢を椿莢と呼んでゐる。

時珍曰く、椿、樗、栲といふは一木の三種であつて、椿木に皮が細かく、肌が實して赤く、嫩葉は香しく甘くして茹となる。樗木は皮が粗く、肌が虛して白く、その葉は臭惡である。凶作の歲に人が或は採つて食ふ。栲木は卽ち樗の山中に生じたもので、木はやはり虛して大きい。梓人はやはり用ゐることもあるが、然し、之を爪するに腐朽したものの如くだ。故に古人は不材の木といつたので、椿木のやうに堅實にして大梁として用ゐられるやうなわけに行かない。

葉　氣味　【苦し、溫にして小毒あり】詵曰く、椿芽を多く食へば風を動じ、十二經脈、五臟、六腑を熏じ、人をして神昏し、血氣を微ならしめる。もし豬肉、熱麪に和して頻りに食ふならば中滿する。蓋し經絡を壅するのである。時珍曰く、椿葉は毒なし。樗葉は小毒あり。

主治　【水で煮て瘡疥、風疽を洗ふ。樗木の根、葉が尤も良し】（唐本）【白禿で髮を生ぜぬには、椿、桃、楸の葉心を取つて搗き、汁を頻りに塗る】（時珍）【嫩芽

を瀹て食へば風を消し、毒を祛る」(生生編)

白皮 及び **根皮** 修治 斅曰く、凡そ使ふには、椿根の西頭に近からぬものを上とする。採り出して生葱を拌ぜて蒸すこと半日にして剉細し、袋に盛つて屋の南畔に掛け、陰乾して用ゐる。

時珍曰く、椿、樗の木皮、根皮は、いづれも粗皮を刮り去つて陰乾し、使用時に臨んで切り焙じて入れて用ゐる。

氣味 【苦し、温にして毒なし】 權曰く、微熱なり。震亨曰く、涼にして燥す。藏器曰く、樗根は小毒あり。時珍曰く、樗根は硫黄、砒石、黄金を制す。

主治 【疳䘌には樗根が尤も良し】(唐本) 【口鼻の疳蟲を去り、蚘蟲、疥䘌、鬼疰、傳尸蠱毒を殺す。下血、及び赤白久痢】(藏器) 【地楡と配合すれば疳痢を止める】(蕭炳) 【女子の血崩、産後血の止まぬもの、赤帶、腸風瀉血の住まぬもの、腸滑瀉を止める。小便を縮するには蜜で炙いて用ゐる】(大明) 【溺澀を利す】(雷斅) 【赤白濁、赤白帶、濕氣下痢、精滑夢遺を治し、下濕を燥し、肺、胃の陳積の痰を去る】(震亨)

【發明】詵曰く、女子の血崩、及び産後血の止まぬもの、月信の來ること多きもの、幷に赤帶下には、東に引いた細椿根一大握を取つて洗淨し、水一大升で煮て汁を分服するが宜し。それで斷つ。小兒の疳痢にも多く服するが宜し。仍て白皮一握、粳米五十粒、葱白一握、炙甘草三寸、豉二合、水一升を半升に煮て、適當に服す。枝、葉の功用もみな同じ。

○○震亨曰く、椿根白皮は性涼にして能く血を澀する。凡そ濕熱が病となりたる瀉痢、濁滯、精滑、夢遺の諸證にはこれを用ゐぬといふことがない。下濕を燥し、及び脾、胃の陳痰を去るの功があり、泄瀉を治して濕を除き、腸を實するの力がある。但し痢疾滯氣の未だ盡きぬものは遽に用ゐてはならぬ。丸、散に入るが宜く、また煎じて服するもよし、それで害がない。予は每に用ゐ、炒り研り、糊で丸にし、病を看て湯にして使ひ、固腸丸と名けてゐる。

○○時珍曰く、椿皮は色赤くして香しく、樗皮は色白くして臭く、多服すれば人を微利する。蓋し椿皮は血分に入つて性濇し、樗皮は氣分に入つて性利す。注意すべきである。その主治の功は同じではあるが、濇と利との效は異ふ。正に伏苓、芍藥の

赤と白とが頗る殊るやうなものである。凡そ血分に病を受けた不足のものには椿皮を用ゐるが宜く、氣分に病を受けて鬱あるものには樗皮を用ゐるが宜し、これは心得の微である。乾坤生意の瘡腫を治する下藥に樗皮を用ゐ、無根水で研つた汁二三椀を服し、數行の利を取るがその驗證である。故に陳藏器が『樗皮は小毒あり』といつたのは試みるところがあつたのだ。

○○宗奭曰く、洛陽の一婦人は、年四十六七で、飲に耽ること度なく、多く魚蟹を食ひ、畜毒が臓に在つて、晝夜に二三十回瀉し、大便が膿血と雜つて下り、大腸と肛門と連つて痛むこと堪へ難く、醫師は血痢を止める藥を用ゐたが效がなく、腸風の藥を用ゐるとますます甚しくなつた。蓋し腸風なれば血があつて膿がないものである。かくて半年餘にして氣血漸く弱く、食減じ、肌瘦し、熱藥を服すれば腹が愈よ痛み、血が愈よ下り、冷藥を服すれば注泄し、食減じ、溫平の藥を服すれば病に何の反應もない。此の如く期年にして命盡くるを待つに垂たる有樣であつたが、或人の敎で人參散を服し、一服して反應があり、二服にして減じ、三服にして膿、血がみな定り、そこで常服して癒えた。その方は、大腸風虛、飲酒過度で熱を挾み、膿、

血を下痢し、痛み甚しく、長期間瘥えぬを治す。樗根白皮一兩、人參一兩を末にし、毎服二錢を空心に溫酒で調へて服す。米飮でもよし。油膩、濕麪、青菜、果子、甜きもの、雞、猪、魚、羊、蒜、薤等を忌む。

附方　舊六。新十。【鬼氣を去る】樗根一握を細切し、童尿二升で豉一合を一夜浸して絞つた汁で煎じて一沸し、三五日に一回服す。(陳藏器本草)【小兒の疳疾】椿白皮を日光で乾して末にし、粟米を淘淨して濃汁に研り、和して梧子大の丸にし、十歳には三四丸を米飮で服す。大いさを量つて加減する。仍つて一丸を竹筒中に納れて鼻中に吹入る。三度にして良し(子母祕錄)【小兒の疳痢】困重なるには、樗白皮を搗いて粉にし、水で棗を和して大餛飩子に作つて日に晒し、小時してまた搗き、かく三回して水で煮熟し、空肚に七箇を呑む。重きも七服に過ぎず。油膩、熱麪、毒物を忌む。○又ある方では、樗根の濃汁一蜆殼に粟米泔等分を和して下部に灌ぐ。二回にして瘥える。その驗神の如し。大人にも宜し。(外臺祕要)【休息痢疾】日夜度なく、腥臭近くべからず、臍腹撮痛する。東垣の脾胃論では、椿根白皮、訶黎勒各半兩、母丁香三十箇を末にし、醋糊で梧子大の丸にし、毎服五十丸を米飮で服す。

○唐瑤經驗方では、椿根白皮——東南行のもの——を長流水内に三日漂し、黄皮を去つて焙じて末にし、毎一兩に木香二錢を加へて粳米飯で丸にし、毎服一錢二分を空腹に米飮で服す。【水穀下利】及び立秋の前後に至る毎に痢を患ひ、腰痛を兼ぬるには、樗根一大兩を擣き篩ひ、好麪で捻つて皂子大ほどの餛飩にし、水で煮熟し、毎日空心に十箇を服す。いづれも禁忌なし。神の如き良效がある。(劉禹錫傳信方)【下利清血】腹中刺痛するには、椿根白皮を洗ひ刮り晒して研り、醋糊で梧子大の丸にし、毎空心に米飮で三四十丸を服す。一には蒼朮、枳殼を減半して加へる(經驗方)【臟毒下痢】赤白を痢するには、香椿を洗ひ刮つて皮を取り、日光で乾して末にし、飮で一錢を服す。立ろに效がある。(經驗方)【臟毒下血】温白丸——椿根白皮を粗皮を去り、酒で浸して晒し研り、棗肉で和して梧子大の丸にし、五十丸づつを淡酒で服す。或は酒糊で丸にするもよし(儒門事親)【下血の年を經たるもの】樗根二錢を水一盞で七分に煎じ、酒半盞を入れて服す。或は丸にして服す。虛するものには人參等分を加へる。卽ち虎眼樹である。(仁存方)【血痢下血】臘月に日の未だ出ぬ時、背陰の地で北に引いた樗根皮を取り、東流水で洗淨し、風處に掛けて陰乾して末にし、

毎二兩に寒食麪一兩を入れ、新汲水で梧子大の丸にして陰乾し、毎服三十丸を水で煮滾らし、傾け出して溫水で送下する。日を見ることを忌む。日に當てれば效がない。如神丸と名ける。（普濟方）【脾毒腸風】營衞虛弱に因つて風氣がそれを襲ひ、熱氣がそれに乘じ、血が腸間に滲る　故に大便に下血するのである。臭椿根を用ゐ、粗皮を刮り去り焙じ乾して四兩、蒼朮を米泔に浸して焙じ、枳殼を炒つて各一兩を末にし、醋糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。一日三服。（本事方）【產後の腸脫】收拾し能はぬには、樗枝の皮を取つて焙乾して一握、水五升、根を連ねた葱五莖、漢椒一撮を共に三升までに煎じ、滓を去つて盆内に傾け入れ、熱に乘じて熏じ洗ふ。冷えたときは再び熱する。一服を五回にして用ゐるがよし。洗つて後に少時睡る。鹽鮓、醬麪、發風、毒物、及び精神を勞使する等の事を忌む。年深きものを治す。（婦人良方）【婦人の白帶】椿根白皮、滑石等分を末にし、粥で梧子大の丸にし、一百丸づつを空腹に白湯で服す。○又ある方では、椿根白皮一兩半、乾薑を黑く炒り、白芍藥を黑く炒り、黃蘗を黑く炒つて各二錢を末にし、前記の法の如く丸にして服す。（丹溪方）【男子の白濁】方は上に同じ。

莢 釋名 鳳眼草 形容の名稱である。

主治 【大便下血】(嘉祐)

附方 新三。【腸風瀉血】椿莢を半生半燒にして末にし、二錢半づつを飮で服す。(普濟方)【誤つて魚刺を呑みたるとき】生生編では、椿樹子を燒いて研り、二錢を酒で服す。○保壽堂方では、香椿樹子を陰乾し、半盌を擂り碎いて熱酒に衝して服す。良久して骨を連ねて吐出する。【頭を洗つて目を明にする】鳳眼草、卽ち椿樹上に叢生する莢を灰に燒き、水で淋取して頭を洗ふ。一年を經れば眼が童子のやうになる。椿皮灰を加へるが尤も佳し。正月七日、二月八日、三月四日、四月五日、五月二日、六月四日、七月七日、八月三日、九月二十日、十月二十三日、十一月二十九日、十二月十四日に洗ふ。(衞生易簡方)

漆（本經上品）

和名　うるし
學名　Rhus vernicilua, Stokes.
科名　うるし科（漆樹科）

【釋名】 桼　時珍曰く、許愼の說文には『漆はもと桼と書いた。木の汁は物を髹するに用ゐられる。その字は水が滴つて下る形を形したものだ』とある。

【集解】 別錄に曰く、乾漆は漢中の山谷に生ずる。夏至の後に採つて乾す。
弘景曰く、今は梁州に漆が最も甚しく、益州にもある。廣州の漆は性急にして燥し易い。その諸處の漆桶中で自然に乾いたものの、蜂房のやうな狀態で孔孔隔つたものを佳しとする。
保升曰く、漆樹は高さ二三丈餘あり、皮は白く、葉は椿に、花は槐に似て、その子は牛李子に似てゐる。木心は黃である。六月、七月に刻んで滋汁を取る。金州のものが最も善し。漆は性いづれも急なもので、凡そ取るときには必ず荏油を用ゐて解破する。故に淳なるものは得難い。重重に別に制し拭ふがよし。上等の清漆は色黑くして瑿の如きものだ。もし鐵石の如きものならば好し。黃嫩で蜂窠の如きもの

ならば佳くない。

頌曰く、今は蜀、漢、金、峡、襄、欽州にいづれもある。竹筒を木中に釘し入れて汁を取る。崔豹の古今注に『剛斧を以てその皮を斫り、開いて竹管を以て之を承ければ、滴汁則ち漆と成る』とある。

宗奭曰く、濕漆は藥中には未だ見ない。用ゐるものはいづれも乾漆だけである。

〔漆〕

その濕へるものは、燥熱、及び霜冷の時に在つては乾き難く、陰濕を得れば寒期でも亦た乾き易い。やはり物の性である。人に霑漬した場合には油で治す。凡そ漆を驗するには、ただ稀きものを物に蘸け起して見て、細くして斷れず、斷てば急に收り、更にまた乾竹上に塗り、蔭ふて置いて速に乾くものならばいづれも佳し。

時珍曰く、漆樹は一般に多く種ゑる。春分前に移植すれば成長し易くして有利である。その身は柿のやう、その葉は椿のやうだ。金州のものを佳しとするところから、世に金漆と稱する。世間では多く他の物を以て僞作するが、眞僞を試みる祕訣に『微扇して光鏡の如く、懸絲して急に鈎に似たり。摵して琥珀の色を成し、打著して浮漚あり』といつてある。現に廣、浙中に出る一種の漆は、樹は小榎に似て大きく、六月汁を取る。物に漆すると黃澤にして金のやうである。即ち唐書に所謂、黃漆なるものである。藥に入れるにはやはり黑漆を用うべきものである。廣南の漆は飴糖の氣があり、沾沾として力がない。

乾漆

修治　大明曰く、乾漆を藥に入れるには、搗き碎いて炒り熟すべきものである。さなくば人の腸、胃を損ずる。もし濕漆を煎じ乾したものならば更に好し。また燒いて性を存することもある。

氣味　【辛し、溫にして毒なし】權曰く、辛く鹹し。宗奭曰く、苦し。元素曰く、辛し、平にして毒あり、降であつて、陽中の陰である。○之才曰く、半夏が使となる。雞子を畏れ、油脂を忌む。

弘景曰く、生漆は毒烈である。人が雞子を和して服すれば蟲を去る。やはり自ら腸、胃を囓むやうなものだ。漆を畏る人は致死するものだ。外氣でもやはり能く身肉を瘡腫せしめる。それには自ら療法がある。

大明曰く、毒發したときは、鐵漿、幷に黄櫨汁、甘豆湯を飲み、蟹を喫ふ。いづれも制し得る。

時珍曰く、今一般に賣つてゐる漆は多く桐油を雜ぜてある。故に毒が多い。淮南子に『蟹が漆を見れば乾かぬ』とあり、相感志に『漆は蟹を得て水と成る』とある。蓋し物の性の相制の關係である。凡そ人の漆を畏るものは、蜀椒を嚼んで口、鼻に塗れば免れる。漆瘡を生じたるときは、杉木湯、紫蘇湯、漆姑草湯、蟹湯に浴す。いづれも良し。

主治 【絶傷。中を補し、筋骨を續ぎ、髓腦を塡て、五臟を安ずる。五緩、六急、風寒濕痺。生漆は長蟲を去る。久しく服すれば身を輕くし、老に耐へる】(本經)【乾漆は欬嗽を療じ、瘀血を消す。痞結、腰痛、女子の疝瘕。小腸を利し、蚘蟲を去る】(別錄) 【三蟲を殺し、婦人の經脈不通に主效がある】(甄權) 【傳尸勞を治し、風を

除く』(大明)『年深き堅結せる積滯を削り、日久しき凝結せる瘀血を破る』(元素)

【發明】弘景曰く、仙方では、蟹を用ゐて漆を消して水となすといひ、錬り服すれば長生するといひ、抱朴子に『淳漆の粘せぬものは服すれば神に通じ、長生する。或は大蟹を以てその中に投じ、或は雲母水を以てし、或は玉水を以てし、合せて服すれば、九蟲悉く下り、惡血は鼻より出る。服して一年に至れば六甲行廚至る』とある。

震亨曰く、漆は金に屬して水と火とを有し、性急にして飛ぶ。補として用うれば積滯を去るの藥となり、節に中れば積滯が去つて後に補性が內行するものだが、一般には知られない。

時珍曰く、漆は性毒あつて蟲を殺し、降にして血を行らす。主とするところの諸證は繁多であるが、その功はただ二者に在るだけである。

【附方】舊四。新七。【小兒の蟲病】胃寒危惡の證で癇と相似たるものには、乾漆を搗き、燒いて烟を盡し、白蕪荑と等分を末にし、米飲で一字を服し、一錢までで服す。(杜仁方)【九種心痛】及び腹脇の積聚、滯氣には、筒內の乾漆一兩を搗き、炒

つて烟を盡して研末し、醋で煮た糊で梧子大の丸にし、毎服五丸乃至九丸を熱酒で服す。（簡要濟衆）【婦人の血氣】婦人の、曾て血氣が生長せずして忍び難く疼痛するもの、及び男子の疝氣、小腸氣が撮痛するものを治するに、いづれも二聖丸を服するが宜し。濕漆一兩を一食頃の間熬り、乾漆末一兩を入れ、和して梧子大の丸にし、毎服三四丸を溫酒で服す。漆を怕れる人は服してはならぬ。（經驗方）【婦人の經閉】指南方の萬應丸――婦人の月經が瘀閉して來潮せず、臍を燒いて寒疝痛徹するもの、及び產後の血氣不調、諸癥瘕等の病を治す。乾漆一兩を打碎いて炒つて烟を盡し、牛膝末一兩とを用ゐ、銀石器中に入れ、生地黃汁一升を丸になるまでに慢に熬つて梧子大の丸にし、毎服一丸から三五丸まで增加して、酒、飮の任意のもので服し、通ずるを度とする。○產寶方では、婦人の月經不利で血氣が上攻し、嘔氣があつて睡眠し得ぬを治す。當歸四錢、乾漆三錢を炒つて烟を盡し、末にして錬蜜で梧子大の丸にし、毎服十五丸を空心に溫酒で服す。○千金では、婦人の月水不通で、臍下が盃ほど堅くなり、時に發熱往來し、下痢し、羸瘦するを治す。これは血瘕であつて、もし內癥を生ずれば治療し得ない。乾漆一斤を燒いて研り、生地黃二十斤の汁

を取り、和して丸になるまでに煎じて梧子大の丸にし、毎服三丸を空心に酒で服す。【產後の靑腫】疼痛するもの、及び血氣水疾には、乾漆、大麥芽等分を末にし、新瓦瓶に相間へて鋪き滿て、鹽泥で固濟して赤く煆き、放冷して研つて散にし、毎服一二錢を熱酒で服す。但し產後の諸疾はいづれも服するがよし（婦人經驗方）【五勞、七傷】補益の方。乾漆、柏子仁、山茱萸、酸棗仁各等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、毎服二七丸を溫酒で服す。一日二服。（千金方）【喉痺で絕せんとするもの】針、藥も施し得ぬには、乾漆を烟に燒き、筒で吸ふ（聖濟總錄）【中蠱毒を解す】平胃散末を生漆で和して梧子大の丸にし、毎空心に溫酒で七十丸、乃至百丸を服す。（直指方）【下部に生じた瘡】生漆を塗るが良し。（肘後方）

漆葉　氣味　（缺）　主治　【五尸勞疾に蟲を殺す。暴乾して研末し、日日に酒で一錢匕を服す】（時珍）

發明　頌曰く、華佗傳の記載に、彭城の樊阿は少にして佗に師事した。化は漆葉靑黏散の方を授けて「これを服すれば三蟲を去り、五臟を利し、身を輕くし、氣を益し、人をして頭を白からざらしめる」といつた。阿はその言に從ひ、年五百

餘歳であつた。漆葉は所在にある。靑黏は豐沛、彭城、及び朝歌に生ずる。一名地節・一名黃芝といひ、五臟を理し、精氣を益するの主效がある。もとは迷つて山に入つた人が、仙人のこれを服するのを見たことに始まつたもので、その人が佗に告げ、佗はそれを佳なるものとして阿に語り、阿はそれを祕してゐたのだが、近頃、世人が阿の長命にして氣力の强盛なるを見て、そのわけを訊ねると、阿は醉つてゐた時だつたところから、誤つて話して聞かせた。それから世人が服して多く效驗があつたとある。後世では一向に靑黏なるものを識る人がない。或は、これは黃精の正葉のものだともいふ。

時珍曰く、按ずるに、葛洪の抱朴子に『漆葉、靑黏は凡藪の草である。樊阿はこれを服し、壽二百歳を得て耳目聰明であり、なほ能く鍼を持つて病を治した。これは近代の實事であつて、良史の記註するところである』とある。洪の說が理に近いやうである。前項の阿の年五百歳といふは誤だ。或は、靑黏とは葳蕤のことだともいふ。

漆子 主治 【下血】(時珍)

漆花　［主治］　【小兒の解顱、腹脹、交脛して行かぬものの方中にこれを用ゐる】（時珍）

梓（本經下品）

和名　たうきささげ
學名　Catalpa Bungei, C. A. Mey.
科名　のうぜんかづら科（紫葳科）

［釋名］　**木王**　時珍曰く、梓の字は或は杍と書く。その意味は詳でない。按ずるに、陸佃の埤雅に『梓は百木の長である。故に梓を木王と呼ぶ。蓋し木は梓より良きはない　故に書には梓林を以て篇名とし、禮には梓人を以て匠の名とし、朝廷では梓宮を以て棺の名とした』とある。羅願は『屋室にこの木あれば餘材みな震はず』といつた。木王とする意味はそれで判る。

［集解］　別錄に曰く、梓白皮は河內の山谷に生ずる。

弘景曰く、これは梓樹の皮である。梓に三種あつるが、朴素にして腐らぬものを用うべきものである。

頌曰く、今は近道にいづれもあつて、宮寺、人家の園亭にも多く植ゑてある。木は

桐に似てゐるが、葉が小さく花が紫である。爾雅に『椅は梓なり』とあつて、郭璞の註に『卽ち楸なり』とあり、詩の鄘風に『椅桐梓榛、爰伐琴瑟』とあつて、陸璣の註に『楸の疏理、白色にして子を生ずるものを梓といふ。梓實、桐皮なるを椅といふ』とあり。大同小異である。藥に入れるには子あるものを用うべきである。又、一種の鼠梓、一名楰もやはり楸の屬であつて、枝、葉、木理みな楸のやうである。今は一般にこれを苦楸といひ、江東地方ではこれを虎梓といふ。詩の小雅に『北山有楰』とあるはこれである。鼠李、一名鼠梓といひ、或は、卽ちこのものだといふが、然し、花、實、すべて相類せぬ。恐らく別の一物で、名が同じだけのことだ。

〔梓〕

藏器曰く、楸は山谷の間に生ずる。梓樹とは本が同じだが末が異ふ。或はこれを

一物とするものもあるが、誤である。

大明曰く、梓に數般あるが、ただ楸、梓皮だけが藥に入れて佳し。その他はみな堪へない。

機曰く、按ずるに、爾雅翼に『說文には、椅は梓なり、楸は梓なり、檟も亦楸なり』とある。然らば椅、梓、檟、楸は一名四名であるが、陸機の詩疏には、楸の白理にして子を生ずるものを梓とし、梓實、桐皮のものを椅としてあり、賈思勰の齊民要術には、また『白色にして角あるものを梓といふ、卽ち角楸である。又、子楸と名ける。黃色にして子なきものを椅楸といひ、又、荊黃楸と名け、但だ子の有無を以て區別する。その角は細く長くして箸の如く、その長さ一尺に近い。冬後に葉が落ちて角がなほ樹にある。その實はまた豫章とも名ける』とある。

時珍曰く、梓木は處處にあるもので、三種ある。木理の白きものを梓といひ、赤きものを楸といひ、梓にして文の美なるものを椅といふ。楸にして小なるものを榎といふ。諸家の註は殊だ明確を缺いてゐる。桐もまた椅と名けるが、これとは同じくない。この椅は、卽ち尸子の所謂、荊に長松、文椅ありといふそのものである。

梓白皮 【氣味】 【苦し、寒にして毒なし】 【主治】 【熱毒。三蟲を去る】(本經) 【目中の疾を療じ、吐逆、胃反に主效がある。小兒の熱瘡、身頭の熱煩蝕瘡には、煎湯で浴し、幷に搗いて傅ける】(別錄) 【湯に煎じて小兒の壯熱、一切の瘡疥、皮膚瘙癢を洗ふ】(大明) 【溫病に復た寒邪を感じ、變じて胃啘となりたるを治するに、煮汁を飲む】(時珍)

【附方】 新一。 【時氣溫病】 頭痛、壯熱する。發病第一日に、生梓木を黑皮を削り去つて裏の白きものを取り、切つて一升を水二升五合で汁に煎じ、八合づつを服して瘥を取る。(肘後方)

葉 【主治】 【搗いて猪の瘡に傅ける。猪を飼へば三倍に肥大する】(別錄) 【手脚の火爛瘡を療ず】 弘景曰く、桐葉、梓葉で豬を肥すの法は、未だ效果を實驗せぬが、商丘子の養豬經中に在る。

恭曰く、二樹の花、葉で豬を飼へば、いづれも能く肥大し、且つ養ひ易いといふことが李當之の本草、及び博物志に記載があるが、然し猪の瘡に傅けるとはいつてない。

附方　新一。【風癬疙瘩】梓葉、木綿子、羯羊屎、鼠屎等分を瓶中に入れて合定し、燒いてその汁を取つて塗る。（試效錄驗方）

楸（拾遺）

和名　きささげ
學名　Catalpa ovata, Don.
科名　のうぜんかづら科（紫葳科）

釋名　**榎**　時珍曰く、楸は葉が大きくして早く脫ちる。故にこれを楸といふ。榎は葉が小さくして早く秀でる。故にこれを榎といふ。唐時代に、立秋の日に京師で楸葉を賣り、婦女、兒童が花を剪つて戴いだといふは秋の意味を取つたものである。爾雅に『葉小さくして皵なるは榎なり。葉大きくして皵なるは楸なり』とある。皵は音鵲（ジャク）皮の粗きをいふ。

集解　梓の條下を見よ。

周憲王曰く、楸に二種あつて、一種は刺楸といふ。その樹は高大で、皮色は蒼白で上に黃白の斑點があり、枝梗の間に大刺が多く、葉は楸に似て薄く、味は甘い。嫩いとき煠熟し水で淘つて拌ぜて食ふ。

時珍曰く、楸には行列ある莖幹が直く聳えて愛すべきものだ。上に至つて條を垂れ線の如くなるを楸線といふ。その木は濕へる時は脆く、燥けば堅くなる。故にこれを良材といふ。棋枰に作るに宜し。卽ち梓の赤いものである。

〔楸〕

木白皮　［氣味］【苦し、小寒にして毒なし】珣曰く、微溫なり。

［主治］【吐逆。三蟲、及び皮膚の蟲を殺す。膏に煎じて惡瘡、疽瘻、癰腫、疳痔に粘傅すれば、膿血を除き、肌膚を生じ、筋骨を長ずる】（藏器）【食を消し、腸を澀し、氣を下し、上氣欬嗽を治す。また面藥にも入れる】（李珣）【口吻に瘡を生じたるには、これを貼り、頻りに易へて效を取る】（時珍）

［附方］　舊一、新一。【瘻瘡】楸枝を煎に作り、頻りに洗つて效を取る。（肘後方）

【白癜風瘡】楸白皮五斤を水五斗で五升に煎じ、滓を去つて稠膏のやうに煎じ、一日に三回摩る。（聖濟總錄）

葉　［氣味］皮に同じ。［主治］【擣いて瘡腫に傅け、湯に煮て膿血を洗ふ。冬は乾葉を取つて用ゐる。諸癰腫潰、及び内に刺があつて出ぬには、葉を取つて十重に貼る】（藏器）記載は范汪方にある。

［發明］時珍曰く、楸は外科の要藥であるが、近頃は一般に知るものが少ない。葛常之の韻語陽秋に『ある人は發背を患ひ、潰壞して腸、胃が窺ひ見えるやうになり、あらゆる方でも瘥えなかつたが、一醫師が、立秋の日に太陽の未だ升らぬ時に楸樹葉を採り、熬つて膏にしてその外に傅け、内には雲母膏を小丸にして服ませ、四兩を用ゐ盡すと累日ならずして癒えた』とある。東晉の范汪は名醫であつた。やはり楸葉の瘡腫を治するの功を稱してゐる。これで見ると楸に拔毒排膿の力あることが首肯ける。

［附方］舊一、新七。【上氣欬嗽】腹滿し、羸瘦するには、楸葉三斗を水三斗で煮て三十沸し、滓を去つて丸になるまでに煎じ、棗大ほどを筒で下部中に納入する。立ろに癒える。（崔元亮海上集驗方）【一切の毒腫】硬、軟を問はず、楸葉を取つて十重に腫上に傅け、舊帛で裹み、一日三回易へる。毒氣が水となつて重重に葉上へ流れ

出てゐるものである。冬期には乾葉を取つて鹽水で浸して軟げる。或は根皮を取つて搗爛らして傅ける。いづれも效がある。痛を止め、腫を消し、膿血を食し、樂くの藥に勝る。（范汪東陽方）【瘰癧瘻瘡】楸煎神方――秋分の前後に、朝夕人に袋を持つて楸葉を摘ませ、斤秤で計つて十五斤を取り、水一石で淨釜中に入れて三斗に煎じ取り、また鍋を換へて七八升に煎じ取り、また鍋を換へて二升に煎じ取り、それを津の漏れぬ器に納れて貯へ、使用するときに、先づ麻油半合、蠟一分、酥を栗子一箇ほどを取つて共に消化し、又、杏仁七粒、生薑少量を取つて共に研り、米粉二錢と共に消化した膏中に入れて攪き勻ぜ、先づそれを瘡上に塗つて二日以上經つて拭ひ取り、直ちに篦子で瘡上へ楸煎をむらなく塗り滿て、そこで軟い帛で裹み、且つ日一回拭つて新に藥を塗り更へる。五六回に過ぎずして已に破れたものは肌を生じ、未だ破れぬものは内消する。瘥えて後半年間は愼まねばならぬ。藥を採る時、及び煎じる時には、いづれも喪中の人、婦人、僧侶、道士、雞、犬に見せることを禁ずる。（篋中方）【灸瘡の瘥えぬもの】痒痛して瘥えぬには、楸葉頭、及び根皮を末にして傅ける。（聖惠方）【頭癢で瘡を生じたるもの】楸葉の搗汁を頻りに塗る。（聖惠

方）［小兒の髮の生えぬもの］楸葉の中心を搗いて汁を頻に塗る。（千金方）［小兒の目翳］嫩楸葉三兩を爛搗し、紙で包み泥で裹んで燒き乾し、泥を去つて水少量を入れ、汁を絞つて銅器で慢に煮り、稀餳のやうにして瓷合に取收め、毎早朝點ける。（普濟方）［小兒の禿瘡］楸葉の搗汁を塗る。（聖惠方）

桐（本經下品）

和名　しなぎり（新稱）
學名　Paulownia Fortunei, Hemsl.?
科名　ごまのはぐさ科（玄參科）

［釋名］　**白桐**（弘景）　**黃桐**（圖經）　**泡桐**（綱目）　**椅桐**（弘景）　**榮桐**　時珍曰く、本經に桐葉とあるは卽ち白桐である。桐は華が筒を成すところから桐といふ。その材は輕虛で、色白くして綺文があるところから俗に白桐、泡桐といひ、古代にはこれを椅桐といつた。花を先にし葉を後にするところから、爾雅にこれを榮桐といつてある。或は、この物は花あつて實らぬものだといふものもあるが、それは事實をよく觀察せぬものだ。陸機は椅を梧桐とし、郭璞は榮を梧桐としたが、いづれも誤である。

集解

別錄に曰く、桐葉は桐柏の山谷に生ずる。

弘景曰く、桐樹に四種あつて、青桐は葉、皮が青く、梧に似て子がない。梧桐は皮が白く、葉は青桐に似て子があり、子は肥えて食へる。白桐、一名椅桐は人家で多く植ゑてあつて、崗桐と異はないが、但だ花、子があり、二月に黃紫色の花を開く。禮に『三月、桐始めて華あり』といふそのものだ。琴瑟にも作られる。崗桐は子がない。これは琴瑟に作るものだ。本草に『桐華を用う』とあるは白桐のことであらう。

〔桐〕

頌曰く、桐は處處にある。陸機の草木疏に『白桐は琴瑟を作るに宜し。雲南、牂牁地方では、花中の白毳を取つて淹漬し、績いで布とする。毛服に似たもので、華布といふ。椅は卽ち梧桐である』とある。今江南地方で油を作るものは卽ち崗桐で

あつて、子があつて梧子よりも大きい。江南には頳桐といふがあり、秋紅花を開いて實がない。紫桐といふがあり、花は百合のやうで、實は糖で煮て噉へる。嶺南には刺桐といふがあり、花は色が深紅である。

宗奭曰く、本經の桐葉は何の桐と指定してないので、確信を以て用ゐ難いやうになつてゐるが、但し四種各〻治療がある。白桐は葉が三枚で白花を開き、子を結ばない。花のないものは岡桐であつて、琴には作れない。體の重いものだ。荏桐は子で桐油を作れる。梧桐は子を結んで食へるものだ。

時珍曰く、陶氏の註では、桐に四種あつて、子なきものを青桐、岡桐とし、子あるものを梧桐、白桐とし、寇氏の註には、白桐、岡桐いづれも子がないといひ、蘇氏の註では岡桐を油桐としてあるが、賈思勰の齊民要術には『實あつて皮の青きものを梧桐といふ。華あつて實らぬものを白桐といふ。白桐は冬子に似たものを結ぶが、それは翌年の花房であつて子ではない。岡桐は卽ち油桐であつて、子に大いに油がある』といひ、その說は陶氏と相反するが、今調査した結果と對比して見ると、互に是否がある。蓋し白桐、卽ち泡桐であつて、葉は大きくして徑一尺ほどあり、

最も生長し易く、皮色は粗白で、その木は輕虛にして蟲蛀を生ぜず、器物、屋柱として甚だ良し。二月に牽牛花のやうで白色の花を開き、結實は大いさ巨棗ほどで長さ一寸餘あり、殼內に子片があつて、輕虛で楡莢、葵實のやうな狀態をなし、老いれば殼が裂けて風に隨つて飄揚する。その花の紫色なるものをば岡桐、荏桐と名ける。卽ち油桐である。靑桐は卽ち梧桐にして實なきものだ。按ずるに陳翥の桐譜は白桐、岡桐を區別することが甚だ明で『白花桐は、文理が粗くして體性が慢であり、喜んで朝陽の地に生ずる。子から出たものは一年にして三四尺伸びるが、根から出たものは五七尺ばかりにもなる。その葉は圓く大きくして尖が長く、角があり、光澤にして毳があり。花を先にし葉を後にし、花は白色で花心が微し紅く、その實は大いさ二三寸で、內部が兩房になり、房內に肉があり、肉上に薄片がある。卽ちその子である。紫花桐は、文理が細かで體性が堅く、やはり朝陽の地に生ずるが、白桐のやうに伸び易くない。その葉は三角で圓く、大いさは白桐ほどで色靑く、毛多くして光らない。且つ硬くして微し赤い。やはり花を先にし葉を後にし、花の色は紫である。その實はやはり白桐と同じくして微し尖り、訶子のやうな狀態で粘り、房中の

肉は黄色である。二桐は皮色はいづれも同一だが、ただ花、葉に小異があり、體性に堅と慢があるだけだ。また冬期に復び花あるものもある』とある。

桐葉　[氣味]　【苦し、寒にして毒なし】　[主治]　【惡蝕瘡の陰に著くもの】(本經)　【腫毒を消し、髮を生ずる】(時珍)

[附方]　新四。【手足の腫浮】桐葉の煮汁に漬け、幷に少量を飲む。或は小豆を加へるが尤も妙である。(聖惠方)　【癰疽發背】大いさ盤ほどあり、臭腐して近けぬものには、桐葉を醋で蒸して貼る。熱を退け、痛を止め、次第に肉を生じて口を收め、極めて效驗ある祕方である。(醫林正宗)　【髮の落ちて生えぬもの】桐葉一把、麻子仁三升を米泔で煮て五六沸し、滓を去つて日日に洗へば長くなる。(肘後方)　【髮白きを黒く染める】霜を經た桐葉、及び子を多く取收め、搗き碎いて甑で蒸し、生布で汁を絞つて頭を沐ふ。(普濟方)

皮木　[主治]　【五痔。三蟲を殺す】(本經)　【奔豚氣病を療ず】(別錄)　【五淋。髮を沐へば頭風を去り、髮を生じて滋潤ならしめる】(甄權)　【惡瘡を治す。小兒の丹毒には、汁を煎じて塗る】(時珍)

【附方】 新三。【腫の脚より起るもの】桐木を削つて煮た汁に漬け、幷に少量を飲む(肘後方)【傷寒發狂】六七日にして熱極り、狂言し、鬼を見、走らんとするには、桐皮を取り、黒を削り去つて四寸に擘斷し、一束を酒五合、水一升で半升に煮取り、滓を去つて頓服する。青黃汁數升を吐下して瘥えるものである(肘後方)
【跌撲損傷】水桐樹皮を青を去つて白を留め、醋で炒つて搗いて傅ける。(集簡方)

花 【主治】【猪瘡に傅ける。猪を飼へば三倍に肥大する】(本經)

【附方】 新一。【眼に諸物の見えるもの】禽、蟲が飛走して見えるは肝、膽の疾である。青桐子花、酸棗仁、玄明粉、羌活各一兩を末にし、二錢づつを水で煎じ、一日三回、滓を和して服す。(經驗良方)

梧桐(綱目)

和名 あをぎり
學名 Firmiana simplex, W. F. Wight.
科名 あをぎり科(梧桐科)

【釋名】 **櫬** 時珍曰く、梧桐なる名稱の意味は詳でない。爾雅にこれを櫬といつたのは、この物が棺に作られるに因つたものだ。左傳に所謂『桐棺三寸』とはそ

れである。舊本には桐の條下に附記してあつたが、此には別に一條として掲げた。

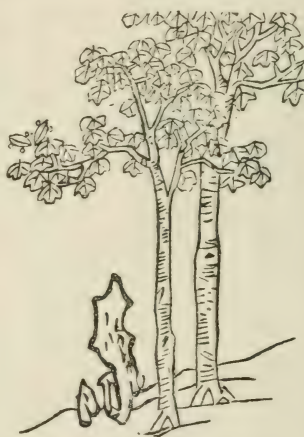
【集解】弘景曰く、梧桐は皮が白く、葉は靑桐に似て、子は肥えて食へる。

頌曰く、陶氏は、白桐、一名椅桐といひ、陸機は、梓實にして桐皮なるを椅といふといつた。卽ち今の梧桐であつて、この二種は倶に椅なる名がある。遁甲書に『梧桐は日月の正閏を知る可し。十二葉を生じ、一邊に六葉あつて下從り二葉を敷きて一月と爲し、上に十二月に至る。閏あれば十三葉にして、小餘の者、之を視れば則ち閏の何月なるを知る。故に曰ふ梧桐生ぜざれば九州異なり』とある。

宗奭曰く、梧桐は四月に嫩黄の小花を開き、さながら棗花のやうで、枝頭に絲を出し、地に墮ちて油となり、衣履に沾漬する。五六月に子を結ぶ。世間では取つて炒つて食ふ。味は菱、芡のやうだ。これが月令に『淸明桐始めて華さく』といふそれである。

時珍曰く、梧桐は處處にある。樹は桐に似て、皮が靑くして皵ならず、その木は節なくして直生し、理は細かくして性が緊い。葉は桐に似てやや小さく、尖滑にして尖がある。その花は細蕋が墜下して醭の如く、その莢は長さ三寸ばかり、五片が合

成し、老いると裂開して箕のやうである。これを橐鄂といふ。その子は橐鄂の上に綴り、多きは五六、少きは或は二三であつて、子の大いさは胡椒ほど、その皮は皺んでゐる。羅願の爾雅翼に『梧桐は陰多し。皮青く骨白く、青桐に似て子が多い。

〔梧桐〕

その木は生じ易く、鳥の啣んだ子が墮ちてそれが生える。但だ晩春に葉が生えて早秋には凋む』とある。古代の言葉に、鳳凰は梧桐に非ざれば棲まずといつたのは、やはりその實を食ふといふのではあるまいか。詩には『梧桐生矣、于彼朝陽』とあり、齊民要術には『梧桐は山石の間に生ずるもので、樂器に作れば更に鳴響する』とある。

木白皮 ［氣味］（缺） ［主治］【燒いて研り、乳汁に和して鬚髮に塗れば黃赤を變ずる】（時珍）【腸痔を治す】（蘇頌）○刪繁方の痔を治する青龍五生膏中にこれ

を用ゐてある。

葉　主治　【發背には、炙き焦して研末し、蜜で調へて傅け、乾けば易へる】(肘後)

子　氣味　【甘し、平にして毒なし】　主治　【擣汁を塗つて白髮を拔き去れば、根下に必ず黑きものを生ずる。又、小兒の口瘡を治するに、雞子に和して燒いて性を存し、研つて摻る】(時珍)

罌子桐　(拾遺)

和名　おほあぶらぎり
學名　Aleurites Fordii, Hemsl.
科名　たかとうだい科(大戟科)

釋名　**虎子桐**(拾遺)　**荏桐**(衍義)　**油桐**　時珍曰く、罌子といふは實の狀態が罌に似てゐるに因る。虎子といふはその毒あるを以てである。荏とはその油が荏油に似てゐるをいつたものだ。

集解　藏器曰く、罌子桐は山中に生ずる。樹は梧桐に似たものだ。

頌曰く、南方地方で油を作るもの、乃ち岡桐であつて、子があり、梧子よりも

大きい。

宗奭曰く、荏桐は早春に先づ淡紅の花を開き、狀態は鼓子花のやうで筒子を成す。子は桐油になる。

時珍曰く、岡桐は卽ち白桐にして紫花なるものだ。油桐は枝、幹、花、葉いづれも岡桐に類するが小さい。樹の生長もやはり遲い。花はやはり微紅であるが、但だその實が大きくして圓く、每實中に二子、或は四子あり、子の大いさは大風子ほどで、その肉は白色である。味は甘くして人を吐かしめる。また或はこれを紫花桐だといふ人もある。一般に多く種蒔し、子を收めて賣り、油として漆工家、及び艌船の材料に入れて用ゐられ、一般に必需品となつてゐる。世間には僞物が多いが、ただ篚圈で蘸け起して見て、鼓の面のやうになるものならば眞物である。

〔罌子桐〕
—油　桐—

桐子油　【氣味】【甘く微し辛し、寒にして大毒あり】大明曰く、冷にして微毒あり。時珍曰く、桐油は人を吐かしめるが、酒を得れば解す。

【主治】【疥癬、蟲瘡、毒腫に摩する。鼠を毒して死に至らしめる】(藏器)【惡瘡に傅け、及び水腫を宣する。鼠咬處に塗る。能く鼠を辟ける】(大明)【脛瘡、湯火傷瘡に塗る。風痰を吐す。及び一切の諸疾に、水を油に和し、喉中に掃入して探吐する。或は子を研末し、喉中に吹入れて吐を取る。又、燈に點じて銅箸頭を燒き、風熱爛眼を烙するが亦た妙である】(時珍)

【附方】新七。【癰腫の初起】桐油で燈を點じ、竹筒内に入れて薰する。黄水を出し得て消する。(醫林正宗)【血風臁瘡】胡粉を煆いて研り、桐油で調へて隔紙膏にして貼る。〇又ある方では、船上の陳桐油と石灰を煆いて用ゐ、又、人髪を桐油に拌ぜて炙乾して末にし、それを桐油で調へて膏にし、紙上に塗つて孔を刺して貼る。(楊起簡便方)【脚肚の風瘡】癩の如きには、桐油、人乳等分を掃く。數回で癒える。(集簡方)【酒皶赤鼻】柚油に黄丹、雄黄を入れて傅ける。(摘玄方)【凍瘡皸裂】桐油一盌、髮一握を熬化して瓶に貯へ、毎に溫水で洗つて軟にして傅ける。直ちに安

になる。(救急方)【砒石の毒を解す】桐油二升を灌ぐ。吐して毒が解す。(華佗危病方)

[附錄] [木郢]桐　音は而郢の切(テイ)である。藏器曰く、山谷の間に生ずる。狀態は青桐に似て葉に椏がある。土地の者は皮を取つて絲に漚む。木皮は味甘し、溫にして毒なし。蠱咬毒氣の腹に入りたるを治するに、末にして服す。雞、犬が蠱を食つて死せんとするには、煎汁を灌ぐ。絲が爛れて癒える。葉は蛇虫、蜘蛛の咬毒に主效がある。搗爛らして封ずる。

> [木郢]桐　和名　未詳
> 學名　未詳
> 科名　未詳

海桐(宋開寶)

和名　でいこ(梯沽)
學名　*Erythrina indica*, Lam.
科名　まめ科(荳科)

[釋名] 刺桐　珣曰く、南海の山谷中に生ずる。樹は桐に似て、皮が黃白色で刺がある。故にかく名けたのだ。

[集解] 頌曰く、海桐は南海、及び雷州に生じ、近海の州郡にもある。葉は大いさ手ほどあつて三花尖を作し、皮は梓白皮のやうで堅く韌く、繩に作れるもので、水に入つても爛れない。時期に拘らず採る。又、嶺南に刺桐といふがあり、葉は梧

桐のやう、その花は幹に附いて生じ、掌のやうに側敷し形は金鳳のやうだ。枝、幹に刺があり、花は深紅色であるといふ。江南には頳桐といふがあり、花は紅くして實がない。

時珍曰く、海桐皮は巨刺があつて黿甲の刺のやうだ。或は、卽ち刺桐皮だともいふ。按ずるに、嵇含の南方草木狀に『九眞に刺桐といふがある。葉を布いて繁密なもので、三月に花を開き、赤色で照映し、三五房が凋むと復た三五房が發く』とある。陳翥の桐譜には『刺桐は山谷中に生ずる。文理の細緊なもので、性喜く折裂する。體に巨刺があり、

〔海桐〕

欓樹のやうだ。その實は楓のやうである。頳桐は身が青く、葉は圓く大きくして長く、高さ三四尺にして花があり、朶を成して繁く、紅色で火のやうだ。夏、秋の榮

觀である』とある。

木皮　【氣　味】【苦し、平にして毒なし】大明曰く、温なり。【主　治】【霍亂、中惡、赤白久痢。疳䘌、疥癬、牙齒蟲痛を除く。いづれも煮て服し、及び含む。水に浸して目を洗へば膚赤を除く】(開寶)【腰脚不遂、血脈頑痺、腿膝疼痛、赤白下痢に主效がある】(李珣)【風を去り、蟲を殺す。湯に煎じて赤目を洗ふ】(時珍)

【發　明】頌曰く、古方に多く用ゐ、酒に浸して風蹶を治した。南唐の筠州刺史王紹顏撰の續傳信方に『近年予は姑孰にゐて、忍び難い腰膝痛を發し、醫師は腎臟の風毒攻刺と診斷したが、諸藥の療效がなかつた。たまたま劉禹錫の傳信方を覽ると、備にこの效驗あることを示してあつたので、一劑を調合して服すると病の五分を減じた。その方は、海桐皮二兩、牛膝、芎藭、羌活、地骨皮、五加皮各一兩、甘草半錢、薏苡仁二兩、生地黃十兩をいづれも淨洗し、焙乾して剉み、綿で包裹して無灰酒二斗に入れて浸し、冬は二七日、夏は一七日にして空心に一盞を飲む。每日朝、晝、夕、各一回飲んで長く醺醺たる狀態を保たしめる。この方は增減してはならぬ。毒食を禁ずる』とある。

り、蟲を殺す。

【附方】新三。【風癬の蟲あるもの】海桐皮、蛇牀子等分を末にし、臘猪脂で調へて搽る（艾元英如宜方）【風蟲牙痛】海桐皮を水で煎じて漱ぐ（聖惠方）【中惡霍亂】海桐皮の煮汁を服す。（聖濟總錄）

刺桐花【主治】『金瘡血を止めるに殊效がある』（蘇頌）

【附錄】**雞桐**　時珍曰く、嶺南の山間に生ずる。その葉は楝のやうだ。葉を湯に煎じ、足膝の風濕痺氣を洗渫する。

雞桐
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

楝（本經下品）

和名　せんだん
學名　Melia Azedarach, L.
科名　せんだん科（楝科）

【釋名】**苦楝**（圖經）實を**金鈴子**と名ける　時珍曰く、按ずるに、羅願の爾雅翼に『楝葉は物を練り得るものだ。故にこれを楝といふ』とある。その子は小鈴のやうで、熟すれば黃色になる。金鈴と名けるはその形容である。

【集解】別錄に曰く、楝實は荊山の山谷に生ずる。

弘景曰く、處處にある。俗間では五月五日に葉を取つて佩び、惡を辟けるといふ。

恭曰く、この物には雌雄の兩種あつて、雄なるものには子がなく、根が赤く、毒がある。これを服すれば人をして吐して止む能はざらしめ、時に死に至ることもある。雌なるものは子があり、根は白く、微毒がある。藥に入れるには雌なるものを用うべきものである。

〔楝〕

頌曰く、楝實は蜀川のものを佳しとする。木は高さ一丈餘、葉は密で、槐のやうで長い。三四月に花を開き、紅紫色で芬香庭に滿つる。實は彈丸ほどで、生では青く熟すれば黃になる。十二月にこれを採る。根を採るには一定の時期がな

い。

時珍曰く、楝は長ずること甚だ速で、三五年にして椽に作れるほどになる。その子はさながら圓棗のやうだ。川中のものを良しとする。王禎の農書に『鵷鶵はその實を食ふ』とあり、應劭の風俗通には『獬豸はその葉を食ふ』とあり、宗懍の歲時記には『蛟龍は楝を畏れる。故に端午には葉で粽を包み、江中に投じて屈原を祭る』とある。

實

修治　斅曰く、凡そ採取したならば、熬乾し、酒を拌ぜて透らせ、蒸して皮の軟なるを待ち、皮を刮り去つて肉を取り、核を去つて用ゐる。凡そ肉を使ふには核を使はず、核を使ふには肉を使はない。核を使ふ場合には、搥き碎き、漿水で一伏時煮て晒乾する。その花落子をば石茱萸といふ。藥に入れて用ゐない。

嘉謨曰く、石茱萸はやはり外科に入れて用ゐる。

氣味　【苦し、寒にして小毒あり】　元素曰く、酸く苦し、平なり。陰中の陽である。

時珍曰く、酒を得て煮れば寒因熱用となる。茴香が使となる。

【主治】【溫疾、傷寒の大熱煩狂。三蟲、疥瘍を殺し、小便水道を利す】(本經)【中大熱狂、失心躁悶に主效があり、湯にして浴する、湯に入れては使はない】(甄權)【心、及び小腸に入り、上下部の腹痛を止める】(李杲)【膀胱を瀉す】(好古)【諸疝、蟲痔を治す】(時珍)

【發明】元素曰く、熱厥暴痛はこれ以外では除き得ぬ。

時珍曰く、楝實は小腸、膀胱の熱を導き、因て心包の相火を引いて下行する。故に心腹痛、及び疝氣の要藥とするのである。甄權は『湯に入れては使はぬ』といつたが、それならば本經に何を以て『熱狂を治し、小便を利す』の文があるであらうか。近頃の方に、疝を治するに四治、五治、七治の諸法があるが、蓋しまた配合の技巧だけのことだ。

【附方】舊三、新八。【熱厥心痛】或は發し或は止み、身熱し足寒し、久しく癒えぬには、先づ大溪崑崙に灸して熱を引いて下行し、金鈴散を內服する。金鈴子、玄胡索各一兩を末にし、毎服三錢を溫酒で調へて服す。(潔古活法機要)【小兒の冷疝】氣痛し、膚囊浮腫するには、金鈴子を核を去つて五錢、吳茱萸二錢半を末にし、酒

糊で黍米大の丸にし、二三十丸づつを鹽湯で服す（全幼心鑑）【男子の疝氣】本臟の氣傷、膀胱から小腸に連る等の氣には、金鈴子一百箇を溫湯に浸して皮を去り、巴豆二百箇を微打して破り、麪二升で共に銅鐺中で炒り、金鈴子が赤くなるまでを度として放冷して取出し、核を去つて末にし、巴、麪をば用ゐぬ。每服三錢を熱酒、或は醋湯で調へて服す　ある方では、鹽で炒つた茴香半兩を入れる（經驗方）【癲疝腫痛】澹寮方の楝實丸――釣腎、偏墜痛の忍び難きを治す　川楝子肉五兩を五分し、一兩をば破故紙二錢で黃に炒り、一兩をば小茴香三錢、食鹽半錢で共に炒り、一兩をば萊菔子一錢と共に炒り、一兩をば牽牛子三錢と共に炒り、一兩をば斑蝥七箇を頭、足を去つて共に炒り、食鹽、萊菔、牽牛、斑蝥を揀り去つてただ故紙、茴香だけを留め、共に研つて末にし、酒で作つた麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に酒で服す。○得效方の楝實丸――一切の疝氣腫痛を治し、大いに神效がある。川楝子を酒で潤して肉一斤を取つて四分し、四兩をば小麥一合、斑蝥四十九箇と共に炒熟して蝥を去り、四兩をば小麥一合、巴豆四十九箇と共に炒熟して豆を去り、四兩をば小麥一合、巴戟肉一兩と共に炒熟して戟を去り、四兩をば小茴香一合、食鹽

一兩と共に炒熱して鹽を去り、破故紙を酒で炒つて一兩、廣木香を火を見せずして一兩を加へて末にし、酒で煮た麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを鹽湯で空心に服す。一日三服。○直指方の楝實丸――外腎脹大、麻木痛を治し、及び奔豚疝氣を破る。川楝子四十九箇を七處に分け、切つて肉を取り、七箇をば小茴香五錢と共に炒り、七箇をば破故紙二錢半と共に炒り、七箇をば黑牽牛二錢半と共に炒り、七箇をば食鹽二錢と共に炒り、七箇をば蘿蔔子二錢半と共に炒り、七箇をば巴豆十四箇と共に炒り、七箇をば斑蝥十四箇を頭、足を去つて共に炒り、蘿蔔子、巴豆、斑蝥の三味をば揀り去つて用ゐず。靑木香五錢、南木香、官桂各二錢半を入れて末にし、酒で煮た麪糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを食前に鹽湯で服す。一日三服。【臟毒下血】苦楝子を黃に炒つて末にし、蜜で梧子大の丸にし、米飮で毎十丸乃至二十丸を呑む。（經驗方）【腹中の長蟲】楝實を淳苦酒に一夜漬け、綿で裹んで穀道中三寸ばかりに塞入し、日に二回易へる（外臺祕要）【耳の卒に熱腫するもの】楝實五合を搗き爛らし、綿で裹んで塞ぎ、頻りに換へる。（聖惠方）【腎消膏淋】病の下焦に在るには、苦楝子、茴香等分を炒つて末にし、一錢づつを溫酒で服す。（聖惠方）【小兒の

五疳】川楝子肉、川芎藭等分を末にし、猪膽汁で丸にして米飲で服す。（摘玄方）

根 及び 木皮 〔氣 味〕【苦し、微寒にして微毒あり】大明曰く、雄なるものは根が赤くして毒あり、吐瀉して人を殺す。誤つて服してはならぬ。雌なるものを服食に入れる。毎一兩を糯米五十粒を入れて共に煎じて毒を殺すがよし。もし瀉するときは冷粥で止める。瀉せぬときは熱葱粥で發する。

〔主 治〕【蚘蟲。大腸を利す】（別錄）【苦酒で和して疥癬に塗るが甚だ良し】（弘景）【遊風熱毒、風瘮、惡瘡、疥癩、小兒の壯熱を治す。いづれも煎湯で浸し洗ふ】（大明）

〔附 方〕舊二、新八。【消渇に蟲あるもの】苦楝根白皮一握を切つて焙じ、麝香少量を入れ、水二椀で一椀までに煎じ、空心に飲む。困頓しても妨げない。蚘のやうで紅色の蟲を下し、その渇は自ら止む。消渇に蟲のあることは一般に知られてゐない。（洪邁夷堅志）【小兒の蚘蟲】棟木皮を蒼皮を削り去り、水で汁に煮、大、小を量つて飲む。○斗門方では、末にして二錢を米飲で服す。○集簡方では、根皮を雞卵と共に煮熟し、空心に食ふ。翌日蟲が下る。○經驗方では抵聖散——苦楝皮二兩、

白蕪荑半兩を末にし、一二錢づつを水で煎じて服す。○簡便方では、楝根白皮を粗を去つて二斤を切り、水一斗で汁三升に煮取り、沙鍋で膏にし、五更の初刻に溫酒で一匙を服す。蟲の下るを度とする。【小兒の諸瘡】惡瘡、禿瘡、蠼螋瘡、浸淫瘡にいづれも宜し。楝樹皮、或は枝を灰に燒いて傅ける。乾くには猪脂で調へる（千金方）【口中の瘻瘡】東行の楝根を細剉し、水で濃汁に煮て日日に含漱し、吐き去る。嚥んではならぬ。（肘後方）【蜈蚣、蜂傷】楝樹の枝、葉の汁を塗るが良し。（楊起簡便方）【風蟲の疥瘡】楝根皮、皂角を皮、子を去り、等分を末にして猪脂で調へて塗る。（奇效方）

花 主治 【熱痱には、焙じて末にして摻る。席下に鋪けば蚤、虱を殺す】（時珍）

葉 主治 【疝の囊に入つて痛むには、發する時に臨んで酒で煎じて飲む】（時珍）

槐（本經上品）

和名　ゑんじゆ
學名　Sophora japonica, L.
科名　まめ科（荳科）

校正　嘉祐の槐花、槐膠を併せ入る。

釋名　櫰　音は懐（クワイ）である。時珍曰く、按ずるに、周禮の外朝の法に『三槐に面し、三公これに位す』とあり、呉澄の註に『槐の意味は懐であつて、人を此に懐き來すである』とある。王安石の釋には『槐は黄中にその美を懐く。故に三公これに位する』とある。春秋元命包には『槐の意味は歸であつて、古には、槐を樹ゑてその下で訟を聽き、情をして實に歸せしめた』とある、

集解　別錄に曰く、槐實は河南の平澤に生ずる。神燭と作し得る。頌曰く、今は處處にあつて、その木には極めて高大なものがある。按ずるに、爾雅には數種あつて、葉大にして黑きものを櫰槐と名け、晝合し夜開くものを守宮槐と名け、葉細くして青綠なるものを但だ槐といつた。その功用に別あることは言つてない。四月、五月に黄花を開き、六月、七月に實を結ぶ。七月七日に嫩實を採り、

搗汁を煎に作り、十月に老實を採つて藥に入れる。皮、根は採るに一定の時期はない。醫家でこれを用ゐることが最も多い。

時珍曰く、槐の生えるは季春であつて、五日にして兎目となり、十日にして鼠耳

〔槐〕

となり、更に旬にして始めて規となり、二旬にして葉が成る。初生の嫩芽は煠熟して水で淘つて食へる。また飲に作り、茶に代へられる。或は槐子を採つて畦中に種ゑ、苗を採つて食ふも良し。その木材は堅重にして青、黄、白、黒の色があり、その花は、まだ開かぬときは米粒のやうな狀態のもので、炒つて水で煎じて物を黄に染めると甚だ鮮である。その實は莢を作し連珠して中に黒子がある。子の

連つて多いものを好しとする。周禮に、秋は槐檀の火を取るとあり、淮南子には、老槐火を生ずとあり、天玄主物簿には、老槐は丹を生ずといつてある。かやうに神異なものだ。

藏器曰く、子上の房を七月に取收めれば皂を染めるに堪へる。

槐實　修治　斆曰く、凡そ採取したならば、單子、幷に五子のものを去る。ただ兩子、三子のものを取り、銅鎚で鎚破し、烏牛乳に一夜浸し、蒸してから用ゐる。

氣味　【苦し、寒にして毒なし】　別錄に曰く、酸く鹹し、之才曰く、景天が使となる。

主治　【五内の邪氣の熱。涎唾を止め、絶傷を補す。火瘡、婦人の乳瘕、子臟の急痛】(本經)　【久しく服すれば目を明にし、氣を益し、頭を白くせず、天年を延べる。五痔、瘡瘻を治するに、七月七日に取り、汁に搗いて銅器に盛り、日日に煎じて丸になるまでしに、鼠屎ほどを竅中に入れ、日に三回易へれば癒える。又、胎を墮す】(別錄)　【大熱、難產を治す】(甄權)　【蟲を殺し、風を去る。房を合せて陰乾して煮て飲めば、目を明にし、熱淚、頭腦、心胸の間の熱風、煩悶、風眩で倒れんとし、心頭の涎を吐し、醉ひるが如く舡車上の如く瀁瀁たるものを除く】(藏器)

【男子、婦人の陰瘡、濕痒を治す。催生には七粒を呑む】(大明)【風熱を疏導する】(宗奭)【口齒の風を治し、大腸を涼し、肝燥を潤ほす】(李杲)

【發明】 好古曰く、槐實は純陰であつて肝の經の氣分の藥である。治證は桃仁と同じ。

弘景曰く、槐子を十月巳の日に相連つて多きものを採り、新盆に盛つて泥で合せ、百日にして皮が爛れて水となつたとき、核の大豆ほどのものを服すれば、腦を滿たしめ、髮白からずして長生する。

頌曰く、嫩房角を折き、湯に作つて茗に代へれば、頭風に主效があり、目を明にし、腦を補す。水で黑子を呑めば白髮を變ずる。扁鵲の目を明にし髮を落ちざらしめる法——十月の上巳の日に槐子を取つて皮を去り、新瓶中に納れて二七日間口を封じ、初服に一箇、再服に二箇、日日に一箇を增加して十日までに達したとき、また一箇から始め、終つて復た始める。人をして夜中書を讀み得るやうならしめ、天年を延べ、氣力を益し、大いに良し。

時珍曰く、按ずるに、太淸草木方に『槐は虛星の精である。十月上巳の日に子を

採つて服すれば、百病を去り、長生し、神に通ずる』とあり、梁書に『庾肩吾は常に槐實を服し、年七十餘にして髮鬢みな黑く、目に細字を看た』とあるはやはりその驗である。古方に、子を冬期の牛膽中に入れて漬け、百日間陰乾し、毎食後に一箇を呑むとあり、久しく服すれば目を明にし、神に通じ、白髮を黑に還すといつてある。痔、及び下血あるものは就中これを服するが宜し。

附方　舊一、新四。【槐角丸】五種の腸風瀉血を治す。糞前に血あるを外痔と名け、糞後に血あるを內痔と名け、大腸收まらぬを脫肛と名け、穀道の四面に弩肉が嬭の如くなるを擧痔と名け、頭上に孔あるを瘻瘡と名け、內に蟲あるを蟲痔と名ける。いづれもみな治す。槐角を梗を去り炒つて一兩、地楡、當歸を酒で焙じ、防風、黃芩、枳殼を麩で炒り、各半兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを米飮で服す。(和劑局方)【大腸脫肛】槐角、槐花各等分を炒つて末にし、羊血に藥を蘸けて炙熟して食ひ、酒で送下する。猪腰子を皮を去り、蘸けて炙くもよし。(百一選方)【內痔、外痔】許仁則の方。槐角子一斗の搗汁を晒して稠くし、地膽を取つて末にし、共に煎じて梧子大の丸にし、十丸づつを飮服し、兼て挺子に作つて下部

に納れる、或は苦參末を以て地膽に代へるもよし。(外臺秘要)【目熱昏暗】槐子、黄連二兩を末にし、蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを漿水で服す。一日二服。(聖濟總錄)【大熱心悶】槐子を焼いて末にし、酒で方寸匕を服す。(千金方)

槐花 修治 宗奭曰く、未だ開かぬ時に採收した陳久なるものが良し。藥に入れるには炒つて用ゐる。染色用には、水で煮て一沸して出し、その稠滓を餅にすれば染色が更に鮮である。

氣味 【苦し、平にして毒なし】元素曰く、味厚く、氣薄し。純陰である。

主治 【五痔、心痛、眼赤。腹臟の蟲を殺し、及び皮膚風熱、腸風瀉血、赤白痢には、いづれも炒り研つて服す】(大明)【大腸を涼する】(元素)【香しく炒つて頻りに嚼めば、失音、及び喉痺を治す。又、吐血、衄、崩中漏下を療ず】(時珍)

發明 時珍曰く、槐花は、味苦く、色は黄、氣は涼であつて、陽明、厥陰の血分の藥である。故に主とするところの病は多くその二經に屬する。

附方 舊一。新二十。【衄血の止まぬもの】槐花、烏賊魚骨等分を半生半炒にし、末にして吹く。(普濟方)【舌衄出血】槐花末を傅ければ止む。(朱氏集驗)【吐血の止ま

ぬもの】槐花を燒いて性を存し、麝香少量を入れて研り勻ぜ、糯米飮で三錢を服す。(普濟方)【咯血、唾血】槐花を炒つて研り、每服三錢を糯米飮で服し、一時仰臥して效を取る。(朱氏方)【小便尿血】槐花を炒り、鬱金を煨いて各一兩を末にし、二錢づつを淡豉湯で服す。立ろに效がある。(篋中祕密方)【大腸下血】經驗方では、槐花、荊芥穗等分を末にし、酒で一錢匕を服す　○集簡方では、柏葉三錢、槐花六錢を湯に煎じて日日に服す。○袖珍では、槐花、枳殼等分を炒つて性を存して末にし、新汲水で二錢を服す。【暴熱下血】生猪臟一條を洗淨して控乾し、炒つて槐花末を塡滿して扎定し、米醋で沙鍋中で煮爛し、擂つて彈子大の丸にして日光で乾し、每服一丸を空心に當歸煎酒に化して服す。(永類鈐方)【酒毒下血】槐花を半生半炒にして一兩、山梔子を焙じて五錢を末にし、新汲水で二錢を服す。(經驗良方)【臟毒下血】新槐花を炒つて研り、酒で三錢を服す。一日三服。或は槐白皮の煎湯で服す。(普濟方)【婦人の漏血】止まぬには、槐花を燒いて性を存して研り、每服二三錢を食前に溫酒で服す。(聖惠方)【血崩の止まぬもの】槐花三兩、黃芩二兩を末にし、每服半兩を、銅秤錘一箇を桑柴火で紅く燒いて酒一盌に浸したもので調へて服す。口を忌む。(乾

坤祕韞）　【中風失音】炒つた槐花を、三更後に仰臥して嚼んで咽む。（危氏得效方）【癰疽發背】凡そ人の熱毒に中つて眼花し、頭運し、口乾き、舌苦く、心驚し、背熱し、四肢麻木し、背後に紅暈あるを覺えたときは、直ちに槐花子一大抄を取り、鐵杓で炒つて褐色にし、好酒一盌にこれを泡け、熱に乘じて酒を飲む。一汗して癒える。もしなほ退かぬときは再び炒つて一服する。極めて效がある、たとひ膿を成したものでも癒えぬはない。彭幸庵は『この方は三十年間屢〻效驗を得たものだ』といつた。（劉松石保壽堂方）【楊梅毒瘡】乃ち陽明の積熱から發るものである。槐花四兩をほぼ炒り、酒二盞に入れ、煎じて十餘沸して熱服する。胃の虚寒のものは用ゐてはならぬ。（集簡方）【長さ一寸に及ぶ外痔】槐花の煎湯で頻りに洗ひ、幷に服す。數日にして自ら縮む。（集簡方）【疔瘡腫毒】一切の癰疽發背には、已に成りたると未だ成らぬとを問はず、但だ焮痛するものはみな治す。槐花を微し炒り、核桃仁二兩と無灰酒一鍾で煎じ、十餘沸して熱服する。未だ成らぬものは二三服、已に成りたるは一二服で效が見れる。（醫方摘要）【發背の散血】槐花、菉豆粉各一升を共に炒つて象牙色にして研末し、細茶一兩を一盌に煎じて一夜露したものでその末三錢を調へて傅け、

頭を留める。婦人の手を犯してはならぬ。(攝生妙用方)【下血、血崩】槐花一兩、椶灰五錢、鹽一錢を水三鍾で煎じ、半減して服す。(摘玄方)【白帶の止まぬもの】槐花を炒り、牡蠣粉を煆き、等分を末にし、三錢づつを酒で服して效を取る。(同上)

葉　[氣味]【苦し、平にして毒なし】[主治]【煎湯は、小兒の驚癎、壯熱、疥癬、及び下腫を治す。皮、莖を共に用ゐる。(大明)【邪氣産難、絕傷、及び癮疹。牙齒の諸風には嫩葉を採つて食ふ】(孟詵)

[附方]　舊二。新一。【霍亂煩悶】槐葉、桑葉各一錢、炙甘草三分を水で煎じて服す。(聖惠方)【腸風痔疾】槐葉一斤を蒸熟し、晒乾して研末し、煎じて茶に代へて飲む。久しく服すれば目を明にする。(食醫心鏡)【鼻氣窒塞】水五升で槐葉を煮て三升を取り、葱、豉を下して調へ和し、再び煎じて飲む。(千金方)

枝　[氣味]　葉に同じ。[主治]【瘡、及び陰囊下の濕痒を洗ふ。八月大枝を斷り、嫩蘖の生えるを候ち、汁に煮て酒に釀し、大風痿痺を療するに甚だ效がある】(別錄)【炮き熱して蠍毒を熨す】(恭)【青枝を燒瀝して癬に塗る。黑く煆いて牙に揩れば蟲を去る。湯に煎じて痔核を洗ふ】(頌)【燒灰で頭を沐すれば髮を長く

する】(藏器)【赤目、崩漏を治す】(時珍)

發明 頌曰く、劉禹錫傳信方の記錄に、硤州の王及郎中の槐湯灸痔法が甚だ詳である、槐枝の濃煎湯で先づ痔を洗ひ、そこで艾でその上に七壯灸し、知あるを度とする。王及はもと痔疾があつて、西川の安撫使判官に任ぜられたとき、騾に乘つて駱谷から入つたので、その痔が大いに作り、胡瓜のやうな狀態となつて、熱氣が火の如く、驛に到著すると殪れて了つた。その時郵吏がこの法を用ゐて灸すると、三五壯に至つて忽ち一道の熱氣が腸中に入るを覺え、大いに轉瀉したために血が先に穢が後に出て、その痛楚甚しかつたが、瀉して後には遂に胡瓜のやうなものの所在が判らなくなり、騾に打ち乘つて馳せ赴いたとある。

附方 舊五、新一。【風熱牙痛】槐枝を燒き熱して烙する。(聖惠方)【胎赤風眼】槐木枝の馬鞭ほどの大さで長さ二尺を二段にし、頭を揃へ、麻油一匙を銅鉢中に入れて、早朝一人の童子をしてその木で硏らせ、日暮まで硏らせて止め、仰臥してそれを目に塗る。日日三回塗れば瘥える。【九種の心痛】太歲の上に當つて新生の槐枝一握を取り、兩頭を去り、水三大升で一升に煎じ取つて頓服する。(千金)【崩中赤

白】發病の遠近を問はず、槐枝を取つて灰に燒き、食前に酒で方寸匕を服す。一日二服(深師方)【胎動して產せんとするもの】日月が未だ足らぬものには、槐樹の東に引いた枝を取り、妊婦の手に把らせれば生み易い。(子母秘錄)【陰囊濕痒】槐樹の北面で日を見ぬ枝を水で煎じて三五遍洗ふ。冷えれば再び暖める。(孟詵必效方)

木皮　根白皮　氣味　【苦し、平にして毒なし】　主治　【爛瘡、喉痺、寒熱】(別錄)【汁に煮て陰囊墜腫で氣痛するに淋ぐ。煮た漿水で口齒の風疳䘌血を漱ぐ】(甄權)【中風の皮膚不仁を治す。男子の陰疝卵腫を浴し、五痔、一切の惡瘡、婦人の產門痒痛、及び湯火瘡を浸洗する。煎膏は痛を止め、肉を長じ、癰腫を消す】(大明)【煮汁を服すれば下血を治す】(蘇頌)

附方　舊四、新二。【中風身直】屈伸反復し得ぬには、槐皮の黃白なるものを取つて切り、酒、或は水六升で二升に煮取り、稍稍に服す。(肘後方)【破傷中風】避陰の槐枝上の皮を旋し刻み取り、一片を傷處に置き、艾で皮上に百壯灸する。痛まぬものは久して痛むやうになり、痛むものは灸して痛まなくなる。手で摩する。(普濟)【風蟲牙痛】槐樹白皮一握を切り、酪一升で煮て滓を去り、鹽少量を入れて含

漱する（廣濟方）【陰下の濕痒】槐白皮を炒り、水で煎じて日日に洗ふ（生生方）【痔瘡の蟲あるもの】痒く、或は膿血を下すこと多きには、槐白皮の濃煮汁を取つて先づ熏じ、後に洗ふ。良久して便意を生じ、蟲があつて出るものである。三回に過ぎずして癒える。かくて皮を末にし、綿で裹んで下部中に納れる（梅師方）【蠼螋惡瘡】槐白皮を醋に半日浸して洗ふ（孫眞人千金翼）

槐膠 ［氣味］「苦し、寒にして毒なし」［主治］【一切の風。涎を化す。肝臟風で筋脈抽掣するもの、及び急風口噤、或は四肢收らぬもの、頑痺、或は毒風で全身に蟲が行くやうに覺ゆるもの、或は破傷風で口眼偏斜し、腰背強硬するものには、任意に湯、散、丸、煎にして諸藥を雜へて用ゐる。また水で煮て、藥を和して丸にするもよし」（嘉祐）「煨熟し、綿に裹んで耳を塞げば、風熱聾閉を治す。」（時珍）

檀（拾遺）

和名 たん
學名 Dalbergia hupeana, Hance.
科名 まめ科（荳科）

〔釋名〕 時珍曰く、朱子は『檀は善木なり』といつた　その字の亶に從ふはそれゆゑであつて、亶は善である。

〔集解〕 藏器曰く、按ずるに、蘇恭は『檀は秦皮に似て、その葉は飲となすに堪へ、樹は體細にして斧柯に作るに堪へる。夏になつても生えぬものがあつて、忽然として葉が開けば大水があるものだ。農人はそれを候て水、旱を占ふ。號して水檀といふ』といつた。又、ある一種は、葉は檀のやうで高さ五六尺、高原に生じ、四月に正紫色の花を開く。これも檀樹と名ける。その根は葛のやうである。

〔檀〕
——黃檀は三月葉を生ずる——

頌曰く、江淮、河朔の山中にみなある。やはり檀香の類だが、但だ香しくないだけである。

時珍曰く、檀に黃白の二種あつて、葉はみな槐のやう、皮は青くして澤あり、肌

は細にして膩に、體は重くして堅く、狀態は梓楡、莢蒾と相似てゐる。故に俚語に【檀を研いて諦ならず莢蒾を得たり、莢蒾尙は駮馬を得可し』といふ。駮馬とは梓楡のことで、又、六駮と名け、皮色は青白くして癬駮が多いものだ。檀木は杵、楤、鎚器などにして用ゐるに宜し。

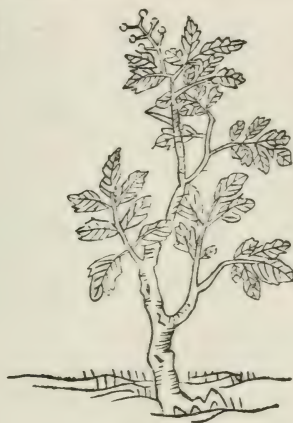
皮及び**根皮** 氣味 【辛し、平にして小毒あり】 主治 【皮を楡皮に和して粉食とすれば、穀を斷ち、荒を救へる。根皮を瘡疥に塗れば蟲を殺す】(藏器)

莢蒾（唐本草）

和名 がまずみ
學名 Viburnum dilatatum, Thunb.
科名 すひかづら科（忍冬科）

釋名 **繫迷**（詩疏） **羿先**（同上）

集解 恭曰く、莢蒾は、葉は木槿、及び楡に似て小樹を作し、その子は疏溲のやうで、兩兩相對して色赤く、味甘し。陸機の詩疏に『檀は楡の類なり』とある。所在の山谷にある。

藏器曰く、北土の山林中に生ずる。皮は索にすると堪へる。

枝葉　【氣味】【甘く苦し、平にして毒なし】【主治】【三蟲。氣を下し、穀を消す。煮汁を米に和して粥に作り、小兒に飼ふ。甚だ美味である】（唐本）【粥にして六畜の瘡中に灌げば、生じた蛆が立ろに出る】

〔莢　迷〕

——白檀は五月葉を生ずる——

（藏器）

本草綱目木部第三十五卷上　終

本草綱目木部

第三十五巻　下

木の二　喬木類

秦皮（本經中品）

和名　しなとねりこ（新稱）
學名　Fraxinus sp.
科名　もくせい科（木犀科）

校正　拾遺の樳木を併せ入る。

〔秦皮〕
—梣—

釋名　**梣皮**　音は岑（シン）である。**樳木**　音は尋（シン）である。**石檀**（別錄）**樊槻**（弘景）**盆桂**（日華）**苦樹**（蘇恭）**苦櫪**　時珍曰く、秦皮はもと梣皮と書いた。その木は小さくして岑高だから、それに因んで名としたのである。世人は訛つて樳木とし、又、訛つて秦木とした。或は、もと秦地に產したものだから

秦の名が生じたのだともいふ。高誘は淮南子に註して『梣は苦櫪なり』といつてある。

恭曰く、樹、葉が檀に似てゐる。故に石檀と名ける。俗に、味の苦いところから苦樹と呼ぶ。

【集解】別錄に曰く、秦皮は廬江の川谷、及び寃句の水邊に生ずる。二月、八月に皮を採つて陰乾する。

弘景曰く、俗に、これは樊槻の皮だといふが、水に漬けて墨に和して書くと、色が脱ちずして微青である。

恭曰く、この樹は檀に似て葉が細く、皮は白點があつて粗錯でない。皮を取つて水に漬けると碧色で、それで紙に書いて看るとみな青色なるものが眞なるものだ。

頌曰く、今は陜西の州郡、及び河陽にもある。その木は大體檀に似て、枝、幹はみな青綠色、葉は匙頭ほどで、慮大にして光らない。いづれも花、實がなく、根は槐根に似てゐる。俗に白桪木と呼ぶ。

皮　【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】別錄に曰く、大寒なり。普曰く、神農、

雷公、黃帝、岐伯は酸し毒なしといひ、李當之は小寒なりといふ。權曰く、平なり、苦瓠、防葵を惡む。之才曰く、吳茱萸を惡む。大戟が使となる。

【主治】【風寒濕痺、洗洗たる寒氣。熱、目中の靑瞖、白膜を除く。久しく服すれば頭が白からず、身を輕くする】(本經)【男子の精を少くもの、婦人の帶下、小兒の癇、身熱を療ず、洗目湯に作るによし。久しく服すれば皮膚光澤となり、肥大し、子を有つ】(別錄)【目を明にし、目中の久熱、兩目の赤腫、疼痛、風涙の止まぬものを去る。湯にして小兒の身熱を浴す。水で煎じて澄淸し、赤目を洗ふ。極めて效がある】(甄權)【熱痢下重、下焦の虛に主效がある】(好古)【藥と共に湯に煮て蛇咬を洗ひ、幷に硏末して傅ける】(藏器)

【發明】弘景曰く、秦皮は、俗方ではただ目を療ずるに用ゐるが、道家でもやはり用處がある。

大明曰く、秦皮の功は、肝を洗ひ、精を益し、目を明にし、熱を退ける。

元素曰く、秦皮は沈であり陰であつて、その用に四あり、風寒濕邪の痺と成りたるもの、靑白幻瞖の睛を遮るもの、婦人の崩中帶下、小兒の風熱驚癇を治す。

好古曰く、痢は下焦の虚である。故に張仲景の白頭翁湯は黄蘗、黄連、秦皮を共に用ゐた。いづれも苦は以て之を堅くするである。秦皮は水に浸せば青藍色である。紫草と共に用ゐて目病を治し、以て光暈を増すに尤も佳し。

時珍曰く、梣皮は、色は青、氣は寒、味は苦、性は濇である。乃ち厥陰、肝、少陽、膽の經の藥である。故に目病、驚癇を治するはその木を平にするを取り、下痢、崩帶を治するはその收濇を取るのである。又、能く男子の少精を治して精を益し、子を有たしむるは、いづれもその濇にして補するを取るのである。故に老子は『天道は濇を貴ぶ』といつた。この藥は乃ち服食、及び驚癇、崩、痢に適するところのものだが、一般にはただその目を治するの一節を知るに止り、幾ど廢棄するに近い。良に遺憾な次第である。淮南子には『梣皮は色青し。目を治するの要藥なり』とある。又、萬畢術に『梣皮止水』とあるは、この物が能く涙を收めるの意味である。高誘が『水を致す』と解釋して、『能く水をして沸せしめるものだ』といつたのは謬である。

附方　舊三、新三。【赤眼で瞖を生ずるもの】秦皮一兩を水一升半で七合に煮

て澄清し、日日に溫めて洗ふ。ある方では、滑石、黃連等分を加へる。(外臺祕要)【眼の暴腫痛】秦皮、黃連各一兩、苦竹葉半升、水二升半を八合に煮取り、食後に溫服する。これは謝道人の方である。(外臺祕要)【赤眼睛瘡】秦皮一兩を淸水一升に白盌中で浸し、夏は一食頃以上浸し、碧色が出るを看て、筯頭に綿を纏へたもので仰臥して點け、眼に滿たしめる。微痛するが畏れるに及ばぬ。良久して熱汁を瀝取する。日に十回以上點ければ兩日に過ぎずして痊える。(外臺祕要)【眼弦挑鍼】乃ち肝、脾積熱である。秦皮を剉み、沙糖を夾んで煎じ、大黃末一錢を調へる。微利して佳し。(仁齋直指方)【連年の血痢】秦皮、鼠尾草、薔薇根等分を水で煎じて汁を取り、銅器に入れ重釜にして煎成し、梧子大の丸にし、一日二回、五六丸づつを服し、やや增して知あるを度とする。煎飲にするもよし。(千金方)【天蛇毒瘡】癩に似て癩ではない。天蛇なるものは草間の花蜘蛛である。人がそれに螫され、露水に濡れるとこの疾に成る。秦皮の煮汁一斗を飲めば痊える。(寇宗奭本草)

合歡（本經中品）

和名　ねむのき
學名　Albizzia Julibrissin, Dur.
科名　まめ科（荳科）

［釋名］　**合昏**（唐本）　**夜合**（日華）　**青裳**（圖經）　**萌葛**（綱目）　**烏賴樹**　頌曰く、崔豹の古今注に『人の忿を蠲てんと欲せば、則ち贈るに青裳を以てす』とある　青裳は合歡であつて、庭除に植ゑれば人をして忿らざらしめる。故に嵇康の養生論に『合歡は忿を蠲て、萱草は憂を忘る』とある。

藏器曰く、その葉は暮になると合する。故に合昏といふ。

時珍曰く、按ずるに、王璆の百一選方に『夜合は、俗に萌葛と名け、越人はこれを烏賴樹といふ』とある。又、金光明經には、尸利灑樹といつてある。

［集解］　本經に曰く、合歡は豫州の山谷に生ず。樹は狗骨樹の如し。

別錄に曰く、益州の山谷に生ずる。

弘景曰く、俗間には識るものが少だ。それは療病の功でないからであらう。

恭曰く、この樹は、葉は皂莢、及び槐と似て極めて細く、五月に花を發き、紅白

色で上に絲茸がある。秋莢になつた實を結び、子は極めて薄細である。所在の山谷にある。今は東西京の第宅の山池の間にやはり種ゑるものがあり、名けて合昏といふ。

○頌曰く、今は汴洛の間にいづれもあり、人家で多く庭除の間に植ゑる。木は梧桐に似て枝が甚だ柔弱であり、葉は皂角に似て極めて細く、繁密で互に相交結し、一たび風が來ると自ら相解けて少しも相牽綴しない。皮、及び葉を採つて用ゐる。時期に拘はらぬ。

〔合歡〕

○○宗奭曰く、その色が今の蘸暈綫のやう、上半は白く下半は肉紅で、散垂して絲のやうだ。花としての特色あるものである。その綵葉は夜になると合する。嫩い時に煠熟して水で淘ればやはり食へる。

木皮　粗皮を去り、炒つて用ゐる。【氣　味】【甘し、平にして毒なし】【主　治】【五臟を安じ、心志を和し、人をして歡樂して憂なからしめる。久しく服すれば身を輕くし、目を明にし、欲する所を得る】(本經)【煎膏は癰腫を消し、筋骨を續ぐ】(大明)【蟲を殺す。末に搗いて鐺下墨を和し、生油で調へて蜘蛛咬瘡に塗る。葉を用ゐて衣垢を洗ふ】(藏器)【折傷疼痛には、研末して酒で二錢匕を服す】(宗奭)【血を和し、腫を消し、痛を止める】(時珍)

【發　明】震亨曰く、合歡は土に屬し、補陰の功が甚だ捷である。肌肉を長じ、筋骨を續ぐことも大體了解される。白蠟と共に膏に入れて用ゐれば神效がある。而るに外科家で未だ曾て錄し用ゐぬは如何なるわけか。

【附　方】舊二、新三。【肺癰唾濁】心胸煩錯するには、夜合皮一掌大を取り、水三升で一半に煮取り、二回に分服する。(韋宙獨行方)【撲損折骨】夜合樹皮、卽ち合歡皮を粗皮を去り、黑色に炒つて四兩、芥菜子を炒つて一兩を末にし、毎服二錢を溫酒で就寢時に服し、滓を傅ける。接骨に甚だ妙である。(王璆百一選方)【髮の落ちて生えぬもの】合歡木灰二合、墻衣五合、銖精一合、水萍末二合を研り勻ぜ、生油で調へ

て塗る。一夜一回（普濟方）【小兒の撮口】夜合花枝の濃煮汁で口中を拭ひ、幷に洗ふ。（子母祕錄）【中風攣縮】夜合枝酒――夜合枝、柏枝、槐枝、桑枝、石榴枝各五兩をいづれも生で剉み、糯米五升、黑豆五升、羌活二兩、防風五錢、細麴七斤半を用ゐ、先づ水五斗で五枝を煎じて二斗五升を取り、米、豆を浸して蒸熱し、麴を防風、羌活とを入れ、普通の方法のやうにして酒に釀し、三七日間封じてから汁を壓し取り、五合づつを飮む。過醉して吐いてはならぬ。常に酒氣あらしめる（奇效良方）

皂莢（本經中品）

和名　たうさいかち（新稱）
學名　Gleditschia sinensis, Lam.
科名　まめ科（荳科）

【釋名】皂角（綱目）雞栖子（綱目）烏犀（綱目）懸刀　時珍曰く、莢の樹が皂いからかく名けたのである。廣志には、これを雞栖子といひ、曾氏の方には、これを烏犀といひ、外丹本草には、これを懸刀といつてある。

【集解】別錄に曰く、皂莢は雍州の山谷、及び魯の鄒縣に生ずる。猪牙の如きものが良し。九月、十月に莢を採つて陰乾する。

弘景曰く、處處にある。長さ尺二のものが良し、俗間一般には、その蟲孔があつても未だ嘗つて蟲の形がないのを見て、みな近づいてはならぬもの、人をして惡病せしめるものといつてゐるが、殊だ

〔皂　莢〕

さうでない。その蟲は狀態が草葉上の青蟲のやうで微し黑いものだ。それで出ても見難いのである。

恭曰く、この物に三種あつて、猪牙皂莢が最下である。その形は曲戾、薄惡で、全く滋潤がなく、垢を洗つても去らない。その尺二のものは粗大で、長く虛して潤がない。長さ六七寸にして圓く厚く、節が促つて直きものならば、皮が薄く、肉が多く、味は濃くして大いに好し。

頌曰く、所在にあるが、懷、孟のものが勝れてゐる。木は極めて高大なものがある。本經には、猪牙の如きものを用うとあり、陶氏は、尺二のものを用うといひ、

蘇氏は、六寸にして圓く厚きものを用ゐるといつたが、現に醫家は、風氣を疎する丸、煎を作るに多く長皂莢を用ゐ、齒を治し、及び積を取る藥に多く牙皂莢を用ゐる。用ゐるところは殊るけれども、性味は甚だ相遠きものではない。その初生の嫩芽を蔬茹とすれば更に人を益する。

時珍曰く、皂樹は高大で、葉は槐葉の如く、瘦長で尖があり、枝間に刺が多い。夏細黄の花を開いて實を結ぶ。三種あつて、一種は小さくして猪牙の如く、一種は長くして肥えて厚く、脂が多くして粘る。一種は長くして瘦せて薄く、枯燥して粘らない。脂の多い

〔猪牙皂莢〕

ものを佳しとする。その樹は刺が多いので上り難いが、採る時に篦でその樹を箍して置けば一夜にして自ら落ちる。やはり一の奇現象だ。實を結ばぬものがあるときは、樹に一孔を鑿り、生鐵三五斤を入れて泥で封ずると莢を結ぶ。世間で鐵砧で皂

莢を搥くが、砧自らが損じ、鐵碾で碾ると久しくして孔があき、鐵鍋で爨くと多くは爆して片落する。これは皂莢と鐵とには感召の情があるのではあるまいか。

皂莢 [修治] 斅曰く、凡使ふには、赤く肥えて幷に蛀せぬものを要する。新汲水に一夜浸し、銅刀で粗皮を削り去り、酥で反復して炙き透し、搥いて子弦を去つて用ゐる。莢一兩毎に酥五錢の割合で用ゐる。好古曰く、凡そ用ゐるには、蜜炙、酥炙、絞汁、燒灰の異ひがあり、それぞれ方の法に依る。

[氣味] 【辛く鹹し、溫にして小毒あり】好古曰く、厥陰の經の氣分に入る。時珍曰く、手の太陰、陽明の經の氣分に入る。之才曰く、柏實が使となる。麥門冬を惡み、空青、人參、苦參を畏る。機曰く、丹砂、粉霜、硫黃、硇砂を伏す。

[主治] 【風痺、死肌、邪氣、風頭、淚出。九竅を利し、精物を殺す】(本經) 【腹脹滿を療じ、穀を消し、欬嗽、囊結、婦人の胞の落ちぬを除き、目を明にし、精を益す。沐藥に作るがよし。湯には入れない】(別錄) 【關節を通ず。頭風。痰を消し、蟲を殺し、骨蒸を治し、胃を開く。中風口噤】(大明) 【堅癥、腹中痛を破り、能く胎を墮す。又、これを酒中に浸してその精を取盡し、煎じて膏にし、帛に塗つて一切

の腫痛に貼る」(甄權)「溽暑、久雨の時、蒼朮と合せて烟に燒けば、瘟疫、邪濕の氣を辟ける」(宗奭)「烟に燒いて久痢脫肛を熏ずる」(汪機)「肝風を搜し、肝氣を瀉す」(好古)「肺、及び大腸の氣を通じ、咽喉痺塞、痰氣喘欬、風癘、疥癬を治す」(時珍)

【發明】 好古曰く、皂莢は厥陰の藥である。活人書の陰毒を治する正氣散內に皂莢を用ゐたのは、厥陰に引入するのである。

時珍曰く、皂莢は金に屬し、手の太陰、陽明の經に入る。金は木に勝ち、燥は風に勝つものだ。故に兼て足の厥陰に入つて風木の病を治するのである。その味辛くして燥であり、氣は浮にして散ずる。これを吹き、これを導くときは上下の諸竅を通ずる。これを服すれば風濕、痰喘、腫滿を治し、蟲を殺す。これを塗れば腫を散じ、毒を消し、風を搜し、瘡を治する。按ずるに、龐安時の傷寒總病論に『元祐五年に、春から秋にかけて蘄、黃二郡の人民が急喉痺を患ひ、十中八九まで死亡し、速きは半日、一日で死んだ。時に黃州の推官潘昌言は黑龍膏の方を得て數千人を救活した。その方は、九種の喉痺——急喉痺、纏喉風、結喉、爛喉、遁蟲、蟲蝶、重舌、木舌、飛絲の口に入りたるものを治す。大皂莢四十挺を用ゐ、切つて水三斗に

一夜浸し、煎じて一斗半までにし、人參末半兩、甘草末一兩を入れ、煎じて五升までにして滓を去り、無灰酒一升、釜煤二匕を入れて煎じて餳のやうにし、瓶に入れて封じ、地中に一夜埋め、一匙づつを溫酒で化して服し、或は喉内に掃入し、惡涎を取り盡すを度とし、後に甘草片を含む』とある。又、孫用和の家傳祕寶方に『凡そ人の卒中風で昏昏として醉へるが如く、形體收らず、或は倒れ、或は倒れず、或は口角に涎を流し出すは、必ず治せねば大病と成るものである。この證は風涎が上胸に潮して痺氣が通ぜぬのである。急救稀涎散を用ゐて吐すべきものである。大皂莢の肥實にして蛀せぬもの四挺を黑皮を去り、白礬の光明なるもの一兩と末にし、半錢づつを用ゐる。重きには三字を溫水で調へて灌ぐ。大いに嘔吐せず、ただ微微と稀き冷涎を出し、或は一升、二升を出す。かくて惺惺となるを待つて藥を用ゐて調治すべきものである。これは直ぐに大いに吐かせてはならぬ。恐らく劑を過して人を傷めるものだ。累りに效があつたもので筆紙には述べ盡せぬ』とある。

宗奭曰く、この法は皂莢末一兩、生礬末半兩、膩粉半兩を用ゐ、水で一二錢を調へる。咽を過ぐれば直ちに涎を吐する。礬を用ゐるは膈下の涎を分つためだ。

附方　舊二十、新三十。【中風口噤】開かぬは涎が潮して上に壅するのである。皂角一挺を皮を去り、猪脂を塗つて炙いて黄色にして末にし、毎服一錢を溫酒で調へて服す。氣壯なるものには二錢を用ゐ、風涎を吐出するを度とする。（簡要濟衆方）【中風口喎】皂角五兩を皮を去つて末にし、三年の大醋で和し、左喎には右に塗り、右喎には左に塗り、乾けば塗り更へる。（外臺祕要）【中暑の人事不省なもの】皂莢一兩を燒いて性を存し、甘草一兩を微し炒つて末にし、溫水で一錢を調へて灌ぐ。（濟衆方）【鬼魘不寤】皂莢末一刀圭を吹く。能く死人を起たす。（千金方）【自縊者の死せんとするもの】皂莢末を鼻中に吹く。（外臺方）【水に溺れた卒死】一夜のものはなほ活きる。紙に皂莢末を裹んで下部に納れる。須臾にして水を出して活きる。（外臺祕要）【急喉痺塞】逡巡すれば救はれぬ。皂莢を生で研末し、少量づつを患處に點け、その外から醋で調へて厚く項下を封ずる。須臾にして破れ、血を出して愈える。或は水で挼んで灌ぐも良し。○直指方では、皂角肉半截を水、醋半盞で七分に煎じる。膿血を破出して癒える。【咽喉腫痛】牙皂一挺を皮を去り、米醋に浸して七回炙き、甚しく焦げぬやうにして末にし、少量づつを吹いて咽に入れる。涎を吐して

止む。(聖濟總錄)　【風癇諸痰】五癇膏——諸風を治し、痰を取ること神の如し。大皂角半斤を皮、子を去り、蜜四兩を上に塗つて慢火で炙き透し、搥き碎いて熱水に一時浸し、挼んで汁を取り、慢火で熬つて膏にし、麝香少量を入れ、夾綿紙上に攤して晒乾し、剪つて紙花に作り、三四片づつを淡漿水一小盞に入れて洗つて淋下し、筒でその汁を鼻中に吹入れ、痰涎の流れ盡るを待ち、脂麻餅一箇を吃ふ。涎が盡きて癒え、立ろに效がある。(普濟方)　【風邪癇疾】皂莢を燒いて性を存して四兩、蒼耳の根、莖、葉を日光で乾して四兩、蜜陀僧一兩を末にし、梧子大の丸にして硃砂を衣にかけ、一日二回、三四十丸づつを棗湯で服す。やや退いたならばただ二十丸を服す。抵住丸と名ける。(永類方)　【一切の痰氣】皂莢を燒いて性を存し、蘿蔔子を炒つて等分を、薑汁に煉蜜を入れたもので梧子大の丸にし、五七十丸づつを白湯で服す。(簡便方)【胸中の痰結】皂莢三十挺を皮を去つて切り、水五升に一夜浸して汁を挼み取り、慢に熬つて丸になるまでにして梧子大の丸にし、毎食後に鹽漿水で十丸を服す。○又、釣痰膏——半夏を醋で煮て、皂角膏で和勻し、明礬少量を入れ、柿餅を膏に搗いたもので彈子ほどの丸にして噙む。(聖惠方)　【欬逆上氣】唾が濁り、臥し得

ぬには、皂莢丸――皂莢を炙き、皮子を去つて研末し、蜜で梧子大の丸にし、一丸づつを棗膏湯で服す。日中三服、夜間一服。(張仲景方)【痰喘欬嗽】長皂莢三條を皮子を去り、一莢には巴豆十粒を入れ、一莢には半夏十粒を入れ、一莢には杏仁十粒を入れ、薑汁で杏仁を制し、麻油で巴豆を制し、蜜で半夏を制し、一處にして火で炙いて黃色にして末にし、一字づつを手の心に置き、就寢時に薑汁で調へて喫下する。神效がある。(余居士選奇方)【卒寒欬嗽】皂莢を燒いて研り、豉湯で二錢を服す。(千金方)【牙病喘息】喉中が水雞の鳴くやうなるには、肥皂莢二挺を酥で炙き、肉を取つて末にし、蜜で豆大の丸にし、一丸づつを服して微利を取るを度とする。利せぬときは更に服す。一日一服。(必效方)【腫滿の腹に入りたるもの】脹急するには、皂莢を皮、子を去り、黃に炙いて末にし、酒一斗で石器で煮沸し、一斗を服す。一日三服。(肘後方)【二便關格】千金方では、皂莢を燒いて研り、粥飮で三錢を服す。立ろに通ずる。○宣明方では、鐵脚丸――皂莢を炙いて皮、子を去つて末にし、酒麪糊で丸にし、毎服五十丸を酒で服す。○聖惠方では、皂莢を桶の中で烟に燒き、その上に坐して熏ずる。直に通ずる。【食氣黃腫】氣喘し、胸滿するには、蛀せぬ

皂角を用ゐ、皮、子を去り、醋を塗つて炙き焦し、末にして一錢、巴豆七箇を油、膜を去り、淡醋で研り、好墨で和して麻子大の丸にし、毎服三丸を食後に陳橘皮湯で服す。一日三服、一日隔てて一丸を增し、癒えるを度とする（經驗方）【胸腹脹滿】痩せしめんと欲するには、猪牙皂角を相續いて量つて長さ一尺を、微火で煨いて皮、子を去り、擣き篩ひ、蜜で梧子ほどの大いさの丸にし、服する時、先づ羊肉兩臠の汁二三口を喫ひ、後に肉汁で藥十丸を呑む。快利するを度とする。力を得たるを覺えるときは更に服し、淸水を利するとき藥を止める。瘥えて後一个月は肉、及び諸油膩を食つてはならぬ。（崔元亮海上集驗方）【身面の卒腫】洪滿するには、皂莢を皮を去つて黃に炙き、剉んで三升を酒一斗に漬け透して煮沸し、毎服一升を一日三服する。（肘後方）【卒熱勞疾】皂莢を續けて一尺を、上酥一大兩を用ゐて微に塗つて緩に炙き、酥を盡して搗き篩ひ、蜜で梧子大の丸にし、毎日空腹に十五丸を飲下し、漸次に二十丸まで增加する。重きも兩劑に過ぎずして癒える。（崔元亮海上方）【急勞煩熱】體瘦するには、三皂丸——皂莢、皂莢樹皮、皂莢刺各一斤を用ゐ、共に灰に燒き、水三斗で汁を淋し、かく三五回再淋し、煎じて少しく凝るを候つて麝香末一分

を入れ、童尿に浸した蒸餅で小豆大の丸にし、七丸づつを空心に溫水で服す。（聖惠方）【脚氣腫痛】皂角、赤小豆を末にし、酒醋で調へて腫處に貼る（永類方）【傷寒發病の初期】陰陽を問はず、皂角一挺、肥えたるものを赤く燒いて末にし、水五合で和して頓服する。陰病に極めて效がある。（千金方）【時氣頭痛】煩熱するには、皂莢を燒いて研り、新汲水一中盞、姜汁、蜜各少量で二錢を和して服す。豫め煖水で淋浴して後に藥を服す。汗を取つて癒える。（聖惠）【卒病頭痛】皂角末を鼻に吹いて嚔を取る。（斗門方）【腦宣の止まぬもの】蛀せぬ皂角を皮、子を去り、蜜で炙いて搥き碎き、水に入れて挼んで濃汁を取り、熬つて膏にし、鼻に嗜ぎ、口中に咬みしめ、良久して涎の出るを度とする。（張子和儒門事親）【齆鼻で通ぜぬもの】皂角末を吹く（千金方）【風熱牙痛】皂角一挺を子を去つて鹽を殼に滿て、かくて白礬少量を加へて黃泥で固濟し、煆いて研り、日日に擦る。（楊誠經驗方）【風蟲牙痛】外臺祕要方では、皂莢末を齒上に塗り、涎あるを吐く。○十全方では、猪牙皂角、食鹽等分を末にし、日日に揩る。【牙に揩つて鬚を烏くする】大皂角二十挺を薑汁、地黃汁を蘸けて十遍炙いて末にし、日日に牙に揩る。甚だ妙である。（普濟方）【霍亂轉筋】皂角末を豆ほど鼻

に入れて嚏を取れば安になる。(深師方)【腸風下血】長さ一尺の皂角五挺を用ゐ、皮、子を去り、三回酥で炙いて研末し、精羊肉十兩を細切して搗き爛らし、和して梧子大の丸にし、二十丸づつを溫水で服す。(聖惠)【大腸脫肛】蛀せぬ皂莢五挺を搥き碎き、水で挼んで汁二升を取り、それで浸せば自ら收まる。上に收つて後、その湯でその腰肚の上下を盪し、皂角の氣を行らしめれば再び作らない。かくて皂角を皮を去り、酥で炙いて末にし、棗肉で和して丸にし、米飲で三十丸を服す。(聖惠方)【下部の䘌瘡】皂莢を燒いて研り、綿で裹んで導く。(肘後方)【外腎の偏疼】皂莢を皮を和して末にし、水で調へて傅けるが良し。(梅師方)【便毒腫痛】皂角を炒焦し、水粉を炒り、等分を研末して熱醋で調へ、攤して患處に貼り、頻りに水で潤ほせば效がある。○又ある方では、猪牙皂角七片を黃に煨いて皮弦を去り、火毒を出して末にし、空心に溫酒で五錢を服す。(袖珍方)【便毒癰疽】皂角一條を醋で熬膏して傅ける。屢〻奏效した。(直指方)【婦人の吹乳】袖珍方では、猪牙皂角を皮を去り、蜜で炙いて末にし、酒で一錢を服す。○又、詩に『婦人の吹奶法如何、皂角を灰に燒き蛤粉を和し、熱酒一盃に八字を調ふ。管教れ時刻にして笑呵呵』とある。【丁腫惡瘡】

皂角を皮を去り、酥で炙き焦して末にし、麝香少量、人糞少量を入れて和して塗る。五日後に根が出る。(普濟方)【小兒の頭瘡】粘肥するもの、及び白禿には、皂角を黒く燒いて末にし、痂を去つて傅ける。三回に過ぎずして癒える。(鄧筆峰衞生雜興)【小兒の惡瘡】皂莢を水で洗つて拭ひ乾し、少量の麻油で搗き爛らして塗る。(肘後方)【足上の風瘡】甚しく痒きには、皂角を炙熱して烙する。(潘氏方)【大風諸癩】長皂角二十條を炙いて皮、子を去り、酒で煎稠して濾し、冷えるを候つて雪糕を入れて梧子大の丸にし、五十丸づつを酒で服す。(直指方)【積年の疥瘡】猪肚内に皂角を置いて煮熟し、皂角を去つて食ふ。(袖珍方)【射工水毒】瘡を生じたるには、皂角の長さ尺二のものを苦酒一升で煎じ、汁を熬つて飴のやうにして塗る。(肘後方)【咽喉骨哽】猪牙皂角二條を切り碎き、生絹袋に盛つて縫滿し、線で項中に縛る。立ろに消する。(簡便方)【魚骨哽咽】皂角末を鼻に吹いて嚔を取る。(聖惠方)【九里蜂毒】皂莢に孔を鑽つて叮した處に貼り、孔上に艾で三五壯灸すれば安になる。(救急方)【腎風陰痒】稻草で皂角を燒いて烟で熏ずる。十餘回で止む。(濟急仙方)

子　【修治】斅曰く、圓滿にして堅硬なる蛀せぬものを揀り取り、瓶で煮熟し

て硬皮一重を剝ぎ去り、內側の白肉兩片を取つて黃を去り、銅刀で切つて晒して用ゐる。その黃は人の腎氣を消するものだ。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【炒り舂いて赤皮を去り、水で浸して軟にして煮熟し、糖で漬けて食へば、五臟の風熱壅を疏導する】(宗奭)【核中の白肉を肺を治する藥に入れる。核中の黃心を嚼んで食へば、膈痰、呑酸を治す】(蘇頌)【仁は血を和し、腸を潤ほす】(李杲)【風熱、大腸虛祕、瘰癧、腫毒、瘡癬を治す】(時珍)

【發明】機曰く、皂角核を燒いて性を存すれば、大便燥結を治す。その性は濕を得れば滑する。滑すれば燥結が自ら通ずるのである。

時珍曰く、皂莢は味辛し。金に屬し、能く大腸、陽明の燥金に通ずる。乃ち辛は以て之を潤ほすの意味である。濕を得れば滑するのではない。

【附方】舊三、新十一。【腰脚風痛】地を履めぬには、皂角子一千二百箇を洗淨し、少量の酥で香しく熬つて末にし、蜜で梧子大の丸にし、每空心に蒺藜子酸棗仁湯で三十丸を服す。(千金方)【大腸虛祕】風の人、虛の人、脚氣の人の大腸が或は祕

し、或は利するには、前記の方を百丸まで服し、通ずるを度とする。【下痢の止まぬもの】諸藥の效なきも、これを三服すれば、宿垢が去り盡きて黄色に變ずる。屢〻效驗があつた。皂角子を瓦で焙じて末にし、米糊で梧子大の丸にし、毎服四五十丸を陳茶で服す。（醫方摘要）【腸風下血】皂莢子、槐實一兩を粘穀糠で香しく炒り、糠を去つて末にし、陳粟米飲で一錢を服す。神效散と名ける。（聖惠方）【裏急後重】蛀せぬ皂角子を米糠で炒り、枳殼を炒つて等分を末にし、飯で梧子大の丸にし、米飲で三十丸を服す。（普濟方）【小兒の流涎】脾熱で痰あるものである。皂莢子仁半兩を半夏姜湯に泡けること七回、一錢二分を末にし、姜汁で麻子大の丸にし、五丸づつを溫水で服す。（聖濟總錄）【惡水の口に入りたるもの】及び皂莢水が口に入つて熱痛して止まぬには、皂莢子を燒いて性を存して一分を、沙糖半兩で膏に和して含む。（博濟方）【婦人難產】皂角子二箇を呑む。（千金方）【風蟲牙痛】皂角子末を綿に裹み、彈子大の二顆にして醋で煮熟し、更互に熨す。一日三五回。（聖惠方）【粉滓面䵟】皂角子、杏仁等分を研り勻ぜ、夜間津で和して塗る。（聖惠方）【豫め瘡瘍を免れる】凡そ小兒には、毎年六月六日に、その歳に應じて皂莢子を呑む。瘡瘍の患を免れる。

大人もやはり七箇、或は二十一箇を吞むがよし。林靜齋所傳の方である。（吳旻扶壽方）【便癰の初起】皂角子七箇を研末し、水で服すれば效がある。ある方では、その年齢に照して吞む。（儒門事親方）【一切の丁腫】皂角子仁を末にして傅ける。五日にして癒える。（千金方）【年久しき瘻癧】阮氏經驗方では、蛀せぬ皂角子一百粒、米醋一升、硇砂二錢と共に煮乾して酥せしめ、瘻子の多少を看て、もし一箇のときは一粒を服し、十箇のときは十粒を服し、細に嚼んで米湯で服す。酒で浸して煮て服するもよし。（聖濟總錄に、虛せる人には硇砂を用ゐてはならぬといつてある。

刺　一名天丁。【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【米醋で嫩刺を熬つて煎にし、瘡癬に塗れば奇效がある】（蘇頌）【癰腫、妬乳、風癘、惡瘡、胎衣不下を治し、蟲を殺す】（時珍）

【發明】楊士瀛曰く、皂莢刺は能く諸藥を引き、性は上行し、上焦の病を治す。

震亨曰く、能く引いて癰疽の潰處に至り、甚だ效驗がある。

時珍曰く、皂莢刺の風を治し、蟲を殺の功は莢と同じ。ただその鋭利にして直ち

に病所に達するだけの相異である。神仙傳に『左親騎軍崔言は一旦大風惡疾に罹り、雙目昏盲し、眉髮自ら落ち、鼻梁が崩倒し、勢ひ救ふべからざるものであつたが、異人に遇つて方を傳へ、皂角刺三斤を灰に燒いて一時の間蒸し　日光で乾して末にし、食後に濃煎大黃湯で一匕を調へて飮むと、一旬にして眉髮が再生し、肌が潤ひ、目は明になつて、後に山に入つて修道し、終るところを知らなかつた』とある。又、劉守眞の保命集には『癘風なるものは營氣の熱で風寒が脈に客して去らぬものである。先づ樺皮散を服し、五七日後に承漿穴に灸すること七壯し、三回灸して後、每早朝樺皮散を服し、午時に升麻葛根湯で錢氏瀉靑丸を服し、晚に一聖散を服し、大黃末半兩の煎湯で皂角刺灰三錢を調へて用ゐ、乃ち緩に血中の風熱を疎泄する。かくて三年間房事を戒める』とある。樺皮散は樺皮の條下に記載してある。又、追風再造散、卽ち一聖散に就ては『これを服すれば黑蟲を出すが驗である。數日に再服し、直ちに蟲の盡くるを候ち、根絕となる　新蟲は嘴が赤く、老蟲は嘴が黑い』とある。

附方　新十二。【小兒の重舌】皂角刺灰に朴硝、或は腦子少量を入れ、口を漱

いでから舌下に摻り入れる。涎が出て自ら消する。(聖惠方)【小便淋閉】皂角刺を燒いて性を存し、破故紙と等分を末にし、無灰酒で服す。(聖濟總錄)【腸風下血】便前のものは腎、肝に近く、便後のものは心、肺に近い。皂角刺灰二兩、胡桃仁、破故紙を炒り、槐花を炒つて各一兩を末にし、毎服一錢を米飲で服す。(普濟方)【傷風下痢】風傷が久しく已えずして膿血を下痢し、日に數十回あるには、皂角刺、枳實を麩で炒り、槐花を生で用ゐ、各半兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、毎服三十丸を米湯で服す。一日二服。(袖珍方)【胎衣の下らぬもの】皂角棘を燒いて末にし、一錢づつを溫酒で調へて服す。(熊氏補遺)【婦人の乳癰】皂角刺を燒いて性を存して一兩、蚌粉一錢を和して研り、一錢づつを溫酒で服す。(直指方)【乳汁の結毒】産後に乳汁が泄れずして毒を結せるものには、皂角刺、蔓荊子を各〻燒いて性を存し、等分を末にし、二錢づつを溫酒で服す。(袖珍方)【腹內に瘡を生じたるもの】腸臟に在つて藥で治しやうなきものには、皂角刺を多少に拘らず取り、好酒一椀で七分までに煎じて溫服する。その膿血は悉く小便中に從つて出て極めて效がある。酒を飲み得ぬものには水で煎ずるもよし。(藺氏經驗方)【瘡腫の頭なきもの】皂角刺を灰に燒

き、三錢を酒で服し、莢子三五粒を嚼む。その部分が針で刺すやうに覺えて奏效する。(儒門事親)【癌瘭惡瘡】皂角刺を燒いて性を存して研り、白及少量と末にして傅ける。(直指方)【大風癘瘡】選奇方では、黄蘗末、皂角刺灰各三錢を研り匀ぜ、空心に酒で服し、蟲物を取下す。並に人を損ぜぬ。白粥を食ふこと兩三日、補氣藥數劑を服す。神效散と名ける。もし四肢が腫するときは、針で刺して水を出し、再服する。一切の魚肉、發風の物を忌む。取下す蟲は大小、長短、その色が一定せず、約一二升下つてその病が癒える。(仁存方)【發背の潰れぬもの】皂角刺を麥麩で黄に炒つて一兩、綿黄芪を焙じて一兩、甘草半兩を末にし、毎服一大錢を、酒一錢、乳香一塊を七分に煎じて滓を去つたもので溫服する。(普濟本事方)

木皮　根皮　【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【風熱痰氣。蟲を殺す】(時珍)

【附方】　新二。【肺風惡瘡】瘙痒するには、木乳、卽ち皂莢根皮を、秋、冬に雜紋の如きものを採り、陰乾して黄に炙き、白蒺蔾を炒り、黄芪、人參、枳殼を炒り、甘草を炙き、等分を末にし、沸湯で一錢づつを服す(普濟方)【產後の腸脫】收まら

ぬには、皂角樹皮半斤、皂角核一合、川楝樹皮半斤、石蓮子を炒り心を去つて一合を粗き末にし、水で湯に煎じ、物を以て圍つて坐り、熱に乘じ熏洗して挹み乾し、そこで補氣の丸藥を一服し、仰臥して睡る。（婦人良方）

葉　[主治]　【風瘡を洗ふ渫に入れて用ゐる】（時珍）

[附錄]　**鬼皂莢**　藏器曰く、江南の澤畔に生ずる。狀態は皂莢のやうで、高さ一二尺のものだ。湯にして浴すれば、風瘡、疥癬を去る。葉を挼んで衣垢を去る。髮を沐へば長からしめる。

鬼皂莢
和名　未詳
學名　Gleditschia sp.?
科名　まめ科（荳科）。

肥皂莢（綱目）

和名　しやぼんさいかち（新稱）
學名　Gymnocladus chinensis, Baill.
科名　まめ科（荳科）

[集解]　時珍曰く、肥皂莢は高山中に生ずる。その樹は高大で、葉は檀、及び皂莢葉の如く、五六月に白花を開いて莢を結ぶ。長さ三四寸、形狀は雲實の莢のやうで、肥厚にして肉多く、内に黑子數顆あり、大いさ指頭ほどで正圓でなく、その色は漆のやうで甚だ堅く、中に白仁があつて栗のやうだ。煨熟して食へる。またそ

れを種ゑるもよし。十月に莢を采り、煮熟して搗き爛らし、白麪、及び諸香を和して丸に作り、それで身體、顔を澡へば垢を去つて膩潤になり、皂莢に勝る。相感志に『肥皂莢水は金魚を死し、馬蝗を辟ける。獣はこれを見れば就らぬ』とある。やはり物の性の然らしむるところだ。

〔肥皂莢〕

莢【氣味】【辛し、温にして微毒あり】【主治】【風濕、下痢、便血、瘡癬、腫毒を去る】（時珍）

【附方】新九。【腸風下血】獨子肥皂を焼いて性を存して一片を末にし、糊で丸にして陳米飲で服す。（普濟方）【下痢口噤】肥皂莢一箇の中に鹽を實て、焼いて性を存して末にし、少量を白米粥中に入れて食へば效がある（乾坤生意）【風虛牙腫】老人の腎虛、或は涼藥を牙に擦つたために痛を起したるには、獨子肥皂に靑鹽を實て、

燒いて性を存して研末して摻る。(衛生家寶方) 【頭、耳の諸瘡】 眉癬、燕窩瘡には、いづれも肥皂を煆いて性を存して一錢、枯礬一分を研り匀ぜ、香油で調へて塗る。(摘玄方) 【小兒の頭瘡】 湯水で傷めたために膿を成し、水を出して止まぬには、肥皂を燒いて性を存し、膩粉、麻油を入れて調へて搽る。(海上方) 【臘梨頭瘡】 大人、小兒に拘らず、獨核肥皂を核を去つて沙糖を塡入し、巴豆二箇を入れて扎定し、鹽泥で包んで煆いて性を存し、檳榔、輕粉五七分を入れて研り匀ぜ、香油で調へて搽る。豫め灰汁で洗ひ、溫水で再び洗つて拭ひ乾してから搽る。一夜で效が現はれ、再び洗ふを須ゐない。(普濟方) 【癬瘡の癒えぬもの】 川槿皮を湯に煎じ、肥皂を核、及び內膜を去つてその湯に浸し、時時に搽る。(楊起簡便方) 【便毒の初起】 肥皂を搗き爛らして傅ける。甚だ效がある。(簡便方) 【玉莖の濕痒】 肥皂一箇を燒いて性を存し、香油で調へて搽れば癒える。(攝生方)

核

氣味 【甘く腥し、溫にして毒なし】 主治 【風氣を除く】(時珍)

無患子（宋開寶）

和名　むくろじ
學名　Sapindus Mukorossi, Gaertn.
科名　むくろじ科（無患樹科）

【釋名】　桓（拾遺）　**木患子**（綱目）　**噤婁**（拾遺）　**肥珠子**（綱目）　**油珠子**（綱目）　**菩提子**（綱目）　**鬼見愁**　藏器曰く、桓、患は文字の發音の訛である。崔豹の古今注に『昔、瑤眊と曰ふ神巫があつて、能く百鬼を符劾し、鬼を得ると此の木を棒にして棒殺した。世人は相傳へて、此の木で器用を作り、それで鬼魅を厭ふ。故に號して無患といふ』とある。一般にはまた訛つて木患といふ。

時珍曰く、俗に名けて鬼見愁といふ。道家の禳解の方中にこれを用ゐてあるは、この意味に縁つたもの

〔無　患　子〕
——油珠子——

だ。釋家では取つて數珠にする。故にこれを菩提子といひ、薏苡と同名に呼ぶ。纂文に、その木を盧鬼木と名けるといつてある。山間の住民は肥珠子、油珠子と呼ぶ。それは實が肥油のやうで、子が圓くして珠のやうだからである。

［集解］藏器曰く、無患子は高山の大樹であつて、子は漆珠のやうに黑い。博物志に『桓の葉は欅、柳の葉に似てゐる。核は堅くして瑿のやうに正黑で、香纓に作れる。また垢を浣へる』とある。

宗奭曰く、今は佛敎徒が取つて念珠にする。紫紅色にして小さきものを佳しとする。藥に入れることはやはり少だ。西洛にもある。

時珍曰く、高山中に生じ、樹は甚だ高大で、枝、葉はみな椿のやうだが、特だその葉が對生する。五六月に白花を開いて實を結ぶ。實は大いさ彈丸ほどで、狀態は銀杏、及び苦楝子のやう、生では靑く熟すれば黃になり、老いると文が皺む。黃なる時は肥えて油で爍いたかのやうな形である。味は辛く、氣は膻く、且つ硬い。その蔕下に二小子があつて、相粘いて承けてゐる。實の中に一核があり、堅く黑く、肥皂莢の核に似て珠のやうに正圓である。殼中に榛子仁のやうな仁があり、やはり辛

朧なもので、炒つて食へる。十月に實を採り、煮熟して核を去り、搗いて麥麪、或は豆麪を和して澡藥に作れば、垢を去ること肥皂と同じである。眞珠を洗ふに用ゐるが甚だ妙である。山海經に『秩周之山、其の木桓多し』とあり、郭璞の註に『葉は柳に似て、皮は黃にして錯ならず、子は楝に似てゐる。酒中に著けて飮めば惡氣を辟ける。浣へば垢を去る。核は堅くして正黑だ』とあるが卽ちこの物である。現に武當山中から出る鬼見愁は、やはり樹の莢の子であつて、その形はさながら刀豆子のやうで色が褐である。彼の地ではやはり穿つて數珠にするが、これはまた別の一物であつて無患ではない。

子皮 卽ち核外の肉である。

［氣味］【微し苦し、平にして小毒あり】

［主治］【垢を澣ひ、面䵟を去る。喉痺には、研つて喉中に納れる。立ろに開く。又、飛尸に主效がある】（藏器）

［附方］ 新二。【頭を洗つて風を去る】目を明にする。槵子皮、皂角、胡餠、菖蒲を共に搥き碎き、漿水で調へて彈子大に作り、毎にこれを湯に泡けて頭を洗ふが良し（多能鄙事）【面を洗ひ䵟を去る】槵子肉皮を搗き爛らし、白麪を入れて和して大

丸に丸め、毎日これで面を洗ふ。垢、及び野を去るに甚だ良し（集簡方）

子中仁【氣味】【辛し、平にして毒なし】【主治】【これを燒けば邪惡の氣を辟ける】（藏器）【煨いて食へば、惡を辟け、口臭を去る】（時珍）

【附方】新一。【牙齒の腫痛】肥珠子一兩、大黃、香附各一兩、青鹽半兩を泥固して煆いて研り、日日にこれを牙に擦る。（普濟方）

欒華（本經下品）

和名　もくげんじ
學名　Koelreuteria paniculata, Laxm.
科名　むくろじ科（無患樹科）

【集解】別錄に曰く、欒華は漢中の川谷に生ずる。五月に採る、恭曰く、この樹は、葉は木槿に似て薄く細く、花は黃で槐に似てやや長く大きく、子は殼が酸漿に似て、その中に實があり、熟豌豆のやうで圓く黑い。堅硬で數珠に作れるものがそれである。五月、六月に花を取收めるがよし。南方地方ではこれで黃を染めるが、甚だ鮮明である。又、目赤爛を療するに用ゐる。頌曰く、今は南方、及び汴中で園圃の間に或はある。

宗奭曰く、長安の山中にもある。その子をば木欒子といひ、京都へ携へ來つて數珠にする。藥に入れたことはまだない。

華【氣 味】【苦し、寒にして毒なし】之才曰く、決明が使となる。

【主 治】【目痛涙出、傷眥、目腫を消す】（本經）【黄連と合せて煎に作れば、目赤爛を療ずる】（蘇恭）

〔欒 華〕
――木欒子――

無食子（唐本草）

和名 もつしよくし（原植物未詳）
學名 未詳
科名 未詳

【釋 名】**沒石子**（開寶）**墨石子**（炮炙論）**麻荼澤** 珣曰く、波斯人は每に果に代へて食ふ。故に番胡は沒食子と呼ぶ。梵書では無と沒と同じく發音する。今世間で墨石、沒石と呼ぶは訛の轉傳したものだ。

〔無食子〕
——沒石子——

〔集解〕恭曰く、無食子は西戎の沙磧の間に生ずる。樹は檉に似たものだ。

禹錫曰く、按ずるに、段成式の酉陽雜俎に『無食子は波斯國に產する。摩澤と呼ぶ。樹は高さ六七丈、圍八九尺。葉は桃に似て長い。三月に花を開き、白色で心が微し紅い。子は圓くして彈丸の如く、初は青く熟すれば黃白になる。蟲蝕して孔を成したものを藥に入れて用ゐる。その樹は、一年は無食子が生り、一年は拔屢子が生る。これは太さ指ほど、長さ三寸、上に殼があり、中の仁は栗黃のやうで噉へるものだ』とある。

時珍曰く、按ずるに、方輿志に『大食國のある樹は、一年は栗子のやうで長いものが生り、名けて蒲盧子といひ、食へる。次の年には痲茶澤が生る。卽ち沒石子である。歲を問いて互に一根を生ずる。かやうな奇異な產物である』とあり、一統志に

『沒石子は大食の諸番に產する。樹は樟のやう、實は中國の茅栗のやうだ』とある。

子 修治 斅曰く、凡そ使ふには、銅、鐵を犯し、幷に火驚されてはならぬ。顆が小さくして杴米なきものを炒り、漿水を用ゐて砂盆中で研り、研り盡して焙乾し、再び研つて烏犀のやうな色にして藥に入れる。

氣味 【苦し、溫にして毒無なし】 主治 【赤白痢、腸滑。肌肉を生ずる】(唐本) 【腸虛冷痢。血を益し、精を生じ、氣を和し、神を安じ、髭髮を烏くし、陰毒痿を治す。灰に燒いて用ゐる】(李珣) 【中を溫め、陰瘡、陰汗、小兒の疳䘌、冷滑の禁ぜぬを治す】(馬志)

發明 宗奭曰く、沒石子は、他藥と合せて鬚を染める。墨を製造するにもこれを用ゐる。

珣曰く、張仲景はこれを用ゐて陰汗を治した。灰に燒き、先づ湯で浴してから、布に灰を裹んで撲つ。甚だ良し。

附方 舊三、新五。【血痢の止まぬもの】沒石子一兩を末にし、飯で小豆大の丸にし、每食前に五十丸を米飮で服す。(普濟方) 【小兒の久痢】沒石子二箇を黃に熬つ

て研末し、餛飩にして食ふ。(宮氣方)【産後の下痢】沒石子一箇を燒いて性を存して研末し、酒で服す。熱には飮を用ゐて服す。一日二回。(子母祕錄)【牙齒疼痛】綿で無食子末一錢を裹んで咬む。涎の出るを吐き去る。(聖濟總錄)【鼻面の酒皶】南方の沒石子の孔あるものを磨つて膏にし、毎夜塗る。甚だ妙である。(危氏得效方)【口鼻の急疳】沒石子末を下部に吹けば瘥える。(千金方)【大人、小兒の口瘡】沒石子を炮いて三分、甘草一分を研末して摻る。生後一个月以内の小兒に生じたるには、少量を乳の上に置いて吮はす。口に入れば直ぐ啼く。三回に過ぎぬ。(聖惠方)【足趾の肉刺】無食子三箇、肥皂莢一挺を燒いて性を存して末にし、醋で和して傅ける。立ろに效がある。(奇效方)

訶黎勒（唐本草）

和名　はりら又からかし
學名　Terminalia Chebula, Retz.
科名　しくんし科（使君子科

釋名　**訶子**　時珍曰く、訶黎勒とは梵語で、天主が將ち來つたといふ意味である。

集解　恭曰く、訶黎勒は交州、愛州に生ずる。

頌曰く、今は嶺南にいづれもあるが、廣州が最も盛である。樹は木槵に似て、花は白く、子は形が卮子、橄欖に似て、青黄色で皮肉が相著いてゐる。七月、八月に實が熟した時採る。六路のものが佳し。嶺南異物志に『廣州の法性寺に四五十株あつて、子は極めて小さくして味が澁くない。いづれも六路である。毎年州からの歳貢物とするのはただこの寺のものである。寺には古井があつて、木の根が水に蘸かつてゐるので水の味が鹹くない。毎年子が熟した頃、佳客の訪問を受けると、寺僧がその煎湯を出してもてなす。その法は、新に摘んだ訶子五箇を用ゐて甘草一寸を破り、井水を汲んで共に煎ずるのであつて、色は新茶のやうだ』とある。現にその寺ではこれを乾明といふ。古寺は現存してゐて、舊時の木もやはり六七株ある。南海の風俗として、やはりこの湯を貴ぶが、然し煎ずるには必ずしも盡くが昔時の法のやうではない。訶子

〔訶黎勒〕

の未だ熟せぬ時に風で飄墮したものをば隨風子といひ、暴乾して貯へる。益ゝ小なるものが佳し。彼の地では尤もこれを珍貴とする。

蕭炳曰く、波斯から舶來するものの、六路で色黑く、肉厚きものが良し。六路とは六稜のことである。

斅曰く、凡そ使ふには、毗黎勒を用ゐてはならぬ。箇箇に毗頭なるもので、訶黎勒の文がただ六路あるやうに、或は多く、或は少い。いづれも雜路勒である。みな圓くして、露文が或は八路から十二三路まであるを號して榔精勒といふ。澁くして用ゐるに堪へないものだ。

【修治】斅曰く、凡そ訶黎勒を用ゐるには、酒で浸して後に一伏時蒸し、刀で皮を削り去つて肉を取り、剉み焙じて用ゐる。核を用ゐるときは肉を去る。

【氣味】【苦し、溫にして毒なし】權曰く、苦く甘し。炳曰く、苦く酸し。珣曰く、酸く澁し、溫なり。好古曰く、苦く酸し、平なり。苦は重く、酸は輕く、味厚くして陰であり、降である。

【主治】【冷氣、心腹脹滿。食を下す】（唐本）【胸膈の結氣を破り、津液を通利し、

水道を止め、髭髮を黑くする】(甄權)【宿物を下し、腸澼久洩、赤白痢を止める】(蕭炳)【痰を消し、氣を下し、食を化し、胃を開き、煩を除き、水を治し、中を調へ、嘔吐、霍亂、心腹虛痛、奔豚腎氣、肺氣喘息、五膈氣、腸風瀉血、崩中帶下を止める。懷孕漏胎、及び胎動して生まんとし、脹悶氣喘するもの、竝に痢を患ふ人の肛門急痛、産婦の陰痛には、蠟に和して烟に燒いて熏じ、及び湯に煎じて熏じ洗ふ】(大明)【痰嗽、咽喉不利を治するに、三數箇を含むが殊勝である】(蘇恭)【大腸を實し、肺を斂め、火を降す】(震亨)

發明 宗奭曰く、訶黎勒は、氣虛の人も緩緩に煨熟して少し服するが宜し。この物は腸を濇するものではあるが、また氣を泄する。その味が苦く濇いからである。

杲曰く、肺は氣の上逆を苦む、急に苦を食つて以てこれを泄し、酸を以てこれを補す。訶子は苦は重くして氣を泄するが、酸は輕くして肺を補することが不能だ。故に嗽藥中には用ゐない。

震亨曰く、訶子の氣を下すは、その殊に苦くして性急なるためであつて、肺は急

を苦む、急に苦を食つて以てこれを瀉す。降にして下走するをいふのである。氣實のものには適するが、氣虛のものの場合は輕〻しく服し難いやうである。又、肺氣が火に因つて傷極し、遂に一遏して脹滿するを治す。その味の酸苦に收斂、降火の功がある。

○時珍曰く、訶子は烏梅、五倍子と共に用ゐれば收斂し、橘皮、厚朴と共に用ゐれば氣を下し、人參と共に用ゐれば能く肺を補し、咳嗽を治す。東垣が、嗽藥に用ゐないといつたのは非である。但だ欬嗽の未だ久しからざるものには驟に用ゐられないだけである。嵇含の草木狀に『飮に作つて久しく服すれば、髭髮の白きものを黑に變ぜしめる』とあるも、やはりその濇を取るのである。

珣曰く、訶黎は、皮は嗽に主效がある。肉は眼濇痛に主效がある。波斯人は訶黎勒、大腹等を商船に積込んで不虞を防ぐに用ゐ、或は大魚が涎滑を水中數里に放散して、船の通行が不能となつた場合に、これを煑てその涎滑を洗ふ。隨つて化して水になるといふ。それを見ると、この物の氣を治し、痰を消する功力が窺はれる。

○愼微曰く、金光明經に說いてあつて、流水長者除病品に『熱病の下藥には訶黎

勒を服す』とある。又、廣異記に『高仙芝は大食國にゐたとき、訶黎勒の長さ三寸のものを得て肚下に抹して置くと、腹中に痛を覺え、大いに痢して十餘行下つたので、訶黎勒に祟られたものと疑ひ、後に火食長老に訊ねて見ると「この物は、人が帶びると一切の病が消するものだ。痢したのは惡物を出しただけのことだ」といつた。仙芝はそれを大切に持つてゐたが、後に誅せられて、その物の所在も判らなくなつた』とある。

○頌曰く、訶黎は痢に主效があつて、唐本草には記載がないが、張仲景に氣痢を治するに方があり、唐劉禹錫傳信方に『予は曾て赤白下を苦み、あらゆる諸藥を服したが久しく瘥えず、轉じて白膿となつたとき、令狐將軍からこの方を傳へた。訶黎勒三箇を用ゐ、二箇を炮き、一箇は生で、いづれも皮を取つて末にし、沸漿水一合で服す。もしただ水痢ならば一錢匕の甘草末を加へ、もし微し膿血がある場合には二匕を加へ、血多きには亦た三匕を加へる』とある。

【附方】 舊九、新六。【氣を下し、食を消す】訶黎一箇を末にし 瓦器中で水一大升を煎じて二三沸したとき藥を下し、更に煎じて三五沸し、麴塵のやうな色にして

少量の鹽を入れて飲む。(食醫心鏡)【一切の氣疾】宿食不消には、訶黎一箇を夜に入つて含み、曉頃に嚼んで嚥む。〇又ある方では、訶黎三箇を濕紙で包んで煨熟し、核を去つて細に嚼み、牛乳で飲下す。(千金方)【日久しき氣嗽】生訶黎一箇を含んで汁を嚥む。瘥えて後、口が爽つて食味が判らなくなつたときは、却て檳榔の煎湯一盌を服す。立ろに味が判るやうになる。これは連州の知事成密の方である。(經驗方)
【嘔逆不食】訶黎勒皮二兩を炒つて研り、糊で梧子大の丸にし、空心に二十丸を湯で服す。一日三服。(廣濟方)【風痰霍亂】食物が消化せず、大便の澁るには、訶黎三箇を皮を取つて末にし、酒で和して頓服する。三五服で妙である。(外臺祕要)【小兒の霍亂】訶黎一箇を末にし、沸湯で一半を服す。なほ止まぬときは再服する。(子母祕錄)
【小兒の風痰】壅閉して語音が出ず、氣促し喘悶し、手足動搖するには、訶子を半生半炮にして核を去り、大腹皮と等分を水で煎じて服す。二聖散と名ける。(全幼心鑑)
【風熱衝頂】熱悶するには、訶黎二箇を末にし、芒消一錢と共に醋中に入れて攪ぜ、消磨せしめて熱處に塗る。(外臺祕要)【氣痢水瀉】訶黎勒十箇を麪で裹み、煻火で煨熟して核を去つて研末し、粥飲で頓服する。また飯で丸にして服するもよし。一には

木香を加へる。○又、長服方。訶黎勒、陳橘皮、厚朴三兩を搗き篩ひ、蜜で梧子大の丸にし、二三十丸づつを白湯で服す。(圖經本草)【水瀉下痢】訶黎勒を炮いて二分、肉豆蔻一分を末にし、米飲で二錢づつを服す。(聖惠方)【下痢の白に轉じたるもの】訶子三箇を、二箇は炮き、一箇は生で末にし、沸湯で調へて服す。水痢には甘草末一錢を加へる。(普濟方)【赤白下痢】訶子十二箇を、六箇は生、六箇は炮いて核を去り、焙じて末にし、赤痢には生甘草湯で服し、白痢には炙甘草湯で服す。再服に過ぎず。(趙原陽濟急方)【妬精下疳】大訶子を灰に燒き、麝香少量を入れ、先づ米泔水で洗つて後に搽る。或は、荊芥、黃蘗、甘草、馬鞭草、葱白の煎湯で洗ふもよし。昔、方士周守眞は、唐靖の爛莖一二寸なるを醫するに、この方を用ゐて效を取つた。(洪邁夷堅志)

核 【主治】【白蜜に磨つて目に注げば、風赤痛を去るに神良である】(蘇頌)【欬、及び痢を止める】(時珍)

葉 【主治】【氣を下し、痰を消し、渴を止める。洩痢には煎じて飲服する。功は訶黎に同じ】(時珍) ○唐の包佶に、病中に李吏部が訶黎勒葉を惠まれたるを謝

する詩がある。

婆羅得（宋開寶）

和名　はろて
學名　Terminalia Chebula, Retz.
科名　しくんし科（使君子科）

【釋名】 **婆羅勒**　時珍曰く、婆羅得とは梵語で、重生果といふ意味である。

【集解】 珣曰く、婆羅得は西海、波斯國に生ずる。樹は中國の柳樹に似て、子は萆麻子のやうである。方家で多くこれを用ゐる。

時珍曰く、按ずるに、王燾の外臺祕要に、婆羅勒は萆麻子に似てゐるが、但だ指甲で爪だてて見ると汁の出るがこの物だとある。

子【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【冷氣塊。中を溫め、腰腎を補し、痃癖を破り、髭髮を染めて黑からしめる】（藏器）

【附方】 新一。【白を拔き黑を生ずる】婆羅勒十顆を皮を去つて汁を取り、熊脂二兩、白馬鬐を膏に煉つて一兩、生薑を炒つて一兩、母丁香半兩を末にして和煎し、毎に白を拔いて點け、肉に揩り込めば黑きものが生える。これは嚴中丞が用ゐた方

である。（孟詵近效方）

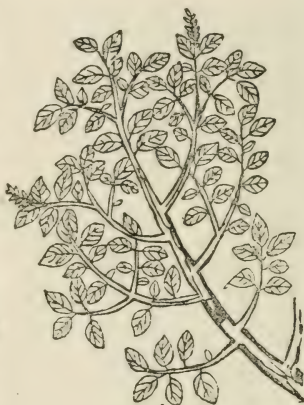
欅（別錄下品）

和名　かんばうふう
學名　Pterocarya stenoptera, DC.
科名　くるみ科（胡桃科）

【釋名】 **欅柳**（衍義） **鬼柳**　時珍曰く、その樹は高く擧り、その木は柳のやうだからかく名けたのだ。山間民は訛つて鬼柳といふ。郭璞註爾雅には柜柳と書き『柳に似たり。皮は煮飲とすべし』とある。

【集解】 弘景曰く、欅樹は山中處處にある。皮は檀、槐に似て、葉は櫟、槲のやうだ。一般に多く識られてゐる。

〔欅　柳〕

恭曰く、所在いづれにもあつて、多く溪澗、水側に生ずる。葉は樗に似て狹く長く、樹は大なるものは幾抱へもあり、

高さは數仞ある。皮は極めて粗厚で、甚だ檀には似てゐない。

宗奭曰く、欅木は、今は一般に欅柳と呼び、その葉は柳と謂ふに柳に非ず、槐と謂ふに槐に非ず、最大なるものは木の高さ五六丈、二三人で抱へるほどある。湖の南、北に甚だ多い。然しやはり材とはならぬもので、器に作るに堪へない。嫩皮をば取つて栲栳の棬にし、及び箕の脣にする。

時珍曰く、欅材は紅紫であつて、箱、案の類に作るに甚だ佳し。鄭樵の通志に『欅は楡の類で枚烈である。その實もやはり楡錢のやうな狀態である。鄉人はその葉を採つて甜茶にする』とある。

木皮　修治　斆曰く、凡そ使ふには、三四年のものを用ゐてはならぬ。力の無いものだ。二十年以上のもので、心が空じ、ただ半邊だけあつて、西に向つて生えたものを用ゐるが良し。剝下して粗皮を去り、細剉して午前十時から午後二時まで蒸し、出して焙じ乾して用ゐる。

氣味　【苦し、大寒にして毒なし】　主治　【時行頭痛。熱が結して腸、胃にあるもの】(別錄)【夏日に煎じて飮めば熱を去る】(弘景)【俗用に、煮汁を服して水

氣を療じ、痢を斷つ】(蘇恭)【胎を安じ、妊婦の腹痛を止める。山欅皮は性平であつて、熱毒風を治し、腫毒を熁する】(大明)

[附方] 舊一、新四。【通身水腫】欅樹皮を汁に煮て日日に飲む。(聖惠方)【毒氣の腹を攻むるもの】手足腫痛するには、欅樹皮に槲皮を和して汁に煮、煎じて飴糖のやうにし、樺皮の濃い煮汁に化して飲む。(肘後方)【蠱毒下血】欅皮一尺、蘆根五寸、水二升を一升に煮て頓服する。蠱を下出するものである。(千金方)【小兒の痢血】梁州の欅皮二十分を炙き、犀角十二分、水三升を一升に煮取り、三回に分服して瘥を取る。(古今錄驗方)【飛血赤眼】欅皮を粗皮を去り、切つて二兩、古錢七文、水一升半を七合に煎じ、滓を去つて熱して洗ふ。一日二回。(聖濟總錄)

葉 [氣味]【苦し、冷にして毒なし】[主治]【挼んで火爛瘡に貼れば效がある】(蘇恭)【腫爛惡瘡を治す。鹽で搗いて罯ふ】(大明)

柳（本經下品）

和名　しだれやなぎ
學名　Salix babylonica, L.
科名　やなぎ科（楊柳科）

釋名　小楊（說文）　楊柳

弘景曰く、柳、卽ち今の水楊柳である。

恭曰く、柳と水楊とは全く相似てゐない。水楊は葉が圓く濶くして尖り、枝條は短く硬い。柳は葉が狹く長くして靑綠であり、枝條は長く軟い。陶氏が柳を水楊としたのは非である。

藏器曰く、江東地方では通じて楊柳と名け、北方では都て楊とはいはない。楊樹は枝、葉が短く、柳樹は枝、葉が長い。

時珍曰く、楊は枝が硬くして揚起するから楊といふ。柳は枝が弱くして垂流するから柳といふ。蓋し一類の二種であつて、蘇恭のいふところが正しい。按ずるに、說文に『楊は蒲柳なり。木に從ふ昜の聲なり。柳は小楊なり。木に從ふ丣の聲なり』とあつて、昜の音は陽（ヤウ）である。丣の音は酉（イウ）である。又、爾雅には『楊は蒲柳なり。旄は澤柳なり。檉は河柳なり』とある。これで觀れば楊を柳と稱

してよく、柳も楊と稱してよいのである。故に現に南方では一般にやはり併せて楊柳と稱してゐる。余宗本の種樹書に『順に挿すを柳とし、倒に挿すを楊とする』とあるが、その說は牽强であつて、且つ揚起の意を失してゐる。

宗奭曰く、釋家では柳を尼倶律陀木といふ。

集解 別錄に曰く、柳華は琅邪の川澤に生ずる。

頌曰く、今は處處にある。俗に所謂、楊柳といふもので、その類にさまざまある。蒲柳は卽ち水楊であつて、枝が勁韌で箭笴に作れる。多く河北に生ずる。杞柳は水旁に生じ、葉は粗くして白く、木理は微し赤く、車轂に作れる。現に一般にその細條を取り、火逼して柔にし、屈げて箱篋に作る。孟子の所謂、杞柳は桮棬となるといふそのものだ。魯の地方、及び

〔柳〕

河朔に尤も多い。檉柳は本條に記載した。

時珍曰く、楊柳は縱横、倒順に揷してみな生える。春初に柔荑を生じて黄蕊花を開き、春晩に至つて葉が長成し、後に花中に細黒子を結び、蕊が落ちて白絨のやうな絮を出し、風に因つて飛ぶ。子は衣物に著いて能く蟲を生じ、池沼に入つて化して浮萍となる。古は、春楡、柳の火を取つた。陶朱公は『柳を種ゑること千樹、柴炭に足るべく、その嫩芽は飲湯に作れる』といつた。

柳華【釋名】**柳絮**（本經）【正誤】下記を見よ。【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【風水黄疸、面熱黑】（本經）【痂疥、惡瘡、金瘡。柳實は、癰を潰し、膿血を逐ふに主效があり、子の汁は渴を療ず】（別錄）『華は、血を止め、濕痺の四肢攣急、膝痛を治するに主效がある】（甄權）

【發明】弘景曰く、柳華は、熟するときは風に隨つて飛雪のやうな狀態になる。そのまだ舒びぬ時のものを用ゐることに相違ない。子も花に隨つて飛ぶものだ。これはただ水に漬けた汁をいふのであらう。

藏器曰く、本經に、柳絮を花としたのは誤が甚しい。花は卽ち初めて發いた時は

蕊である。子は乃ち飛絮である。
承曰く、柳絮は捍氈して羊毛に代へ、茵褥に作るによし。柔軟にして性は涼である。小兒を臥さしめるに適し、尤も佳きものである。
宗奭曰く、柳花は、黄蕊が乾くときに絮が出る。それを採收して灸瘡に貼るが良し。絮の下には小黒子が連つて、風に因つて起ち、水濕を得れば生える。苦蕒、地丁の花が落ちて子を結び、絮に成るやうなものである。古人は、絮を以て花とし、花は雪の如しといつたが、いづれも誤である。藏器の說が正しい。又『實』及び『子汁』の文があつて、諸家は解決してない。今一般にも用ゐられない。
時珍曰く、本經に、風水黄疸を治する主效があるといつたものは柳花である。別錄の主治に、惡瘡、金瘡、癰を潰し、膿血を逐ふといひ、藥性論に、血を止め、痺を療ずるといつたものは柳絮、及び實である。花は乃ち嫩蕊で、搗いて汁を服し得る。子と絮とは連つてゐて區別し難いが、ただ瘡に貼り、血を止め、痺を裹むの用とはなる。所謂、子の汁は渴を療ずといふは、絮を連ねて浸漬し、研つて汁を服することだ。又、崔寔の四民月令に『三月三日、及び上除の日、絮を采つて疾を癒す』

とあるを見ると、藥に入れるに多く絮を用ゐたのだ。

附方　新六。【吐血、咯血】柳絮を焙じ研り、米飲で一錢を服す。(經驗方)【金瘡血出】柳絮で封ずれば止まる。(外臺祕要)【面上の膿瘡】柳絮、膩粉等分を燈盞油で調へて塗る。(普濟方)【走馬牙疳】楊花を燒いて性を存し、麝香少量を入れて搽る。(保幼大全)【大風癘疾】楊花四兩を搗いて餠にし、壁上に貼つて乾くを待つて取下し、米泔水に一時浸して取起し、瓦で焙じて研末して二兩、白花蛇、烏蛇各一條を頭、尾を去り、酒に浸して肉を取り、全蠍、蜈蚣、蟾酥、雄黃各五錢、苦參、天麻各一兩を末にし、水で麻黃を煎じて取つた汁を熬つた膏で和して梧子大の丸にし、硃砂を衣にかけ、五十丸づつを溫酒で服す。一日三服、癒えるを度とする。(孫氏集效方)【脚に汗濕多きもの】楊花を鞋、及び襪の中に著けて穿く。(摘玄)

葉　**氣味**　華に同じ。　**主治**　【惡疥、痂瘡、馬疥。煎煮して洗へば立ろに癒える。又、心腹内の血を療じ、痛を止める】(別錄)【水で煎じて漆瘡を洗ふ】(弘景)【天行熱病、傳尸骨蒸勞。水氣を下す。煎膏は筋骨を續ぎ、肉を長じ、痛を止める。金石を服した人の發して大いに熱悶するもの、湯火瘡毒の腹に入つて熱悶するもの、

及び丁瘡に主效がある】(日華)【白濁を療じ、丹毒を解す】(時珍)

附方 舊一、新五。【小便白濁】淸明の日の柳葉を湯に煎じて茶に代へる。癒えるを度とする。(集簡方)【小兒の丹煩】柳葉一斤を水一斗で汁三升に煮取り、赤き處を搨し洗ふ。一日七八回。(子母祕錄)【眉毛脫落】垂柳葉を陰乾して末にし、毎に薑汁で鐵器中で調へて夜夜に摩る。(聖惠方)【卒に生じた惡瘡】名の識れぬものには、柳葉、或は皮を水で煮た汁に少量の鹽を入れ、頻りに洗ふ。(肘後方)【面上の惡瘡】方は上に同じ。【痘の爛れて蛆を生じたるもの】嫩柳葉を席上に鋪いて臥す。蛆が盡く出て癒える。(李樓奇方)

枝 及び **根白皮** 氣味 華に同じ。主治【痰熱、淋疾。浴湯にして風腫、瘙痒を洗ふがよし。酒で煮て齒痛を漱ぐ】(蘇恭)【小兒の一日、五日の寒熱には枝を煎じて浴する】(藏器)【煎じて服すれば、黃疸、白濁を治す。酒で煮て諸痛腫を熨す。風を去り、痛を止め、腫を消す】(時珍)

發明 頌曰く、柳枝皮、及び根も藥に入れる。葛洪肘後方に、癰疽腫毒、妬乳等を治するに多く用ゐてあり、韋宙獨行方に、丁瘡、及び反花瘡を主とし、いづ

れも柳枝葉を煎じて膏にして塗るとある。今一般に浴湯、膏藥、牙齒藥に作り、やはりその枝を用ゐて最要の藥としてある。

時珍曰く、柳枝は風を去り、腫を消し、痛を止める。その嫩枝を削り、牙杖にし齒を漱ふが甚だ妙である。

附方　舊一、新八。【黄疸の初起】柳枝を濃汁に煮て半升を頓服する。(外臺祕要)

【脾、胃の虚弱】飲食を思はず、食つても消化せず、病の翻胃、噎膈に似たるには、淸明の日に柳枝一大把を取つて湯に煎じ、小米を煮て飯にし、酒、麪を滾して珠子にし、晒乾して袋を風處に懸け、毎に燒滾水に隨意にその米を下し、米が沈んだとき火を住め、少時して米が浮きたとき取つて看て硬心がなければ熟したのである。それを一頓に食ふがよし。久しく置いては麪が散じて粘らなくなる。これを名けて絡索米といふ。(楊起簡便方)【走注氣痛】氣痛の病で、忽ちある一部位が打撲のやうな狀態で忍び難く、走注して一定せず、靜かなときはその部位が霜雪の如く冷える。これは暴寒で傷めたものである。白酒で楊柳白皮を煮て、暖めて熨し、赤點のある處を血を鑱り去るが妙である。凡そ諸卒腫、急痛は、熨すればみな止まる。(姚僧坦集驗方)

【風毒卒腫】方は上に同じ。【陰の卒腫痛】柳枝三尺長さのもの二十本を細剉し、水で煮て極熱し、故帛で腫れた處を裹包し、かくて熱湯で洗ふ。(集驗方)【項下の癭氣】水涯に露出した柳根三十斤、水一斛を五升に煮取り、糯米三斗で普通のやうに酒に釀し、日日に飲む。(范汪方)【齒齦腫痛】垂柳枝、槐白皮、桑白皮、白楊皮等分を水で煎じ、熱し含んで冷えれば吐く。○又、柳枝、槐枝、桑枝を水で煎じて熬膏し、薑汁、細辛、芎藭末を入れ、毎にそれを牙に擦る。(聖惠方)【風蟲牙痛】楊柳白皮を指ほどの太さに卷いて含み咀み、その汁で齒根を漬ける。數回で癒える。○ある方では、柳枝一握を剉み、少量の鹽花、漿水を入れ、煎じて含む。甚だ驗がある。○又ある方では、柳枝を剉んで一升、大豆一升を合せて炒り、豆が熟したとき瓷器に盛り、酒三升に三日間漬け、頻りに含んで涎を漱ぐ。三日にして癒える。(古今錄驗)【耳痛で膿あるもの】柳根を細切し、搗き熟して封じ、燥けば易へる。(斗門方)【漏瘡腫痛】柳根の紅鬚を水で煎じて日日に洗ふ。○摘玄方では、楊柳條を用ゐ、罐内で烟に燒いて熏ずる。水を出して效がある。【乳癰、妬乳】初起に緊く紮で種種に治療して瘥えぬには、柳根皮を熟し搗き、火で溫め帛に裹んで熨し、冷えれば更に易

へる。一夜にして消する。(肘後方)【反花惡瘡】肉が出て飯粒のやうになし、根が深く膿潰するには、柳枝葉三斤、水五升を汁二升に煎じ、熬つて餳のやうにし、一日三回塗る。(聖惠方)【天竈丹毒】赤が背から起るには、柳木灰を水で調へて塗る。(外臺祕要)【湯火灼瘡】柳皮を灰に燒いて塗るもよし。根白皮を猪脂で煎じて頻りに傅ける。(肘後方)【痔瘡で瓜の如きもの】火のやうに腫痛するには、柳枝を煎じた濃湯で洗ひ、艾で三五壯灸する。王及郎中がこれを病んだとき、驛吏がこの方を用ゐて灸すると、熱氣が腸に入るやうに覺え、大いに血穢を下し、一時の間非常に痛んで遂に消し、馬を走せて出發した。(本事方)

柳膠　主治　【惡瘡、及び結砂子】(時珍)

柳寄生　記載は後の寓木類にある。

柳耳　記載は菜部の木耳にある。

柳蠹　記載は蟲部にある。

檉柳 音は偵(テイ)である。 (宋開寶)

和名 ぎよりう
學名 Tamarix chinensis, Lour.
科名 ぎよりう科（檉柳科）

【釋名】 赤檉(日華) 赤楊(古今注) 河柳(爾雅) 雨師(詩疏) 垂絲柳(綱目) 人柳(綱目) 三眠柳(衍義) 觀音柳 時珍曰く、按ずるに、羅願の爾雅翼に『天の將に雨らんとするや、檉が先づこれを知り、氣を起して以て應ずる。又、霜雪を負ふて凋まない。乃ち木の聖なるものだ。故に字は聖に從ふ』とある。又、雨師と名ける。或は、雨に遇へば垂垂として絲のやうである。これは雨絲と書くべきものだともいふ。又、三輔故事に『漢の武帝の苑中に柳があつて、狀態が人のやうだつたので號して人柳といつた』とある。一日三たび起き、

〔檉柳〕

三たび眠るといふを見ると、檉柳の聖なるはまた獨り雨を知り雪を負ふだけではない。今俗に長壽仙人柳と稱し、また觀音柳ともいふ。それは觀音がこれで灑水するといふのである。

宗奭曰く、今は世間でこれを三春柳といふ。それは一年に三たび秀るところから名けたものだ。

【集解】志曰く、赤檉木は河西の沙地に生ずる。皮は赤色で葉が細い。

禹錫曰く、爾雅に、檉は河柳なりとあつて、郭璞の註に『今の河旁の赤莖の小楊だ』とあり、陸機の詩疏に『水旁に生ずる。皮は絳のやうに赤く、枝、葉は松のやうだ』とある。

時珍曰く、檉柳は、幹は小さく、枝は弱く、挿めば生き易く、皮は赤く、葉は絲のやうに細く、婀娜として愛すべきものだ。一年に三回花を作し、花穗は長さ三四寸、水紅色で蓼花の色のやうである。南齊の時、益州から獻じた蜀柳は、條長くして狀態が絲縷のやうだつたといふ。卽ちこの柳である。段成式の酉陽雜俎に『涼州に赤白檉があつて、大なるは炭とする。その灰汁は銅を煮得る。故に沈炯の賦に「檉

は栢に似て香し」といつたのだ』とある。王禎の農書に『山柳は赤くして脆く、河柳は白くして明だ』とあるを見ると、檉はまた白色のものがあるのだ。

宗奭曰く、汴京に甚だ多い。河西では、或はその地の者が滑な枝を取つて鞭にする。

木 【氣味】〔甘く鹹し、溫にして毒なし〕【主治】〔驢馬を剝いで血の肉に入つた毒には、木片を取り、火で炙いて熨し、幷に煮汁に浸す〕(開寶)〔枝、葉は痞を消し、酒毒を解し、小便を利す〕(時珍)

【附方】新三。〔腹中の痞積〕觀音柳の煎湯を一夜露し、五更に空心に飮む。數回で痞は自ら消する。(衞生易簡方)〔一切の諸風〕發病の遠近を問はず、檉葉半斤を切り、――枝もよし――荊芥半斤、水五升で二升に煮て澄清し、白蜜五合、竹瀝五合を入れ、新瓶に盛つて油紙で封じ、重湯に入れて一伏時煮て、一小盞づつを一日三服する。(普濟方)〔多く酒を飮んで病を起したもの〕長壽仙人柳を晒乾して末にし、一錢づつを溫酒で調へて服す。(衞生易簡方)

檉乳 卽ち脂汁である。【主治】〔質汗の藥に合せて金瘡を治す〕(開寶)

水楊（唐本草）

和名　ねこやなぎ又かはやなぎ（同名アリ）
學名　Salix gracilistyla, Miq.
科名　やなぎ科（楊柳科）

釋名　**青楊**（綱目）　**蒲柳**（爾雅）　**蒲楊**（古今注）　**蒲移**　音は移（イ）である。**移柳**（古今注）　**雚苻**　音は丸蒲（クワンポ）である。時珍曰く、楊は枝が硬くして揚起する。故に楊といふ。多く水涘（すゐし）、蒲雚の地に適する。故に水楊、蒲柳、雚苻の名がある。

集解　恭曰く、水楊は、葉が圓く濶くして尖があり、枝條は短く硬く、柳と全く別である。柳は葉が狹く長く、枝條が長く軟いものだ。

頌曰く、爾雅に、楊は蒲柳なり。その枝は勁く靭くして箭苛（せんか）になるとある。左傳に所謂、董澤（とうたく）の蒲である。又、これを雚苻といふ。今は河北の沙地に多く生えてゐる。楊柳の類はやはり多いもので、崔豹の古今注に『白楊は葉圓く、青楊は葉が長く、柳は葉が長くして細く、移楊は葉が圓くして弱し』とある。水楊は卽ち蒲柳であつて、また蒲楊ともいふ。葉は青楊に似て、莖は矢に作れる。赤楊は霜が降ると葉が

赤くなり、材の理もやはり赤い。然し今は一般に明確に區別するものが鮮い。

機曰く、蘇恭の說では、水楊の葉は圓く潤いといふ。崔豹の說では、蒲楊は青楊に似てゐるといふが、青楊は葉が長いものだ。相類してゐないやうである。

〔水楊〕

時珍曰く、按ずるに、陸機の詩疏に「蒲柳に二種あつて、一種は皮が正青である。一種は皮が正白で、矢に作れる。北方の地に尤も多い。花は柳と同じ』とある。

枝葉 【氣味】【苦し、平にして毒なし】【主治】【久痢赤白には、搗汁一升を一日二回服すれば大いに效がある】（唐本）【癰腫、痘毒に主效がある】（時珍）

發明 時珍曰く、水楊根は癰腫を治す。故に近頃は一般に枝、葉を用ゐて痘

瘡を治療する。魏直の博愛心鑑に『痘瘡の、數日にして陷頂し、漿が滯つて行らず、或は風寒に阻まれるものには、水楊の枝、葉を用ゐるが宜し。葉が無ければ枝を用ゐ、五斤を流水一大釜で煎湯して溫浴する。冷えれば湯を添へ、良久して照見し、纍起して暈絲が見えるときは漿が行つたのである。なほ不滿足なときは再び浴する。力の弱いものはただ頭面、手足を洗ふ。もし屢〻浴しても起たぬものならば氣血が敗れてゐるのである。再び浴してはならない。始めて出たもの、及び痒塌するもの、いづれも浴してはならない。痘の漿が行らぬは、氣が澀し、血が滯し、腠理が固密し、或は風寒に外阻される結果である。浴して暖氣を透達せしめ、鬱蒸を和暢し、氣血が通徹すれば、毎に暖氣に隨つて發し、行漿が完全に行き渡る。その功は淺からぬものである。若し氣血を助る藥を內服して、これを藉りて升するならば、その效は更に速で、風寒も阻むことを得ない。このままの方法をある老女が田舍で實行して效驗を擧げてゐるのを見て、その方を詢ねてそれを實行して見るに、百發百中である。決して輕視してはならない。誠に爕理の妙を有するものだ』とある。群書蓋し黃鐘一動して蟄蟲戶を啓き、東風一吹して堅水腹を解く。同一春である。

にいづれもこの法の記載がないから、此に詳記して置く。

木白皮 及び **根** 〔氣味〕 華に同じ。 〔主治〕 【金瘡痛楚、乳癰諸腫、痘瘡】（時珍）

〔發明〕 時珍曰く、按ずるに、李仲南の永類鈐方に『ある人は、乳癰を治するに、持藥の一根を生で擂つて瘡に貼つたが、その熱が火の如くになつて、再び貼ると遂に平ひだ。その方を求めると、それは水楊柳の根であつた』とある。葛洪肘後方に、乳癰を治するに柳根を用うとある。これを見ると、楊と柳とは性氣の遠からぬもので通用し得るものである。

〔附方〕 新一。【金瘡苦痛】楊木白皮を熬燥して末に礪り、水で方寸匕を服し、同時に傅ける。一日三回。（千金方）

白楊（唐本草）

和名　てろのき
學名　Populus Maximowiczii, A. Henry.
科名　やなぎ科（楊柳科）

〔釋名〕 **獨搖** 宗奭曰く、木身が楊に似て微し白い。故に白楊といふ。粉のや

うに白いといふのではない。時珍曰く、鄭樵の通志に『白楊、一名高飛』といつて移楊と同名にいつてある。今俗に通じて移楊と呼ぶ。且つ白楊も風に因つて獨り搖くところから同名に呼ばれるのだ。

集解　恭曰く、白楊は、葉が圓く大きく、蔕が小さく、風なくして自ら動くものを取る。

藏器曰く、白楊は、北方の地に極めて多く、一般に墟墓の間に種ゑる。樹は大きく、皮が白い。その風なくして自ら動くといふものは、移楊であつて白楊ではない。

〔白楊〕

頌曰く、今は處處にあるが、北方の地に尤も多い。株は甚だ高大で、葉は圓くして梨葉の如く、皮は白色で、木は楊に似てゐる。採るに一定の時期はない。崔豹古

今注に『白楊は葉圓し、靑楊は葉長し』とあるその通りだ。
宗奭曰く、陝西に甚だ多く、永、耀地方の居民の家屋は多くこの木である。その根を時に拘らず碎扎して土に入ると、それで根を生ずる。故に繁植し易い。土地が適してゐるのだ。風が纔に來ると葉が大雨の聲のやうである。所謂、風なくして自ら動くといふその事實はないので、但だ風が微にあるとその葉の孤絶な處のものが往往にして獨り搖ぐ。それは蔕が長く葉が重いから、大體姿勢の關係なのである。
時珍曰く、白楊は、木は高く大きく、葉は圓く、梨に似て肥大にして尖があり、表面は靑くして光り、背面は甚だ白色で鋸齒がある。木は肌が細く白く、性が堅直なもので、梁、拱に使用しても決して撓曲しない。移楊とは一類の二種である。治病の功も概して彷彿たるものだ。嫩葉はまた救荒の糧になり、老葉は酒麴の料になる。

木皮【修治】斅曰く、凡そ使ふには、銅刀で粗皮を刮去り、午前十時から午後二時まで蒸し、布袋に盛つて屋の東角に掛け、乾くを待つて用ゐる。

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】大明曰く、酸し、冷なり。【主治】【毒風

脚氣腫、四肢の緩弱不隨、毒氣が游易して皮膚中に在るもの、痰癖等。酒に漬けて服す」(唐本)【風痺宿血、折傷血瀝の骨肉の間に在つて忍び難く痛むもの、及び皮膚の風瘙腫を去る。五木と雜へて湯にし、損處を浸す」(藏器)【撲損瘀血を治す。竝に酒で煎じて服す。煎膏は筋骨を續ぐによし」(大明)【煎湯を日日に飲めば卒痢を止める。醋で煎じて含漱すれば牙痛を止める。漿水で煎じ、鹽を入れて含漱すれば口瘡を治す。煎じた水で釀した酒は癭氣を消す」(時珍)

【附方】舊一、新一。【妊娠下痢】白楊皮一斤、水一斗を二升に煮取り、三回に分服する。(千金方)【項下の癭氣】秫米三斗を炊熟し、圓葉白楊皮十兩を取り、風に當てぬやうにして切り、水五升で二升に煮取り、麴末五兩を漬け、普通のやうに酒に釀し、早朝一盞、日中再服する。(崔氏方)

枝【主治】【腹痛を消し、吻瘡を治す」(時珍)

【附方】舊二、新一。【口吻爛瘡】白楊の嫩枝を鐵上で灰に燒き、脂で和して傅ける。(外臺祕要)【腹滿癖堅】石のやうになり、積年損ぜざるものに必效の方。白楊木の東枝を用ゐ、粗皮を去り、風を辟け、細剉して五升を黃に熬り、酒五升で淋してか

ら、絹袋に滓を盛つて還た酒中に納れ、二晝夜密封し、毎服一合を、一日三服する。(外臺祕要)【面色の白からぬもの】白楊皮十八兩、桃花一兩、白瓜子仁三兩を末にし、毎服方寸匕を一日三服する。五十日にして面、及び手足がみな白くなる。(聖濟總錄)

葉 主治 【齲齒には、水で煎じて含漱する。又、骨疽の久發で骨が中より出るものを治するに、頻に擣いて傅ける】(時珍)

扶移 音は夫移(フイ)である。 (拾遺)

和名 やまならし
學名 Populus tremula, L.
科名 やなぎ科(楊柳科)

釋名 **栘楊**(古今注) **唐棣**(爾雅) **高飛**(崔豹) **獨搖** 時珍曰く、栘は白楊の同類だから楊なる名稱がある。按ずるに、爾雅に『唐棣は栘なり』とあり、崔豹は『栘楊は、江東では夫移と呼ぶ。葉圓く、蔕弱く、微風あれば大いに搖ぐ。故に高飛と名け、また獨搖といふ』といつた。陸機が唐棣を郁李としたのは誤である。郁李は常棣であつて唐棣ではない。

集解 藏器曰く、扶移木は江南の山谷に生ずる。樹は太さ十數圍あり、風な

くして葉動き、花は反つて後に合する。詩に『唐棣之華、偏其反而』とあるがそれである。

時珍曰く、栘楊と白楊とは同類の二種で、現に南方では一般に通じて白楊と呼ぶ。故に俚人の語に『白楊葉、有風掣、無風掣』といふがある。その藥に入れての功は概して相近い。

〔扶栘〕──唐棣──

木皮 氣味 【苦し、平にして小毒あり】 主治 【風血脚氣の疼痺、踠損瘀血の忍び難く痛むを去るに、白皮を取つて火で炙き、酒に浸して服す。五木皮と和し、湯に煮て脚氣を捋し、瘃蟲、風瘙を殺す。燒いて灰にして酒中に置けば、味を正しくし、時を經て敗れざらしめる】（藏器）

發明 時珍曰く、白楊、栘楊の皮は、いづれも五木皮と雜へ湯に煮て、損、

痺、諸痛腫を浸挼する。所謂五木とは、桑、槐、桃、楮、柳であつて、いづれも風を去り、血を和するものだ。

［附方］新一。【婦人の白崩】移楊皮半斤、牡丹皮四兩、升麻、牡蠣を煅いて各一兩を用ゐ、毎一兩を酒二鍾で一鍾に煎じ、食前に服す。(集簡方)

松楊（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

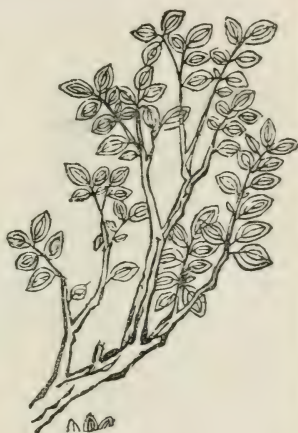
［校正］唐本草の椋子木を併せ入る。

［釋名］**椋子木** 音は涼(リヤウ)である。時珍曰く、その材は松のやう、その身は楊のやうだから松楊と名けたのである。爾雅に「椋は卽來なり」とある。その陰が蔭涼となるから椋木といつたのだ。

藏器曰く、江西地方では涼木と呼ぶ。松楊縣なる地名はこの木から生じたものだ。

［集解］藏器曰く、松楊は江南の林落の間に生ずる。樹は大きく、葉は梨のや

うだ。

○志曰く、椋子木は、葉は柿に似て兩葉相當り、子は細く圓くして牛李のやう、生では青く、熟すれば黑い。その木は堅く重い。煮汁は色が赤い。郭璞は『椋材は車輞に中る』

〔陽　松〕

といつた。八月、九月に木を採り、日光で乾して用ゐる。

木　氣味　【甘く鹹し、平にして毒なし】　主治　【折傷。惡血を破り、好血を養ひ、胎を安じ、痛を止め、肉を生ずる】（唐本）

木皮　氣味　【苦し、平にして毒なし】　主治　【水痢には冷熱を問はず、黑く濃煎して一升を服す】（藏器）

楡

兪(ユ)由(イウ)の二音である。（本經上品）

和名　にれ
學名　Ulmus campestris, L.
科名　にれ科（楡科）

【釋名】零楡（本經）白きものを粉と名ける。時珍曰く、按ずるに、王安石の字説に『楡は瀋が兪柔だからこれを楡といふ』とある。枌といふは、之を分つの道があるからこれを枌といふ。その莢が飄零だから零楡といふ。

【集解】別錄に曰く、楡皮は潁川の山谷に生ずる。二月に皮を採り、白を取つて暴乾する。八月に實を採る。いづれも濕に中られてはならぬ。濕へば人を傷める。弘景曰く、これは今の楡樹である。皮を取り、上の赤皮を刮去り、やはり時に臨んでこれを用ゐる。性は至つて滑

〔莢蒾・楡〕
──郷楡は莢がない──

利である。初生の莢仁で作つた麋羹は人をして多く睡らしめる。嵆康の所謂『楡は人をして瞑せしめる』とはそれである。

恭曰く、楡は三月に實が熟し、尋いで落ちる。此に『八月實を採る』とあるは恐らく誤であらう。

藏器曰く、江東には大楡がなく、刺楡があつて秋實る。故に經に『八月採る』としたもので、誤である。刺楡皮は滑利でない。

頌曰く、楡は處處にあり、三月莢を生ずる。古人は仁を採つて麋羹に作つたといふが、今は一向に食ふものがない。ただ陳老實を用ゐて醤を作るだけである。按ずるに、爾雅疏に『楡の類に數十種あり、葉はみな相似て、ただ皮、及び木理に異があるだけだ』とある。刺楡は、鍼刺があつて柘のやう、その葉は楡のやうで、瀹て蔬羹にすれば白楡より滑だ。卽ち爾雅の所謂『樞、荎』詩經の所謂『山有樞』といふそのものである。白楡は、先に葉が生えて却て莢を著ける。皮は白色である。二月に皮を剝ぎ、粗皵を刮り去ると中が極めて滑白である。卽ち爾雅の所謂『楡、白枌』がそれだ。凶作の歲には、農民は皮を取つて粉食にし、粮に當てるが、人を損せぬ。

（一）滫瀡トハ米泔ニテ浸沃シテ柔滑ナラシメル食物調理法ナリ。

四月に實を採る。

宗奭曰く、楡皮は、初春に先づ莢を生ずるものがそれである。嫩い時に收貯して羹茹にする。嘉祐中、豐沛地方が食粮缺乏でこれを多く用ゐた。

時珍曰く、邢昺の爾雅疏に『楡に數十種ある』とあるが、今は一般に盡く識別するは困難で、ただ莢楡、白楡、刺楡、榔楡の數者が判るだけである。莢楡、白楡はいづれも大楡であつて、赤、白の二種があり、白きものを枌と名ける。その木は甚だ高大で、また葉の生ぜぬ時に枝條の間に先づ楡莢を生ずる。形狀は錢に似て小さく、色白く、串を成してゐる。俗に楡錢と呼ぶ。後になつて葉が生じ、山茱萸葉に似て長く、尖艄で潤澤である。嫩葉を煠て浸し、淘つて食へる。故に內則に『堇荁、枌楡、兎薧。滫瀡して以て之を滑にす』とある。三月に楡錢を採つて羹に作れる。また收貯し、冬に至つて酒にも釀し得る。瀹て晒乾して醬にも作れる。卽ち楡仁醬である。崔寔の月令に醤醶——音は牟偸（ボウトウ）——といつてあるがそれである。諸楡は性山楡の莢は蕪荑と名け、これと相近いが、但だ味がやや苦いだけである。諸楡は性みな地を扇するものだ。故にその下には五穀が繁植せぬ。古人は春楡火を取るとい

つた。今は一般にその白皮を採つて楡麪とし、水で調へて香劑に和す。粘滑なることは膠、漆に勝る。

承曰く、楡皮を濕し搗いて糊のやうにし、瓦石を粘するに用ゐれば極めて强い。汴洛地方では、石で碓嘴を作り、これを用ゐて膠する。

白皮　【氣味】【甘し、平、滑、利にして毒なし】【主治】【大、小便不通に水道を利し、邪氣を除く。久しく服すれば穀を斷ち、身を輕くし、饑ゑず。その實が尤も良し】(本經)【腸、胃の邪熱の氣を療じ、腫を消し、小兒の頭瘡、痂疕を治す】(別錄)【經脈を通ずる。搗いて涎を癬瘡に傅ける】(大明)【胎を滑し、五淋を利し、齁喘を治し、不眠を療ず】(甄權)【生皮を擣いて三年の醋を和し、滓で暴患赤腫、婦人の妒乳腫を封じ、日に六七回易へるが效ある】(孟詵)【竅を利し、濕熱を滲し、津液を行し、癧腫を消す】(時珍)

【發明】　詵曰く、高昌地方では、多く白皮を擣いて末にし、菜茹に和して食ふ。甚だ美味で、人の食慾を增進する。仙家で長く服し、丹石を服する人もこれを服す。關節を利する點を取るのである。

時珍曰く、楡皮、楡葉は、性みな滑利であつて、下降する。手、足の太陽、手の陽明の經の藥である。故に一般に、小便不通、五淋、腫滿、喘嗽、不眠、經脈、胎産の諸證に適する。本草の十劑に『滑は著を去るもので、冬葵子、楡白皮の屬だ』とある。蓋しまたその竅を利し、濕熱を滲し、留著せる有形の物を消する點を取つたものだ。氣盛にして壅するものには適するが、もし胃寒で虛するものの場合には、久しく服すれば滲利して、恐らく眞氣を洩するであらう。本經の所謂『久しく服すれば身を輕くし、饑ゑず』といひ、蘇頌の所謂『楡粉を多く食つて人を損ぜぬ』といふは、恐らく確論ではない。

附方 舊九、新九。【穀を斷つて饑ゑず】楡皮、檀皮を末にし、日に數合を服す。(救荒本草) 【齁喘して止まぬもの】楡白皮を陰乾して末にし、毎日水五合で末二錢を煎じ、膠のやうにして朝、夜に服す。(食療本草) 【久嗽で死せんとするもの】許明則の有效方――厚楡皮を指ほどの大いさで長さ一尺餘に削り、喉中に納れて頻りに出入する。膿血を吐して癒えるものである。(古今錄驗) 【虛勞白濁】楡白皮二升、水二斗を五升に煮取り、五回に分服する。(千金方) 【小便氣淋】楡枝、石燕子を水で

煎じて日日に服す。(普濟方)【五淋澀痛】楡白皮を陰乾して焙じ研り、二錢づつを水五合で煎じて膠のやうにし、一日二服する。(普濟方)【渴して尿多きもの】淋ではない。楡皮二片を黑皮を去り、水一斗で五升に煮取り、一回に二合づつ、一日三服する。(外臺祕要)【身體の暴腫】楡皮を末に搗き、米と共に粥にして食ふ。小便があつて良し。(備急方)【臨月に產を易くする】楡皮を焙じて末にし、臨月に一日三回方寸匕を服す。產を極めて易くする。(陳承本草別說)【墮胎下血】止まぬには、楡白皮、當歸を焙じ、各半兩に生薑を入れ、水で煎じて服す。(普濟方)【腹中の胎死】或は母が病のために胎を下さんとするには、楡白皮を汁に煮て二升を服す。(子母祕錄)【身首に生じた瘡】楡白皮末を油で和して塗る。蟲が出るものである。(子母祕錄)【火灼爛瘡】楡白皮を嚼んで塗る。(千金髓)【五色丹毒】俗に遊腫と名ける。犯すものは多く死亡する。輕視してはならぬ。楡白皮末を雞子白で和して塗る。(千金)【小兒の蟲瘡】楡皮末を豬脂で和し、綿上に塗つて覆ふ。蟲が出て立ろに痊える。(千金方)【癰疽發背】楡根白皮を切つて淸水で洗ひ、搗いて極めて爛らし、香油を和して傅け、頭を留めて氣を出し、燥けば苦茶で頻りに潤ほす。粘らぬときは更に新なるものに

換へる。將に癒えんとするとき、桑葉を嚼み爛らし、大、小に隨つて貼る。口が合すれば止める。神效がある。(救急方)【小兒の瘰癧】楡白皮を生で搗き、泥のやうにして封じ、頻りに易へる。(必效方)【小兒の禿瘡】醋で楡白皮末を和して塗る。蟲が出るものである。(產乳方)

葉 [氣味] 上に同じ。[主治]【嫩葉を羹にし、及び煠て食へば、水腫を消し、小便を利し、石淋を下し、丹石を壓する】(藏器) 時珍曰く、暴乾して末にし、淡鹽水を拌ぜ、或は炙き、或は晒乾し、菜に拌ぜて食ふ。やはり辛、滑にして水氣を下す。【煎汁で酒皶鼻を洗ふ。酸棗仁と等分を蜜で丸にして日日に服すれば、膽熱虛勞の不眠を治す】(時珍)

花 [主治]【小兒の癇、小便不利、傷熱】(別錄)

莢仁 [氣味]【微し辛し、平にして毒なし】[主治]【糜羹に作つて食へば、人をして多く睡らしめる】(弘景)【婦人の帶下に主效がある。牛肉を和して羹に作つて食ふ】(藏器)【子醬は蕪荑に似て、能く肺を助け、諸蟲を殺し、氣を下し、人をして能く食せしめ、心腹の間の惡氣、卒心痛を消す。諸瘡癬に塗るには陳きもの

を用ゐるが良し」（孟詵）

楡耳　記載は木耳の條下にある。

榔楡（拾遺）

和　名　あきにれ
學　名　Ulmus parvifolia, Jacq.
科　名　にれ科（楡科）

【集解】藏器曰く、榔楡は山中に生ずる。狀態は楡のやうで、その皮に滑汁がある。秋、莢を生じ、大楡のやうである。

時珍曰く、大楡は二月に莢を生じ、榔楡は八月に莢を生ずるので區別される。

皮【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【熱淋を下し、水道を利し、人をして睡らしめる】（藏器）【小兒の解顱を治す】（時珍）

蕪荑（別錄中品）

和　名　にがにれ又てうせんにれ
學　名　Ulmus macrocarpa, Hance.
科　名　にれ科（楡科）

【釋名】**莁荑**（爾雅）**無姑**（本經）**蔱蘠**　音は殿唐（テンタウ）である。木を榎

と名ける。音は偏（ヘン）である。時珍曰く、按ずるに、說文に『梗は山枌榆（さんふんゆ）なり。刺あり。實を蕪荑といふ』とあり、爾雅に『無姑、その實は荑』又『蕪荑は蔱蘠（さつこう）なり』とある。則ちこの物は莁樹（ぶじゅ）の荑だからかく名けたのだ。

恭曰く、蕨薚とあるは蔱蘠の二字の誤だ。

集解 別錄に曰く、蕪荑は晉山の川谷に生ずる。三月に實を採つて陰乾する。

弘景曰く、今はただ高麗だけに產する。形狀は楡莢のやうで、氣が狐のやうに臭い。彼の地では一般にみなこれを醬にして食ふ。性蟲を殺すもので、物の中に置けばやはり蛀（しゅ）を辟ける。ただ臭いので困る。

恭曰く、今は延州、同州のものが甚だ好し。

志曰く、河東、河西の處處にある。

頌曰く、近道にもあるが、太原のものを良しとする。大抵楡の類だがやや小さく、その實も早く成る。この楡は大いに氣臭あるものだ。郭璞の爾雅註に『無姑は姑楡なり。山中に生じ、葉は圓くして厚し。皮を剝ぎ取つて合せ漬けると、その味が辛

く香しい。所謂、蕪荑である』とある。實を採つて陰乾して用ゐる。今世間ではまた多く取つて屑にし、それで五味を芼めるが、ただ陳いものが良し。一般にこれを收藏し、多く鹽で漬けるが、それでは氣味を失する。但だ食品に適するだけで、藥に入れるには堪へない。

珣曰く、按ずるに、廣州記に『大秦國に生ずる。これは波斯の蕪荑だ』とある。

藏器曰く、蕪荑は氣の羶いものが良し。これは山楡の仁である。

時珍曰く、蕪荑には大、小の兩種あつて、小なるものは卽ち楡莢である。仁を採み取つて醞して醬に作る。味は尤も辛し。一般には多く外の物を相和してあるから擇り去る必要がある。藥に入れるには、みな大蕪荑を用ゐるので、別に種がある。

【氣味】【辛し、平にして毒なし】權曰く、苦し、平なり。珣曰く、辛し、溫なり。

詵曰く、醬に作れば甚だ香美である。功は尤も楡仁に勝る。少く食ふべきもので、過多なれば發熱する。辛なるがためである。秋期にこれを食ふが尤も人に宜し。

【主治】【五內の邪氣。皮膚、骨節中に淫淫として溫行する毒を散じ、三蟲を去

り、食を化す】(本經)【寸白を逐ひ、腸中の嗢嗢たる喘息を散ず】(別錄)【積冷の氣、心腹癥痛に主效があり、肌膚、骨節中の風で淫淫として蟲の行く如くなるを除く】(蜀本)【五臟、皮膚、肢節の邪氣。食を長じ、五痔を治し、中惡、蟲毒を殺し、諸病を生ぜぬ】(孟詵)【腸風、痔瘻、惡瘡、疥癬を治す】(大明)【蟲を殺し、痛を止め、婦人の子宮風虛、孩子の疳瀉、冷痢を治す。訶子、豆蔲と配合するが良し】(李珣)【豬脂に和し、擣いて熱瘡に塗る。蜜で和して濕癬を治す。沙牛酪、或は馬酪を和して一切の瘡を治す】(張鼎)

附方 舊三、新七。【脾、胃に蟲あるもの】物を食へば痛み、面黃で色なきには、石州の蕪荑仁二兩を麪に和し、黃色に炒つて末にし、非時に米飲で二錢匕を服す。(千金方)【諸蟲を制殺する】生蕪荑、生檳榔各四兩を末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、二十丸づつを白湯で服す。(本事方)【疳熱で蟲あるもの】瘦悴せるものは、久しく服すれば充肥する。榆仁一兩、黃連一兩を末にし、豬膽汁七箇で和し、盌內に入れて飯上で蒸し、一日に一回づつ九回蒸し、そこで麝香半錢を入れ、湯で浸した蒸餅で和して綠豆大の丸にし、毎服五七丸、乃至一二十丸を米飲で服す。(錢氏小兒直訣)

【小兒の蟲癇】胃寒蟲上の諸證の危惡にして癇と相似たるには、白蕪荑、乾漆を燒いて性を存し、等分を末にし、一字、乃至一錢を米飲で調へて服す。（杜壬方）【結陰下血】蕪荑一兩を搗き爛らし、紙で壓して油を去つて末にし、雄猪膽汁で梧子大の丸にし、毎服九丸を甘草湯で服す。一日五服、三日にして根を斷つ。（普濟方）【脾、胃の氣泄】久しく患つて止まぬには、蕪荑五兩を末に搗き、飯で梧子大の丸にし、毎日空心にして飯前に陳米飲で三十丸を服す。久して服すれば三尸を去り、神を益し、顏を駐める。この方は章鐐から得て、嘗て用ゐて十分に奏效したものだ。（王紹顏續傳信方）【膀胱氣急】氣を下すべきものである。蕪荑を搗いて食鹽末等分と和し、綿で裹んで棗ほどの大いさにして下部に納れる。或は惡汁を下し、いづれも氣を下して佳し。（外臺祕要）【嬰孩の驚瘖】風後の失瘖で言語不能なるには、肥兒丸——蕪荑を炒り、神麴を炒り、麥蘖を炒り、黃連を炒り、各一錢を末にし、猪膽汁で作つた糊で黍大の丸にし、毎服十丸を木通湯で服す。黃連は能く心竅の惡血を去る。（全幼心鑑）【蟲牙で痛むもの】蕪荑仁を蛀孔中、及び縫中に置く。甚だ效がある。（危氏得效方）【腹中の鼈瘕】平時に酒、（一）血を嗜むものの酒に入れば酒鼈となり、平時氣血多きものの

（一）血トハ獸類ヲ食物トスルヲイフ。

氣に凝れば氣鼈となり、虚勞、痼冷、敗血に痰が雜れば血鼈となり、頭を搖し、尾を掉して蟲が行くやうに覺え、上には人の咽を侵し、下には人の肛を蝕し、或は脇背に附き、或は脅腹に隱れる。大なるは鼈ほど、小なるは或は錢ほどのものである。治法は、ただ蕪荑を用ゐ、炒り煎じて服す。兼ねて胃を暖め、血を益し、中を理するの類を用ゐて、かくてこれを殺すがよし。もし徒に雷丸、錫灰の類のみを用ゐてゐては無益である。（仁齋直指方）

蘇方木（唐本草）

和名　すはう
學名　Caosalpinia Sappan, L.
科名　まめ科（荳科）

釋名　**蘇木**　時珍曰く、海島に蘇方國といふがあつて、その地にこの木を產する。故にかく名けたのだ。今は一般に略稱して蘇木といつてゐる。

集解　恭曰く、蘇方木は南海、崑崙から來るが、交州、愛州にもある。樹は菴羅に似たもので、葉は槐葉のやうで澀くなく、條を抽出て長さ一丈ばかりになり、花は黃に、子は青く、熟すると黑くなる。その木は一般に絳色の染料に用ゐる。

珣曰く、按ずるに、徐表の南州記に『海畔に生じ、葉は絳木に似て女貞のやうだ』とある。

時珍曰く、按ずるに、嵇含の南方草木狀に『蘇方樹は槐に類し、花は黃で、子は黑い。九眞に產する。汁を煎じるには鐵器

〔蘇方木〕

を忌む。犯せば色が黯くなる。その木蠹の糞をば紫納と名け、やはり用ゐられる。暹羅國では一般に薪のやうに粗末に扱ふ』とある。

【修治】 斅曰く、凡そ使ふには、上の粗皮、幷に節を去る。もし中心の文が橫で、紫角の如きものを得るならば、それは號して木中尊といふものだ。その力は普通品に倍すること百等である。必ず細剉して重ねて擣き、細い梅樹の枝を拌ぜて午前十時から午後四時まで蒸し、陰乾して用ゐる。

【氣味】 【甘く鹹し、平にして毒なし】杲曰く、甘く鹹し、涼なり。升によく降

によく、陽中の陰である。好古曰く、味は甘くして微し酸く辛し、その性は平である。

【主治】【血を破る。産後血で脹悶して死せんとするものには、水で五兩を煮て、濃汁を取つて服す】(唐本)【婦人の血氣、心腹痛、月候不調、及び蓐勞。膿を排し、痛を止め、癰腫、撲損瘀血を消す。婦人の失音、血噤、赤白痢、幷に後分急痛】(大明)【虚勞、血癖、氣の壅滞、産後の惡露、不安、心腹攪痛、及び經絡不通、男女の中風、口噤不語。いづれも細研した乳頭香末方寸匕を、酒で蘇方木を煎じたもので調へて服するが宜し。立ろに惡物を吐して瘥える】(海藥)【霍亂嘔逆、及び人の常に嘔吐するには、水で煎じて服す】(蘇頌)【破瘡瘍の死血、産後の敗血】(李杲)

【發明】元素曰く、蘇木は、性は涼、味は微辛であつて、表裏の風氣を發散する。防風と共に用ゐるが宜し 又、能く死血を破る。産後の血腫、脹滿で死せんとするものに宜し。

時珍曰く、蘇方木なるものは三陰の經の血分の藥であつて、少しく用ゐれば血を和し、多く用ゐれば血を破る。

附方　舊一、新五。【産後の血運】蘇方木三兩を水五升で二升に煎じ取つて分服する。【産後の氣喘】面黑くして死せんとするは、血が肺に入つたのである。蘇木二兩を水二椀で一椀に煮、人參末一兩を入れて服す。時に隨つて加減する。言ふべからざる神效がある。（胡氏方）【破傷風痛】蘇方木を散にして三錢を酒で服す。立ろに效がある。獨聖散と名ける。（普濟方）【脚氣腫痛】蘇方木、鷺鷥藤等分を細剉し、定粉少量を入れ、水二斗で一斗五升に煎じ、先づ熏して後に洗ふ。（普濟方）【偏墜腫痛】蘇方木二兩を好酒一壺で煮熟し、頻りに飲む。立ろに好し（集簡方）【金瘡、接指】凡そ指の斷れたるもの、及び刀斧傷には、眞蘇木末を敷き、外を蠶繭で包んで完全に固く縛る。數日にして故の如くになる。（攝生方）

烏木（綱目）

和名　こくたん
學名　Maba Ebenus, Spreng.
科名　かきのき科（柿樹科）

釋名　**烏樠木**　樠の音は漫（マン）である。**烏文木**　時珍曰く、木を文木と名けるは、南方人は文を樠といふやうに發音するからだ。

集解　時珍曰く、烏木は海南、雲南、南番に産する。葉は椶櫚に似て、その木は漆黒、體重く、堅緻なもので、筋、及び器物になる。閒道にあるものは嫩木である。南方の地で多く(一)槃木を染色して僞物を作る。南方草木狀に『文木は樹の高さ七八尺、その色は正黒、水牛角のやうなものだ。馬鞭に作る。日南にある』とあり、古今注には『烏文木は波斯に産する。船上で將來する。烏文(二)闘然たるものだ。溫、括、婺等の州にも産する』とある。いづれもこの物である。

〔烏樠木〕

氣味　【甘く鹹し、平にして毒なし】

主治　【毒を解す。又、霍亂、吐利に主效がある。屑を取つて研末し、溫酒で服す】(時珍)

(一)槃木、爾雅ニ、杭槃梅トアリ、邢昺疏ニ、杭、一名槃梅。郭曰ク、杭樹ハ狀梅ニ似テ、子ハ指頭ノ如ク、赤色ニシテ小柰ニ似タリ。食ノ可シトアリ。

(二)闘、木名、王會篇註ニ、木ハ水中ニ生ズ、黒色ニシテ光堅鐵ノ如シ。即チ今ノ烏木ナリトアリ。

樺木（宋開寶）

和名　たうかんば
學名　Betula chinensis, Maxim.
科名　かばのき科（樺木科）

【釋名】 ⿰木畫　藏器曰く、晉の中書令王珉の傷寒身驗方中に⿰木畫（くわく）の字に書いてある。時珍曰く、畫工が皮を烟に燒き、紙を熏じて古くして字を畫く。故に⿰木畫と名ける。俗に字畫を省いて樺の字にしたのである。

〔樺木〕
——華山に產する——

【集解】 藏器曰く、樺木は山桃に似たもので、皮は燭になる。

宗奭曰く、皮上にある紫黑の花文の匂しいもので鞍、弓鐙（きうとう）を裹む。

時珍曰く、樺木は遼東、及び臨洮（りんてう）、河州、西北の諸地に生ずる。その木は色が黃で紅色の小斑點があり、能く肥膩を收める。その皮は厚くして輕虛、軟柔である。

皮革工はこれで鞾の裏に襯け、及び刀靶の類に作り、暖皮といひ、胡人は尤も重ずる。皮で蠟を巻き、燭にして點火し得る。

木皮 【氣味】【苦し、平にして毒なし】【主治】『諸黄疸には、濃煮汁を飲むが良し』(開寶)『煮汁を冷飲すれば、傷寒時行、熱毒瘡に主效があつて特に良し。即ち今の豌豆瘡である』(藏器)『燒灰に他藥を合せて肺風毒を治す』(宗奭)『乳癰を治す』(時珍)

【附方】 舊一、新四。『乳癰の初發』腫痛し、結硬し、破れんとするには、一服で瘥える。北來の眞樺皮を燒いて性を存して研り、無灰酒で方寸匕を溫服して臥す。覺めたときは瘥えてゐる。(沈存中靈苑方)『乳癰腐爛』靴の中に年久しくあつた樺皮を灰に燒き、酒で一錢を服す。一日一服(唐瑤經驗)『肺風毒瘡』全身に癘の如き瘡疥、及び癮疹瘙痒、面上の風刺、婦人の粉刺には、いづれも樺皮散を用ゐて主とする。樺皮を燒灰して四兩、枳殼を穰を去つて燒いて四兩、荊芥穗二兩、炙甘草半兩を各末にし、杏仁を水煮して皮、尖を去つて二兩を泥に研爛して研り勻ぜ、毎服二錢を食後に溫酒で調へて服す。瘡疥の甚しきには日に三服する(和劑方)『小便の熱して

短きもの】樺皮の濃煮汁を飲む。(集簡方)【染めて鬚髪を黒くする】櫧皮一斤で側柏一枝を包み、烟に焼いて香油盌内を熏じ、烟に成つたものを手で鬚鬢上に抹すれば黒くなる。(多能鄙事)

脂　主治【これを焼けば鬼邪を辟ける】(藏器)

𣗥木（拾遺）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

釋名　集解　藏器曰く、林澤、山谷に生ずる。木の文が側戻なものだ。故に𣗥木といふ。

氣味【甘し、溫にして毒なし】主治【風血羸瘦。腰脚を補し、陽道を益す。酒に浸して飲むが宜し】(藏器)。

櫚木（拾遺）

和名　くはりん
學名　Pterocarpus sp.
科名　まめ科（荳科）

【集解】藏器曰く、安南、及び南海に產する。床、几を作るに用ゐる。紫檀に似て色が赤い、性は堅好である。

時珍曰く、木の性は堅く、紫紅色である。また花紋のものもあり、花櫚木といふ。器皿、扇骨の諸物に作れる。俗に花梨と書くは誤である。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】

【主治】【產後の惡露の衝心、癥瘕結氣、赤白漏下。いづれも剉み煎じて服す】(李珣)【血塊を破る。冷嗽には煮汁を熱服する。枕とすれば人をして頭痛せしめる。性の熱なるが故である】(藏器)

〔花櫚木〕

椶櫚（宋嘉祐）

和名　たうしゆろ
學名　Trachycarpus excelsa, Wendl. var. Fortunei, Makino.
科名　しゆろ科（椶櫚科）

釋名　**栟櫚**　時珍曰く、皮中の毛縷が馬の騣鬣のやうだ。故に椶と名ける。俗に椶鬣と書く。鬣の音は閭(ロ)であつて、鬣(れふ)である。栟の音は并(ヘイ)である。

集解　頌曰く、椶櫚は嶺南、西川に產し、今は江南にもある　木は高さ一二丈、枝條がなく、葉は大きくして圓く、車輪ほどあつて樹杪に萃(あつま)り、その下に皮があつて重重に裹み、皮每に一匝(さう)して一節をなす。二旬にして一回皮を採ると、次ぎ次ぎにまた上に生ずる。六七月に黃白の花を生じ、八九月に實を結ぶ。實は房をなし、魚子のやうで黑色である。九月、十月にその皮を採つて用ゐる。山海經に『石翠の山、その木に椶多し』とあるがこの物である。

藏器曰く、その皮で繩を作つて水に入れると、千歲爛れない。昔、ある人が塚を發掘すると一本の索が出た。それは已に根が生えてゐたといふ。嶺南には、桄榔(わうらう)、檳榔、椰子、冬葉、虎散、多羅などいふ木があつて、いづれも栟櫚と相類したものだ。

時珍曰く、椶櫚は川、廣に甚だ多く、今は江南でも種(う)ゑる。最も長じ難いもので、初めは白及の葉のやうな葉を生じ、高さ二三尺になると木端に扇ほどの大いさの葉

が數枚出て、上に聳えて四散し岐裂する。その莖には三稜あり、四時凋まない。その幹は正直で枝がなく、葉に近い處に皮があつて裹み、一層長ずる毎に一節となる。幹身は赤黑で、全部が筋絡である。鐘杵に作るに宜く、また旋つて器物にも作れる、その皮には絲毛があつて織つたやうに錯縱してゐる。それを剝ぎ取つて縷解し、衣、帽、褥、椅などの物に織れる。大いに一般の利用となるものだ。毎年必ず兩三回剝ぐもので、さなくば樹が枯死し、或は成長しない。三月、木端の莖中から數箇の黃苞が出て、苞中に細子

〔椶櫚〕

があつて列をなす。これは花の孕であつて、狀態は魚腹の孕子のやうだ。これを椶魚といひ、また椶筍ともいふ。次第に成長して苞を出ると、黃白色の花穗に成つて實を結ぶ。實は纍纍とした豆ほどの大いさのもので、生では黃に、熟すれば黑くなり、甚だ堅く實する。或は、南方にはこの木に兩種あつて、一種は皮絲があつて繩

に作れる。一種は小さくして絲がなく、ただ葉を箒木に作れるといふ。鄭樵の通志に、これを王蔧としたのは誤である。王蔧とは落帚の名で、即ち地膚子のことだ。別に蒲葵といふがあり、葉はこの物と相似たもので、柔く薄く、扇、笠に作り得る。許愼の説文に、それを椶櫚としたが、やはり誤である。

筍 及び **子花** 〔氣味〕【苦く澁し、平にして毒なし】藏器曰く、小毒あり、人の喉を戟す。輕輕しくは服されない。珣曰く、溫にして大毒あり。食ふに堪へない。時珍曰く、椶魚は、いづれも毒あり、食つてはならぬといつてあるが、廣、蜀地方では、蜜で煮、醋に浸して佛に供し、遠方への贈物にするので、蘇東坡にも椶筍を食ふの詩がある。それはその毒を制し去るのだ。

〔主治〕【腸を澀し、瀉痢、腸風、崩中帶下を止め、及び血を養ふ】（藏器）

〔附方〕新一。【大腸下血】椶筍を煮熟して切片し、晒乾して末にし、蜜湯、或は酒で一二錢を服す。（集簡方）

皮 〔氣味〕子に同じ。〔主治〕【鼻衄、吐血を止め、癥を破り、腸風、赤白痢、崩中帶下を治す。燒いて性を存して用ゐる】（大明）【金瘡、疥癬に主效があり、

肌を生じ、血を止める】(李珣)

【發明】宗奭曰く、椶皮を黒く焼いて婦人の血露、及び吐血を治し、他の薬を佐として須ゐる。

時珍曰く、椶灰は性澀る。失血が多く去つて、淤滞が已に盡きたものの場合にこれを用ゐるは適切な方法であつて、所謂、澀は脱を去るべしのそれである。亂髪と共に用ゐるが更に良し。年久しき敗椶を薬に入れるが尤も妙である。

【附方】新六。【鼻血の止まぬもの】椶櫚灰を左右に隨つて吹く。(黎居士方)【血崩の止まぬもの】椶櫚皮を焼いて性を存し、空心に三錢を淡酒で服す。ある方では、煆いた白礬等分を加へる。(婦人良方)【血淋の止まぬもの】椶櫚皮を半焼き半炒つて末にし、二錢づつを服す。甚だ效がある。(衛生家寶方)【下血の止まぬもの】椶櫚皮半斤、栝樓一箇を灰に焼き、二錢づつを米飲で調へて服す。(百一選方)【水穀痢下】椶櫚皮を焼いて研り、水で方寸匕を服す。(近效方)【小便不通】椶皮毛を焼いて性を存し、水、酒で二錢を服すれば通利する。累に試みて甚だ效驗を得た。(攝生方)

橉木（橉は良刃の切（リン）である）（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】 樳木　音は潭（タン）である。

【集解】 藏器曰く、橉木は江南の深山に生ずる。大樹であつて、樹に數種あるが、葉が厚く大きく、花の白いものを取つて藥に入れる。白餘灰は染色家の材料として用ゐる。

時珍曰く、この木は最も硬い。梓人（しんじん）が橉筋木（りんきんぼく）といふはそのことである。木は絳色の染料に用ゐ、葉はまた酒に釀し得る。

木灰【氣味】【甘し、溫にして小毒あり】【主治】【卒の心腹癥瘕、堅滿痃癖には、淋汁八升で米一斗を釀し、酒の熟するを待つて半合づつを溫飮し、一二盞まで漸增すれば癒える】（藏器）記載は肘後にある。

柯樹（拾遺）

和名　しひのき
學名　Shiia Sieboldii, Makino.
科名　ぶなのき科（山毛欅科）

【釋名】【集解】**木奴**　珣曰く、按ずるに、廣志に『廣南の山谷に生ずる。(一)波斯家ではこの木を用ゐて船舫に作る』とあるものがそれである。

白皮　【氣味】【辛し、平にして小毒あり】【主治】【大腹水病には、皮を採つて汁に煮、滓を去つて丸になるまでに煎じて梧子大の丸にし、早朝空心に三丸を飲で服し、須臾にしてまた一丸を服す。氣、水が竝に小便に從つて出る】(藏器)

烏臼木（唐本草）

和名　なんきんはぜ
學名　Sapium sebiferum, Roxb.
科名　たかとうだい科（大戟科）

【釋名】**鵶臼**　時珍曰く、烏臼は、烏が喜んでその子を食ふ。それに因んで名けたものだ。陸龜蒙の詩に『行いて歇ひ毎に鵶臼の影に依り、挑ること頻にして時に鼠姑の心を見る』とあるそのものであつて、鼠姑とは牡丹のことである。或は、

(一) 波斯家トハ外國ノ貿易商ヲイフ。

その木は老いると根下が黑爛して臼に成る、故にこの名が生じたのだともいふ。鄭樵の通志に『烏臼、卽ち柜柳』といつたのは誤である。

【集解】恭曰く、山南の平澤に生ずる。樹は高さ數仞、葉は梨、杏に似て、五月に黃白色の細花を開き、子は黑色である。

藏器曰く、葉は皂を染め得る。子は油を壓取して燈火用になり、極めて明である。

宗奭曰く、葉は小杏葉のやうだが、ただ微し薄くして綠色がやや淡い。子は八九月に熟し、初は青く、後に黑くなり、三瓣に分れる。

〔烏臼木〕

時珍曰く、南方の平澤に甚だ多く、現に江西地方では、種植して子を採り、蒸煮して脂を取り、それを燭に澆ぎ、商品として賣出す。子上の皮の脂は仁に勝る。

根白皮〔氣味〕【苦し、微溫にして毒あり】大明曰く、性は涼である。慢火で炙き乾して黃にしてから用ゐる。〔主治〕【暴水癥結、積聚】(唐本)【頭風を療じ、大小便を通ずる】(大明)【蛇毒を解す】(震亨)

〔發明〕時珍曰く、烏臼根は性沈にして降る。陰中の陰であつて、水を利し、腸を通ずるの功は大戟に勝る。一野人は腫滿を病み、氣壯であつたが、この根を搗らせて搗き爛らし、水で煎じて一盌を服ませると、續けざまに數行通じがあつて、病は平癒した。氣虛の人は用ゐてはならぬ。この方は太平聖惠方に記載があつて、その功神聖なものだが、但し多く服してはならぬといつてある。誠にその通りだ。

〔附方〕舊一、新九。【小便不通】烏臼根皮を湯に煎じて飮む。(肘後方)【大便不通】烏臼木の根を方長一寸を劈破し、水で煎じて半盞を服す。立ろに通ずる。多喫する用なし。その功神聖なもので、兼て能く水を取る。(斗門方)【二便關格】二三日すれば人を殺す。烏臼の東南根の白皮を乾して末にし、熱水で二錢を服す。先づ芒硝二兩を湯に煎じて服し、吐を取る 甚だ效がある。(肘後方)【水氣虛腫】小便澀するには、烏臼皮、檳榔、木通一兩を末にし、二錢づつを米飮で服す。(聖惠方)【脚氣

濕瘡】極めて痒く、蟲あるには、烏臼根を末にして傅ける。少時して涎を出して良し。(摘玄方)【尸注中惡】心腹痛刺し、沈默し、錯亂するには、烏臼根皮の濃煎汁一合で硃砂末一錢を調へて服す。肘後方では硃砂がない。(永類方)【暗疔で昏狂するもの】瘡頭の凸紅なるには、桕樹根の行路を經たもの二尺ばかりを取り、皮を去つて搗き爛らし、井華水で一盞を調へて服し、瀉するを待ち、三角銀杏仁を油に浸して搗いて患處を奄ふ。(聖濟總錄)【嬰兒の胎瘡】頭一面に出たるものには、水邊の烏臼樹根を晒し研り、雄黃末少量を入れ、生油で調へて搽る。(經驗良方)【鼠莽、砒毒】烏桕根半兩を水に擂つて服す。(醫方大成)【鹽齁痰喘】桕樹皮を粗を去つて汁に搗き、飛麪を和し餅に作つて烙熱し、早朝兒に與へて三四箇を喫はせ、鹽涎を吐下するを待つ。それで佳し。行かぬときは熱茶で催す。(摘玄方)

葉　〔氣味〕根に同じ。〔主治〕【牛、馬、六畜の肉を食つて疔腫を生じ、死せんとするには、搗いて自然汁一二盌を頓服する。大いに毒を利し去つて癒える。なほ利せぬときは再服する。冬は根を用ゐる】(時珍)

桕油　〔氣味〕【甘し、涼にして毒なし】〔主治〕【頭に塗れば白を變じて黑

くする。一合を服すれば人をして下利せしめ、陰下の水氣を去る。子を炒つて湯にするもよし】(藏器)【一切の腫毒、瘡疥に塗る】(時珍)

【附方】 新二。【膿泡疥瘡】桕油二兩、水銀二錢、樟腦五錢を共に研り、頻りに唾津を入れ、星が見えなくなつたとき止め、温湯で瘡を洗淨して藥を塡入する。(唐瑤經驗方)【小兒の蟲瘡】舊絹で衣を作り、桕油を化して塗り、それを兒に著せる。翌日は蟲がみな油上に出る。取下して爁くと聲があるものがそれである。別に油衣を與へて著せ、蟲の盡きるを度とする。(瀕湖集簡方)

巴豆 (本經下品)

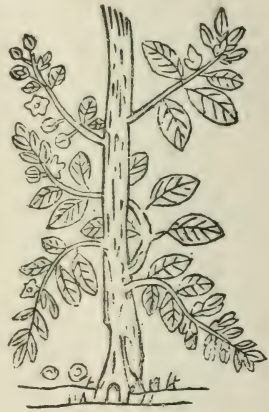
和名 はづ
學名 Croton Tiglinum, L.
科名 たかとうだい科(大戟科)

【釋名】 **巴菽**(本經) **剛子**(炮炙) **老陽子** 時珍曰く、この物は巴蜀に産して形が菽豆のやうだ。故に名となつたのである。宋本草に、一名巴椒とあるが、これは菽の字の傳訛である。雷斅炮炙論には、また分けて、緊小にして色の黄なるものを巴とし、三稜あつて色の黒きものを豆とし、小さくして兩頭の尖つたものを剛子

とし『巴と豆とは用ゐられるが、剛子は用ゐられない。人を殺すものだ』といつたが、殊だ事實と違つてゐる。蓋し緊小なるものは雌であり、稜があるもの、及び兩頭の尖つたものは雄であつて、雄なるものは峻利であり、雌なるものはやや緩である。使用方法さへ適當であれば、いづれも功力があるのだ。適當を失すれば參、朮でもやはり能く害となる。況や巴豆は申すまでもない。

集解　別錄に曰く、巴豆は巴郡の川谷に生ずる。八月に採つて陰乾する。用ゐるには心、皮を去る。

頌曰く、今は嘉州、眉州、戎州にいづれもある。木は高さ一二丈、葉は櫻桃のやうで厚く大きく、初生は靑色で、後に漸次に黃赤になり、十二月になると葉が次第に凋み、二月にまた次第に生え、四月には舊葉が落ち盡きて新葉が齊しく生え、すると花が發いて微黃色で穗に成り、五六月に實を結んで房をなし、生では靑く、八月になつて熟すると黃になり、白豆蔻に類し、次第に自ら落ちる。それを採收するのである。一房に二瓣あつて、一瓣に一子、或は三子あり、子には殼がある。用ゐるには殼を去る。戎州に產するものは殼の表面に縱文があつて、隱然として絲のや

うに一筋、乃至三筋起つてゐる。彼の地方人はこれを金線巴豆と呼び、最も上等なものとしてある。他の地にはやはり稀なものだ。

時珍曰く、巴豆の房は大風子の殼に似て脆く薄い。子、及び仁はみな海松子に似たものだ。白豆蔻に似てゐるといふは殊だ類してゐない。

〔巴　　豆〕

修治　弘景曰く、巴豆は最も能く人を瀉す。新なるものが佳し。これを用ゐるには皮、心を去り、熬つて黄黒ならしめ、擣いて膏のやうにして、それを丸、散に和す。

斅曰く、凡そ巴と豆とを用ゐるには、敲き碎いて麻油、并に酒等で煮乾し、研つて膏にして用ゐる。毎一兩に用ゐる油、酒は各七合である。

大明曰く、凡そ丸、散に入れるに炒つて用ゐるは、心、膜を去り、水を換へて五

回煮て、各一沸させたものに如かぬ。

時珍曰く、巴豆は、仁を用ゐることがあり、殼を用ゐることがあり、油を用ゐることがあり、生で用ゐることも、麩で炒ることも、醋で煮ることも、燒いて性を存することもある。研り爛らして紙に包み、油を壓し去つて用ゐることもあり、それを巴豆霜といふ。

【氣味】【辛し、溫にして毒あり】別錄に曰く、生は溫、熟は寒にして大毒あり。普曰く、神農、岐伯、桐君は辛し、毒ありといひ、黃帝は甘し、毒ありといひ、李當之は熱なりといふ。元素曰く、性熱にして味苦し。氣薄く、味厚く、體重くして沈であり、降であり、陰である。杲曰く、性は熱にして味辛し、大毒あり。浮であつて、陽中の陽である。

時珍曰く、巴豆は、氣熱にして味辛し。生は猛であり、熟は緩である。能く吐し、能く下し、能く止め、能く行る。これは升によく降によき藥である。別錄に、これを熟すれば寒なりといひ、張氏は、これを降といひ、李氏は、これを浮といつてあるが、いづれも一偏に泥んだものだ。蓋しこの物は、膜を去らねば胃を傷め、心を

去らねば嘔を作す。沈香水で浸せば能く升り、能く降る。大黄と共に用ゐれば人を瀉することが反つて緩である。それはその性の相畏の關係である。王充の論衡に『萬物の太陽の火氣に合して生ずるものはみな毒がある。故に巴豆は辛、熱にして有毒だ』とある。

之才曰く、芫花が使となる。大黄、黄連、蘆筍、菰筍、藜蘆、醬豉、冷水を畏れ、火を得れば良し。蘘草を惡み、牽牛と相反す。その毒に中つたときは、冷水、黄連汁、大豆汁を用ゐて解す。

【主治】『傷寒、溫瘧の寒熱。癥瘕結聚、堅積、留飮、痰癖、大腹を破る。五臟、六腑を蕩練し、閉塞を開通し、水穀道を利し、惡肉を去り、鬼毒、蠱疰、邪物を除き、蟲、魚を殺す』(本經)『女子の月閉を療じ、胎を爛らす。金瘡、膿血。丈夫を利せず。斑蝥、蛇虺の毒を殺す。練つて餌するがよし。血脈を益し、人をして色を好からしめる。變化し、鬼神と通ずる』(別錄)『十種の水腫、痿痺を治し、胎を落す』(藥性)『一切の病を通宣し、壅滯を泄し、風を除き、勞を補し、脾を健にし、胃を開き、痰を消し、血を破り、膿を排し、腫毒を消し、腹臟の蟲を殺し、惡瘡、息肉、

及び疥癩、丁腫を治す』(日華)【氣を導き、積を消し、臟腑の停寒を去り、生、冷、硬の物の所傷を治す』(元素)【瀉痢、驚癇、心腹痛、疝氣、風喎、耳聾、喉痺、牙痛を治し、關竅を通利する』(時珍)

【發　明】　元素曰く、巴豆なるものは斬關、奪門の將である。輕々しく用ゐてはならない。

震亨曰く、巴豆は胃中の寒積を去る。寒積なきものは用ゐてはならぬ。

元素曰く、世に巴豆の熱藥を以て酒病、膈氣を治するは、その辛、熱にして能く腸、胃の鬱結を開くを以てであるが、但し、鬱結をば開くけれども、血液を亡ひ、その眞陰を損ずる。

從正曰く、傷寒、風濕、小兒の瘡痘、婦人の產後にこれを用ゐて膈を下しては、死なぬにしてもやはり危い。如何なる次第か一般に大黃をば畏れるが巴豆をば畏れないが、それはその性が熱であつて劑の小なるものだからだ。しかし氣付かずにこそあれ、實は蠟で匱すればやはり能く下し、後に人をして津液を枯竭せしめ、胸熱し、口燥し、天眞を耗却し、留毒が去らずして他病を轉生せしめるものである。故

に下薬とし、官憲では禁止してある。

藏器曰く、巴豆は、癥癖、痃氣、痞滿、積聚、冷氣、血塊、宿食不消、痰飲吐水に主效がある。青黑にして大なるものを取り、毎日空腹に一箇を服す。殼をば去るが、白膜を破つてはならぬ。破れば兩片となるものだ。幷に四邊を損缺させてはならぬ。これを呑んだときは飲を以て壓し下す。少頃して腹内が火のやうに熱して惡物を利出する。利するけれども虚しない。もし久しく服するならばやはり人を利せぬ。白膜の破れたものは用ゐられぬ。

好古曰く、急治の場合に、水穀道路の劑とするには、皮、心、膜、油を去つて生で用ゐる。緩治の場合に、堅を消し、積を磨するの劑とするには、炒つて烟を去つて紫黑ならしめて用ゐる。以て腸を通ずべく、以て瀉を止め得るものである。これは世に知られないところであつて、張仲景の百病、客忤を治する備急丸に用ゐてある。

時珍曰く、巴豆は、峻用すれば亂を戡め、病を刧すの功があり、微用すればまた撫綏し、中を調へるの妙があり、譬へば、蕭曹、絳灌の勇猛なる武夫としての用があり、相としてはまた能く太平を輔治するやうなものである。王海藏が、これを以

て腸を通ずべく、以て瀉を止むべしといつたのは、これ千古の祕を發いたものである。一老婦は、年六十で飲で溏泄を病み、已に五年に及んだ。肉食、油物、生冷を犯して作つたものである。あらゆる調脾、升提、止澀の諸藥を服したが、腹に入ると泄し、反つて甚しくなるのであつた。余が招かれて往つて診ると、脈は沈にして滑してゐる。これは脾、胃の久傷で、冷積が凝滯して起つたものである。王太僕の所謂『大寒内に凝り、久利溏泄し、癒えて後た發る。歲年を綿に歷たるものには、法として當に熱を以てこれを下すべきもので、寒去つて利止む』のそのものである。そこで蠟匱巴豆の丸藥五十丸を與へて服ませると、二日にして大便通せず、また利せず、その泄は遂に癒えた。それ以來、每に用ゐて泄痢、積滯の諸病を治するに、みな瀉せずして病は癒えた。それが百人に近い。妙は配合が宜を得て病と相對するにあるのだ。苟も用うべからざるところに用ゐるならば、則ち『輕しく用ゐて陰を損ずる』の戒を犯すのである。

【正誤】弘景曰く、道家でも鍊餌の法があつて、これを服し『神仙となるべし』といつてゐる。人は一箇を呑んで死ぬが、鼠はこれを食ふこと三年すれば重さ三十

斤になる。物の性にはかやうに相耐へるものがある。

時珍曰く、漢の時の方士の言に『巴豆を錬餌すれば人をして色を好からしめ、神仙となる』とあるのを、名醫別錄で本草に採入した。張華の博物志に『鼠は巴豆を食つて重さ三十斤になる』といつてある。一は謬説であり、一は誣妄である。陶氏がそれを實際の說と信じたのは誤である。又、人は一箇を吞んで死ぬといふも過情に近い。此にいづれも正して置く。

附方　舊十三、新二十六。【一切の積滯】巴豆一兩、蛤粉二兩、黃蘗三兩を末にし、水で綠豆大の丸にし、水で五丸づつを服す。（醫學切問）【寒澼宿食】消化せず、大便閉塞するには、巴豆仁一升を清酒五升で三晝夜煮て研り熟し、酒に合せて微火で丸になるまでに煎じ、豌豆大の丸にし、一丸づつを水で服す。吐せんと欲するものは二丸。（千金方）【水蠱大腹】動搖すると水聲があり、皮膚の色の黑さには、巴豆九十箇を心、皮を去つて黃に熬り、杏仁六十箇を皮、尖を去つて黃に熬り、擣いて小豆大の丸にし、水で一丸を服し、利するを度とする。酒を飲んではならぬ。（張文仲備急方）【飛尸鬼擊】中惡し、心痛し、腹脹し、大便不通なるには、走馬湯——巴豆二

箇を皮、心を去つて黃に熬り、杏仁二箇とを綿で包んで推き碎き、熱湯一合で捻つて白汁を取つて服す。下して癒えるものである。老、小を量つて用ゐる。(外臺)【食瘧、積瘧】巴豆を皮、心を去つて二錢、皂莢を皮、子を去つて六錢を擣いて綠豆大の丸にし、一服一丸を冷湯で服す。(肘後方)【積滯泄痢】腹痛し、裏急するには、杏仁を皮、尖を去り、巴豆を皮、心を去り、各四十九箇を共に燒いて性を存して泥に研り、蠟を溶して和して綠豆大の丸にし、每服二三丸を大黃の煎湯で服し、一日置きに一服する。一には百草霜三錢を加へる。(劉守眞宣明方)【氣痢赤白】巴豆一兩を皮、心を去つて熬つて研り、熟豬肝で綠豆大の丸にし、空心に三四丸を米飲で服す。人を量つて用ゐる。これは鄭獬侍御所傳の方である。(經驗方)【瀉血の止まぬもの】巴豆一箇を皮を去り、雞子に一孔を開けてそれを入れ、紙で封じて煨熟し、豆を去つて食ふ。それで病は止まる。虛せる人は二回に分服する。決して效がある。(普濟方)【小兒の下痢】赤、白。巴豆を煨熟し油を去つて一錢、百草霜二錢を研末し、飛羅麪を煮た糊で黍米大の丸にし、人を量つて用ゐ、赤には甘草湯で、白には米湯で、赤白には薑湯で服す。(全幼心鑑)【夏期の水瀉】止まぬには、巴豆一粒を針頭で燒いて性

を存し、蠟を化して和して一丸に作り、倒流水で服す。(危氏得效方)【小兒の吐瀉】巴豆一箇を針に穿して燈上で燒き、黄蠟を豆一粒ほど燈上で燒いて水中に滴し入れ。共に杵いて黍米大の丸にし、五七丸づつを蓮子燈心湯で服す。(同上)【伏暑霍亂】傷冷で吐利し、煩渴する。水浸丹——巴豆二十五箇を皮、心、及び油を去り、黄丹を炒り研つて一兩二錢半を用ゐ、化した黄蠟で和して綠豆大の丸にし、五七丸づつを水に浸し、少頃して別の新汲水で呑下す。(和劑方)【乾霍亂病】心腹脹痛し、吐せず、利せず、死せんとするには、巴豆一箇を皮、心を去り、熱水で研つて服す。吐、利を得て定まる。【二便不通】巴豆を油のあるまゝ、黄連と各半兩を擣いて餅子にし、先づ葱鹽汁を臍内に滴して置いて餅を上に載せ、二七壯灸する。利を取るを度とする。(楊氏家藏)【寒痰氣喘】靑橘皮一片を展開して剛子一箇を入れ、麻で紮定し、火上で燒いて性を存して研末し、薑汁に酒を和したもので呷服する。天台の李翰林はこれを用ゐて莫秀才を治し、口に入れると止んだ。神方である。(張杲醫說)【風濕痰病】人を密室中に坐らせ、左に滾水一盆を、右に炭火一盆を備へ、前に一脚の卓子を置いて一冊の書物を載せ、先づ油のない新巴豆四十九粒を研つて泥のやうにし、

紙で壓して油を去り、分けて三箇の餅にし、もし病が左にあるときは、病人をして右手を書物の上に仰いで置かせ、藥を掌心に置き、藥の上に盌を置き、その盌に熱水を傾け入れ、水が涼めたときは換へる。良久して汗が出て立ろに神效が現れる。病が右に在るには左の掌心に置く。あるひは、左右に隨つて置くともいふ。（保壽堂經驗方）【陰毒傷寒】心が結し、按せば極めて痛み、大小便閉し、ただ出る氣のやや暖なるには、急に巴豆十粒を取つて研り、麪一錢を入れて餅にし、それを臍内に置き小艾で炷して灸を五壯する。氣が達すれば通ずる。これは大師陳北山の方である。（仁齋直指方）【藥毒の中りたるを解す】巴豆を皮を去つて油を去らず、馬牙硝と等分を研つて丸にし、冷水で一彈丸を服す。（廣利方）【喉痺で死に垂たるもの】ただ餘氣あるものには、巴豆を皮を去り、線で内を穿ち、喉中に入れて牽き出す。直ちに甦る。（千金）【纏喉風痺】巴豆二粒を紙で卷いて角にし、兩頭を切斷し、針で孔を穿つて喉中に入れる。氣が透れば通ずる。（勝金方）【傷寒舌出】巴豆一粒を油を去つて霜を取り、紙で撚り卷いて鼻中に納れる。舌が上に收まる。（普濟方）【舌上の出血】箸ほどの孔あるには、巴豆一箇、亂髮を雞子ほどを燒いて研り、酒で服す。（聖

惠）【中風口喎】巴豆七箇を皮を去つて研り、左喎には右手の心に塗り、右喎には左手の心に塗り、かくて暖水一盞を藥の上に置く。須臾にして止んだならば洗へ去る。（聖惠方）【小兒の口瘡】乳を吮ひ得ぬには、剛子一箇を油のあるまま研り、黃丹少量を入れ。顖上の髮を剃り去つて貼る。四邊に粟泡が起つたときは溫水で洗ひさり、かくて菖蒲湯で再び洗ふ。それで瘡と成らず。神效がある。（瑞竹堂方）【風蟲牙痛】聖惠では、巴豆一粒を黃に煨いて殼を去り、蒜一瓣を一頭を切つて中心を剜り去り、中に巴豆を入れて蓋定して綿で裹み、左右に隨つて耳中を塞ぐ。〇經驗方では、巴豆一粒を研り、綿で裹んで咬む。〇又ある方では、針で巴豆を刺して燈上で燒き、烟を出さしめて痛處を熏ずる。三五回で神效がある。【天絲の咽に入りたるとき】凡て地に露した飮食物には飛絲が上に入つてゐるものだ。それを食へば咽喉に瘡を生ずる。急に白礬、巴豆を灰に燒いて吹き入れば癒える（瑣碎錄）【耳の卒聾閉】巴豆一粒を紙に裹み、針で孔を刺して氣を通じ、それで塞いで效を取る。（經驗）【風瘙隱疹】心下の迷悶するには、巴豆五十粒を皮を去り、水七升で二升に煮取り、帛に染めて拭ふ。手に隨つて癒える。（千金翼）【疥瘡搔痒】巴豆十粒を黃に炮いて皮、

心を去り、右に順手に研つて酥少量、膩粉少量を入れ、抓破して點ける。日、幷に外腎上に近づけてはならぬ。もし目を熏じ、腎に著いたときは黄丹を塗る。甚だ妙である。（千金方）【荷錢癬瘡】巴豆仁三箇を油のあるまま泥に杵き、生絹で包んで擦る。一日一二回、三日で好く痊える。（碑以正經驗方）【一切の惡瘡】豆豆三十粒を麻油で黑く煎じ、豆を去り、油で硫黄、輕粉末を調へ、頻りに塗つて效を取る。（普濟）【癰疽惡肉】烏金膏——一切の瘡毒を解し、及び瘀肉を腐化し、最も能く陳きを推して新きを致す。巴豆仁を炒り焦して膏に研り、痛處に點ければ毒を解す。瘀肉に塗れば自ら化ける。乳香少量を加へるもよし。もし毒が深くして收斂不能なるには、撚にして紝るが宜し。痛ませぬやうにする。（外科精義）【疣、痣、黑子】巴豆一錢を石灰で炒り、人言一錢、糯米五分を炒り、研つて點ける。（怪症方）【箭鏃の肉に入りたるとき】拔出せぬには、新巴豆仁を略ぼ熬り、蜣螂と共に研つて塗る。須臾にして痛が定まり、微し痒いがそれを忍び、極めて痒くして忍び難くなるを待ち、撼拔し動して取り出し、速に生肌膏を傅ければ痊える。また瘡腫をも治す。夏侯鄲は潤州にゐたときこの方を得て、後に洪州へ往き、旅舍の主人の妻が背瘡を病み、呻吟し

て已まなかつたとき、鄴がこの方を試みると直ちに痛が止んだのであつた。(經驗方)
【小兒の痰喘】巴豆一粒を杵き爛らし、綿で裹んで鼻を塞ぐ。男は左、女は右。痰は自ら下る。(龔氏醫鑑)【牛疫動頭】巴豆二粒を研り、生麻油三兩、漿水半升で和して灌ぐ。(賈相公牛經)

油 【主治】【中風痰厥、氣厥、中惡、喉痺、一切の急病、咽喉不通、牙關緊閉には、巴豆を研り爛らし、綿紙で包んで油を壓取し、撚にして燈に點じ、吹き滅して鼻中を熏ずる。或は熱烟を喉中に刺し入れる。即時に涎、或は惡血を出して甦る。又、舌上から故なくして出血するには、舌の上下をそれで熏ずれば自ら止む】(時珍)

殼 【主治】【積滯を消し、瀉痢を治す】(時珍)

【附方】新二。【一切の瀉痢】脈の浮、洪なるものは、多くの日數を要して已え難い。脈の微、小なるものはこれを服すれば立ろに止む。勝金膏と名ける。巴豆皮、楮葉を共に燒いて性を存して研り、化した蠟で綠豆大の丸にし、五丸づつを甘草湯で服す。(劉河開宣明方)【頻痢の脫肛】黑色で堅硬なるには、巴豆殼を灰に燒き、芭蕉の自然汁で煮て、朴硝少量を入れて洗ひ軟げ、眞麻油で點火して上に滴し、枯礬、龍

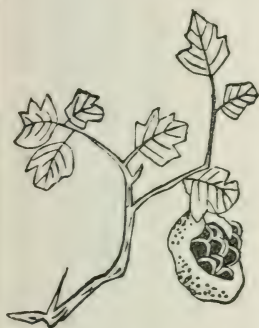
骨少量で末にして肛頭上に摻り、芭蕉葉で托入する。(危氏得效方)

樹根　主治　【癧疽發背、腦疽、鬢疽の大患には、掘り取つて洗ひ、擣いて患處に敷き、頭を留める。言ふべからざる妙がある。根を收取して陰乾し、時に臨んで水で搗くもよし】(時珍)　記載は楊誠經驗方にある。

大風子（補遺）

和名　たいふうし又かつたいぐすり
學名　Hydnocarpus anthelmintica, Pierre.
科名　べにのき科（紅木科）

釋名　時珍曰く、能く大風疾を治するところから名けたものだ。

〔大風子〕

集解　時珍曰く、大風子は、今は海南の諸番國にいづれもある。按ずるに、周達觀の眞臘記に『大風といふは大樹の子であつて、狀態は椰子のやうで圓く、その中に大いさ雷丸子ほどの數十箇の核があり、中に白色の仁がある。久しくすると黃にな

つて油があり、藥に入れるに堪へない』とある。

仁【修治】時珍曰く、大風子油を取る法。子三斤を用ゐ、殼、及び黄油を去つたものを研つて極めて爛らし、瓷器に盛つて口を封じ、滾湯中に入れ鍋を蓋ふて密封し、氣の透らぬやうにし、文武火で黑色にして膏のやうになるまで煎じる。大風油と名け、それで藥を和し得る。

【氣味】【辛し、熱にして毒あり】【主治】【風癬、疥癩、楊梅諸瘡。毒を攻め、蟲を殺す】(時珍)

【發明】震亨曰く、藪醫者が大風病を治するに、佐として大風油を用ゐるが、殊だ無知なことだ。この物は性熱であつて、痰を燥するの功はあるが血を傷るものだ。病が將に癒えやうとする頃には先づ失明するものである。

時珍曰く、大風油は瘡を治し、蟲を殺し毒を刧すの功がある。蓋し多く服してはならない。外用として塗つてのその功は沒すべからざるものだ。

【附方】新五。【大風諸癩】大風子油一兩、苦參末三兩を、少し酒を入れた糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に溫酒で服し、同時に苦參湯で洗ふ。(普濟方)【大風

瘡裂』大風子を燒いて性を存し、麻油、輕粉を和して研つて塗る。同時に殼の煎湯で洗ふ。(嶺南衞生方)『楊梅惡瘡』方は上に同じ。『風刺赤鼻』大風子仁、木鼈子仁、輕粉、硫黃を末にし、毎夜唾で調へて塗る。『手背の皴裂』大風子を泥に擣いて塗る。(壽域)

海紅豆（海藥）

和名 なんばんあづき
學名 Adenanthera pavonina, L.
科名 まめ科（荳科）

〔海紅豆〕

【釋名】【集解】珣曰く、按ずるに、徐表の南州記に『南海の人家の園圃中に生ずる。大樹であつて、圓い葉を生じ、莢がある』とある。近頃は蜀中でも種ゑてやはり成つてゐる。

時珍曰く、樹は高さ二三丈、葉は梨の葉に似て圓い。按ずるに、宋祁の益部方物圖に『紅豆は、葉は冬青のやうで圓く

して澤があり、春白色の花を開き、莢を枝間に結ぶ。子は累累珠を綴り、大紅豆のやうで扁く、皮が紅く肉が白い。似てゐるからの名である。蜀地方で果飣にする。

豆 【氣味】『微寒にして小毒あり』【主治】【一般の黒皮、䵟䵺、花癬、頭面の遊風、面藥、及び澡豆に入れるが宜し】(李珣)

相思子（綱目）

和名 たうあづき
學名 Abrus precatorius, L.
科名 まめ科（荳科）

【釋名】紅豆 時珍曰く、按ずるに、古今詩話に『相思子は圓くして紅い。故老の話に、昔、ある人が邊地で死んだので、その妻がそれを思つて樹下に哭して死んだ。それに因つて名としたのだといふ。これは韓憑の家にあつた相思樹とは同じくない。彼れは連理の梓木だ』とある。或は、海紅豆の類だともいふが、確實か否かはよく判らない。

【集解】時珍曰く、相思子は嶺南に生ずる。樹は高さ一丈餘で色白く、その葉は槐に、その花は皂莢に、その莢は扁豆に似てゐる。その子は大いさ小豆ほどで、

半截は紅色、半截は黒色である。彼の地方ではそれを首飾に嵌める。段公路の北戸錄に『蔓生のものがある。子を用ゐて龍腦香を貯へるに宜く、香を耗らさない』とある。

〔相思子〕

氣味　【苦し、平にして小毒あり。人を吐かしめる】　主治　【九竅を通じ、心腹の邪氣を去り、熱悶、頭痛、風痰、瘴瘧を止る。腹臟、及び皮膚内の一切の蟲を殺す。蠱毒を除くには、十四箇を取り、研つて服す。直ちに吐出するものである』（時珍）

附方　新三。【瘴瘧寒熱】相思子十四箇を水に研つて服す。吐を取つて立ろに瘥える。（千金）【猫鬼野道】眼に猫鬼を見、及び耳に聞えるもののあるには、相思子、蓖麻子、巴豆各一箇、硃砂末、蠟各四銖を用ゐ、合せ擣いて麻子大の丸にして服し、同時に灰で患者を圍み、面前に一斗の灰火を置き、藥を吐いて火中に入れ、沸して

火上に十字を畫く。それで貓鬼なるものが死ぬ。（千金方）

【中蠱毒を解す】必效の方である。まだ鑽らない相思子十四箇を杵き碎いて末にし、溫水で半盞を和して服す。吐せんとするときは抑へる。吐いてはならぬ。少頃すれば非常に大吐するものである。但だ七箇を服すれば神效がある。（外臺祕要）

豬腰子（綱目）

和名 未詳
學名 未詳
科名 まめ科（荳科）

〔豬腰子〕

集解 時珍曰く、豬腰子は柳州に生ずる。蔓生で莢を結び、內の子は大いさ豬の內腎の狀態のやうに酷似してゐる。長さ三四寸、色は紫で肉が堅い。彼の地では土產物に充て、中國へ贈つて來る。

氣味 【甘く微し辛し、毒なし】

主治 【一切の瘡毒、及び毒箭傷。研細し酒で一二錢服す。幷に塗る】（時珍）

石瓜（綱目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

〔集解〕時珍曰く、石瓜は四川の峨眉山中、及び芒部地方に産する。その樹は幹長く、樹端に葉が挺出し、冬青のやうに肥滑で、形狀は桑に似てゐる。その花は淺黃色で、綴つたやうに實を結ぶ。實は長くして圓くなく、殼が裂けると子が見える。その形は瓜に似て、その堅いことは石のやうだ。煮ると液が黃色である。

〔石瓜〕

〔氣味〕【苦し、平にして毒なし】〔主治〕【心痛。煎汁で風痺を洗ふ】（時珍）

本草綱目木部第三十五卷下　終

本草綱目木部

第三十六卷

本草綱目木部目錄第三十六卷

木の三　灌木類五十種

桑 本經　柘 嘉祐　奴柘 拾遺　楮 別錄
枳 本經 卽ち枳實、枳殼。　枸橘 綱目　梔子 本經 木戟を附す。
酸棗 本經　白棘 本經　蕤核 本經　山茱萸 本經
胡頹子 拾遺 卽ち盧都子。　金櫻子 蜀本　郁李 本經
鼠李 本經 卽ち牛李子。　女貞 本經　冬青 綱目
枸骨 綱目　衞矛 本經　山礬 綱目　南燭 開寶
五加 本經　枸杞 本經　溲疏 本經　楊櫨 唐本
石南 本經　牡荊 別錄　蔓荊 本經　欒荊 唐本
石荊 拾遺　紫荊 開寶　木槿 日華　扶桑 綱目
木芙蓉 綱目　山茶 綱目　蠟梅 綱目　伏牛花 開寶
密蒙花 開寶　木綿 綱目　椿木 嘉祐　黃楊木 綱目

右附方　舊八十七　新二百零七

木の三　灌木類五十種

桑（本經中品）

和名　くは
學名　Morus alba, L.
科名　くは科（桑科）

釋名　子を椹と名ける。時珍曰く、徐鍇の說文解字に『叒の音は若(ジャク)である。東方の自然の神木の名であつて、その字は象形である。桑なるものは蠶が葉を食ふところの神木である。故に木を叒の下に加へて別つたのだ』とある。典術には『桑は箕星の精だ』とある。

〔桑〕
―雞　桑―

集解　頌曰く、方書には桑の功を稱して最も神なるものとしてある。人の(一)資用に在つて尤も多いも

(一)資用、即ち經濟的價値。

(二)檿桑云云ハ禮註ノ文ナリ。

のだ。爾雅には『桑の辨甚よりするものは梔なり』とあり、又『女桑は桋桑なり』『檿桑は山桑なり』とあり、郭璞は『辨は半である。甚は椹と同じ。一半は椹あり、一半は椹なきを梔と名ける。俗間では、桑の小さくして條の長いものをみな女桑といふ。山桑といふは、桑に似て弓弩に材料となる』といつた。(二)檿桑は絲が琴瑟になるといふ。いづれも材の美なるものであつて、他の木にはこれに及ぶものが鮮い。

時珍曰く、桑には數種あつて、白桑といふがあり、葉は大いさ掌ほどで厚い。雞桑といふは葉、花あつて薄い。子桑といふは椹が先にあつて葉が後に生える。山桑といふは葉が尖つて長い。子から種ゑるは條を壓して分植するに若かぬ。桑は黃衣の生じたものを金桑といふ。それは木が必ず稿んとするものだ。種樹書に『桑は楮を以て接げば桑が大きくなる。桑の根下に龜甲を埋めれば茂盛して蛀まぬ』とある。

桑根白皮　[修治]　別錄に曰く、採るに一定の時期はない。土上に出たるものは人を殺す。

弘景曰く、東行の桑根は得易い。而し江邊には土から出たものが多い。輕〻しく

信ぜられぬ。

時珍曰く、古本草に、桑根の地上に現れたものをば馬額と名ける。毒があつて人を殺す。旁行して土から出たものをば伏蛇と名ける。やはり毒があるが、心痛を治すといつてある。故に呉淑の事類賦に『蛇痛を伏するの馬額、人を殺す』といつたのである。

斅曰く、凡そ使ふには、十年以上の東畔に向つた嫩根を採り、銅刀で青黄の薄皮一重を刮り去つて裏の白皮を取り、切り焙じて乾して用ゐる。その皮中の涎は去つてはならぬ。藥力は倶にその上に在るものだ。鐵、及び鉛を忌む。或は、木の白皮も用ゐられるといふ。煮汁で褐色を染めると久しく落ちない。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】權曰く、平なり。大明曰く、溫なり。元素曰く、苦く酸し。杲曰く、甘く辛し、寒なり。升によく降によし。陽中の陰である。好古曰く、甘は厚くして辛は薄し。手の太陰の經に入る。○之才曰く、續斷、桂心、麻子が使となる。

【主治】【傷中、五勞、六極の羸瘦、崩中、絕脈。虛を補し、氣を益す】(本經)

【肺中の水氣、唾血、熱渴、水腫、腹滿、臚脹を去り、水道を利し、寸白を去る。金瘡を縫ふに用ゐられる】（別錄）【肺氣喘滿、虛勞客熱、頭痛を治し、不足を內補する】（甄權）【煮汁を飲めば五臟を利す。散に入れて用ゐれば一切の風氣、水氣を下す】（孟詵）【中を調へ、氣を下し、痰を消し、渴を止め、胃を開き、食を下し、腹臟の蟲を殺し、霍亂吐瀉を止める。研つた汁は小兒の天弔、驚癇、客忤を治す。及び鵞口瘡に傅けて大いに效驗がある】（大明）【肺を瀉し、大、小腸を利し、氣を降し、血を散ずる】（時珍）

【發明】杲曰く、桑白皮は、甘は以て元氣の不足を固くして虛を補し、辛は以て肺氣の有餘を瀉して嗽を止める。又云く、桑白皮は肺を瀉す　然し性は純良でない。多く用うるは宜くない。

時珍曰く、桑白皮は小水を利するに特長がある。乃ち『實するときはその子を瀉す』である。故に肺中に水氣あるもの、及び肺火、有餘のものにこれが適する。十劑に『燥は濕を去る可し。桑白皮、赤小豆の屬なり』とあるがそれである。宋の醫錢乙の、肺氣熱盛で欬嗽して後に喘し、面腫し、身熱するを治する瀉白散に、桑白

皮を炒つて一兩、地骨皮を焙じて一兩、甘草を炒つて半兩を用ゐ、毎服一二錢を、粳米百を入れて水で煎じ、食後に溫服するとあるは、桑白皮、地骨皮はいづれも能く火を瀉して小便より去り、甘草は火を瀉して中を緩にし、粳米は肺を淸して血を養ふのであつて、これは肺を瀉する諸方の標準的なものである。元の醫羅天益は「その肺中の伏火を瀉して正氣を補するは、邪を瀉するは正を正する所以である。肺虛して小便利するものの場合はこれを用ゐるは適しない」といつた。

○頌曰く、桑白皮を線にして金瘡腸出を縫ひ、更に熱雞血を塗る。唐の安金藏は、腹を剖いてこの法を用ゐて癒えた。

【附方】 舊八、新六。【欬嗽吐血】甚だしきもので殷鮮なるには、桑根白皮一斤を米泔に三晝夜浸し、黃皮を刮り去つて剉細し、糯米四兩を入れ、焙乾して末にし、毎服一錢を米飲で服す。(經驗方)【消渴で尿多きもの】地に入ること三尺の桑根から白皮を剝ぎ取り、黃黑に炙いて剉み、水で濃汁に煮て隨意に飲む。また少量の米を入れるもよし。鹽を用ゐてはならぬ(肘後方)【產後の下血】炙いた桑白皮を水で煮て飲む。(肘後方)【血露の絕えぬもの】鋸で桑根を截つて屑五指撮を取り、淳酒で服

す。一日三服（肘後方）【墜馬拗損】桑根白皮五斤を末にし、一升を膏に煎じて傅ければ止む。已後はまた宿血もなく、終に發動せぬ。（經驗後方）【金刃傷瘡】新桑白皮を灰に燒き、馬糞を和して瘡上に塗り、數〻易へる。また煮汁を服するもよし（廣利方）【雜物の眯眼】新桑根皮を洗淨して搥き爛らし、眼に入れて撥へば自ら出る（聖惠方）【髪鬚の墮落】桑白皮を剉んで二升を水で淹浸し、煮て五六沸して滓を去り、頻りに洗沐する。自ら落ちなくなる。（聖惠方）【髮の槁れて澤なきもの】桑根白皮、柏葉各一斤を汁に煎じて沐すれば潤ふ。（聖惠方）【小兒の重舌】桑根白皮の煎汁を乳上に塗つて飲ます。（子母祕錄）【小兒の流涎】脾熱であつて、胸膈に痰があるものだ。新桑根白皮を搗いて自然汁を塗る。甚だ效がある。乾いたものは水で煎じる（聖惠方）【小兒の天弔】驚癇、客忤には、家桑の東行根を取り、研つて汁を服す（聖惠方）【小兒の火丹】桑根白皮の煮汁で浴する。或は、末にして羊膏で和して塗る（千金方）【堅硬なる石癰】膿を作さぬものである。蜀桑白皮を陰乾して末にし、烊した膠に酒を和して調へて傅ける。軟になるを度とする。（千金方）

皮中白汁　主治　【小兒の口瘡白漫には、拭ひ淨めてこれを塗れば癒える。

又、金刃の傷で燥痛するに塗る。須臾にして血が止む。仍つて白皮で裹む。甚だ良し】(蘇頌)【蛇、蜈蚣、蜘蛛傷に塗れば驗がある。枝を取つて燒瀝したものは大風瘡疥を治し、眉髮を生ずる】(時珍)

【附方】 舊一、新三。【小兒の鵞口】桑皮汁で胡粉を和して塗る。(子母祕錄)【小兒の唇腫】桑木汁を塗れば癒える。(聖惠方)【百毒の氣を解す】桑白汁一合を服す。須臾にして吐利し、自ら出る。(肘後方)【破傷中風】桑瀝と好酒とを對和して溫服し、醉ふを度とする。醒めて消風散を服す。(摘玄方)

桑椹 一名文武實。【主治】【單食すれば消渇を止める】(蘇恭)【五臟、關節痛、血氣を利す。久しく服すれば飢ゑず、魂を安じ、神を鎭め、人をして聰明ならしめ、白を變じ、老いず。多く採收して暴乾し、末にして蜜で丸にし、日日に服す】(藏器)【擣汁を飲めば酒の中毒を解す。酒に釀して服すれば水氣を利し、腫を消す】(時珍)

【發明】 宗奭曰く、本經に桑の說明が甚だ詳である。然るに獨り烏椹を遺してあるが、桑の精英は盡くこの物に在る。摘み採つて微に研つて布で濾し、その汁を石器で熬つて稀膏にし、多少を量つて蜜を入れ、稠く熬つて瓷器中に貯へ、一二錢

づつを抄つて食後、就寢時に沸湯に點てて服すれば、金石を服して發熱し、口渴するを治し、精神を生じ、及び小腸の熱を治す。その性が微涼なるが故である。仙方では、日光で乾して末にし、蜜で和して丸にし、酒で服す。やはり良し。

時珍曰く、椹には烏、白の二種ある。楊氏產乳に『孩子に桑椹を與へてはならぬ。兒の心をして寒せしめる』といつたが、陸璣の詩疏に『鳩は桑椹を食ひ、多ければ醉ふてその性を傷る』とあるは如何なるわけであらう。四時月令に『四月、桑椹酒を飲むが宜し。能く百種の風熱を理す』とある。その法は、椹汁三斗を重湯で煮て一斗半までになつたとき、白蜜二合、酥油一兩、生薑一合を入れて煮て、適當になつたとき瓶に收めて貯へ、每服一合を酒に和して飲む。また汁を熬り、燒酒で貯藏するもよく、年を經て味力が愈よ佳し。史に、魏の武帝は、軍陣中で食糧の乏しかつたとき、乾椹を得て飢を濟つたとあり、金の末に大饑饉があつたとき、人民はみな椹を食つて生命を支へたものが數へきれぬほどあつたとある。それで見ると、椹は乾けるも濕へるもみな凶作の際の凌ぎになるものだ。平時に收採して置く必要がある。

【附方】 舊一、新六。『水腫脹滿』水が下らぬときは滿溢し、水が下るときは虛竭して還つて脹るは、十に一も活きるものがない これには桑椹酒を用ゐて治するが宜し。桑心皮を切つて水二斗で汁一斗に煮取り、桑椹を入れて再び五升に煮取り、糯飯五升で酒に釀して飲む（普濟方）『瘰癧結核』文武膏——文武實、卽ち桑椹子の黑く熟せるもの二斗を用ゐ、布で汁を取り、銀、石器で熬つて膏にし、一匙づつを白湯で調へて服す。一日三服（保命集）『諸骨硬咽』紅椹子を細に嚼み、先づ汁を嚥んで後に滓を嚥み、新水で送下する 乾いたものでもよし（聖惠方）『小兒の赤禿』桑椹から汁を取つて頻りに服す（千金方）『小兒の白禿』黑椹を罌中に入れて三七日曝し、化して水にして洗ふ。三七日で神效がある（聖濟錄）『白を拔いて黑に變ずる』黑椹一斤、科蚪一斤を瓶に盛つて封閉し、一百日間屋の東端に懸け、盡く化けて黑泥となつたもので白髮を染める。漆のやうになる（陳藏器本草）『髮の白きもの、生ぜぬもの』黑く熟した桑椹を水に浸して日に晒し、それを搽る。黑からしめ、復た生ずる（千金方）『陰證腹痛』桑椹を絹に包んで伏著の日に風乾して末にし、每服三錢を熱酒で服して汗を取る。（集簡方）

葉【氣味】【苦く甘し、寒にして小毒あり】○○大明曰く、家桑の葉は煖にして毒なし。【主治】【寒熱を除き、汗を出す】(本經)【汁は蜈蚣の毒を解す】(別錄)【濃汁に煎じて服すれば、能く脚氣水腫を除き、大、小腸を利す】(蘇恭)【炙き熟して煎じ、茶に代へて飲めば、渇を止める】(孟詵)【煎じて飲めば、五臟を利し、關節を通じ、氣を下す。嫩葉を酒で煎じて服すれば、一切の風を治す。蒸熟して擣き、風痛で汗出るもの、幷に撲損瘀血を署ふ。挼み爛らして蛇蟲傷に塗る】(大明)【研汁は金瘡、及び小兒の吻瘡を治す。煎汁を服すれば、霍亂の腹痛、吐下を止める。また乾葉を煮てもよし。雞桑葉の煮汁を熬膏して服すれば、老風、及び宿血を去る】(藏器)【勞熱欬嗽を治し、目を明にし、髮を長くする】(時珍)

【發明】○頌曰く、桑葉は常服される。神仙服食方では、四月に桑の茂盛したとき葉を採り、又、十月の霜後に三分二分已に落ちた時、一分在るものを神仙葉と名ける。それを採つて前に採つた葉と共に陰乾し、末に擣いて丸、散の任意のものにして服す。或は水で煎じて茶に代へて飲む。又、霜後の葉を湯に煮て手足を淋渫すれば、風痺を去るに殊だ勝れたものだ。又、微し炙いて桑衣を和して煎じて服すれ

ば、痢、及び金瘡、諸損傷を治し、血を止める。

震亨曰く、霜を經た桑葉を研末し、米飲で服すれば盜汗を止める。

時珍曰く、桑葉は手、足の陽明の藥である。汁に煎じて茗に代へれば、能く消渇を止める。

附方 舊三、新十一。【青盲の洗法】昔、武勝軍の宋仲孚はこれを二十年患ひ、この法を用ゐること二年にして、目が故の通りに明になつた。新に青桑葉を研つて焙じ乾し、逐月に日を按じて地上で燒いて性を存し、一合づつを甆器中で煎じて二分に減じ、傾け出して澄清し、溫熱にして目を百度まで洗ふ。屢〻試みて效驗があつた。——正月初八日、二月初八日、三月初六日、四月初四日、五月初六日、六月初二日、七月初七日、八月二十日、九月十二日、十月十三日、十一月初二日、十二月三十日。(普濟方)【風眼下涙】臘月に落ちない桑葉を湯に煎じ、日日に溫めて洗ふ。或は芒硝を入れる。(集簡方)【赤眼澀痛】桑葉を末にし、紙に卷いて烟に燒き、鼻を熏じて效を取る。海上の方である。(普濟方)【頭髮の長ぜぬもの】桑葉、麻葉を泔水で煮て沐ふ。七回にして數尺に長ずる。(千金方)【吐血の止まぬもの】晩桑葉を焙じ

研り、涼茶で三錢を服す。只一服で止む。後に肝、肺を補する藥を用ゐる（聖濟總錄）【小兒の渴疾】桑葉を多少に拘らず、片毎に生蜜を染め、綿で蒂を繫いで上繃して陰乾し、細切して汁に煎じ、日日に茶に代へて飲む。（勝金方）【霍亂轉筋】腹に入つて煩悶するには、桑葉一握を煎じて飲む。一二服で立ろに定まる。（聖惠方）【大腸脫肛】黃皮桑樹の葉三升を水で煎じ、溫を帶びて罨納する。（仁齋直指方）【肺毒風瘡】大風の如き狀態なるには、綠雲散——好桑葉を洗淨して一夜の間蒸熟し、日光で乾して末にし、水で二錢匕を調へて服す。（經驗方）【癰口の斂まらぬもの】霜を經た黃桑葉を末にして傅ける。（直指方）【掌を穿つ腫毒】新桑葉を研り爛らして盦へば癒える。（通玄論）【湯火傷瘡】霜を經た桑葉を燒いて性を存して末にし、油で和して傅ける。三日にして癒える。（醫學正傳）【手、足の麻木】痛痒を知らぬには、霜降後の桑葉を湯に煎じて頻りに洗ふ。（救急方）

枝　氣味　【苦し、平なり】　主治　【徧體の風癢、乾燥、水氣脚氣、風氣の四肢拘攣、上氣眼運、肺氣欬嗽。食を消し、小便を利す。久しく服すれば、身を輕くし、耳目を聰明にし、人をして光澤ならしめる。口乾、及び癰疽後の渴を療ずる

には、嫩條を細切して一升を香しく熬り、煎じて飲む。何等禁忌するものなし。久しく服すれば終身偏風を患はぬ』（蘇頌）　○記載は近效方にあつて、桑枝煎と名けてある。ある法では、花桑枝を用ゐ、剉んで香しく炒り、瓦器で一半に煮減し、再び銀器に入れて重湯で一半に熬り減ず。或は少量の蜜を入れるもよし。

【發明】　頌曰く、桑枝は冷ならず熱ならず、常服されるものである。抱朴子に『仙經に、一切の仙藥は桑煎を得ざれば服せずとある』といつてある。

時珍曰く、煎藥に桑を用ゐるは、その能く關節を利し、風寒濕痺の諸痛を除く點を取つたものである。靈樞經を觀るに、寒痺内熱を治するには、桂酒法を用ゐ、桑炭で布巾を炙つて痺處を熨し、口僻を治するには、馬膏法を用ゐ、桑鈎でその口を鈎り、及び桑灰上に坐らせるとしてある。いづれもこの意味を取つたものだ。又、癰疽發背の起發せぬもの、或は瘀肉が腐潰せぬもの、及び陰瘡、瘰癧、流注、臁瘡、頑瘡、惡瘡の久しく癒えぬものに桑木灸法を用ゐ、未だ潰れぬには毒を拔き痛を止め、已に潰れたるには陽氣を補接するとあるも、やはり桑の關節を通じ、風寒を去り、火性が暢達して鬱毒を出すの意味を取つたものであつて、その法は、乾桑木を

劈いて細片にし、紮つて小把とし、火を燃し火を吹き息めて患處を灸し、吹く毎に灸し、片時にして瘀肉の腐動するを度とし、補托の藥を內服するのである。誠に良方である。又按ずるに、趙溍の養痾漫筆に『越州の一學錄は少年にして嗽を苦み、あらゆる藥も效がなかつたが、或る人が、南向の柔桑條一束を用ゐ、毎條を一寸ほどに折り、鍋中に納れて水五盌で一盌までに煎じ、瓦器中に盛つて置いて渴するときに飮ませると、服すること一个月で癒えた』とある。これはやはり桑枝煎の變法である。

附方　舊一、新五。【服食して白を變ずる】久しく服すれば、血氣を通じ、五臟を利す。雞桑の嫩枝を陰乾して末にし、蜜で和して丸にし、毎日酒で六十丸を服す。(聖惠方)【水氣脚氣】桑條二兩を香しく炒り、水一升で二合に煎じ、毎日空心に服す。禁忌するものなし。(聖濟總錄)【風熱臂痛】桑枝一小升を切つて炒り、水三升で二升に煎じ、一日に服し盡す。許叔微は『嘗て臂痛を病み、諸藥の效がなかつたが、これを數劑服して尋で癒えた。本草切用、及び圖經に、これを「冷ならず熱ならず、常服されるものだ」とあり、抱朴子に「一切の仙藥は桑枝煎を得ざれば服せず」と

（一）斤ハ升ノ誤ナラン。

あるを觀て、如何にも首肯かれた」(本事方)【中蠱毒を解す】人をして腹內堅痛せしめ、顏色黃青となり、淋露骨立し、病變常なきには、桑木心を剉んで一斛を釜中に入れ、水三斗に淹けて二斗に煮取り、澄淸して微火で五升に煎じ取り、空心に五合を服す。それで蠱毒を吐出する。(肘後方)【手、足の刺傷】露水を犯せば腫痛して多く人を殺す。桑枝三條を煻火で炮き熱して斷ち、頭端で瘡上を熨して熱せしめる。冷えれば易へる。二條を用ゐ盡せば瘡が自ら爛れる。仍て韮白、或は薤白を取つて傅け、急に帛で裹む。腫が更に作ることがある。(千金方)【紫白癜風】桑枝十斤、益母草三斤を水五斗で漫に煮て、(一)五斤までになつたとき滓を去り、再び煎じて膏にし、每就寢時に半合を溫酒で調へて服し、癒えるを度とする。(聖惠方)

桑柴灰 氣味 【辛し、寒にして小毒あり】詵曰く、淋汁は五金を鍊る鍊金家の材料となる。汞を結し、硫を伏す。 主治 【蒸して汁を淋取して煎にし、冬灰と等分と用ゐて痣、疵、黑子を滅し、惡肉を蝕す。小豆を煮て食へば大いに水脹を下す。金瘡に傅ければ血を止め、肌を生ずる】(蘇恭)【桑霜は噎食、積塊を治す】(時珍)

附方　舊六、新六。【目赤腫痛】桑灰一兩、黃連半兩を末にし、一錢づつを湯に泡け、澄淸して洗ふ。(聖濟總錄)【靑盲眼を洗ふ】正月八日、二月八日、三月六日、四月四日、五月五日、六月二日、七月七日、八月二十日、九月十二日、十月十七日、十一月二十六日、十二月三十日の神日に遇ふ毎に、桑柴灰一合を用ゐて湯に煎じ、これを瓷器中に沃いで澄し取り、極めて淸し、やや熱して洗ふ。冷えたときは重湯で頓に溫め、手を住めずに洗ふ。久しくして物を視ること鷹鶻のやうになる。ある方では、桑灰を童尿で和して丸にし、一丸づつを湯に泡けて澄して洗ふ。(龍木論)

【尸注、鬼注】その病が變動すれば、三十六種から九十九種になる。人をして寒熱し、淋瀝し、恍惚、默默たらしめ、的確に苦しむ所が判らず、累年積月して死に至り、更に復た親近者に傳染する。急に治せねばならぬ。桑樹白皮を曝乾して灰に燒き、二斗を甑中に入れて蒸し透し、釜中の湯三四斗でそれを淋し、又淋し、凡そ三回淋して、極めて濃きものを澄淸してただ二斗を取り、それに赤小豆三斗を一夜間漬け、曝乾してまた灰汁に漬け、灰汁が盡きたとき止め、かくてその豆を蒸熟し或は羊肉、或は鹿肉を羹にしてこの豆飯を進める。初めに一升を食ひ、二升まで食つて

十分に飽かしめる。輕微なるものは三四斗で癒える。極めて重きものも七八斗で癒える。病の去る時は、體中に自ら淫淫として疼痛を覺えるものである。もし根本が盡きぬ場合には再びこの方を試みる。神效の方である。(肘後方)【腹中の癥瘕】方は介部鼈の條下に記載した。【身面の水腫】坐臥し得ぬには、東に引いた花桑枝を取り、灰に燒いて汁を淋し、赤小豆を煮て饑ゑる毎に飽食する。湯飲を喫してはならぬ。(梅師方)【面上の痣疵】寒食の前後に桑條を取り、灰に燒いて汁を淋し、石灰を入れて熬膏し、自己の唾で調へて點ける。自ら落ちる。(普濟方)【白癜駁風】桑柴灰二斗を甑中で蒸し、その釜中の熱湯を取つて洗ふ。五六回に過ぎずして癒える(聖惠方)【大風惡疾】眉髮脫落するには、桑柴灰を熱湯で淋し、汁を取つて頭面を洗ふ。大豆を水で漿に研つて灰を解澤すれば味が彌よ佳し。次に熱水に綠豆麪を入れて洗ふ。三日に一回頭を洗ひ、一日一回面を洗ふ。十回に過ぎずして良し(聖惠方)【狐尿に刺されたとき】腫痛して死せんとするには、桑灰汁に漬け、冷えれば易へる(肘後方)【金瘡の痛むもの】桑柴灰を細に篩つて傅ける(梅師方)【瘡を風水で傷めたもの】腫痛して腹に入れば人を殺す。桑灰の淋汁に漬け、冷えれば復た易へる(梅

師方）

【頭風白屑】桑灰の淋汁で沐ふ。神良である（聖惠方）

桑耳　**桑黃**　記載は菜部の木耳にある。

桑花　記載は草部苔類にある。

桑寄生　記載は後の寓木類にある。

桑柴火　記載は火部にある。

桑螵蛸　記載は蟲部にある。

桑蠹　記載は蟲部にある。

柘（宋嘉祐）

和名　はりぐは
學名　Cudrania triloba, Hance.
科名　くは科（桑科）

【釋名】時珍曰く、按ずるに、陸佃の埤雅に『柘は山石に宜しく、柞は山阜に宜し。柘の石に從ふは、それ此の義を取るか』とある。

【集解】宗奭曰く、柘木は裏に紋がある。やはり旋つて器に作れる。その葉は蠶を飼へるもので、柘蠶といふ。葉は硬くして桑葉に及ばない。藥に入れるには刺

なきものを用ゐるが良し。
時珍曰く、處處の山中にある。喜んで叢生し、幹は疎らで直く、葉は豐にして厚く、團くして尖がある。その葉で蠶を飼つて絲を取り、それで琴瑟を作ると淸響が普通のものに勝る。爾雅に

〔柘〕
——奴柘は小し刺あり——

所謂『棘繭』は即ちこの蠶である。考工記には『弓人は材を取るに柘を以て上とす。その實の狀は桑子の如くして團く、粒は椒の如し。隹子と名く。隹は音錐(スキ)その木は黄赤色を染む。之を柘黄といふ。天子の服する所なり』とある。相感志には『柘木は、酒醋で礦灰を調へて塗れば、一夜にして間道、烏木の文を作す』とある。物の性の相伏である。

木白皮　東行根白皮　〔氣味〕『甘し、溫にして毒なし』〔主治〕『婦人の崩中、血結、瘧疾』(大明)『煮汁で酒を釀して服すれば、風虛耳聾に主效があり、勞

損、虚羸、腰腎冷、夢に人と交接して洩精するものを補す】（藏器）

發明　時珍曰く、柘は能く腎氣を通ずる。故に聖惠方に、耳鳴、耳聾の一二十年のものを治するに柘根酒がある。柘根二十斤、菖蒲五斗を各〻水一石で煮て汁五斗を取り、故鐵二十斤を赤く煆いて水五斗に浸して淸を取り、水一石五斗に合せ、米二石、麴二斗を用ゐて普通のやうに醸して酒に作り、眞磁石三斤を末にしてその酒中に三晝夜浸し、日夜それを飲み、小醉を取つて眠る。人の聲が聞えるやうになつたならば止める。

附方　新二。【飛絲の目に入りたるとき】柘漿を點け、縣に水を醮けて拭ひ去る。（醫學綱目）【目を洗つて明ならしめる】柘木の煎湯で日を按じて溫洗し、寅より亥に至つて止める。奏效せぬものなし。——正月初二日、二月初二日、三月は洗はぬ。四月初五日、五月十五日、六月十一日、七月初七日、八月初二日、九月初二日、十月十九日、十一月は洗はぬ。十二月十四日。徐神翁の方である。（海上方）【小兒の鵞口】重舌。柘根五斤を剉み、水五升で二升に煮て、滓を去つて五合に煎じ取り、頻りに塗る。根がなければ弓材でもよし。（千金方）

柘黄　記載は菜部木耳にある。

奴柘（拾遺）

和名　はりぐは（野生小形者）
學名　Cudrania triloba, Hance.
科名　くは科（桑科）

【集解】藏器曰く、江南の山野に生ずる。柘に似て節に刺があり、冬も凋まぬ。時珍曰く、この樹は柘に似て小さく、刺がある。葉はやはり柞葉のやうで小さい。蠶を飼へる。

刺【氣味】【苦し、小温にして毒なし】【主治】【老婦人の血瘕、男子の痃癖、悶痞には、刺を取り、三稜草、馬鞭草を和して稠糖のやうな煎にし、病の心に在るには食後に、臍に在るには空心に服す。惡物を下すものである】（藏器）

楮（別錄上品）

和名　かぢのき
學名　Broussonetia papyrifera, Vent.
科名　くは科（桑科）

【釋名】穀　音は媾（コウ）である。また構とも書く。穀桑　頌曰く、陸機の詩

疏に『構は、幽州では穀桑といふ。或は、楮桑を荊、楊、交、廣では穀といふ』とある。

時珍曰く、楮の字は本は柠と書いた。その皮は績いで紵となるものだからである。楚地方では乳を呼んで穀といふ。その木中の白汁が乳のやうなところから名けたものだ。陸佃の埤雅に穀米の穀の字に書いて『善なり』と訓じたのは誤である。或は楮、構を二物とするも誤である。下文に詳述する。

【集解】別錄に曰く、楮實は少室山に生じ、所在にある。八月、九月に實を採つて日乾し、四十日にして成る。

弘景曰く、これは卽ち今の構樹である。南方人の穀紙と呼ぶものは、やはり楮紙である。武陵地方で作る穀皮衣は甚だ堅好だ。

恭曰く、この物に二種ある。一種は皮に斑花文があるもので、斑穀といふ。今一般に皮で冠を作るそのものである。一種は皮が白く、花がなく、枝、葉は大いに柏類する。但だその葉が葡萄葉に似て、瓣を作して子あるものを取つて佳とする。その實は初夏に生じ、大いさ彈丸ほどの青綠色なものだが、六七月になると次第に深

〔楮〕
— 構 —

紅になつて成熟する。八九月に採り、水に浸して皮、穰を去り、中の子を取る。段成式の酉陽雜俎に『穀田が久廢すると必ず構を生ずる。葉に瓣あるを楮といひ、なきを構といふ』とあり、陸機の詩疏に『江南地方では、その皮を績いで布にする。また擣いて紙にする。長さ數丈、光澤にして甚だ好し。またその嫩芽を菜茹に當てて食ふ』とある。今は楮紙を用ゐることが最も博いが、楮布のあるのは見ない。醫方ではただ楮實を貴ぶ。その他はやはり用ゐることが稀だ。

大明曰く、皮の斑なるが楮である。皮の白きが穀である。

時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『楮、穀は乃ち一種なり』とあつて、必ずしも區別してない。ただ雌、雄の辨があるだけである。雄は皮が斑で葉に椏叉がなく、

三月花を開いて長穗を成し、柳花のやうな狀態で、實を結ばない。饑饉の際に一般に花を採つて食ふ。雌は皮が白くして椏叉があり、やはり碎花を開き、楊梅のやうな實を結ぶ。半ば熟したとき水で澡つて子を去り、蜜煎にして果として食ふ。二種は樹がいづれも生じ易く、葉に澀毛が多い。南方では一般に皮を剝ぎ、擣き煮て紙を造り、また緝き練つて布にも作るが、堅くなくして朽ち易い。裴淵の廣州記に『蠻夷では穀皮を取り、搥き熟して揭裏罽布を作り、それを氈に擬するが、甚だ暖だ』とある。その木の腐ちた後に生える菌耳は味甚だ佳好である。

楮實　亦た**穀實**と名ける。（別錄）**楮桃**（綱目）

［修治］斅曰く、採取して後、水で三日間浸して攪き旋し、水に投じて浮くものを去つて晒乾し、酒に一伏時浸してから、午前十時から午後十時まで蒸して焙じ乾して用ゐる。〇經驗方の煎法は、六月六日に穀子五升を取り、水一斗で五升に煮取り、滓を去り、微火で煎じて餳のやうにして用ゐる。

［氣味］【甘し、寒にして毒なし】［主治］【陰痿、水腫。氣を益し、肌を充て、目を明にする。久しく服すれば飢ゑず、老いず、身を輕くする】（別錄）【筋骨を

壯にし、陽氣を助け、虛勞を補し、腰膝を健にし、顏色を益す』(大明)

發明 弘景曰く、仙方では、採つて擣いて汁を取り、丹に和して用ゐ、亦た乾して服す。人をして神に通じ、鬼を見せしめる。

頌曰く、仙方で單服するには、その實の正赤なる時に子を採收し、陰乾して篩つて末にし、水で二錢匕を服す。益〻久しきほど佳し。抱朴子に『柠木の實の赤きものを服すれば、老者を少くし、人をして徹視し、鬼神を見せしめる。道士梁須は、年七十にしてこれを服し、更に少壯となり、百四十歲に至つて能く步行し、走馬に及んだ』とある。

時珍曰く、別錄には楮實の功用を記載して、大いに補益すとしてあるが、修眞祕旨なる書には『久しく服すれば人をして骨軟の痿と成らしめる』といひ、濟生祕覽に、骨哽を治するに楮實を用ゐ、湯に煎じて服すとしてある。これは骨を軟にするの徵ではあるまいか。按ずるに、南唐書に『烈祖が飴を食つて喉中に噎したとき、國醫にそれを癒すものがなかつた、吳廷紹が獨り楮實湯を進めんと請ひ、一服にして痰が失ひ去つた。羣くの醫が、他日取つて用ゐて見たがいづれも效驗がなかつた

ので、廷紹にその理由を訊ねると「噎が甘に因つて起つたのであつた。故にこれを以て治したのだ」と答へた』とある。余（時珍）が謂ふに、これは乃ち骨硬を治し、堅さを軟にするの關係なので、羣くの醫は、これを用ゐて他の噎を治したから效驗がなかつたのだ。

【附方】　新六。　【水氣蠱脹】楮實子丸――潔淨なる釜で楮實子一斗、水二斗を熬つて膏にし、茯苓三兩、白丁香一兩半を末にし、その膏で和して梧子大の丸にし、少量から多量にして服し、小便が淸利して脹の減ずるまでを度とし、後に治中湯を服して養ふ。甘、苦、峻補、及び發動する物を忌む。（潔古活法機要）【肝熱で翳を生じたるもの】楮實子を研細し、食後に蜜湯で一錢を服し、一日二回服す。（直指方）【喉痺、喉風】五月五日、或は六月六日、七月七日に楮桃を採つて陰乾し、一箇づつを末にし、井華水で服す。重きには二箇を用ゐる。（集簡方）【身面の石疽】痤癤のやうな狀態で皮の厚さには、穀子を搗いて傅ける。（外臺祕要）【金瘡出血】穀子を搗いて傅ける。（外臺祕要）【目昏くして視ることの困難なるもの】楮桃、荊芥穗各五百箇を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、食後に一丸を嚼んで薄荷湯で送下する。一日三

服（衞生易簡方）

葉 〔氣　味〕【甘し、涼にして毒なし】〔主　治〕【小兒の身熱で、食しても肌を生ぜぬには、浴湯にするがよし。又、惡瘡に主效があり、肉を生ずる】（別錄）【刺風身癢を治す】（大明）【鼻衄の數升にして斷たざるものを治す。搗汁三升を再三服す。良久して止む。嫩きを茹へば四肢の風痺、赤白下痢を去る】（蘇恭）【炒つて研り、麪を搜ぜて餺飥にして食へば、水痢に主效がある】（甄權）【小便を利し、風濕腫脹、白濁、疝氣、癬瘡を去る】（時珍）

〔附　方〕 舊五、新十二。【水穀下痢】果部の橡實の條下に記載した。【老、少の瘴痢】晝夜百餘囘のものには、乾楮葉三兩を熬り搗いて末にし、毎服方寸匕を烏梅湯で服す。一日再服し、羊肉で末を裹んで肛中に納れる。痢出して止む（楊炎南行方）【小兒の下痢】赤、白を痢し、渴を作し、水を得るとまた嘔逆するには、構葉を香しく炙き、飮漿半升で浸して水が綠になつたとき葉を去り、木瓜一箇を切つてその汁の中に納れ、煮て二三沸して細細に飮む。（子母祕錄）【脫肛の收らぬもの】五花構葉を陰乾して末にし、毎服二錢を米飮で調へて服し、兼て腸頭に塗る。（聖惠方）【小

便白濁】構葉を末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。(經驗良方)【通身の水腫】楮の枝、葉を煎じて汁を餳のやうにし、空腹に一匕を服す。一日三服。(聖惠方)【虛肥、面腫】積年の氣で、上部は水病の如く、ただ脚の腫れぬには、穀楮葉八兩を水一斗で六升に煮取つて滓を去り、米を納れて粥に煮、絕えず常食する。(外臺祕要)【卒風不語】穀の枝、葉を剉細し、酒で煮て沫を出し、多少に隨ひ日に一匕を飲む。(肘後方)【一般に睡臥に耽るもの】花穀葉を晒して研末し、湯で一二錢を服し、瘥を取つて止める。(楊堯輔方)【吐血、鼻血】楮葉の搗汁一二升を旋旋に溫めて飮む。(聖惠方)【一切の眼翳】三月に穀木の軟葉を採收し、晒乾して末にし、麝香少量を入れ、黍米ほどづつを眥內に注ぐ。その翳は自ら落ちる。(聖惠方)【木腎疝氣】楮葉、雄黃等分を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを鹽酒で服す。(醫學集成)【疝氣の囊に入りたるもの】五月五日に穀樹葉を採り、陰乾して末にし、一二匙づつを空心に溫酒で服す。(簡便方)【癬瘡濕痒】楮葉を搗いて傅ける。(聖惠方)【痔瘻腫痛】楮葉半斤を搗き爛らして封ずる。(集簡方)【蝮蛇の螫傷】楮葉、麻葉を合せて搗き、汁を取つて漬ける。(千金方)【魚骨硬咽】楮葉の搗汁を啜る。(十便良方)

枝莖　【主治】【癮疹痒。湯に煮て洗浴する】(別錄)【搗いて濃汁半升を飲めば、小便不通を治す】(時珍)

【附方】　舊一、新一。　【頭風白屑】楮木を枕にする。六十日に一回新しきものに易へる。(外臺祕要)　【暴赤眼痛】磣澀するには、嫩楮枝を葉を棄て去り、地に放置して火で燒き、盌で一日覆ひ、灰を取つて湯に泡け、澄淸して溫め洗ふ。(聖惠方)

樹白皮　【氣味】【甘し、平にして毒なし】　【主治】【水を逐ひ、小便を利す】(別錄)　【水腫氣滿を治す】(甄權)　【喉痺】(吳普)　【煮汁で酒を釀して飲めば、水腫が腹に入つて短氣し、欬嗽するを治す。散にして服すれば、下血、血崩を治す】(時珍)

【附方】　舊一、新六。【腸風下血】秋、楮皮を採つて陰乾して末にし、酒で三錢を服す。或は麝香少量を入れる。一日二回。(普濟方)　【血痢、血崩】楮樹皮、荊芥等分を末にし、冷醋で一錢を調へて服す。血崩には一匕を煎じて服す。述べ盡し難い神效がある。(危氏得效方)【男婦の腫疾】發病の久、近に拘らず、暴風の腹に入りたるもの、婦人の出產當時閫に入つて風が臟內、腹中に入り、馬鞭の如くにして短氣なるには、楮の皮、枝、葉一大束を切つて汁に煮、酒に釀して不斷に飲む。三四日に過

きずして退く。常服するがよし。(千金方)【風水腫浮】全身盡く浮するには、楮皮散——楮白皮、猪苓、木通各二錢、桑白皮三錢、陳皮、橘皮一錢、生薑三片を水二鍾で煎じて服す。日に一劑。(聖濟總錄)【膀胱石水】四肢瘦削し、小腹脹滿するには、構根白皮、桑根白皮各二升、白朮四兩、黑大豆五升を流水一斗で四升に煮て、清酒二升を入れ、再び三升までに煮て一匕づつを一日に再服する。(集驗方)【目中の翳膜】楮白皮を暴乾し、釵股ほどの太さの一本の繩にして灰に燒き、細研して少量づつを點ける。一日三五回。瘥えれば止める。(崔氏方)【魚骨硬咽】楮樹の嫩皮を搗き爛らして丸にし、水で二三十丸を服す。(衞生易簡方)

皮間の白汁【釋名】構膠(綱目)　**五金膠漆**　大明曰く、能く硃砂を合して團にする。故に五金膠漆と名ける

時珍曰く、構汁は最も粘る。今一般に金薄を粘るに用ゐる。古代に經書を粘つた方法は、楮樹汁に白及、飛麪を和して調へた糊で帋を接いだものだ。永く脫解せぬこと膠漆以上である。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】【主治】【癬を療ず】(別錄)【蛇、蟲、蜂、

蝎、犬咬に傅ける】(大明)

[附方] 舊一。【天行病後の脹滿】兩脇が刺脹し、臍下が水腫の如くなるには、構樹枝汁を隨意に服す。小便が利して消する。(外臺祕要)

楮皮紙 傳信方——月經が往來して絶えぬには、燒灰卅張を淸酒半升で調へて服すれば頓に止む。又、産蓐中の婦人の血暈は、これを服すれば立ろに效がある。

楮耳 菜部の木耳に記載した。

枳（本經中品）

和名 きこくのき
學名 Citrus sp.
科名 へんるうだ科（芸香科）

[校正] 開寶の枳殼を併せ入る。

[釋名] 子を **枳實** と名ける（本經） **枳殼**（宋開寶） 宗奭曰く、枳實、枳殼は一物であつて、小なるときはその性が酷にして速であり、大なるときはその性が和にして緩である。故に張仲景の傷寒倉卒の病を治する承氣湯中に枳實を用ゐたのは、みなその疏通、決泄して結實を破るの意味を取つたのである。他の方は但だ風

壅の氣を導散するだけで、常服される。故に枳殼を用ゐた。その意味は右の通りである。

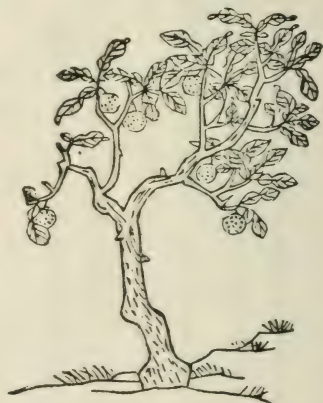
恭曰く、枳實といふからには、核、穰を合してあるべき筈だが、今は殊ださうでない。

時珍曰く、枳といふは木の名であつて、只に從ふ諧聲の文字である。實といふはその子である。故に枳實といふ。後世一般に、小なるものの性が速なるところから、又、老いたるものを呼んで枳殼といふ。生では皮が厚くして實し、熟すれば殼が薄くして虛す。正に靑橘皮、陳橘皮の關係のやうなものだ。宋時代に枳殼の一條を重複して掲載したのは非である。寇氏は、結實を破るので名けたやうに考へたが、やはり必しもさうではない。

【集解】別錄に曰く、枳實は河內の川澤に生ずる。九月、十月に採つて陰乾する。

志曰く、枳殼は商州の川谷に生ずる。九月、十月に採つて陰乾する。

藏器曰く、本經には、枳實は九月、十月を用ゐるとあるが、七月、八月の既に厚

〔枳〕
——枳實は小さく枳殼は大きい——

くして且つ辛きものに如かぬ。舊に『江南には橘となり、江北には枳となる』といひ、周禮にもまた『橘は淮を逾えて北は枳となる』とあるが、現に江南には枳、橘いづれもあり、江北には枳があつて橘がない。これは自ら別種なのであつて、變易の關係ではない。

頌曰く、今は洛西、江湖の州郡にいづれもあるが、商州のものを佳とする。木は橘のやうで小さく、高さ五七尺、葉は橙のやうで刺が多い。春、白花を生じ、秋に至つて實が成る。七月、八月に採つたものが實であり、九月、十月に採つたものが殼である。今醫家では皮が厚くして小なるものを枳實とし、完くして大なるものを枳殼とする。いづれも肚を翻して盆口のやうな狀態にした陳久なるものを勝れたも

のとする。近道に產するものは俗に臭橘と呼び、用ゐるに堪へない。

修治　弘景曰く、枳實は、採つて破り、乾して核を除き、微し炙いて乾して用ゐる。陳きものを良しとする。俗方に多く用ゐるが、道家では須ゐない。斅曰く、枳實、枳殼は性、效が同じくない。枳殼を使ふ場合には、辛、苦、腥にして幷に隙油あるものを取り、陳久、年深のものを用ゐるを佳とする。いづれも穰、核を去り、小麥麩で炒り、麩が焦げるまで炒つて麩を去つて用ゐる。

枳實　**氣味**　【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、酸し、微寒なり。普曰く、神農は苦しといひ、雷公は酸し、毒なしといひ、李當之は大寒なりといふ。權曰く、辛く苦し。元素曰く、性は寒にして味苦し。氣厚く味薄く、浮にして升り、微し降る。陰中の陽である。杲曰く、沈であり陰である。

主治　【大風が皮膚中に在つて麻豆の如く、苦痒なるもの。寒熱結を除き、痢を止め、肌肉を長じ、五臟を利し、氣を益し、身を輕くする】（本經）【胸脇の痰癖を除き、停水を逐ひ、結實を破り、脹滿、心下の急痞痛、逆氣、脇風痛を消し、胃氣を安じ、溏泄を止め、目を明にする】（別錄）【傷寒結胸を解し、上氣喘欬に主效が

あり、腎內の傷冷、陰痿にして氣あるに加へて用ゐる】(甄權)【食を消し、敗血を散じ、積堅を破り、胃中の濕熱を去る】(元素)

【發明】震亨曰く、枳實は痰を瀉し、能く墻を衝き、壁を倒し、竅を滑し、氣を破るの藥である。

元素曰く、心下の痞、及び宿食不消には、いづれも枳實、黃連が適する。

杲曰く、蜜で炙いて用ゐれば、水積を破り、以て氣を泄し、內熱を除く、潔古はこれを用ゐて、脾の經の積血を去つた。脾に積血がなければ心下が痞せぬものである。

好古曰く、氣を益するには、これに佐として人參、白朮、乾薑を用ゐる。氣を破るには、これに佐として大黃、牽牛、芒硝を用ゐる。これは本經に、氣を益すといつてあるが、また痞を消すとはいつてない所以である。白朮でなければ濕を去ることは不能だ。枳實でなければ痞を除くことは不能である。故に潔古は枳朮丸の方を制して胃、脾を調へたのである。張仲景の心下堅にして盤の如くなる、水飲から作つたものを治する枳實白朮湯は、枳實七箇、朮三兩を水一斗で三升に煎じ、三回に

分服するのであつて、腹中が軟になつて消する。その他は枳殼の項を見よ

附方　舊九、新四。【卒の胸痺痛】枳實を擣いて末にし、湯で方寸匕を服す。晝三服、夜一服。（肘後方）【胸痺、結胸】胸痺、心下痞堅、留氣結胸、胸下の逆氣の心を搶くもの。枳實薤白湯を主とする。陳枳實四箇、厚朴四兩、薤白半斤、栝樓一箇、桂一兩を用ゐ、水五升で先づ枳、朴を煎じて二升を取り、滓を去つてその他の藥を納れ、煎じて二三沸し、三回に分けて溫服する。それで癒えるものである（張仲景金匱要略）【傷寒胸痛】傷寒後に卒に胸膈の閉痛するには、枳實を麩で炒つて末にし、米飮で二錢を服す。一日二服。（嚴子礼濟生方）【產後の腹痛】枳實を麩で炒り、芍藥を酒で炒り、各二錢を水一盞で煎じて服す。また末にして服するもよし。（聖惠方）【奔豚氣痛】枳實を炙いて末にし、飮で方寸匕を服す。晝三服、夜一服（外臺祕要）【婦人の陰腫】堅痛するには、枳實半斤を碎いて炒り、帛で裹んで熨す。冷えれば易へる。（子母祕錄）【大便不通】枳實、皂莢等分を末にし、飯で丸にして米飮で服す。（危氏得效方）【積痢脫肛】枳實を石上で磨つて平にし、蜜で炙いて黃にし、更互に熨す。縮つたならば止める。（千金方）【小兒の久痢】水穀不調なるには、枳實を擣いて末にし、

飲で一二錢を服す。(廣利方)【腸風下血】枳實半斤を麸で炒り、黄芪半斤と末にし、米飲で非時に二錢を服す。糊で丸にするもよし。(經驗方)【小兒の五痔】年月に拘らず、枳實を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、空心に飲で三十丸を服す。(集驗方)【小兒の頭瘡】枳實を灰に燒き、猪脂で調へて塗る。(聖惠方)【皮膚の風瘮】枳實を醋に浸し、火で炙いて熨すれば消する。(外臺祕要)

枳殼 【氣味】【苦く酸し、微寒にして毒なし】權曰く、苦く辛し。元素曰く、氣味、升降は枳實と同じ。杲曰く、沈であり、陰である。

【主治】【風痺、淋痺に、關節を通利し、勞氣欬嗽で背膊悶倦するに、胸膈に留結する痰滯を散じ、水を逐ひ、脹滿、大腸風を消し、胃を安じ、風痛を止める】(開寶)【遍身風瘮の肌中に痲、豆の如くなるもの、惡瘡、腸風、痔疾、心腹結氣、兩脇脹虛、關膈壅塞】(甄權)【脾を健にし、胃を開き、五臟を調へ、氣を下し、嘔逆を止め、痰を消し、反胃、霍亂、瀉痢を治し、食を消し、癥結、痃癖、五膈氣を破る。及び肺氣、水腫、大小腸の風を除き、目を明にする。炙熱して痔腫を熨す】(大明)【肺氣を泄し、胸痞を除く】(元素)【裏急後重を治す】(時珍)

【發　明】　元素曰く、枳殼は氣を破り、濕に勝ち、痰を化し、肺を泄し、大腸を走す。多く用ゐれば胸中至高の氣を損ず。ただ二三服するだけがよし。稟受が元來壯であつて氣刺痛のものに、何の部の經に在るかを看て、それを區別して別經の藥を以て導く。

杲曰く、氣血弱きものは服されない。それは氣を損ずるからである。

好古曰く、枳殼は高きを主とし、枳實は下を主とする。高きは氣を主とし、下きは血を主とする。故に殼は胸膈、皮毛の病を主とし、實は心腹、脾、胃の病を主とし、大同にして小異がある。朱肱の活人書に『痞を治するに、先づ桔梗枳殼湯を用う』とあるは、これを用ゐて心下の痞を治するのではない。如何にも首肯かれる點は、誤つて氣を下せば、陷して時に痞と成らんとするものだ。故に先づこれを用ゐて痞を致さざらしめたのである。已に痞と成つてからでは、これを用ゐるは晩きに失する。ただ痞を消することが不能なるのみでなく、反つて胸中の氣を損ずる。そこで『先』の一字に意味があるのだ。

時珍曰く、枳實、枳殼は氣味、功用倶に同じである。上代にはやり區別はなかつ

た。魏、晉以來始めて實、殼の用を分ち、潔古張氏、東垣李氏は又、高きを治し、下を治するの說を分つたのであるが、大體に於てその功はいづれも能く氣を利するもので、氣が下れば痰喘が止み、氣が行れば痞脹が消し、氣が通ずれは痛刺が止み、氣が利すれば後重が除く。それ故に枳實は胸膈を利し、枳殼は腸、胃を利するのである。されば張仲景は胸痺痞滿を治するに、枳實を以て要藥とした。諸方は下血、痔痢、大腸祕塞、裏急後重を治するに、また枳殼を以て通用してある。これで見れば枳實獨り下を治するだけでもなく、殼獨り高きを治するだけでもないのである。蓋し飛門より魄門に至るまでみな肺が主たるもので、三焦相通じて一氣のみであつて見れば、二物はこれを分つも可なり、分たざるも亦た傷なきものである。杜壬方の記載に『湖陽公主は難產に苦まれたが、ある方士が瘦胎飲の方を進め、枳殼四兩、甘草二兩を末にし、每服一錢を白湯に點てて服し、五个月後から一日に一服して臨月に至つたが、ただ出產が容易であつたばかりでなく、同時に胎中の惡病がなかつた』とあり、張潔古の活法機要には、改めて枳朮丸を日日に服し、胎を瘦せしめて生み易からしめ、東胎丸といつてあるが、寇宗奭の衍義に『胎が壯なれば子に力が

あつて生み易い。枳殼の藥を服せては反つて無力にし、兼て子もやはり氣弱にして養ひ難いことにする。所謂、胎を縮めて產を易くするといふことは、大いに然るべきことでない』といつた。理論上から考へて、寇氏の說が見識が明で、優れてゐるやうに思はれる。或は胎前に氣盛、壅滯するものにはこれを用ゐるが適當だ。所謂、八九个月の胎は必ず枳殼、蘇梗を用ゐて氣を順にする。胎前に滯がなければ產後に慮はない。もし氣稟の弱いものの場合ならば、大いに適當なることでない。

震亨曰く、難產は、多く鬱悶、安逸の人、富貴、奉養の家に見るものである。瘦胎飮は湖陽公主のために作つたものだ。予の妹は難產に苦しんだが、その形は肥つて、好く坐してゐる。予が考へるところでは、妹と公主とでは正反對だ。彼の公主は奉養の人であつて、その氣は必ず實してゐた。故にその氣を耗して平ならしめ、そこで產が易かつたのだが、今妹は形が肥つてゐるから氣が虛し、久しく坐るから氣が運らない。これは當然母の氣を補すべきものである。紫蘇飮を用ゐ、補氣の藥十數貼を加へて服ませると、遂に快く出產した。

【附方】　舊三、新十五。

【傷寒呃噫】枳殼半兩、木香一錢を末にし、一錢づつを白

湯で服す。なほ止まぬときは再服する。(本事方)【老、幼の腹脹】血氣の凝滯である
これを用ゐて腸を寛にし、氣を順にする。四炒丸と名ける。商州枳殼の厚くして綠
背のものを穰を去つて四兩、これを四分し、一兩をば蒼朮一兩と共に炒り、一兩
をば蘿蔔子一兩と共に炒り、一兩をば乾漆一兩と共に炒り、一兩をば茴香一兩と共
に炒つて黄にし、四味を去り、ただ枳殼を取つて末にし、四味の煎汁で煮た麪糊で
和して梧子大の丸にし、毎食後に米飲で五十丸を服す。(王氏簡易方)【積を消し、氣を
順にする】五積、六聚を治す。男子、婦人、老、幼に拘らず、氣積でさへあればい
づれもみな治す。乃ち仙傳の方である。枳殼三斤を穰を去り、毎箇に巴豆仁一箇を
入れ、合定し紮つて煮る。慢火で水煮すること一日、湯が減つたときは再び熱湯を
加へる。冷水を加へてはならぬ。一定の時間を要して汁が盡きるを待ち、巴豆をば
去り、切片して晒乾し、炒らずに末にし、醋で煮た麪糊で梧子大の丸にし、三四十
丸づつを服す。病に隨つてそれぞれの湯を使とする。(邵眞人經驗方)【氣を順にし、痢
を止める】枳殼を炒つて二兩四錢、甘草六錢を末にし、二錢づつを沸湯で服す。(嬰
童百問)【理氣の疏導】卽ち上記の方を木瓜湯で服す。(直指方)【小兒の祕澁】枳殼を

煨いて穰を去り、甘草と各一錢を水で煎じて服す。（全幼心鑑）【腸風下血】發病の遠年なると近日なるとに拘らず。博濟方では、枳殼を黒く燒いて性を存して五錢、羊脛炭を末にして三錢を用ゐ、五更に空心に米飲で服し、人が五支里歩行するほどの時間を經て再び一服する。當日に效が現れる。○簡便方では、枳殼一兩、黄連五錢を水一鍾で半鍾に煎じて空心に服す　【痔瘡腫痛】必效方では、枳殼を煨熟して熨す。七箇で立ろに定まる。○本事方では、枳殼末を瓶中に入れ、水で煎じて百沸し、先づ熏じて後に洗ふ　【懷胎腹痛】枳殼三兩を麩で炒り、黄芩一兩を用ゐ、毎服五錢を水一盞半で一盞に煎じて服す。もし脹滿して身重きものの場合には白朮一兩を加へる。（活法機要）【産後の腸出】收まらぬには、枳殼の煎湯に浸す。良久して入る。（袖珍方）【小兒の驚風】不驚丸――小兒が驚風に因つて吐逆し、搐を作し、痰涎壅塞し、手足掣瘲し、眼睛斜視するを治す。枳殼を穰を去つて麩で炒り、淡豆豉と等分を末にし、毎服一字、甚しきには半錢を、急驚には薄荷の自然汁で服し、慢驚には荊芥湯に酒三五點を入れて服す。一日三服。（陳文中小兒方）【牙齒疼痛】枳殼を酒に浸して含漱する。（聖惠方）【風疹の痒きもの】枳殼三兩を麩で炒つて末にし、毎服二錢

を水一盞で六分に煎じ、滓を去つて溫服し、同時に汁を塗る。（經驗方）【小兒の軟癤】大枳殼一箇を臼を去り、口を磨つて平にし、麪糊を邊に抹して癤上に合せる。自ら膿血を出し盡し、更に痕がなくなる。（危氏得效方）【氣を利して目を明にする】枳殼を麩で炒つて一兩を末にし、湯に點てて茶に代へる。（普濟方）【下すこと早くして痞と成つたもの】傷寒陰證で下すことが早くして痞と成り、心下が滿して痛まず、按じて見るに虛軟するには、枳殼、檳榔等分を末にし、每服三錢を黃連湯で調へて服す。（宣明方）【脇骨疼痛】驚に因つて肝を傷めたるには、枳殼一兩を麩で炒り、桂枝を生で半兩を細末にし、每服二錢を薑棗湯で服す。（本事方）

枳茹　樹皮である。或は枳殼上から刮り下した皮だともいふ。【主治】【中風で身直し、屈伸、反復し得ぬもの、及び口僻、眼斜には、皮を刮つて一升を酒三升に一夜漬け、五合づつを溫服する。酒が盡きたときは再び作る】（蘇頌）【樹莖、及び皮は、水脹、暴風、骨節疼急に主效がある】（弘景）

根皮　【主治】【酒に浸して齒痛を漱ぐ】（甄權）【煮汁を服すれば、大便下血を治す　末を服すれば、野雞病の血あるを治す】（藏器）

嫩葉　主治　【湯に煎じて茶に代へれば風を去る】（時珍）　記載は茶譜にある。

枸橘（綱目）

和名　からたち
學名　Poncirus trifoliata, Raf.
科名　へんるうだ科（芸香科）

釋名　臭橘

集解　時珍曰く、枸橘は處處にある。樹、葉はいづれも橘と同じ。ただ幹に刺が多く、二月に白花を開き、蘂が青く、香しくなく、結實は大いさ彈丸ほど、形は枳實のやうで、殼が薄くして香しくない。人家で多く收め、種ゑて藩籬にする。亦た或は小實を收め、僞つて枳實、及び青橘に充てて賣る。見別けるに注意を要する。

〔枸橘〕

葉【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【下痢膿血、後重には、萆薢(ひかい)と等分を炒つて性を存して研り、二錢を茶で調へて服す。又、喉瘻を治し、腫を消し、毒を導く】(時珍)

【附方】新一。【咽喉怪證】咽喉に瘡を生じ、疊んだやうに層層となり、痛まず、日久しくして竅が生じて臭氣を出し、飲食不能となるものには、臭橘葉を湯に煎じて連服する。必ず癒える(夏子益奇病方)

刺【主治】【風蟲牙痛には、一合づつを汁に煎じて含む】(時珍)

橘核【主治】【腸風下血の止まぬには、樗根白皮(ちよこんはくひ)と等分を炒つて研り、毎服一錢を皂莢の煎湯で調へて服す】(時珍)

【附方】新一。【白疹瘙痒】全身に生じたるには、小枸橘を細に切り、麥麩で黃に炒つて末にし、毎服二錢を酒に浸し、少時して酒を飲む。初めに枸橘の煎湯で患處を洗ふ(救急方)

樹皮【主治】【中風強直で屈伸し得ぬには、細切して一升を酒二升に一夜浸し、毎日半升を溫服する。酒が盡きたときは再び作る】(時珍)

巵子（本經中品）

和名　くちなし
學名　Gardenia florida, L.
科名　あかね科（茜草科）

【釋名】 **木丹**（本經） **越桃**（別錄） **鮮支**（綱目） 花を**薝蔔**と名ける。時珍曰く、巵は酒器であつて、巵の子がそれに象てゐるから名けたのである。俗に梔と書く。司馬相如の賦に『鮮支黃爍』とあり、註に『鮮支、卽ち支子なり』とある、佛書にはその花を稱して薝蔔といつてある。謝靈運はこれを林蘭といひ、曾端伯は禪友と呼んだ。或は、薝蔔は金色のもので、巵子ではないともいふ。

【集解】 別錄に曰く、巵子は南陽の川谷に生ずる。九月に實を採つて暴乾する。

弘景曰く、處處にある。また兩三種あつて、小異がある。七稜のものを良しとする。霜を經てから取つて染料として用ゐる。藥としては甚だ稀だ。

頌曰く、今は南方、及び西蜀の州郡にいづれもある。木は高さ七八尺、葉は李に似て厚く硬く。また楟蒲子に似てゐる。二三月に白花を生じ、花はみな六出で甚だ芬香で

ある。俗說にこれは西域の薝蔔だといふ。夏、秋に實を結び、訶子のやうな狀態で、生では靑く、熟すると黃になり、中の仁は深紅である。南方では一般に競つてこれを栽培し、利益を擧げてゐる。貨殖傳に『巵茜千石、千戶侯と等し』とあつて、その意味は利得の多いものだといふのである。藥に入れるには山巵子を用ゐる。方書に所謂、越桃である。皮は薄くして圓く小さく、七稜から九稜まである刻房のものを佳とする。その大きくして長いものは、雷斅炮炙論に、伏尸巵子といひ、藥に入れて無力だとしてある。

〔巵　子〕

時珍曰く、巵子の葉は兎耳のやうで、厚くして深綠である。春榮えて秋瘁れ、夏に入つて花を開く、大いさ酒盃ほどで、瓣は白く、蘂は黃で、隨つて實を結び、皮は薄く、子は細で、鬚がある。霜後に採收する　蜀中には紅巵子といふがあり、花は爛紅色で、その實は物を染め

ると赭紅色になる。

修　治　斅曰く、凡そ使ふには、必ず雀腦の如くにして幷に鬚長く九路あり、赤色のものを用ゐるを上とする。先づ皮、鬚を去つて仁を取り、甘草水で一夜浸し、漉し出して焙乾し、搗き篩つて末にして用ゐる。

震亨曰く、上焦、中焦を治するには殼のまま用ゐ、下焦には殼を去り、洗つて黄漿を去り、炒つて用ゐる。血病を治するには黑く炒つて用ゐる。

好古曰く、心胸中の熱を去るには仁を用ゐ、肌表の熱を去るには皮を用ゐる。

氣　味　【苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、大寒なり。元素曰く、氣は薄く、味は厚く、輕清にして上行し、氣は浮にして味は降である。陽中の陰である。杲曰く、沈であり、陰であつて、手の太陰、肺の經の血分に入る。丹書に、巵子は金を柔にするとある。

主　治　【五內の邪氣、胃中の熱氣、面赤酒皰、皶鼻、白癩、赤癩、瘡瘍】(本經)【目赤熱痛、胸心、大、小腸の大熱、心中煩悶を療ず】(別錄)【熱毒風を去り、時疾の熱を除き、五種の黄病を解し、五淋を利し、小便を通じ、消渴を解し、目を明に

し、中惡に主效があり、䗪蟲の毒を殺す】（甄權）【玉支の毒を解す】（弘景）○羊躑躅

である。【瘖瘂、紫癜風に主效がある】（孟詵）【心煩し、懊憹して眠り得ぬもの、臍

下の血滯で小便の利せぬものを治す】（元素）【三焦の火を瀉し、胃脘の血を淸し、熱

厥心痛を治し、熱鬱を解し、結氣を行る】（震亨）【吐血、衄血、血痢、下血、血淋、

損傷瘀血、及び傷寒勞復、熱厥頭痛、疝氣、湯火傷を治す】（時珍）

【發明】元素曰く、巵子は輕飄にして肺を象徵し、色は赤くして火を象徵する。

故に能く肺中の火を瀉す。その用に四あり、心の經の客熱が一、煩燥を除くが二、

上焦の虛熱を去るが三、風を治するが四である。

震亨曰く、巵子は三焦の火、及び痞塊中の火邪を瀉し、最も胃脘の血を淸す。そ

の性は屈曲し下行するもので、能く火を降して小便中に從つて泄去する。凡そ心痛

やや久しきは溫散に適せぬ、反つて火邪を助けるものだ。故に古方に、多く巵子を

用ゐて以て熱藥を導いてある。それで邪が伏し易くして病が退き易いのである。

好古曰く、本草には、巵子の能く吐することをいつてない。仲景は、これを用ゐ

て吐藥としたが、巵子の本來は吐藥でなく、邪氣が上にあるために拒して食を納れ

ないものを上らしめて吐かす、それで邪が出るのであつて、所謂「其の高き者は因て之れを越す」るである。或は、これを用ゐて小便を利する藥とするが、實は小便を利するのではなく、これは肺を淸するのだ。肺が淸すれば化行して、膀胱、津液の府がこの氣化を得て出るのである。本草に、大、小腸の熱を治すといつてある。それは辛が庚と合し、また丙と合し、また能く戊を泄し、先づ中州に入るからである。仲景は、煩燥を治するに巵子豉湯を用ゐたが、煩なるものは氣であり、躁なるものは血であつて、氣は肺を主とし、躁は血を主とする。故に巵子を用ゐて肺の煩を治し、香豉で腎躁を治したのである。

杲曰く、仲景は、巵子は色赤く、味苦くして心に入るを以て煩を治し、香豉は色黑く、味鹹く、腎に入るので躁を治したのである。

宗奭曰く、仲景は、傷寒の發汗、吐下の後に虛煩して眠を得ず、劇きものは必ず反覆、顚倒し、心中懊憹するを治するに、巵子豉湯で治した。その容體が虛に因るものだから、大黃を用ゐない、寒にして毒あるものだからである。巵子は寒ではあるが毒がなく、胃中の熱氣を治するものだ。既に血を亡ひ、津液を亡ひ、腑臟に潤

養がなくなつて內に虛熱を生ずるは、この物でなければ去ることが出來ないのである。又、心の經の留熱、小便赤澀を治するに、皮を去つた梔子、火で煨いた大黃、連翹、炙甘草等分を用ゐて末にし、水で三錢を煎じて服すれば、利せぬものはない。頌曰く、張仲景、及び古今の名醫は、發黃を治するに、いづれも梔子、茵蔯、甘草、香豉の四物を用ゐて湯飲とした。又、大病後の勞復を治するに、いづれも梔子、鼠矢等分を用ゐ、小便を利して癒えた。その方は極めて多い、悉くを記載するわけに行かぬ。

【附方】 舊十、新十七。【鼻中の衄血】山梔子を灰に燒いて吹く。屢〻用ゐて有效だつた。（黎居士易簡方）【小便不通】梔子仁十四箇、獨頭蒜一箇、滄鹽少量を搗き、臍、及び囊に貼る。良久して通ずる。（普濟方）【血淋澀痛】生山梔子末、滑石等分を葱湯で服す。（經驗良方）【下利鮮血】梔子仁を灰に燒き、一錢匕を水で服す。（食療本草）【酒毒下血】老山梔子仁を焙じて研り、一錢匕づつを新汲水で服す。（聖惠方）【熱毒血痢】梔子十四箇を皮を去つて末に搗き、蜜で梧子大の丸にし、毎服三丸を一日三服する。大いに效がある。また水で煎じて服するもよし。（肘後方）【臨產下痢】梔子

を燒いて研り、一匙を空心に熱酒で服す。甚しきも五服に過ぎず。（勝金方）【婦人の胎腫】濕熱に屬する。山巵子一合を炒つて研り、二三錢づつを米飲で服す。丸にして服するもよし。（丹溪方）【熱水腫疾】山巵子仁を炒つて研り、三錢を米飲で服す。上焦に熱あるものならば殼のまま用ゐる。（丹溪纂要）【霍亂轉筋】心腹脹滿し、また吐下を得ぬには、巵子十四箇を燒いて研り、熱酒で服す。立ろに癒える（肘後方）【冷熱腹痛】㽲痛し、飲食を思はぬには、山巵子、川烏頭等分を生で研つて末にし、酒糊で梧子大の丸にし、毎服十五丸を生薑湯で服す。小腹痛には茴香湯で服す。（博濟方）【胃脘の火痛】大山巵子七箇、或は九箇を炒焦し、水一盞で七分に煎じ、生薑汁を入れて飲む。立ろに止む。復發したものは必ず效がない。玄明粉一錢を服すれば立ろに止む。（丹溪纂要）【五臟の諸氣】少陰の血を益す。巵子を黑く炒つて研末し、生薑と共に煎じて飲む。甚だ捷である（丹溪纂要）【五尸注病】沖發して心脇刺痛し、纏綿として時なきには、巵子二十一箇を燒いて末にし、水で服す。（肘後方）【熱病の食復】及び交接後に發動して死せんとし、言語不能なるには、巵子三十箇を水三升で一升に煎じて服し、微汗せしめる。（梅師方）【小兒の狂躁】蓄熱が下に在

り、身熱し、狂躁し、昏迷し物を食はぬには、巵子仁七箇、豆豉五錢を水一盞で七分に煎じて服す。或は吐し、或は吐せず、立ろに效がある。(岡孝忠集效方)【盤腸釣氣】越桃仁半兩、草烏頭少量を共に炒つて草烏を去り、白芷一錢を入れて末にし、毎服半錢を茴香葱白湯で服す。(普濟方)【赤眼腸祕】山巵子七箇を孔を鑽つて煨熟し、水一升で半升に煎じて滓を去り、大黃末三錢を入れて溫服する。(普濟方)【飯を喫ふと直ちに出すもの】巵子二十箇を微し炒つて皮を去り、水で煎じて服す。(怪證奇方)【風痰頭痛】忍び難きには、巵子末を蜜で濃く和し、舌上に傅ける。吐して止む。(兵部手集)【鼻上の酒皶】巵子を炒つて研り、黃蠟で和して彈子大の丸にし、毎服一丸を嚼細して茶で服す。一日二服。酒、麩、煎、炙を忌む。(許學士本事方)【火焰丹毒】巵子を搗き、水で和して塗る。(梅師方)【火瘡の未だ起らぬもの】巵子仁を燒いて研り、麻油で和して封ずる。已に瘡と成つたものは、白糖を燒いて灰を粉す。(千金方)【眉中の練癬】巵子を燒いて研り、油で和して傅ける。(保幼大全)【折傷腫痛】巵子、白麪を共に搗いて塗る。甚だ效がある(集簡方)【狂犬の咬傷】巵子皮を燒いて研り、石硫黃と等分を末にして傅ける。一日三回。(梅師方)【湯盪、火燒】巵子末を雞子淸

で和し、濃く搗く（救急方）

花　主治　【顏色を悅くする。千金翼では面膏にこれを用ゐてある】（時珍）

附錄　木戟（別錄）　有名未用に曰く、山中に生ずる。葉は巵子のやうだ。味は辛し、溫にして毒なし、痃癖の氣の臟腑に在るものに主效がある。

木戟
和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

酸棗（本經上品）

和名　されぶとなつめ
學名　Zizyphus vulgaris, Lam. var. Spinosus, Bunge.
科名　くろうめもどき科（鼠李科）

釋名　樲（爾雅）　山棗

集解　別錄に曰く、酸棗は河東の川澤に生ずる。八月に實を採つて陰乾し、四十日にして成る。

弘景曰く、今は東山の地方に產する。卽ち山棗樹の子だといふ。武昌棗に似て味が極めて酸し。東部地方ではこれを噉ひ、それで睡を醒す。經の文に『眠り得ぬを療ず』とあると正反對である。

恭曰く、これは卽ち樲棗であつて、樹は大いさ大棗ほど、實は一定の形がない。

但し大棗中の味の酸きものがそれである。今の醫者は棘實を以て酸棗としてゐるが、大なる誤だ。

藏器曰く、酸棗は、大棗中の酸きものだとするからには、これが卽ち眞の棗なるわけだ。復た酸と名けるわけがあらうか。既に酸と名けてまた小といふが、現に棗中の酸きもの必ずしも小さいと限らず、小なるもの必ずしも酸いと限らない。ただ嵩陽子は『余の家は滑臺に在る今の酸棗縣は卽ち滑の屬邑である。その樹は高さ數丈、徑圍一二尺、木理は極めて細かく堅くして且つ重く、車軸、及び匙、筯等に作られる。その樹皮もやはり細かくして硬く、文は蛇鱗に似てゐる。その棗は圓く小さくして味が酸く、その核は微し圓くして仁がやや長く、色は赤くして丹のやうだ。これが醫界で重ぜられるものなの

〔酸　棗〕
——錢な白棗と名ける——

で、土地の者にも得易くない。現に商人の販賣してゐるものはみな棘子である」といひ、又「山棗は、樹は棘のやう、その子は生棗のやう、その核は骨のやう、その肉は酸滑である。好く食へるもので、山間の人民はこれを果に當てゝゐる」といつた。

○頌曰く、今は汴、洛の附近、及び西北の州郡にいづれもある。野生で、多く坡坂、及び城壘の間にあり、棗木に似て皮が細かく、その木心は赤色で、莖、葉は倶に青い。花は棗花に似て、八月實を結び、紫紅色で、棗に似て圓く小さく、味は酸い。當月に實を採つて核中の仁を取る。孟子のいつた「其の樲棗を養ふ」とはこの物である。嵩陽子は、酸棗縣に產するものが眞物で、現に販賣してゐるものはみな棘實だといつた。用ゐるには、尤も識別を正確にせねばならぬ。

○志曰く、酸棗は卽ち棘實であつて、更に他の物ではない。これを大棗の味の酸きものといふが如きは全く非である。酸棗は小さくして圓く、その核中の仁は微し扁い。大棗仁そのものは大きくして長いものだ。相類してゐない。

○宗奭曰く、天下いづれにもある。ただ產する土地に適不適があるだけだ。嵩陽子

は、酸棗は木が高大なもので、現に販賣するものはみな棘子だといつたが、この說は盡してゐない。蓋し實は小さければ棘となり、大きければ酸棗となり、平地では長じ易く、崖塹に在つては生じ難いのである。それ故に棘は多く崖塹の上に生ずるのだが、久しく樵らねば幹を成す。さうなると一般に呼んで酸棗といひ、更に棘といはぬのだ。その實は一本である。この物は纔に三尺になると花を開いて子を結ぶもので、ただ科の小なるものは氣味が薄く、木の大なるものは氣味が厚いのである。今は陝西の臨潼の山野に產するものがやはり好し。これは土地が適するのだ。後の記載に白棘の一條があるが、それは酸棗のまだ長大ならぬ時の枝上の刺である。長成するに及んでその實が大きく、その刺がまた少くなるのだ。故に棗は大木を取り、刺は小科を取るので、必しも强ひて區別するに及ばない。

酸棗【氣　味】【酸し、平にして毒なし】宗奭曰く、微熱なり、時珍曰く、仁は味甘し、氣は平である。斅曰く、仁を用ゐるには、葉を拌ぜて半日蒸し、皮、尖を去る。之才曰く、防已を惡む。

【主　治】【心腹寒熱、邪結氣聚、四肢酸痛、濕痺。久しく服すれば五臟を安じ、

身を輕くし、天年を延べる】(本經)【煩心して眠り得ぬもの、臍の上下の痛み、血轉、久洩、虛汗、煩渴、中を補し、肝氣を益し、筋骨を堅くし、陰氣を助け、能く人をして肥健ならしめる】(別錄)【筋骨風には、仁を炒いて研り、湯で服す】(甄權)

【發明】恭曰く、本經には、實を用ゐて眠り得ぬを療するとし、仁を用ゐると言つてないが、今の方ではみな仁を用ゐる。中を補し、肝を益し、筋骨を堅くし、陰氣を助けるはみな酸棗仁の功である。

宗奭曰く、酸棗は、經には仁を用ゐるといつてないが、今では天下みなこれを用ゐる。

志曰く、按ずるに、五代史の後唐の刊石藥驗に『酸棗仁は、睡多きには生で使ふ。睡り得ぬには炒り熟する』とある。陶氏は「これを食つて睡を醒すが、經に「眠り得ぬを療ずる」とある』といつたが、蓋しその子の肉は、味酸く、これを食へば睡くなくなり、核中の仁は、服すれば眠り得ぬを療するので、正に麻黃が汗を發し、その根節が汗を止めるやうなものである。

時珍曰く、酸棗實は味酸く、性收する。故に肝病、寒熱結氣、酸痺、久泄、臍下

満痛の症を治す。その仁は甘くして潤ふ。故に熟して用ゐれば、膽虚して眠り得ず、煩渇、虚汗するの證を治するのである。生で用ゐれば膽熱で眠を好むを治す。いづれも厥陰、少陽の藥である。今一般には專らこれを心の患者の藥としてゐるが、殊だこの關係に無知なものだ。

附方　舊五、新二。【膽風沈睡】膽風の毒氣で虚實調はず、昏沈して多く睡るには、酸棗仁一兩を用ゐて生で全挺を用ゐ、蠟茶二兩を生薑汁を塗つて炙き焦して散にし、毎服二錢を水七分で六分に煎じて温服する。(簡要濟衆方)【膽虚不眠】心の多く驚悸するには、酸棗仁一兩を香しく炒り、搗いて散にし、毎服二錢を竹葉湯で調へて服す。○和劑局方では、人參一兩、辰砂半兩、乳香二錢半を加へ、煉蜜で丸にして服す。【振悸不眠】胡洽方の酸棗仁湯――酸棗仁二升、茯苓、白朮、人參、甘草各二兩、生薑六兩を用ゐ、水八升で三升に煮て分服する(圖經)【虚煩不眠】深師方の酸棗仁湯――酸棗仁二升、蝭母、乾薑、茯苓、芎藭各二兩、甘草を炙いて一兩を用ゐ、水一斗で先づ棗仁を煮て三升を減じてから、共に煮て三升を取つて分服する。(圖經本草)【骨蒸不眠】心煩するには、酸棗仁一兩を水二盞で研つて汁を絞り

取り、粳米二合を入れて粥に煮、熟するを候て地黄汁一合を入れ、再び煮匀ぜて食ふ。(太平聖惠方)【睡中に汗の出るもの】酸棗仁、人參、茯苓等分を末にし、每服一錢を米飲で服す。(簡便方)【刺の肉中に入りたるとき】酸棗核を燒いて末にし、水で服す。立ろに出る。(外臺祕要)

白棘 (本經中品)

和名　なつめのはり
學名　Zizyphus vulgaris, Lam. (spino)
科名　くろうめもどき科 (鼠李科)

【校正】別錄の棘刺花を併せ入る。

【釋名】**棘刺**(別錄) **棘鍼**(別錄) **赤龍爪**(綱目) 花を **刺原** と名ける。**菥蓂**(別錄) **馬朐** 音は劬(ク)である。時珍曰く、獨生して高きものを棗といひ、列生して低きものを棘といふ。故に朿を重ねたのが棗であり、朿を平べたのが棘であつて、二物は名を觀て直ちに辨る。朿は卽ち刺の字である。菥蓂といふは大薺と同名だが、一物ではない。

【集解】別錄に曰く、白棘は雍州の川谷に生ずる。棘刺花は道旁に生ずる。冬

至後の一百二十日にこれを採り、四月に實を採る。
當之曰く、白棘といふは酸棗樹の鍼である。今一般に天門冬の苗を用ゐてこれに代へるが、眞でない。
恭曰く、棘に赤、白の二種ある。白棘は莖が粉のやうに白く、子、葉は赤棘と同じ。棘中にも復たあるが、やはり得難いものだ。その刺は白きものを用ゐるを佳とすべきものである。然し刺に鈎、直の二種あつて、直きものは補益に入れるに宜く、鈎れるものは瘡腫を療するに宜し。花といふは卽ちその花で、更に別物ではない。天門冬、一名顚棘を南方では棘鍼に代へるが、非である。
保昇曰く、棘に赤、白の二種ある。切韻に『棘は小棗なり』とある。田野の間にいづれもあり、叢の高さ二三尺、花、葉、莖、實いづれも棗に似てゐる。
宗奭曰く、本文に『白棘、一名棘鍼、棘刺』とあつて、かく明瞭な事實である。諸家は強ひて疑惑を生じてゐるが、此には取らない。白棘といふは、肥盛にして紫色なる枝に、自らある皺んで薄い白膜を先づ剝き起したもののことだ。故に白棘とは白きを取るの意味なので、これ以外にはないのである。

白棘 氣味 【辛し、寒にして毒なし】 主治 【心腹痛、癰腫。膿を潰し、痛を止め、結を決刺する】(本經) 【男子の虛損で陰痿し、精の自ら出るものを療じ、腎氣を補し、精髓を益す。棗鍼は、腰痛、喉痺不通を療す】(別錄)

附方　舊五、新七。 【小便尿血】棘刺三升を水五升で二升に煮取り、三回に分服する。(外臺祕要) 【腹脇の刺痛】腎臟の虛冷に原因するもので、忍び難いものである。棘鍼の鈎子一合を焙じ、檳榔一錢半とを水一盞で五分に煎じ、好酒半盞を入れ、更に煎じて三五沸し、二回に分服する。(聖驗方) 【頭風疼痛】倒鈎棘鍼四十九箇を燒いて性を存し、丁香一箇、麝香を皂子一箇ほどと末にし、左右に隨つて鼻に嗃ぐ。(聖惠方) 【眼睫の拳毛】赤龍爪——倒鈎棘である。一百二十箇、地龍二條、木賊二百二十節、木鼈子仁二箇を炒つて末にし、睫毛を摘み去り、毎日これを鼻に嗃ぐ。一日三五回。(普濟方) 【齲齒の腐朽】棘鍼二百箇、卽ち棗樹の刺の朽ちて地に落ちたものである。水三升で一升に煮て含漱する。○或は燒き瀝して日日に塗り、後に雄黃末を傅ければ癒える。(外臺祕要) 【小兒の喉痺】棘鍼を灰に燒き、半錢を水で服す。(聖惠方) 【小兒の口噤】驚風で乳を飮まぬには、白棘を燒いて末にし、水で一錢を服

す。(聖惠方)【小兒の丹毒】棘根を水で煮た汁で洗ふ。(千金方)【癧疽、痔漏】方は上に同じ。【丁瘡惡腫】棘鍼の倒鉤の爛れたもの三箇、丁香七箇を共に瓶に入れて燒いて性を存し、生後一个月以內の孩子の糞で和して塗る。一日三回。○又ある方では、曲頭棘刺三百箇、陳橘皮二兩を水五升で一升半に煎じて分服する。(聖惠方)【諸腫の膿あるもの】棘鍼を灰に燒き、一錢を水で服す。一夜にして頭が出る。(千金方)【小兒の諸疳】棘鍼、瓜蔕等分を末にし、鼻中に吹き入る。一日三回。(聖惠方)

枝 [主治]【燒いた油を髮に塗れば垢膩を解す】(宗奭)

棘刺花(別錄) [氣味]【苦し、平にして毒なし】[主治]【金瘡內漏】(別錄)

實 [主治]【心腹痿痺。熱を除き、小便を利す】(別錄)

葉 [主治]【脛臁瘡。搗いて傅ける。また晒し研つて麻油で調へて傅けるがよし】(時珍)

蕤核 蕤は儒誰の切(ズヰ) (本經上品)

和名 未詳
學名 Prunus sp.? or Cotoneaster sp.?
科名 いばら科(薔薇科)

白桵　音は蕤（ズキ）である。時珍曰く、爾雅に『棫は白桵なり』とあるが即ちこの物である。その花、實が蕤蕤として下垂してゐるところから桵といつたので、後世一般に蕤と書く。柞木も棫と名けるが、物は異ふ。

【集解】別錄に曰く、蕤核は函谷の川谷、及び巴西に生ずる。

〔蕤　核〕

弘景曰く、今は彭城に産する。大いさ烏豆ほど、形は圓くして扁く、文理があり、狀態は胡桃核に似てゐる。今は一般にみな殼を合せて用ゐるが、これは破つて仁を取つて秤るべきものである。

保昇曰く、今は雍州に産する。樹實であつて、葉は細く、枸杞に似て狹く長い。花は白く、子は莖に附いて生り、紫赤色で、大いさ五味子ほどである。莖に細刺が多い。五月、六月に熟する。實を採つて日光で乾す。

頌曰く、今は河東、幷州にもある。木は高さ五七尺、莖間に刺がある。

時珍曰く、郭璞が『白桜は小木であつて叢生し、刺があり、實は耳璫のやう、紫赤のもので、食へる』といつたのは卽ちこの物である。

仁 【修治】 斅曰く、凡そ蕤核仁を使ふには、湯で浸して皮、尖を去り、擘いて兩片とし、毎四兩に芒硝一兩、木通草七兩を用ゐ、共に水で一伏時煮て仁を取り、膏に研つて藥に入れる。

【氣味】 【甘し、溫にして毒なし】別錄に曰く、微寒なり。普曰く、神農、雷公は甘し、毒なしといふ。平地に生ずる。八月に採る

【主治】 【心腹の邪熱、結氣。目を明にする。目赤痛傷で涙を出すもの、目腫眥爛。久しく服すれば身を輕くし、氣を益し、饑ゑず】(本經)【志を强くし、耳目を明にする】(吳普)【心下の結痰、痞氣を破る。齆鼻】(別錄)【鼻衄を治す】(甄權)【生は足睡を治し、熟は不眠を治す】(藏器)

【發明】 弘景曰く、醫方ではただ眼を療ずるだけだが、仙經では守中丸に合せる。

頌曰く、按ずるに、劉禹錫傳信方に著錄した治眼法は最も奇なるもので『眼の風

痒、或は生翳、或は赤眥、一切みな主效がある。宣州黄連末、蕤核仁を皮を去つて膏に研り、等分を和勻し、蚰のない乾棗二箇を下頭を割つて核を去り、右の二物を塡滿し、割いてある下頭を合定して少量の薄綿で裹み、大茶盌に盛つて銀器中に置き、文武火で雞子一箇ほどに煎じ取り、綿で濾して罐に收め、それを點眼する。萬萬失なし。前後數十人に試みてみな應驗があつたといつてある。今の醫家もやはり多く用ゐて效を得てゐる。

附方　新七。【春雪膏】肝虛し、風熱上攻して眼目昏暗し、痒痛し、隱澀し、赤腫し、羞明し、遠視不能となり、風を迎へて涙が出、多く黑花を見るを治す。蕤仁を皮を去り、油を壓し去つて二兩、腦子二錢半を研り勻ぜ、生蜜六錢を和して收め、それを點眼する。(和劑局方)【百點膏】一切の眼疾を治す。蕤仁を油を去つて三錢、甘草、防風各六錢、黃連五錢を用ゐ、三味を熬つて濃汁を取り、次に蕤仁膏を下し、日日に點ける。(孫氏集效方)【撥雲膏】翳膜を取下す。蕤仁を油を去つて五分、青鹽一分、猪胰子五錢を共に搗くこと二千下して泥のやうにし、罐に貯へて點ける。○又ある方では、蕤仁一兩を油を去り、白蓬砂一錢、麝香二分を入れて研り

匀ぜて貯へる。翳を去るに言ふべからざる妙がある。【飛血眼】蕤仁一兩を皮を去り、細辛半兩、苦竹葉三握を洗ひ、水二升で一升に煎じて汁を濾し、頻りに濕して洗ふ。(聖濟總錄)【赤爛眼】近效方では、蕤仁四十九箇を皮を去り、胡粉を焼いて金のやうな色にして一雞子大を研り匀ぜ、酥を杏仁一箇ほど、龍腦を豆三粒ほどを研り匀ぜ、油紙で裹んで貯へ、麻子ほどづつを大小背上に塗る、頻りに用ゐて效を取る。○經驗良方では、蕤仁、杏仁各一兩を皮を去つて研り匀ぜ、膩粉少量を入れて丸にし、毎にそれを熱湯で化して洗ふ。

山茱萸（本經中品）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

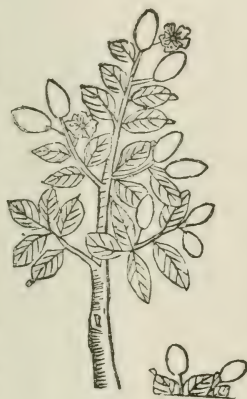
【釋名】**蜀酸棗**(本經) **肉棗**(綱目) **鬾實**(別錄) **雞足**(呉普) **鼠矢**(呉普)

宗奭曰く、山茱萸と呉茱萸とは甚だ相類してゐない。治療も大いに同じくない。何に縁つてかく命名したものか一向判らない。

時珍曰く、又、本經に、一名蜀酸棗とあり、今一般に肉棗と呼ぶは、いづれも形

が象てゐるからである。

集解　別錄に曰く、山茱萸は漢中の山谷、及び瑯琊、寃句、東海の承縣に生ずる。九月、十月に實を採つて陰乾する。

頌曰く、葉は梅のやうで刺があり、二月に杏のやうな花を開き、四月に酸棗のやうで赤色の實がある。五月に實を採る。

弘景曰く、近道の諸山中に產する。大樹であつて、子が初めて熟してまだ乾かぬときは、赤色で胡頽子のやうだ。やはり噉へる。既に乾けば皮が甚だ薄くなる。核と合せて用うべきものである。

〔山茱萸〕

頌曰く、今は海州、兗州にもある。木は高さ一丈餘、葉は楡花に似て白色である。雷斅炮炙論に『一種の雀兒蘇といふは眞に相似てゐるが、ただそれは核に八稜があるもので、藥に入れては用ゐない』といつてある。

時珍曰く、雀兒蘇、卽ち胡頽子である。

實　修治　斅曰く、凡そ使ふには、酒で潤して核を去り皮を取る。一斤でただ四兩までを取れるものだ。緩火で熬り乾してから用ゐる。能く元氣を壯にし、精を祕す。その核は能く精を滑するから服してはならぬ。

氣味　【酸し、平にして毒なし】別錄に曰く、微溫なり。普曰く、神農黃帝、雷公、扁鵲は酸し、毒なしといひ、岐伯は辛しといふ。權曰く、鹹く辛し、大熱なり。好古曰く、陽中の陰である。足の厥陰、少陰の經の氣分に分る。之才曰く、蓼實が使となる。桔梗、防風、防已を惡む。

主治　【心下の邪氣、寒熱。中を溫め、寒を逐ふ。濕痺。三蟲を去る。久しく服すれば身を輕くする】(本經)【腸、胃の風邪、寒熱、疝瘕、頭風、風氣去來、鼻塞、目黃、耳聾、面皰。氣を下し、汗を出し、陰を强くし、精を益し、五臟を安じ、九竅を通じ、小便利を止める。久しく服すれば目を明にし、力を强くし、天年を長くする】(別錄)【腦骨痛を治し、耳鳴を療じ、腎氣を補し、陽道を興し、陰莖を堅くし、精髓を添へ、老人の尿の節度なきを止め、面上の瘡を治し、能く汗を發し、月水不

定を止める】(甄權)【腰膝を煖め、水臟を助け、一切の風を除き、一切の氣を逐ひ、癥結(ちようけつ)を破り、酒皶(しゆさ)を治す】(大明)【肝を溫める】(元素)

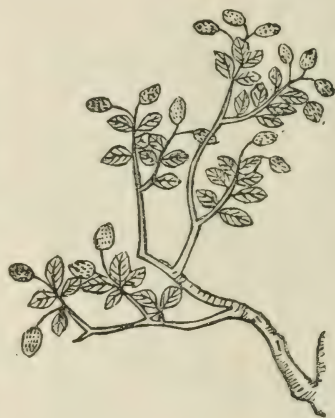
【發明】 好古曰く、滑するときは氣脫する。濇劑(しよくざい)はそれを收める所以のものだ。山茱萸が小便利を止め、精氣を祕するは、その味酸、濇にして以て滑を收めるを取るのである。仲景は八味丸にこれを用ゐて君とした。その性味が知られるであらう。

【附方】 新一。【草還丹】元陽を益し、元氣を補し、元精を固くし、元神を壯にする。乃ち天年を延べ、嗣を續ぐの至藥である。山茱萸を酒に浸し肉を取つて一斤、破故紙(ほこし)を酒に浸し焙じ乾して半斤、當歸四兩、麝香一錢を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、毎服八十一丸を就寢時に鹽酒で服す。(吳旻扶壽方)

胡頹子 (拾遺)

和名　なはしろぐみ
學名　Elaeagnus pungens, Thunb.
科名　ぐみ科（胡頹子科）

【釋名】 **蒲頹子**(綱目) **盧都子**(綱目) **雀兒酥**(炮炙) **半含春**(綱目) **黃婆嬭**

時珍曰く、陶弘景は、山茱萸、及び櫻桃に註して、いづれも胡頽子に似てゐるといひ、冬を淩いで凋まぬ。やはり人を益するものだらうといつた。陳藏器は又、茱萸の條下に於てこれを詳著したが、別に識る者はない。今これを考討するに、即ち雷斅炮炙論に所謂、雀兒酥であつて、雀兒が喜んでこれを食ふ。越地方では蒲頽子と呼び、南方の地では盧都子と呼び、呉地方では半含春と呼ぶ。それは早熟なるを言つたものだ。襄漢地方では黄婆嬭と呼ぶ。それは乳頭に似てゐることを形容したものだ。劉績の霏雪錄に『安南に紅色の小果があつて、盧都子と名ける』とあるを見ると、盧都といふは蠻語である。

〔胡頽子〕
——盧都子——

集解 藏器曰く、胡頽子は平林の間に生ずる。樹は高さ一丈餘、冬凋まず、

葉の陰が白い。冬花さき春熟して最も早い。小兒がこれを食つて果に當てる。又、一種の大いに相似たものがあつて、冬凋まず、春實つて夏熟する。木半夏と呼ばれてゐる。別の功效はない。

〔木半夏〕
―四月子―

時珍曰く、胡頽、即ち盧都子であつて、その樹は高さ六七尺、その枝は柔軟で蔓のやうだ。その葉は微に棠梨に似て、長く狹くして尖り、表は青くして背が白く、倶に星のやうな細點があり、老いると星が起つて麩のやうになり、冬を經て凋まない。春前に花を生じ、朶は丁香のやう、蒂は極めて細くして倒垂し、正月になると白花を敷いて實を結ぶ。實は小さく長く、さながら山茱萸のやうで、上にやはり細星があつて斑點し、生では青く、熟すれば紅くなる。立夏前に採つて食ふ。酸く澁く、やはり山茱萸のやうだが、ただ八稜が

あり、軟で堅くない。核の內部に絲のやうな白綿があつて、その中に小仁がある。その木半夏といふは、樹、葉、花、實、及び星斑、氣味いづれも盧都と同じだが、ただ枝が强硬で、葉は微に圓くして尖があり、その實は圓く、櫻桃のやうで長くない點が異ふだけだ。立夏後に始めて熟するところから、吳、楚地方では四月子と呼び、また野櫻桃ともいふ。その核はやはり八稜である。大體に於いてこれは一類の二種である。

子 氣味 【酸し、平にして毒なし】弘景曰く、寒熱病には用ゐられない。

主治 【水痢を止める】(藏器)

根 氣味 子に同じ。 主治 【湯に煎じ、惡瘡疥、幷に犬、馬の瘑瘡を洗ふ】(藏器)【吐血の止まぬには水で煎じて飲む。喉痺痛塞には酒で煎じて灌ぐ。いづれも效がある】(時珍)

葉 氣味 子に同じ。 主治 【肺虛の短氣、喘欬の劇きには、葉を取つて焙じ硏り、米飮で二錢を服す】(時珍)

發明 時珍曰く、蒲頽葉で喘欬を治する方は中藏經に記載があつて『甚しき

者にもやはり神の如き效がある。ある人は喘を三十年患つたが、これを服して頓に癒えたといふ。甚しきものは服藥後に胸上に小癮疹を生じて痒くなるが、それで痊えるのである。虛することの甚しきには人參等分を加へ、「淸肺散と名ける」とある。大體に於て、いづれもその酸濇にして肺氣の耗散を收斂する功を取つただけのものである。

金櫻子（蜀本草）

和名　なにはいばら
學名　Rosa laevigata, Michx.
科名　いばら科（薔薇科）

【釋名】 **刺梨子**（開寶）　**山石榴**（綱目）　**山雞頭子**　時珍曰く、金櫻は金罌と書くべきもので、その子の形が黃罌のやうだといふ意味である。石榴、雞頭はいづれも形容である。又、杜鵑花、小蘗いづれも山石榴と名けるが、同一物ではない。

頌曰く、林檎、何裏子もやはり金櫻子といひ、これは名は同じだが物は異ふ。

【集解】 韓保昇曰く、金櫻子は處によつてある。花は白く、子の形は榅桲に似て小さく、色は黃で刺がある。方術に多く用ゐる。

頌曰く、今は南中の州郡に多くあるが、江西、劒南、嶺外のものを勝れたものとする。郊野中に叢生し、大いに薔薇に類して刺がある。四月に白花を開き、夏、秋に實を結ぶ。やはり刺があり、黃赤色で、形は小石榴に似てゐる。十一月、十二月に採る。江南、蜀中では、一般に熬つて煎酒に作つて服す。補治に殊效があるといふ。宜州から提出した報告に『本草にこれを螢實と謂ふ』とあるが、今比較して見るに螢實とは殊だ別である。

〔金櫻子〕

時珍曰く、山林の間に甚だ多い。花は最も白膩であつて、その實は大いさ指頭ほどあり、狀態は石榴のやうで長い。その核は細碎で白毛があり、螢實の核のやうで味が甚だ濇い。

子 氣味 【酸く濇し、平にして毒なし】 主治 【脾泄、下痢。小便利を止め、精氣を濇する。久しく服すれば、人をして寒に耐へしめ、身を輕くする】(蜀本)

【發明】頌曰く、洪州、昌州では、いづれもその子を煮て煎に作つて贈物にする。服食家は、これを煎じて雞頭實粉を和し、丸にして服し、水陸丹と名ける。氣を益し、眞を補するに最も佳し。

愼微曰く、沈存中の筆談に『金櫻子で遺泄を止めるは、その溫にして且つ濇するを取るのである。世人は紅熟する時を待つて汁を取つて熬膏するが、味が甘くなつて全く濇味を斷ち、全然本性を失つて了ふ。大なる誤だ。ただ半黃なるものを取り、乾し擣いて末にして用うべきものである』とある。

宗奭曰く、九月、十月に霜熟した時に採つて用ゐる。さなくば反て人をして利せしめる。

震亨曰く、經絡、隧道は通暢するから平和なのである。而るに無知なものは濇性を取つて快とし、金櫻子を熬つて煎にして食つてゐる。自ら安寧を破壞するのだ。結果に對する責任は誰が取るであらう。

時珍曰く、故なくしてこれを服し、それで快慾を取ることは不可である。もし精氣の固からぬものの場合ならば、これを服することに何の差閊があらうぞ。

附方 舊一、新二。【金櫻子煎】霜後に竹夾子で摘み取り、木臼中に入れて杵いて刺を去り、擘いて核を去り、水で淘洗してから擣き爛らし、大鍋に入れて水で煎ずる。火を絶えしめてはならぬ。半まで煎じ減らして濾し、かくて煎じて稀餳のやうにし、毎服一匙を煖酒一盞で調へて服す。血を活し、顏を駐める。その功は述べ盡せぬ。（孫眞人食忌）【血を補し、精を益す】金櫻子、卽ち山石榴を刺、及び子を去つて焙じて四兩、縮砂二兩を末にし、煉蜜で和して梧子大の丸にし、五十丸づつを空心に溫酒で服す。（奇效良方）【久痢の止まぬもの】嚴緊絕妙の方である。罌粟殼を醋で炒り、金櫻の花、葉、及び子と等分を末にし、蜜で芡子大の丸にし、五七丸づつを陳皮の煎湯で化して服す。（普濟方）

花 氣味 子に同じ。主治 【冷熱痢を止め、寸白蟲を殺す。鐵粉に和して研り勻ぜ、白髮を拔いて塗れば黑きものを生ずる。また鬚を染めるもよし】（大明）

葉 主治 【癰腫には、嫩葉を研り爛らし、少量の鹽を入れて塗り、頭を留めて氣を洩す。又、金瘡出血には、五月五日に採り、桑葉、苧葉と等分を陰乾し、研

末して傳ける　血が止んで口が合する。軍中一捻金と名ける】(時珍)

東行根 [氣味] 子に同じ。[主治] 【寸白蟲には、二兩を剉んで糯米三十粒を入れ、水二升で五合に煎じ、空心に服す。須臾にして瀉下して神驗がある。その皮を炒つて用ゐれば、瀉血、及び崩中帶下(ほうちゅうたいげ)を止める】(大明)【滑利を止める。醋で煎じて服すれば骨硬を化す】(時珍)

郁李（本經下品）

和名　にはうめ
學名　Prunus japonica, Thunb.
科名　いばら科（薔薇科）

[釋名] **薁李**(詩疏) **鬱李** **車下李**(別錄) **爵李**(本經) **雀梅**(詩疏) (一)**棠棣**

時珍曰く、郁の字は山海經に栯(いく)と書いてある。馥郁である。花、實倶に香しいから名としたのである。陸機の詩疏に薁(いく)の字を書たのは正しくない。爾雅の棠棣(たうたい)は即ちこの物だ。或は唐棣だともいふが、それは誤だ。唐棣とは扶移(ふい)のことで白楊の類である。

[集解] 別錄に曰く、郁李は高山の川谷、及び丘陵の上に生ずる。五月、六月

(一) 棠棣、一ニ常棣ニ作ル。常ヲ正トスベキカ。

に根を採る。
弘景曰く、山野處處にある。子は熟すると赤色で、やはり噉へるものだ。
保昇曰く、樹は高さ五六尺、葉、花、及び樹はいづれも大李に似てゐるが、ただ子が小さく、櫻桃ほどで、甘く酸くして香しく、少し濇味がある。
禹錫曰く、按ずるに、郭璞は『棠棣は山中に生ずる。子は櫻桃のやうで、食へる』といひ、詩の小雅に『棠棣之華、鄂不韡韡』とあり、陸機の註に『白棣樹であつて、李のやうで小さく、正白である。今官園に種ゑてある。一名莫李といふ。又、赤棣樹といふがあり、やはり白棣に似たもので、葉は刺楡の葉のやうで微し圓く、子は正赤で、郁李のやうで小さい。五月始めて熟する。關西、天水、隴西に多くある』といつてある。

〔郁　李〕

宗奭曰く、郁李子は御李子のやうで紅く熟し、啗ふに堪へるが微し濇い。やはり蜜煎にするがよし。陝西に甚だ多い。

時珍曰く、その花は粉紅色で、實は小李ほどである。

頌曰く、今汴洛で人家の園圃に植ゑる一種は、枝莖が長條を作し、花は極めて繁密で、葉の多いものだ。やはり郁李といふが、藥に入れるに堪へない。

核仁　修治　斅曰く、先づ湯で浸して皮、尖を去り、生蜜で一夜浸し、漉し出して陰乾し、膏のやうに研つて用ゐる。

氣味　【酸し、平にして毒なし】權曰く、苦く辛し。元素曰く、辛く苦し。陰中の陽であつて、脾の經の氣分の藥である。　主治　【大腹水腫、面目、四肢の浮腫。小便、水道を利す】(本經)【腸中の結氣、關格不通】(甄權)【五臟、膀胱の急痛を泄し、腰胯冷膿を宣し、宿食を消し、氣を下す】(大明)【癖氣を破り、四肢の水を下す。酒で四十九粒を服すれば、能く結氣を瀉す】(孟詵)【血を破り、燥を潤ほす】(元素)【專ら大腸の氣滯、燥濇不通を治す】(李杲)【研つて龍腦を和して赤眼に點ける】(宗奭)

【發明】時珍曰く、郁李仁は甘く苦くして潤ふ。その性は降である。故に能く氣を下し、水を利す。按ずるに、宋史の錢乙傳に『一乳婦は悸に因つて病み、旣に癒えたのだが、目を張つて瞑し得なかつた。その時乙は「郁李を煮て酒で飲ませ、醉はせれば癒える。その理由は、目の系は內に肝、膽に連るものだ。恐らくこれは氣結し、膽が橫つて下らぬのである。郁李は能く結を去るものだ。酒に隨つて膽に入れば、結が去り、膽が下り、そこで目が能く瞑するやうになるのだ」といつた』とある。これは蓋し肯綮の妙を得たものである。

○頌曰く、必效方では、癖を療するに車下李仁を取り、湯で潤ほして皮、及び竝仁のものを去り、乾麪と相拌ぜて搗いて餠のやうにし、乾くときは水少量を入れ、大いさを病人の掌の大いさほどにして二箇の麪餠に作り、微し炙いて黃にし、熟するほどにしてはならぬ。空腹に一餠を食ふ。それで快利するものである。利せぬときは更に一餠を食ひ、或は熱米湯を飲む。利するを度とする。利して止まぬときは醋飯で止める。利後には虛するものである。もし病がなほ盡きぬときは、一二日にして力を量つて更に一服を進め、病の盡きるを限度とする。酪、及び牛、馬の肉等を食

つてはならぬ。畢に試みて神驗があつた。但し病の輕重を量り、意を以て加減せねばならぬものである。小兒にも用ゐられる。

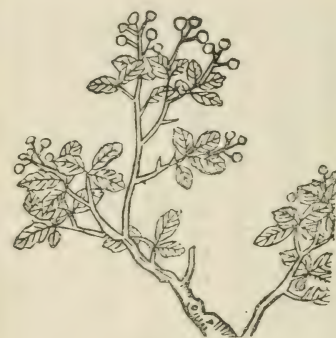
【附方】舊四、新二。【小兒の多熱】熱湯で郁李仁を研つて杏酪のやうにし、一日に二合を服す。（姚和衆至寶方）【小兒の閉結】襁褓の小兒の大小便不通、幷に驚熱、痰實で澹動を得んと欲するには、大黃を酒で浸して炒り、郁李仁を皮を去り研つて各一錢、滑石末一兩を搗き和して黍米大の丸にし、二歲の小兒に三丸、人を量つて加減し、白湯で服す。（錢乙直訣）【腫滿氣急】臥し得ぬには、郁李仁一大合を末に搗き、麪を和して餠にして喫ふ。口に入れば大便が通じ、氣を泄して癒える（楊氏產乳）【脚氣浮腫】心腹滿し、大小便通ぜず、氣急し、喘息するには、郁李仁十二分を搗き爛らし、水で研つて汁を絞り、薏苡を搗いて栗ほどの大いさにして三合と共に粥に煮て食ふ。（韋宙獨行方）【卒心痛刺】郁李仁二十一箇を嚼み爛らし、新汲水、或は溫湯で服す。須臾にして痛が止む。そのとき薄荷鹽湯を呷ふ（姚和衆至寶方）【皮膚の血汗】郁李仁を皮を去り、研つて一錢を鵞梨の搗汁で調へて服す。（聖濟總錄）

根【氣味】【酸し、涼にして毒なし】【主治】【齒齗腫、齲齒。齒を堅くす

る」(本經)「白蟲を去る」(別錄)「風蟲牙痛を治するに、濃煎して含漱する。小兒の身熱を治するに、湯にして浴す」(大明)「結氣を宣し、積聚を破る」(甄權)

鼠李（本經下品）

和名　たうくろうめもどき
學名　Rhamnus virgatus, Roxb. ?
科名　くろうめもどき科（鼠李科）

釋名　**楮李**（錢氏）　**鼠梓**（別錄）　**山李子**（圖經）　**牛李**（別錄）　**皂李**（蘇恭）　**烏槎子**　**趙李**（蘇恭）　**牛皂子**（綱目）　**烏巢子**（圖經）　**椑**　音は卑（ヒ）である。時珍曰く、鼠李は地方音で、また楮李とも書く。名稱の意味は判らない。綠色に物を染め得るところから、俗に皂李、及び烏巢と稱する。巢、槎、趙といふは、いづれも皂子の發音の訛である。苦楸といふ一種のものも鼠梓

〔鼠　李〕
—牛李・皂李—

と名けるが、これとは同じくない。梓の條を見よ。

[集解] 別錄に曰く、鼠李は田野に生ずる。採るに一定の時期はない。

頌曰く、卽ち烏巢子であつて、今は蜀川に多くある。枝、葉は李のやう、その實は五味子のやう、色は黳黑で、その汁は紫色である。熟したとき採り、日光で乾して用ゐる。皮は採るに一定の時期はない。

宗奭曰く、卽ち牛李であつて、木は高さ七八尺、葉は李のやうで、但だ狹くして澤がない。子は條上の四邊に生り、生の時は靑く、熟すると紫黑色になり、秋になつて葉が落ちても子は枝に在る。何處にでもあるが、今は關陝、及び湖南、江の南北に甚だ多い。

時珍曰く、道路の邊に生じ、その實は枝に附いて穗のやうになる。一般にその嫩きものを采つて汁を取り、刷つて綠色に染める。

子 [氣味] 【苦し、涼にして微毒あり】 [主治] 【寒熱、瘰癧瘡】（本經）【水腫、腹脹滿】（大明）【下血、及び碎肉。疝瘕、積冷を除くに、九蒸し酒に漬けて三合を服す。一日再服。又、擣いて牛、馬、六畜の瘡中に蟲を生じたるに傅ける】（蘇恭）

【痘瘡黑陷、及び痧癬の蟲あるもの】(時珍)

[發明] 時珍曰く、牛李は、痘瘡黑陷、及び出て快ならぬもの、或は穢氣に觸れて黑陷したるを治す。古昔には知るものがなかつたが、ただ錢乙の小兒直訣の必勝膏に用ゐてあつて『牛李子、即ち鼠李子を、九月後に黑熟したものを採り、砂盆に入れて擂り爛らし、生絹で汁を捩り取り、銀石器で熬つて膏にし、甆瓶に貯へて常に風を透らしめ、毎服皂子一箇ほどを桃膠の煎湯に化して服し、人が二十支里を歩行するほどの時を經て再び一服を進める。その瘡は自然に紅活する。麝香少量を入れるが尤も妙である。もし生のもののない時は、乾いたものを末にし、熬つて膏にする』といつてある。又、九籥衞生方にも『痘瘡黑陷には、牛李子一兩を炒つて研り、桃膠半兩とを用ゐ、毎服一錢を水七分で四分に煎じて溫服する』とある。

[附方] 新二。【諸瘡寒熱】毒痺、及び六畜の蟲瘡には、鼠李を生で搗いて傅ける。(聖惠方)【齒䘌腫痛】牛李の煮汁一盞を空服に飮み、同時に頻りに含漱する。(聖濟錄)

皮 [氣味]【苦し、微寒にして毒なし】恭曰く、皮、子倶に小毒あり。○鐵を

忌む。

主治 【身皮の熱毒】(別錄)【風痺】(大明)【諸瘡、寒熱】(蘇恭)【口疳、齲齒。及び疳蟲が人の脊骨を蝕するものには、濃汁に煮て灌ぐ。神良である】(孟詵)

發明 頌曰く、劉禹錫傳信方に、大人の口中疳瘡、發背を治し、萬に一を失たぬ。山李子根、一名牛李子、薔薇根の野外のものを各〻細切して五升、水五大斗を半日煎じ、その濃汁を銀、銅器中に盛り、重湯で煎じて一二升までにし、稠くなるを待つて瓷瓶に取つて貯へ、少少づつを含嚥する。必ず瘥える。醬、醋、油膩、熱麪、及び肉を忌む。發背の場合には帛に塗つて貼る。神效がある。襄州の軍事柳崖の妻竇氏が口疳を患ひ、十五年にして齒が盡く落ち斷え、近づくべからざるものだつたが、これを用ゐて癒えたとある。

女貞 (本經上品)

和名　たうねずみもち
學名　Ligustrum lucidum, Ait.
科名　もくせい科(木犀科)

釋名 **貞**(一)**木**(山海經) **冬青**(綱目) **蠟樹** 時珍曰く、この木は冬を淩いで青翠なるもので、貞守の操がある。故に貞女を以て形容したのである。琴操の記載

(一)木、別本ニ女ニ作ル。

に『魯に處女あり、女貞木を見て歌を作る』とあるは卽ちこの物であつて、蘇顔頌の序に『女貞の木、一名冬青。霜を負ふて葱翠に、柯を振つて風を淩ぐ。故に淸士はその名を欽ひ、而して貞女はその質を慕ふ』とあるがそれである。別に冬青といふ、これと同名のものがあるが、此に方書に用ゐるところの冬青はみなこの女貞である。近頃では、この木に蠟蟲を放つて飼ふところから、俗に蠟樹と呼ぶ。

〔女　貞〕

【集解】別錄に曰く、女貞實は武陵の川谷に生ずる。立冬に採る。

弘景曰く、諸處に時にある。葉は茂盛して冬を淩いで凋まず、皮は靑く、肉は白く、秦皮と表裏をなすものだ。その樹は冬を以て生じ、愛すべきものである。仙方ではやはり服食するが、俗方では一向に用ゐない。一般に識るものがない。

恭曰く、女貞は、葉は冬青樹、及び枸骨に似て、その實は九月に熟し、黑くして牛李子に似てゐる。陶氏が、秦皮と表裏をなすといつたのは誤である。秦皮は、葉は細くして冬枯れ、貞葉は大きくして冬茂る。殊だ類せぬものだ。

頌曰く、女貞は處處にある。山海經に『泰山、貞木多し』とあるがこれである。その葉は枸骨、及び冬青木に似て、冬を凌いで凋まない。五月に靑白色の細花を開き、九月に實が成る。牛李子に似たものだ。或は、卽ち今の冬青樹だともいふ。しかし冬青木は理肌が白く、文は象齒のやうで、實はやはり病を治す。嶺南の一種の女貞は、花が極めて繁茂して深紅色である。これとは殊だ異ふ。藥に入れるといふことを聞かない。

時珍曰く、女貞、冬青、枸骨は三種の樹であつて、女貞は卽ち今俗に呼ぶ蠟樹、冬青は卽ち今俗に呼ぶ凍青樹、枸骨は卽ち今俗に呼ぶ猫兒刺である。東方地方では女貞が茂盛するところからまた冬青とも呼ぶが、冬青とは同名の異物である。蓋し一類の二種なのだ。二種いづれも子から自生するもので、最も長じ易く、その葉は厚くして柔く長く、綠色で表は靑く背が淡い。女貞は、葉の長いものは四五寸あ

つて子は黒色だが、凍青は、葉が微し圓く、子は紅色で異ふのである。その花はいづれも繁多で、子はいづれも纍纍として樹に滿ち、冬期に鸜鵒(くよく)が喜(この)んで食ふ。木の肌はいづれも白膩である。今一般には女貞なることを知らずしてただ蠟樹と呼んでゐる。立夏前後に蠟蟲の種子を取り、裹んで枝上に置くと、半月にしてその蟲が化し、出て枝上に延緣しで白蠟を造成する。民間では大いに利益を擧げるものだ。詳細は蟲部白蠟の條下に記載してある。枸骨は本條に詳記する。

實 【氣味】【苦し、平にして毒なし】時珍曰く、溫なり。【主治】【中を補し、五臟を安じ、精神を養ひ、百病を除く。久しく服すれば、肥健にし、身を輕くし、老いず】(本經)【陰を強くし、腰膝を健にし、白髮を變じ、目を明にする】(時珍)

【發明】 時珍曰く、女貞實なるものは、上品の無毒の妙藥である。而るに古方に用ゐることを知るものの罕(まれ)だつたのは何故であらうか。典術に『女貞木なるものは少陰の精である。故に冬に葉が落ちない』とある。これで觀(み)ると、その腎を益するの功が十分推想される。世に傳はつてゐる女貞丹の方は『女貞實、卽ち冬青樹子を梗、葉を去り、酒に一晝夜浸し、布袋で皮を擦り去り、晒乾(しやかん)して末にし、旱蓮草が

出るを待つて多く數石を取り、搗汁を濃く熬つて和して梧子大の丸にし、毎夜酒で百丸を送下する。旬日間ならずして膂力が倍加し、老者は夜起きなくなり、又、能く白髮を變じて黑色にし、腰膝を强くし、陰氣を起す』といつてある。

附方　新二。【虛損百病】久しく服すれば髮の白きが再び黑くなり、老を返して童に還す。女貞實を十月上巳の日に採收して陰乾し、用ゐる時に酒に一日浸し、蒸し透して晒乾して一斤四兩、旱蓮草を五月に採收して陰乾して十兩を末にし、桑椹子を三月に採收して陰乾して十兩を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、毎服七八十丸を淡鹽湯で服す。もし四月に採收した桑椹の搗汁で藥を和し、七月に採收した旱蓮の搗汁で藥を和する場合には蜜を用ゐない。（簡便方）【風熱赤眼】冬青子を多少に拘らず搗いて汁を熬膏し、淨瓶に收めて固封し、七日間地中に埋め、それを每に點眼する。（濟急仙方）

葉　氣味　【微し苦し、平にして毒なし】　主治　【風を除き、血を散じ、腫を消し、痛を定め、頭目昏痛を治す。諸惡瘡腫、胻瘡潰爛の久しきものには、水で煮て熱に乘じて貼り、頻りに取り換へる。米醋で煮るもよし。口舌に瘡を生じ、

舌腫し脹出するには、搗汁で含み浸し、涎を吐す】(時珍)

【附方】 新三。【風熱赤眼】普濟方では、冬青葉五斗を用ゐ、搗汁に新磚數片を五日間浸し、坑を掘つて磚をその內に架けて蓋ひ、日久しくして生じた霜を刮り下し、腦子少量を入れて點ける。○簡便方では、雅州黃連二兩、冬青葉四兩を用ゐ、水に三晝夜浸して熬り、膏にして取收しめて眼に點ける。【一切の眼疾】冬青葉を研り爛らし、朴硝を入れて貼る。海上の方である。(普濟方)

冬青(綱目)

和名 なゝめのき
學名 Ilex Oldhami, Miq.
科名 もちのき科(冬青科)

【校正】 原は女貞の條下に附記してあつたが、本書には一條を分出した。

【釋名】 **凍青** 藏器曰く、冬期に青翠なるものだから冬青と名けたのである。江東地方では凍青と呼ぶ。

【集解】 藏器曰く、冬青木は肌が白くして文があり、象齒笏に(一)作る。その葉

(一)作字似字トスベキガ如シ。

は(三)緋を染めるに堪へる。李邕は『冬青は五臺山に出る。椿に似て、子は赤くして郁李の如く、微し酸くして性は熱だ』といつたが、これとは小異がある。これは兩種の冬青があるのであらう。

時珍曰く、凍青はやはり女貞の別種であつて、山中に時にある。但し葉が微し圓くして子が赤いものを凍青とし、葉が長くして子の黒いものを女貞とする。按ずるに、救荒本草に『凍青樹は、高さ一丈ばかり、樹は枸骨子樹に似て極めて茂盛し、又、葉は樝子樹の葉に似て小さく、また椿葉にも似て微し窄く、頭が頗る圓くして尖らない。五月に細白花を開き、豆ほどの大いさの紅色の子を結ぶ。その嫩芽を煠熟し、水で浸して苦味を去り、淘洗して五味で調へれば食へる』とある。

〔冬　青〕

(三) 緋字疑フベシ。

子及び**木皮**【氣味】【甘く苦し、涼にして毒なし】【主治】【酒に浸したものは風虚を去り、肌膚を補益する。皮の功も同じ】(藏器)

葉【主治】【灰に燒いて面膏に入れる。癉瘃を治し、瘢痕を滅し、殊だ效がある】(蘇頌)

【附方】新一。【痔瘡】冬至の日に凍青樹子を取り、鹽酒に一夜浸し、九蒸九晒して瓶に收め、毎日空心に七十粒を酒で呑み、就寢時に再服する(集簡方)

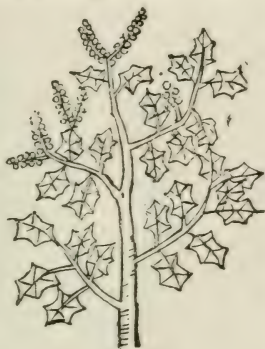
枸骨(綱目)

和名 ひひらぎもち
學名 Ilex cornuta, Lindl.
科名 もちのき科(冬青科)

【校正】原は女貞の條下に附記してあつたが、本書には一條を分出した。

【釋名】**猫兒刺** 藏器曰く、これは木の肌が白くして狗の骨のやうなものだ。時珍曰く、葉に五刺があつて猫の形のやうだ。故にかく名けたのである。箭骨も枸骨と名けてこれと同名である。

【集解】藏器曰く、枸骨樹は杜仲のやうなものだ。詩に『南山有枸』とあるがそれで、陸機の詩疏に『山木であつて、その狀態は櫨のやうである。木理は白く滑で函板になる』木蝱が葉中にゐて、卷いて子のやうだが、それが羽化して蝱になる。

頌曰く、江浙の間に多く生ずる。南方人は取つて盆、器に旋り作るが、甚だ佳し。

時珍曰く、枸骨は、樹は女貞のやうで肌理が甚だ白い。葉は長さ二三寸、青翠で厚く硬く、五本の刺角があり、四時凋まない。五月細かな白花を開き、女貞、及び菝葜子のやうな實を結び、九月熟した時は緋紅色になり、皮は薄く、味は甘く、核に四瓣がある。一般にその木皮を採つて煎膏し、鳥雀を粘する。それを粘黐といふ。

〔枸骨〕
——猫兒刺——

木皮【氣味】【微し苦し、涼にして毒なし】【主治】【酒に浸せば腰脚を補

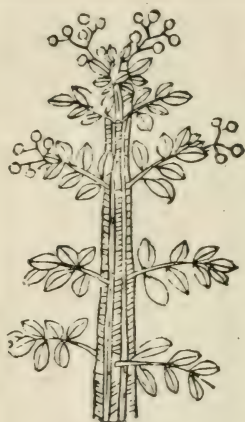
して健ならしめる】（藏器）

枝葉　〔氣味〕　皮に同じ。　〔主治〕　【灰に燒いて汁を淋し、或は膏に煎じて白癜風に塗る】（藏器）

衞矛（本經中品）

和名　にしきぎ
學名　Evonymus striatus, Makino. var. alatus, Makino.
科名　にしきぎ科（衞矛科）

〔釋名〕　**鬼箭**（別錄）　**神箭**　時珍曰く、劉熙の釋名に『齊人は羽を衞といふ。この物は幹に直羽があつて箭羽、矛刃で自ら衞る狀態のやうだから名けたものだ』とある。張揖の廣雅には、これを神箭といつてある。寇宗奭の衍義には『人家で多くこれを燔いて祟を遺る』とある。これで見ると三種の名稱はまた或はこの意味を取つたものであらう。

〔衞矛──鬼箭〕

［集解］別錄に曰く、衞矛は霍山の山谷に生ずる。八月に採つて陰乾する。

普曰く、葉は桃のやう、箭は羽のやうだ。正月、二月、七月に採つて陰乾する。或は田野に生ずる。

弘景曰く、山野の處處にある。皮羽を削り取つて藥に入れる。用をなすことは甚だ稀だ。

頌曰く、今は江淮の州郡にもやはりあることがある。三月以後に莖が生え、莖の長さ四五尺ばかりで、その幹に三枚の羽があり、狀態が箭の翎羽のやうだ。葉は山茶に似て靑色である。八月、十一月、十二月に條莖を採つて陰乾する。その木はまた狗骨とも名ける。

宗奭曰く、所在の山谷にいづれもあるが、平陸には未だ嘗て見ない。葉は絕だ少く、その莖は黃褐色で蘗皮のやう、三面は鋒刃のやうである。人家で多くこれを燔いて祟を遣る。方藥には用ゐることが少だ。

時珍曰く、鬼箭は山石の間に生じ、株は小さくして叢を成し、春嫩條が長じ、條上の四面に羽があり、箭羽のやうで、一見して三羽のやうに見えるのである。葉

は青く、形狀は野茶に似て對生する。味は酸く濇し。三四月に黃綠色の碎花を開き、結實は大いさ冬青子ほどである。山間に住むものは識らずして樵り採つてゐる。

斆曰く、凡そ使ふには、石茆根頭を用ゐてはならぬ。眞に相似てゐるが、ただそれは上葉が同じくなく、味が各〻別なものだ。

修治 斆曰く、採取したならばただ箭頭を使ふ。その赤毛を拭ひ去り、酥を拌ぜて緩に炒る。每兩に酥二錢半を用ゐる。

氣味 【苦し、寒にして毒なし】普曰く、神農、黃帝は苦し、毒なしといふ。大明曰く、甘く濇し。權曰く、小毒あり。

主治 【婦人の崩中、下血、腹滿、汗出。邪を除き、鬼毒、蠱疰を殺す】(本經)【中惡、腹痛。白蟲を去り、皮膚の風毒腫を消し、陰中を解せしめる】(別錄)【婦人の血氣を療ずるに大效がある】(蘇恭)【陳血を破り、能く胎を落し、百邪、鬼魅に主效がある】(甄權)【月經を通じ、癥結を破り、血崩帶下を止め、腹臟の蟲を殺す。及び產後の血絞腹痛】(大明)

發明 頌曰く、古方に、崔氏が惡疰の心に在つて忍び難く痛むを療じた鬼箭

羽湯があり、姚僧坦集驗方の卒暴心痛、忽ち惡氣に中つて毒痛するを療ずる大黃湯にもこれを用ゐてあつて、いづれも大方である。外臺祕要、千金の諸書中に記載がある。

時珍曰く、凡そ婦人產後の血運、血結、血が胸中に聚り、或は小腹に偏し、或は脇肋に連るには、四物湯四兩に當歸を倍し、鬼箭、紅花、玄胡索各一兩を加へ、末にして煎じて服す。

附方　新二。【產後の敗血】兒枕塊硬し、疼痛發歇し、及び新產の虛に乘じて風寒が內に搏ち、惡露が快からず、臍腹が堅脹するには、當歸散——當歸を炒り、鬼箭を中心の木を去り、紅藍花各一兩を用ゐ、每服三錢を酒一大盞で七分に煎じ、食前に溫服する（和劑局方）【鬼瘧の日に發するもの】鬼箭羽、鯪鯉甲を灰に燒き、二錢半を末とし、一字づつを發作時に鼻に嗃ふ。○又ある法。鬼箭羽末一分、砒霜一錢、五靈脂一兩を末にし、發作時に冷水で一錢を服す。（いづれも聖濟總錄）

山礬（綱目）

和名 げつきつ
學名 Murraya exotica, L.
科名 へんるうだ科（芸香科）

【釋名】**芸香** 音は云（ウン）である。**椗花** 音は定（テイ）である。**柘花** 柘の音は鄭（テイ）である。**瑒花** 音は暢（チヤウ）である。**春桂**（俗） **七里香** 時珍曰く、芸とは盛にして多きことだ。老子の『方物芸芸』といつたそれである。この物は山野に叢生して甚だ多く、花が繁くして香が馥しい。故にかく名けたのである。按ずるに、周必大は『柘は陣（ヂン）と發音することが南史の記載にあつて、荆地方の俗間では、柘を鄭と訛り、これを鄭礬と呼ぶ。ところが江南ではまた鄭を瑒と訛つてゐる』といつた。黄庭堅は『江南の野中に椗花が極めて多い。野人は葉を採つて灰に燒き、それで紫を染めて黝まし、礬を用ゐずして染上げる。予はそこでその名を易へて山礬とした』といつてある。

【集解】時珍曰く、山礬は江淮、湖、蜀の野中に生ずる。樹は、大なるものは株の高さ一丈ばかり、その葉は梔子に似て、葉が生えて節に對せず、光澤があり、

堅强でほぼ齒があり、冬を凌いで凋まぬ。三月に花を開き、繁く白く、雪のやうに六出で、黃蘂があり、甚だ芬香である。その結ぶ子は、大いさ椒ほどの靑黑色のもので、熟すれば黃色になり、食へる。その葉は味が濇い。地方人は取つて物を黃に染め、及び豆腐を收し、或は茗中に雜へ入れる。按ずるに、沈括の筆談に『古人は藏書の蠹を

〔山　礬〕

辟けるに芸香を用ゐ、芸草といつた。卽ち今の七里香である。葉は豌豆に類し、小叢を作して生え、啜り嗅いで見ると極めて芬香である。秋期中に葉上にある微白にして粉汚のやうなものが蠹を辟けるに殊に效驗がある』とある。又按ずるに、蒼頡の解詁に『芸香は邪蒿に似て、食ふ可し。紙蠹を辟く』とあり、許愼の說文に『芸は苜蓿に似たり』とあり、成公綏の芸香賦に『莖は秋竹に類し、枝は靑松に象たり』とあり、郭義恭の廣志には芸香膠があり、杜陽編に『芸は香草であつて、于闐國に

産する。その香は潔白にして玉のやうだ。土に入つても朽ちぬ。元載は芸暉堂を造り、これを屑にして壁に塗つた』とある。この數說に據ると、芸香といふものは一種ではないらしい。沈氏が七里香と指定したのは何に據つたものか判らないが、葉は豌豆に類し、嗅すれば芬香で、秋期中に粉があるといふところを見ると、やはり今の七里香とは相類せぬ。その狀態は頗る烏藥の葉に似てゐるやうだ。恐らく沈氏もやはり自己の臆度だつたのだらう。晉端伯は七里香を玉蕋花としたが、その的否のほどは判らない。

葉【氣味】【酸く濇く微し甘し、毒なし】【主治】【久痢。渇を止め、蚕、蠹を殺す。三十片を老薑三片と共に用ゐ、水で浸して蒸し、熱して爛弦風眼を洗ふ】(時珍)

梫木(拾遺)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】藏器曰く、梫木は江東の林筤の間に生ずる。樹は石榴のやうで葉が細

かく、高さ一丈餘、四月に白くして雪のやうな花を開く。

時珍曰く、この木は、今は識るものがないが、その狀態は頗る山礬に近い。恐らく古と今との稱呼の相異だらう。姑くその後に附記する。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】【主治】【產後血を破るに、煮て汁を服す。その葉を汁に煎じて瘡癬を洗ひ、搗き碎いて蛇傷を封ずる】（藏器）

南燭（宋開寶）

和名　しやしやんぼ
學名　Vaccinium bracteatum, Thunb.
科名　しやくなげ科（石南科）

【釋名】**南天燭**（圖經）**南燭草木**（隱訣）**男續**（同上）**染菽**（同上）**猴菽草**（同上）**草木之王**（同上）**惟那木**（同上）**牛筋**（拾遺）**烏飯草**（日華）**墨飯草**（綱目）**楊桐**（綱目）赤きものを**文燭**と名ける。時珍曰く、南燭の諸名は、多くは解らない。藏器曰く、汁を取り米を漬けて烏飯を作り、それを食ふと牛筋のやうに健になる。故に牛筋といふ。

【集解】藏器曰く、南燭は高山に生ずる。冬を經て凋まない。

頌曰く、今はただ江東の州郡にある。株は高さ三五尺、葉は苦楝に類して小さく、冬を淩いで凋まぬ。冬に紅子を生じて穗になる。人家で多く庭除の間に植ゑ、俗に南天燭といふ。時期に拘らず枝葉を採つて用ゐる。陶隱居の登眞隱訣に、太極眞人

〔南燭〕
——烏飯葉——

青精乾石䬪飯の法を記載して『その種は木であつて草に似てゐる。故に南燭草木と號し、一名男續、一名猴藥、一名後草、一名惟那木、一名草木之王といひ、凡そ八種の名があるが、それぞれその邦域に從つて呼ばれる名であつて、正號は南燭である。嵩高、少室、抱犢、雞頭の山に生じ、江左、吳越に至つて多い。土人は名けて猴菽といひ、或は染菽といふ。粗ぼ眞の名と彷彿たるものだ』とある。この木は至つて長じ難く、初生二三年は菘菜の屬のやうな狀態で、また頗る

卮子にも似てゐるが、二三十年經つと大株に成る。故に木にして草に似てゐるといふのである。その子は茱萸のやうで、九月に熟し、酸美であつて食へる。葉は相對せず、茗に似て圓く厚く、味は少し酢し。冬、夏常に青い。枝、莖は微紫色で、大なるものはやはり高さ四五丈になるが、甚だ肥脆にして摧折し易い』とある。飯を作る法は穀部の青精乾石䭀飯の條に記載した。

時珍曰く、南燭は呉、楚の山中に甚だ多い。葉は山礬に似て、光滑にして味が酸く濇く、七月に小白花を開き、結實は朴樹の子のやうで簇を成し、生では青く、九月に熟すると紫色になり、內に細子がある。その味は甘く酸く、小兒がそれを食ふ。按ずるに、古今詩話に『卽ち楊桐である。葉は冬青に似て小さく、水に臨んで生えたものが尤も茂る。寒食にその葉を採り、水に漬けて飯を染めると、色が青くして光り、能く陽氣を資ける』とあり、又、沈括の筆談に『南燭草木は、本草、及び傳記に記述されてあるが、一般には識るものが少である。北方では一般に多く誤つて烏臼をこれとしてあるが、全く非である。今一般に所謂、南天燭がそのものだ。莖は蒴藋のやうで節があり、高さ三四尺のものだが、廬山には一丈に盈つるものがある。

南方地方に至つて多い。葉は微に楝(れん)に似て小さい。秋になると實(み)り、赤くして丹のやうだ』とある。

枝葉 [氣味] 【苦し、平にして毒なし】 時珍曰く、酸く濇し。[主治] 【泄を止め、睡を除き、筋を強くし、氣力を益す。久しく服すれば身を輕くし、天年を延べ、人をして饑ゑざらしめ、白を變じ、老を却(しりぞ)ける】(藏器)

[發明] 頌曰く、孫思邈千金月令方に、南燭煎——髭髮、及び容顏を益し、氣て補煖する。三月三日に葉、幷に蘂、子を採り、大淨瓶中に入れて乾し、童尿で盛り浸し、瓶に滿ててその口を固濟し、邪魔にならぬ觸らぬ場所に置き、一周年を經て取り開き、一匙づつを溫酒で調へて服す。一日二回。極めて效驗があるとある。上元寶經に『草木之王を服して氣と神とを通ぜしめ、靑燭の精を食つて命復た殞(えん)せず』とある。

[附方] 舊二。【一切の疾風】久しく服すれば身を輕くし、目を明にし、髮を黑くし、顏を駐める。南燭樹を用ゐ、春、夏は枝、葉を取り、秋、冬は根皮を取り、細剉して五斤を水五斗で慢火で二斗に煎じ取り、滓を去つて淨鍋に入れ、慢火で稀(き)

飴のやうに煎じて瓷瓶に盛り、一匙づつを溫酒で服し、一日三服する。ある方では、童尿を入れて共に煎じる。（聖惠方）【誤つて銅、鐵を呑みたるとき】下らぬには、南燭根を燒いて研り、一錢を熟水で調へて服す。直ちに下る（聖惠方）

子　氣味【酸く甘し、平にして毒なし】　主治【筋骨を强くし、氣力を益し、精を固くし、顏を駐める】（時珍）

青精飯　記載は穀部にある。

五加（本經上品）

和名　うこぎ
學名　Acanthopanax Sieboldianum, Makino.
科名　うこぎ科（五加科）

釋名　**五佳**（綱目）　**五花**（炮炙論）　**文章草**（綱目）　**白刺**（綱目）　**追風使**（圖經）　**木骨**（圖經）　**金鹽**（仙經）　**犲漆**（本經）　**犲節**（別錄）　時珍曰く、この藥は五葉交加したものを良しとする。故に五加と名け、又、五花と名ける。楊愼の丹鉛錄には五佳と書いて『一枝五葉のものが佳いからだ』といつた。蜀地方では白刺と呼ぶ。譙周の巴蜀異物志には、文章草と名けて贊があり、『文章酒を作り、能くその味を成す。

金を以て草を買ふ、その貴きを言はず』といつたのはこの物である。本草の犲漆、犲節なる名稱は何の意味を取つたものか判らない。

頌曰く、蘄州地方では木骨と呼び、呉中では俗に追風使と名ける。

【集解】別錄に曰く、五加皮は五葉のものが良し。漢中、及び寃句に生ずる。五月、七月に莖を採り、十月に根を採つて陰乾する。

〔五加皮〕

弘景曰く、近道處處にあるが、東方の地に彌よ多い。四葉のものも好し。

頌曰く、今は江淮、湖南の州郡にいづれもある。春苗が生え、莖、葉は倶に青く、叢を作す。莖は赤く、又、藤、葛に似て、高さ三五尺あり、上に黒刺がある。葉が五枚生えて簇を作すものが良し。四葉のものは最も多く、これに次ぐものだ。一葉毎に下に一刺が生えてゐる。三四月に白花を開いて青子を結び、六月になると次第に黒色になる。根は荊根のやうで、皮は黄黒、肉は白色で骨が硬い。一說に『現に

數種あつて、京師、北地のものは大片で秦皮、黄蘗などに類し、板のやうに平直で色が白く、絶だ氣味がなく、風痛を療ずるに頗る效があるが、その他には用ゐるところがない。吳中では野椿の根皮を剝いで五加としてゐるが、柔靭で味がなく、殊だ事實に乖き眞を失つたものだ。現に江淮に生ずるものは、根は地骨皮に類し、輕く脆かで香が芬しく、その苗、莖には刺があつて薔薇に類し、長さは一丈餘もあり、葉は五出で香氣は橄欖のやう、春期に實を結び、豆粒ほどの扁いもので色は青く、霜に逢ふと紫黒になる。俗には但だ追風使と名け、それを酒に漬けて風を療じてゐるが、それが實はその眞の五加皮なのだ』といふ。現に江淮、吳中では往往これを藩籬にしてゐる。正に薔薇、金櫻などの物に似たものだ。しかし北方の地方では多くこの種を用ゐることを知らない。

○斅曰く、五加皮は、樹の本は白楸樹で、その上にある葉は蒲葉のやうだ。三花のものは雄、五花のものは雌であつて、陽人には陰を使ひ、陰人には陽を使ふ。皮を剝いで陰乾する。

○機曰く、南地に生ずるものは草に類する。故に小さい。北地に生ずるものは木に

類する。故に大きい。

時珍曰く、春期に舊枝上に條、葉が抽き出る。山間の人民は採つて蔬茹とするが、正に枸杞のやうである。北方の沙地に生ずるものはみな木類であり、南方の堅地のものは草類のやうである。唐時代にはただ峡州のものだけを取つて貢に充てた。雷氏が『葉は蒲のやうだ』といつたのは非である。

根皮 莖も同じ。

氣味 【辛し、温にして毒なし】之才曰く、遠志が使となる。玄參、蛇皮を惡む。

主治 【心腹疝氣、腹痛。氣を益し、躄を療ず。小兒の三歳にして歩行不能なるもの、疽瘡、陰蝕】(本經)【男子の陰萎、嚢下濕、小便餘瀝、婦人の陰癢、及び腰脊痛、兩脚疼痺、風弱五緩、虚羸。中を補し、精を益し、筋骨を堅くし、志意を强くする。久しく服すれば身を輕くし、老に耐へる】(別錄)【惡風血を破逐する。四肢不遂、賊風で傷められたるもの、軟脚、劈腰。多年の瘀血の皮肌に在るに主效があり、痺濕、内不足を治す】(甄權)【目を明にし、氣を下し、中風の骨節攣急を治し、五勞、七傷を補す】(大明)【酒に釀して飲めば、風痺の四肢攣急を治す】(蘇頌)【末に

して酒に浸して飲めば、目僻、眼䁾を治す】(雷斅)　○【葉を蔬にして食へば、皮膚の風濕を去る】(大明)

【發明】　弘景曰く、根、莖を煮て酒に釀して飲めば人を益する。道家では、これを灰にして用ゐ、石と地楡とを煮る。いづれも祕法がある。

愼微曰く、東華眞人の煮石經に左の如くいつてある。

昔、西域眞人、王屋山の人、王常といふものあり。云く、何を以て長久を得る、何ぞ石蓄金鹽母を食はざる。何ぞ石を食ひ玉豉を用ゐざると。玉豉は地楡なり。金鹽は五加なり。皆是れ石を煮て餌し、長生を得るの藥なり。昔、孟綽子、董士固、相與に言て云く、寧ろ一把の五加を得ば、金玉滿車を用ゐず。寧ろ一斤の地楡を得ば、明月寶珠を用ゐずと。又、昔、魯定公の母、五加酒を服して以て不死なることを致し、尸解して去る。張子聲、揚建始、王叔牙、于世彥等、皆此の酒を服す。而して房室絕せず、壽三百年を得たり。亦た散と爲して以て湯茶に代ふ可し。王君云く、五加なる者は五車星の精なり。水は五湖に應じ、人は五德に應じ、位は五方に應じ、物は五車に應ず。

故に青精莖に入つては則ち東方の液有り。白氣節に入つては則ち西方の津有り。赤氣華に入つては則ち南方の光有り。玄精根に入つては則ち北方の粭有り。黄烟皮に入つては則ち戊已の靈有り。五神鎭生し、相轉じて育成す。之れを餌する者は眞仙す。之を服する者は嬰に反ると。

時珍曰く、五加は、風濕痿痺を治し、筋骨を壯にし、その功良深である。仙家で述べてゐるところは、實際とは距離があるやうだけれども、蓋し推奬の辭である。多く溢美に渉るは普通のことだ。造酒の方は、五加根皮を洗淨し、骨、莖、葉を去るもよし。水で汁に煎じ、麹を和して米を醸せば酒に成る。時時にそれを飮む。また酒で煮て飮むもよし。遠志を加へて使とすれば更に良し。ある方では、木瓜を加へて酒で煮て服す。談野翁試驗方に『神仙煮酒の法。五加皮、地楡を用ゐ、麤皮を刮り去つて各一斤を袋に盛り、無灰好酒二斗の中に入れ、大罈で封固し、大鍋に入れて文武火で煮る。罈の上に米一合を載せて置いて、米が熟するを度とし、取つて火毒を出し、滓を晒乾して丸にし、毎早朝五十丸を服し、藥酒で送下し、就寢時に再服する。能く風濕を去り、筋骨を壯にし、氣を順にし、痰を化し、精を添へ、髓

を補す。久しく服すれば天年を延べ、老を益す。功盡く述べ難し』とある。王綸の醫論には『風病に酒を飮めば能く痰火を生ずるが、ただ五加の一味を酒に浸して日日に數盃を飮めば最も益がある。諸種の酒に浸す藥では、ただ五加だけが酒と相合して且つ美味になる』とある。

【附　方】　舊二、新六。【虛勞不足】五加皮、枸杞根白皮各一斗、水一石五斗で汁七斗に煮取り、四斗を分け取つて麴一斗を浸し、三斗を飯に拌ぜ、普通の釀酒法のやうにし、熟するを待つて任意に飮む。（千金方）【男子、婦人の脚氣】骨節、皮膚の腫濕疼痛。これを服すれば、飮食を進め、氣力を健にし、事を忘れぬ。五加皮丸と名ける。四兩を酒に浸し、遠志を心を去つて四兩を酒に浸し、いづれも春、秋は三日、夏は二日、冬は四日浸し、日光で乾して末にし、酒に浸して作つた糊で梧子大の丸にし、毎服四五十丸を空心に溫酒で服す。藥酒が壞したときは別に酒を用ゐて糊を作る。（薩謙齊瑞竹堂方）【小兒の步行の遲きもの】三歲にして步行不能なるには、これを用ゐれば走るやうになる。五加皮五錢、牛膝、木瓜二錢半を末にし、毎服五分を米飮に酒二三點を入れて調へて服す。（全幼心鑑）【婦人の血勞】憔悴し、困倦し、喘

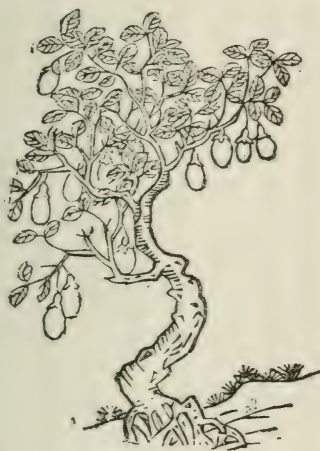
滿し、虛煩し、嗡嗡として少氣し、發熱し、汗多く、口乾き、舌澀り、食思なきものを血風勞と名ける。油煎散——五加皮、牡丹皮、赤芍藥、當歸各一兩を末にし、一錢づつを水一盞で、青錢一文に油を蘸けて藥に入れ、七分に煎じて溫服する。常に服すれば、能く婦人を肥やす。（太平惠民和劑局方）【五勞、七傷】五月五日に五加の莖を採り、七月七日に葉を採り、九月九日に根を取り、適當に修治して篩ひ、方寸匕づつを酒で服す。一日三服。久しく服すれば風勞を去る。（千金）【目瞑息膚】五加皮の水聲を聞かぬ處に生えたものを末に搗いて一升を、酒二升に和して七日浸し、一日二回服す。二七日間醋を禁ずる。全身に瘡を生ずる。それは毒が出るのである。出ぬときは生熟湯で浴し、瘡の癒を取る。（千金方）【服石の毒發】或は熱噤するには、冷地に臥し、五加皮二兩、水四升を二升半に煮取り、發した時に服す。（外臺祕要）【火竈丹毒】兩脚から起つて火で燒くやうなるには、五加の根、葉を灰に燒き、五兩を冶鐵工場の槽中の水で和して塗る。（楊氏產乳）

枸杞　地骨皮（本經上品）

和名　くこ
學名　Lycium chinense, Mill.
科名　なす科（茄科）

【釋名】　**枸檵**（爾雅）音は計（ケイ）である。別錄には枸忌と書いてある。**枸棘**（衍義）　**苦杞**（詩疏）　**甜菜**（圖經）　**天精**（抱朴）　**地骨**（本經）　**地節**（本經）　**地仙**（日華）　**却老**（別錄）　**羊乳**（別錄）　**仙人杖**（別錄）　**西王母杖**　時珍曰く、枸杞とは二種の樹の名稱であつて、この物の棘が枸の刺のやう、莖が杞の條のやうだから合併して名稱となつたのである。道書に、千載の枸杞はその形が犬のやうだ。故に枸なる名稱が生じたのだといつてあるが、その通りか否か判らない。

頌曰く、仙人杖には三種あつて、一はこの枸杞である。一は菜類で、葉が苦苣に似たものだ。一は枯死した竹などの黑いもののことである。

〔枸杞・地骨皮〕
——溲疏は刺がある——

【集解】別錄に曰く、枸杞は常山の平澤、及び諸丘陵の阪岸に生ずる。頌曰く、今は處處にある。春苗が生え、葉は石榴の葉のやうで軟く薄く、食品にもなり、俗に甜菜と呼ぶ。その莖幹は高さ三五尺で叢を作し、六月、七月に小さい紅紫の花を著け、隨つて紅實を結ぶ。形は微し長くして棗核のやうだ。その根を地骨と名ける。詩の小雅に『集于苞杞』とあり、陸機の詩疏に『一名苦杞。春生える。莖、葉、及び子は、服すれば身を輕くし、氣を益す』といつてある。今一般に相傳へていふ枸杞と枸棘の二種は相類してゐるが、その實の形が長くして枝に刺のないものが眞の枸杞である。圓くして刺のあるものは枸棘であつて、藥に入れるに堪へない。馬志は溲疏の條に註して『溲疏は刺がある。枸杞は刺がない。これで區別される』といつたが、溲疏にも巨骨なる名があつて、枸杞に地骨なる名があるやうだ。やはり相類するものだらうが、用ゐるには區別を明にせねばならぬ。或は高大なものだから區別されるともいふが、さうではない。現に枸杞には極めて高大なものがあつて、藥に入れて尤も神良である。

宗奭曰く、枸杞、枸棘の區別に徒に骨を折つてゐるが、凡そ杞には刺のないものはないので、建築材料になるほど大きくなつてもやはり棘はあるものだ。ただこの物は、小さいときは刺が多く、大きくなれば刺が少くなるので、さながら酸棗と棘とのやうに、その實は一物である。

時珍曰く、古代には、枸杞、地骨は常山のものを取つて上とし、その他の丘陵、阪岸のものもみな用ゐられたが、後世では、ただ陝西のものだけを取つて良しとし、また甘州のものを以て絶品とする。現に陝の蘭州、靈州、九原以西の枸杞はいづれも大樹であつて、その葉は厚く、根は粗い。河西、及び甘州のものはその子が圓く、櫻桃のやうで、暴乾すると小さく緊つて核が少く、乾いてもやはり紅く潤ひ、味は葡萄のやうに甘美で、果として食へる。それが他の地のものに異る點だ。沈存中の筆談にも『陝西の極邊に生ずるものは、高さ一丈餘、太さは柱になる。葉は長さ數寸、刺なく、根皮は厚朴のやうだ。そこで藥に入れるには大抵河西のものを以て上とする』といつてある。種樹書には『子を收め、及び根を掘つて肥壤中に種ゑ、苗の生ずるを待ち、剪つて蔬にして食ふが甚だ佳し』とある。

【氣味】【枸杞は、苦し、寒にして毒なし】別錄に曰く、根は大寒なり。子は微寒なり。毒なし。冬根を採り、春、夏葉を採り、秋莖、實を採る。

權曰く、枸杞は甘し、平なり。子、葉も同じ。

宗奭曰く、枸杞は梗皮を用うべきもの、地骨は根皮を用うべきもの、子は紅實を用うべきものである。その皮は寒、根は大寒、子は微寒である。今は一般に多くその子を用ゐて補腎藥としてゐるが、それは經の意義に就いて一向に徹底した考察を遂げないものだ。當然その虛實、冷熱を量つて用ゐねばならぬものである。

時珍曰く、今本經に就いて考察するに、ただ枸杞といつただけで、その根、莖、葉、子のいづれとも指定してない。別錄には、根は大寒、子は微寒の字を增してあつて、枸杞とは苗をいふらしくなつてゐる。而るに甄氏の藥性論では『枸杞は甘し平なり、子、葉いづれも同じ』といつて、枸杞とは根をいふらしく、寇氏の衍義では又、枸杞を梗皮としてあるが、いづれも臆說である。按ずるに、陶弘景は『枸杞の根、實は服食家の用となる』といひ、西河女子の枸杞を服する法は、根、莖、葉、花、實倶に採つて用ゐたといふところを見れば、本經に列してある氣、主治は、蓋

し根、苗、花、實を通じていつてあるので、初には區別はしなかつたのだ。後世に及んで枸杞子を滋補藥とし、地骨皮を退熱藥としたので、始めて二樣に岐ちが生じたのである。竊に謂ふに、枸杞は、苗、葉は味苦く甘くして氣は涼であり、根は味甘く淡くして氣は寒であり、子は味甘く氣は平である。氣味が殊つてゐる以上は功用も當然別でなければならない。これが後人が前人未到の處を發いたものである。

【主治】〔枸杞は、五内の邪氣、熱中消渴、周痺風濕に主效がある。久しく服すれば筋骨を堅くし、身を輕くし、老いず、寒著に耐へる〕（本經）〔胸脇の氣、熱客頭痛を下し、內傷大勞で噓吸するを補し、陰を强くし、大、小腸を利す〕（別錄）〔精氣、諸不足を補し、顏色を易へ、白を變じ、目を明にし、神を安じ、人をして長壽ならしめる〕（甄權）

【發明】時珍曰く、これは通じて枸杞の根、苗、花、實を竝に用ゐての功を指したものである。その單用しての功をば左に列記する。

苗【氣味】〔苦し、寒なり〕權曰く、甘し、平なり。時珍曰く、甘し、涼なり。砒、砂を伏す。【主治】〔煩を除き、志を益し、五勞、七傷を補し、心氣を

壯にし、皮膚、骨節間の風を去り、熱毒を消し、瘡腫を散ずる】(大明)【羊肉に和して羹に作れば、人を益し、風を除き、目を明にする。飲にして茶に代へれば、渴を止め、熱煩を消し、陽事を益し、麪毒を解す。乳酪と相惡む。汁を目中に注げば、風障、赤膜、昏痛を去る】(甄權)【上焦、心、肺の客熱を去る】(時珍)

地骨皮　【修　治】【斅曰く、凡そ根を使ふには、掘り取つて東流水に浸し、刷いて土を去り、搥つて心を去り、熱甘草湯で一夜浸して焙じ乾す。

【氣　味】【苦し、寒なり】別錄に曰く、大寒なり。權曰く、甘し、平なり。時珍曰く、甘く淡し、寒なり。杲曰く、苦し、平、寒にして升であり陰である。好古曰く、足の少陰、手の少陽の經に入る。硫黃、丹砂を制す。

【主　治】【細剉し、麪を拌ぜて煮熟して呑めば、腎家の風を去り、精氣を益す】(甄權)【骨熱、消渴を去る】(孟詵)【骨蒸、肌熱、消渴、風濕痺を解し、筋骨を堅くし、血を涼す】(元素)【表に在る無定の風邪、傳尸、汗ある骨蒸を治す】(李杲)【腎火を瀉し、肺中の伏火を降し、胞中の火を去り、熱を退け、正氣を補す】(好古)【上膈の吐血を治す。煎湯で口を嗽げば齒血を止め、骨槽風を治す】(吳瑞)【金瘡を治する

に神驗がある』(陳承)『下焦、肝、腎の虛熱を去る』(時珍)

枸杞子　〔修　治〕　時珍曰く、凡そ用ゐるには、揀淨して枝梗から鮮明なるものを取り、洗淨して酒で一夜潤し、搗き爛らして藥に入れる。

〔氣　味〕『苦し、寒なり』權曰く、甘し、平なり。〔主　治〕『筋骨を堅くし、老に耐へ、風を除き、虛勞を去り、精氣を補す』(孟詵)『心病で嗌乾き、心痛し、渴して引飮するもの、腎病の消中に主效がある』(好古)『腎を滋くし、肺を潤ほす。油を搾つて燈に點ずれば目を明にする』(時珍)

〔發　明〕　弘景曰く、枸杞葉を羹に作れば少し苦い。俗の諺に『家を去る千里、蘿摩、枸杞を食ふ勿れ』といふが、これは二物が精氣を補益し、陰道を强盛にするをいつたものだ。枸杞の根、實は服食家に用ゐられて、その說は甚だ稱美し、名けて仙人杖といつた。意味深長である。

頌曰く、莖、葉、及び子は、服すれば身を輕くし、氣を益す。淮南枕中記の記載にある西河女子の枸杞を服する法は、正月上寅の日に根を採つて二月上卯の日に修治して服し、三月上辰の日に莖を採つて四月上巳の日に修治して服し、五月上午の

日にその葉を採つて六月上未の日に修治して服し、七月上申の日に花を採つて八月上酉の日に修治して服し、九月上戊の日に子を採つて十月上亥の日に修治して服し、十一月上子の日に根を採つて十二月上丑の日に修治して服するのである。又、花、實、根、莖、葉を煎にし、或は單に子を搾つた汁を膏に煎じて服するものもある。その功はいづれも同じ。世間の言ひ傳へに、蓬萊縣の南の丘村に枸杞が多く、高きものは一二丈あり、その根は盤結して甚だ固い。その鄕人に壽老のものの多いのは、やはりその水土の氣を飮食する結果だといふ。又、潤州の開元寺の大井の旁に歲久しき枸杞が生えて、土人はそれを枸杞井と呼び、その水を飮めば甚だ人を益するといつてゐる。

斅曰く、その根は、物の形狀に似てゐるものを上とする。

時珍曰く、按ずるに、劉禹錫の枸杞井の詩に『僧房の藥樹寒井に依る、井に淸泉あり藥に靈あり。翠黛葉生して石甃を籠め、殷紅子熟して銅缾を照す。枝は繁し本是れ仙人杖、根は老いて能く瑞犬の形を成す。上品の功能甘露の味、還て知る一夕齡を延ぶ可し』とある。又、續仙傳に『朱孺子は、溪側の二花犬を見て、逐ふて枸

杞の叢下に入り、掘つて根を得た。形は二頭の犬の如きものであつた。烹て食ふと忽ち身の輕きを覺えた』とある。周密の浩然齋日鈔には『宋の徽宗の時、順州で城を築く際に、土中から枸杞を得た。その形は、獒のやうなものだつた。急使を以て闕下に獻上した。乃ち仙家の所謂、千歳の枸杞はその形犬の如しといふそのものだ』とある。前記の數說に據れば、枸杞の滋益は獨り子だけではなく、根もやはり熱を退けるだけには止まらないものだ。但し根、苗、子の氣味にやや相異があるのだから、主治にもやはり區別のない筈はない。蓋しその苗は乃ち天精であつて、苦く甘くして涼であり、上焦、心、肺の客熱のものに適し、根は乃ち地骨であつて、甘く淡くして寒であり、下焦、肝、腎の虛熱のものに適する。これはみな三焦の氣分の藥なので、所謂、熱の內に淫するは瀉するに甘、寒を以てするものである。子に至つては、甘く、平にして潤ひ、性は滋にして補す。熱を退けることは不能で、ただ能を腎を補し、肺を潤し、精を生じ、氣を益する。これは乃ち平補の藥であつて、所謂、精不足の者にはこれを補するに味を以てするものである。分つて用ゐればそれぞれ主とするところがあり、兼ねて用ゐれば一擧兩得する。世人は但だ黃芩、黃

連の苦、寒を用ゐて上焦の火を治し、黄蘗、知母の苦、寒で下焦の陰火を治することを知つて、陰を補し、火を降し、久しく服すれば元氣を傷める結果となると謂つてゐるが、實は枸杞、地骨は甘、寒であつて平補し、精氣を充たしめ、邪火自ら退くの妙あることを知らない。遺憾なことである。予は嘗て青蒿を地骨の佐として、熱を退けるに屢〻殊功を得てゐるが、一般にはその理解がない。兵部尚書劉松石は、諱は天和、麻城の人である。その集錄にした保壽堂方の記載に地仙丹といふがあつて『昔、赤脚張といふ異人があつて、この方を猗氏縣の一老人に傳へて服ませた。すると年齡百餘にして行走すること飛ぶが如く、髮の白きは黑に反り、齒の落ちたるは更生し、陽事が强健になつた。この藥は性平であつて、常に服すれば能く邪熱を除き、目を明にし、身を輕くする。春枸杞葉を採り、天精草と名け、夏花を採り、長生草と名け、秋子を採り、枸杞子と名け、冬根を採り、地骨皮と名ける。いづれも陰乾し、無灰酒に一夜浸し、四十九晝夜晒し露して日精、月華の氣を取り、乾くを待つて末にし、錬蜜で彈子大の丸にし、毎日朝夕一丸を用ゐ、細に嚼んで一夜隔てた百沸湯で服す。この藥は刺なくして味甜きものを採る。その刺あるものは服し

ても益なし』とある。

附方　舊十、新十九。【枸杞煎】虚勞を治し、虚熱を退け、身を輕くし、氣を益し、一切の癰疽を永く發せざらしめる　枸杞三十斤を用ゐ、春、夏は莖、葉を、秋、冬は根、實を用ゐ、水一石で五斗に煮取り、滓を再び煮て五斗を取り、澄清して滓を去り、再び二斗に煎じ取り、鍋に入れて餳のやうに煎じて取收め、毎早朝酒で一合を服す（千金方）【金髓煎】枸杞子の紅熟せるものを逐日摘み、多少に拘らず無灰酒に浸し、蠟紙で封固して氣を洩さぬやうにし、滿二个月にして、沙盆の中に取り入れて擂り爛らし、濾して汁を取り、浸した酒と共に銀鍋中に入れて慢火で熬り、手を住めずに攪きまぜる。それは粘つてむらになる恐があるからである。餳のやうに膏に成るを待つて淨瓶に取つて密收し、毎早朝溫酒で二大匙を服し、夜就寢時に再服する。百日にして身輕く、氣壯になる。積年輟めざれば羽化するであらう（經驗）【枸杞酒】外臺祕要に『虛を補し、勞熱を去り、肌肉を長じ、顏色を益し、人を肥健にし、肝虚し衝感して涙を下すものを治す。生枸杞子五升を用ゐ、搗き破つて絹袋に盛り、好酒二斗の中に浸し、二七日間密封して氣を洩さぬやうにし、性に

任せて服す。醉ふてはならぬ』とある。○經驗方の枸杞酒、白を變じ、老に耐へ、身を輕くする。枸杞子二升を用ゐ、十月壬癸の日に東に面して採る。好酒二升で三七日間瓷瓶に入れて浸し、かくて生地黃汁三升を添入して攪き勻ぜ、密封して立春前三十日に至つて瓶を開き、一盞づつを空心に煖飮する。立春後に至れば髭髮が却つて黑くなる。蕪荑、葱、蒜を食つてはならぬ。【四神丸】腎の經の虛損で眼目に昏花があり、或は雲翳が睛を遮るを治す。甘州の枸杞子一斤に好酒を潤透し、それを四分し、四兩をば蜀椒一兩を用ゐて炒り、四兩をば小茴香一兩を用ゐて炒り、四兩をば脂麻一兩を用ゐて炒り、四兩をば川楝肉一兩を用ゐて炒り、枸杞を揀り出して熟地黃、白朮、白茯苓各一兩を加へて末にし、煉蜜で丸にして日日に服す。(瑞竹堂方)【肝虛下淚】枸杞子二升を絹袋に盛つて一斗の酒中に浸し、三七日密封して飮む。(龍木論)【日赤で翳を生じたるもの】枸杞子の搗汁を日に三五回點ける。神驗がある。(肘後方)【面黯皯皰】枸杞子十斤、生地黃三斤を末にし、方寸匕づつを溫酒で服す。一日三服。久しくして童顏になる。(聖惠方)【注夏虛病】枸杞子、五味子を研細し、滾水に泡けて三日封じ、茶に代へて飮めば效がある。(攝生方)【地骨酒】

筋骨を壯にし、精髓を補し、天年を延べ、老に耐へる。枸杞根、生地黄、甘菊花各一斤を搗き碎き、水一石で汁五斗に煮取り、糯米五斗炊き、細麴を拌勻して甕に入れ、普通のやうに封じ釀し、熟するを待つて澄淸し、日に三盞を飮む（聖濟總錄）【虛勞客熱】枸杞根を末にし、白湯で調へて服す。痼疾ある人は服してはならぬ（千金方）【骨蒸煩熱】及び一切の虛勞煩熱、大病後の煩熱。幷に地仙散を用ゐる。地骨皮二兩、防風一兩、甘草を炙いて半兩を用ゐ、五錢づつを生薑五片を入れて水で煎じて服す（濟生方）【熱勞で燎くが如きもの】地骨皮二兩、柴胡一兩を末にし、每服二錢を麥門冬湯で服す（聖濟總錄）【虛勞の苦渴】骨節煩熱し、或は寒するには、枸杞根白皮を切つて五升、麥門冬三升、小麥二升、水二斗を煮て、麥が熟したとき滓を去り、每服一升を口渴するとき飮む（千金方）【腎虛腰痛】枸杞根、杜仲、萆薢各一斤を好酒三斗に漬け、罌中に密封し、鍋中で一日煮て任意に飮む（千金方）【吐血の止まぬもの】枸杞の根、子皮を散にし、水で煎じて日日に飮む（聖濟總錄）【小便出血】新地骨皮を洗淨して搗いて自然汁を取り、汁がないときは水で煎じた汁を用ゐ、每服一盞に酒少量を入れ、食前に溫服する（簡便方）【帶下脈數】枸杞根一斤、

生地黄五斤、酒一斗を五升に煮て日日に服す。（千金方）【天行赤目】暴腫するには、地骨皮三斤、水三斗を三升に煮て滓を去り、鹽一兩を入れて二升を取り、頻りに洗ひ點ける。（龍上謝道人天竺經）【風蟲牙痛】枸杞根白皮を醋で煎じて漱ぐ。蟲は直ちに出る。水で煎じて飲むもよし。（肘後方）【口舌の糜爛】地骨皮湯——膀胱から小腸に移熱し、上に口糜となり、瘡を生じて潰爛し、心、胃に壅熱し、水穀の下らぬを治す。柴胡、地骨皮各三錢を用ゐ、水で煎じて服す。（東垣蘭室祕藏）【小兒の耳疳】耳後に生ずるは腎疳である。地骨皮一味を湯に煎じて洗ふ。仍て香油で末を調へて搽る。（高文虎蓼州閑錄）【氣瘻疳瘡】多年癒えぬには、應效散——又、托裏散と名ける。地骨皮の冬期のものを末にし、紙撚に醮けて瘡内に入れる。頻りに用ゐれば自然に肉を生ずる。更に米飮で二錢を服す。一日三服（外科精義）【男子の下疳】先づ漿水で洗ひ、後に地骨皮末を搽る。肌を生じ、痛を止める。（衞生寶鑑）【婦人の陰腫】或は瘡を生ずるには、枸杞根を水で煎じて頻りに洗ふ。（永類方）【十三種の疔】春三个月上建の日に葉を採り、天精と名ける。夏三个月上建の日に枝を採り、枸杞と名ける。秋三个月上建の日に子を採り、却老と名ける。冬三个月上建の日に根を採り、

地骨と名ける。いづれも暴乾して末にし、もし法の如くに採り得ぬときはただ一種だけを得てもよし。緋緒一片で藥を裹み、牛黃を梧子一粒ほど、及び鈎棘針二十一箇、赤小豆七粒を末にし、先づ緒上に亂髮を雞子一箇ほどを鋪き、それに牛黃等の末を鋪き、捲いて團にして髮で束定し、熨斗中で炒つて沸定せしめ、刮り搗いて末にし、一方寸匕を先の枸杞末二匕と合せて二錢半づつを空心に酒で服し、一日再服する。(千金方)【瘻疽惡瘡】膿血の止まぬには、地骨皮を多少に拘らず洗淨し、粗皮を刮り去つて細白穰を取り、粗皮と骨とを湯に煎じ、洗つて膿血を盡さしめ、細穰を貼る。立ろに效がある。ある朝士は腹脇の間に疽を病んで歳を經たが、ある人の話で地骨皮の煎湯で淋洗し、血を一二升出した。家人は心配して止めさせうとしたが、病人が、疽は少し快くなつたらしいといふので、更に淋ぎ、五升ばかりを用ゐると、血が次第に淡くなつた。そこで止めて細穰を貼ると、その翌日には結痂して癒えた(唐愼微本草)【瘭疽で汗を出すもの】手、足、肩、背に生じ、累累として赤豆の如くなるには、枸杞の根、葵の根、葉の煮汁を飴のやうに煎じて隨意に服す。(千金方)【足趾の雞眼】痛み、瘡をなすには、地骨皮を紅花と共に研細して傅ける。翌日は

癒える。(閭閻事宜) 【火赫毒瘡】この病は急に毒氣の心腹に入るを防がねばならぬ。枸杞葉の搗汁を服すれば立ろに瘥える。(肘後方) 【目が濇つて翳あるもの】枸杞葉、車前葉二兩を汁に挼み、桑葉で裹んで陰地に一夜懸け、汁を取つて點ける。三五回に過ぎず。(十便良方) 【五勞、七傷】房事衰弱には、枸杞葉半斤を切り、粳米二合と豉汁を和して煮て粥にし、日日に食ふが良し(經驗方) 【澡浴して病を除く】正月一日、二月二日、三月三日、四月四日、乃至十二月十二日まで、いづれも枸杞葉の煎湯で洗澡する。人をして光澤ならしめ、百病を生ぜざらしめる。(洞天保生錄)

溲疏(本經下品)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】 **巨骨**(別錄)

【集解】 別錄に曰く、溲疏は熊耳の川谷、及び田野、故垢、墟地に生ずる。四月に採る。

當之曰く、溲疏、一名楊櫨、一名牡荊、一名空疏。皮は白く中が空であつて、時時に節がある。子は枸杞子に似て、冬期に熟し、赤色である。味は甘く苦し、末代には識るものがない。これは人家の籬援にある楊櫨ではない。

恭曰く、溲疏は、形は空疏樹に似て、高さ一丈ばかり、皮が白い。その子は八九月に熟して色赤く、枸杞に似たもので、必ず兩兩相對する。味は苦く、空疏と同じくない。空疏は卽ち楊櫨であつて、その子は莢をなし、溲疏には似てゐない。

志曰く、溲疏、枸杞は相似てはゐるけれども、しかし溲疏には刺があり、枸杞には刺がない。それで區別される。

頌曰く、溲疏にも巨骨なる名があつて、枸杞の地骨と名けるやうである。やはり相類するものであらう。方書には用ゐてあるものが鮮い。仔細に識別する必要がある。

機曰く、按ずるに、李當之は、ただ溲疏の子は枸杞子に似てゐるといつただけで、樹が相似てゐるといつたことがない。馬志はその子が相似てゐるとあるためにそれを樹も相似たものと考へ、刺あると刺なきとの區別をした。蘇頌はまた巨骨、地骨

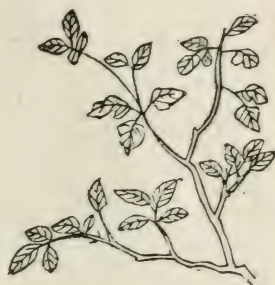
の名があるためにそれが相類するものと疑つたが、何ぞ知らん、實は枸杞に刺がないなどいふことはない、ただ小いときは刺が多く、大きくなれば刺が少くなるだけである。本草中には異物同名のものが甚だ多い。況や一の骨の字が同じ位は問題にならぬが。これを根據にして說明せんとするは甚しい穿鑿といふものだ。

時珍曰く、汪機の所斷は如何にも正しさうである。しかし彼自身にもやはり的確に何物なりとは指定し得なかつた。

氣味 【辛し、寒にして毒なし】別錄に曰く、苦し、微寒なり。之才曰く、漏蘆が使となる。

主治 【皮膚中の熱。邪氣を除き、遺溺を止め、水道を利す】(本經)【胃中の熱を除き、氣を下す。浴湯にするがよし】(別錄) ○時珍曰く、按ずるに、孫眞人千金方の婦人下焦の三十六疾を治する承澤丸中にこれを用ゐてある。

楊櫨(唐本草)

和名未詳
學名未詳
科名未詳

集解　恭曰く、楊櫨、一名空疏。所在いづれにもあつて、籬垣の間に生ずる。その子は莢といふ。

葉　氣味【苦し、寒にして毒あり】

主治【疽瘻惡瘡。水で煮た汁で洗ふ。立ろに瘥える】（唐本）

木耳　記載は菜部にある。

〔楊　櫨〕

石南（本經下品）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

釋名　**風藥**　時珍曰く、石間の陽に向つた處に生ずるところから石南と名けたのだ。桂陽では風藥と呼んで茗に充て、及び酒に浸して飲む。能く頭風を愈するところから名けたものだ。按ずるに、范石湖集に『修江に出る欒茶は頭風を治す』とあるが、今南方の地には、所謂、欒茶なるものはない。これはこの物のことでは

なかつたらうか。

【集解】別錄に曰く、石南は華陰の山谷に生ずる。三月、四月に葉を採り、八月に實を採つて陰乾する。

弘景曰く、今東部地方にいづれもある。葉は枇杷葉のやうなものだ。方に用ゐることは一向に稀である。

恭曰く、葉は冈草に似て、冬を淩いで凋まぬ。關中のものは葉が細で好いものである。江山以南のものは葉が長大で、枇杷葉のやうで氣味がなく、殊だ用ゐるに任へない。

〔石南〕

保昇曰く、終南、斜谷の石のある處に甚だ豐富にある。今商人は石韋を以てこれとしてゐるが、誤である。

頌曰く、今は南、北にいづれもある。石上に生じ、株は極めて高大なものがあつ

て、葉は枇杷のやうで上に小刺があり、冬を凌いで凋まぬ。春白花を生じて簇を成し、秋細かな紅實を結ぶ。關隴地方に產するものは、葉は莽草に似て、青黃色で背に紫點がある。雨が多ければ併生して二三寸までに長じ、根は橫に生じて細く、紫色である。花、實はなく、葉が至つて茂密である。南、北一般に亭院の間に移植するが、陰翳愛すべきもので、日氣を透さない。藥に入れるには、關中の葉の細かなものを良しとする。魏王の花木志に『南方の石南樹は、野生で二月に花を開き、連つて實を著け、實は燕覆子のやうで、八月に熟する。地方民はその核を取つて魚羹に和するが、尤も美味だ』とある。今は用ゐるものはない。

宗奭曰く、石南葉は、枇杷葉の小さいものに似てゐるが、背に毛がなく、光つてゐて皺まない。正二月の間に花を開く。冬は二葉があつて花苞をなし、苞が既に開けると中に十五餘の花があり、大小椿花のやうな甚だ細碎なもので、每一苞が約そ彈ほどの大いさで一毬を成し、一花六葉で一朵に七八毬あり、淡白綠色で、葉末が淡赤色である。花が既に開くと蘂が花全體に滿ち、ただ蘂だけが見えて花が見えない。花が纔に罷むと、去年の綠葉が盡く脫落して、漸次に新葉を生ずる。京洛、

河北、河東、山東には頗る少い。一般にもそれゆゑに用ゐることが少だ。湖の南、北、江西、二浙には甚だ多い。それゆゑに一般に多く用ゐる。

葉　氣味　【辛く苦し、平にして毒あり】之才曰く、五加皮が使となる。小薊を惡む。

主治　【腎氣內傷、陰衰を養ひ、筋骨、皮毛を利す】（本經）【脚弱、五臟の邪氣を療じ、熱を除く。女子は久しく服されぬ。男を思はしめる】（別錄）【能く腎氣を添へ、軟脚の煩悶疼を治し、蟲を殺し、諸風を逐ふ】（甄權）【酒に浸して飮めば頭風を治す】（時珍）

發明　恭曰く、石南葉は、風邪を療する丸、散に必要なものである。今の醫家は、その實をば一向に用ゐない。

權曰く、能く腎を養ふものであるが、また人をして陰痿せしめるものでもある。

時珍曰く、古方では、風痺、腎弱を治する要藥としたが、今は一般に用ゐることを知らず。識るものも少い。蓋し甄氏の藥性論に、陰をして痿せしめるといふ說があつたがためであらうと思ふが、何ぞ知らん、この藥を服すれば能く腎をして强からしめるので、嗜欲の人がこの藥の力を藉り、その結果痿弱を起すわけなのである。

咎を藥に歸するは良に戦くべきことだ。毛文錫の茶譜に『湘地方では、四月に楊桐草を採り、搗汁に米を浸して蒸して飯にして食ひ、必ず石南芽を採つて茶として飲む。それで風を去る。暑期に就中宜し』とある。楊桐、即ち南燭である。

附方 新三。【鼠瘻の合せぬもの】石南、生地黃、茯苓、黃蘗、雌黃等分を散にし、一日二回傅ける。(肘後方)【小兒通睛】小兒が誤つて跌き、或は頭腦を打つて驚を受け、肝の系に風を受けて瞳人不正を起し、東を觀んとすれば西を見、西を觀んとすれば東を見るには、石南散を鼻に吹いて頂に通ずるが宜し。石南一兩、藜蘆三分、瓜丁五七箇を末にし、小量づつを鼻に吹き入る。一日三回。牛黃平肝の藥を內服する。(普濟方)【乳石の發動】煩熱するには、石南を末にし、新汲水で一錢を服す。(聖惠方)

實 一名鬼目。**主治** 【蠱毒。積聚を破り、風痺を逐ふ】(本經)

牡荊 (別錄上品)

和名 にんじんぼく
學名 Vitex cannabifolia, Sieb. et Zucc.
科名 くまつづら科(馬鞭草科)

校正 別錄有名未用の荊莖を併せ入る。

弘景曰く、牡荊といふからには子のあるわけはない。小荊といふが牡荊であらう。牡荊の子は蔓荊子よりも大きい、而るに反つて小荊と呼ぶは、恐らく樹の形からいつたものであらうが、實は蔓荊樹もやはり高大なものだ。

釋名 **黃荊**（圖經） **小荊**（本經） **楚**

〔牡荊—黃荊〕

恭曰く、牡荊は樹を作して蔓生をなさぬ。故に稱して牡といつたので、實がないから謂つたのではない。蔓荊子は大きく、牡荊子は小さい。故に小荊と呼ぶのだ。

時珍曰く、古は刑に用ゐた枝には荊を使つた。故に字は刑に從つたのである。この物は生えると叢を成して疎爽なものだ。故にまたこれを楚といひ、字は林に從ひ疋に從ふ。疋は卽ち疎の字である。濟楚の地名の意味もそれを取つたもので、荊楚

の地は多くこの物を產するので地名となつたのである。

集解　別錄に曰く、牡荊實は河間、南陽、宛句の山谷、或は平壽、都鄉、高岸の上、及び田野中に生ずる。八月、九月に實を採つて陰乾する。

弘景曰く、蔓荊を論ずるに、これは現に棰に作る荊のことであらう。その子は殊だ細く、さながら小麻子ほどで、色は靑黃である。牡荊は乃ち北方に產するもので、(一)始めは豆ほどの大いさで正圓で黑い。仙術には多く牡荊を用ゐるが、今は一般に全然識るものがない。李當之の藥錄に『溲疏、一名楊櫨、一名牡荊、理白く、中虛し、斷つて植ゑれば生きる』とあるが、按ずるに、今の溲疏の主療は牡荊と全然同じくない。形類も乖異してゐる。而して仙方には牡荊を用ゐて『能く神に通じ、思を見る。ただその實のみに非ず、枝、葉、竝に好し』といひ、又『荊樹の必ず枝、葉相對するものは牡荊なり。對せざるものは卽ち牡荊に非ず』といつてある。いづれも虛實を詳にせぬ。更に博識者の研究に須つ。

恭曰く、牡荊とは卽ち棰、杖に作るもので、所在いづれにもある。實は細くして色黃に、莖は勁くして樹生を作すもので、漢書郊祀志に『牡荊莖を以て旛竿と爲す』

(一)原本ニ始如豆大トアルハ恰如豆大ノ訛ナランカ。姑ク原本ニ從フ。

とあるを見れば明に蔓荊でないことが判る。青、赤の二種あつて、青きものを佳しとする。今一般に相承けて、多くは牡荊を以て蔓荊としてゐるが、これは極めて誤つてゐる。

○頌曰く、牡荊は、今は眉州、蜀州、及び汴京の附近にもあつて、俗に黄荊と名けるものがそれである。枝、莖は堅勁なもので、科を作し、蔓を作さぬ。葉は萞麻のやうで更に疎瘦である。花は紅くして穗を作し、實は細くして黄であり、麻子ほどの大いさである。或はこれは小荊といふものだともいふ。按ずるに、陶隱居の登眞隱訣に『荊木の葉、華は神に通じ、思精を見る』とある註に『荊に三種ある。荊木、卽ち今の筆杖に作るもので、葉が香しく、やはり花、子があり、子は藥に入れない。方術では牡荊を用ゐ、その藥に入れる。北方では一般にその木を識らぬものである。天監三年、天子が神仙飲を合せんとしたとき、勅を奉じて牡荊を論じた際の說に

　荊は花白く、子多し、子の粗なる者は歷歷たり。疎生して三兩莖に過ぎず。多く圓なる能はず、或は扁、或は異、或は多く竹節に似たり。葉は餘の荊と殊らず。蜂は多く牡荊を采る。牡荊汁は冷にして甜し。餘の荊は燒かれるときは

則ち烟火の氣苦し。牡荊は慢質にして實し、烟火その中に入らず。主治は心風第一なり。

といふのであつた。當時遠近に尋ね覓めたが、遂にその物に値はなかつた』とある。

保昇曰く、陶氏はただ蔓荊が判らなかつたばかりでなく、牡荊をも識らなかつたのだが、蔓荊は蔓生し、牡荊は樹生するもので、理自ら明である。

時珍曰く、牡荊は處處の山野に多くあつて、樵り采つて薪とする。年久しく樵らぬものは、その樹が盌ほどの太さになつてゐる。その木は心が方であり、その枝は對生し、一枝に五葉、或は七葉あり、葉は楡葉のやうで、長くして尖り、鋸齒がある。五月に杪の間に花を開き、穗になつて紅紫色である。その子は大いさ胡荽子ほどで、白膜があつて裹んでゐる。蘇頌が『葉は蓖麻に似てゐる』といつたものは誤である。青、赤の二種あつて、青きものを荊といひ、赤きものを楛といふ。嫩條はいづれも莒簏に作れるものだ。古代に貧婦が荊を以て釵としたといふは即ちこの二木である。按ずるに、裴淵の廣州記に『荊に三種あつて、金荊は枕に作るによし。

紫荊は牀に作るによし。白荊は履に作るによし。他處の牡荊、蔓荊とは全く異ふ寧浦にある牡荊は、病を指せば自ら癒える。節の相當らぬものを月暈の時に刻み、病人の身と齊くして牀下に置けば、病危しと雖もまた害なし』とあり、杜寶の拾遺錄に『南方の林邑の諸地は海中に在つて、山中に金荊が多い。大なるものは十圍あつて、盤屈し、縮蹙し、文は美錦のやう、色は眞金のやうだ。土人はこれを用ゐ、沈、檀ほどに高價だ』とある。これはいづれも荊の別類である。春秋運斗樞には『玉衡星散じて荊となる』とある。

實 氣味 【苦し、溫にし毒なし】時珍曰く、辛し、溫なり。之才曰く、防已が使となる。石膏を畏る。主治 【骨間の寒熱を除き、胃氣を通利し、欬逆を止め、氣を下す】(別錄)【柏實、青葙、朮と配合すれば風を療ずる】(之才)【炒り焦して末にし、飲で服すれば、心痛、及び婦人の白帶を治す】(震亨)【半升を用ゐ、炒熟して酒一盞を入れ、煎じて一沸して熱服すれば、小腸疝氣を治するに甚だ效がある。酒に浸して飲めば耳聾を治す】(時珍)

附方 新一。【濕痰白濁】牡荊子を炒つて末にし、二錢づつを酒で服す。(集簡方)

葉 【氣味】【苦し、寒にして毒なし】【主治】【久病の霍亂轉筋、血淋、下部の瘡、濕䘌、薄脚。脚氣腫滿に主效がある】(別錄)

【發明】崔元亮海上集驗方の腰脚風濕の痛んで止まぬを治する蒸法に、荊葉を用ゐ、多少を限らず、蒸して大甕中に置き、その下に火を著けて溫め、病人を葉中に置く。須臾にして汗があるものである。蒸すときには常に旋旋に飯を喫し、やや倦んだならば止め、直ちに被で蓋ふて風を避け、かくて葱豉酒、及び豆酒を進める。やはり瘥えるを度とするがよし。

時珍曰く、この蒸法は妙ではあるが、ただ野人に施すに適するだけのものだ。李仲南の永類方に『脚氣諸病を治するに、荊莖を用ゐ、壜中で烟に燒いて涌泉の穴、及び痛處を熏じ、汗を出さしめれば癒える』とある。この法は貴賤いづれも用ゐられるものである。又、談埜翁試驗方に、毒熱、望板歸の螫傷で、滿身洪腫して泡を發したるを治するに、黃荊の嫩頭を用ゐ、搗汁を泡上に塗り、渣で咬處を盦すれば消するとある。この法は、葛洪肘後方の諸蛇を治するに、荊葉と搗き爛らして袋に盛り、腫上に薄する方から出たものである。物類相感志には『荊葉は蟁を辟ける』と

ある。

［附方］ 舊一、新一。【九竅出血】荊葉を汁に搗き、酒を和して二合を服す。(千金方)【小便尿血】荊葉汁二合を酒で服す。(千金方)

根 ［氣味］【甘く苦し、平にして毒なし】時珍曰く、苦く微辛し。［主治］【水で煮て服すれば、心風、頭風、肢體の諸風を治し、肌を解し、汗を發する】(別錄)

［發明］ 時珍曰く、牡荊は、苦は能く降り、辛、溫は能く散ずる。降れば痰を化し、散ずれば風を袪るものだ。故に風痰の病に適するのである。その肌を解し、汗を發するの功は世に知るものはないが、按ずるに、王氏寄方に『ある人は風を數年病んだが、予が七葉黃荊根皮、五加根皮、接骨草等分を湯に煎じ、日に服ませると遂に癒えた』とある。蓋しこの意を得たものだ。

荊莖(別錄) 有名未用に曰く、八月、十月に採つて陰乾する。藏器曰く、即ち今の荊枝である。煮汁で物を染められる。［主治］【灼爛】(別錄)【灼瘡發熱、焱瘡を治するに效がある】(藏器)【荊芥、蓽撥と共に水で煎じ、風牙痛を漱ぐ】(時珍)

［附方］ 新一。【青盲內障】春初に黃荊の嫩頭を取り、九蒸九暴して半斤、烏

雞一羽を五日間米で飼ひ、淨板上に置いて二三日間大麻子で飼つて糞を取り、乾して瓶内に入れ、熬つて黃にし、荊頭を和して末にし、煉蜜で和して梧子大の丸にし、毎服十五丸、乃至二十丸を陳米飮で服す。一日二回。(聖濟總錄)

荊瀝　【修　治】時珍曰く、取る法は、新たに採つた荊莖を一尺五寸長さに截ち、兩傅上に架して中間で火を燒いて炙き、兩端に器を置いて承けて取る。それを熱服し、或は藥中に入れる。又ある法では、三四寸長さに截ち、束ねて瓶中に入れ、それを一瓶で固く合住し、外から煻火で煨燒する。その汁は瀝下して瓶中に入る。これも妙である。

【氣　味】【甘し、平にして毒なし】【主　治】【これを飮めば、心悶煩熱、頭風旋運、目眩、心頭が漾漾として吐せんとするもの、卒の失音、小兒の心熱、驚癇を去り、消渴を止め、痰唾を除き、人をして睡らざらしめる】(藏器)【風熱を除き、經絡を開き、痰涎を導き、血氣を行らし、熱痢を解す】(時珍)

【發　明】時珍曰く、荊瀝は、氣は平、味は甘であつて、痰を化し、風を去るに妙である。故に孫思邈の千金翼に『凡そ風を患ふ人の多く熱するには、常に竹瀝、

荊瀝、薑汁を合せ、五合を和勻して熱服するが宜し。瘥えるを度とする』といつたのである。陶弘景もまた『牡荊汁は心風を治するに第一となす』といつた。延年祕錄には『熱多きには竹瀝を用ひ、寒多きには荊瀝を用ゐる』とある。

震亨曰く、二汁は同功であつて、いづれも薑汁で助送すれば凝滯せぬ。但し氣虛で食へぬものには竹瀝を用ゐ、氣實で能く食ふものには荊瀝を用ゐる。

【附方】 舊六、新一。【中風口噤】荊瀝一升づつを服す。（范汪方）【頭風頭痛】荊瀝を日日に服す。（集驗方）【喉痺瘡腫】荊瀝を細細に嚥む。或は荊一握を水で煎じて服す。（千金翼）【目中の卒痛】荊木を燒き、黃汁を取つて點ける。（肘後方）【心虛驚悸】羸瘦するには、荊瀝二升を火で煎じて一升六合にし、四服に分け、晝三回、夜一回服す。（小品方）【赤白下痢】五六年のものには、荊瀝を每日五合服す。（外臺祕要）【濕瘑瘡癬】荊木を燒いて汁を取り、日日に塗る。（深師方）

蔓荊（本經上品）

和名　はまごう
學名　Vitex rotundifolia, L. f.
科名　くまつづら科（馬鞭草科）

【釋名】恭曰く、蔓荊とは苗が蔓生だから名けたのである。

【集解】恭曰く、蔓荊は水濱に生ずる。苗莖が蔓延して長さ一丈餘になり、春舊枝から小葉が生え、五月に完全な葉になつて杏葉に似てゐる　六月に花があり、紅白色で蘂が黄である。九月に實があり、黑く斑で、大いさは梧子ほどで虛して輕い。冬には葉が凋む。今一般に誤つて小荊を蔓荊とし、遂に蔓荊を牡荊としてゐる。大明曰く、海鹽にもある。大いさは豌豆ほどで、蔕に輕軟な小蓋子がある。六七八月に採る。

頌曰く、近頃は汴京、及び秦隴、明、越州に多くある。苗莖の高さは四五尺、節に對して枝が生え、葉は小楝に類し、夏になつて盛茂し花があり、淡紅色で穗をなし、蘂は黄白色で花下に青蕚があり、秋になつて子を結ぶ。舊說に蔓生だといつてあるが、今あるものはいづれも蔓ではない。

（蔓荊）

宗奭曰く、諸家の解說は、蔓荊、牡荊が紛糺して一定せぬが、經に旣に蔓荊とい

つてあるのだから明に蔓生であつて高木ではない。既に牡荊といへば木から上生するのである。疑問の餘地があらうか。

時珍曰く、その枝が小弱で蔓のやうだ。故に蔓生といつたのである。

實【修治】斅曰く、凡そ使ふには、蒂子下の白膜一重を去り、酒に一伏時浸し、午前十時から午後二時まで蒸し、熬り乾して用ゐる。

時珍曰く、普通はただ膜を去り、打ち砕いて用ゐる。

【氣味】【苦し、微寒にして毒なし】別錄に曰く、辛し、平にして溫なり。元素曰く、味辛し、溫なり。氣は淸し。陽中の陰であつて太陽の經に入る。胃虛の人は服してはならぬ。恐らく痰疾を生ずる。之才曰く、烏頭、石膏を惡む。

【氣味】【筋骨間の寒熱、濕痺拘攣。目を明にし、齒を堅くし、九竅を利し、白蟲を去る。久しく服すれば身を輕くし、老に耐へる。小荊實も亦た等し】(本經)【風頭痛、腦鳴、目に淚の出るもの。氣を益し、人をして光澤、脂緻ならしめる】(別錄)【賊風を治し、髭髮を長くする】(甄權)【關節を利し、癇疾、赤目を治す】(大明)【太陽頭痛、頭沈昏悶。昏暗を除き、風邪を散じ、諸經の血を涼じ、目睛內痛を止め

る』（元素）【肝風を搜る】（好古）

【發明】恭曰く、小荊實、卽ち牡荊子。その功は蔓荊と同じ。故に『亦た等し』といつたのである。

時珍曰く、蔓荊は氣は淸く、味は辛く、體は輕くして浮であり、上行して散ずる。故に主とするところのものはいづれも頭面、風虛の證である。

【附方】新二。【髮を長く黑くする】蔓荊子、熊脂等分を醋で調へて塗る。（聖惠方）【頭風で痛むもの】蔓荊子一升を末にし絹袋に盛つて七日間一斗の酒に浸し、一日三回溫めて飮む。（千金方）【乳癰の初起】蔓荊子を炒つて末にし、酒で方寸匕を服し、滓を傅ける。（危氏得效方）

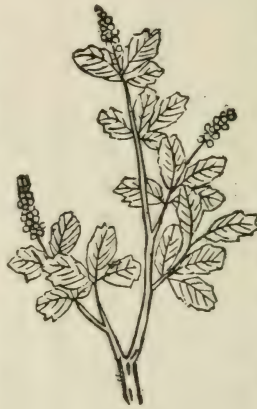
欒荊（唐本草）

和名　未詳
學名　Vitex sp.
科名　くまつづら科（馬鞭草科）

【釋名】**頑荊**（圖經）

【集解】恭曰く、欒荊は、莖、葉は都て石南に似て、幹はやはり反卷し、冬を

經て枯死せぬ。葉に細黑點のあるものが眞物である。今は雍州で用ゐてゐるものはそのものだが、洛州で石荊をそれに當てて用ゐるは非である。俗方に大いに用ゐてあるが、本草には記載されてない。また別名もない。ただ欒華があるが、功用はまた別であつて、この物の花ではない。

〔欒 荊〕
——石荊は小さし——

頌曰く、欒荊は、今は東海、及び淄州に生ずる。汾州から提出した報告のものは、いづれも枝、莖が白く、葉は小さく圓くして色青く、頗る楡葉に似て長く、冬も夏も凋まず、六月花を開き、花には紫、白の二種あり、子は大麻に似てゐる。四月に苗葉を採り、八月に子を採る。

宗奭曰く、欒荊、卽ち牡荊であつて、子は青色で茱萸の如きものだ。更にこの一條を立てて註記すべきものでない。蘇恭は又、石荊をこれに當てると稱したが、更に一層穿鑿に陷つてゐる。

時珍曰く、按ずるに、許愼の說文に『欒は木蘭に似たり』とあるが、木蘭は葉が桂に似たもので、蘇恭の所說の、葉が石南に似たといふものと相近い。蘇頌が圖經に載せたものは卽ち今の牡荆であつて、唐本草のものと合致せぬ。欒荆は蘇恭が本草に收錄編入したもので、自ら誤る筈はない。蓋し後人が識らずして遂に牡荆をこれに充てたので、それを寇氏が亦た指摘して牡荆だといつたのである。

子　氣味　【辛く苦し、溫にして小毒あり】權曰く、甘く辛し、微熱にして毒なし。決明が使となる。石膏を惡む。　主治　【大風、頭面、手足の諸風、癲癎、狂痙、濕痺、寒冷疼痛】（唐本）【四肢不遂。血脈を通じ、目を明にし、精光を益す】（甄權）【桕油と合せ、共に熬つて人畜の瘡疥に塗る】（蘇頌）

石荆（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

集解　藏器曰く、石荆は荆に似て小さく、水旁に生ずる。廣濟方に、一名水荆とあるがこの物である。蘇（一）頌は、洛地方でこれを欒荆に當てるは非なりといつ

（一）頌ハ恭ノ誤ナリ。

た。

主治　【燒灰の淋汁で頭を浴すれば、髮を生じて長からしめる】（藏器）

紫荊（宋開寳）

和名　はなずはう
學名　Cercis chinensis, Bunge.
科名　まめ科（荳科）

校正　拾遺の紫珠を併せ入る。

釋名　**紫珠**（拾遺）皮を**肉紅**と名ける。（綱目）**內消**　時珍曰く、その木は黃荊に似て色が紫だ。故に名けたものだ。その皮は色が紅くして腫を消する。故に瘍科でこれを肉紅と呼び、又、內消といつて何首烏と同名である。

集解　頌曰く、紫荊は處處にあるもので、一般に多く庭院の間に種ゑる。木は黃荊に似て、葉は小さくして椏がなく、花は深紫で愛すべきものである。

藏器曰く、卽ち田氏の荊である。秋になつて子が熟し、正紫色で小珠のやうに圓い。紫珠と名ける。江東の林澤の間に尤も多い。

宗奭曰く、春紫花を開き、甚だ細碎で共に朶を作し、その花の生ずる部分は一定

せずして、或は木身の上に生じ、或は根上、枝上に附いて直ちに花を出し、花が罷むと葉が出る。葉は光つて緊り、微し圓い。園圃に多く植ゑてある。

○時珍曰く、樹は高く、條は柔かい。その花は甚だ繁く、一年に二三回ある。その皮を藥に入れる。

〔紫荆〕

中が厚く、色が紫で味が膽のやうに苦いものを用ゐるが勝れてゐる。

木并に皮　氣味　【苦し、平にして毒なし】○藏器曰く、苦し、寒なり。○大明曰く、皮、梗、及び花は氣味、功用いづれも同じ。

主治　【宿血を破り、五淋を下す。濃煮汁を服す】(開寶)【小腸を通ずる】(大明)【諸毒物、癰疽、喉痺、飛尸、蠱毒腫、下瘻、蛇虺、蟲蠶、狂犬毒を解す。いづれも煮汁を服す。また汁で瘡腫を洗へば血を除き、膚を長ずる】(藏器)【血を活し、氣

を行らし、腫を消し、毒を解し、婦人の血氣疼痛、經水の凝滯を治す」（時珍）

【發明】時珍曰く、紫荊は、氣は寒、味は苦、色は紫で、性は降であり、手、足の厥陰の血分に入る。寒は熱に勝ち、苦は骨に走り、紫は營に入るものだ。故に能く血を活し、腫を消し、小便を利して毒を解するのである。楊淸叟の仙傳方にある冲和膏に紫荊を君としたのは、蓋しこの意を得たものだ。その方は、一切の癰疽發背、流注諸腫毒、冷熱不明のものを治す。紫荊皮を炒つて三兩、獨活を節を去り炒つて三兩、赤芍藥を炒つて二兩、生白芷一兩、木蠟を炒つて一兩を末にし、葱湯で調へて熱して敷く。血は熱を得れば行り、葱は能く氣を散ずるのである。瘡の甚しく熱せぬものには酒で調へる。痛み甚しきもの、筋の伸びぬものには乳香を加へる。概して癰疽、流注はいづれも氣血の凝滯から成るもので、溫に遇へば散じ、涼に遇へば凝るものである。この方は溫、平であり、紫荊皮は乃ち木の精であつて、血を破り、腫を消し、獨活は乃ち土の精であつて、風を止め、血を動じ、骨中の毒を引拔し、痺濕の氣を去り、芍藥は乃ち火の精であつて、血を生じ、痛を止め、木蠟は水の精であつて、腫を消し、血を散じて獨活と共に能く石腫の堅硬を破

り、白芷は乃ち金の精であつて、風を去り、肌を生じ、痛を止める。蓋し血が生ずれば死せず、血が動ずれば流通し、肌が生ずれば爛れず、痛が止めば焮せず、風が去れば血が自ら散じ、氣が破れれば硬が消せられ、毒が自ら除くのであつて、五者交〻病を治することになつてゐる。これでは癒えない筈はないわけである。――張實之曰く、白朮はやはり芷と書くべきである――

附方　新九。【婦人の血氣】紫荊皮を末とし、醋糊で櫻桃大の丸にし、一丸づつを酒に化して服す。（熊氏補遺）【鶴膝風攣】紫荊皮三錢を老酒で煎じ、一日二回服す。（直指方）【傷眼靑腫】紫荊皮を七日間尿に浸して晒し研り、生地黃汁、薑汁で調へて傅ける。腫せぬには葱引を用ゐる。（永類方）【猘犬咬傷】紫荊皮末を砂糖で調へて塗り、口を留めて腫を退かす。口中には杏仁を嚼んで噍み、毒を去る。（仙傳外科）【鼻中の疳瘡】紫荊花を陰乾し、末にして貼る。（衞生易簡方）【發脊の初生】一切の癰疽いづれも治す。紫荊皮を單用して末にし、酒で調へて箍住する。自然に撮小して開かない。柞木飮を内服する。この方は乃ち救貧の主劑である。（仙傳外科）【癰疽の未だ成らぬもの】白芷、紫荊皮等分を末にし、酒で調へて服す。外用には、紫荊皮、

木蠟、赤芍藥、等分を末にし、酒で調へて箍藥とする。(同上)【痔瘡腫痛】紫荊皮五錢を新水で煎じて食前に服す。(直指方)【産後の諸淋】紫荊皮五錢を酒、水等分で煎じて温服する。(熊氏補遺)

木槿 (日華)

和名 むくげ
學名 Hibiscus syriacus, L.
科名 あふひ科 (錦葵科)

釋名 **椴** 音は徒亂の切(タン)である。**櫬** 音は襯(シン)である。**蕣** 音は舜(シン)である。**日及**(綱目) **朝開暮落花**(綱目) **藩籬草**(綱目) **花奴玉蒸** 時珍曰く、この花は朝開いて暮に落ちる。故に日及といひ、槿といひ、蕣といふ。僅に一瞬の榮といふやうな意味である。爾雅に『椴は木槿なり。櫬は木槿なり』とあり、郭璞の註に『二名に別けたものだ』とある。或は、白きを椴といひ、

〔木 槿〕

赤きを槻といふともいふ。齊魯ではこれを玉蒸といふ。その美にして多きをいつたものだ。詩に『顏如蕣華』とあるがこの物である。

【集解】宗奭曰く、木槿花は小葵のやうで淡紅色である。五葉一花を成し、朝開いて暮に斂まる。湖の南、北では、人家で多く種植して籬障とする。花と枝と兩用である。

時珍曰く、槿は小木であつて、種ゑるもよく、扦すもよし。その木は李のやうで、その葉は末が尖つて椏、齒がない。その花は小さくして艶かだ。或は白く、或は粉紅で、單葉、千葉のものがあり、五月に始めて開く。故に逸書月令に『仲夏の月、木槿榮す』とあるはそれである。結實は輕虛で、大いさは指頭ほど、秋深くして自ら裂ける。その中の子は楡莢、泡桐、馬兜鈴などの仁のやうなもので、種ゑれば生え易い。嫩葉は茹ふもよく、飲にもなり、茶に代へられる。現に瘍醫が皮を用ゐて瘡癬を治するには、多く川中から來るものの厚くして色の紅きを取る。

皮　并に　根　【氣味】【甘し、平、滑にして毒なし】大明曰く、涼なり。

【主治】【腸風瀉血、痢後の熱渇を止める。飲にして服すれば、人をして睡を得

せしめる。いづれも炒つて用ゐる】(藏器)【赤白帶下、腫痛、疥癬を治す。目を洗へば明ならしめ、燥を潤ほし、血を治す】(時珍)

【發明】時珍曰く、木槿の皮、及び花はいづれも滑で葵花のやうだ。故に能く燥を潤ほす。色は紫荊のやうだ。故に能く血を活す。川中から來るものは氣厚くして力が優れてゐる。故に尤も效がある。

【附方】新六。【赤白帶下】槿根皮二兩を切り、白酒一碗半で一碗に煎じ、空心に服す。白帶には紅酒を用ゐるが甚だ妙である。(纂要奇方)【頭面の錢癬】槿樹皮を末にして醋で調へ、重湯で頓に膠のやうにして內傅する。(王仲勉經效方)【牛皮風癬】川槿皮一兩、大風子仁十五箇、半夏五錢を剉み、河水、井水各一盌で浸して七夜露し、輕粉一錢を入れ、水中に入れて禿筆で掃塗し、靑衣で覆ふ。數日にして臭涎が出て妙である。浴澡を忌む。夏期に用ゐるが尤も妙である。(扶壽方)【癬瘡の蟲あるもの】川槿皮を煎じて肥皂を入れ、水に浸して頻りに擦る。或は槿皮を浸した汁で雄黃を磨るが尤も妙である。(簡便方)【痔瘡腫痛】藩籬草根の煎湯で先づ熏し後に洗ふ。(直指方)【大腸脫肛】槿の皮、或は葉を湯に煎じ、熏じ洗つて後に白礬、五倍末

を傳ける。（救急方）

花　氣味　皮に同じ。　主治　【腸風瀉血、赤白痢。いづれも焙じて藥に入れる。湯にして茶に代へれば風を治す】（大明）【瘡腫を消し、小便を利し、濕熱を除く】（時珍）

附方　新三。　【下痢噤口】紅木槿花を蒂を去り、陰乾して末にし、先づ麪を煎じて餅にし、二個に末を蘸けて食ふ。（趙宜眞濟急方）【風痰擁逆】木槿花を晒乾して焙じ研り、一二匙づつを空心に沸湯で服す。白花が尤も良し。（簡便方）【反胃吐食】千葉の白槿花を陰乾して末にし、陳糯米湯で調へて三五口を送下する。轉ぜぬときは再服する。（袖珍方）

子　氣味　皮に同じ。　主治　【偏正頭風には、烟に燒いて患處を熏ずる。又、黃水膿瘡を治するには、燒いて性を存し、猪骨髓で調へて塗る】（時珍）

扶桑（綱目）

和名　ぶつさうげ
學名　*Hibiscus Rosa-sinensis*, L.
科名　あふひ科（錦葵科）

釋名　**佛桑**（霏雪錄）**朱槿**（草木狀）**赤槿**（同上）**日及**　時珍曰く、東海日

出の處に扶桑樹があり、この花が光艷にして日に照りはえてゐる。その葉が桑に似てゐるところから、それに比へたのだが、後人が訛つて佛桑としたのである。乃ち木槿の別種である。故に日及などの諸名もやはりそれと同じである。

集解　時珍曰く、扶桑は南方に產する。乃ち木槿の別種である。その枝柯は柔弱で、葉は深綠で微し澁く、桑のやうだ。その花には紅、黃、白の三色があり、紅なるものが尤も貴ばれ、朱槿と呼ばれる。

〔扶　　桑〕

稽含の草木狀に『朱槿、一名赤槿、一名日及。高涼郡に產する。花、莖、葉はみな桑の如く、その葉は光つて厚い。木は高さ四五尺で枝、葉が婆娑としてゐる。その花は深紅色の五出で、大いさは蜀葵ほど、重敷して柔かく澤があり、一條の蕋があつて、長くして花葉の如く、上に金屑を綴り、日光が爍くと一叢に焰がた

つたかと疑はれる。日に數百朶を開き、朝開いて暮に落ち、五月から始つて中冬に至つて歇む。樹を揷めば活きる』とある。

葉　及び　**花**　［氣　味］【甘し、平にして毒なし】［主　治］【癰疽、腮腫には、葉、或は花を取り、白芙蓉葉、牛蒡葉、白蜜と共に硏り、膏にて傅ければ散ずる】（時珍）

木芙蓉（綱目）

和名　ふよう
學名　Hibiscus mutabilis, L.
科名　あふひ科（錦葵科）

［校　正］圖經の地芙蓉を併せ入る。

［釋　名］**地芙蓉**（圖經）**木蓮**（綱目）**華木**（綱目）**⿰木化木**　音は化（クワ）である。

拒霜　時珍曰く、この物は花が艷かで荷花のやうなところから、芙蓉、木蓮なる名がある。八九月に始めて開くところから拒霜と名ける。俗に呼んで⿰木化皮樹といふ。相如の賦にはこれを華木といひ、註に『皮は索になる』とある。蘇東坡の詩に『喚で拒霜と作すは猶ほ未だ稱はず、看來れば却て是れ最も霜に宜し』といつてある。

蘇頌の圖經本草に地芙蓉といふがあつて『鼎州に産する。九月に採る。瘡腫を治す』といつたのは、蓋しこの物である。

〔集解〕時珍曰く、木芙蓉は處處にある。條を揷せば生きるもので、小木である。その幹は叢生し、荊のやうで、高きものは一丈ばかりあり、その葉は大いさ桐ほどで、五尖、及び七尖のものがあり、冬凋み、夏茂り、秋の半に始めて花を著ける。花は牡丹、芍藥に類し、紅なるもの、白きもの、千葉のものがあり、最も寒に耐へて落ちず、實を結ばない。山人はその皮を取つて索にする。川、廣には添色拒霜といふがあり、花が初て開いたときは白色で、次の日にはやや紅く、またその翌日は深紅になり、先後相間へて數色あるやうである霜時に花を採り、霜後に葉を採り、陰乾して藥に入れる。

〔木 芙 蓉〕
──拒　霜──

葉　幷に　**花**　【氣　味】【微し辛し、平にして毒なし】【主　治】【肺を淸し、血を涼じ、熱を散じ、毒を解し、一切大小の癰疽、腫毒、惡瘡を治し、腫を消し、膿を排し、痛を止める】（時珍）

【發　明】　時珍曰く、芙蓉の花、幷に葉は、氣は平にして寒ならず熱ならず。味は微し辛くして性は滑し、涎が粘る。その癰腫を治する功には殊に神效がある。近頃の瘍醫がその名を祕して淸涼膏、淸露散、鐵箍散などといつてゐるものは、いづれもこの物である。その方は、一切の癰疽、發背、乳癰惡瘡を治す。已に成りたると、未だ成らぬと、已に穿ちたると、未だ穿たぬとに拘らず、いづれも用ゐる。芙蓉の葉、或は根皮、或は花を、或は生で研り、或は乾して研末し、蜜で調へて腫處の四圍に塗り、中間に頭を留め、乾けば頻りに換へる。初起のものは淸涼を覺えて痛が止み、腫が消する。已に成つたものは膿が聚つて毒が出る。已に穿つたものは膿が出て斂まり易い。言ふべからざる妙がある。或は、生赤小豆末を加へるが尤も妙である。

【附　方】　新十。【久欬羸弱】九尖拒霜葉を末にし、魚鮓に蘸けて食ふ。屢〻奏

效した。(危氏得效方)【赤眼腫痛】芙蓉葉末を水で和して太陽穴に貼る。淸涼膏と名ける。(鴻飛集)【經血の止まぬもの】拒霜花、蓮蓬殼等分を末にし、二錢づつを米飮で服す。(婦人良方)【偏墜で痛むもの】芙蓉葉、黃蘗各三錢を末にして、木鼈子仁一箇を醋に磨つたもので調へて陰嚢に塗る。その痛は自ら止む。(簡便方)【杖瘡の腫痛】芙蓉の花、葉を研末し、皂角末少量を入れ、雞子淸で調へて塗る。(方廣附錄)【癰疽腫毒】重陽の前に取つた芙蓉葉を研末し、端午の前に取つた蒼耳を燒いて性を存して研末し、等分を蜜水で調へて四圍に塗る。その毒は自ら走散せぬ。鐵井闌と名ける。(簡便方)【疔瘡惡腫】九月九日に芙蓉葉を採り、陰乾して末にし、井水で調へて貼り、翌日蚰蜒螺一箇を搗いて塗る。(普濟方)【頭上の癩瘡】芙蓉根皮を末にし、香油で調へて傅ける。豫め松毛、柳枝の煎湯で洗ふ。(傅滋醫學集成)【湯火灼瘡】芙蓉末を油で調へて傅ける。(奇效方)【灸瘡の癒えぬもの】芙蓉花を研末して傅ける。(奇效方)【一切の瘡腫】木芙蓉葉、菊花葉を共に水で煎じ、頻りに熏じ洗ふ。(多能鄙事)

山茶（綱目）

和名　つばき
學名　Camellia japonica, L.
科名　つばき科（山茶科）

【釋名】時珍曰く、その葉は茗に類し、又、飲にもなる。故に茶なる名を呼ばれるのだ。

【集解】時珍曰く、山茶は南方に産する。樹生であつて、高さは一丈ばかりになり、枝、幹が交加し、葉は頗る茶葉に似て厚く硬く、稜があり、中が闊くして頭が尖り、表面が綠で背面が淡い。冬深く花を開き、瓣が紅く、蕋が黄である。格古論に『花に數種あつて、寶珠といふは花が簇つて珠の如く、最も勝れてゐる。海榴茶といふは花蒂が青い。石榴茶といふは中に碎花がある。躑躅茶といふは花が杜鵑花のやうだ。官粉茶、串珠茶といふはいづれも粉紅色である。又、一捻紅、千葉紅、千葉白などといふ名のものがあり、一一擧げきれぬ。葉は各〻小異がある。或は、また黄色のものもあるといふ』とある。

〔山茶〕

虞衡志には『廣中に南山茶といふがある。花の大いさは中國のものに倍し、色は微し淡く、葉は薄くして毛があり、結實は梨のやうで大いさ拳ほどあり、中に肥皂子の大いさほどの數箇の核がある』とある。周憲王の救荒本草には『山茶は、嫩葉を燥熟し、水で淘つて食へる。また蒸し晒して飲にも作れる』とある。

花〔氣味〕（缺）〔主治〕『吐血、衄血、腸風下血。いづれも紅なるものを用ゐて末にし、童尿、薑汁、及び酒を入れて調へて服す。鬱金に代へられる』（震亨）

『湯火傷灼には、研末して麻油で調へて塗る』（時珍）

子〔主治〕『婦人の髮膩には、研末して摻る』（時珍）摘玄方。

蠟梅（綱目）

和名　らふばい
學名　Meratia praecox, Rehd. et Wils.
科名　らふばい科（蠟梅科）

〔釋名〕**黄梅花**　時珍曰く、この物は、本來は梅の類ではない。その梅と時を同うし、香もまた相近く、色が蜜蠟に似てゐるところからこの名を呼ばれたのだ

〔集解〕時珍曰く、蠟梅は、樹は小さく、枝が叢り、葉が尖つたものだ。その

種に凡そ三種あつて、子を種ゑて出たもので接いだことのないものは、臘月に小花を開いて香が淺い。狗蠅梅と名ける。接いだもので、花が疎で開いたとき口を含むものを罄口梅と名ける。花が密で香が濃く、色の深黄にして紫檀の如くなるものを檀香梅と名け、これが最も佳し。結實は垂鈴のやうで尖り、長さは一寸餘、子がその中にある。その樹皮は、水に浸して磨ると黒くして光采がある。

〔蠟　　梅〕

花

氣味 【辛し、溫にして毒なし】主治 【暑を解し、津を生ずる】（時珍）

伏牛花（宋開寶）

和名　ありどほし
學名　Damnacanthus indicus, Gaertn.
科名　あかね科（茜草科）

【校正】圖經の虎刺を併せ入る。

【釋名】**隔虎刺花** 意味は解らない。

【集解】頌○曰く、伏牛花は蜀地に生じ、所在いづれにもあるが、今はただ益州、

〔伏牛花〕
──虎刺──

蜀地だけにあつて、多く川澤中に生ずる。葉は青く細く、黄蘗葉に似て光らず、莖にはやはり刺がある。淡黃色の花を開いて穗になり、杏花に似て小さい。三月に採つて陰乾する。

又、睦州に生ずる虎刺といふものは、冬を凌いで凋まぬ。彼の地では、時に拘らず根、葉を採り、風腫疾を治すといふ。

花 【氣味】【苦く甘し、平にして毒なし】【主治】【久風濕痺、四肢拘攣、骨肉疼痛。湯にして風眩頭痛、五痔下血を治す】(開寶)

【發　明】時珍曰く、伏牛花は風濕を治するものとして、名はあつても用ゐるものは頗る少だが、楊子建の護命方に伏牛花散といふのがあつて、男女一切の頭風の一定時に發作し、甚しきときは大腑が熱祕するを治す。伏牛花、山因蔯、桑寄生、白牽牛、川芎藭、白殭蠶、蠍梢各二錢、荊芥穗四錢を用ゐ、末にして二錢づつを水で煎じて一沸し、滓と共に服す。

根　葉　枝【主　治】【一切の腫痛、風疾には、細剉して焙じ研り、一錢匕づつを溫酒で調へて服す】（頌）

密蒙花（宋開寶）

和名　わたふぢうつぎ（新稱）
學名　Buddleia officinalis, Maxim.
科名　ふぢうつぎ科（醉魚草科）

【校　正】愼微曰く、草部より木部に移し入る。

【釋　名】水錦花（炮炙論）　時珍曰く、その花が繁密で、蒙茸として簇錦のやうだから名けたのである。

【集　解】頌曰く、密蒙花は蜀中の州郡にいづれもある。樹は高さ一丈餘、葉は

冬青葉に似て厚く、背が白くして細毛がある。又、橘葉に似てゐる。花は微紫色である。二月、三月に花を採り、暴乾して用ゐる。

宗奭曰く、利州に甚だ多い。葉は冬凋まぬ。一向に冬青には似てゐない。柔かであつて光潔でなく、深緑でない。その花は細碎で、數十房が

〔花 蒙 密〕

一朶をなし、冬生じて春開く。

花　【修治】　斅曰く、凡そ使ふには、揀淨して酒に一夜浸して漉し出し、乾くを候つて蜜を拌ぜて潤はしめ、午前六時から午後六時まで蒸し、日光で乾して再び拌ぜて蒸し、かく三回繰返して日光で乾して用ゐる。毎一兩に酒八兩、蜜半兩を用ゐる。

【氣味】【甘し、平、微寒にして毒なし】　【主治】【青盲、膚翳、赤腫、眵涙

多きもの。目中の赤脈を消す。小兒の麩豆、及び疳氣の眼を攻むるもの】(開寶)【羞明して日を怕れるもの】(劉守眞)【肝の經の氣、血の分に入つて肝の燥を潤ほす】(好古)

【附方】新一。【目中の障瞖】密蒙花、黄蘗根各一兩を末にし、水で梧子大の丸にし、毎就寢時に湯で十丸、乃至十五丸、を服す。(聖濟錄)

木綿（綱目）

和名　にせぱんや(牧野)又きわた、ぱんや(誤稱)
學名　Bombax malabaricum, DC.
科名　ぱんや科（木綿科）

【釋名】**古貝**(綱目)　**古終**　時珍曰く、木綿に二種あつて、木に似たるものを古貝と名け、草に似たるものを古終と名ける。或は吉貝とも書くが、それは古貝の訛である。梵書にはこれを睒婆といひ、又、迦羅婆劫といつてある。

【集解】時珍曰く、木綿には草、木の二種ある。交、廣の木綿は樹が大きくして抱へるほどあり、その枝は桐に似て、その葉の大いさは胡桃葉ほどである。秋に入つて花を開き、紅くして山茶花のやうで黄蘂があり、花片は極めて厚く、房をなして甚だ繁く、短側が相比んでゐる。結實は大いさ拳ほどで、實の中に白綿があり、

綿の中に子がある。今一般にこれを斑枝花といひ、訛つて攀枝花(はんしくわ)といふ。李延壽の南史に所謂『林邑の諸國に古貝を產する。花の中は鵞毳(がせい)のやうだ。その緒を抽いて紡(つむ)いで布にする』とあるもの、張勃の吳錄に所謂『交州、永昌の木綿は樹の高さ屋に過ぎ、十餘年換(か)らぬものがあり、實の大いさは盃ほどで、花の中の綿は軟白で、縕(うん)

〔木綿〕

絮(じよ)及び毛布に作れる』とあるものはいづれも木に似た木綿を指したのである。江南、淮北で栽培する木綿は、四月に種を下し、莖は弱くして蔓のやう、高さは四五尺で、葉に三尖があつて楓葉のやう、秋に入つて花を開き、黃色で、葵花(きくわ)のやうで小さく、また紅紫のものもあり、結實は大いさ桃ほどで、中に白綿があり、綿の中に子があり、大いさ梧子ほどである。また紫綿のものもあり、八月に梂(きう)を採り、これ

を綿花といふ。李延壽の南史に所謂『高昌國に繭のやうな草實があり、中の絲で作つた細纑を名けて白疊といふ。取つて帛にすれば甚だ軟白だ』とあるもの、沈懷遠の南越志に所謂『桂州に古終藤といふを産する。結實は鵝毳のやう、核は珠珣のやうだ。修治を加へてその核を出し、紡いで絲綿のやうにし、染めて斑布とする』とあるものは、いづれも草に似た木綿を指したのである。この種は南番に産したものだ、宋の末期に始めて江南へ移入したので、今では江北と中州とに普及された。蠶せずして綿あり、麻せずして布あり。利天下に被する有樣だ。その益たるや偉大なるものである。又、南越志に『南詔の諸蠻では蠶を養はず、ただ娑羅木の子中の白絮を取收め、紡いで絲にし、織つて幅にし、名けて娑羅籠段といふ』とあり、祝穆の方輿志に『平緬に娑羅樹を産し、大なるは高さ三五丈あり、結子に綿があり、その綿を紉ぎ、織つて白氈、兜羅綿を作る』とある。これもやはり斑枝花の類のもので、その方土に因つてそれぞれ稱呼が異ふだけである。

白綿 及び **布** 【氣味】【甘し、溫にして毒なし】【主治】【血崩、金瘡。灰に燒いて用ゐる】（時珍）

子油　二箇の餅を合せて焼いて瀝取する。〔氣味〕〔辛し、熱にして微毒あり〕〔主治〕〔悪瘡、疥癬。燈に燃せば目を損ずる〕(時珍)

柞木 (宋嘉祐)

和名　くすどいげ
學名　Myroxylon japonica, Makino.
科名　いひぎり科(椅科)

〔釋名〕**鑿子木**　時珍曰く、この木は堅靭なもので、鑿の柄に作れる。故に俗に鑿子木と名ける。方書にいづれも柞木と書いてあるが、蓋しこの意味に理解がなかつたのだ。柞といふは橡、櫟の名であつて、この木のことではない。

〔柞木〕

〔集解〕藏器曰く、柞木は南方に生ずる　葉の細

いもので、今の梳に作つてゐるものがそれである。

時珍曰く、この木は處處の山中にある。高さは一丈餘、葉は小さくして細齒があり、光滑にして靭い。その木、及び葉丫にはいづれも針刺があり、冬を經て凋まぬ。五月に碎白花を開き、子は結ばない。その木は心、理がみな白色である。

木皮　氣味　【苦し、平にして毒なし】　時珍曰く、酸く澀し　主治　【黃疸病には、燒いて末にし、水で方寸匕を服す。一日三回】（藏器）【鼠瘻を治し、難產に生を催し、竅を利す】（時珍）

附方　新二。【鼠瘻】　柞木皮五升、水一斗を汁二升に煮て服す。宿肉のあるが出て癒えるものである。これは張子仁の方である（外臺秘要）【婦人難產】　催生柞木飲―横生と倒產と胎の腹中で死にたるものとに拘らず、この方を用ゐて屢〻奏效した。これは上蔡の張不愚の方である。大柞木枝一尺を洗淨し、大甘草五寸をいづれも一寸に折り、新汲水三升半と共に新沙缾內に入れ、帋で三重に緊封し、文武火で一升半までに煎じ、腰、腹が重痛して（一）草に坐せんと欲する時を待ち、一小盞を溫めて飲む。それが下るを覺えて快豁になる。もし渴するときはまた一盞を飲む。三

（一）草ニ坐スハ臨產ニ蓐ニ就クノ意ナリ。

四盞まで飲めば下重して分娩し、更に諸種の苦痛がない。切に草に坐することが甚だ早過ぎ、また坐する時に産婆が矢鱈な事をしてはならぬ。(咎殷産寶)

葉 〔主治〕【腫毒、癰疽】(時珍)

〔附方〕新一。【柞木飲】諸般の癰腫、發背を治す。乾柞木葉 乾檢各四兩を細剉し、半兩づつを水二盌で一盌に煎じ、朝、晩各一服する。已に成つたものはその膿血が自ら次第に乾涸する。未だ成らぬものはその毒が自ら散ずる。一切の飲食毒物を忌む。(許學士本事普救方)

黄楊木 (綱目)

和名 つげ
學名 Buxus japonica, Muell. Arg.
科名 つげ科 (黄楊科)

〔集解〕時珍曰く、黄楊は諸處の山野中に生じ、人家で多く揷して栽ゑる。枝、葉は攢簇して上に聳え、葉は初生の槐葉に似て青く厚く、花なく、實もなく、四時凋まず、その性は長じ難い。俗説に、一歳に一寸伸び、閏に遇ふと反對に退くといふが、今實際を見るに、但だ閏年には長じないだけである。その木は堅膩なもので、

梳に作り、印材にして最も良し。

按ずるに、段成式の酉陽雜爼に『世に黄楊を重ずるは、その火なきを以てであつて、水で試みて沈まぬものならば火がないのである。凡そこの木を取るには、必ず空に一の星もない眞の闇夜に

〔黄楊木〕

伐れば裂けないものだ』とある。

葉　［氣味］【苦し、平にして毒なし】［主治］【婦人難産に、達生散中に入れて用ゐる。又、暑期に生じた癤(せつ)に主效がある。搗爛らして塗る】（時珍）

不凋木（拾遺）

和名　てんのうめ
學名　Osteomeles anthyllidifolia, Lindl.
科名　いばら科（薔薇科）

［集解］藏器曰く、太白山の巖谷に生ずる。樹は高さ二三尺、葉は槐(くわい)に似て、

莖は赤くして毛があり、棠梨のやうだ。四時凋まぬ。

【氣 味】【苦し、温にして毒なし】【主 治】【中を調へ、衰を補し、腰脚を治し、風氣を去り、老を却け、白を變ずる】（藏器）

賣子木（唐本草）

和名 さんだんくは
學名 Ixora chinensis, Lam.
科名 あかね科（茜草科）

【釋 名】**買子木**

【集 解】恭曰く、賣子木は嶺南、卭州の山谷中に産する。その葉は柿に似たものだ。

頌曰く、今はただ川西、渠州から歳貢するだけで、買子木と書く。木は高さ五七尺、徑一寸ばかり、春嫩枝條を生じ、葉は尖つて長さ一二寸、倶に青綠色で、枝梢が淡紫色である。四五月に碎花を開き、百數十枝が圍み攢つて大朶を作し、色は焦紅である。花に隨つて子を生じ、子は椒目ほどで花瓣の中に在り、黑くして光潔である。毎株に花はわづか三五箇の大朶を著けるだけだ。その枝、葉を採つて用

ゐる。

時珍曰く、宋史に『渠州。買子木、幷に子を貢す』とあるを見ると、子もやはり枝葉と同功だらうと思はれるが、本草に記載がなく、考究すべき據がない。

〔買子木〕

——(渠州)買子木——

木

修治　斅曰く、凡そ採取したならば、粗ぼ搗き、毎一兩に酥五錢を用ゐ、共に炒り乾して藥に入れる。

氣味　【甘く微し鹹し、平にして毒なし】

主治　【折傷で血の内溜するもの。絶を續ぎ、骨髓を補し、痛を止め、胎を生ずる】(唐本)

木天蓼（唐本草）

和名　またたび
學名　Actinidia polygama, Miq.
科名　さるなし科（獼猴桃科）

【校正】拾遺の小天蓼を併せ入る。

【釋名】時珍曰く、その樹は高いもので、味が辛くして蓼（れう）のやうだ。故にかく名ける。又、馬蓼も天蓼と名けるが、物は異ふ。

〔木天蓼〕
——申州——

【集解】恭曰く、木天蓼は所在いづれにもあり、山谷中に生ずる。現に安州、申州では、藤蔓をなし、葉は柘（しゃ）に似て花が白く、子は棗ほどで一定した形がなく、中の瓤は茄に似てゐる。子は味辛く。これを噉つて薑、蓼に當てる。

藏器曰く、木蓼は、當今用ゐてゐるものは山南、鳳州に產する。樹は高く、冬青のやうで凋まない。藤天蓼を以て註說するは當らない。木蓼といふからには藤生であらう筈はない。これ以外に自ら藤蓼といふものがあるので、藤蓼は江南、淮南の山中に

生じ、藤が樹に著いて生え、葉は梨のやうで光つて薄く、子は棗のやうなものだ。卽ち蘇恭が木天蓼としたそのものである。又、小天蓼といふがあつて、天目山、四明山に生じ、樹は巵子のやうで冬期にも凋まない。野獸がこれを食ふ。かく三種の天蓼があつて、いづれも能く風を逐ふものだが、小さきものが勝れてゐる。

頌曰く、木天蓼は、今は信陽に產する。木は高さ二三丈。三月、四月に柘の花に似た花を開く。五月に子を採る。子は毬をなし、形は緌麻子に似てゐる。藏ふて果として食へるものだ。蘇恭の所說のものは藤天蓼といふものである。

時珍曰く、天蓼には三種あるけれども、功用は彷彿たるものだ。蓋し一類のものである。その子は燭になり、その芽は食へる。故に陸機は『木蓼を燭と爲せば、明なること胡麻の如し』といつた。薛田の蜀を詠ずる詩に『地丁は葉嫩にして嵐に和して采り、天蓼は芽新にして粉を入れて煎ず』なる句がある。

枝葉　【氣味】【辛し、溫にして小毒あり】【主治】【癥結、積聚、風勞、虛冷。細に切つて酒に釀して飮む】（唐本）

【附方】　舊一、新二。【天蓼酒】風を治し、立ろに奇效がある。木天蓼一斤を皮を

去つて細剉し、生絹に盛り、好酒三斗に入れて浸し、春、夏は一七日、秋、冬は二七日浸し、毎空心に晝と晩と各一盞を溫めて飲む。常服する場合にはただ一回飲む。老、幼と時に臨んで加減する（聖惠方）【氣痢の止まぬもの】寒食一百五日に木蓼を採つて暴乾し、用ゐる時に末にし、粥飲で一錢を服す。（聖惠方）【大風白癩】天蓼を粗皮を刮り去り、剉んで四兩を水一斗で汁一升に煎じ、糯米を煮て粥にし、空心に食ふ。病の上に在るは吐出し、中に在るは汗で出し、下に在るは泄出する。風を避ける。〇又ある方では、天蓼三斤、天麻一斤半を生で剉み、水三斗五升で一斗に煎じて滓を去り、石器で慢に煎じて餳のやうにし、毎服半匙を荊芥薄荷酒で服す。晝二回、夜一回。一个月にして效が現れる。（聖惠方）

小天蓼 【氣味】【甘く、溫にして毒なし】【主治】【一切の風虛、羸冷、手足の疼痺には、老幼、輕重を論ぜず、酒に浸し、及び汁に煮て服す。十日ばかりにして皮膚の間に風が出て蟲が行くやうなるを覺える】（藏器）

【發明】藏器曰く、木天蓼は深山中に產するもので、世人は、久服すれば壽を損ずるといふ。それは風を逐ひ氣を損ずるからである。藤天蓼、小天蓼と三者倶に

能く風を逐ふが、その中に優劣があつて、小なるものが勝れてゐる。

子 【氣味】【苦く辛し、微熱にして毒なし】【主治】【賊風、口面喎斜、冷痃癖、氣塊、婦人の虚勞】（甄權）

根 【主治】【風蟲牙痛には、搗て丸にして塞ぎ、連りに四五回易へれば根を除く。汁を嚥んではならぬ】（時珍）　記載は普濟にある。

放杖木（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【釋名】

【集解】藏器曰く、溫、括、睦、婺の諸州の山中に生ずる。樹は木天蓼のやうだ。老人がこれを服すれば一个月にして杖を放すやうになるといふところからそれを名としたものだ。

〔放杖木〕

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】

【主治】【一切の風、血。腰脚を理し、

身を輕くし、白を變じ、老いず。酒に浸して服す】（藏器）

接骨木（唐本草）

和名　にはとこ
學名　Sambucus racemosa, L.
科名　すひかづら科（忍冬科）

釋名　續骨木（綱目）　木蒴藋　頌曰く、接骨とは功を以て名けたものである。花、葉が都て蒴藋、陸英、水芹などに類するところから、一名木蒴藋といふ。

（接骨木）

集解　恭曰く、所在いづれにもある。葉は陸英のやうで、花もやはり相似てゐるが、但だ樹になる。高さ一二丈ばかり、木の體は輕虛で心がなく、枝を斫つて扦せば生える。人家でも種ゑてある。

氣味　【甘く苦し、平にして毒なし】藏器曰く、搗汁は亦た人を吐かす。小毒あり。

主治　【折傷。筋骨を續ぎ、風痺、

齲齒を除く。浴湯にするがよし】(唐本)【根皮は痰飮に主效があり、水腫、及び痰瘧を下す。煮汁を服す。利下し、及び吐出するものである。多く服してはならぬ。(藏器)【打傷瘀血、及び產婦の惡血、一切の血の行らぬもの、或は止まぬもの、いづれも煮汁を服す】(時珍)記載は千金にある。

附方　舊一、新一。【筋骨の折傷】接骨木半兩、乳香半錢、芍藥、當歸、芎藭、自然銅各一兩を末にし、化した黃蠟四兩にその藥末を投じて攪き勻ぜ、衆くの人の手で芡子大の丸にし、ただ傷損だけのものならば酒に一丸を化して服し、筋骨を碎折したものならば、先づこれを傅貼してから服す(衞生易簡)【產後の血運】五心煩熱し、氣力絕せんとするもの、及び寒熱禁ぜぬものには、接骨木を算子のやうに破つて一握を、水一升で半升に煎じ取つて分服する。或は小便頻數で惡血の止まぬものは、これを服すれば瘥える。この木は三回まで煮てもその力が同一である。乃ち起死の妙方である。(產書)

葉　**主治**　【痰瘧。大人は七葉、小兒は三葉を生で搗き、汁を服して吐を取る】(藏器)

靈壽木（拾遺）

和名 未詳
學名 未詳
科名 未詳

【釋名】扶老杖（孟康）椐

【集解】藏器曰く、劍南の山谷に生ずる。圓く長くして皮が紫である。漢書に、孔光が年老いたとき靈壽杖を賜はつたとあり、顏師古の註に「木は竹に似て節があり、長さ八九尺に過ぎず、圍三四寸。自然に杖の體裁に合致して、削つて杖に作る必要がない。人をして天年を延べ、壽命を益さしめる』とある

時珍曰く、陸氏の詩疏に『椐、卽ち樻である。節中が腫して扶老に似たものだ卽ち今の靈壽である。一般にこれを杖、及び馬鞭とする。弘農郡の北山にある」とある

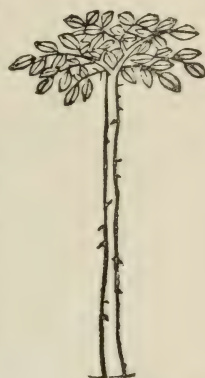
根皮【氣味】【苦し、平なり】【主治】【水を止める】（藏器）

楤木（拾遺）

音は怱（サウ）である。

和名 たらのき
學名 Aralia chinensis, L.
科名 うこぎ科（五加科）

【集解】藏器曰く、江南の山谷に生ずる。高さ一丈餘、直上に伸びて枝がなく莖上に刺がある。山人は頭を折り取つて茹にして食ひ、吻頭といふ。

時珍曰く、今も山中にやはりある。樹の頂に葉が生える。山人はこれを採つて食ひ、鵲不踏といふ。この物が刺が多くして枝が無いからである。

〔楤木〕

白皮【氣味】【辛し、平にして小毒あり】【主治】【水癊には、汁に煮て一盞を服す。水を下すものである。もし病が已に困するときは、根を取つて搗き砕き、それに坐して氣水の自ら下るを取る。又、能く人の牙齒を爛らす。蟲あるものには、一片ばかりを取つて孔中に納れる。自ら爛れ落ちるものである】（藏器）

木麻（拾遺）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】藏器曰く、江南の山谷、林澤に生ずる。葉は胡麻に似て相對する。山人は取つて酒に釀して飲む。

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】

【主治】【老血、婦人の月閉、風氣、羸瘦、癥瘕。久しく服すれば人をして子を有たしめる】(藏器)

大空（唐本草）

和名 うりのき
學名 Marlea platanifolia, Sieb. et Zucc.
科名 うりのき科

【集解】恭曰く、大空は襄州に生じ、所在の山谷にもある。秦隴地方では獨空と名ける。小樹を作して條を抽き、高さ六七尺、葉は楮に似て小さく、圓くして厚い。根皮は赤色である。

時珍曰く、樹は小さく、葉は大きく、桐葉に似て尖らず、深綠で皺文がある。根皮は虛軟である。山人は採つて蝨を

〔大　空〕
——俗に苦瓢と名ける——

殺すが極めて妙である。葉を搗き、野菜畑の中へ篩ひ込んで蟲を殺す。

根皮　［氣味］【苦し、平にして小毒あり】［主治］【三蟲を殺す。末にし、油に和して髮に塗れば蟣蝨がみな死ぬ】(藏器)

木草綱目木部第三十六卷　終

【附　記】

本書第九冊第十四回配本をいたします。

本篇に修め得たる部は本草綱目第三十五卷――第三十六卷、果部・木部であります。

第三十七卷第三十八卷の服器部は譯者病氣の爲め此の部飜譯完成が遲れ、爲に締切日を前に加筆、校正の暇がありませんでしたので殘念ながらこの二卷は次回第十五回配本索引の部に讓り完了する事にいたしましたる故今回不備の點惡しからず御了解下さる樣御願ひいたします。尙本書牧野博士・木村藥學士の考定で足らざる處は第八冊頭註不備の點と共に後日印刷に付し、配布する事にいたしましたる故併せて御了解の程願ひ上げます。

ともかくも本篇を以て頭註國譯本草綱目全十五冊の中索引を殘して十四冊刊行完結いたしましたる事は慶賀に堪へぬところであります。

昭和八年七月十五日印刷
昭和八年七月十八日發行

頭註國譯本草綱目（第九冊）
非賣品

翻譯者　鈴木眞海
東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　氣賀林一
東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社印行・本郷